EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03042 2299

大正元年九月三日印刷
大正元年九月六日發行

上田秋成集

不許複製

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店
大賣捌所　東京市神田區表神保町一番地　三省堂書店
同　大阪市東區南本町四丁目　三宅莊藏書店

（岡山製本）

極らくの　一五七ノ一
今宵しも　一三一ノ一四
さを鹿は　三三七ノ二
さま／＼に　二〇三ノ三
同（思ふ）　二四八ノ一三
さりともと（待し）　一八〇ノ二
青苔匪衣岩猶寒　九〇ノ三
鳥の音も　二六四ノ六
夏の夜は　一三五ノ二
南無阿彌陀　二〇八ノ一
はづかしや　六四ノ八
花はみなみに　三四二ノ九
松の尾の　二六四ノ一
同　（涙に）　二一五ノ五
松山の（涙の）　二四ノ一一
まれ人に　四〇三ノ六
道しるべ　二一〇ノ一
身のうさは　二四一ノ一
百とせに　一三六ノ一〇
武士よ　三三九ノ一一
山吹の　三四八ノ六
世を捨てし　三五〇ノ一
よしや君　二二四ノ一
わすれても　二六五ノ一三
○若衆〔ワカイシ〕　八一ノ七
○若草山　七一ノ一
○若狹の國　一二六ノ一一
○若衆　六九ノ八
同　一〇一ノ一〇
○若代　一九二ノ一〇
○若鳥　一五一ノ二
○ワキ　四四ノ九
○脇ひら見ず　一一〇ノ一
○わけたち　一五四ノ一三
○譯どり　一五五ノ一〇
○わごれ　一六一ノ一一
○わざくれ　一三〇ノ八
○海若〔ワタツミ〕　二五六ノ一四
○渡邊の綱　四一ノ一一
○渡邊橋　一七五ノ一一
○和田の笠松　一〇二ノ八
○綿帽子　一五五ノ四
○わたり繻子のくけ帯　二〇一ノ一一
○わたり奉公　七三ノ一
○割符〔ワップ〕　一一五ノ一三
○わんざん　一九三ノ一三
○わりくどき　九〇ノ一四
○割日說　一五三ノ一三
○わりなくも　九〇ノ六
○わるざれ息子　八一ノ三
○わる性根　一一五ノ五
○わろ　一四ノ七
同　三四ノ四
同　一六〇ノ四
同　一六一ノ四

上田秋成集索引終

○悋氣　一三七ノ六
○吝嗇—蠟燭の費　九四ノ八
○龍神燈明　一二八ノ四
○龍女　一三八ノ一三
○龍燈の松　一三八ノ四
○凌雲臺の額　一七ノ一一
○兩替屋　一一ノ四
○了簡　二一ノ一三
同　五五ノ一
○兩口錢　一四二ノ四
○兩國橋　四八ノ三
同　五三ノ六
○龍泰寺　三一一ノ三
○兩部　一〇ノ二
○涼風堂　一四三ノ二
○慮外　二四ノ一一
○呂望齊　三三ノ六

レ

○戀愛
一念のよろ所　一七二ノ一三
狼に救はれし女　五四一ノ一
○連城の壁　二一ノ八

ロ

○朗詠　一二一ノ二
○狼藉者　七ノ一〇
○樓門に琴を挽らしての請答　一ノ五
○露金　五三二ノ九
○六右衞門　一三三ノ二
○六齋　一三ノ八
○六條の御息所　一九ノ二
○六條參　三六ノ三
○六如上人　六二ノ九
○轆轤　一七ノ三

ワ

○和歌
歌の字義　八六ノ五
歌は柯なり　三五二ノ一三
撰集の失敗　三九九ノ一
和歌式　三五三ノ一三
○和歌、詩、俳句（藤簍冊子中の詩歌を省畧す）
あかなくに　一九六ノ一三
石の上に　三四九ノ一三
いで人は　一六五ノ一
いにしへの　二五一ノ一三
妹に似る　三四〇ノ五
枝たかき　八七ノ一四
寒林獨座草堂曉　二六三ノ一三
川竹の　六五ノ一四
君が今日　三四〇ノ三
與レ君相向相轉親　九〇ノ八
堯蓂日杲　三三二ノ二
屎ふむや　七六ノ一一
鯢とる　一七二ノ一一
蜘の圍に　一五〇ノ七
くるしくも　二八七ノ二
けさの朝け　三五六ノ一
芥子たき明す　二七〇ノ八
戀せじと　一一九ノ一
江月照ニ松風一吹　三一九ノ一〇
こゝにしも　一四一ノ一

その生涯　四〇六ノ一〇
○夕の字義　八六ノ六
○遊冶郎　三九二ノ一四
○雪
その光景　六五〇ノ一一
春の雪　六〇九ノ四
○弓削の道鏡　三三六ノ九
○湯島の天神　一七二ノ八
○湯津の爪櫛　一〇ノ七
○湯の談合　四二ノ一一
○弓張提燈　六四ノ四
○夢―六のけぢめ　三三六ノ六
○由良の舟乘　一三一ノ一

ヨ

○楊貴妃の天冠　二一ノ六
○養拙流　五四ノ一三
○養老の紀　三三七ノ七
○與勘平　一〇一ノ四
○横煙管　三〇ノ一三
○横倒　六二ノ一三
○横道遊　一四ノ一一
○横物　一七ノ八
○四座　四一ノ一二
○夜ざえ　一三六ノ七
○與左衞門　四二ノ五
○よし助　九〇ノ四
○義朝　三二一ノ一三
○吉野　七一ノ七
○吉野折敷　八六ノ一四
○吉野榧の菓子　一六ノ一〇
○吉野舊蹟　五六九ノ三
○吉野山　一三六ノ五
○夜芝居　七二ノ二
○艮峰の宗貞　三四六ノ一三
○豫讓　七ノ一三
○葭原　四一ノ一
同　一五〇ノ一一
○よすが　二ノ一一
○妓衆　六五ノ一三
○妓女衆　八五ノ四
○妓突　六五ノ一
○夜咄　一七ノ六
○夜半切　九四ノ一
○嫁入の輿　一五〇ノ九
○嫁御寮　一五六ノ一〇
○よめた　七三ノ三
○よめれば　二一一ノ五
○弱みを喰ふ　一四四ノ七

ラ

○喇叭　五八ノ四
○蘭亭の盃流　八五ノ一三
○羅綾の袖　七二ノ七

リ

○力士立　二六ノ一
○力味　四〇ノ九
○利元大師　五七六ノ八
○里江　五二ノ二
○利口せられ　七三ノ九
○鯉長　八二ノ二
○利に入つた咄　九四ノ一四

○櫓幕　八〇ノ一
○野狐　一八九ノ二
○八島の謠　四五ノ一
○夜叉　三一三ノ一三
○夜食　九四ノ九
○夜食膳　五〇ノ四
○夜食腹　二五ノ八
○家賃　一〇ノ六
○奴仕立　一六〇ノ九
○やつれて　一三七ノ一〇
○宿の妻　一四五ノ一三
同　一四六ノ九
○宿遣入　一一〇ノ二
○宿引　五五ノ一三
同　五八ノ一
○柳屋權兵衛　五三ノ二
○柳原　四二ノ一〇
○矢の根曾我　三九ノ九
○矢野養父　六三八ノ一四
○矢矧の橋　八三ノ六
○矢橋の船頭　五五ノ三
○野暮　一四四ノ九
○山揚　二七ノ一
○病船　三四ノ九
○山岡頭巾　九七ノ五
○山轉　二七ノ一
○山科　八三ノ一
同　一三五ノ三
○八岐の大蛇　一三ノ七
○山路のお菊　一四三ノ八
○日本武の尊　一五〇ノ一〇
○大和の國　七一ノ四
○大和の御所　三一ノ九
○やまと姫　五五〇ノ六
○大和山　七七ノ一〇
○山の神　一三七ノ九
○山吹の薄出端　七五ノ三
○山伏　三一ノ一一
同　三八ノ六
○山伏の布施　三二ノ一一
○山繭紬の服大　三三ノ七
○山本勘介　三二ノ九
○山本勘六　二ノ七
○山もどり　六四ノ一
○病みつき　三四ノ九
○寡茶屋　四一ノ二
○遣手　九〇ノ二
同　二〇四ノ七
○やろせのなき　八一ノ七
○野郎　八一ノ三

ユ

○唯心尼　六〇ノ二
○唯一の貧乏　一〇ノ四
○維摩　三五ノ八
○雄黄　三〇五ノ八
○幽王の后　九三ノ一
○遊戯―ついまつむべ山の遊　一四三ノ一三
○白兩「ユフダチ」　四八ノ六
○遊女遊里
五年百兩の定　二〇七ノ八
三年切つて五十兩　八五ノ八

○目見え　一四三ノ二
同　二〇六ノ四
○眠藏　三〇九ノ一〇
同　三一五ノ九
同　三一八ノ五
○綿服　一一六ノ一
○めんような　一三五ノ七
○目やす　一八一ノ七
○女郎　七五ノ七

モ

○孟子　二九ノ一一
○毛氈　三九四ノ四
○木香丸　一二四ノ一〇
○目錄　一五四ノ八
○もじ　七五ノ四
○文字替の錢　一四五ノ六
○勿體ない　三七ノ五
○勿體なの姿　二〇二ノ一一
○本錢　一三六ノ一
同　一五ノ六
○求塚　二七ノ一四
○元結　一三四ノ一
○文言〔モノイヒ〕　七一ノ一
○物腰　一一ノ一三
同　四九ノ三
同　一一ノ二
○物生　一二七ノ四
○物眞似　五ノ一一
同　六ノ一
○物見多藝　三九ノ四
○ものもう　八六ノ三
○ものまうの聲　一三〇ノ二
○もみ立　一八〇ノ一
○もみで　三一ノ一三
○紅絹の小猿　一五一ノ八
○紅紐の八兵衞　一七七ノ一四
○文作　一六ノ二
○文珠樣　一三八ノ七
○文珠四郎　二〇四ノ四
○紋所　二〇ノ八
○文盲　一七ノ一四
同　八六ノ五
同　八七ノ一〇
○木綿布子　一四二ノ一
○木綿羽織　一四五ノ五
○桃山の流　九一ノ八
○唐土大夫　八五ノ五

ヤ

○館　五三一ノ一〇
○野干　一九三ノ五
○柳生流　五一ノ一三
同　五二ノ八
○燒栗　三八ノ八
○燒餠屋傳介　一五一ノ一四
○厄神女房　一五一ノ一三
○役者―その給金　八〇ノ二
○やくたいもなき　三六ノ一三
○藥入　六九ノ一
○藥能　六一ノ一
○役場仕舞　八〇ノ一四
○櫓下　一七四ノ五

○都女郎　四八ノ九
○宮芝居　一四一ノ七
○宮津　一三六ノ八
○宮津の町　一二七ノ二
○三山詣　二八六ノ九
○冥加　一八六ノ七
○冥加錢　三六ノ三
○冥加ない　三七ノ二
○茗荷の子　八五ノ二
○三善の清行　三五四ノ三
○三輪の崎　二八五ノ一

ム

○夢應の鯉魚　二五二ノ六
○むかひ提燈　一五一ノ三
○無間の鐘介　一二一ノ八
○武庫川　二七ノ三
○むさい　七二ノ一四
○むさき　七六ノ七
○むさし坊　二六ノ一
同　四七ノ六
○むさと　三ノ一三
○蟲おさへの丸薬　三八ノ二
○無心　一四ノ三
同　五〇ノ二
○武者草鞋　二ノ四
○無宿善　三七ノ八
○むすび昆布　一四一ノ八
○夢然　二六一ノ四
○夢想國師　一七ノ五
○無手　五三ノ二
○胸高帶　一三ノ一〇
○むべ山の遊　一四二ノ一三
○疋〔ムラ〕（助數詞）　三〇三ノ一
○村雲　三七四ノ六
○紫式部――一法師の評論　五三五ノ二
○室　四一ノ一
○室町殿　二三ノ八

メ

○迷信　一八六ノ五
○目かい　一三三ノ一三
○目かけ　一二七ノ八
○めかして　三九四ノ七
○目利　一六ノ三
同　一七ノ六
同　二一ノ二
同　三一ノ一
同　二三ノ二
○目利所　二三ノ八
○目利者　一六ノ四
○めくら付　一〇四ノ一三
○目こぼし　一三六ノ一
○目違先生　二三ノ一〇
○めつさうな　一二三ノ一三
○めつた踊　四三ノ二
○めつたに　一三ノ六
同　二〇ノ八
同　三三ノ一三
同　九七ノ六
○目づらもおかぬ　七二ノ一
○目貫　二〇ノ七
○めのこ算　一九七ノ九

○まろや　二八九ノ三
○まはしの伊助　四一〇ノ一

ミ

○三井寺　四七ノ四
○三浦介兵衛　九五ノ一〇
○眞尾坂の林　二一三ノ五
○御釜祓　二七三ノ七
○蜜柑籠　一三〇ノ三
○御鬮　一〇五ノ一〇
同　一四三ノ一三
○眉間尺の首　四〇ノ八
○御崎　一八〇ノ一〇
○化粧部屋　八七ノ九
○三島海苔　二〇四ノ六
○みしんの水牢　四〇三ノ二
○身過　三ノ三
同　二六ノ四
同　六〇ノ二
同　一〇八ノ八
同　一二六ノ二
同　一六八ノ七
○三筋　二〇六ノ一〇
○みす〳〵なる　一六一ノ六
○みすや針　五四ノ一〇
○見せつけ　五二ノ九
○味噌鹽のたし　一二ノ一四
○みそこし婆　一三七ノ四
○御嶽さうじ　五六九ノ三
○御手洗　四一ノ一
○水揚げ　一三一ノ六
○水遊　四一ノ一三
○三井　六一ノ一三
同　一四八ノ二
○三井の掘ぬき井戸　五一ノ六
○水驛　三七三ノ一
○水櫛　八五ノ一三
同　二〇二ノ四
○水仕男　一二三ノ三
○水の變のふり出し　三八ノ三
○蘋蘩行潦〔ミツムケ〕　二五〇ノ九
○道行文
伊勢や尾張　一七七ノ一〇
あふ坂の關守　二一三ノ一
神崎川中　二七ノ一三
長等の山おろし　二五七ノ五
○見通の八卦　一〇四ノ四
○南側　八〇ノ二
○美濃絹　三〇三ノ一
○御廟野　一二五ノ二
○身櫛　二六ノ一〇
○壬生のしやでん　四一三ノ七
○耳塚　一六ノ七
○木兎なつた脊中　四二ノ一四
○耳ふりな　九五ノ四
○三園の明神　四八ノ六
○宮川町　六四ノ七
同　六八ノ四
同　八〇ノ九
同　一五九ノ一一
○宮川町のあがり口　八四ノ六
○宮河保恭　六三九ノ三
○宮古路　一三一ノ一三

舞子 六四ノ二
○まへかた 三八九ノ二
○まへかどに 二〇ノ八
○前髪相撲 二七ノ九
○前巾著 二〇四ノ八
○前句付 一〇四ノ一一
○前垂 一四九ノ一
○密夫 一三三ノ一二
○任米 二一九ノ六
○まかなひ 一五五ノ八
○眞切りて 一三一ノ二
○眞葛の原 八〇ノ一
○眞葛半平 一三〇ノ一四
○幕のうち 八二ノ七
○枕繪 一六五ノ三
○枕金 一〇九ノ一三
同 一五六ノ二
○まくり 一七ノ一三
○まくり出して 一〇九ノ一〇
○眞桑瓜 八〇ノ七
○まげて 五五ノ一〇
○まげられた 二〇ノ九
○まさかのとき 一ノ二
○まさかは 一三七ノ一三
○雅仁 二一八ノ六
○正夢 一三九ノ一四
○交くら 一四ノ一二
同 五三ノ八
○魔神 一〇六ノ一二
同 一〇七ノ五
○麻叔謀 三一四ノ八
○升落 一三九ノ一一
○升かけなきり 一三〇ノ六
○まそつと 一一一ノ一
○町搆間 九三ノ三
○待女郎 一五四ノ五
○町所 四一ノ一〇
○末 七七ノ八
○松風 四四ノ四
○眞黒の天狗共 八〇ノ一〇
○末社 一四八ノ一
○松山いさ 六九九ノ九
○まで 二〇〇ノ八
○間鍋 二六ノ七
○摩尼の御山 二六一ノ八
○眞野の手兒奈 二五一ノ一
○麻痺 六〇ノ一四
○麻木 六〇ノ一四
○まゝの皮 五〇ノ八
○萬作 二六五ノ五
○萬年草 一三一ノ一二
○萬寶全書 一七ノ六
○まめ男 六三ノ一〇
○豆巾著 一五一ノ八
○まめしげのない 一四一ノ九
○摩耶颪 三七ノ一四
○まや薬 六一ノ九
同 二〇八ノ三
○摩耶参 一〇三ノ七
○眉おろさせ 一九四ノ三
○丸の内に抱柊 一四五ノ六
○丸山の揚屋 三七〇ノ九
○鞠子 二一一ノ一一

○法海和尚　三〇九ノ七
○奉加米　一三一ノ七
○幇間　四〇九ノ六
○伯耆猫　七一ノ一
○棒薬　六九ノ七
○反古染　一一〇ノ三
○頬桁盗人　四三ノ九
○保元の御謀叛　二一五ノ一四
○奉公　三五ノ一一
○放参　一七ノ四
○豐心丹　四三ノ五
○方寸器物　一六ノ三
○法施　二六二ノ七
○棒鱈　八二ノ三
○ほうと　七七ノ一
○法然上人の尿瓶　二一ノ六
○傍輩　六ノ一三
同　二七ノ一一
同　五五ノ一四
同　六八ノ六
同　九〇ノ一一
○ほうばる　八〇ノ三
○蓬莱山のすくみ亀　四三ノ一
○行器〔ホカヰ〕　一五三ノ一四
○ほぎやあ〳〵　一三〇ノ二
○干鰯屋　一四四ノ一〇
○細川幽齋　一三六ノ五
○螢狩　六一ノ四
○ぼつかり　一五二ノ一〇
○北京　一三二ノ一四
○法華者　二六四ノ二
○拂子　一七ノ二
○法體　一六ノ一三
同　四四ノ一〇
○ほつて　七三ノ一〇
○ほつと　一四ノ一〇
○薄雪〔ボツトリ〕　一五一ノ六
○ぼつとり者　七四ノ九
○布袋の土人形　八五ノ二
○ほどけし　一三八ノ六
○佛付合　三七ノ二
○飜案文
韓退之送㆔李愿歸㆓盤谷㆒序　六二ノ二
李太白春夜宴㆓桃李園㆒序　六〇ノ二
○ぼんじやり　七七ノ二
○譽田の天皇　二九ノ一
○本調子　六四ノ八
○本詰　一六五ノ四
○本道　一七八ノ二
○凡夫心　三五ノ六
○盆家　七六ノ一
○ほめき　四三ノ二
○洞　七二ノ六
○掘ぬき井戸　一五一ノ二
同　一七三ノ一〇
○掘りぬき世帯　二六ノ五
○堀江　一一ノ一〇
○惚薬　八五ノ一

マ

○舞子　三九ノ四
同　六三ノ七

十を百文 一一〇ノ一一
十串さして二文 二〇五ノ三
百を三文 一四一ノ八
○ぶつかけ 一七八ノ七
○ふづくつて 一一ノ一四
○不勤め 一五五ノ一一
○筆まめ 六二ノ二
○舟遊 五八三ノ八
○舟開帳 一三一ノ五
○船泊の妓女 二七四ノ一四
○船櫓 一〇八ノ五
○舟宿 一五一ノ四
同 一六六ノ一〇
○武邊 四ノ一四
○武篇 三二一ノ一〇
○踏みかぶり 一一ノ九
同 一七ノ五
○踏みだんだく 八〇ノ五
○文屋の秋津 三五七ノ三
○分一致 一五四ノ一
○文化 九〇ノ一一
○文庫 六九ノ一
○文身 四〇ノ六
○文宗 一三五ノ三
○文徵明 八五ノ一〇
○文室の廣之 二九三ノ三
○ぶらさがり 六ノ一三
○ぶらさがりたる 一七九ノ四
○ぶらぶら病 一〇ノ一二
○ふり出し 五四ノ七
○不慮な事 三八ノ一〇
○ふりわけ 三五ノ七
○古市川 三一ノ一三
○古太夫殿 一五ノ四
○古手店 一六三ノ一
○古手屋 四三ノ一〇
○風呂敷包 四八ノ四
○風呂屋 一三ノ三
同 八五ノ三

へ

○平家座頭 一一〇ノ四
○平治の亂 三二一ノ一三
○臍繰 三五ノ二
○へちまなく 一三〇ノ六
○へち物好 七七ノ七
○紅粉 一二四ノ一
○辨慶 四〇九ノ七
○遍參の僧 三一一ノ一〇
同 三一五ノ八
○辯目もの 二〇五ノ七
○部屋めぐり 一六五ノ一〇
同 一六八ノ三
同 一七三ノ九
○表札 四二ノ二
○べらりと 一三ノ三
○へり口 三五ノ二

ホ

○はいつけて 八三ノ七
○ぼいまくれ 七五ノ七
○法會 一三〇ノ一

○廣蓋　二〇一ノ二
○ひわ茶　一四一ノ一〇
○鶸茶子の胸高帯　一三ノ一〇
○檜破子　二九九ノ一三

フ

○笛　七七ノ五
○風雅集　二六八ノ一
○風俗
　旅裝束　八二ノ一三
　竹折髷胸高帯　二三ノ一〇
　能役者の服裝　四四ノ一
○風鈴　六一九ノ一一
○ふかうの嶺　五四九ノ九
○深川　四一ノ二
○吹越　二〇八ノ七
○不器量　三一ノ六
○福州　一三ノ一三
○服大　二ノ七
○福田　二六二ノ一〇
○服所　九三ノ四
○福牛　一三ノ一
○福牛の足下　一三ノ八
○深田　一〇六ノ七
○歩口錢　一七四ノ一
○不沙汰　一四九ノ六
○富士三里　八四ノ三
○武士道　一六六ノ一四
○富士の山　八三ノ一四
○富士八　一五三ノ二
○伏見　一四三ノ四
○富士見が原　八三ノ二
○伏見町　二一ノ三
○不心中者　一三三ノ一二
○不心底　一三四ノ四
○富士屋八左衞門　一五一ノ一〇
○不順　六〇ノ一四
○不祥帽子　一五八ノ五
○不世賀太　六三ノ一〇
○ふぞろか　一〇九ノ一
○二髷　一五七ノ四
○札の辻　六一ノ一〇
○札の辻の雲助　五五ノ二
○扶持　一四二ノ二
○藤色羽二重　一一〇ノ二
○緣がしら　二一ノ五
○藤川武左衞門　七七ノ一
○府中　二一一ノ一
○不定世界　三八ノ一
○物價相場
　一尺二十匁切　八〇ノ五
　一服二十四文　五五ノ二
　一俵十二匁　一六ノ一〇
　一兩十四五文の五種香　五九ノ五
　金百疋　一ノ二
　獻上鯛一枚が百兩　四三ノ一三
　五百文より六貫　一九一ノ一〇
　三枚で金七兩二歩三百文　八四ノ六
　七八十兩　一四八ノ九
　錢二貫文七貫文　三七八ノ一
　千枚畫いて一匁五分　二〇三ノ一二
　疊一枚が金子一兩　四八ノ一
　月に四匁　一〇ノ五

○火の雨 三〇ノ三
○日の岡 一二五ノ二
○日の岡峠 五五ノ三
○緋熨斗目に長上下 四四ノ一〇
○雲雀の燒鳥 五〇ノ九
○響の灘 二六ノ一
○美福門院 二八八ノ六
○睥睨ざかり 一〇二ノ五
○睥睨づかなんだ 三一ノ八
○貧富―貧福論 三三三ノ三
○貧乏人町の光景 四〇四ノ九
○貧乏柱 二六ノ四
○備安 一四三ノ七
○檳榔子染 一七八ノ一〇
○姫うろり 一五一ノ六
○檜物屋 一〇四ノ六
○百燈 一三ノ八
同 一五ノ六
○百銅 四三ノ一一
○百度參 七五ノ七
○百ル一 四七ノ九
○百萬遍 一三二ノ八
○比喩
惡田に苗を植うるごとし 三五ノ九
海士が玉出すやうに 三〇ノ五
加賀笠ほどな 一四七ノ二
鰹節編んだやうに 六三ノ三
九萬里に羽をのす大鵬ほど 六三ノ八
酢でさすやうに 八二ノ一四
雪隠へ錢落したやうな 三五ノ一〇
朝鮮人を三度見たよりは咄のない男 一六ノ二
髀ほども 九一ノ九
土俵ほどな涙 三六ノ九
生爪はがして山の峯嶺はりさうな勢 七五ノ八
河豚の蝶 二五ノ四
鳳凰の聲 七七ノ五
三井の堀ぬき井戸 五一ノ六
武藏野の如し 四八ノ二
武藏野の樣 四七ノ九
山伏の布施ほどな 三一ノ一
龍のなく音 七七ノ五
割子の松川菱になる程 二七ノ六
○兵庫騎馬の町 一〇五ノ一四
○表裏侍 七ノ六
○鵯越 三〇ノ一
○ひょんな 一一五ノ八
○日和 一三一ノ二
○日和が落ちた 四八ノ一
○牧方 六〇ノ九
○ひらじひ 一一五ノ八
○平戸梶右衛門 一九七ノ一〇
○ひらとも 一〇〇ノ九
○平野町 一四三ノ二
○平野屋七左衛門 九四ノ七
○ひら詫 八三ノ一四
○書比なる 一五〇ノ一
○書きがりし黑羽 四一ノ七
○簀舟 五九ノ九
○廣澤の月 一二〇ノ一〇
○弘延 五〇ノ七

○腹心の淋しい 四ノ四
○腹淋しい 五五ノ六
○腹はれ 三〇ノ七
○腹脹 二一ノ四
○はり代 三〇ノ八
○針手 二六ノ六
○磔柱 二五ノ四
○針屋耳介 五五ノ七
○春―其十態 六三ノ一〇
○春秋の爭 五五五ノ一
○春木德右衞門 二〇〇ノ四
○ばれる 一一四ノ一

ヒ

○火打 一一〇ノ三
○比叡の山風 四〇ノ三
○日傘 六三ノ一四
○東の石垣 六四ノ一
○東山の六本杉 一五八ノ三
○氷上の黑井 五五一ノ一〇
○引きあて 一二五ノ一
○引負 七五ノ一〇
○引きそもない 六ノ五
○引舟 九〇ノ一一
○比丘尼 四九ノ一
○髭油 七三ノ四
○髭牛房 二〇三ノ九
○ひけらかさる 三六ノ一〇
○ひけらかす 一四五ノ四
○彦六 二七五ノ九
○挫ぎ付け 三一ノ四
○美少年 三二ノ九
○黠〔ヒス〕からぬ 一三〇ノ一三
○額面に鑓あてぬ 四〇ノ一一
○常陸 二六五ノ二
○常陸帶 一五八ノ一三
○惡錢びらなか 二七ノ一四
○左勝手 八三ノ九
○ひだり衽 七五ノ一〇
○ひだりまへ 三九一ノ八
○ひだるい 二六ノ一
○犇と 三ノ一〇
○秀吉 三三一ノ八
○人挨拶 一三〇ノ二
同 一一三ノ五
○人がらをつくり 四四ノ一二
○一腰 四ノ六
同 一二四ノ四
○人群集 二七ノ三
○一節季 一四八ノ二
○一月切 一四六ノ一一
○一つ目 三五九ノ一二
○一節 三九ノ七
○一口 一六ノ一
○聽上〔ヒトマ〕 三三一ノ一二
○一本花 一八六ノ三
○一山越した 八一ノ一〇
○一夜流 一五一ノ五
○雛介 一四三ノ一
○雛祭 一四二ノ九
○雛館 一四二ノ一三
○皮肉に入り 一〇五ノ三
○ひねり口上 六〇ノ一三

○八文字　二〇五ノ三
○初午　一〇三ノ七
○八苦の地獄　七六ノ一三
○八卦　一〇四ノ四
同　一四三ノ一三
○八首相讃　三六ノ一三
○泊瀬　二九六ノ六
○初相場　一七五ノ二
○はつゝて　一〇二ノ六
○八百比丘尼　三六ノ一三
○はづみ　二一ノ七
同　二七ノ三
○はつむいた　一二五ノ七
○發明　一三三ノ一一
同　一三七ノ一一
同　一五六ノ一三
○發明者　一七ノ七
○初目見　一四五ノ一五
○鳩の杖　七七ノ一
○花　三七ノ九
○花合　六三ノ一五
○場中　一一ノ一一
○花傘居合　五八ノ七
○鼻紙　一七〇ノ一四
○涕紙袋　六八ノ九
○鼻ぐすり　三九二ノ一一
○花隈の城跡　一〇三ノ八
○咄し伽　二ノ六
同　一三三ノ四
○花相撲　三一ノ九
○花園　一三〇ノ一二
○花出す鹽　二七ノ八
○花の露　一一〇ノ六
○花の本　七三ノ八
○土師寺　五六九ノ九
○幅廣繻子の三重廻　六五ノ一五
○羽二重　一四七ノ一三
○謫られ　三三ノ一三
○濱千鳥　三三ノ一五
○濱成　一五五ノ一三
○濱松の草鞋　八三ノ一四
○はまりこみ　八七ノ九
○はまりて　四一ノ二
○はみ出し錢　一三〇ノ一一
○判入れた　一三ノ一〇
○樊噲　一〇一ノ一三
同　三七一ノ二
○半季　一四二ノ四
同　一五三ノ六
○半季究め　一七ノ四
○變國の圖　四五ノ五
○斑足太子　九三ノ一
○半太夫　一五一ノ一三
○番附　二六ノ一五
○同　八一ノ五
○はんなり　六四ノ一三
同　一三六ノ六
○般若坂　七五ノ一三
○范蠡　五三ノ八
○囃子　四四ノ五
○平忠氏　二六一ノ五
○撫直段　二三ノ一三
○はら[illegible]　二〇三ノ四

○咽かわかして　一一ノ七
○咽のかわく　一四八ノ一一
○上り役者　八〇ノ一
○信頼　二二一ノ一三
○野風呂　九七ノ一一
○飲代　三〇ノ一四
○のんこの赤手　二〇一ノ四
○野等道具　一五一ノ一一
○乗合　五九ノ一〇
○糊けのある　一五四ノ四
○糊屋　一四二ノ二

ハ

○馬鞍山　一〇一ノ八
○俳諧師　四一ノ八
○俳諧師と博奕うち　四〇〇ノ一一
○俳諧風　二六九ノ六
○媒介　一五三ノ七
○賣女　一六七ノ一三
○賣藥　五四ノ五
○羽團　一〇五ノ七
○博多の津　三七〇ノ三
○萩山鹿之介　二〇九ノ一三
○柏莚　八二ノ九
○白圭　三三三ノ八
○伯人　二五ノ八
○伯藏主　九六ノ一
○博奕　二六ノ八
同　五八ノ一
同　七六ノ一
同　三六七ノ一三
○白馬寺　一三五ノ三
○箱王丸　二〇ノ一三
○箱傳授　七五ノ一〇
○箱根の關　八四ノ四
○箱根の別當　二〇ノ一三
○挾箱　五九ノ一〇
○挾箱覆　四三ノ二
○ばし　二〇〇ノ一
○橋がかり　四四ノ一〇
○端詞　二六八ノ二
○端錢　九四ノ二
○橋立　一三六ノ四
○はした枕　四一ノ三
○把針者　三九七ノ一三
○芭蕉の手紙　一一五ノ一一
○はしり　一四五ノ八
○はしりもと　一四五ノ八
○はすは　一四六ノ三
同　一六八ノ八
○裸人形　六三ノ一〇
○裸百貫の相場　四〇ノ一一
○はたき　八三ノ一
○はたき散らして　八四ノ五
○旅籠屋　五五ノ一三
同　七二ノ一四
○旗さし物　四七ノ二
○秦の大津父　五四五ノ六
○鉢を飛せて　一三一ノ四
○八丈絹　一七九ノ一四
○八陣の法　三ノ二
○八文字　八七ノ三

○日本堤　一六六ノ一〇
○二枚屏風　三〇ノ一〇
同　四三ノ一
○二萬の里　三五五ノ四
○人果大　二三三ノ一三
○人魚　一二七ノ一
○人形屋　一四二ノ七
○人參の問屋　一九二ノ四
○入相　五九ノ一三
同　二一ノ一
○人相見　六〇ノ一〇
○仁和寺の御室　二三一ノ三
○入津　一五二ノ五
○女房　六三ノ八
○如來樣　三九ノ二
○俄坊主　四四ノ一
○鷄塚　一三八ノ八

ヌ

○縫事　二七〇ノ九
○縫紋　一六六ノ二
○糠悅　一五六ノ一〇
○幣　一三ノ八
○落草（ヌスビト）　二四二ノ一
○布子　六九ノ六
○布引　一〇二ノ九
○塗下駄　六三ノ一四
○濡衣　四一ノ一
同　一三〇ノ一三
○ぬれ衣　一三三ノ一
○濡れられて　一一ノ八

ネ

○根から　一六ノ八
同　一七ノ一四
同　一五二ノ五
○猫いらず鼠取婆　一三九ノ一三
○寐ごき　六八ノ一〇
○猫なでごゑ　一四ノ一〇
○寐酒　六四ノ七
○根濟　七六ノ一三
○鼠縮緬　八〇ノ二
○鼠小紋羽織　二一ノ七
○ねすり事　二六ノ八
○直段　二一ノ一二
○ねたれ者　七六ノ一
○ねつ〱と　二四ノ七
○根拔　二ノ一
○根の國　一二ノ一
○ねまつた　一七八ノ八
○年季　一四三ノ四
同　二〇七ノ七
○念比分　八〇ノ一三
○念じ佛　二ノ四
○年役　一三三ノ一三
○ねむりめ　八五ノ二
○閨の花　一三〇ノ二

ノ

○納銀　一ノ六
○熨斗目　四ノ六
○のたづき　一二五ノ四
○咽かわかさぬ　一七七ノ二

○那須野紙 二四八ノ一〇
○なつた口 九〇ノ九
○七階子 四一ノ三
○七重の服紗 二三ノ一〇
○難波屋何某 五二ノ七
○七日の相撲拾 三一ノ一〇
○なぶして 八一ノ二
○鍋燒 八一ノ二
同 一〇〇ノ一三
○生灸 一四五ノ一
○涙ごかし 一一ノ八
○南圓堂 一二四ノ一四
○難經 五四ノ一
○難波煮 五〇ノ五
○南畝子 六五五ノ四
○なめ過ぎた 七五ノ六
同 一六一ノ五
○寧樂 七一ノ八
○ならず客 四一ノ八
○ならずもの 四一ノ一三
○なら茶 一七八ノ七
○奈良法師 四七ノ四
○成りのぼらろゝ 一四六ノ九
○なりのぼれども 一四一ノ一
○業平 六五ノ四
同 七五ノ一三
○成相寺 一三一ノ三
同 一三五ノ八
○なれ 二一ノ一三
同 三三ノ一三
○なれ過ぎた 一五一ノ二
○繩手 一三六ノ六
○繩張 三ノ九
同 五ノ八

ニ

○庭妹「ニヒセ」の鄕 二七二ノ二
○にがり 一四九ノ三
○にがり切つて 一三ノ一三
○熟田津の湯 三七四ノ一一
○握り墨 七一ノ九
○肉走りて 三一ノ九
○迯代 二三五ノ一三
○錦の小路 一一六ノ一
○西代村の蓮池 一〇六ノ七
○西堀 一四二ノ七
○二十四輩 三七ノ一三
○贄物 二〇ノ二
○二重切の花活 二一ノ八
○二條新地 一六〇ノ六
○二挺太鼓 五八ノ五
○二挺立 四一ノ一
○二條室町 九三ノ三
○日光屋和三郎 一九二ノ四
○につこらしく 七三ノ二
○荷賣 八七ノ九
○二の替 五三ノ七
同 八〇ノ一一
同 八一ノ一一
同 八二ノ八
同 一九四ノ三
○劔「ニブシ」の刃 一七三ノ一一
○日本一 三一ノ二

取沙汰　一三二ノ六
○取捌　一五一ノ四
○取〆　九三ノ九
○とりしめて　七四ノ一
○取次　四ノ一一
同　六ノ一三
同　三六ノ三
同　一三三ノ一三
○とりつめて　三八ノ一四
○とりて　二七ノ二
○鳥幕　、一〇三ノ四
同　一〇五ノ五
同　一〇七ノ一四
○鳥又の鷲　八一ノ一四
○どれ合中　一三三ノ一四
○とれる客　一三ノ一三
○泥仕合　八〇ノ一四
○泥町　二〇四ノ八

ナ

○内儀　一三ノ四
同　六二ノ五
同　八五ノ七
○内證　五五ノ一〇
同　六八ノ一三
同　一五三ノ七
○内證の械　一五ノ六
同　一五九ノ一三
○名印　一七ノ九
○名うて　六五ノ一一
同　一三六ノ一三
○名うて者　一六六ノ四
同　一七二ノ一〇
○中川沖之進　八七ノ七
○長煙管　一三ノ二
○長崎御菓子　九一ノ五
○長崎仙人鶴之介　五八ノ三
○中正島　二〇四ノ八
同　二〇五ノ八
○長髄彦　一三ノ五
○中戸の客板　一七ノ四
○中臣の祓　一三ノ八
○長暖簾　二一六ノ二
○長羽織　一三〇ノ一一
同　一五九ノ一一
○長橋の局　六四ノ一〇
○長堀　一四五ノ五
○長町　四〇四ノ六
○中村勘三　五三ノ七
○中村吉左衛門　五ノ二
○中宿　一五五ノ六
○流なたつる　一八五ノ一〇
○流なたてる　一四四ノ九
○流の身　一七六ノ六
○薙刀石突　五二ノ一三
○仲人　一五三ノ八
同　一五六ノ一〇
○仲人顔　一五四ノ四
○媒口　一三五ノ一
○媒談　二〇四ノ一四
○名社の瀧　一〇九ノ四
○名古屋山三　七七ノ一三
○那須野　九三ノ二

○道場 三九ノ四
○遠津神 三〇ノ一三
○道頓堀 五ノ一三
同 一七四ノ四
同 一九三ノ一四
同 四〇六ノ七
○胴木偶 五四ノ七
○どうはれ茶屋 八三ノ一
○唐筆 一七ノ八
○どうぶくら 一三三ノ四
○唐饅頭 九一ノ五
○唐物 五ノ七
○唐弓 一八九ノ六
○胴慾 一三ノ一三
同 三一ノ四
○通札 一六ノ二
○得意方 五ノ一四
○獨活 五四ノ二
○得心 五四ノ五
同 七四ノ七
同 一五三ノ一三
○德乘が緣がしら 二一ノ五
○渡月橋 一〇九ノ七
○所ふがき 一七五ノ五
○床脇 二一ノ一四
○どさん 一四七ノ六
○土產盃 四一ノ三
○刀自 二九二ノ四
○年籠 一八一ノ三
○年じまひ 一二七ノ一二
○年の夜 一〇八ノ七
○體仁 二一八ノ四
○登城 七ノ九
○度嶂散 三四二ノ一二
○年忘 九三ノ四
○刀田の里 二七九ノ四
○とちめん棒 一七四ノ一二
○とちや遲し 二六ノ一三
○百々越前守 一六九ノ九
○とつゝおひつ 一三八ノ六
○飛火野 七二ノ五
○富子 三〇三ノ一三
○富十郎 六ノ一
同 一九三ノ八
○富十郎が江戶土產 八二ノ三
○富田 三一一ノ四
○純子 六一ノ一二
同 八〇ノ五
○吐胸 一二五ノ八
○鳶俳諧 一〇四ノ一三
○留壽桷〔トメキ〕 八五ノ四
○伴の健宗 三四八ノ一四
○どやがしやれ 一一四ノ二
○山富反魂丹 五四ノ六
○豐宇氣の大神 五五〇ノ五
○どよみ 五八ノ一三
○豐の明の舞姬 三四七ノ二
○豐雄 二八五ノ四
○虎屋伊織 一四七ノ三
○取替 四二ノ九
同 八一ノ二
○取沙汰 一三ノ四
同 一〇七ノ一三

○出ほうだい　一四三ノ六
○手前よろしく　六一ノ一〇
○手廻　七四ノ八
○天狗　一〇三ノ一
同　一〇六ノ六
同　一四三ノ三
同　一四四ノ七
○天狗酒盛　一〇四ノ一四
○天狗頼母子　一〇五ノ二
○天狗道の熱鐵の苦　一〇六ノ一三
○天狗の羽箒　一〇五ノ六
○天狗俳諧　一〇四ノ一三
○傳三郎　一三一ノ一
○天子の劍　一六ノ一
○天神講　一四ノ九
○天蒼氏　三二九ノ一三
○天竺　九三ノ一
○天竺の禮　八六ノ二
○手んづもんづ　一〇三ノ六
○てんと　二〇一ノ五
○天王寺　五八ノ三
○天王寺の大法會　一八八ノ七
○天の川　二六一ノ七
○てんば　一九九ノ八
○天滿　一四二ノ六
○傳馬町　一五〇ノ三
○出店　六一ノ三
○寺子　一四二ノ三
○出る息なしの世渡　一四二ノ六

ト

○戸明　一四三ノ一
○吐息　一三三ノ五
○十重の箱　一三一ノ一
○唐音　六三ノ二
○遠かみ惠美ため　一〇ノ六
同　一五ノ一
○董其昌　八五ノ一〇
○同行　三六ノ一〇
同　三八ノ一〇
同　一三三ノ七
○同行衆　一三三ノ九
○同行中　一三三ノ一四
○道具會　二二ノ三
○道具屋　三三ノ一
同　一四七ノ八
同　一四八ノ九
○道具屋衆　二三ノ一
○藤九郎　九五ノ一四
○唐犬額　一二一ノ二
同　一七八ノ六
○投壷　四一三ノ一二
○洞濟二派　一七ノ一
○通鴛　八四ノ六
○唐紙の二切　八六ノ一五
○堂島　一七三ノ三
同　一七五ノ六
○道成寺　五〇九ノ七
○道者衆　五五ノ一五
○洞川寺　五七九ノ一五
○東大寺の毘盧舍那佛　五四一ノ一一
○道中雙六　八四ノ四
○道中附　八五ノ一

○奴〔ツブネ〕 二七四ノ一〇
同 二七五ノ一
○壺井の祠 五七〇ノ一三
○爪はづれ 一〇ノ七
同 一五七ノ一〇
○つまみ錢 一四一ノ九
○つまらず 一三三ノ一三
○つまらぬ 二〇ノ九
同 二六ノ一三
同 七三ノ一四
同 一八一ノ三
○つまろ紋日 一二ノ五
○屯〔ツミ〕（助數詞） 三〇三ノ一
○つんと 一五九ノ六
○爪だくみ 一五四ノ一
○つもり書 一二四ノ一四
○釣 四三ノ九
○釣鐘町 一四二ノ二
○劔の舞 五九四ノ一一
○つれ〲の鐵槌抄 二〇五ノ六
○つれ彈 一五一ノ一三
○つれぶし 三六ノ一〇
同 三九三ノ五

テ

○出合 六三ノ一一
同 九五ノ九
○定家卿の小倉色紙 一二四ノ一三
○定家卿の鼻鑷 二一ノ六
○出開帳 一三一ノ五
○妾〔テカケ〕 一二七ノ八
同 一四一ノ五
同 一六七ノ六
○出かけ 一五〇ノ一一
○妾形氣 一二三ノ九
○妾口入 二〇六ノ二
○妾種 一二〇ノ四
同 一四一ノ六
○妾分 一三四ノ八
○妾者 一四五ノ一一
同 一四六ノ一
○出かける 二ノ一三
同 一〇八ノ一三
○手竹輿 一四七ノ一三
○出がはり 一五五ノ一一
○手利 一二〇ノ二
○手くだ 一二五ノ一四
同 一三六ノ一四
同 一四六ノ八
○手煎 一〇九ノ一三
○手そゝぶり 一五〇ノ八
○てつきり 一四四ノ一三
○僕兒〔デッチ〕 一七ノ三
同 七一ノ一〇
○丁稚 一四一ノ七
○でつち打出した 一四八ノ一一
○手鼓の中音 一三一ノ一四
○鐵砲 四〇四ノ一
○てゝくり 七四ノ一三
○手取 二五ノ一〇
○手判 八四ノ四
○手ふり棒 一五六ノ一〇
同 一七九ノ一三

○張飛　一〇一ノ一三
○張本　二一一ノ八
○鳥目　一九〇ノ九
○張良　一六ノ二
○猪牙　一五一ノ五
○如才　一五二ノ一
○ちよつこと　八〇ノ九
○ちよんがれ　四〇一ノ二
○女郎　六五ノ一二
同　八一ノ六
○ちよろまかして　一二三ノ一三
○ちらし文　八七ノ一
○ぢり／＼として　八一ノ二
○塵灰　七三ノ一三
○ちり灰つかず　一八八ノ二
○縮緬　六一ノ一三
同　一四七ノ一三
同　一五二ノ五

ツ

○通辭　一三二ノ一五
○追從　七二ノ四
○ついど　三四ノ三
○ついまつ　一四二ノ一三
○柄絲　一〇三ノ四
○柄袋　四八ノ四
○摑取　三〇ノ七
○月　五八一ノ八
○付合　一七ノ五
○つき上がつた　五〇ノ一
○つきあがる　三一ノ五
○月がこひ　九一ノ一〇
○月君　一四八ノ一四
○月切　一四二ノ四
同　一四六ノ五
○築島　三〇ノ一
○つき出し　八五ノ五
○櫼橋　二四三ノ七
○月雌子　四二ノ二
○肉米〔ツギマイ〕　四三ノ七
○づきりとせれども　一六六ノ三
○筑紫綿　三〇三ノ一
○九十九髮　一四〇ノ一
○つくも筵　二一一ノ四
○つけ　三九九ノ一〇
○附髮　四四ノ三
○付届　六八ノ一三
同　一四三ノ一三
○辻川　五三一ノ五
○辻君の風俗　四〇六ノ二
○對馬　一三三ノ一
○土人形　一六ノ八
○恙蟲　六五ノ六
○づつなは　二七ノ七
○つゝぼりと　二〇〇ノ一三
○鼓　七七ノ六
○鼓打　四一ノ八
○つゝもたせ　七五ノ一四
○常緣　二四一ノ七
○角髮の大童　六九ノ一〇
○角結のくけ帶　一九三ノ六
○石榴市　一九六ノ四
○つぼめあはぬ　一四六ノ六

地女　一五〇ノ二
同　一八六ノ二
○近付　三七ノ三
○近松門左衞門　六二ノ二
○力足　二六ノ一
同　三九ノ一三
○ちから草　一三五ノ九
○知行　五ノ四
○兒が嶽　二三ノ九
○地獄落　一三九ノ一一
○地獄極樂　七七ノ三
○置山　四〇一ノ七
○智識　七六ノ一四
○智積院　四七ノ八
同　六四ノ九
○地築の棒　三九ノ六
○ちとまへめで　二五ノ二
○地取　三ノ八
○千葉の實胤　二四一ノ七
○ちびり暮　一〇ノ九
○血文　八六ノ一三
○ちんこの呪　一〇〇ノ二
○陳じ　四ノ九
○賃苧　二〇五ノ二
○陳皮　五四ノ二
○ちんぷんかん　一五ノ五
同　一六ノ七
○茶粥　一三ノ九
○茶杓　一一〇ノ六
○ちやつた　三九一ノ四
○茶紬の置頭巾　一六ノ九
○茶飲　二六ノ七
○茶の湯　一六ノ一〇
同　九三ノ四
同　一五一ノ八
○茶の湯の勝手　九三ノ四
○茶の湯の流行　三九〇ノ一四
○茶店　一三六ノ三
同　一三六ノ三
○ぢやんぎり鍋　一四一ノ一〇
○茶屋　八五ノ二
○茶屋文　六一ノ三
○茶屋者　一四六ノ一
同　一九二ノ一二
同　一九四ノ一三
○茶屋奉公　二〇七ノ五
○ちやるめら　五八ノ四
○茶碗屋　一四二ノ六
○丑　七七ノ九
○宙覺　三六ノ一四
○中華の禮　八六ノ一
○中風　六〇ノ一四
同　六四ノ四
○定　四二ノ四
○帳切　七五ノ一二
○定業　五四ノ四
○蝶鮫　四一ノ七
○丁子屋　八二ノ一
○丁子屋丁山　一七一ノ三
○手水　二三ノ一二
○町人衆　二七ノ四
○蝶の傳説　五六五ノ五
○蝶花形　一五六ノ九

店がり　九三ノ三
○棚經　一六〇ノ八
○店ざらし　五四ノ九
○田邊の金忠　二九六ノ四
○賴母しづく　一〇九ノ一四
同　一四三ノ八
○煙草入　六九ノ一
○足袋屋　一四二ノ一〇
○玉川　二六五ノ一一
○魂きれて　一〇六ノ一三
○鷄卵酒　一〇〇ノ一三
○玉造　一八九ノ五
○玉手箱　一二九ノ八
同　一三四ノ一三
同　一三五ノ七
同　一三九ノ七
○玉藻の前　九六ノ九
○旦　七七ノ八
○談義僧　一五七ノ一四
○短句　二六九ノ五
○談合相手　八〇ノ一四

○丹後ちりめん丹後縞　一三六ノ九
○丹後の一番鰤　一七五ノ一
○男色
若衆の惣嫁　六九ノ八
美少年　三一三ノ九
○丹竈　九一ノ八
○團藏　八一ノ六
○段々　九六ノ四
○たんと　四七ノ六
同　一五二ノ八
○堪能　一五一ノ一三
○丹波茶　一六ノ一〇
○丹波屋　六四ノ七
○丹藥　九一ノ七
○爲朝　一三三ノ一
○爲義　三二一ノ一四
○多門　一三五ノ八
○太夫　四四ノ五
同　五八ノ一二
同　八五ノ二
同　八七ノ二

同　九〇ノ一三
同　一〇九ノ一三
○太夫遊　一四五ノ二
○たら〳〵　一〇〇ノ六
○達摩宗　四〇〇ノ九
○達摩大師座禪車　五八ノ八
○太郎　二八五ノ一三
○太郎右衛門　三六ノ七
○太郎左衛門　四〇ノ一
○太郎七　三六ノ八
○俵屋ふり出し　二四ノ七

チ

○知恵の餅　一三六ノ三
○地黄丸　五四ノ六
○地黄煎玉　一三八ノ七
○智恩院　六三ノ七
同　一五七ノ一三
○知恩寺　一三八ノ七
○地女　一四五ノ一三
同　一四六ノ四

○大智大權現の御山　三六三ノ七
○大豆屋七兵衛　一六ノ四
○大豆屋七郎右衛門　二一ノ一四
○大東世語德行篇　五九一ノ一
○臺所　六八ノ一一
　同　一〇一ノ二
○大兵　二七ノ二
○大名目見　一九九ノ一
○代物　六一ノ六
○大門　一五一ノ三
○大文字の送火　一八一ノ五
○平の清盛　一三ノ一
○平の助の殿　二五三ノ五
○內裏上﨟　一三三ノ六
○高丘親王　三四三ノ三
○高木屋橋　二七ノ三
○高砂　二五ノ一〇
　同　二七ノ三
○鷹匠足袋　二ノ四
○高遠　三三〇ノ一二
○高なしの下作女房　一四ノ一四
○高野の濱　五三八ノ二
○高原　一〇ノ三
　同　一五ノ一〇
○高天が原　一〇ノ二
　同　一五ノ九
○高村宮內　一〇二ノ二
○高持の百性　三六ノ七
○瀧口　一一〇ノ三
○たき所　八〇ノ一一
○當麻の酒人　三〇〇ノ一三
○瀧本の自畫贊　二一ノ五
○たく火の權現　三六五ノ四
○たくりかけて　一三三ノ三
○涿鹿の岐　二四一ノ一三
○たけ　一五五ノ一〇
○竹折髷　一三ノ一〇
○竹床几　一三六ノ六
○竹田　二五ノ九
○竹田周益　五四ノ一四
○竹取の翁　七四ノ九
○竹の內　五一ノ一二
○竹の內峠　三一ノ一二
○たしない　一〇五ノ七
○嗜　三三ノ一三
○足のまゐろ　七ノ二
○ただけても　四七ノ四
○忠度の墳　一〇二ノ一
○忠正　二三三ノ一
○疊上げて　四一ノ一〇
○たちぐく　二八九ノ六
○立ぐらみ　六〇ノ一四
○橋の逸勢　三四八ノ一四
○立役　八〇ノ一四
○立煩　一〇四ノ八
○龍田　七一ノ七
○龍の國　一二九ノ五
○辰巳屋宇治江　六三ノ七
○たて烏帽子　四〇二ノ一一
○立髮風　七七ノ一二
○竪縞のかます袖　四一ノ九
○立荷　四三ノ七
○店がり　二ノ七

○僧正が谷 一〇一ノ七
○僧正遍昭 三五〇ノ六
○宗長 七三ノ二
○象頭山 一〇五ノ九
○宗哲の夜食膳 五〇ノ四
○僧尼ー尼僧の亂行 三九六ノ一四
○惣の社 三七七ノ一
○相場 一六ノ四
同 三五ノ八
○惣髪 五四ノ一三
○象鼻の格 四九ノ四
○葬禮ごみ 一四八ノ九
○曾我兄弟 二〇ノ八
○則天皇后 一三五ノ二
○若干 七二ノ四
○そこひ日 一三二ノ三
○祖師 三六ノ六
○祖師上人 三七ノ九
○訴訟 七六ノ四
同 二〇七ノ五
○素性 三五〇ノ七
○そゝらるれば 八二ノ九
○ぞつとして 三四ノ九
○ぞつこん 八〇ノ八
○袖 二七四ノ五
○袖結め 一三ノ一二
○袖なし羽織 一四ノ一二
○袖のした 一五五ノ七
同 三九二ノ一一
○袖のにしき 一三九ノ一四
○そと致したる者 六〇ノ二
○曾根崎 一七四ノ三
○曾根崎の社 五二九ノ三
○曾根の鹽濱 二六ノ三
○そんぢよ其處 四三ノ一〇
○ぞめき 一五九ノ一一
同 一六三ノ一
○そもじ 六四ノ一〇
同 一四四ノ一四
○空色縮緬の羽織 二七ノ五
○空色加賀の長羽織 一〇三ノ三
○剃下 一〇三ノ五
○剃下の奴 六〇ノ一二
○十露盤 二ノ一二
同 五四ノ三
同 一五一ノ三

タ

○大吉髻 六三ノ一二
○大愚 二三ノ一一
○幇間（タイコ） 八一ノ一三
同 一五一ノ一〇
○梵妻（ダイコク） 三五ノ三
○大こく窟 五七八ノ四
○大黑屋富太郎 二〇九ノ九
○大黑屋の地黃丸 五四ノ六
○幇間（タイコモチ） 六八ノ二
○太鼓持（タイコモチ） 三八九ノ一三
○たいこもち 四〇九ノ七
○大事ない 一二四ノ六
○大盡 八二ノ八
○大藏 三六四ノ二
○大さうたて 三〇ノ六

○誓文　一〇〇ノ五
同　一〇七ノ六
○せいらい　一〇八ノ二
○關口　五一ノ一二
○關寺小町　六四ノ九
○世間ふさがり　四四ノ一
○石崇　三三三ノ四
○關取　二六ノ九
同　二七ノ一
同　三一ノ一三
○下水溜〔セ、ナゲ〕　八三ノ一一
○世尊寺樣　一一〇ノ八
○世帶　一一九ノ九
同　一三〇ノ二
○世態人情
其推移　三八九ノ二
算盤を枕に　一ノ三
○せたげられ　一三八ノ四
○せたげる　三一ノ三
○節季　一二ノ六
同　一三ノ八
同　八〇ノ一三
同　一四九ノ六
○說經者の常態　三八五ノ五
○殺生石　九三ノ二
○攝取不捨　三九ノ三
○雪踏　九四ノ一二
○節刀使　二四六ノ九
○拙判官　四二ノ二
○節分　一二七ノ一二
○說文　三五三ノ四
○節用集　一九六ノ一
○脊中の兀し　六五ノ一二
○蟬丸夫婦　五五ノ五
○禪學　一七ノ一
○善光寺の御印文　四九ノ四
○千石頂戴　一六六ノ六
○禪宗臭き庵　四八ノ一三
○先生家　八一ノ一一
○仙臺　三六ノ三
○仙臺川岸　一七七ノ一四
○せんだく袴　一五四ノ四
○先達　一〇八ノ一一
○千住　一五一ノ五
○仙人鶴之介　五八ノ一一
○占卜-萬年草をしたしもの　一三一ノ一二
○千本鴇のお糸　一六三ノ一三
○泉涌寺の舍利會　一八一ノ五
○千兩道具　二三ノ七
○責念佛　五〇ノ一一
○糶り　二一ノ九
○糶上げて　二一ノ一〇
○せり立て　四二ノ三
○せりふ　一四六ノ三
○糶分け　二一ノ六
○世話　四四ノ三

ソ

○惣嫁　四〇九ノ二
同　六九ノ八
○宗祇法師　七二ノ一一
○雜行　三六ノ七
○曾子　二五ノ一

○すご〳〵　七ノ八
○すご〳〵と　一五ノ一〇
同　一〇三ノ一四
○雀をどり　一六〇ノ九
○硯石　一〇九ノ六
○すつきり　一三一ノ六
○ずつしりとした　一五六ノ一一
同　一七四ノ六
○すつぱ　二〇〇ノ三
○すつぱの皮　六五ノ一三
○すつぺらぽんと　一九八ノ一一
○すつぽぬけ　八一ノ三
○泥亀　八〇ノ一一
○すつぽん汁　四一〇ノ一三
○捨金　一二〇ノ四
○崇道天皇　三三六ノ四
○崇徳院様　一三ノ一三
○砂物　二ノ二
○すれ　二〇六ノ八
○素咄　九四ノ一
○須磨　三〇ノ二
○墨商人　七一ノ八
○隅田川　四八ノ七
○すみどり　一四五ノ六
○すみどりや　一四二ノ六
○作屋吉介　八七ノ七
○住吉　二七ノ一四
同　五五ノ一二
同　四〇四ノ一三
○住吉講　一四ノ九
○ずん〳〵　七ノ一一
○ずんど　一〇五ノ七
同　一五〇ノ一一
○ずんばい　一九八ノ八
同　二〇五ノ九
○相撲　二五ノ一〇
同　五二九ノ六
○相撲形氣　三一ノ八
○相撲取　二五ノ一
○賊〔スリ〕　四一ノ一〇
○摺箔　八五ノ一三
○駿河町　一五一ノ一〇
○すはといふ時　二ノ五
○諏訪の海　一八九ノ一
○すはま　二〇一ノ四

セ

○制外　八〇ノ一四
○誓願寺　一五七ノ三
○聖語　一三七ノ六
○贅こき　一四五ノ二
○勢語に七箇　七三ノ一〇
○誓言だて　一三八ノ一〇
○誓紙　八六ノ一三
○誓詞
刀箕理　一七〇ノ七
弓矢八幡　一〇〇ノ八
○青漆皮　四五ノ二
○清少納言　六三三ノ八
○西蜀　一六ノ二
○靜四郎兵衛　一七一ノ六
○清太郎　五六ノ九
○政道　一四一ノ一〇

諸譯 一五四ノ一
同 一四五ノ一一
同 一五五ノ一
○諸譯發明の臣 一ノ六
○しら河 一二〇ノ九
○白川の宮 一二二ノ二
○しらけて 一三ノ四
○しら聲 三五ノ六
同 六〇ノ一三
○白茶 一四五ノ五
○しらになつて 二一ノ一四
○白絖〔シラヌメ〕 一一〇ノ三
○白鼠 一四四ノ一一
○白はへ日和 一三一ノ九
○白髭の神 七三ノ八
○白峯 二二三ノ七
○尻からげ 一〇二ノ六
○尻くゝり 一三五ノ一三
○尻くらへな仕うち 八一ノ三
○尻つまらず 五五ノ一〇
○尻ぬけ 一三五ノ一〇
○尻のつまりし 一六ノ一〇
○汁のたらぬ 一三ノ一一
○二郎 二八五ノ三
○素人方 二三ノ一四
○素人衆 二三ノ一一
○白瓜野郎 八三ノ七
○白がれの猫の火取 五八九ノ八
○白銀屋金七 一二四ノ七
○白子女郎 一九六ノ四
○白子屋の三郎七 一五一ノ一
○素人 八二ノ七
○城取 二ノ二
○代物 三〇ノ一三
○卑客人 七一ノ一〇

ス

○すあひ 七ノ七
○粋 四三ノ八
同 八〇ノ一三
同 一四四ノ九
同 一五三ノ八
同 一八八ノ三
○隨緣 三三〇ノ五
○吸付け 六二ノ九
○水府 二五七ノ一
○粋方 一五一ノ四
同 一五九ノ四
○末六十日 二六ノ一三
○すゑり 一二四ノ九
○すかさぬ 一三ノ一
○すかんぴん 四一ノ一三
○菅原道眞 五六九ノ一〇
○すきと 一八七ノ八
○杉原一束 一三ノ一三
○梳鬢 八五ノ一三
○杉本佐兵衛 一四ノ四
○數寄屋行燈 五〇ノ三
○菅笠 四八ノ四
○佐國死して胡蝶となる 五六三ノ一四
○助高屋 八二ノ九
○祐經 二〇ノ一三
○すげない挨拶 五ノ一

○朱棗器　二一ノ八
○首尾　五八ノ一
同　九〇ノ一〇
同　一三四ノ一三
同　一一五ノ四
○朱符　二七九ノ一〇
○衆方規矩　五四ノ一四
○順緣　六五ノ九
○順慶町　一四三ノ七
○春水あやめ　八二ノ六
○俊成卿　二五ノ七
○撞木町　二〇八ノ一三
○集禮倒　一〇八ノ一三
○修羅の時　二七〇ノ一二
○椶櫚の葉箒　三九ノ六
○椶櫚箒　四二ノ三
○尉　四三ノ一〇
○笙　七七ノ五
○淨　七七ノ九
○傷寒論　一三五ノ一〇
○商業、商人
賣藥店の店看板　五四ノ七
腹の中から十露盤蛸　一七三ノ六
○障化　二三三ノ四
○淨慶　五三ノ二
○上戶　三五ノ一四
○聖護院　九七ノ七
○上國　七一ノ七
○招魂の法　二七六ノ九
○上作物　一一ノ一三
○正信偈　三六ノ一〇
○精進酒　三九ノ六
○正眞　九六ノ一
○仕用帳　一二四ノ一四
○上塵紙　一七九ノ五
○聖天の油貰　一三一ノ五
○淨土寺　四ノ一三
○證道の歌　三九ノ九
○上東門院　八四ノ九
○性根玉　二一ノ九
○總巴　二六九ノ七
○常彼岸　五ノ一
○常服丸　六一ノ三
○正法寺　六三五ノ一四
○常盆　三六ノ一
○常脈　一九五ノ三
○淨瑠璃　五ノ一〇
同　三六ノ一四
同　三七ノ四
同　三九ノ一〇
○勝劣散　五四ノ一三
同　六〇ノ一三
同　六一ノ四
同　六二ノ一
○上臈達　八四ノ九
○職原式　一二四ノ一二
○續萬葉集　三二ノ一三
○所在なうて　一三五ノ七
○所作事　八〇ノ四
○諸色　一七九ノ六
○初日棧敷　六一ノ一
○一筆（ヒヨフデ）　三九ノ五
○諸譯　一五〇ノ一

○眞柱　七三ノ一四
○神佛怪異
一段の陰火　二二三ノ三
磯良の靈　二七八ノ二
甦生者の夢物語　二五二ノ二
生曾森前の怪物　三五九ノ六
黄金の精靈　三三二ノ三
墓ふ魂　二四八ノ六
戀人車に乗りてかける　三三七ノ一
秀次の靈　二六四ノ一
伯耆の大山の變異　三六四ノ九
山の鬼　三一一ノ六
龍女　二二八ノ一三
○神變大菩薩　五六八ノ四
○しんばう藝　四〇一ノ五
○新町　九四ノ七
○新町の三筋　八五ノ四
○新命　一二〇ノ二
○神文　三ノ一三
○親鸞上人　三五ノ一〇
○注連　三五ノ一三
○注連繩　一三ノ七
○しめり豆ならぬ　一三六ノ二
○しめる　五〇ノ一三
○霜さき　八〇ノ一
○下立賣　五二ノ二
○四匁花　六八ノ四
同　八四ノ一二
○寺役　五〇ノ一二
○借錢　一〇九ノ一
○癪の上る　一一四ノ三
○尺八顉　五四ノ二
○釋名　三五二ノ一三
○借屋札　四八ノ一
○しやくら商　八七ノ九
○麝香　五九ノ四
同　六一ノ一
○社人　一〇〇ノ一三
○しや〳〵り　三〇ノ一
○しやでん　四一三ノ七
○しやにかまへて　一三一ノ二
○じやみて　九三ノ八
○秀句　一三三ノ八
○十四經　五四ノ一
○宗旨　三六ノ一
○十種香　一五一ノ八
○十兵衛　一一ノ四
○叔雄　八六ノ一〇
○壽齋　一二七ノ五
○朱鞘の相口　二〇ノ七
○朱鞘の大小　九七ノ五
○朱雀野　九四ノ三
○繻子　八〇ノ五
同　一四二ノ一
同　一五二ノ五
○守隨の秤竿　二〇四ノ六
○繻子の帯　一五五ノ一〇
○繻子鬢　四四ノ一〇
○集錢出　九四ノ九
○呪咀―空海の呪術　三四八ノ一
○出頭　一三一ノ六
○出頭手代　六二ノ四

○信多快庵　一九五ノ三
○忍のつとめ　一五〇ノ五
○芝居　三六ノ一
同　七七ノ七
同　八〇ノ一〇
同　八二ノ八
同　一〇一ノ一
同　一四六ノ七
同　一四七ノ一四
同　一五一ノ九
同　一七四ノ四
○柴崎　七七ノ一〇
○芝の庄司　三〇三ノ一〇
○司馬忠庵　八五ノ六
○芝能　七二ノ七
○次妃　一二〇ノ三
○澁團扇　三一ノ一四
○澁谷藤作　一七一ノ七
○子房　一六ノ三
○四方髮　一三〇ノ二
○四本綱渡天　五八ノ九
○島　一三ノ八
同　一四二ノ七
同　一九二ノ七
○自賄〔ジマイ〕　一三ノ一三
同　一二ノ四
○自賄藝子　三九四ノ一〇
○仕舞所　一五二ノ七
○島桐の一枚板　一四八ノ五
○始末　三一ノ七
○しまつ　三八ノ二
同　一一〇ノ九
○島の内　一七四ノ三
○島原の染種の匂　一〇九ノ九
○しみたれ　一四九ノ一
○しみらに　二七六ノ一〇
○新院　二一五ノ一〇
○心外　一三四ノ九
○人外の交　七六ノ二
○新機關　二五ノ九
○じんき　一四一ノ八
○神願寺　三四六ノ二
○信玄　三三一ノ二
○神護寺　三四六ノ七
○眞言　四七ノ一
○心齋橋　三六ノ八
○神州　七一ノ一
○身上　六ノ一
同　七三ノ三
同　一五六ノ一
○尋常　一五七ノ一〇
○身上は乗つて　一六ノ四
○信西　三二ノ六
○しんぞ　五一ノ八
同　一二〇ノ一四
同　一四五ノ一〇
○甚藏　一三〇ノ一〇
○仁體　五九ノ一
○新地　一七四ノ五
○心中　六ノ五
○神道者　一〇ノ四
同　一五ノ九
○眞如　三四五ノ四

陰　一三一ノ一〇
○重仁　二一八ノ五
○紙鳶〔シケン〕　二五九ノ一
○試劍石　一〇一ノ八
○重盛　二三三ノ九
○子貢　三三三ノ八
○市紅　四〇一ノ七
○しこなし風　一五一ノ一一
○しこり博奕　五八ノ一
○獅々吼　四〇一ノ五
○猪小屋　七六ノ一三
○獅子の洞入　五八ノ一
○蜆川　一七五ノ八
同　一八一ノ七
○四尺帽子　三九七ノ一三
同　四〇八ノ八
○仕過　四一ノ一一
同　四二ノ三
同　五八ノ一
○時代蒔繪　一四七ノ二
同　二〇一ノ一
○仕出　六二ノ一
同　一四五ノ一二
同　一四六ノ四
同　一五一ノ六
○仕立物屋吟七　一五七ノ七
○しだら　一〇八ノ一
同　一二五ノ七
同　一五八ノ一〇
同　一六二ノ四
○七首和讃　三六ノ一三
○七星壇　一ノ五
○質種　一〇ノ九
同　四一ノ八
○七三郎　一六ノ六
○七郎右衞門　一七ノ一
○しつかへ人　一三三ノ一〇
○靜の子　五九一ノ五
○四塚屋五郎右衞門　八一ノ一二
○四塚屋の東下　八二ノ一二
○實體者　六二ノ一二
○十服つぎ　四一ノ九
○疾病
　濕の瘡　五〇ノ一三
　濕病　二六ノ一二
　同　一四九ノ一二
　腎虚火動　一三〇ノ一三
　大傷寒　三八ノ一四
　早瘡　三九ノ一
○しつぽくもどき　四一一ノ三
○しつぽりと　五一ノ三
○師弟ー亂世の師道　三六一ノ一三
○しで野　一三ノ三
○してもの　一四二ノ八
○志戸の海　三二一ノ一一
○竹刀　五一ノ一一
○品川　四一ノ二
同　一五〇ノ一一
○しなせ　一三七ノ六
○死一倍　八一ノ八
○仕舖　五五ノ二
○仕にせ　一〇八ノ一一
○詩嚢袋　八七ノ二

○作之治　二六一ノ四
○三郎　二八五ノ四
○佐保川　七三ノ五
○三絃　七七ノ六
○三右衛門町　一四三ノ五
○三界　三〇ノ三
○算學　四ノ二
○三箇の津　七七ノ七
○産業　五九ノ一三
○三鈷　二六三ノ三
○殘口　一一九ノ五
○三國一　一五四ノ六
○さんざめかして　二〇九ノ一
○三十棒　一七ノ四
○算術　五ノ一
○山上樣　一四三ノ一一
○山水な醫者　一一五ノ一〇
○三挺がけ　七一ノ一〇
○三條口　七六ノ一
○三度笠　八三ノ一三
○三の浦　八五ノ四
○三ばん　一七四ノ四
○三分筵　七五ノ一三
○三平　五五ノ九
○三枚　八四ノ六
○三枚肩　一六六ノ一
○算用　七ノ一
○三割の口錢　七ノ一
○鮫蒲圑　八〇ノ四
○小夜がらす　二四ノ三
○さらへてしまはねば　七三ノ一〇
○猿澤の池　七六ノ七
○猿の木のぼり　五八ノ八
○障なとり　一七ノ四

シ

○思案酒　一三六ノ三
○仕出〔シイデ〕　一三六ノ一三
○しひぷん　一五三ノ九
○仕入染　一九九ノ六
○鹽　二七ノ八
○鹽尻　七五ノ二
○鹽瀬　三ノ一三
○鹽瀬の巾紗　二〇一ノ三
○鹽なれ衣　一四九ノ一
○鹽政　三八九ノ一
○しがく　一三三ノ八
○しかけ　一四四ノ一三
同　四三ノ六
○仕かけて　二ノ七
同　九三ノ九
○志賀寺　一五七ノ一
○志賀の湖　七三ノ八
○似我蜂　一二〇ノ六
○鹿よぶ笛　六四五ノ二
○信樂茶　一三六ノ六
○時氣を受け　五三ノ一〇
○敷金　一三〇ノ二
同　一四三ノ一四
同　一九七ノ二
○紙魚　三六ノ一
○式三番叟　五八ノ七
○陜〔・ケ〕　一三二ノ一〇

西行法師　二一五ノ三
○西光寺野　五三〇ノ六
○在所　二七ノ四
同　三一ノ一一
同　三六ノ五
同　三八ノ七
同　一二三ノ七
○妻妾
嫉妬せぬ妻　三九五ノ一三
女房のくさ〴〵　一一九ノ九
一月定めて錢壹貫文　一五〇ノ五
一夜百疋　一六八ノ一一
部屋めぐり　一六五ノ一〇
○西照庵　一二ノ七
○宰相の劍　一六ノ一
○さいたおさへた　五〇ノ四
○才太郎　一七五ノ五
○催馬樂　一三ノ一一
○最福寺　二六四ノ二
○在宮の神子　七五ノ二
○堺　二ノ一
同　五五ノ一三
○堺町　六八ノ六
同　一五一ノ九
○堺町の五郎市　六九ノ九
○逆馬　六二ノ三
○逆落し　三〇ノ二
○榊山　八二ノ六
○逆さま竹　三八ノ八
○坂田　七七ノ一〇
○酒壺の君　六二三ノ二
○さがにくき　一四一ノ一
○嵯峨野　九五ノ一四
同　一〇九ノ三
○相模　二三三ノ八
○月代　一三〇ノ一一
○前肩　八三ノ三
○櫻塚　一七五ノ五
同　一七七ノ一四
○櫻戸の中將殿　一二〇ノ九
○提重　九七ノ一
同　九七ノ一一
○雜魚寢　六八ノ二
○小竹筒〔サヽエ〕　九七ノ一
同　一〇〇ノ一〇
○さざんざ　一五四ノ六
○さし合　一二七ノ一四
○棧敷　一〇一ノ二
同　一四七ノ一四
○さしぐち　一二六ノ三
○差添　二〇ノ一三
○さす　三四ノ二
○座禪　三五ノ一二
○沙汰　一〇ノ一〇
同　一二三ノ五
同　六三ノ五
同　七三ノ九
同　一二四ノ九
○さつぱりと　五九ノ三
○產所〔サト〕　二四二ノ六
○佐藤則清　七四ノ五
○眞田山　一八九ノ九
同　一九一ノ二

○見手がしは　三四〇ノ七
○小博奕　二六ノ五
○琥珀の羽織　七ノ一一
○木幡　二〇四ノ一三
○木挽　一五一ノ九
○木挽町　五二ノ八
○媚茶繻子　一一〇ノ二
○古筆　一七ノ一〇
○五筆和上　三四五ノ七
○小姫　一三六ノ一〇
○呉服所　一五一ノ一
○小平六　一〇三ノ四
○古法　一三五ノ一〇
○五寶丹　三〇ノ一一
○駒が林　一〇三ノ二
○こましたら　一四四ノ六
○小町　三四九ノ一〇
○小町形氣　二〇〇ノ二
○こまづけ　一五五ノ一〇
○こま鳥　四一一ノ九
○ごまの灰　八三ノ二
○小間物　五ノ一〇
同　六ノ六
同　七ノ五
同　七三ノ五
○小間物油　七三ノ四
○駒よせ　三ノ一〇
○吼噦〔コンクワイ〕　一〇〇ノ六
○根元本家　五四ノ一〇
○こんたん　一五四ノ一一
同　一五五ノ六
同　一五九ノ七
同　一六〇ノ三
○こんたんでのゑちやへ　三六ノ一一
○蒟蒻色　一六五ノ二
○今春太夫　七二ノ七
○ごみ　二〇九ノ一四
○米市　一五五ノ七
同　一七三ノ一一
○米市場　一七ノ二
○米問屋　一六ノ四
○少婦〔コメロ〕　一七ノ三
○小女郎〔コメロ〕　一八一ノ一二
○小者　四八ノ四
○小家がけ　五八ノ四
○小宿　一四九ノ一四
○御用達　一三三ノ一二
同　一二四ノ七
○御用人　六ノ七
○小よろぎの浦人　三五八ノ四
○御寮樣　一四四ノ四
○御寮人　七三ノ一二
同　二〇一ノ三
○御靈祭　九三ノ七
○瑚璉尼—略傳　六八五ノ一
○五郎政宗一尺八寸　四ノ七
○衣の棚　九四ノ一三

サ

○在家　三六ノ二
○才覺　三三ノ三
同　一三三ノ一一
○西行法師　七四ノ五

には瓦礫にひとし　三三ノ二
逆さまにしてふるうたと
て鼻血の外はしたらぬ　四三ノ八
死れがな目くじろ　一六五ノ三
釋迦でもくはぬ　一六ノ六
借屋かして本家とられ　一二七ノ一
初祖の肉いまだ乾かず　三二一ノ四
しらぎ牛分直　七ノ四
尻まくつて三べん舞ふ　八〇ノ六
白い歯見せず　二五ノ八
すいもあまいも知りぬい
て居る　一四四ノ一一
寸善尺魔　四三ノ六
世間の口へ手をあてゝ　六二ノ三
脊中に腹のさびしさを替
へて　一一ノ三
千金の子は市に死せず　三三ノ二
竪な事横へもせず　二六ノ一一
頼む木蔭に雨もりて　三八ノ五
玉に疵　四九ノ四
町人は算筆　二三ノ一三
田鼠化して鶉となる　一〇一ノ五
天の口壁の耳　一三七ノ四
桃林に冠を紏さず瓜田に
沓を入れず　四四ノ一二
年寄と紙袋は入れにや立
たぬ　五五ノ六
妒婦の養ひがたきも老て
の後其功を知る　二七一ノ七
虎は死して皮を止む　七四ノ六
女房は大黒ばしら　一九ノ八
ぬしは堅かれ柱は弱かれ　六四四ノ三
延びて行く鼻毛　一六ノ六
花は三吉野人は武士　五ノ一三
人かならず虎を害する心
なけれども虎反りて人
を傷る　三〇八ノ一三
人ごとにひとつの癖　三八三ノ一
一つ竈の物喰うて　七一ノ三
人によりて法をとく　一六五ノ一
人の心同じからざるは其
面のごとし　七一ノ三
人は一代名は末代　七四ノ六
淵深ければ魚よくあそび
山長ければ獸よくそだ
つ　三三ノ一三
佛は決定往生　一〇ノ一
末世に殘る名こそ恥かし　五ノ一三
身の内の財は朽る事なし　四四ノ二
ものした物がものしらる
ろ　一九七ノ一
茶火ればなほらぬ　二五ノ三
山城の人は八十宇治　七一ノ二
世の中に無祿の人はない　二六ノ五
夜目遠目　六三ノ一四
○小半合酒「コナガラ」　九四ノ一
○こなし自慢　八二ノ一一
○こなた　六四ノ一一
○小西三十郎　一ノ七
○小西攝津守　一ノ七
○小西行重　三ノ六
○五人扶持　一三〇ノ四

○こちとら 一四九ノ九
○こちのお人 一四九ノ四
○五帖一部 三六ノ一三
○御重寶曙 二二ノ八
○子女郎 一三ノ二
○小柄 六九ノ一
○木辻 七二ノ一
○ごつそり 七六ノ九
○兀頂 一四二ノ七
○兀頂の茶屋 一三ノ三
○小鼓 四四ノ五
○骨肉 八五ノ一〇
○骨法 三二ノ二
○こづらの憎くい 一三五ノ五
○後藤黑子丸 五四ノ六
○後藤流 一三六ノ一
○ことない 五一ノ三
○諺、格言
麻につるゝ蓬 一一ノ二
蜑なれやおのが物からもていさつ 二四一ノ一四
穴へも入りたかるべし 六三ノ六
有馬の湯の談合 四二ノ一
生馬の目を拔く 一三ノ六
石部金吉 一六六ノ七
醫者と干蕪は若い内には賞翫せず 一三五ノ一四
伊勢人のひがごといふ 七一ノ一
一粒が萬倍 一二〇ノ四
一犬吼ゆれば百軒の噂 六八ノ一四
犬の手も人の手 三五ノ一三
煎豆に花咲く 二三七ノ一三
浮世の月滿れば虧くる 一二七ノ五
内兜を見すかした 一六二ノ一二
氏素性は恥しき物 二〇七ノ九
氏なうて玉の輿 一四三ノ一
瓜生の蔓に茄子はならぬ 八四ノ七
敎へて歸る子は知識 三八ノ一三
鬼の女房に鬼神 二六ノ六
お蛇の壓とり 一五一ノ一三
親に似ぬ鬼 二六ノ九
親の恩より義理の恩 一七七ノ九
親の光は七光 六三ノ一
親は稼ぐ子は樂す 三一ノ一
女は氏なうて玉味噌のあぢしらぬ身と成る 一九七ノ八
稼ぐを追ぬく貧乏神 二六ノ四
神は正直の頭にやどり 一〇ノ一
支離な子が可愛い 一九九ノ八
汚う稼いで淸う暮せ 一二〇ノ九
氣でくへ 二〇三ノ八
禽を制するは氣にあり婦を制するは其夫の雄々しきにあり 一七三ノ一
喰うた人魚の靈につかはる 一七七ノ一
孔子さへ倒るゝ戀の山 二九〇ノ九
窪い所へ水も溜らぬ 一〇九ノ六
來る粹よりもこぬ野暮がしにくい 一四四ノ九
庚申の夜に宿る子 六八ノ八
小糠三合 一七七ノ六
崑山の璧もみだれたる世

○高野大師　一〇ノ二
○紅葉五器　一四八ノ八
○高麗茶碗　二一ノ六
○高麗橋　一三ノ四
○合力　一四ノ七
同　四三ノ九
同　七六ノ五
同　一一五ノ四
○蠶飼「コガヒ」　一四〇ノ四
○五岳の眞形五所紋　八五ノ二
○小學文　八七ノ二
○五器　一三五ノ一三
○小吟　一四二ノ一〇
○古今の三鳥三木　七二ノ一〇
○古金襴　一八九ノ一〇
○國府　一四五ノ三
○極樂　一〇ノ二
○極樂世界　七六ノ一三
○極樂參　三八ノ八
○御經廻　三七ノ一〇
○苔衣　九〇ノ五
○こけら鮓　四七ノ八
○ここなりよつても　四三ノ四
○ここり　八二ノ三
○心いき　一五ノ一
○心入　一三ノ一三
同　一三五ノ一二
○心をいり　一三七ノ八
○心をおとしつけて　一二五ノ五
○心おちたる　一七六ノ四
○心おとす　一二六ノ五
○心覺　四ノ七
○心憎し　五三ノ二
○小座敷　一八七ノ二
同　一八六ノ一四
○こざられまい　四九ノ八
○ござる　四九ノ一四
同　六一ノ四
○古市紅　四〇一ノ七
○腰おし　一一五ノ六
○腰繻絆　一六〇ノ一一
○御時分　一一四ノ七
○五尺いよこの手拭　二〇五ノ一一
○五十三次　八二ノ一四
同　八四ノ五
○五種香　五九ノ五
○御相伴　三六ノ四
○御所方　五二ノ三
○御所育　一二五ノ一
○搭屋　二〇ノ一一
○鐺　一〇ノ一一
○巨勢の熊檮　二九五ノ五
○古戰場　六〇一ノ一一
○小染　一三六ノ一
○小太　八一ノ五
○御大家　四ノ一二
○御大身　二ノ一四
○小鯛の難波煮　五〇ノ五
○子種　一二七ノ八
同　一三九ノ一三
○小玉銀　六八ノ九
同　六九ノ一
○兒玉嘉兵衛　二四二ノ一五

○月宮殿 九一ノ九
○けつく 三八八ノ一三
○げに 一四九ノ五
同 一四九ノ一一
同 一六〇ノ一
○見一無體さつきやく 一〇九ノ二
○玄界谷 八一ノ五
○げんこ取の餅 八三ノ一
○兼好 七四ノ一二
○謙信 三三一ノ五
○源氏物語
一法師の評論 五三五ノ八
三箇の傳 七二ノ一〇
○獻上鯛 四三ノ一三
○元帥の劍 一六ノ一
○憲宗 三三五ノ七
○けんたんや 三一ノ一
○けんど 四三ノ九
○建仁寺垣 八〇ノ一〇
○建仁寺町 一五七ノ七
○玄賓 三六ノ九
○見物 四八ノ三
○外面如菩薩 六五ノ六
○假令の信心 三六ノ四
○けはしい 一三九ノ一

コ

○小揚 二七ノ四
○古姉川 四〇一ノ四
○戀衣 四〇ノ三
同 六五ノ一一
○戀知り 六五ノ五
○小いたづら 一四一ノ八
○小うさん 七六ノ三
○聲―そのいろ〳〵 六二〇ノ六
○興義 二五二ノ一
○康熙帝 七七ノ九
○孝經 二五ノ一
○香具商人 八七ノ七
○後見 四四ノ七
○孝行―孝子賢母の話 六六ノ一一
○孔子 一五ノ一
○庚申の夜 六八ノ一
○恒寂 三四九ノ四
○高倘 七三ノ一一
同 七三ノ四
○黄石公 七ノ四
○口錢 七ノ一
同 一四ノ一
同 二〇ノ五
同 一五〇ノ五
○高宗 一三五ノ三
○幸田嘉兵衛 四二ノ一一
○高直 八五ノ一
○講中 三五ノ四
同 三九ノ五
○香包 六九ノ一
同 一二四ノ一
○講頭 一三五ノ五
○高寄親父 一六ノ五
○紅梅 六五三ノ六
○弘法大師 四〇ノ八
○高名頭 四四ノ三

口入　一五〇ノ五
同　一六八ノ一一
同　二〇〇ノ七
同　二〇六ノ一一
○狗賓　一〇一ノ七
○熊谷次郎太夫　一六六ノ六
○熊野参　五五ノ一二
○久美の町　一三〇ノ七
○軍學　二ノ二
同　四ノ四
○軍學咄　二ノ一三
○軍師　三ノ七
○軍書講釋　一七二ノ八
○郡內紬　一六六ノ二
○郡內の大縞袷　二七ノ五
○くめい　一二四ノ四
○雲助　五五ノ二
○雲介　五五ノ一四
○具物　二四八ノ九
○鞍馬山　一〇一ノ七
○繰引　三ノ一一
○遊廓〔クルワ〕　八七ノ九
○廓中〔クルワ〕　九〇ノ一三
○ぐれて　一五七ノ二
○黒小袖　一五九ノ一一
○黒繻子の中幅帶　一五〇ノ一
○黒紬の小豆色　一一五ノ一〇
○黒紬の衿まき　一四五ノ五
○くろとがる油　八一ノ六
○黒羽　四一ノ七
○黒羽織　一五一ノ一一
○くろまる　一七七ノ三
○くろめて　一七八ノ二
○黒門　一九六ノ七
○桑名の渡　八三ノ一
○桑名屋の德藏　一〇八ノ四

ケ

○蹴上の水にぬれた同士　一二五ノ一
○藝氣　一三七ノ九
○藝子　六五ノ七
同　六五ノ一二
同　八一ノ六
同　一九二ノ八
同　一九六ノ九
○藝者　三九ノ四
○藝者根性　四三ノ一四
○傾城　一一ノ六
同　八四ノ一一
同　二〇〇ノ一
○傾城狂　一一五ノ二
○外科　六三ノ一四
同　一七八ノ一二
○現形し給ふ　一二五ノ八
○下作　三八ノ三
○下作者　二〇五ノ一三
○袈裟屋墨五郎　九四ノ一四
○芥子　三〇九ノ一二
○けしからぬ　一七ノ八
同　三八ノ一
同　九六ノ三
○下世話　六八ノ八
○けちぶとい　一一一ノ九

○久七殿　一四六ノ一二
○經が岩屋　五七六ノ五
○京學　一三五ノ九
○行基　三〇ノ九
○經供養　一八一ノ四
○狂言　三八三ノ八
○狂言師　四二ノ一一
○鏡臺　六三ノ三
○京女房　五八ノ一一
○喜代三　八二ノ六
○清麿　三四六ノ一
○淨見原の天皇　三四七ノ二
○清盛　二三三ノ五
○清原の俊蔭　七四ノ一四
○切りかけ　一三ノ八
○切紙傳授　一二四ノ二
○きりはたり　一三六ノ九
○きりまして　四〇二ノ一
○切もり　八四ノ一二
○斷れ　一六三ノ二
○切戸の機　一二八ノ四
○季日　一〇九ノ五
○極め　二三ノ九
○きはめて　二〇ノ四

ク

○くひため　二ノ一二
○空海　三三七ノ一〇
○苦界させ　一一ノ五
○苦界　一四ノ三
同　八五ノ八
同　一〇九ノ一三
同　一七六ノ九
同　一八一ノ八
○草雙紙　一七三ノ三
○草中　三九ノ五
○櫛笥　六五ノ三
○葛だまり　一三六ノ三
○楠の亡魂　一四ノ五
○葛の葉　一九五ノ八
○葛の葉の道行　一〇一ノ五
○藥子　五六ノ六
○藥搭　九一ノ七
○口說　八四ノ一三
○久世戸の文珠　一三六ノ二
○くだの祢　一八八ノ四
○口合　四三ノ一
○口入商賣　一四ノ六
○口が重たう　五ノ一〇
○口がため　一〇七ノ七
○口車　一〇ノ二
同　一〇九ノ一
同　一四三ノ五
○口だんばく　一三六ノ六
○口次　七ノ一
○口の文　八七ノ一五
○口松　五八ノ一
○御口ひで〔クチモラヒデ〕　二四六ノ一三
○亡八〔クツワ〕　八五ノ一
○口說いて　八七ノ一〇
○工藤左衛門　二〇ノ一三
○國津罪　二九五ノ一四
○口入〔クニフ〕　一一ノ四

貴樣　六〇ノ五
同　一〇〇ノ一〇
同　一二五ノ一
同　一七九ノ四
○岸屋榮五郎　一七七ノ六
○岸屋の藤野　一七五ノ八
○鬼笑　八六ノ八
○疵持足　一五六ノ一一
○著そけ　五五ノ一〇
○北側　八〇ノ二
同　八一ノ一一
○北濱　一六ノ四
○吉彌結　六三ノ一三
○氣中　一五三ノ二
○木津川　一二四ノ一四
○ぎつちり　六五ノ八
○きつと　二〇ノ一
同　八二ノ九
同　一五三ノ一二
○狐　三五九ノ一〇
○狐を釣る　九五ノ一〇
○黄緞子　八五ノ一二
○砧の水指　二一ノ五
○紀の朝臣貫之　三五一ノ一
○城崎のいで湯（但馬）　五二三ノ二
同　五三三ノ七
○魏の明帝　一七ノ一〇
○擬筆士　一二五ノ一三
○吉備津の御釜祓　二七三ノ七
○氣伏し　一九五ノ七
○貴布れ　一五〇ノ九
○木部屋二階　四一ノ五
○きまつて　一五二ノ四
○君　二〇〇ノ一
○歸命無量　三六ノ一一
○きんくるべいこの　九〇ノ一
○金作　一四三ノ一
○金絲の房　六三ノ一四
○錦繡萬花　一九六ノ一三
○きんしやう　六三ノ一三
○金錢
傳くに集る　三九ノ七
寶の最　三二六ノ六
皆金づく　一七三ノ四
○錦袋圓　五四ノ六
○金太郎　一三七ノ一
○金糖もち　一四七ノ三
○金百疋相應　二三ノ四
○金襴の大廣袖　三九ノ一〇
○金鯉　二五七ノ一
○肝いり　二〇五ノ九
同　三九七ノ一一
○肝入　一一ノ一四
同　一四二ノ七
○氣もせ　一四一ノ一〇
○逆緣　六五ノ九
○脚色　七七ノ九
○脚布　一四一ノ四
○來山伏の豐心丹　四三ノ五
○ぎやまんの入齒　二〇二ノ九
○伽羅の油　一〇九ノ九
○給銀　二七ノ一〇
同　三〇ノ五

○感狀　一ノ四
○菅相公の論　三五六ノ八
○眼痴　一二ノ一三
○管仲　三二三ノ七
○水丁〔クワンヂヤウ〕　三二二ノ八
○勘定方　四ノ一二
○勘定場　九四ノ五
○神奴　二八五ノ八
○汗吐下梅毒　一三六ノ一
○勘當　一〇九ノ一二
○寒取　二六ノ三
○神野親王　三三五ノ四
○關白秀次公　二六九ノ一三
○神箸　一〇四ノ一一
○客坊もち　一五九ノ八
○丸藥入　二三ノ九
○眼力　二七ノ一
○勘六　四ノ一一
○蒲生氏郷　三二一ノ九
○鴨別　二七二ノ九
○茅の宮　二三四ノ一〇
○唐織の尻からげ　八〇ノ三
○機關〔カラクリ〕　二五ノ九
○唐綱　二七ノ二
○輕口　九三ノ五
○樗蒲〔カルタ〕なぶり　一四ノ一一
○輕業　四七ノ六
同　五八ノ三
○枯木の浦　五四九ノ二
○川獺　九三ノ五
同　一〇一ノ五
○河伯　二五七ノ一三
○かわき　九〇ノ一一
○川口屋磯右衛門　九三ノ三
○川竹　九一ノ六
同　一八六ノ一三
○皮卷の竹刀　五一ノ一四
○土器酒　一五六ノ九

キ

○競　五二ノ九
○競組　四一ノ九
○競伊達衆　四〇ノ七
○妓王寺　一二〇ノ一
○祇園南禪寺　一三六ノ三
○祇園町　六八ノ一
同　一〇〇ノ一三
○木折〔キヲリ〕　一三六ノ一四
○木折の異見　一六五ノ七
○木折〔キヲレ〕　一八八ノ三
○著替　七ノ一一
同　二七ノ一一
同　三八ノ二
○其角　四八ノ六
○聞き耳潰して　一四ノ一〇
○桔梗　五四ノ三
○桔梗屋の花野太夫　一〇九ノ一四
○菊亭　一七ノ七
○菊榮島　一九一ノ六
○機嫌上戸　一四七ノ八
○龍皇上の人　一七八ノ八
○貴樣　二三ノ三
同　八九ノ二

○かたげ賣　五ノ一〇
同　一七九ノ五
○かたし　一二六ノ一
○かた藏　一四五ノ五
○片便　一八一ノ五
○帷子　三五ノ一
○堅門徒　三六ノ七
○光棍〔カタリ〕　一〇七ノ一四
同　一三五ノ一四
同　一六二ノ六
○歩荷〔カチニ〕　二七ノ一一
○加持人　一〇四ノ五
同　一〇五ノ一
○家中　六ノ一四
○渇々　五四ノ一四
○勝四郎　二四一ノ一〇
○河童　八三ノ一三
○客板〔カツパン〕　一七ノ四
○桂の錆鮎　二一〇ノ一一
○桂の宮の相撲會　一八一ノ五
○かてつければ　一一ノ六
○川東　九三ノ八
○角屋敷　二ノ一
○かなゆづすり　一九七ノ三
○鐵輪のともし　一五〇ノ九
○銀屎息子　一〇九ノ九
○銀口入　六一ノ三
○鐵漿付け　一二ノ一三
○銀箱　六八ノ七
○金役人　四ノ一三
○娥眉少女　八五ノ一四
○歌舞妓　三八五ノ八
同　四〇九ノ一四
○かぶき仙人　四一三ノ九
○歌舞伎ものがたり　四〇一ノ四
○我物不入　八一ノ一二
同　八三ノ一三
○禿　八五ノ一八
○鎌倉の大將殿　五八三ノ八
同　五九一ノ三
○かます袖　四一ノ九
○鎌婆　二六ノ七
○神おろし　八三ノ一二
○上方　一五二ノ六
○上方野郎　四〇ノ九
○紙蚊帳　一二六ノ八
○上京風　一三五ノ一一
○髮切後家　一六二ノ九
○紙子仕立　一一〇ノ二
○上樣　一三八ノ二
○神たゝき　一五ノ六
○神なぶり　一五ノ九
○髮生藥　一九三ノ一一
○紙花　一五一ノ四
○上宮津　一三七ノ三
○觀音參　四七ノ九
○勸學寮の錦袋圓　五四ノ六
○閑居―愛憎の二つ　六五一ノ三
○神崎　二七ノ一二
○神主香央造酒　二七二ノ七
○韓信　一六ノ二
○勸進相撲　二六ノ一三
○勸進能　一四七ノ一四
○癇症　三八三ノ二

○介副加　一九六ノ一
○かい鄰　一五一ノ一四
○懐義和尚　一三五ノ三
○かいふり　一〇三ノ九
○楓屋松右衛門　二一〇ノ四
○替名　八六ノ五
○替紋　一三ノ一
○かへり討の繁野　一六六ノ五
○顔見世　八〇ノ一
同　一七四ノ四
○抱　一八九ノ一〇
○加賀笠　一四七ノ二
○嗚衆　二六ノ六
○嗚達　八四ノ二
○加賀の纁絆　六二ノ四
○鏡立　六三ノ一
○かゝり　一五七ノ一〇
○かゝり子　二六ノ八
○柹の袴の肩衣　五八ノ五
○隱藝　三九ノ八
○學者貧乏　三九〇ノ三
○郗子廉　五九八ノ三
○學道　六〇ノ六
○角内　一一九ノ四
○學文　八四ノ五
○樂屋　八二ノ五
○かくや姫　七四ノ二
○赫夜姫　一九七ノ三
○がくや見舞　八〇ノ一
○隱神　二六八ノ五
○かけ錢倒れ　一四ノ九
○かけても　二九四ノ一
○かけ流し　一四六ノ一
○駈拔　二七ノ一
○掛屋　一三三ノ三
○掛屋敷　一一六ノ一
○かごしま下駄　一四九ノ一
同　四〇九ノ三
○かごや町　一四二ノ一
○冠付〔カサヅケ〕　一〇四ノ一一
○重草履　一三ノ一
同　一四二ノ五
○笠の臺　一二四ノ一
○貸座敷　一五一ノ五
○嘉七　八一ノ五
○花實の一體　一二一ノ二
○花車　六四ノ二
同　八五ノ一四
○過書文　三五八ノ一
同　三六六ノ二
○繪手〔カシハデ〕　三五六ノ三
同　三五八ノ八
○柏原　三六ノ七
○春日様　七二ノ二
○數とり　一三〇ノ七
○糟谷宇左衛門　三五ノ六
○猷夕　八六ノ五
○家相　三九一ノ六
○かた息　一〇六ノ一四
○片板の松　一三八ノ八
○肩がすぼる　一四ノ四
○敵討御未刻〔オトッツ〕の太鼓　一八八ノ七
○肩衣　三六ノ九

○女の外科　六三ノ一四
○陰陽師　二七九ノ四
○お目利　二三ノ三
同　五二ノ五
○お目見　四四ノ四
同　二四ノ二
○思ひばかがゆかなんだ　三四ノ六
○思入　三九ノ一〇
同　三九ノ一三
同　六〇ノ九
同　一〇八ノ二
同　二三一ノ四
同　一七九ノ四
同　一八〇ノ三
同　一九九ノ一
○思ひざし　一五七ノ四
同　一五八ノ一三
○思ふ壷　一一ノ一〇
○表家　一六〇ノ六
○思はく　五五ノ一〇
同　七四ノ二
同　一四一ノ八
○親方　一三ノ一一
同　五五ノ一三
同　五八ノ一
同　六八ノ七
同　二一一ノ一三
同　一七七ノ二
同　一八一ノ九
同　二〇七ノ八
○親里　六〇ノ一一
○親判　二〇七ノ七
○親分　一五二ノ九
同　一五三ノ八
○女形〔オヤマ〕　一八〇ノ四
同　八〇ノ一四
同　一四四ノ九
同　一六五ノ八
○おゆふ　一〇ノ六
○御湯神樂　一九五ノ一〇
○妖言〔オヨヅレゴト〕　三一二ノ五
○おらん　八五ノ八
○紅毛〔オランダ〕　五九ノ四
○阿蘭陀おさへ　四一三ノ一一
○おらんだ流の外科　八五ノ六
○おりさ　八〇ノ一一
○折障子　一五七ノ七
○織殿　一三六ノ九
○織物　一五二ノ五
○おりん　一三ノ九
○おれん様　一四六ノ一三
○おろ〱と　一三三ノ一四
○蛇〔チロチ〕　三一三ノ一三
○蛇の塚　三一〇ノ一一
○御脇掛　三六ノ八

カ、クワ

○快庵禪師　三二ノ二
○外淫　一五〇ノ七
○買がかり　一〇ノ一三
○搔暮　二〇三ノ一
○懷紙　一二四ノ一三
○かいしよげに　一八九ノ一〇

○おすみ　一五一ノ六
○お淸書屋　一〇四ノ一一
○お園　一二六ノ四
○御大家　二三ノ五
同　四四ノ三
○御逮夜　三七ノ六
○お辰稲荷　九七ノ七
○おたれ　一九五ノ四
○小田原外郎　五四ノ六
○御知行　七ノ七
○おち目　一七六ノ九
○お勤　三七ノ四
○お常　一四三ノ一
○お露　一四二ノ一〇
○お妾〔テカ〕　七五ノ一
○おてき　一三三ノ二
○音右衛門　八二ノ六
○御堂様　三九ノ八
○お伽　一二一ノ一
○男なみがく　一八六ノ一
○男妾　一三四ノ一一
○落し佩　四一ノ七
○落咄　九三ノ四
○落しつけて　一八一ノ一四
○おどもりの濕の瘡　五〇ノ一三
○お内儀　二〇一ノ八
○お流　一四ノ八
○鬼　三一三ノ三
同　三九三ノ三
○鬼鹿毛　三九ノ一三
○鬼面　二七ノ二
○鬼の鐘　三七六ノ一一
○鬼の喜介　四一ノ二
○鬼日　八一ノ九
○鬼若の辨蔵　六八ノ三
○お猫様　一四〇ノ三
○尾上　二五ノ一〇
○小野のお通　八四ノ一〇
○小野小町　一一ノ一四
○お橋　一九七ノ三
○お初徳兵衛　六ノ二
○お初徳兵衛の道行　四四ノ二
○お花牛七　一三七ノ一四
○御祓様　三六ノ七
○お春　一三〇ノ五
○御引合　四三ノ七
○御髭の摩助　三八八ノ四
○帯箱　一四八ノ四
○御扶持人　四四ノ四
○御文様　三六ノ一三
○お部屋　一三四ノ一〇
○おぼこ　八四ノ一三
同　一四六ノ八
○御賄方　一二四ノ七
○おませう　一九一ノ五
○御眞向様　三六ノ八
○音樂
絲竹のあそび　五九四ノ五
新曲　三八七ノ一三
太平の調子　七七ノ六
○温泉宿―浴客のいろ〱　五三ノ一一
○音頭　四五ノ一一
○女楠　六ノ二

○逢坂山　三七六ノ一〇
○大鷦鷯の王　二一九ノ二
○大芝居　四八ノ一
○王照君　八七ノ六
○大蕎麥切　四八ノ二
○大津馬の追がらし　五八ノ八
○大津繪　一二六ノ四
○大津繪襖　五四ノ一一
○大津脚半　八二ノ一三
○大鼓　四四ノ五
○大津八丁　五四ノ一〇
○大津八丁札の辻　六一ノ一〇
○大津屋四茂八　六一ノ一四
○大年　一〇八ノ四
○大伴の皇子　三四四ノ七
黄檗　一四三ノ七
○黄檗山　九一ノ五
○大三十日　一三七ノ一三
○大湊　四八ノ一
同　三七八ノ一三
○近江八景　四〇ノ八
○青梅縞　一四二ノ一
○大森　一四ノ五
○大宅　二九五ノ一四
○大宅の竹助　二八五ノ一
○大夜著　一三六ノ六
○大寄　六八ノ一
○お影參　一一九ノ三
○御蔭まゐり　三八五ノ一三
○岡左内　一六六ノ九
同　三二一ノ九
○おかち　一七八ノ九
○御勝手　九四ノ一一
○雪花菜〔オカベノカラ〕　一〇ノ一〇
○岡部六之介　一七一ノ三
○岡目　六一ノ一三
同　一七四ノ八
○お瓶　二〇四ノ一三
○置頭巾　一六ノ九
○小櫛　一二四ノ一
○臆説　一三五ノ一〇
○お國御前　二一〇ノ三
○お國樣　一二〇ノ三
同　一九九ノ二
○奥の細道　四〇〇ノ六
○御藏米　一ノ四
○お幸夫人　八五ノ一
○お琴　一九七ノ一一
○保正〔チサ〕　二九二ノ一三
○押へた　七五ノ一四
○おさかべ　二七ノ九
○小佐川　七七ノ一〇
○御棧敷　四四ノ六
○納　一三一ノ六
○御七里仕立　八三ノ一四
○おしで　一〇ノ八
○小篠　五七四ノ一〇
○出女〔オジャレ〕　五五ノ九
○御宗旨　三七ノ六
○おすが　一四五ノ四
○お好樣　五〇ノ一三
○おすそわけ　一四七ノ二
○おすゝめ　三六ノ一四

○浦島太郎　一三七／一四
○浦之助　二五／一〇
○盂蘭盆　九三／六
○盂蘭盆會　一六〇／八
○瓜生　八〇／八
○漆間〔ウルマ〕の翁　二四九／一四
○うはがしこく　一二五／九
○うはもり　一二五／三
同　一九七／二

エ、ヱ

○叡山　四七／四
○永德の三幅對　二一／五
○衞夫人　八四／九
○疫　二七六／三
○繪師　一一五／一〇
○惠心僧都　二〇三／六
○蝦夷錦　二〇二／三
○越中ふんどし　一六五／三
○越中屋善次郎　一〇五／一四
○江戸　四三／一三
○江戸合羽の煙草入　一六／八
○江戸塗　四〇／二
○江戸役者　八〇／二
○戎島　五／五
○海老藏　二〇／八
同　八〇／一〇
○圓位（西行參照）　二一五／二
○艷道通鑑　一一九／五
○役の優婆塞　五六八／三
○厭符　二七九／四
○厭離庵　六七六／九
○延朗法師　二六四／二
○ええう　一四六／五
○襟數　八〇／四

オ、ヲ

○おいぐろしく　一四一／七
○お石　一四二／一〇
○老曾の杜　三五八／一二
○お糸　一五七／七
○追剝ぎ原　六一／四
○お居間　六三／三
○老病　一三〇／一〇
○お梅　一四二／一〇
○大井河　八三／九
○大堰川　一〇九／七
○大江山　五四九／一
○相可　二六一／三
○大叶　四八／一
○大瓶谷　六〇／一〇
○王羲之　八四／九
○扇の一手　七三／七
同　一六六／一
○扇屋　一四四／五
○大口の眞神　五四一／二
○大口咄　一四／一五
○大黑の大黑樣　三四／六
○王元寶　三三三／四
○大小閣物　四八／一
○黃金佛　八一／一三
○逢坂の關路　一二六／三
○大阪の長町　九五／一

ウ

○外郎〔ウキラウ〕　五四ノ六
○上臈〔ウヘワラハ〕　九三ノ一
○魚住の泊　三五五ノ一一
○鵜飼屋　七一ノ八
○妓女〔ウカレメ〕　二七四ノ一四
○浮名の立つ　一五ノ二
○浮枕　一四六ノ五
○浮世之介　二一九ノ四
○浮世小路　一四六ノ九
○鶯の谷渡　五八ノ八
○土龍〔ウゴロモチ〕　三一ノ一一
○牛市　一七八ノ一
○牛若丸　七七ノ二
同　一〇一ノ七
○薄雪風　八七ノ一一
○迂作〔ウソ〕　七二ノ四
同　九三ノ五
○嘘の皮　四七ノ二
同　一〇一ノ一〇
○うそひめ　四一一ノ一三
○謠屋　二五ノ八
○うだしうなる　八五ノ三
○歌比丘　二〇八ノ二
○歌枕修行　七四ノ五
○内入　九四ノ四
○うぢ／＼とした　二一五ノ六
○宇治江　六三ノ一一
○内がた　一四九ノ七
○打ちかたげて　一二四ノ三
○内がよひ　一四四ノ一〇
○うち切　一四二ノ四
○内藏　三ノ一一
○打込んで　一三〇ノ一三
○宇治　一四三ノ七
○兎道の王　二一九ノ二
○宇治橋　一五〇ノ九
○うち風俗　一二ノ八
○打身藥　五四ノ一三
同　六〇ノ七
○宇宙—劇場の譬　七七ノ八
○うつし　一〇四ノ五
○訟ぶん　一六一ノ六
○現をぬかし　九六ノ三
○うつの山　四一ノ四
○靱　一四四ノ一〇
○うつぼ物語　七五ノ一
○有德なる　一九七ノ一〇
○有德人　九四ノ七
○うどんげ　一三〇ノ五
○宇野三平　一三五ノ一〇
○姥　三四ノ一〇
○うばら　四〇五ノ四
○菟原の里　二七ノ一四
○うまひ　二五ノ一
○馬の沓　七ノ一三
○馬若衆　六九ノ八
○梅津の經　六七八ノ六
○梅の御符　一二四ノ一
○梅の宮　三四八ノ一三
○梅若の塚じろしの柳　四八ノ一〇
○裏打帶　一四二ノ一

いつそ　一〇九ノ一三
同　一五二ノ九
○井筒屋　六四ノ一
○逸風　四〇一ノ七
○一服盛て　八二ノ四
○一鳳　八一ノ一四
○一本網　五八ノ四
○いつまで草　一三九ノ六
○知泉式部　一一ノ一四
○出雲沖　一三一ノ一〇
○出雲の廣成　三三六ノ七
○絲くり女　一三六ノ一〇
○いとしく　九〇ノ一二
○糸縞の薄綿　一五〇ノ一
○稲おほせ鳥　七五ノ一二
○東南〔イナサ〕　一三一ノ一〇
○居なし　六一ノ一二
○稲田姫　一〇ノ八
○因幡鴉　七一ノ一
○印南野　二七四ノ一三
○いなり喰　一〇〇ノ一三
○稲荷のおさがり　三八六ノ三
○犬追物　九六ノ六
○犬堂　一二八ノ八
○いなうやれの畜生　九六ノ一
○命毛　八七ノ一三
○茨木屋　八五ノ五
○いばらじ　四〇七ノ七
○居びたれ遊　一〇九ノ一〇
○衣服―色の流行　三八七ノ六
○いぶり者　一〇一ノ一
○伊兵衛　七二ノ一三
○今小式部　一三六ノ一三
○今七　八二ノ五
○今團十郎　八二ノ八
○今宮の心中　一七三ノ一三
○伊萬里新左衛門　二〇八ノ一三
○印可　五二ノ八
○韻鏡　八六ノ一一
○因果經　三四ノ一三
○隱者の攻撃　四一一ノ六
○印譜の繡帶　八五ノ一三
○忌部の濱成　三三七ノ一一
○印籠　六九ノ一
○入家　一七九ノ八
○入江屋甚太夫　一三〇ノ七
○入米　三〇ノ八
○入まいのわるい　六四ノ一三
○いりわけ　一三九ノ四
○色遊　六四ノ六
○色稼　一四三ノ四
○色酒　一三六ノ六
同　一五一ノ一〇
○色里　一八八ノ九
○色柄にぎりて　一四五ノ一一
○色なほし　一九六ノ一二
○小豆の煮飯〔イロノオコハ〕　一九六ノ一〇
○色目　七四ノ七
○色屋　二〇五ノ八
○入端〔イレハナ〕　四九ノ六
○入擲　四〇ノ七
○岩井風呂の小袖　一九四ノ一
○岩瀧村　一三六ノ一三

○池田山　一七五ノ九
○意見封事十二條　三五四ノ一四
○生駒新八　四四ノ七
○生駒山　四〇四ノ五
○伊左衞門　七一ノ九
○いさご山　一〇三ノ八
○井澤庄太夫　二七二ノ二
○石臼嗚　二六ノ六
○石垣　一三六ノ六
○石河五郎市　六八ノ四
○石川松庵　四四ノ四
○石に根繼ぎなる　一六八ノ一
○石屋　一四五ノ五
○醫者
醫術の書　三九一ノ一三
十兩に二人扶持　一七八ノ一二
出入醫者　一四七ノ九
流行る醫者　三八六ノ一一
藥料の官　五四ノ三
○石山　六一ノ一三
○伊勢音頭　一五一ノ一三
○伊勢講　一五ノ六
同　八〇ノ六
○石の上古太夫　一〇ノ四
○磯貝　二七四ノ二
○板敷山　三八ノ六
○いたづら節　三一ノ一三
○徒者　六三ノ七
○韋誕　一七ノ二
○いためつけて　一三四ノ四
○板元　四二ノ一
○板もとの喜八　四一〇ノ一
○いたり仕出　一三五ノ一一
○市宇賀の伽羅煉　六三ノ一三
○一圓　五〇ノ八
同　一一ノ五
○一夏〔イチゲ〕　三一ノ三
○一膳三文　三六ノ五
○一番手　一五一ノ二
○一番槍　四七ノ三
○いちびりたる　三八四ノ五
○一歩二十切　六九ノ二
○一分立たず　一〇七ノ三
○一分たゝぬ　一五三ノ四
○一分のすたる　一五五ノ一四
○一分はたつ　一五九ノ五
○一僕　一ノ二
○一まい　一〇七ノ一三
○一文餅　一三九ノ八
○一來法師　四七ノ六
○一力　六八ノ一
同　一〇〇ノ一三
○いぢりたて　二六ノ八
○一粒金丹　八四ノ一三
○一騎討　五ノ八
○一休の自畫賛　二一五ノ一〇
○伊豆藏　一四八ノ二
○一向一心　四〇ノ五
○泉五のお客　一二ノ四
○一心寺　六八二ノ一四
○一寸八歩の念じ佛　二ノ四
○いつそ　四三ノ二
同　五〇ノ二

○甘茶育　一六ノ六
○天の橋立　一二八ノ一〇
同　五四七ノ一〇
○阿彌陀池　五八ノ一〇
○阿彌陀如來　一五三ノ九
○あんだら　五ノ六
同　一四ノ五
同　二五ノ七
○あんにや　四〇一ノ一二
○按摩とり　八五ノ八
同　一三二ノ一二
同　一四二ノ一
○雨
四季の趣　五五六ノ一三
樂むと恨むと　五六一ノ一
○天の大國高日子の天皇　三三五ノ二
○天の眞井　五四八ノ六
○あや　八一ノ二
○あらひ金　一四二ノ五
○荒井の里　二七五ノ九
○荒事　三九ノ九
○荒こなし　一〇六ノ一四
○嵐山　一〇九ノ三
○あられ酒　七二ノ六
○あられぬ　五〇ノ五
○蟻の火ふき　六三一ノ八
○ありべかゝり　一四六ノ七
○有やう　七ノ二
○有狀　一一五ノ一
○粟賀　五三二ノ六
○粟田口　一二五ノ一
○あはづの森　一〇八ノ一二

イ、井

○居あひ抜　一〇八ノ二
○いひごと　七一ノ一三
○飯蛸　一四一ノ五
○家島與左衛門　四一ノ一三
○家の接木　一二九ノ八
○伊右衛門　二〇四ノ一一
○庵に木瓜　二〇ノ七
○いかい　一三二ノ一〇
同　一三五ノ一五
同　一三九ノ九
同　一四九ノ二
同　一四九ノ七
○伊賀の成仲の娘　七四ノ一三
○いがみ　一六一ノ九
○いがむ　三四ノ一〇
○生馬の十兵衛　一一ノ四
○いき過　五二ノ六
○いき過者　一六ノ七
同　一九九ノ四
同　二〇五ノ一三
○窮鬼〔イキスダマ〕　二七六ノ二
○息勢はつて　一〇八ノ二
○生類くはさるゝ　一五ノ一三
○いきはり　一四六ノ一〇
○意氣張　一五〇ノ一一
○いきりかゝつて　一九五ノ八
○生田河　一二〇ノ一
○生田の森　一〇二ノ八
○幾野屋藤左衛門　一三五ノ五

○淺草の觀音 一五二ノ三
○朝倉一東 一七二ノ九
○麻衣に青衿 二五一ノ二
○朝茶 一七ノ五
○淺づけ 一三五ノ四
○朝妻船 二五七ノ九
○朝日山 三四〇ノ一
○朝脈 二〇一ノ一
○朝迎 一八一ノ一〇
○足輕奉公人 一三二ノ二
○足代〔アシシロ〕 一二四ノ四
同 一四二ノ一
同 一七五ノ八
○足揃 一八一ノ四
○足一きざみあがりの宮 六四三ノ一四
○足疸の黑燒 三八ノ三
○蘆屋川 五二四ノ五
○蘆屋道滿 一〇一ノ三
○蘆屋の里 二七ノ一三
○あしらひ 八一ノ一
○遊〔アソ〕します 八六ノ二
○妓女〔アソビモノ〕 二七四ノ六
○愛宕火 一七五ノ九
○あだ口 一二八ノ一
○仇酒 三一ノ一
○あだしが原の道の霜 三五ノ一
○あだて 四二ノ四
同 一七五ノ一一
○あたふた 一四ノ一一
○仇惚 一五七ノ三
○頭ごなし 八三ノ一〇
○頭に血の多き 一〇五ノ一一
○あだ夢 三三六ノ四
○あぢな 一五一ノ一三
同 二〇六ノ一四
○あつかひ代 六三ノ四
○厚びたひ 一三〇ノ一一
○あて 一二ノ一二
○あてがひ 四一ノ一四
○あてずゐ 一四三ノ三
○あての槌 一二〇ノ五
○跡方 八三ノ四
○あなた 三七ノ一
同 三七ノ一三
同 三八ノ一四
同 一〇〇ノ一一
同 一〇五ノ二
同 一〇五ノ五
同 一二四ノ一三
○姉が小路 一〇九ノ八
○あのふものふ 一九四ノ二
○あばずれ 一二ノ九
○あぶな物 一二三ノ四
○油扇 二〇三ノ一三
○油ぎりたる 一三九ノ四
○油屋の紋 五八ノ一四
○安倍晴明 九六ノ一〇
○安部の弓麿 二八五ノ八
○尼が崎 二七ノ一三
○あまくく 七一ノ五
○甘口 二五ノ六
同 一〇六ノ一
同 一三一ノ五

上田秋成集索引

（語句の排列は凡て發音に從ひ其假名遣に拘泥せず）

ア

○相生　二七ノ四
○相生浦之助　二五ノ一〇
○あゐがしみついて　五八ノ二
○愛染樣　二六ノ二
○挨拶　五一ノ四
同　八〇ノ一二
同　八三ノ一四
同　九七ノ六
同　一二四ノ四
同　一三三ノ一四
同　一三四ノ一〇
同　一四六ノ一三
同　一五一ノ一四
○相借家　七五ノ一三
○相賊〔アヒズリ〕　一六二ノ七
○哀莊王　三三五ノ七
○相對にて　一六八ノ一一
○相床　一三八ノ一三
○紺染〔アヲゾメ〕の巾　三一九ノ八
○青道心　七六ノ一〇
○青頭巾　三二一ノ二
○青菜勘兵衛　一九六ノ八
○青葉半之介　一九五ノ四
○赤木の柄　二〇ノ一三
○明石がた　三〇ノ二
○縣の眞女兒　二八七ノ一〇
○あかゐけのせぬ　七七ノ三
○あがり口　八四ノ六
○商形氣　二一六ノ一
○秋葉御夢想の藥　八五ノ三
○惡右衛門　一〇一ノ四
○惡ぎやく塚　二七一ノ五
○惡性　九〇ノ一三
○惡所狂　一七四ノ五
○あくろめ　二七ノ七
○揚ぢや　一五ノ一
○曙の茶器　二三ノ六
○揚屋　八五ノ一四
同　一四五ノ一二
○揚屋入　八七ノ五
○網子〔アゴ〕　二九一ノ一
○あこぎ　一四五ノ一
○淺井藤八　一六九ノ一二
○朝歸　九四ノ四
○淺黄印金　二一ノ五
○淺黄印金の夏帶　三〇三ノ四
○淺黄繻子　八五ノ一三
○淺草　四七ノ九

上田秋成集 終

僉間、略綴數語、郵致諸昇道師。不知吾之所蘊、能中翁意否。

文化紀元甲子仲冬之吉

江戸大田覃書於瓊浦客舍

後序

蓋吾見世善和歌者矣。未聞善國文者。凡國文之難非啻今也。自古而然。若夫古今集序之騈儷也、三鑑之典實也、勢語之簡潔也、源氏之繁富也、可謂金聲而玉振之也者矣。嘗讀扶桑拾葉集、

皇朝文藻炳焉可觀。而至於中葉以下、則意達而已矣。唯惺窩長嘯二老、以脩辭爲文。所謂豪傑之士者。然藤偏於古、而聱牙難讀。豐偏於漢、而餖飣可厭。蓋國文之難不其然乎。辛酉祇役浪華、得見餘齋翁、邂逅相遇、頗適談劇。翁手書歌若文數篇見贈。吉光片羽、可以爲儀。意在筆先、如不覺其難者。然甲子有崎陽之命。倉皇上道、道過浪華再見翁。翁年七十、禁絕筆硯、平生所著藏之香火院。有昇道師者、與翁善。固請上木。吾聞之喜而不寢。到崎視事、簿書堆案。餘冬

いつの暇にか、かゝるはかな言して打ちおき給へりしを、物の中にさぐり出でたる、やり棄てんは、忘れんとする一つの心なり。しかずとも豈わすれんやは。兎まれかうまれ、老いくだち、活くべきにあらぬ命には、外目やさしくとも、露分衣とともに書い清めて、親しみあつき御寺にをさめ奉りぬ。本九條の農家の女、いときなき時に、植山の某に養なはれ、父母にしたがひて、難波にうつり來たる。年二十一、我にかしづき、去年の冬、五十八にして世を逝き給ひぬ。常に多病のゆゑに、齡五十一と云ふ年、我母、おのが母をも見つぎはてゝ、髪をなぎ、名をも改む。文よみ手習ふわざは、はか〴〵しからざりしかば、人に見すまじくせしに、多くは止めも置ずなん侍る。

いたいけしたる—愛らしき

照る日にも云々—涙の滂沱たるをいふ

たいけしたる、商もののいみじく造りたてたるを見ては、是得させたらんにはと、囁きつるを、とくよりしか思ひつれ。今は物も見じ。色香とて人のめではやすは。我爲の鬼のすだくにぞ有りけるとて、やどりいそがせ給ふ御心の、いとほしさ言はんかたなく、御うしろみする身も、ともに涙をのみそへまゐらす、いといふかひなしや。

忘れんと思ふ心の中々に見るにまされるうさにこそあれ

かくばかりしのぶ心を、をさなきが知らで、戀ふらん事の悲しさ、何にとゞまれる世ぞと、又うち泣かるゝよ。此照る日にも、しとゞにひぬ袖なるを見て、都の友垣達の、さる歎のみこりつむ藪原に、待つ人とてもなきを、何いそはしくいなん。今しばならずとも、月を嵯峨野大くら江にながめ、紅葉を北山のくま〴〵にかざせよかし。伊駒嶺すこしはるけきには、比枝のみ雪見ずてやは。いづこもいづこも草の枕の假初ぶしをと、聞えたうびぬるに、御心のとゞまるとはなくて、よしや繫がぬ舟は、風のまに〳〵とてなん。白雲のあはだつ山の麓に、膝ふたつは入るまじき宿もとめて、何すとか明しくらすにも、さすがに見聞く事どもの珍しきは、あしかる事のみになれこし、難波田舍の賤の女がひが心になん。

人目無徳に―見るかひもなく

闇の神の御祭―大物主神の御祭

みそかごと―密言

翁を扶けつゝ、はる〴〵詣ではべりて、

　花見れば秋の霜にもあふものをこのなでしこよ盛またずて

といへば、翁は耳ふたぎ給ひて、物もいはせ給はず、ここに納むとこそいへ、捨てゆくものに、杖をもつきたがへて、こいまろび給へるを、涙に目のくらみて、扶けかねつゝなん。目をふれど、さらに〳〵疎からず、人目無徳にこそおはしけれ。五月雨降晴れぬれど、心は更に〳〵あかゝらずとて、ひとりごち給へる。

　こゑはせで目にのみ見ゆるさみだれの闇のうつつの山郭公

是のみならず、此里の宿のうたておぼす事ども多かめれば、今は旅に飢ゑて死なんとしも思しさだめて、先都を心ざし給へり。晩れじと従ひまつる。我古里なれば、昔おぼし出でて、まぎるゝ事もあるを、中々に淺はか者とや思したゝん。水無月の七日は、闇の神の御祭とて、大路せく人立ちつどへり、物見べき心にもあらねど、ともによろぼひ出でて、をちこちしあるく、あるものならば、是見せたらんに、笑みさかえたらすを、いな、世にしもあらば、今日こゝに出でたゝんやは。跣ならぬことのくちをしと、みそかごとしつゝも、此きら〳〵しく眩き、さま〴〵の物もめざましからず、人のいつき子のい

三輪の山本云々―ふる雪に杉の青葉も埋れてしるしも見えず三輪の山本

おきて―定め

るにぞ。翁かなしがりて、薬のしるし見せ給へと、さながらにてなん年も暮れにける。親はまして、神佛に願たてけり。此ゆゝしきめ見るにたへがたくて、心も亂るゝばかりなるに、人の敎ふるは、いづれの御神、御佛にまさり劣り給ふはあらじを、地藏菩薩なん、かうやうの時は打頼み給へと告ぐるまゝに、近き所に祭れるに、日毎あゆみて、かきくどきねぎごとして、打ちあづけたいまつれど、いかにせん、三輪の山本しるしなくて過ぎ行くほどに、いとたのみなく、いみじきこと限なし。春さり、夏の初の、この菩薩の拜みすると云ふ日に、導かせ給へるにや、むなしくなりぬ。あなやあなやと、泣きさけべどかひなし。翁足ずりをしつゝ、聲をあげて泣い給へり。是をも見るめの苦しくて、いかなる宿世にや、親にまさり、おひ立たらん末までを、兎やせましかくやなど、うちうちおきてさせ給ふものを、今は何も〱かひなきぞと、枕にのみ獨ごたせ給ふ。この二年がほどは、萬に恐しきまでおとなびつるも、長かるまじきにやなど口々云ふ。限あれば、野に送りいきて、灰になしはてぬ。作法よりして、何も〱我が翁の德になんおこなひ給ひぬ。手足もゝがれて、立居だに心に任せず、ない暮す程こそあれ、煙の下に拾ひとゞめしを、今はとて、難波なる一心寺と申す御寺にをさめまく、我肌につけて、

こも枕—枕詞
いめ人—射部人にて狩の射手
ねもごろに—懇ろに
ざえ—才
すくよか—健康

枕高瀬こぐ舟を、いめ人の伏見の岸に乗りかへて、夜べのなごりの村雨の雫を、苫のひまに詫びあへつゝ、夜をすがらに目もあはでなん。

○夏野の露

田鶴の居る、長柄の濱松陰にすむ翁ありけり。身の病はたさんほどを、いとかり初なるいほりして住みけり。この垣の鄰に、世に貧しきが、親はらから住む人あり。心ざしの直かりければ、朝夕とひかはしつゝ、ねもごろになん語ひける。女をむかへて、をのこ子の生れしを、かいだきて見す。いとおほきやかに、玉の光をさへして、めでたかりければ、誰も〳〵喜びあへりけり。此子の二つと云ふ年に、うばは病して死にけり。年月ふるほどに愛敬づき、舌とく物らいひて、萬にざえありと見ゆるを、翁いとうつくしがりて、身のなやめるやうをも忘るゝものに、膝の上にすゑ置きて、いとほしみ給へりき。我はまして是をのみ傅くやうにて、翁の物、おのが物を縫ひつどりて打着せ、とりはやすにぞ、此ひとさとの貧しきが子もたるは、あやしう妬り猜むものもありとなん。三つになりぬる秋の比より、ふとしも悩しげにて、すくよかなりと見しも、やう〳〵衰へぬ

大津の宮の古事―萬葉集第一卷に天皇詔内大臣藤原朝臣競憐春山萬花之艷秋山紅葉之彩時額田王以歌判之歌

朝彦―朝日

わきて、

春ごとの名にしおひたるあらしやま紅葉の秋の色やまさらん

と申せば、我は云ふ。春のあした秋の夕にまされりと、から歌うたはせ給へり。秋を引きかたに言ひしは、大津の宮の古事とのみ思へりし。ぬかだ姫の御心ばへの慕ばしきにならひていひしを、いと古き代よりも爭ひはてぬことゝや。杯の流あまたゝびなるに、醉ひほころびしかば、經亮の御歌ありしかど洩らしつ。河をわたりて、法輪、松の尾、月讀の社拜ためぐりつゝ、やゝふかう、西方寺にわけ入る。此所もなかばばかり染めて、いとにほびかなり。この庭のたゞずまひ世に聞えたる。昔は琉璃の閣とていときらきらしく寛かなるが立たせしを、今はほろびて、名をだに聞きしらぬよ。梅津川をわたりて、梅津の橘の家に、やどり給へる男どちは、聞きしらぬ昔のことども語りあはせ給へり。をみなどちは、めゝしき事のみいひつゝ、笑ふ〳〵夜更けて、枕の野邊の風のおとかと聞けば、うたて、むら雨のそゝぐなりけり。あなうとのみに明しぬ。立ちまふ雲のひまより、かゞやき出づる朝彦の御影、いとうれしく、猶しばしをと聞え給へど、古さとに心ひかるゝ事のあれば、主人のけふの内參の御後につぎて、また都をさす。こも

圓光大師―法然上人
檀林皇后―橘嘉智子嵯峨帝の皇后
野の宮―皇女の齋院に行くに先つて齋戒し給ふ宮

だになくて、あわたゞしげに立出で給ふよと、翁かしこまりて

しき島の道しるべせし君とへばさがのの原のこけのしたつゆ

尼君とりつたへて奉り給へり。局を出づるより、をちこちたづねありく。をぐら山ふもとの御寺にまうづ。この峰なる時雨の亭と云ふは、まこと圓光大師を火葬むりし奉りし御跡なるを、何ものの僞言せしぞと、物知のかたり言せし由、尼君の聞え給へりしかば、昔しのばしからず、のぼりても見ず。檀林皇后の御墓、野の宮の跡拜みめぐりつゝ、大井の大寺なる三秀院にまうづ。こゝに任有亭と云ふは、近き世のすき人の跡とめし、いと幽かなる庵のなつかしさに、窓ども打ちやりて遊ぶ。こゝに橘の家刀自より、さゝえわり子もたせ御使あり。いとかたじけなくなん。翁、昔此いほりに一夜あかし給へる事のおはせしよしを語り給へり。御歌ありしと、

なげきこる山にもいらじ今日よりはうきを命のあるに任せん

おぼし出でて語り給ふなべに、唐歌壁におし給へり。

枕是碧溪石　衾便丹楓巓　終身只任レ有　詩思一僧禪

もとの主人をしのばせる心ばへなりとぞ。こゝは山の姿川の流、世にならぶ所なしとや。

露も時雨も—しら露も時雨もいたくもる山は下葉のこらず色つきにけり
心よし—親友
この野—嵯峨

見れば、

染めつかぬ梢ながらに久方のもる光をもみづとや見む

となんいひて過ぎさせ給へる。むべも雁の翔は蔽はねど、露も時雨も漏らぬ林なりけり。こゝに心よしのおはして、山づと一枝給へるを、さしかざして、とがの尾の橋に佇み見れば、こゝなん思ふに勝りて、いとをかしく染めなしたりと見る。此光のまばゆさには、言ふべき樣もしらずて、庵に歸れば、梅津の經亮の君とくよりとひ來て、待ちわび給へり。山產見せ奉れば、

手折こし一枝にしるき高雄山みねの紅葉のそむる染めぬは

物語とばかりして暮れはてぬ。君おくりがてら、河邊に出でて月を見る。橘の君、

山の名のあらしに峰の雲晴れて川せさやけき月を見るかな

我がおきなの、

大井川早瀬にくだく月かげのすゑはかつらの波にすむらん

照かはさせ給ふ。翌朝又とひ來り給へり。けふ此野のしるべして給ふべき爲なり。たゞふた夜のほどを、千代のむつびして、別れがたくす。尼君のたまはす。昔の君の御たむけ

山風やひく—風邪に冒されずや

聞きしより思ひしよりも悲しきはさが野の庵の秋の夕暮

月早くさしのぼる。雲がちながら、

幾とせかかけし思の雲はれぬ小倉の野邊のあきの夜の月

見せまつれば、やがて其端に書かせ給へり。

思ふ世のあるは命ぞなほや見ん嵐の山のはるのあけぼの

さは打ちたのまれてなん。此ともなひし君の御歌、

わけそめしさが野の原に宿して心くまなき月をこそ見れ

眺めつゝあれば、

秋風に雲のまよひも吹きはれて更ゆく空にすめる夜の月

翁

露さむき秋のにはぐさ蟲鳴きて所がらなる月のさやけさ

山風やひくといさめ給へば、名殘あれど臥しぬ。あくるあした、この野のくま〴〵分け見んとさだめ給ひしも、今日のそらの長閑なるに、高雄山の梢の心にかゝりて、打ちこえゆく。大澤の池の面は、木葉散りうきて、秋菊の影も見えず。梅が畑といふを過ぎて

橘の君のがり—橘君の許
はゝそば—母君
若草の御かた〴〵—御子達
京極中納言—藤原定家
冷泉大納言—藤原爲相

年の夏のえやみは、まさしう此下風をはじめぞと聞え給へるには、したには恐しけれど、すくよかなるけふの御遊に、過ぎにしうさも忘られて、いと面白うてなん。十日まり三日の夜の月を、嵯峨野に見すべく出でたゝす。親しきひとの御女をそゝのかし参らせて、己が友に物語しつゝ行く。梅津の里なる橘の君のがり訪ひつれば、けふは内参し給へる由にて、はゝそば、若草の御かた〴〵立ちむかへ、萬ねもごろに聞え給へり。此軒ちかき櫨のもみぢ、いとよく染めたるを見て、

　時雨するもみぢの秋を尋來て先木のもとのうれしかりけり

今宵こゝにと強ひて宣へど、心ざす野の草枕むすばんとて、あながちながら立出づ。さが野の厭離庵といふは、去年の秋とひ寄らせしゆかりして、わりなく宿もとめ侍るに、尼君心ゆく饗應し給へれば、うたて思すまで打ちとけたる。いともなめしかし。此庵は、昔京極の中納言の君の、老いて住み給ひし御跡にて、其世のかたみなる柳の井てふ泉あり。また御むすこの冷泉大納言殿の御墓のしるしも立たせませり。庵のたゞずまひ世に似ず、木立物ふり、砌の苔深うむしたるに、露打ちらしつゝすだく蟲の音の弱りげなる。かれやこれや、とりあつめたる哀さの、身にしみて思ゆるにぞ。

附録

○露分衣

瑚璉尼

煙の下に拾ひどめし―火葬せる遺骨

袖笠して―袖を笠の代用として

糺の川―山城の賀茂にあり

あはれ〳〵、身一つなる此秋を、いつの日にかは忘するゝ、煙の下に拾ひ留めしを、みおや達とひとつ所に納むべく、我をも召しつれ給ふべきに従ひ侍りて、都の二條河原なる眞行寺と云ふにさゝげまうづ。こゝにしも今更なる別の、すゞろに悲しうてぞ。

誰も世に在りはてぬ身をながらへていつまで袖の時雨ひまなき

長月十日あまり一日のけふよ。しぐれの雨に袖笠して、いづこしらず晩れじと歩む〳〵、下の社の森陰に來ぬ。はやう幼かりし時に、過ごさせ給ひし親達の、難波にうつり給ふに從ひ參らせたれば、都の名だかき所々も、老いゆく今まで尋ねも見ず、今の母君のおはする世には、いかでと思ひたえにしを、此はかなき便にこそ、をかしき野山にはまじりぬれ。いとめづらしな。糺の川にさしおほへる梢どもの、やう〳〵匂ひそむるを、なつかしう眺めらるゝ。秋ふかみ色ならぬ枝もいろぞます、まなく時雨の雨のふれゝば、今

ゐるけれどもとの心をしろ人ぞくむ

うれたき眼—愁眼

文のうらに、たゞ言みじかくて、

むかしの人のいへる、國を去り、うからやからにうとまれ、家わざをせず、遊びてかへらざるは何人ぞや。是を狂蕩の人と云ふ。また才能にほこり、名をひゞかさん事をのみつとめ、おのれを如何なりともかへり見ぬは、何人ぞや。是を智謀の人と云ふ。此ふたつともに道を失ふとや。翁此ふたつをのがれず。然ばみじかき才に苦しまんよりは、狂蕩の人と呼れて遊ばん。一つだにうれたき眼を、見はたけて何せん。死は安しと聞く。只今たゞ追行かん。國へだてゝは言ふかひなし。

とりはなつ千引の石の安けくは越えんよやがてよもつひら坂

是奉れ、相むつまじく翁をまてといへと云ふ。うばらかしこまりて、此處にはかゆきようして誰かはまゐらす。まめ麩時々煮て奉るや、いと覺束なくなん。とく出立たせ給へといひて、目さめぬ。あな恥かし。愚さのあまりには、かく淺はかなる夢見はすなりけり。

かうじさいなまれ—責められ
鬼々し—恐ろし
むごに—甚しく
うどん花の—稀なる
野中の清水云々—古の野中の清水

忝なきものに、老いよろぼひつゝ、つとそひ奉りしは、松の操の数にならぶにもあらで、身幸なく落ちはぶれ給ふ、いとほしさの一筋をなん。深うおぼししみぬるものから、如何にせよとか、我を捨てけんの御かこち言、いと身に餘りかたじけなう承りはべる。鬼々しとて人の忌むなるをも思し知りつゝ、たふまじき御本性こそいともすべなけれ。御よはひ高く、世に知られたまふを、むごに言ひくだし給へるを、誰も惜しきものに聞えたまふなり。御ひかり、醫師の御徳見給へるを、おもふに、御世も猶しばしあらせ給はんがいとほしき。物狂といふ名、早うより負ひ給へる。いでや御心なる世も出でこじものを、かう言へば、御佛に物きこえ奉るためしにもこそ。いとも賢けれど、此うどん花のたよりに、繰言たど〳〵しく聞え奉つる。あなかしこしともかしこし。

よもつ坂千曳の石も取りやらんあなうごきなき君がこころは

却りてはおに〳〵しくこそ。

よみはてゝ、今は國たがひつれど、野中の清水もとの志のまゝなるぞいと忝なき。よろづよく念じてんと言へ、竹のねぐらのめなし鳥も、くちをしくかへり聞えずばとて、此

すくよかに―しかと

墨の江の小濱の蜆云々―住吉の粉濱の蜆開けも見ずこもりてのみや戀ひ渡りなん

いきす魂―生靈

りて、たゞ物のへだたりつれば、いきて見奉らんとも、またこゝに迎へ奉らんとも、すくよかには思したゞずなん。そこには四十九日が程かしこに行きかひてん、便につけて、文ひとつ參らせよとてたまひぬ。猶のたまひしかど忘れつとて、さゝげ出したるを、いそぎとりて披き見れば、にび色のこまやかなる紙に、例のことえりなく、まめ〴〵しく、書いすくめたり。

しばし見奉らぬ程とおぼしゝを、此まめ人のかたるを聞けば、三年なん過い侍るとか。こゝには春秋と云ふ時もなく、年月とかいひて、指折かゞむるわざせねば、垣根の忘草おふしたつるにもあらでなん。墨の江の小濱の蜆、あきてだに見えさせ給はぬ御目の、いといたう悲しき。常の御ことに、いさぎよく、ほど〴〵海川にも入りてんなど、こちたく聞え給へるを、うたて耳過し侍りしを、今もしいきす魂などのさそひ出づらん。いと覺束なく思う給へらるゝなり。御むすめの御心にかなはぬとて泣いたまへる。人の心々なるは其面の如しと、常に教へたまはずや。世に玉あへる人やはある。手を折れば、十と云ひつゝ四つを歷て、御宮づかへし奉りしほどにも、困じさいなまれ、からくおぼえしも幾そたびぞや。たゞ見放ち給はぬをのみ

瑚璉尼―秋成が妻

夢に六のけぢめ―夢の差別にして正、噩、思、寢、喜、懼の六種

つばらに―詳に

此文は、瑚璉尼の三年になりにし比に、又乳母のやうにて召しまつはせし、はした女の身まかりしをさへ思し嘆きて、夢がたりを書かせし也。わざとに書きあらはすべきにあらねど、この文共のしりへに、書いつらねつ。

夢の六つのけぢめを云ふも、なべては愚さの煩ふにや。うつゝの夢てふなん、まして遣方なき心の迷なりける。

まぼろしの人の行方をたつぬればおのが心にかへるなりけり

霜こほり、風いたう身にしむ夜、れいの寐ざめがちなるにも、しばし微睡むやうなる枕を、驚かしてくる人あり。誰ならん、かしらもたげて見れば、この三年がほど、我をいたはりかしづきしうばら也。松山貞光 俗稱いさ 難波よりまう上りし後は、假初ぶしのやうに日ごろ過せしが、よくこそ訪ひ來りつれ。いと覺束なかりしをと云ふ。いとかたじけなく、如何におはすらん。心もとなくてのみ過い侍りしを、今宵めづらかなる御使してまるで侍りしなり。たゞ今いきて住みつきたる所に、ゆくりなくいきあひ奉りしかば、御有樣、かつ御むすめの御事、我もまめ心して、御宮づかへし奉りし樣をも、つばらに物がたり聞え侍りしかば、いとうれしき事、御いとほしさ覺し知らぬにはあらねど、國の境あ

さし云々―海人藻芥に、清涼殿の孫子庇と申すは檜皮葺の外に板庇をさゝろなり板庇さして時雨の音聞し召さん爲なりと
喜雨亭―蘇東坡の亭
庭たづみ―庭上の水潦

はさませて、聽雨と是をなん名づけ給へりしとや。過れば民のなげきともなれど、天つ水乞ひ得ては、ひと日一夜あそびのゝしりたる宿をば、喜雨亭となん書いつけしとや。こよひの雨をうれしと思ふは、うさにかへつる喜のあまりなり。あなおもしろの軒のしづくやとて、戸すこし遣りはなちて見たれば、くらき夜にも、庭たづみの流れあふに、ともし火のかゞよひて、落ちたる雲は、此處にはひ入るよと思すにも、かや野姫のあらみ魂は、こよひにぎ魂におほし靜もらせて、おほけなき袖うちかづけ給へる事のかたじけなさよ。このまた荒び給はんまでは、世に這ひかゞまりをらん翁かは。

此夜らやみつのあまりのあまごもり文見しまどは昔なりけり

うしと歎きうれしとも聞く夜の雨は昔もしらぬ戀のみだれか

冬の夜に何をたのめて明すらん萱がいほりのあめをもりつつ

享和癸亥霜月二十一日の夜、ひとり言を、尼に書かせおきつるを、二十二日のあしたかひ淸めぬ。

○よもつ文

三餘—冬、夜、陰雨、魏略に、冬者歳之餘夜者日之餘陰雨時之餘

なげのやどり—假初の宿

雨夜の物語—源氏帚木の巻にあり

夜の殿のひ

○三　餘

あしのまろやの假初ずみの、はやも六とせになりぬ。風にかたぶける軒のひさし、むぐら這ひのぼる壁のこぼれはさてもあるを、あなかしこ、かや野姫の神の御心のあらびたまひて、雨だにふれば、枕にそぼち、衾はしとゞに濡れとほりて、夜をいも寢ず。よしや、なげのやどりの花の陰におぼしなすを、こちたくなげく人の爲にふいあらためさす。野邊にかりこし茅の亂は、飛彈人の眞鉋もてけづりなすが如に、あなすが〱し。翁がための萱の宮居ぞとかたゐみして、心ゆく喜はすなりけり。一夜暮れぬと見る空に、雲立ちかさなりて、ふりに降りつゝ、かしら出すべからぬにも、こちたかりし尼の、いとこそ嬉しけれ。面しろの雨やと云ふ。おとせぬ草ぶきも、窓をうち、廂をたゝきつゝ、夜たゞこれに、夢もあらじをと、炭たきほこらせ、茶烹させてすゞる〱、語り言はす。雨夜の物がたりとて人すなるは、にぎはゝしきあたりの遊なり。甍高々にふきなせし御館には、園の林や、池なみやにめさまされて、土器とりはやし、みやびごと誦じ出し給ふらん。昔の帝の、これが音のうときを思したらぬものに、夜の殿のひさしに、板さし

の、この大江に影うつれるを見れば、いつもの花のいつも〳〵、曙ばかり悦しきものはあらずなん。ひとへ打ちかさねたれば、秋のさむさも悲しさも、いと〳〵なつかしうて、思ふにかなふ比よとは、昔打出し己がつたなき事をさへ、おぼし出でられてなん。

一木だにかげ見ぬ軒におとたてなにに聲かす秋のこの夜は

間齋

草に木にそれにもからでおほぞらに高くきこゆる秋の聲かな

秋聲賦―歐陽脩の作

癸亥之秋、寄包于阮先生浪華大江橋塊寓舍之日、一夜天已三更、四壁蕭寂、清風瀏亮、恰如在萬里波濤之中。話次偶及秋聲賦。先生卒然口占乃文。予走筆記之、卽時文成矣。嗚呼斯文搜索古人之遺失、而悲哉之情盡于此矣。謂之吾家歐公、恐不强也。

享和癸亥初秋晦夜、繫纜于大江橋西、偶風雨暴至。不能上岸、倉庚困臥、既而苦北岸宿通家某。有使侍婢通于先生。及曉天少晴。走詣文際、獲觀此卷、如余不文、徒苦于實、不能華于其文。如先生巧撫其景、能裁其實、不及熟讀終篇、遂服其妙々兼具。因跋。

十時梅厓

—寂寥
まさめならずは—目前ならずは
ゆめ此夜の云々—少しも夜半の喧噪を知らず

かけても思し知らぬ古の戰の場の、幾とせ經ても、人住みつかぬあら野らの尾花高茅己まゝに靡き合ひたらんに、雨ふり風さむき夜は、鬼の火の飛び走たらんをさへ、まさめ成らずはおぢ迷ひせじ。はぎの花、女郎花、くらゝ、りんだう、眞葛の這ひ歩きたらんに、夕をまたで鳴きさかる蟲のころ〴〵、名もしらぬ小草の花々、露霜にもみづる淺茅原、木枯にちりかゝる何くれの廣葉の、からからと音して、そことはてなく走り行くも、山の紅葉のから錦なるをも、悲しとのみは誰も眺むまじきをや。木の葉の落つるは、下より惠つのぐさからぞと言ひしを思へば、天地のまゝのあはれを、怨みつべきことかは。秋に心をよする人は、春のにぎはゝしきを、うたて垂籠めてもあらめ。荒れたる此宿の秋の夜といへど、吹きゆがめだにせすばと思ふ〳〵、戸を吹きはなつらんとて、暫時もまどろまぬに、我尼は、ゆめ此夜のさわがしきを知らで、熟睡せしほどに、夜はやう〳〵明けぬらん、小舟どもの漕ぎつれて、かたり事するは、河尻いかに吹きつらん、入集ひしが打ち傷るゝばかりにはあらじかし。やう〳〵吹きよわりきれば、己がともの積みはこぶ便こそ善けれとや。鴉のやどり立ちて、叫びかはしつゝいづち行くらん。やをら起出でて、朝戸やりはなちたれば、雲の名ごりこそすざましけれ。あかねさす空

病床にありし瑚璉尼なるべし

よひね―宵寝

秋立ちて云々―秋立ちて幾かもあられどこのねぬる朝けの風は袂涼しも

龍田彦の神―風神

さぶ〲し

とて、うれしげに戸たてなどす、夢もまだむすばぬほどに、廂の古すだれの、己がどち打ちたゝかひさやめくほど、立ちよろぼひたるやり戸を、おすか叩くか、破れたるまどの紙は、あつものをすゝる音して、燈火やけたると、人よびおこせば、物におそはるるやうにて、起きもこず。秋たちて幾日もあらねば、といひけんをも思ゆ。枕の流はさらさら浪や立つ。ふなぎほひこそせね、棹かぢのいきかひ、よそろ〱など聲よびかはし、漕ぎわかれ行くとぞ聞ゆ。やゝ更けゆくまゝに、ならべる軒、岸のむかひの家どもの、ひしひしと鳴きさやけるは、何ならん。ぬす人や入りると耳そばだたるゝを、あらで、西みなみの風あらく吹來たるなりけり。野分とて、小田の益荒男の立走りつゝ、龍田彦の神あらびな給ひそと、なげきするにも似たりかし。さりけれど、此年のあしきよなど聞ぬことのうれしき。老が貧しきにつきては、年豊なりとも、あしくとも、何ばかりのことかは。富人もはた然るべかりけり。古より秋にあひて驚きざまに、或は寂しさをかこつ人は、その思しよる所さま〲にて、歌よみ文つくる人ばかり、身ひとつに思ししめて、悲しむことの、かへりては心そらなりとやいはん。家をうしなひ、かなしき女子を先立てて、獨りおきふしたらんには、春の曙秋の夕も、さぶ〲しさはさらなり。今は

やゝ聞きふけりて、さて詠める。

身のはての枕の岡のはぎの花ひとのかざしに今日はにほひて　翁

およづれごとも文字の數ばかりはとて見する。人々醉ひごゝちして、たゞほめに、ふかう心をまでは求めずや有りけん。秋のならひに、暮れやすき日は伊駒高根に落ちかゝる。今はあかぬ別を告げて、又詣でんと云ふ。とく出立たせ給へ。野には犬と云ふ恐しきものの立ちはしりて、喰附ぞかし。そなたをさゝせ給へ。御かた〴〵の家路ぞと、ゆびさし敎へて、もとの田ぶせにはひ入りぬ。見かへる見かへる野づかさこそ見ゆれ。夕霧のまよひに立ちやこめけん、何も〳〵あらずなりぬ。古言あながちに學べば、又そのかたの迷はし神のつくぞかし、ゆめ〳〵。

○枕の流

みな月の初より、秋かけて、河邊の宿のあらはなるにも、打ちみだりがちに、老いては禮なきを、人々の許し蒙りてありふるほどに、ひと夜小雨うちそゝぎ、人げなく淒々しさに、寢やせましと枕によれば、べうざの尼、今宵こそいとも長閑なれ。よひね珍し

およづれごと―漫言
そなた―其方
田ぶせ―庵
べうざの尼

高圓—大和春日の南にあり

霧のむた—露と共に

に、まねび奉らんと云ふ。人々けふ詠まずばとて、打ちかたぶき、うめき出でせる。いとも晴歌にて、例よりは穢げなる、いとくちをし。

祝部基因

たかまどの山のふもとの眞萩原ふるえみだれて花さきにほふ

度會氏麻呂

高圓の野行きやまゆきあきはぎの花すりごろも我ぞにほはす

高向日陰

芽の花つきてさかなんますらをの射る高圓の野邊のつゆばら

大了法師

高圓の野路のはぎはらむな分けて雄鹿のかよふ道は見えけり

和氣垂水

たかまどの宮出の朝のそですりて露のむたにぞはぎの花ちる

鞍作植竹

はぎの花今さかりなり高圓の野にいほりしてひとやどりせん

らん。物いはゞ猶やさしからめと思ふ〳〵、墨つぼに笹葉の露そゝぎ入れて、おそる〳〵かいつけ見す。

　高圓の野邊見にくれはそでひちて露ふる人に遇ふかともしさ

翁あまた度おしいたゞき、あなめづらか、さればこそ古事好ませ給ふ御かた〴〵なれ、聞きもならはぬには、何ごとか御禮まをし奉らん。蛙うぐひすの音にも聞過させ給へとて、萠えさしたる竹柴の炭して、垣根の黍の葉ひとひら摘みとり、書いつけ出すを、とりて見れば、

　秋萩の花すりごろも見るなべにつゞりさせとも蟲のなくなる

都人のいとけがしとや思すらめ。心もことも身のさまも、きたなき麻呂にこそ侍れといひて、打ちかしこみをる。此野の遊こゝを去りて何處ならんとて、芝生の塵うち拂ひつつ團欒して、翁酒たうぶや、乾飯も持たるはとて、檜わり子草の上に置きちらし、人人物聞んげに、山邊の鹿の膝折りふせ、あら野の鶉の這ひもとほりつゝ、あるは面杖つき、うち誦じをる。なにくれの語事の、いと珍かなること多かり。杯の流あまた度なるに、翁も醉ひしれて、今日この野に遊ばせ給ふ御歌よみて聞せ給へ。翁もすゝびたる儘

麿―われ
乾飯―辨當
はひもとほりつゝ―這廻りつゝ

高圓―大和國添上郡にあり

谷くゞが大名持の云々―蝦蟆が大名持命の前に這ひ出でたる有樣

かや野姫―野を守る神

飛火―烽火

くて、いと覺束なさにぞ、袖裳裾しとゞにてあゆむ〳〵、野つかさめける所に、こむらさきの色花々しく、露おきみだりて、はつ〳〵咲きそめしを、かひあるものに、先とめよりて見れば、押し伏せたらん樣のいほりして、人も住むとぞ見ゆる。あなづらしけれど、まよはし神や附きたらんとて、さし覗きてもの問へば、いとも古代なる翁の、谷くゞが大名持のおまへに這ひ出でたるさまして、いづちの使にこゝに來たまへるぞと申す。秋芽の花見はやさんとて、ふかう分入りぬ。いと口惜し。一枝だにかざさで家路たどらんはと云ふ。翁かたゑみして、をかしの御ありきや。さは千年のむかし人達にこそ御坐すらめ。此野の秋にめでて宮居つくらせ、御幸あまたゝびなりしこと、文に傳へたれど、今ならぬはるかの世に跡なくなん成りて、おく露も吹く風も、色に匂はぬには、山もはた、里人のこりすさび、刈りあらして、鶯かほ鳥の宿をうしなひ、鹿の立所もあらはに、いと淺ましとこそみゆれ。されど山祇かや野姫の御心ばかりは、あらびはて給はじものを、谷峯のをちこち、野のくま〴〵には、御袖匂はすばかりは咲きたらめを、ようこそ分入せ給へと云ふ。形をもては、論ずまじき教をさへ思ひ出でられて、人々恥かゞやかしつゝ、翁はいみじの物知にこそおはしけれ。昔の飛火守りし人にてや御坐しつ

の席

四難―諸佛難値、人身難得、好時難逢、大善難修

石鷄―石上にゐる鷄

金母―西王母

毛女―毛嬙支那の古の美人

玉あへる友―親友

暖。嬌鶯百囀呼吟朋。戲蝶雙飛邇女伴。吾曹扶翁後群至。同人跂望虛座遲。相逢先忻幷四難。團欒把杯訪幽致。乘醉晚步峽水頭。春漲一畫碧于油。滿山春風香靄合。臙脂滴々膩欲流。昏鴉已定遊人散。渡口片々舟閣岸。愛看花邊暮色遲。山光水色互續斷。石鷄呼雨自弄聲。水禽驚夢時打更。共驚簾罅已生白。起曳枯藤重吟行。曙色溟濛雨靄々、天然畫幅眞妙繪。芳潤正知花魂王。或疑此中女仙會。金母蹈雲欲朝天。毛女横陳枕岸眠。青童捧珠王女蓋。白鸞彩鳳相後先。須臾亂雲生松枝。起滅無端幾追隨。到此花事極萬態。生看花未看此奇。此奇況復得奇文。吾曹何須更云々。歸木燈下離叢睡。兩袂翠烟帶餘芬。

○秋芽

蟬の羽衣猶なつかしまるれど、朝おく露夕吹く風は、秋を告ぐる便のいとこそ憘しけれ。垣根の荻のおいしはぶける聲、牀近らぬきり〴〵すの鳴音、月の光も花々しき比なり。玉あへる友みたり四人さそひ出でて、野や分けましと云ふ。雪間の若菜をこそ春日野にはまじるべけれ。高圓の野邊の秋萩かざさばやとて來る。習はぬ道芝は、まどふともな

にみがくれて妻よぶ蛙こゑきこゆなり
谷ぐく—蝦蟆
唫筵—吟咏

は反すれ。今年ばかりのながめと思ふには、この谷ぐくが聲よ。あはれ〳〵と聞ゆるなりけり。宵曉のけぢめあらずも、現の夢の正夢を、又もいめの幻に、散りかふさへ見ゆるなん。昔の躬恒の君が花心にもあゆるかな。歌もはた夢がたりの樣にて、

ゆふなみにかげほの見えし櫻花香は夜すがらの風にかをれる

雨もよぶふかき霞のひまもれて花にいろかすあけぼののそら

色わきし花も霞めるあまぎりに朝よひしらず鳴くかはづかな

山彦は答へこそせぬうぐひすの聲のさかりのはなの木がくれ

櫻天幷序　　間齋

瀧原豐常、設櫻花宴于西峨。會者無腸老翁、小川布濟、前波默軒、田山敬義、澤谷等、都十有五人也。可謂盛事矣。無腸翁有夕曉篇、敍事歷々、令人遺想不止。予復傚顰、賦櫻天篇一章。聊貫餘勇而已。實癸亥二月十九日也。

春立七十有五日。處々櫻候多一律。今年正月有閏餘、稍覺催芳春脚扶、上京何處無鶯花、就中西峩富烟霞。友人折簡訂約。唫筵斂得賞洲家。是日櫻天色如卵。郭外春陰濃烟

べき
つるばみ—濃き鼠色
袖がさ—袖を笠にして
妻呼あはれに—谷川の淺き瀨ごと

にこそあれ、木ごとに朝心して、容つくろふさまを、何にかたとふべき。そゝや南の殿の簀の子に、つかさ人次々居並び給ひて、袖たれ襟を正して、歌づかさらが立ちまひ御覽ずらんにや似たる。きのふ今日、とからず遲からぬが、峯におひのぼり、岨にそひ、峽にかくれ、ときは木のひま〳〵、繞れるが如、蟠るに似て、尾を曳き、雲に吼え、或は落たぎつ瀨なし、流に影見るとしづえを垂れ、空に指ざし手とりかはす梢、さま〴〵に色香き添ふとぞ見る。まだき散りそめねば、花おもげにも見ゆるかな。けさの雨もよに、空はつるばみの下染して、雲のむらごの立まひは、月をのみ妬むにはあらぬか。河霧の立つとも見えぬが、峯に立昇りては、蘆火たくいぶせさに薫りみちて、小雨打ちそゝぐ。袖笠かづきつれて來るほども、返り見すれば、薄雲我跡をうづみ、さと降りく。風吹きそはねば散りもはじめず。けふを盛のほまれ顏なりけり。朝蛙のかくれぬ聲、木傳ふうぐひすの高音、いと竹の曲に及ばぬあはれさ也。雨しきりならねど、今日のひねもす翅しほれて、梅の花がさ求めわびぬべし。又蛙の夕かけてこゞろくを、誰も耳欹だたするを、妻呼ぶあはれに詠みたりしは、出ましの宮の宿直人の、家の妹戀ひしらに思す心まどひして、なれもこそとは打泣たらめ。老が賴める人をさいだてて、けふこそ花に腰

いめ—夢

さゐ〳〵しき—さわがしき

木にのぼる魚—蛙のこと

ちればこそ—散ればこそいとゞ櫻はめでたけれ浮世に何か久しかる

おはしけん。

いめ破るあらしの山のまつの聲むせび流るる瀧つ瀬の音

この群來る人のさはめきには爭ひかねたりな。蛙うぐひすも是がために音をいるゝよ。戀ひする人の夕とゞろきの、おのれ胸さわがるゝには、立ちかへてあひなうもあるかな。やや家路に行きわかれては、山の色、水の面くれはてぬるを、あやし、花の影のみ朧に見ゆるは、うつゝの夢のたぐひにかも、其うづる瀨ごとに、かはづの聲のさゐ〴〵しきは、たが歌垣にやしらぶらん。木にのぼる魚の躍走りても、花に宿はからぬなるべし。河洲の鳥の聲、千代をことぶくよと聞くも、ひが心なる翁こそ、いまはしく耳ふたがるれ。こよひ磯枕ならぶる人々は、あかずも聞きあかすらんかし。花の日數のしばしなるには、八千代の聲は、鴉てふ鳥の虛ごとにや習ひけん。春の花、秋の紅葉も、ときはかきはの色なれば、いざ駒なめてともとめこじ。散ればこそとは、世の理をいはれたれ。夜の更くるを告ぐるかねの音は、花にさはらぬをとて、人々やすいして、明けぬほどより、うつゝの夢路をたどる〳〵、瀧にむかひて見れば、夕は山のみな暮れはてしにも、水の色にとめて見し、其影の夜すがらなりしは、明行くまゝに梢にかへるも、ときと遲さは、濃さ薄さ

ゆるしの色—紅のうすいろ

ふゝみながら—含みながら

棺をつくらせて其蓋にかいつけゝる

長き夜の室としきけば世の中を秋のおきなが住むべかりける

信美

一日紅梅の樹下に遊びてよめる

散る迄はゆめ手をふれじ梅の花をるをゆるしの色に咲くとも

信愛

きえがての雪にたぐへて咲出づるまかきの梅の花のくれなゐ

間齋

なきつつもつまこひてふる鶯のなみだや梅のいろをそむらん

我もよめと云ふによむ

紅はふゝみながらにちりてまし咲くをうつろふ始とおもへば

○嵐山夕暁

おいが世にこころとめねばこの春の花に名残の旅寝をやせん

ひと夜の草の枕の夢がたりに、花の散るのみ見つゝあかせし正夢は、いかにはかなうも

長夜室―墓

小杜―唐の詩人杜牧之號樊川

瓜期―滿期

翁之淸節不飌、可比梅樹勁幹屈曲不撓。梅花紅嬌芳馥、堪敵古英茹華之文雅。翁可驕于梅、梅可不愧于翁。余不能詩賦、聊書此語塞其需云。

右二章應瑞畫上之題言

長夜室記

南畝子

客歳于役浪華吏事之餘、見一奇文。云是餘齋翁文。激賞不已、願見其人。既見之常元精舍、不啻奇其文、而其人亦奇矣。乃請山家記。翁亦不拔、不日而成。益信其奇之爲奇也。小杜所謂、杜詩韓筆愁來讀、似倩麻姑手爪搔、余於翁文亦云。夫一見而贈縞帶一絕、而不復鼓琴、古人之於知己、有如此者矣。今歳聞、翁作長夜室以蓄焉。一棺未蓋、萬事既休。予亦瓜期將還江戸、便道過京、與翁訣矣。噫翁無用於天壤間、々々々亦無用於翁。無用之用知者幾希矣。白日昭々、長夜冥々、昭々之中冥々如此、冥々之中亦有昭々者否。是我獨奇翁、而人所以不奇翁也。翁上田氏、名秋成、號餘齋、一號無腸、又號休西、去客於京。

壽藏―生前に造れる墓所

好文木―梅の異名

しく、假初ものなること、是につきても思ひしらるゝなりき。

河内國くさ香の鄕の唯心尼が、住む軒の木立に、あるじにかはりていへるは、しひたる求のさりがたければなり。今や花の時過ぎにたるは、昔聖武のみかどの、西の池の宮の花の宴を、五月のそれの日に、御遊有りし例をおぼし出でてぞ、物はいふなりける。

僕已不才且不幸、泊然三十年。齡將七旬。心力形骸漸衰、死後無一人之有瘞骨者矣。是以卜壽藏于南禪山中西福淸舍之紅梅樹下、且作棺以託寺僧、優遊俟天命已。於是二三名家、以老友之故、忝斯文。嗚呼不亦幸哉。

學半齋

此翁何所餘、餘年藏卜壽、厥卜在南禪好文木所有、先試入寫生、應將造化手。節月渡江春、新題屬舊友。余長翁五年。生天恐不後。亦嘗營壽藏、帝鄕遊待久。墨痕同暗香、文名餘不朽。

力齋

かはらけとりはやしー酒くみて
いまやうー今様歌
あてなるー富貴なる
ひねりー捻重、衣の名
ふかうそぎなしー剃髪し

まなび出でたるさまになん思すらめ。さればあまりにやしほに染めつきたるは、枝もこちたく、うたて打見らるれ。春毎に目馴れなつかしまれては、この花咲かざらましかばと思ひなりぬるは、さすがに貴なることども見しらぬ心から相思ふなるべし。やう〳〵散りがたになれば、薄きはもとより、濃きもあさましう冷めゆくを見れば、雪とまがひしには、宜もおとりて見ゆるをや。きぬの色あひ、紙のかさねなどをうち見ては、まさりげにてぞ。それはた世にあてやかならん人の、針目をかしうひねり縫ひてめさせ給はんと、墨次はかなう書きけち給ふらんをこそ、いとめでたしとは見奉れ。髪の末ほそり、額すこしあがりたる人の御爲には、いと無德にやと思すはいかに。まして世をすて、ふかうそぎなしたらん己が類の、今は手だに觸るまじきけざやかさを、身におはぬ言めでして何にかはせん。夏の來て、さみだれのころに、三つ七つ落ちこぼれたる實をひろひては、精進のいみじ者にたふべかりける。されど高きいやしき、老もわかきも、まづ目移りするは、この花の色あひになん。しかすがに解きあらひぎぬの黒みづき、黄ばみなどしたるを見れば、こと色よりもうたて思へば、はやりかに花一時の色とは定めらるゝなりき。山風さと雨をさそひては、ひと夜のほどに散りはてたるを見るに、色は卽空

續く惡きものを以て貴きものに繼ぐ喩
こと木―他木
ふつゝかめきて―賤く見えて

くもさせるものか。

○こを梅

鶯の宿、春かけてしめしも、漸々あれゆくさまに、梢にしぼみ、木ごとに散りこぼるるも、香ばかり匂はしきは、雪にこほりに、寒きあらしを煩えしのぶが、こと木にすぐれたればなりけり。きさらぎ立ちて、水の鏡をくもらせては、老をかくさふとするよ。風けぬるく、野山の霞をかしう引きわたしたるを、おのが時ならずとて、散りはつる心の、いとすざましな。おなじくさはひながら、紅に匂ふは、薄きもこきも、香こそおくれたれ。春知顔とはこれが盛をこそ云ふべき。すむ庵の軒ちかう五本六本枝をかはし、色香を競ひつゝ咲出でたるに、春日のかゞやかしう照かはして、いと花々しきに、鶯の木末なつかしう、又是にうつり來て、巣つくりなどするは、子をばいかでか生まんとすらんと、人の咎め給へるばかりに、住馴貌もにくましからずなん。花のかたち、濃きも薄きも、すこしふつゝかめきて、八重にあつごえたるを、よき人の見給ひては、若き女房の、おもてあらはに笑みほこり、土器とりはやし、今やう一手二手、扇打ちひろげて

樂しむ曰く唯知琴中趣何勞絃上聲

總角―兒童

糲食―粗食

狗の尾繼たりとや―貂足らず拘尾

ては、人目をかしからんと營むには、市朝の人に同じとや。宜も心たかき人の言は、思ひしみて忘れぬぞかし。翁世に立ちさまよふ事、三十とせあまりが中に、村居ふたゝび也。世の人云ふ。村居必ず閑寂幽趣ならんとや。翁云ふ。しかれども愛憎の二つあり。其愛すべき者。遠山青靄匹練。曠野陰霧成籬。菜花誘繍。霜葉丹青。春曙。秋夕。月夜旅雁。深更寒蛩。春雨蕭々。草露顆々。總角驅犢時謳且叱。野寺鐘聲夕悲且待。霜如衾。雪爲墩。菘菁鮮美。新穀先嘗。

其憎むべきもの。亢旱祈雨。三冬無被。藁牀糲食。三月垂蚊帳、非綿或紙輒入。蜂結房人來則螫。蛛布網除卽幙。春夜蛙鳴妨眠。秋風暴吹害禾。野鼠飢穿墻。狐狸竊盜飯。或水濁或柴薪乏。無朋無詒。貧民餓鬼、里正閻王。誰言。粒々皆辛苦。然税稍非精不納。又思。苦樂不偏。風雪雖不可出門、開牕濟氣直先臻。古人云。硯之發墨者、必費筆。不費筆則退墨。二德難兼非獨硯也。大字雖結密、小字常局促。眞書患不放、草書苦無法。茶苦患不美、酒美患不辣、萬事無不然。僕云。世途將亦如斯哉。

噫、文なん唐さまは習はねばたど〱しきを、五井の博士のしりに立て學び出でたる、狗の尾繼ぎたりとや。老のほれ〱しくて、垣根にすだく秋の蟲の、つゞりいと見ぐるし

云々―鴨長明の方丈の庵
河原のおとゞ―河原左大臣源融
宇治殿―藤原頼通
西園寺殿―藤原公經
わづかのよねに―五斗米の爲に腰を屈せんやといひし陶淵明
緒をすけぬ琴―陶淵明無絃の琴を撫して自ら

ずなん。たゞ心の迷ふまじきは、河原のおとゞの棲霞觀のありしさま、宇治殿の河邊のたゞずまひ、西園寺どのの津の國吹田の山莊などは、翁等がいやしき思ひしては、露ばかりもおぼし知らるまじきものぞ。又大宮仕をゆるされ、或はやめられて、野山にのがれし人の上は、文につたへてあまた見聞くが中に、司の衣の色ながら、山ふかく入りしこそいみじう尊けれ。みかどに立ちては世をまつりごち、庵のどかに住みなしては、あまねく病にしるしある藥をなめわきて、惻隱とかの心をいたらせしとや。わづかの米に腰は折らじとや、其始よりさる操ならんには、さる下づかさには出でたつまじきを、事に當りていざやかへんなん。歸れば童等が門むかへして立ちをどり、田ばたあまた持たるには、濁れる酒乏しからず。垣根の菊を手折りて、軒にあたれる南の山を望み、心なぐさむにも、一たびは己が賢きにいざなはれて、世には立交はりけん。緒すげぬ琴に趣をしらば、つかへの道のうるさげなるを、いかで思し知らざりけん。又隱るゝを名にて、人の望をえまくする人は、翁がくらき眼にさへ見止めらるゝをや。心たかきが這隱れずして、よく隱るゝにいたりては、いかで見給へしるべき。言續くれば、あやしのしこ翁と、世の人つまはじきやすらん。ある人のいへる、山棲のたのしきも、國の趣をかへ

花は散りて云々―芳野山やがて出じと思ふ身の花ちりなばと人やまつらん
山ごもり―西行上人
車につみて

上以茅覆之、且東西壁外簷下垂葦簾、簾中蓄柴薪、以防山嵐之氣、唯雖外除之、然春朝秋夕座望戸外、則粟田獨秀如意叡嶽、低昂斷續、青濛々雨陰々、北牕相對。黒谷吉田、峻宇層塔、映帯竹樹如畫。丘陵田野似織。或聞野鶯水鶏、或聽鵑聲鹿鳴、松風颯々、草蟲啣々、足以爲閑友矣。北籬外泉聲潺湲、恰似枕流、而有乞火喫茶之憐、扶老最志誠、薄命之病隱、舍此又何處耶。然土木之費今靡所辨、默而止矣。噫、斯言爲誰書而遺之。惟是解憂遣悶已。

しかすがに山住も長閑なるのみにはあらで、夏の毒ある蟲の喙をいたみ、冬は霜ゆき氷の朝な夕なは、いかに思ひきゆらん。花は散りても暫出でじといひし山ごもりの、住までもあはれを知らんやはと打泣き、又雪のふる日は寒くぞあるなども云ひつる。三年がほどの有様も、おほながら心の通ふなりけり。其住捨てし跡、をちこちに見れば、修行と云ふ事のいみじさ、なほ人の學ぶべからぬをさへ思ほゆ。又世の亂に都の内外も荒れにあれゆけば、只かりそめの庵づくりを、車につみて彷徉ひありきしとや。あなう、柄繫折れ、柱ゆがみて、すきまの風をやいたむらん。かくても世にありふべきは、修行の大事にや竊されけん。さるかたの敎、ふつにおほし知らぬには、いぶかしむべうもあら

も若きより家つくる事をあかぬものから、この文のをかしきに附きても、心をこそ山住にはえなさゞれ、住む庵ばかりはとて、をちこち思ひめぐらすに、まなこしひまどへるには、便おぼつかなき境には、心ばかりもえゆかで、南禪寺の内に、昔しばしが程假初ずみせし庵の、今は荒れにつきて、野となりし處をなん、先思ひよれるまゝに、彼博士の、人の爲にと云ふ。我そのすき者と名のらん事、人笑に、かつは物狂はしけれど、心ばかりに云ふ。

一室僅八席、中以四席、爲起臥之處。而左右四席、以居常當有物備焉。南面亙席、設戸、開闔如常式。戸外竹緣、國語云須乃古。廣四尺長九尺。西磚地三尺、以使昇降。緣外以葦竹造矮籬、庇下垂葦簾、蓋炎夏庭地焦燥、烟氣蒸室中、故將禦之。籬上或竹欄、可以倚肱。宜納涼、宜翫月。室中東壁亙四尺、所藏之書畫一二幅展觀焉。其北鑿牖置文机、又北火坑爐、架上置飲器茶具及米鹽焉。西壁亦鑿戸牖以昇降。但使客不入耳。其北一席垂梅花紙帳、以爲藏褻衣被褥之處。北窓半席、開戸迎風。戸外板緣、東庇下竹架上、水甕湛飲漿、但烈寒之夜不貯。恐堅氷破裂。西北東司別宇以廊通之。廊間置水盤、且火爐沸香湯以避臭也。然小室不堪寒暑。故屋

須乃古—簀子

梅花紙帳—梅花を畫ける紙帳

之、如常式。乃環以縁、縁方言也。戸外簷下、連布竹或板、以便登降、猶衣有縁。縁外置水盤、連筧引水以盥漱、又以灌庭中草木。室西北必墻壁。壁下鑿低牖以通風。互席亦設戸開闔。或垂葦簾可。北距墻壁五六歩。就建書庫、西北隅植竹、以遮夏日。東植梧桐數十株、以障朝日。厠溷必於室北。巽屋別墻。架板爲歩。低欄左右、防傾跌。溲缸圂在厠外、俱勿及日。即及日、臭甚蟲生。方暑登降圂、穢雑不可耐也。其製以意消息可。浴室必於室東。勿與溷相及。世人與溷相鄰、浴時臭大不淨潔、是皆以燕居之室、及書齋四席半六席八席而言。若其正堂、自有定法、然不失此意而可。余性苦熱。夏日屈膝危座、倦憊殊甚。於是有書齋別式、以四席半六席爲限。營造依前制、不用縁板。磚地設榻或椅、皆倣漢人居。鑿北壁設水盤茶具、茶人謂之庋者、具噴壺以洒磚、庶可以耐煩歊。冬日別制牀、以排布磚上、仍席如常式以禦寒。到夏則徹去其牀、是一室二用。嗚呼此營、不過費三四十金、事可辨矣。以財乏且居屢徙、故竟不果、可歎。因以遺好事者、可謂爲他人作嫁衣裳矣。又哂曰、富貴之家、冬夏適居、何必一室二用。窮措大之言、往々如斯。

これや文に心をやりて、ねぎ言をはたさゞりしは、いとも有難き人の心なりける。己

れば—一名闘鶏野、昔大伴黒主ある時二鹿の問答を聞きぬ後夢に牡鹿は人に殺されしを見人をして之を窺はしむれば果して然りと

しかぞとも住もさだめずなくねかな山邊にいまは入らぬ許ぞ

あした野にゆくをのこ等が、夜べの鬼の聲のおそろしきを聞きつやとなん。山遠き里人は、聞きしるまじければ。

○鶉居　其二

世を避くる人のかしこきに倣へるにはあらで、たのむ陰を、加茂の古堤のほとりに、おしふせたる庵づくりして柱にかいつけゝる。

里住の松のとびらをさしこめてこころを山のおくになさばや

又ひとりごたるゝ、

たえだえの宿の煙に身をなさてはひかくれなん事のかなしさ

老朽ち、まなこやみ疲れしには、身投げてんふかき谷をこそ求むべけれ。あはれなる山陰のすみか、いかで思しよるべきを、彼五井の何某の書きおかれし物の中に、いとをかしき事をこそ見出でたれ。曰く、

造レ室法、僧兼好云。以レ宜レ夏爲レ佳、確言也。余衍二其説一云。開二谿東南一、仍設二戸套一而收

ほうの木—厚朴
いはうじ—奥様
兎賀野なら

し出で給ひて、夜更くるをもしらず、舌とく御座すよと云ふ。飛彈人ふところがみの中より物とり出でて、是なんさきに見せ給ひし、秋鹿よぶ笛を、この頃の暇につくりて侍る。こゝろみさせ給へとて見す。ほうの木をすんばかりに、げたにはあらでけづりなし、鹿の子の腹皮もて口をつゞりなしたり。我もたるをもとうでて比ぶれば、あらたにこそあれ、たがふ所なしと見ゆ。いざ吹きてこゝろみ給へ。まなび傳へたうびてよと云ふ。とりて音を入るに、所は山邊ならねど、松の下庵の風に吹きあはせては、外に悲しとも聞ゆらんかし。飛彈人はやく學びとりて、いはうじの御目こそいたく重げなれとていぬ。門いでて、二十歩ばかりや過ぎらん、しらべ高々とふきつゝ行く。我もいで吹きあはすれば、草むらの蟲どもの聲たえたるは、聞知らぬにか、かれも戸に入ぬるにや吹きたえぬ。この飛彈人は田舍ならぬ木工の頭にて、かうさがしき業をなんしなへる人なりける。歌よまずばとて、ふし戸にも入らず。

たれしかとねざめてや聞くなきかはす秋の末野のさよの哀を

あしびきの山のさつ男がよぶ鹿のをぶえに秋の風のかなしさ

兎賀野ならねば、こよひに絶えるとも、人の心をわづらはしめずこそ。刀自もよむ。

豊前にあり 宇沙都比古宇沙都比賣神武帝を款待せんとて造りし宮

杵築の宮—豊後速見郡にあり

能仁—釋迦

澤邊の鶴—詩經に、鶴鳴九皐聲聞于天

りしきて住むべきを、ほど〳〵と心得たらんにも、たゞ便につきては、いつも〳〵神にわづらはされて、身の程を忘れゆくめり。そこは神の御使して、雪見る窓をもよほし來るよと云ふに、飛彈人片ゑみして、我ともがらの願言に、ぬしは堅かれ、柱は弱かれと申すは、此御物語にも叶ふらめ。壁ごとに窓ゑりはたし給ひては、又立ちかへり、さむ風の爲にふたがせ給へ。さらずば何して世をはひわたらん。岩根したゝかに杵築の宮つきならし、木曾の山吉野の奥に、いづみの杣人入りみだれ伐出しつゝ、つくりみがかせし寺も、神やしろも、天狗と云ふ神のほこり來ては、跡なくほろぼすを見れば、おろそげに時々つくりそへ給へるをこそよかめれ。あなさがしの我をわづらはす神事や。孔子の教、能仁の道のふみも、註かく人の、おのが心のひく方にことわり云ひまぐるよ。ひとゝせ九重の内外名殘なくなりし時、一劫と云ふ灰は是にやと、人の泣きかなしみし聲は、澤邊の鶴ならで、天に聞えあぐるばかりなりしを、我獨さがしだつにはあらで、

　四のうみ靜なる代にすむ民をしばしの波の立居をぞ見る

と云ひしを、宜々しく云ひたりなど云ふ人も有りけりと語るを、刀自かたはらより、文よむと、この墨わづらはすとには、よくもふかう思ししみ給へるには、さまざま空に思

待兎支那の古諺
一家言—李笠翁の著
李唐—唐の天子の姓は李
かゞよひ—耀き
おしゝりたる—治めたろ
兀たらんにも—木を伐り盡しても
足一きざみあがりの宮—足一騰宮

れど、財乏しさに、なさばやと思ふつくりわざまをば、文に書きあらはして思をやりたるは、物しりて心の高き也。又思うてのみに爲さゞるは、李唐の高祖の、隋の時の宮女を召しつどへて、物がたりせさせし中に、年くるゝ夜に、大宮の内ともし火をかゝげず、玉のいと大きなるを間毎に釣りたれて、庭火たきほこらせ、其光をうつしとりて、かゞよひかはせしかば、さしも廣らなる殿のくま〲おちなく、見渡されしと聞き給ひて、心しばし是に醉はせ給ひしかど、立ち歸りて、あないみ〲じ。さることのはて〲は、我に國をさへあたへつるよとて、いよゝつゝしみいませ給ひしとぞ。萬おのがほどをかへり見てすべき物に云ふ。されば天の下おしゝりたる君の、そればかりの事何かはと云ふべきを、思ひのまゝにはせじとおぼしゝこそ、三百年の久しきを保ち給ふべき初の君なればなり。蜀の山兀たらんにも、猶つくりはてず。都をにしひがしに廣めて、殿の名こと〲唐の代にならはせしも、天曆の火に跡なく成んては、やゝ下りにくだりて、蘆のすだれ、うばらからたちの垣、賤げにめぐらせ給ふ、かなしき御世も有りしと云ふ。古に又立ちかへりて思はゞ、足一きざみあがりの宮、尾花さかぶき、黑木の柱のためしに、いたくかなしぶべきにもあらじ。まして己が友のふせ屋のひた出に、稍がらのむしろ取

につきて―敬禮して
おに〳〵し―恐ろし
くすし―醫師
笠翁―李笠翁、清の傳奇作者
舟にまじろし云々―刻舟求劒守株

たはれごととしてあらせるを、人は知らで、おに〳〵しとのみ忌にくまれ給へれ。此御有さま、さいふ人々に見せ奉らぬが口惜し。兎まれ角まれ、かしづきはつべきには、憂しとも恨めしとも思はで、たゞ〳〵夢路のたどり、一夜の草の枕に思ひ過して侍ればとて、打ちしづもりをる。竹の戸やをらに推しひらきて、寐やし給ふらんと云ひつゝ入りくるは、此里に住みふりし飛彈人なり。やゝ寒うなり侍るには、己がわざの暇のみになりぬるを、くすし許にはおはさずぞ侍る。雪見給ふべき窓あけんとの給ひしは、いかにと云ふ。さは云ひつれど、此ごろの貧しさにはえせぬ、いと口惜し。あはれ〳〵、寶だに乏しからずば、此森陰をも建ちふたげてんものをと、時々打ちうめく。この煩はす神こそなつかしけれ。この神は世の人にもつきて、物に狂はするが中に、茶かきたつる人々こそ殊にも煩はさるれ。其友どちばかりあはずには、たゞ〳〵轍のあと聊かも踏みたがへじとするよ。笠翁と云ひしすき人にも神のつきて、西湖に臨む家づくりして、さま〴〵工みなせしが、其こと〴〵に我より出でざるはなく、船にまじるし、株を守る人をあざめる其事一家言と云ふ書に見えたりしが、我も此人にならはまく思ふは、たゞおろそげなりとも、便よからん事を宗とすればなり。昔五井の何がしと云ひし難波人にも神のつきた

藤簍冊子　巻之六

鶉居—不定の居所

○鶉居

つながぬ船とこそいへ、波によせられては、しばしとまりの岸も有りけり。長柄の濱松の林はすこし隔たりたれど、鄰れる杜の神の木の、千年の陰にさしおほはれて、よそよりはやき冬ごもりの竹の編戸を、夜は引寄せしまゝに、是をも頼るゝよと獨言つを、刀自が聞きとがめて、よしや、釘さしかためし小がな戸も、君いまさぬ夜は、昔は物すさましかりしを、今の時々のひとり寐、念じわびつつもあかすは、齢といふものゝ心得さするよ。よう年をわたりて住みつき給はぬにも、めでたしと思ひし家には事しげく、君がおぼし知らぬ物うさの侍りしを、此草むらの宿には、かうのどけき世も有りけるをと、詫さにかふるには、善しとも悪しとも思ひ定むる心なんあらぬと云ふ。あなかしこし、さらずば如何でかゝる物狂を見つぎて、三十年が程をねんじ過させ給はん。我爲のまもり神にておはしけりと、首をむしろにつきて、手をすりあはす。打ち笑みて、かう常にも

首をむしろ

なかき息―長大息

くいの八千度―先立たぬ悔の八千度悲しきは流るゝ水の歸りこぬなり

た親のうみのたま物なれば、我なすわざかは。養父、名は畜、俗稱は養三郎、父尚正、俗稱は丹助、安永七年、齢六十五にて世を去りぬ。母ふさ、窪田氏、今年齢八十五。いとも世に有難きかたり言になん侍る。于時享和二年三月かいしるしぬ。

母刀自―刀自は婦人の尊稱
國のいましめ―國禁
つばらに―詳に
日を愛すべき―孝子愛レ日楊子法言に出づ
水無月ならぬ汗に云々―不暑而汗即ち恥づること

いふ人、六十踰るまで、母刀自につかふまつり、千々の一つもたがはじと行へるを、國の守召上られて、しろがねあまた賜ひ、且國の戒をゆるべて、絹著ることを親子ともにゆるさせし事を、遠く都に在る、其弟宮河保恭と云ふ人、はかせ皆川の翁に請ひて、つばらに記させ、國に贈りしなべに、我にもことくはへてよと、人して求めらるゝ。我この人を相見ず。且皆川がしるせし事、再び述ぶべきにあらず。さりけれど世の寶の子の、六十こゆるまで操のたがはざりしことを、羨みつべきものに、世語ども一二つ書出て贈り侍る。噫父に別れて四十餘年、母二人、さきなるはいときびはにて、面をだに見知り奉らず、後の母は今已に十四年のむかし人となし奉りぬ。いまそかりし時は、日を愛すべき心を露ばかりも持たらず、大方の事ども御心にたがひて、重き罪かうむりし者の、いみじき人のうへを思ふには、水無月ならぬ汗に衣をとほし、ながき息をのみ續るゝこそ、いともうれたけれと思ふも、くいの八千度かひなき事になん侍る。養父の父倘正と云ふ人、國ぶりの歌をよみて翫ばれしとや。父の好める道なりとて、次で學べるも孝の篤きなり。我も歌よむ事を深う思し入りたれど、父母の庭の訓にあらぬには、私ごとにして、是も仕にたがへる一なりけり。さるは何の徒なる名をやもとめん。さがし愚はは

知識―僧

かうの殿―國守殿

黄かれ白かれ―金銀

曾子のふみ―孝經

陵遲―事の次第に衰ふること

伊豫の國大洲のうら邊に、いさりする人の子とか、知識の名天の下に聞えたまひしかば、國の守の菩提院に召れて、道の教を聞せ給ひし。この便につきて、まづ母の老いておはすを拜み奉らんとて、詣で給ひしに、母のいはく、思ひきや、蜑の子のかく尊きになり昇りて、かうの殿の御召をさへ蒙らんとは。されどそれたゞ才能のかたの學をえて、まこと佛の教には疎きにやあらん。さき〳〵の便ごとに、文に卷きそへて、黄がね白がねを送りたまはること、いかなる心ぞや。今の子の立走りて、網曳釣だにせば、たふとき財寶をも何にかはせん。この贈らるゝは、世の人の佛に奉りし物ならずや。さらば道の爲にこそちらすべきを、淺ましき世わたりする身の、是を納めて、いかばかりの罪をかむくはれん。親の爲思はぬなり。いと恐しさにかへすぞとて、包めるまゝあまた投げあたへぬ。大德おそれみかしこみ泣きわびぬとや。これら人の語りしまゝなれば、まこと僞はしらねど、學ばでも斯く尊き人もありけらし。庭の訓を受け、曾子のふみをよみし人の、かたはじだにえ行はぬは、なべての事陵遲とかいふ文字の心にながれくだりて、誰もつとめねば、たま〳〵なるを召上られて、物かづけ、名を旗にしるさせて、家の風を國にひゞかせ給ふこと、いと賢きまつりごとになん侍る。伊豫の國今治の民矢野養父と

おほやけ—朝廷
うたへ出ん—訴へ出ん
おとゝえ—兄弟
物かづけ—物を賜ひ
大とこ—高僧

惜むまめ心を、あたりの人の見聞きて、公のみことのまゝに、うたへ出でん事を告しらせしに、あなかなし、子の親に事ふるをほまれとせん事、いとも恥あることとなり。我はあからさまにこそ物すれ。召れて物問せ給はんに、何とかは答へ奉るべき。うたへ出でられぬさきにとて、母をおひ、をさなきが手を引きて、夜にかくれ、いづちへも逃去んとす。家ぬし鄰の人々あわてまどひ、かくたふとき志を奪ふべからずとて、うたへの事止りぬ。今は昔の御宮づかへに召かへされ、家をおこし給へりとや。又我難波の故さと人の、母一人を、兄おとゝ妹はらから三人がかしづきて、兄は老いゆくまゝに、娶れといへど、いかなるものゝ出來て、親につらき事やあらんとて迎へず。弟といもうとは、人の養はんといへど、母の傍をさらじとてゆかず。母物に詣でんといへば、おとゝえ二人して輿にかきのせ、になひもてゆく。妹はつとそひて慰むる、はたおほやけに聞し召れて、物かづけ、重く賞せさせ給ひしなり。或人の母是を聞きて、あなたふとし、かゝる寶の子を産みならべし人は、神ほとけの化身にや。たゞいぶかしきは、めとらず、養はせず、後いかなりともはかり思はで、其こしに乘りて出遊ぶらん親の心こそしらねと、我にかたられし。これも世のことわりに承り侍りき。又鎌倉の何がし寺に住せ給ふ大德は、

さがしおろか―賢愚

あけまきめざし―何れも幼者の髪

○旌孝記

人の世にあるや、大かた才能のほまれの、名を求めて知らるゝと、求ずして聞ゆるの、さがし愚のけぢめはあれど、此二つは倶に徒事なりける。子の親に事ふるこそ、このいやしき名を思ふにはあらで、親の給へるうみの眞心をしも損はず、學びて行ふと、庭の教をかうべにして務むるあり。又學ばず受けず、只露ばかりも違じとする人のたふとさよ。近き世に見聞くは、いと貧しき人の子の、まだあげ巻めざしなるほどより、誰が教を見聞くにもあらず、いと有難き志もてつかふるは、うみの寶の子とこそ思ひしに、やうやう生長ゆくまゝに、そこに在りとだに聞えぬは、いかに成立ちけん、いといぶかしうもこそあれ。つかさ位高き公達は、御親兄のまへに冠を正し、容つくろひ、ゆめたがはじとかしこみ給へば、御心の怠はいかなりとも聞え流れずおはせりき。富人の子も是にならひて、よしあしの名は世に聞えぬにや。今の世語に人の聞えし、都六條わたりに、馬場の何某と云ふ人、兄の病して、儚かりしことにつきて、事ふる君の御いとまたまはり、母一人、兄の子の幼をつれて、市に隱れたりしに、親をかしづき、みなし子をいと

十日にひと度—諺に五風十雨

竹のねぐらの云々—雀躍して喜ぶこと

さいなまれん—責られん

うらぼん—盂蘭盆

けてより雨ふる。うま時にはれぬ。十日にひと度のためしいとよろこぶべし。里人云ふ。是や錢米の降りたるなり。野分だに吹きあれずばと、竹のねぐらの雀をどりして、喜ぶさまいとたのしき。あやしの小家どもの垣根を過ぎて、かたるを聞けば、此雨よ猶ふれかし。田ばた大方にゆきたらひぬれど、あすあさての程や、又せき入切りとほし、露のいとまあらんやは。我ともにあづけし里長達の笑み誇りたらん、中々につらにくし。年もやがて暮れゆくべきを、今より思へば、しもと杖打ちふりてさいなまれん。あさましの世やなど、己がどち〳〵言合へなげく。あく時しらぬけに、さこそは怨むれ、うらぼん來たらば、をどりて遊ぶらん。秋の祭には物むさぼり食はんなど、是打樂みつゝ待ちたらん。喙長き鳥のさる階々の人がらなれば、此いひごとは神も罪ゆるし、佛菩薩もあはれと見つがせ給はんものぞ。たゞ〳〵錢の神ばかりは、塵もつかじと、よらせ給はぬ人のほどなりけり。

右寛政十年の夏五月廿日まりより、文月のつごもり方までの事を、日なみのさまに唯心尼に筆かはらせし、山霧の記といふ中に書出せし也。目おもくやみていたはりすと、河内の日下の里の、正法寺と申す御寺にやどりして、ありし時のことなり。

まれく―薄の風のなびく形容

常夏―野生撫子の異名

家路のつと―家にかへる土産

誰をかも松の木陰の花すすきまねくたもとにかよふあきかぜ

かきつばた

かきつばた手折る袂の露にさへ濃きむらさきの色にうつろふ

朝顔　　常之

日影さすにほひもはかな中垣に露おきまさるあさがほのはな

常夏

夏草にまじりて咲けどなでしこの露に秋そふはなのさかりは

菊　　唯心尼

山蹈の家路のつとに折りてこし香ぞなつかしきしらぎくの花

桔梗

あきちかうなりも行く哉故鄕の野らにと宿はすみはそめねど

翁もまめと云ふに[illegible]

むら雨の後のあしたのをみなへし誰にわかれの露のなみだぞ

重正けふ來たらず。歌よまぬ人々も、花になん心つくしして、文月十一日、昨日の夕づ

慾以勝障氣援欲以爲植軍還載之軍
くゝたち―莖立
ひねもす―終日
草香江―河内國にあり

く木にもをさ〳〵劣らじものを、それは花散りて後、葉のくろみづき、厚肥るがうるさし。けいとうの花、くゝたちよりもいとたけ〴〵し。養ひえては、猿田彦の神の、すめみまの尊のみさきおひて、つきならし給ふ長鉾は、是が形したらめ。猶多かめれど、から名やまと名の正しからぬはおきぬべし。茶かきたて、餅くだ物くひつみつゝ、ひねもすなん山里のさふ〴〵しさも忘れたりな。簀の子にゐざり出てさしあふげば、伊駒高根に雲も居ず。草香江の澤田の千町、はろ〴〵と青やぎて、鳥の聲は、此岡の松のむら立に囀りかはし、草むらにすだく蟲のね、心細げながらも、いとなつかしう哀なり。かれも是も我を慰むよと、おぼしよろこべるにも、たゞ春の霞秋の夕霧ならで、物のあや見さだめがたきひとつなん。我身に寒き秋なりける。人々歌よめり。

萩　　租榮

さをしかのまだきこひせぬ秋の野ににほひなつかし秋の初花

はちす

吹く風に露もこぼさぬはちすばの花に朝日のひかりまばゆき

すゝき　　公達

上天皇の御宇の勅撰歌集

さらしなの記—更科日記菅原孝標の女著

むせる栗の如し—源順の賦に花色如蒸栗

承和—仁明帝の御宇

師—釋迦

薏苡—後漢馬援在交趾嘗餌薏苡實用能輕舟省

る、しのゝをすゝき、まだき穂に出でねど、袖打ちふりて人まねきたらん。秋の野末のあはれ忘れんやは。をみなめしをむせる栗の如しと云ふは、文字のたがへるにて、何某の璧の賦に、黄なるは蒸栗に似たりとありよと、江の帥のいはせ給ひし、寔に栗は蒸ずとも黄なるをや。菊は唐よもぎといふ名、歌にはよまねど、此花や承和の御時にめでそめしともいへど、それは唐國のくさはひにて、こゝにも秋の山路の、露霜によろぼへるが、花に似ぬ香の、いきゝの袖にうつす許なるは、久しき代より有りけん。よめが萩の花の今も摘みはやさぬ類にやとも思さる。此くさ〴〵は、古よりめでやせるにつきて、歌にはよむを、是があまりなるも、色香などや劣らん。檀どくの花と云ふ名は、本師の菜つみ水くみ薪こりつゝ、道學ばせし山にや生出でけん。さるは御寺ごとに植ゑおほし給ふべきくさはひなりき。射干をからす扇と云ふ名、物に見えたる、是が實の黒きをば、ぬば玉と云ふとぞ、古ごと知のいはれし。漢の馬援と云ふ人、薏苡の實を七車に積みて、夷の國よりもて歸りしと云ふ。光をおび、かつ粥にも煮てくらふと聞くには、野なる眞玉とは、是をやと思ゆれど、射干玉と正に書きしをもては、まがはじと云ふよ。名と物と、いにしへより呼違へつるが多かれば如何にせん。秋かいどうは、花の色、春さ

何がしの亭—東坡の喜雨亭
花々あはせ—昔花を左右に分ちて優劣を爭ひたること
はとり—服部、古の機工
蟻の火ふき—桔梗の異名
奈良人—山上憶良
後撰集—村

みな月つごもりがた、むら雨一日ふた日降りとほりて、秋の初風すゞしきあした、此里の人々、みとしおひ榮ゆらん事を喜びつゝ、我やどりを、もろこしの何がしの亭に準らへて、人々とあつまり、ひと日くひのみしつゝ遊びのよしろなべに、前栽の花々あはせしてん。それいとをかしき事なりとて、さま〴〵花瓶とりなみ、露打ちそゝぎつゝ、枝たわめ葉すかしなどして、是觀る。めづらしく心ゆく遊なりけり。其草々や、夏秋のけぢめをいはず、おのがまゝに咲きほこりたる、呉の文の服部らがたてぬきの工にも、まことの色香はひときは匂かにこそあれ。萩が花のやゝほころびそめし、桔梗は唐ごとにこはごはしけれど、蟻の火ふきと云ふ名の、歌にはまねぶべくもあらず。白きはちすの花さゝげ出でたるは、いくらの城にや代ふらん。無價の珠とは是をこそと思ゆ。かきつばた時過したれど、猶色あひは勝れたる、高きつかさ人の袖たれて御座すらんにむかひや奉る。一日の榮の朝顔は、奈良人の、秋の七種にかぞへしは、むくけなりしとぞ。なでしこの花、唐やまとのくさ〴〵多かめれど、古き歌物がたりなどに云ふは、水かれし川邊の眞なご原、草むらの中より、なよびかによろぼひたるをぞ詠みたる。それは秋の末、神無月の比までも、かつ〴〵咲きのこりしを、後撰集、さらしなの記にもいはれた

あはと見し—あれと見し

禮月令—禮記の月令

あはと見し舟は入江にこぎはてぬ千里や來けんながき春日に

春行

この春は花見がてらのふるさとに散りての後も日數へしかな

春眠

いぎたなき朝戸を洩るる花の香に日影も高し起きよいざ子ら

春宴

此殿のよはひをいはふ庭もせにあすは雪とも咲くさくらかな

この筆とる人は、翁をよくすかいこしらふる人なりけり。

○覆舟硯　此云不世賀太

硯材以豫章者、蓋神代之遺制也。覆舟之名見禮月令、及古事記播磨風土記等。所用文成筆止覆而置之。別不以蓋也。訓不世賀太。因播磨風土記爾云。

○雨かはづ

つかさのいろ—六位の官の色は緑なり

いさら—小さき

めはる—萌芽

尙日高し。歌よめとて、えらべる題、追擬十春。そやの鐘鳴りてよみはてぬ。

春天

風もなく晴れたる春の空見ればつかさの色はみどりなりけり

春日

日を春とおもひそめけり垣めぐるいさら小川の音のとよけさ

春雪

あわにふる春の雪まの春日野にしめしやけふと若菜つむひと

春水

山の井の淺きになれて掬ぶ手のしづくもこほる春のあらしに

春風

めはるより枝になじめる春風の訪はぬ日もなし野路のあを柳

春野

くさしげみあすの御狩にしめはへしかたのの櫻今さかりなり

春江

華經を講ず

夢見草―櫻の異名

そゝや―すはや

效なくたゝん名の惜し―周防内侍の歌

爪くはれ―耻かしく

かへりし河風いといたう寒し。しかならん夜ごろに、醫師の門けはしく音なひて、さりがたき方のむかへ來たる、立出で見れば、空たかく、星きら〳〵しくかゞやきたる、身にしみとほりて寒かるは、おのが上にもむかし思ひ出でらるゝを、また年ごとにはあらねど、

戀ひくれば吉野のやまぢ風冴えて花のはやしに雪ふりかかる

右春寒

あわたゞしく風に散る花故に、夢見草とはいふよ。そも躬恒の君にや基きけん。年越ゆる夜の敷寐のならひの、是や夢の浮橋とも云ふべし。さてしも云ひつゞくれば、後はた取り返さまほしくこそ。そゝや、效なくたゝん名の惜しといはれて、むなしく手引きこめたらん君は、爪くはれ、如何にさふ〴〵しくやおはしけん。

右春夢

蛙のよぶと—雨に前だちて雨蛙のなくは妻をよぶなりと

しくものなし—てりもせず曇も果てぬ春の夜の朧月夜しくものぞなき

比良の八講　十二月二十四日比良明神の祭禮に延暦寺僧法

雨ははるさめぞおもしろと云ふ。花の父母のやうに言へど、うたて嵐のさそふ散がたには何とか云ふ。蛙の妻よぶと聞く人もありしが、おほかたは、雨もよの聲とて、衣とき洗ふ乙女らが憎しとうらめるものを、澤田に水たくはへまくする里々には、かしましものともいはで。

右春雨

雨もよならでも、月は霞める宵々を、よき人のしく物なしと宣ひしは、思のいたりがたうこそ侍れ。

右春月

春寒しとは、鞍間の初とら詣、比良の八講、かすが祭の御つかひざねの御装束の、杉の下道、雪解の雫にしとゞに立ちぬれさせ給へる、又東大寺の羂索院の修行する夜、つぼねして居明す。いかに寒からん。難波船のみを曳きのぼして、淀わたり過ぎ、伏見の岸まだ夜ぶかければ、宿の戸あらく打ちたゝかするに、應々とのみに、明けぬほど、さえ

の嶺打ちこえて、吉野の方も見ゆると云ふ。藤原のみやこ人のよみたりしをおもほゆ。

見わたせばかすみかかれる山々も名にはかくれぬ大和國原

三輪山なん立出も走出もよろしと見る。昔まうで侍りし時、よぶこ鳥のしば鳴きし事おぼしいづ。

しるしなき音をも鳴くかな三輪山の杉の木むらに誰呼子鳥

右春山

三輪川ははつせ川より流れて、末は龍田の立野にいたりて、立田川とよびしを、今は大和川とよぶ。それは河内の國に入りての名なるをや。紀路に落來てよしの川とよめる。山城川を遡りにとは、まだ難波江こがするほどの御歌なるべし。さる遠しろき流も、野路のいさら川も、池沼も、凡てぬるめる春は、魚も千里にのぼりゆくとや。それは師にしたがひて、道にすゝむたとへごとゝも云ふ人あり。

右春水

大和國原—大和國、國原とは國土の廣大なる所を云ふ

山城川をさかのぼり云云—この歌は石之日賣命の御詠古事記下巻にあり

にほひかなり―韵致あり
駿河なる―駿河の富士山
尾上―峯

あかつきは春こそわきて、峯の松のひま〳〵あかねさし、横雲かゝれるあしたは、えも言れずにほひかなり。風さと吹きて、花の香おくりくる其方を見れば、鶯の舌とく鳴きて、枝うつりする樣うれしげなり。旅たつ人の、馬の上に殘の夢を見つけるに、衣はゞき、露霜にぬれとほりて、いといたうさむし。山さくばかりの雉子の一聲には、目やさむらん。染ぎぬにも、花鳥ぬひちらせしすそに、ほの〴〵なるはめでたし。

右春曉

山は駿河なるぞ、御國の外にもたぐひなく高きと、夷の國人の、こゝにたゞよひ來て物語りしを、なにがしの法師のから歌につくりて、世にとゞめられしを見しが、都方には日枝なん秀でたるを、近江の人は、比良倘たかしと云ふ。駒とめて、此をのへの花見し人の目こそうら山しけれ。我ふるさとにては、武庫山さしもそびえたちたれど、たゞあか金を打延びたるやうにて、見のうたてし。いこま嶺朝ゆふに望まるゝ。此東おもてなる大和人も、おなじながめに云ふは、形なり整ひたればなり。又是につゞきて、葛城や高間の山、ふたがみの峯々を西に、春日高まど、布留三輪はつ瀨、南なる隲むち山、たむ

魏々―盛大の形容
仕丁―雑役に使はるゝ者
松―松明
もんりうの御かた〴〵―一門の分家の方々
みどり子―幼子

あたゝかならん人は、是かいそゝぶりても遊ぶべし。

右春陰

夜はなほ長きをなげく老こそあれ。住むあたりのつい垣をもれて、三くさの笛竹の音、空にすみのぼり、魏々洋々のしらべ、雲のうらより落ちくるを聞侍るには、いかばかり御心すさびし給ふらん。知らぬにあはれのすゝめるは、世にめでたき物の音なればなり。七日の節會の夜、日の御門の前に、御轅いくらかき捨てて、仕丁等檜垣の人やどりにかがまりをり、火たきほこらしつゝ、手足あたゝむる、初夜過ぎぬらん、ねり出でさせ給ふ。松あか〳〵と照りさせ、もんりうの御かた〴〵、左みぎにそひ、音から〳〵と滑り出でさせ給へる御かたちども、世にゐやゝかに尊く拜まれさせ給へるは、たとふるに物もあらずなん。誰やの軒に泣きこゞゆるみどり子の、沫雪ふり懸れるを見つけて、あたりの人よりつどひ、如何に〳〵とばかりあはする。あはれ〳〵、捨てし親は何地にか這ひかくるる。すべなき世に在りわびてこそ斯らめと、いきゝの人も打ちひそみぬべし。

右春夜

酒壺の君—大伴家持、萬葉集に讃酒の歌あればゞ也
如來—釋迦如來
提婆—提婆達多
玉水—雫

永き日ぐらし、土器とりはやさせ給はん、生きての世にだに樂しくば、蟲に鳥にもよしならばや、と宣ひし酒壺の君の醉泣も、春の花のもとの遊、たぐひあらじと思ふを、秋の月の前にはいかでとや。春秋の爭といふ事して、立ちむかへる宮びわざの、おのがひくかたに、しひて言ひ定るよ。それさもあれ、道々の教にも、我ときえたりと誇かなるも、己がまことの心にはいかゞ思ふらん。問へかしな、是きくわかき人は、あが佛ともおしいたゞくべし。如來の提婆をしをり給へりしかば、かくまで我をさいなむは如何にと問へば、不平の心には、おなじ心してと、こたへ給ひしとか。爭の直からぬなんかゝりける。物いへばよそ〳〵しくなりもて行く。老は誰しもしかりとや。春に心よすとも、秋のあはれ思はざらんつれなし。

右春晴

霞引きわたし、曇りげなるあした、やがて晴れゆけば、九重のとのへにめぐれる山々の、大かたは見どころなるを、ゆかで思のいたれるを、若き人しらんやは。

又八重雲たちかさなるけふは、雪か雨かと見る〳〵、ふる屋の軒の玉水も、たる氷も、心

火とり―火爐
清原なる人の女―清少納言
つぶれ―部屋住

うにて、彼十の題ばかり書列ねて見するなりき。さかしき人のしわざやとて、取收むともなしに、机のはしにおきぬ。その人あしたとく來て、よき茶くだ物たいまつる。きのふの題の心うけ給はらばや。御枕の硯に、筆かはらせたまへと云ふ。つらつきいとにくけれど、けふは何して永き日暮すべきと、おもひつる心になだめられてぞ。いかさまにもはかりて、翁をもてあそばせ給へとて、火とりの肩につら杖つき、此さがし人に物語りするやうにてなん。

むかし、清原なる人の女の、世に優れて賢きがおはしけり。をさないよりも、親の慈みのあまりに、唐やまとの文らひろく讀習はせ給ひしかば、やう〳〵およずけゆくに、自から女々しからざりしかば、後はたよからじと、私言する人もおはしけり。年月におほしおきたりし事ども多かりけれど、家やまづしかりけん、紙のとほしさに、徒にえしるさでなん過いたまへりける。つかふる御かたの、何のろくにか、よき紙あまた賜うびしかば、局のいとまある折々、筆とり、心のゆくまゝにつゞしり出し給ひけり。其はじめに、春もやう〳〵明けゆく空の景色、先おぼし出でたる、よむにさへ心長閑くぞありける。睦月のおほやけ事はたさせ給ひては、いとまありげにて、宮人たちの櫻折りかざし、

六如上人―詩僧京都知恩院住

むるゆふ暮ならずかし。世に風を待ち、風をいとふものすくなからず、たゞ〳〵人の音づればかり、絶えず吹けかしと思ふも、老いて物がなしく、心のひまの多かるになん。

○枕の硯

盗人書をとらず、鼠硯をひかずと聞きつるを、怪し、我あらぬひまに、只一つある硯を、蓋と共に割棄てしは、人のしわざにはあらじ。神やなしましけん。さは老いほれて、徒徒しきすさび已めてんと思ふを、猶いとまある心の煩ひては、又も求めまくす。價たふときはいかでと、木に作らせしを、是はた神の燒きほろぼさせ給はんかし。此あらたなる友を枕邊におきて、夜はつれなし、あしたより問ひみ語りみなぐさむなん、人笑へとしもしる〳〵。

此頃人のかたりて聞せ給へる、六如上人の十春のこと〳〵、玉の聲なるに次ぎて、人々のおなじ響をなん、さえ〳〵鳴させ給へりとや。我にも是に大和歌よみ次ぐべく求めらる。いと思ひもかけぬ事なりとて、打ちそむけをる。御心にたがへるは、御かんだういとかしこし。をかしき物語もとめ來て、罪あがなはんとて、いにし跡に、おき忘れしや

大德—僧

ふん土の墻の手枕—宰予の故事、論語公冶長篇にいづ

常陸の海—草若み常陸の海のいかが埼いかで相見ん田子の浦波

つら杖—頰杖

抜きて見たれば、思ひぞ出づる。こは此春、翁が與へつるかしまし物が上を、なつかしびて打出しなりけり。是をもろこしの何がしと云ふ大德の　渾身口に似たりとは、かたちの見にくしとにはあらで、西より東よりの風をいとはず、物らいひつゞくるを、にやう舌とや疎ませけん。口は瓶の如くに守れの戒をしらぬげに、風だにふけば、滴一凍やまず聞ゆるはんにやの聲の、いともかしましきは、ふん土の墻の手枕をおどろかすを、あな憎しともうとむらん。なめて世にあるものを思ふに、鳥蟲の音、木草のさやめき、浪の立居もおどろ〱しからぬはなつかし。たゞ打ちしづもりたらん時は、あはれ、けはひばかりも聞えよとおぼゆかし。心ふかき人の、聲を息の下にひきいれて、物云ふこそいとも惡くこそあれな。常陸の海の伊賀が埼、打ちもつゞかぬことを、舌とく囀るは、男だにあるを、まいて女はいともはしたに、なめしとも見おとさるゝを、我はさとらで、木末の日ぐらし、蘆の葉がくれの群雀、くるとあくとに、物の音をさへ奪ふぞうたてある。此中空なるものが、野邊の松蟲をまねび、遠山寺の夕を告るよと思しなさるゝ時は、文よみふける眠の友となり、つら杖に物思ひつゞくるをも止めてんを、誰かは疎んずべき。峯の松風琴の緒にかよひ、蘆のそよぎの笛竹にやと聞きまがふは、野分吹立ち、門さしこ

賦の語
[illegible]
そゞや—其其すはや
竹をあみて云々—竹簡に漆にて書きて文とせしこと古代の習
潮のみちひる玉—古事記に、攻めんとする時は汐滿珠な出し憂を増せば潮干珠いだして救ふと

臣の司を擇ぶにも似たりかし。玉を求むるは、かほよ人をえらぶに同じく、光やかたちを愛る昔事にしも覺ゆれ。硯なめらかなりとも、堅きに過ぐれば、墨を鈍からしむ。やわしければ、するはくだくにひとし。そゝや往しへをとむれば、竹をあみて漆をおとせしと云ふ光の、石なめらかならずばと誰しも思すなるべし。又聞く、硯のおろそげなる筆ついえ、墨あらびて、友を損へりとや。獨硯のみならず、萬の事しからさるは無しとなん。さは色や容をえらぶは後なりけり。かれうたへらく、

神の代に潮のみちひる玉てふもつねなきものをなにか求めん
光こそ玉にはおとれ世の爲にひかりをみするたまはこのたま
海づらにくもをおこしてゆくかたに浦洲の鳥の跡は見えけり

右は學半齋翁のもとめにて

○風鈴

峯なす夕雲の立居する比は、必ずよ、南の風の薫りくると云ふ。むべも河内の足立の尼がおとづれ聞えしに、取りそへて、風鈴の詞、かうばしき紙二ひらに書きつらねたるを、

月なき夜をてらす光の云々―夜光の珠
ふんで―筆
三たり―硯筆、墨
不材の木―樗、莊子に出づ
おみのつかさ人―官人
眞手は不壞―蘇軾が硯

○硯の銘

すゞりはや、石の滑かなるをよしとす。石なめらかなるは、たゞに玉にたぐひす。玉はや、價かぎりなく貴しと云ふも、月なき夜をてらす光のむなしく、目を喜ばしむには過ぎざるべし。硯はや、墨に筆に心あはせつゝ、古のことのまゝを書しつたへつゝ、後に教ふるまめものの、光こそ劣りたれ、いかで玉の弟とや云ふべき。誰か云へし。硯はにぶきに生れて靜なれば、齡は世もてかぞふべし。墨や、ふんでや、さかしき程々に、命も月に日にをはるとなん。おのれ思へらく、この三たり心を合せて、はらからなし、千世萬代の昔をつたふる功績の、齡もおなじと言はばいかに。鈍にうまれて、よはひ久しきと云ふは、きのふの山路の不材の木の譬こそあたりたらめ。海をふかめ、肌をなめらかにすりみがきつゝ、玉にたぐふらんものを、いかで鈍きに生れしとは云ふ。ふみは君なり。硯はおみのつかさ人なり。筆や墨や、各かろからぬ司々に仕ふまつりて、いみじき功績をたてたらんが、永き代に朽ちせぬめでたさよ。いにしへ人の云ふ。眞手は不壞、眞硯は不損と、此理をうまく心うべかりける。されば山にもとめ江に採るは、聖の君の

くひはららかし—蹴散らし、くひはくえの誤

紫の—枕詞

けたれつる—消されたる

かけろふの云々—蜉蝣淮南子に、蜉蝣朝生而暮死而盡其樂

ほみ　根をつらね　薪となしぬ　そを見れば　喬きはいづら　青雲に　聳えし峯は　世の塵の　つみてなりにし　山なれば　くづれたをれて　赤駒の　あがきに砕き　玉ぼこの　道行く人の　わら沓に　くひはららかし　はてはては夢がたりして　ほまれとて　人の羨む　紫の　名高のうらに　よする浪　磯にみだれて　後の世に　そしりくだしぬ　あしたには　樂しと見しも　かげろふの　夕べになれば　そことしも　かきけたれつる　燈火の　光も闇に　天の戸の　岩屋戸たてて　こもらしし　神代のかたり　おもほえて　今のうつつに思ひえば　おのがほどほど　一日には　三度ならずも　かへり見て　それにつけつつ　ありなめと　おもふはただに　うらやすの　やすきをたのむ　こころひとつぞ

李氏は

出であそぶ魂は夢路かうつつかもさむれば歸るふるさとの宿

我は

故郷にあらぬ都にありわびてかへる日しらぬなげきをぞする

歸去來辭に雲無心而出岫
なりはひ—生業
たぬし—樂し
雨雲の—よそにかけていふ枕詞
ふつま—肥馬
あぢまさの車—檳榔毛車
すがるをとめ—腰の細き小女、美女

心しも　ありやあらずや　山深き　谷隱れして　住む民の　篠屋葺きあへ　松の戸の　待つこともなく　夏冬の　うさをもいはで　晝はも　田刈斧とり　衣はもよ　眞柴折りたき　かづら綯ひ　おのがほどなる　なりはひを　うしともあらず　たぬしとも　知らでありふる　故郷を　なにごころして　雨雲の　よそに見すてて　此谷の　深きゆいでて　中空に　そびえたちたる　喬き木に遷りて見れば　こちごちの　枝葉をしげみ　香ぐはしき　花をよそほひ　眞玉なす　實をばさゝげて　大宮に　つかへまつれば　天の下　おほふばかりの袖ふりはへ　ふつまに鞍おき　あぢまさの　車とゞろに　飛彈人の　繩引きはへし　大路さへ　ところせきまで　雲の旗　風になびかせ　まへしりへ　八十とものを等　弓箭おひ　鉾つきたてて　あゆまする　つかさにしあれば　皆人は　野邊の鳥むし　七種の　寶はさざれ　家にあれば　錦をまとふ　こし細のすがるをとめら　右にゐみ　左に媚びて　甘ざけの　泉をたたへ　山に入り江につりえたる　くさぐさを　かしはでめして　かしは葉を　敷きとりなべてあかなくも　きこしし家は　いつのまに　和泉のそまが　うつ斧に　枝葉はし

すまで―山ふかくさこそ心は通ふともすまで哀はしらんものかは兼好の歌

退之―韓昌黎

ひとり立たる―獨歩なる

行く雲は―

えたらんと思ふも、若き程のはやり心の煩なり。物學ぶは、人に訣ねるにひとしと云ふ教もありとや。田舍とても、鄙のみやこと云ふあたりの人は、この煩を求むるまけじ心のおほかり。都にあれど、老が如きあやしげに生ひ立ちしものは、此所のふる堤の陰に、乞食ものの樣してよろぼひをるにも、むかし、かた端ばかり見聞しことさへ、名殘なくわすれにて、眼やみつかれ、花の匂、月の光も見とゞめぬは、在りて何のかひやはある。中々に昔の田舍住こそしのばしけれ。さきのほまれ、後のそしりもあな煩はし。只うまれたる程々に、寒からず、ほしからずば、ひとの國、故鄕のけぢめもあらじ。かの谷ふかきところの有樣、いきて見るとも、すまで衰をしらんやは。往きて都のわびしきは、身の程のまづしきなり。退之の文の、世にひとり立ちたるは、天のたま物か、つとめて到れるか。是ゆるしてしりに立つ人も、おのが程を知りたるなり。出でてはつかへ、遇ざるはしぞく。其ほど〳〵に安んずる人の、樂しみふかきをさへ思ひしらる。それにつきてうたへる歌

山高み　めぐれる谷の　水きよみ　木草の花は　春秋の　色香あらそひ　鳥の聲　ほがらほがらと　明くれの　しづけき空に　行く雲は　こゝろなしとふ

云々—晉の陶淵明
我と避けて云々—楚の屈原
罪なくて云々—中納言顯基
かの谷—盤谷
おに／＼しく—恐ろしく
そば／＼しく—險岨

中にかへりし類の、程々をたもちて安きを樂しむなり。やめられて悲しともおぼさぬ人ことにたふとし。我と避けて飢につき、水に入りし人を、おろかなりとも言ぬは、さるべき理のいとせめたるにこそ御坐すらめ。罪なくて海山の面白き所の月を見てましと、獨ごちし人は、公けにまめ／＼しからぬにはあらで、みそかに打歎かるゝ由もありつらめ。かの谷深き所の民は、心こそきすぐなれ、つらつき鬼々／＼しく、鳥の囀に物いひつゞけなんは、何語ふべくもあらぬ。そも故郷なればこそあれ、こゝに歸るは、心を安きにおかんの願なり。しらぬ國、とほき境にゆけば、山は高くそば／＼しく、荒磯の波おどろ／＼しくて、すむ人も容心のおに／＼しからんには、いきて誰とか交はらん。都わたりこそ、山のたゝずまひ、水の流、木草の花も、自らにこやかに、あなおもしろと眺めらるゝ。こゝを棄ていづこにかは。されど在りたき所をさへ憂しとおぼすは、たゞやすき一かたの願にたがふからなり。世を見れば、若き男どもの、酒うる家にうかれ遊ぶにさへ、十に二度などや心にかなふらめ。おほかたは主人が立舞を空ほめし、歌姫等が心をとりつゝ勤むるには、思ふにかなふ夜こそとぼしからめ。怒をたへ、足らざるを忍ぶは、いとも苦しげなりとは、老いて後にこそ思ひしらるれ。物ひろくしり、人に越

みかど―朝廷

中空にして―中途にして

垣根の菊を

しめらるゝもあり、樂しとするも、うしといふも、求るまゝにはあらぬ、誰が與ふるたま物ぞや。昔は聖の御代に生れあひて、賢しと云ふ人の、ひとりは高きみくらにのぼり、一人は山に這ひ隱れしをおもへば、身の程の違あるをいかにせん。世にあへば馬車を道にとゞろかし、みかどに參りては、司々のうへにをり、思ふを奉り、言を納れまゐらすに、君を始め、このしらせます國の限は、其事行なはるゝは、いとも有難き幸人なりけり。さるは求めねど、四方の國つ寶を庫につみ、山や江や、獲がたきものを、朝夕の箸に下し、心のゆくまゝなるを、かしこき人は、足るとのみにはあらで、あな恐しとさへ思議りては、忌みさくる人もありしとや。是を露ばかりも思知らで、あたゝかに打ちかさね、腹ふくるゝまで食はんが、酬惡からず終るもあり。或は中空にしてやめられ、あるは後いかならんと仕をやむる、やむるをかしこしとせば、出づるを愚なりとせんか。出で遣ざるは退き、擧げらるゝは進む。是ぞ世に立つ人の心にして、おのが程々を保つなりき。あながちに隱れ退きたらんも違ひたらめ。進むべくに退くは、身をあやまれるにて、後とりかへさまほしき世も出で來んものぞ。又退くべき時をうしなひて、罪かうむるを後いかにせん。垣根の菊を折りはやし、南の山を朝よひに打望みたりし人は、此いはほの

壺中日月長の意

憩ふ―愛好する

春夜宴―李白の春夜宴桃李園序

鼻しらむ―恥づべきの義

物らいはぬ人々は、おのがじじ酌みつゝ、御罰いたう蒙りぬといひてなん。

○故　郷　倣下韓退之送三李愿歸二盤谷一序上

一夜力齋主翁かたりて云ふ。蘇子瞻云ふ。唐に文章なし。唯韓昌黎の、李愿が盤谷に歸るを送る序のみきら〳〵し。常に之にならはまく思ひては、筆を止る事幾度、ああ彼をゆるして獨たゞしめんと、此語につきて、此序を憩ふこと年久し。前には太白の春夜宴を、國ぶりに書い改めて贈られしを、世に珍らかに思えて藏めたる。又是をも其ためしならばやと、試るにあらざれば、これをいなむは蘇子にまねぶに似たり。よしや、これが註かく人にならぶべく、若よみたがへ、心を誤るとも、道々しからぬたは業は、人とがむまじきぞとて、筆はとりぬ。いと鼻しらむべきさがしらなり。

むかしの人も、世に合るあり。時を失へるあり。其跡いとも多かめるを、更にかぞへあげんが煩はしき。世にあへるが賢きにもあらず。時うしなへるが愚なるにもあらず。身の幸のおくれさいたち、あひ遇はぬにこそあらめ。世に遇ひてほまれとる人の、後に陥

ぞ降りなまし消えずはありとも花を見ましや

同上

大伴のそち君—大伴家持

はやりかにて—華やに

爪くはるゝ—恥づべき

あかとき—曉

壺の中に—醉裏乾坤大

大原やおぼろの清水はるの夜の月をさくらにかけてうつれる

醉なきせぬ人の云ふ。山のたゝずまひ、水の流、時々の草木の色香、鳥の聲蟲の音、いにしへ今たがはじを、これめづる心ことばの、古きにおとるこそ、いとも爪くはるゝ業なれば、我は中々なることといはじとて、袖たれ打ちもだしをる。一人は觴を擧げながら、

櫻花かげのやとればひさかたのかつらの枝もともにかざさん

翁さびたる人の、

よしさらば齢は花にゆづらなんかたぶく月よわれをいざなへ

さすがに打泣きたるはうたてし。まろうどざねも心すさびやして、

咲花のしづくにぬるるわが袖を月に干すとて夜はふけにつつ

主人いとう醉ひずゝみして、人々の詞の花は、木末も色なくぞ見ゆ。風さそはねば散りもはじめず。月もあかときかけては、春の夜みじかくもあらじ。酒の泉猶盡ぬぞとて、ふとき拍子とり、聲いとたからかなり。

この酒を釀みてたたへし壺の中に長き月日はありとこそ聞け

たちめぐる山のあらしにくだかれて散るか都の春のあわゆき

○應㆓雲林院醫伯之需㆒擬㆓李太白春夜宴㆘桃李園㆖序㆒

やよひの望の夜ごろ、かすみながらに、夕かけて月いと華かにさしのぼりて、庭の櫻が枝に先かゝれる影の、花に色をあらそふは、似る物もなくあはれなり。人々此木の下におりゐて、酒くみあそぶ。あるじの翁いへる、月日は箭を射るに譬へ、人の命はゆく水の跡なきに云ふも、こよひや引きてはなたぬほど、瀨によどむ暇といはばいかに。さは徒にながめんやは。花の思はんをやさしみ給へとて、かはらけをすゝめ、筆硯さゝげいでて、物求め顏なり。まろうどざね云ふ。行く水と、過ぐる齡と、ちる花をまてと云ふにとゞまらずとや。我如きは止りて何ごとをかなすべき。年もゆけかし、水もよどまざれ、只こよひの花ばかりは、あすは雪ともと打ちまもらへをる。わかく賢しだちたる人の云ふ。酌みてあかぬは、大伴のそち君こゝに坐すに似て、言に擧げて歌はゞ、貫之躬恒も昔の人ならず、酒はばかり淺くとも、琴の調つたなしとも言へ、此めづる心ばかりは劣らじものを、我先とて、打ちうめき、はやりかにて、

行く水—行く水とすぐる齡と散る花といづれ待ててふことをきくらん古今集の歌

あすは雪—今日こずば明日は雪と

望の日—陰暦十五日
まろうどざね—主賓
ゑみをひらき—綻び
ゐや〳〵しく—禮義正しく
あめのした云々—佳人薄命の諺

野路の小川のさゞれもしがらみも、風に吹きかはかされて、池沼は忘れ水とや見すぐすべき。さはこゝを瀬と、きは〴〵しく、あめにみち、つちを覆ひて、降りつむながめのしらしらしさよ。雪よ〳〵、冬をおのが時とはすれど、大かたの年なみを見るに、睦月立ちて、望の日ごろまでにこそ、一さかたらず降りつみて、あな面白のながめはあんなれ。冬をおのが時とすれど、春はおのれまろうどざねに、心ゆくあそびするか。睦月立ち、なほ吹風は寒きにも、日の影うら〳〵と、山の南おもてに霞たな引きそめて、去年よりふゝみし梅の、ゑみをひらき、鶯の初音さゝやかならず軒におとづれて、芽はる柳の枝は、空に動くけしきなん見ゆ。さるは人の心もゆたけく、高き卑きゐや〳〵しく、喜びをのべつゝ、疎きもいきかひして、ことなきを祝ふたのしさよ。唐うた、やまと歌、道々しげに、絲竹の遊も何も、春をまづことぶくなん、年のはにあかぬためしなりける。雪よ〳〵、冬をおのが時にて、春をいかに。霞をけち、花を降りうづみ、鶯の涙を氷らするは、物みな嫉ましくするか。人の心をなぐさめ、人の心を傷しむはなぞ。天の下のかほよ人の、あやにくなるさがにも似たるか。あしたより雲けしき立ち、照日ながらにいと寒き日、立出ちて見たれば、

は都の物とのみ思ひこがれては、いかに眺めつらんなど、その折々は問ひこしつるを思ふにも、老いたる己ばかり、見ぐるしく口惜き人はあらじものを、かうまで居かくまりぬれば、山と降りつみ、巖とこほりたる下にうづもれて、春立つぞともおほし知らぬ、三越路の山里人ぞ、我は。

○聽雪　其二

雁がねの故郷としも云ふめる、越の國々はや、冬の雪の山とふりつみ、いはほと凝り、深き谷は丘となり、高き木末も、道の芝草と埋もれ、或は崩れなだれて、旅行く人の關路となりて、老いたる駒さへさす方をうしなふ。さるわたりならぬにさへ、あはにな降りそと、いにしへ人のなげきしは、これが煩すなりけり。宮古べの雪は、時雨ふる神無月過ぎて、風ひやゝかに、雲がちなるには、朝よひとなく、照日ながらに散りかひて、衣寒しもといひつゝも、立出で見れば、高山端山、なべて赤はだかに見るめなく、野ははたつ物こそあれ、下紅葉せし小草も枯れはてて、霜に碎かれ、風の塵とゆく方なく吹きまよひ、いは橋ふみこゆる山川の瀬も、薄ら氷とづるほかは、さゝやかにだに音もせず、

あはになふりそ—萬葉に、降る雪はあはにな降りそなよばりのゐがひの岡のせきならなくに

夕づけて―夕方に
かほよ人―美人
けぢめ―文目、あやめ
いさらけ―いささか
木の芽―茶
土器―酒器

たう寒きに、夕づけて雪やもよほす、物の音ふつに絶えたりしに、たゞしと〳〵と鬼のあゆみてくる音するは、雪かみぞれかと這ひ出でて、北の窓すこし明けて見たれば、ほどなき庭をさしおほふ。鄰の松が枝の葉に、いとしろう降りつみたるを見るにも、いでいかで出でやたゝまし。比枝比良に立ちつらなる山々、高きは雲にかしらつき入れ、低きは物につゝまれたる樣して、よそほひ立ち、ゑめるが如く、妬めるに似て、われ天の下のかほよ人とや打ちほこりたらん。野はもろこし人の白銀を布くと見しは、猶曇りけなり。神の織りけん栲の白布を、幾千々むら引きみだりたりと見ば、そも機ばりのけぢめ見ゆべし。林は、賢木葉に木綿とりかけて、神のいでましの御前にさゝげ出でたつとも譬ふべし。やゝ光をのこして暮れはてぬと見る〳〵、空晴れ風すこし吹きて、雁がねの鳴きてわたるほどに、月や出でぬと、すのこに立ちいでて見れば、はやく山の端をはなれて、晝よりも實にあかくしらぐ〳〵しく、星のかゞやきそへて、千里の外までも、いささけの隈もあらじと思ふは、かくひたやごもりして、閉ぢたる眼にさへ、まさめのけしきして、心なぐさむなん、いとあやしき。埋火たきつぎ、湯たぎらせ、木の芽の香のみすずろひをり、瓶子土器とりはやさぬ、よそめ如何にさふ〴〵しからん。我難波人は、雪

かいつられて―連りて
伴の翁―伴信友
小澤の翁―小澤蘆庵

さることにて、この四年ばかりいにしへ、こゝの宿もとめて、住みつきぬる時までも、睦月それの日、雪いとふかう降りつみたるを、待ちよろこべる友どち、二人みたり搔いつらねて、消えがてまでも野山にまじりしは、たどきのふの如わすれぬを、斯うもおとろへけりな。都を雪のふるさとにせよと、伴の翁のよみて聞えられしに、又小澤の翁の、如何にながめつらんとて、

かつ咲きてかつ吹きちらせ花よりも花なる庭の松のしら雪

となんいひ送られしかば、

さくとちる風のながれのあやしきは空目の花の林なりけり

とかへし聞えしなど思し出でらる。今は目こそ疎けれ、足こそなえたれ、この降る雪に物ばかりは言はんとて、紙すゞりとう出たれど、指は龜のごとにかゞまりて、筆あゆますべくもあらねば、おき火かいまさぐりつゝ、こしかたを忍び、今を打ちなげきては、例の繰言すなん。いとはかなしや。神無月、時雨の雨に染めし木末の散りはてゝ後は、野山は色なくなりてん。高きいやしき、おのが程々に冬ごもりして、春を待つこそわりなけれ。あしたより雲けしきだち、嵐はげしきに、やれたる窓の紙は風を吸りて、いとい

うけ沓をぬきつるが如―破れたる沓脫ぐごとく容易に
紫の―枕詞

も　うけ沓を　ぬぎつるがごと　いかり猪の　かへり見もせず　劍太刀　夜もとり寢て　夏蟲の　ともし消つまで　身をわすれ　刃をしのぎ　戰の　場に死すとも　紫の　名高の浦の　名ををしみ　末の世までに　かたり次ぎ　いひつぐことを　ひたすらに　もとむる人も　天つちの　かぎりあらねば　いさをとて　人のほむるも　此野らの　草葉における　しら露の　落ちてくだけて　後あらんやも

反歌

ちはやふる人をとらふと馬はせて荒野の末に日はかたむきぬ
かがりたきたてつきなめてをちかたの仇守る野に月澄み渡る
後の名をたのみはてずはますらをの命をかぜの塵になさめや

○聽雪　其一

あはれ〳〵、老いたる人ばかり、見ぐるしく口惜きものはあらぬ。昔は都邊の雪いかならんと、風だにさむく、雲の立ちまふ夕は、出でや立ましなど思ひを動かせしに、それ

龍の雲にのりて云々—風雲に乘ぜんとする

霧原望月—信濃國にある牧場

おくて—晩稻

道觸の神—旅路にて其行程にあたる神

奢れる心の、凄じきがなすにこそあれ。流るゝ血は小川とせかれ、碎くる骨は小石とも敷きみちぬべし。かくて年ふりたらん後は、此あらがねの土の下は、こと〴〵屍の積み埋みたらんが上にこそと、ふとおもへば、身の毛たち、つめたき汗は衣をとほすべし。しか心まどひしては、霧原望月の野に、放ちかふ駒のいななきを驚かれぞする。殘れるあつさの空に、流るゝ星のゆくへを、鬼の火に見のおそれして、行手や近き、こし方やなどおぼしまどふを、心をしづめて思へば、我其仇か、彼を敵とも怨むべきにあらず。大君の御垣の内の國なりとも、いづこの土か人の骨の埋れたらざらん。年をふり、土にかへりては、春のら小田すきかへすより、千町の晩稻かり納むるまで、男をとめの汚れまみるゝ泥土も、そのいみじき物のまじこりたらめ。今のあたりならずとも、賢き人は思ししるらめ。あなはかな、あないみじ。猶うたへらく歌は、

みこもかる　信濃の國は　山ゆけど　野ゆけど荒き　其道の　道觸の神の　み
心も　荒びやすらん　國柄に　生れます人も　荒し雄の　たけびをらびて　人
國を　おのが家庭に　人の君は　おのがやつこと　あたむすび　恨みをむくい
大鳥の　長き啄して　とれどあかず　家をばいでて　親も子も　かなしき女を

加茂の翁―加茂眞淵。

おてもこのも―此所彼所

うらみおもてみ―葉の裏をあらはし表をあらはし

御笠と申せ―古今集にみ侍御笠と申せ宮城野のこの下露は雨にまされり

もののふの草むすかばね年ふりて秋風さむしきちかうのはら

此歌、加茂の翁のよしと褒めさせしかば、友垣の中には、いと譽あるものに語りあひ侍りき。其野はや、人の語りしを、今おぼし出づれば、限もなくひろらなる所なり。西のかたの、大木蘇小岐曾の嶺を越えて、この野には下り來るなり。東は、諏訪、和田、風ごし、碓氷の嶺々に立ちつゞきたるべし。それがあまりの山々嶺々、立繞りたるには、ゆくさくさ、おてもこのも、限のありて見ゆれば、さばかりの原野とも思さぬなるべし。夏過ぎ、秋風吹立ちて、篠ずすき蘆がやに、這ひまつはるゝ眞葛の、怨みをもてみ蹂ぎたつ。露は御笠と申せなど云ふべく散りみだれしには、道ゆく人の、弓末のみに見えがくれして、はたご馬の、行々人すまぬ霧の籬に立隱るゝ、此處なん、甲斐、越後、此國のますらたけをの、たゝかひの場にて、旗さし物は、今見る雲霧のたえ〲なびくに似て、弓ほこつるぎ刄の亂は、尾花高がやよりもしげく、大ぶえ小笛の音は、ありかさだめずすだく蟲の聲か。吹渡る風の音か。仇がうつ鼓か。こゝち惑ぞしぬべき。今日は彼方にかちほこり、あすは又うしろを見せて追討るゝよ。その仇むすびし始をとへば、深きうらみのあるにもあらず、かたみに、龍の雲にのりてみ空をかけりわたらんと、ほこり

心ゆかず—面白からず

まん名—漢字

秦か漢か云々—李華の弔古戰場文に、秦歟漢歟將近代歟

しづ屋の主人—加藤宇萬伎

出づべきを、山の紅葉、野の淺茅の色づきたらんも、月影きよく、雁のつれわたらんも、かう垂れこめてあるには心もゆかず、いふとも何の匂やあらん。それは年のはにあかぬ哀ながら、耳ふりたりし、あながちなることを今おぼし出でたるを、求め奉らばや。此頃よみつるもろこし人の、いにしへの戰の場を過ぎて、いと悲しげなること書いたまへるが、まん名に書きすくめたるには、讀むにはぐ〱しく、聞知るまじきことのみ多かり。これが心ばへ、すこし學びて聞しらせ給へと云ふ。あなさかし、それは秦か漢か、近き代かなどあるには、猶まのあたりにも、世の亂をおぼししみて、打ちも出づらめ。治まれる世の民草の、さる凄じきさかひに行到るべくもあらず。ましてまのあたりなる事ならぬは、何の辨もあらず。いとも徒々しきを、されど俳優らがたつゝ舞のたぐひに、見聞ぬことをも語り出でなぐさめんにはとて、物に凭りかゝりたるまゝに、つぶ〱とつゞしり出でたる、いと物ぐるほしきはかなごとなりや。

昔、しづ屋の主人、難波の大城もるつらに召加へられて、まうのぼり給ひし時、信濃の國きちかうの原といふ所を過ぎて、詠せ給ひし歌、

みあへ代―酒肴代
ゆめ―決して
蜂ぶく―けなす

思ふなかばをも思さぬには、何事もきこえ給はずと打ちうらむ。あるじも來りあひて、此はいかにぞや。さりがたき行どもかつ〴〵仰せて、頓て參るべくするを、わりなの御急ぎや。けふは放ちてむ。とく給へとて門送りす。姉君いと本意なげに、居させし所の塵はらふとて、筵とりやりたれば、物その下にあり。あやし、とりて見たれば、錢いくらをつゝみて、みあへ代と書きつけたり。餘のことに憎くさへなりて、これ見給へとて見すれば、さるにても、物知ばかり頑なしきものはあらぬ。乞食などのさまなるを、おのれ見にくしともおもはで、獨世をすましたる、中々に面惡し。おひさきあるものら、ゆめ物學ばすなと、爪はじきをして蜂ぶきたる、世の理とは、誰も聞きつべし。あね君爲方なくて打泣れたる。かしこきにや、あらずや、知らずかし。昔もかゝる人は珍らかなれば、記るして傳へたりき。

○古戰場

唯心尼、我難波のやどりをとひ來て、語りなぐさむる程に、れいの手ならひにすべく、物ら言ひてきかせ給へと云ふ。翁もしばし物わするゝには、何ごとをもまなび

ゆるびて—打寛ぎて
にひしぼりの—新酒釀造の
もだし—默し
やをら—徐ろに
あるじ—饗應
なめし—禮なし

限までは、おのが田ばたに領じなりぬ。あながらに世を逃れまく思さば、此邊いづこにも住み給へ。朝夕のことゞもは、子どもらがみつぎ奉らむ。生いさきあるものらに、うちうち家とみ榮ゆべきことを教へ給へかし。猶うちゆるびて、こよひもあすも御物がたり聞えかはすべし。にひしぼりのこの頃、己が二つの眼をてらして、多くの手足をあだあだしがらせぬを、錢の神はよしとや思すらん。只今たゞ參りきこゆべしとて走り出づ。姉君立ちかはり、あるじはかく懇になんおはす、一向におもひたのみ給へ。世に御爲あしからじ。親のかたみとなん覺ししみぬるにはとて、いと放ちがたく聞ゆ。たゞかたじけなしとのみ、默しがたくぞ答ふ。女のわらはのさがしげなるが、やをら障子あけて、御膳いとよう侍り。參らせばやといふ。何も〳〵淸うして參らせよと云ふ。わらは御臺さゝげ參る。汁もの、あつもの、何くれと取りそろへたり。ゐや盡しつゝ喰ひはてぬ。茶くだものまで心ゆくあるじなり。今日なんむね〳〵しきことの侍りて、此方までまかんで侍るを、こゝ打ちかたぶきて過し侍らんは、いとなめしとて、彼處に待ちわびたらんが情なし。遠からずまうで侍らん。兄の御うしろみさせ給ふ御心ざしの、いとも忝なきを、朽ちばみたる袖にはえも包みあへず侍るとて、つと立ちて出づ。姉君、あなう、我

ふおまし―座所

まかん出たま―來給へ

いたいけ―幼なき

かいそゝふる―つき纏ふ

青雲の立身出世の志

壁のこぼれ云々―晉匡衡の故事

何某とかいふ云々―晉魯褒、錢神論の著者

おましにゐていきて、年月のことども、心くまなく問ひみ語りみ、いかで時々まかん出たまへ。斯くておはすを、主人もあたらしき事とは、ことにしも宣へるものを、こゝにも日比とゞまり給はんには、いとうれしくなん。いたいけなる者等が、かいそゝぶるはむつかしけれど、あはれと覺しめぐみて、生長たんやうをも見つがせてよなと言ふ。あるじ外よりかへり來て、世に稀人こそ入らせけれ。酒いかで參らせざる。問はせ給はぬ事は、己がだい〴〵しさに咎むべうもあらず。こゝなる人と時々申出づること、あたら物しりと人の羨むを、青雲の志だにおはせぬ、あひなう佗々しき。いともいぶかしきは、物まなびなん。そのかたの爲とこそ承りつれ。世を政つべきみかど參りをもせで、ふかき山はやしに逃げかくるゝためし、我世より見れば、いかなる事ともおぼし知られぬよ。壁のこぼれに鄰の光をたのまんより、身の財もて如何でかゞやかさゞる。何某とか云ふかしこき人の、錢ばかり貴きものもなし。翼あらねど空をかけり、足なくて千里をゆくなど、いとあり難きことを書きあらはせしを、人のよみて聞せ給ふるまゝに、いよよます〳〵あが佛とも、君とも親ともかしづき奉るにや。人なみ〳〵になりて、親おほ父より住みふりし所々修理し、いな倉酒くらの町をつくり添へ、あの見ゆる竹の葉山の

一介―一芥
爪くはる―恥ぢて臆す
使のろく―使賃
かど人―賢人、郝をいふ

伴蒿蹊の家に人々あつまりて、題を分ちて文かける。其題蒙求といふ文の中に探れる。

風俗通云。郝子廉、飢不レ得レ食、寒不レ得レ衣。一介不レ取二諸人一。曾過レ姉飯。留二錢席下一而去。毎行飲レ水、常投二一錢井中一。

むかし、飢ゑて物ほしみせず、年寒けれど、秋の蟲のつゞりだにさゝず、肩のまよひも佗しともおぼさずなん。まいて塵ひとつだに世にもとむべきかは。氏は郝氏にて、名を廉といふ。むべも譌ならぬ親のたまものなりけり。姉ひとりもたりき。それの郷、それの人の女にて、その家なんよき酒つくり、田圃多く領じ、門高く、家の子あまた召つかひて、いと賑はしかりける。されど此廉なる人、己いふがひなく、爪くはるゝとにはあらねど、常にいき訪ふこともをさ〳〵せざりけり。あね君よき男子ふたり。女の子一人、朝ゆふ前におきすゑて、萬たらはぬことなき世にも、只この弟の心一つをとりかねて、時々使して、何やくれやの物おくりやれば、いとも忝なきよしに、推しいたゞきて後、使のろくにとらせて、聊かの物もとゞめざれば、いともすべなく、悲う覺しわづらひにけり。かど人物へまかる便にとむらひにけり。いとうれしうて、北おもてなる所の、我

說文—漢許愼撰

藤簍冊子 卷之五

○水無瀨川

安永庚子冬十月、遊于京師。道歷攝北而過水無瀨川。川在于山城國界也。然瀬流尋徑、乃入溪澗中。巖上之飛湍高丈許、所墜激浪撒珠、其響與松風相應、濺々走下。未陟百步、水淺涓々。石出沙明、旋入幽篁裏、忽然不見下流。而溪遠林過、即出前路、則厓間丈餘、水勢倏洶湧。足以灌田野矣。於是始覺、其脈潛地中、及于此復湧出乎。說文云、水派行地中濆々、蓋此類也。嗟呼造化一奇事哉。于此古人之詠詩不待解、而旨趣自了然。因以賦之二章。

阿理氏那幾　豫乃多免之登波　加都志連騰　美難世能河伯廼　女豆羅師伎加柀

微南珂味八　毛三遲知禮婆敍　彌奈勢我破　斯堂仁文安紀乃　以呂半迦輿遍類

○郝廉留錢

胡地の妾―漢の王照君の故事

また、

我ぞ先見てましものをあだの野の葛のうら葉の恨みきくにも

今日は胡地の妾ならぬを、せめての心やりにてありわびよとなん。見奉りては、涙いよよ止めかたくてぞある。其紙のはしつかたに、墨つぎ、見わかつまじく、はかなげに書きて、そこに棄置きたるを、又とりつたへて、御前に奉るを、とりて見たまへば、

鎌倉のみこしがさきによする波いはだにくやすこころ砕けて

哀のことや、よくいたはれ。放ちて返すとも、いづちにかいぬべき。直き操を狂るわざしてしひて、物とふなとて、情しくこめおき給へるとなん、語りつたへたる。

漢高斬韓信、右府滅廷尉、佞大一般。然韓信外臣、廷尉骨肉、殘忍過漢高者矣。

いきし君はも―源義經
もは―感動辭
狡兎は死して云々―史記准陰傳にあり、敵國亡びて功臣殺さるの義
御たたう―檀紙

といふ　その雨の　時なきがごと　我涙の　雨は降りける　よしの山　雪ふみわけて　いづちしらず　いきし君はも

いとかなしげに歌ふを聞く人、みな身にしみて、鼻からくおぼゆ。また立ちあがりて、木曾の麻衣ならぬ色よき袖を、まくり手にして、扇は劒と打ちふりつゝ、

山ゆかば　草むす屍　海ゆかば　水つくかばね　大君の　國のみために　死なんと　立てしみ心の　たけく直きを　誰いひさきて　世にはふらしけん　狡兎は死して　狗は烹られ　高鳥盡きて　弓は嚢に　うたての古言や　いたはしの我君や

かくうたひつゝ、舞踏あらゝかに、扇をはた〳〵と打ちはらゝかしつるは、たれをか打つと、見る人あやしがる。これまでなりとて、幕をかゝげて入りぬ。大將殿おぼす。はての劒の舞は、我を憎しとてうちしならめ。さは物かづけたりとも、うれしとも思はじとて、御硯召して、御たたうの物の香しめる紙に、御筆はしらせ、取りつたへさせ給へり。

をみなへし主なき宿の庭草はくねりてひとり立つがかなしき

—神事終りて後の宴會所
ふみはらゝかし—蹴散し
ものゝね—音樂
かぜふかぬ世に—平和なる世

る。いで物見るべく、北の方若君はみ簾たれこめておはす。老いたるものゝふ達、左右に居なみて、袖打ちたれて見る。いと物うく、心にもあらで、歌垣の中よりすゝみ出でたり。烏帽子の緒むすびたれ、色こききぬ打ちかさねたる上に、山藍摺もとらせし袖長きに、赤き袴のこは〲しきを踏みはらゝかし、立ちたるさま、あてにこめいて、白くにほひかなる面輪の、すこし衰へしやとおぼすは、まみの重げなるやうにぞ打見えたる。繪にやうつしうべきと、人々さざめきあへり。ものゝね高く調合するほどに、扇をやをらとりかざし、袖すこしひるがへし、聲はいとほそう匂ありて、先あはれとぞ聞たまへる。その歌、

三草かる　鎌倉山のや　神のみづ　垣の松には　つるぞ巣をくふ　千とせのどちに

あしびきの　山のさくらはや　色香あく迄も見ん　かぜふかぬ世に

一さし舞ひをはりて　ふし拜みす。君をはじめて、人々あかずめでたしと見たまへり。又立ちあがりて、

みよしのの　吉野の山はや　時なくぞ　雪はふるといふ　時なくぞ　雨はふる

舞の上手
北の方―夫人政子
氏の大神―八幡祠
廷尉の君―源義經
つゝみ―恙
なほらひ殿

一さし舞ひて見すべく仰たうぶ。いとつらくうるさく、今は立舞ふべくもあらぬ身の程を、打泣きて否みたいまつる。北の方より御使あり。うち〳〵の仰ごとを、さこそ情なくも覺し疎むらめ。いと欲きことなれど、此御心をとり月日過さんほどには、御はらからふたゝび枝をつらねさせ給はん世をも待ちつけ給へ。其御契の爲にこそとて、いで斯すゝろぎて聞えたいまつるなれ。されど御土器のはえばかりには情なし。氏の大神に詣でて、廷尉の君の御身つゝみ勿れのねぎごととして、神をいさめ給へかし。おほけなく天の下の爲、御はらからの御中むつまじからん御爲に、心ゆかずとも、打ちまけて立せ給へといひ聞えさする。さすがに頼まれて、涙をおさへつゝ、いかさまにも御仰のまゝにかしこまりぬと申す。大將殿よくも賺いこしらへつ。神もたのしとや御覽ずらんとて、日を擇びていそがせ給ふげる。其日になりぬ。あしたより空清うはれて、御垣の内外の松杉のむら立、枝をならさず、鳥の囀ほがら〳〵と長閑なり。大將どの、北の御方、若君たちの御輿かきつらね出でさせ給へり。捕はれ人のは、あづかりの武士の中に取りかこみて、御あとにつきて參る。みてぐらあまた、おほん神のふと前に高く積みはえなし、巫がふとのりとごと、大宮の内にとゞろき聞ゆ。事はてゝ、なほらひ殿に入らせ給へりけ

此話、服子遷所レ撰、大東世語徳行篇出焉。余偶讀レ之思レ之、釋氏捨レ家唯身無住。而況是等小物何有レ所レ用邪。然徳行過當耳。由レ是今戲以二斯言一演レ之。惟恐損二害古人一乎。

○劍の舞

伊豫守源の朝臣、鎌倉の大將殿の御心にたがはせ給ひしかば、都をひらきて、吉野の山ふかく隱れさせ給ひしかど、其所にもはたえおはせで、いづちしらず逃れゆき給ひけり。おもひ人靜の子、かひがひしく此所まで從ひ奉りしが、中々の御情をかうむりて、都にかへるべく仰たまはりぬれば、打泣きてとまりしを、山の法師等、やがて捕へて、うての使に奉る。御行方あからさまに知らずと申せば、問ふべき便の人なれば、猶うたがはしさに、東に召下したまへりき。本より直々しき操のまゝに、知り侍らぬ事を、問せ給はんより、命めされよかし。天の下は御心のまゝならずや、いづちに逃れかくれ給ふとも、遂には得られ給はん。いみじきこと見奉らぬ程にとて、其後は露ばかりも言を交へず、いかにし給ふべくもあらず。唯守らせてこめ置き給ひぬ。御代はをさまりしかど、猶怠るまじき此頃に、いたく屈し給ひてやおはしけん。都は天の下の扇の上手となん聞く。

伊豫守源の朝臣―源義經

うての使―追討使

扇の上手―

道のそら―途中・
男だましひ―武夫魂
右府―右大將頼朝
漢高―漢高武皇帝
曹孟德―魏武帝
神の御裔―天皇

目口をはたけ、かく尊き寶物を、誰かは得させん。盗みやしつと云ふ。さらに〳〵、道のそらに斬るものやはあるべき。あなおそろし。殿に奉りてたまへと云ふ。やがて御館にもて參り、つかふる君を呼出で、しか〴〵の事となんと申す。いとあやし、大將どのの法師にたまはりしを、いかで童には得させけん。いぶかしとて、先いそぎて聞え奉る。君打ちゑみたまひ、彼ゑせ法師、あなづらしく、幼なるものくれしとて、腹だゝしくや思ひけん、我門の前に捨行きつるよ。法師とても男だましひなくば、修行もえせぬなるべし。されど家を出でて猶身を守り、才に誇りて、野山にまじり、歌よみてのみあるは、捨人の棄てらるべき淺ましさぞかし。一度けがれし物、其童にとらせよとて、取りおろさせ給ひぬ。西行後に此事を人に語りて云ふ。右府はまことにねぢけたる君なり。口に蜜したまへど、心には針のおはすぞ。漢高の大度、曹孟德の智略あるに似て、天下の人みな此君の網の中に入れられたるは、我佛の冥福といふ事を生れ得させけん。たゞ悲しむべきは、神の御裔の、此後やう〳〵衰へさせ給はん世の姿なるはとて、涙とゞめがたくして物がたりしとなり。心なき身にもこれを聞傳へては、秋の夕暮ならずも打ちそみぬべし。

云々―史記吳起傳に、卒有病疽起爲之吮之
竈を滅して云々―齊孫臏の故事
鹿猿―武士を惡みて云ふ
火とり―香爐
くゝり袴―指貫

の心をよく買ひなすといへども、まことの情よりとも覺え侍らず。竈を滅して人をあやふきに墮し入るは、將師のさがしきにて、國を治め、天の下をしるべき君の御心に非ず。軍を出し給へる事の、あやしきまで賢くませるを、餘所ながら聞き奉るには、此方の御問ひゆるさせ給へとて、額を板敷にすりつけて申す。君ゑみほこらせ給ひ、口とく心さとき法師なり。こよひは月見る夜ぞ。物がたり今ははたしてん。人々と杯とりはやし、曉かけて遊ばん。まれ人は酒のまざるべし。鹿猿の中に立交りて、歌よめといふとも詠むまじ。たゞ我まへに遊べ。風ひやかなるにもあかず飲み、ものきたなげに喰ひちらす人々は、あだゝかにもこそ。此火とり法師に參らせよとて、白がねもて作りたる猫のかたちしたるをとり傳へて、君より賜はるとて、前に置きたり。獅子猿は猶心たけし。鼠をだにえとらぬ痩法師が爲には、似つかはしき御賜物ぞとて、二度押しいたゞきぬ。あした御暇たまはりて立出づるに、御館の人やどりに、誰殿のわらはべならん、くゝり袴のすそ、朝露にぬれそぼちて、いと寒げにをるを見て、是とらせん、火埋みて手足あたためよとて、彼きらきらしき物を與へて、かへり見もせず立ちぬ。童打ちおどろき、これ見給へ。見もしらぬ法師の、見もしらぬ物を賜ひつるはとて、青ざむらひに見すれば、

大風起り云々—漢武帝
烏鵲南に云々—魏武帝
鬼—鬼神
秀郷—藤原秀郷、西行は其後裔
士卒の疽を

に、打ちまねばせ給はんには、今の世の人、誰かは立ちあへ奉らん。三尺の劒をとりて、大風起り、雲飛揚すとうたひ、槊を横へて、烏鵲南にと詠ぜし君達は、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや。玉造らがいみじきを磨りみがき、染殿のやしほの色も、はかなき目うつりばかりは何にかは。されど谷ふかき鶯の聲、信濃路出づる荒駒のあゆみ、いづれの道、何の業にも、始より優れたらんは、鬼にこそ侍らめと云ふ。人々あれ聞き給へ。世は棄てのがれても、頼しき人の心ならずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓の上手となん聞ゆ。傳へたる事もあるべし。かくこそと思ししみぬる事は、忘れずてぞあらめ。事一つことにても教へ承るべく、こはます〳〵恐れある御とはせなり。御物語のはて〳〵は、はつ物の道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山をすみかの痩法師にだに、物とはせ給ふ事の忝さよ。むかひ奉りては、嗚呼がましく、家の傳なりなどとて聞えや奉るべき。まして有難き大宮づかへを否みたいまつり、みおやだちの慈愛をさへ徒なるものに、年わづかに廿五にして家を出でたる徒者の、弦ひき一つだに、心にとゞめし事も侍らず。たゞ一言のわすれがたきは、賞を重くし、罰を輕くせよといひしと、任ずる者を耻しむれば、危しと云ひし有難さよ。士卒の疽を病めるを吮ひしは、人

伊勢の海—伊勢の海千尋の濱に拾ふとも今は何てふかひかあるべき
まつりごちたまふ—治め給ふ
其おほん—其御歌

けず、大木の御蔭に參り侍れば、いともかゝやかしきにぞ、たゞ夢路たどるやうに侍りて、聞え奉るべきことも侍らず。さとき御まなこに見現はされ侍るこそ、いとも有難けれ。伊勢の海ちひろの濱におり立ちならひ侍れど、效あることも打出で侍らぬには、是とて捧げ奉るべくもあらず、君にもかねて學ばせ給ふとも漏り聞奉る。天の下まつりごち給ふ御うつは物の大いなるに、おぼしよらせ給ふには、かけても及ぶまじきをさへおぼし知り侍る。大空に羽打ちつけて飛ぶたづの聲、霜枯の淺茅がもとの蟲の音、いかで取りなめて聞ゆべき。あなかしこしと申す。打ち笑させ給ひ、弓とりし人の、もとの心の猛きには、よむ歌も直くあからさまにと聞くはまことか。歌は武士の荒々しき心には、詠み移すまじきものに、宮人達はさたし給へりとや。軍に出立ちて、箙つゞみの音、馬のいなゝきは物とも思はぬを、この三十餘の學には、心のおくるゝはいかに。こはかしこき御心にもおぼしまどはせ給ふものか。いにしへの代々の帝は、馬に鞍おき、弓矢みとらして、軍にたゝせたまひし、其おほんをよみ見奉れば、たけく直々しく、調もいと高しとこそ打聞き侍れ。いでや歌よまんとては、ますらを心をとりかくし、背になよびかにのみ詠移すべくするこそ、此道のいみじき煩なれ。君が敏くたけき御心のまゝ

なほ人―只人

ゆくりなさに―突然なるに

圓位―西行法師

大となぶら―燈火

藐姑射の山の御宮―上皇の宮

八百日ゆく―濱の枕詞

に見とゞめさせ給ひ、御階の忌垣のもとにかしこまりをる。法師のあるが、見上げ奉るつらつき、旅に飢ゑて、いと痩黒みづきたるに、衣杖笠なども乞食ものの様したるが、めを偸みてうすずまりをる、なほ人ならずおぼしけん、あの法師が修行するやう、名をも問へと仰たうぶ。御輿ぞひの若侍いそぎ走りよりて、ありがたく御目たまへり。何處よりの修行ぞ。名をも申せよと云ふ。ゆくなりきに驚きざまして、雲水にありか定めず侍るものにて、名は圓位と申すといふ。聞しめされて、さればこそ聞知りたれ。穴熊のたけき獲もののたぐひならで、賢き人得たるためしに、いざなひ歸らん。我が後につきて來たれといへとて、召つれさせ給へり。御館に入らせ、御裝束改めさせ給へば、やがて大となぶらあまた照しかゝげたり。けふの道ゆきづとひてこと仰たうぶ。法師參れとて、おまし近き所の、一間なる所の、すの子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、昔は藐姑射の山の御宮づかへせし人の、世を儚きものに思ししみて、身は黒くやつしたれど、月花の歎のほまれは、物の心なき吾妻人さへ聞知りたるぞ。文字の數だに歌とのみ思ひしも、かう指向ひては、武士の負じ心もあらずなりぬるぞ。八百日ゆく濱の眞砂の中には玉とて拾ひ収めたらんを、かたりで聞ゆべく仰たうぶ。いみじくかしこまりて、思ひか

省にあり風光佳麗の地
淀のわたりの云々—何方になきてすくらん郭公よどの渡のまだ夜ふかきに忠見の歌
常世のまろうど—鴈のこと
みさきおひ—前駈

人が高らかに、棹にさはるは桂なるべしとうたふ。淀のわたりの夜深きてふ例に、これをあはれがりて、人々よまずなりぬ。月は中空にかゞやきて、おかく〳〵と澄みわたりて、常世のまろうどの、かり〳〵と鳴きて來たるぞ、いと珍らしな。海の色は青にびのきぬ引きはへたらんごとに、さすがに風冷かなれば、衣かさましといふべき人もなきわたりに、飲みほし、くひみちて、すゞろ寒しな。かへらやと舟ばたをたゝきて、楫とりにも歌へと云ふ。かれも醉ひたれば、棹の歌をかしげにうたふ。須磨よりや明石よりや吹く西の風にいざなはれて、漕ぎもて歸るほどに、夜は丑みつ許になりぬらんと言ふ。

○月の前

文治それのとしの秋、八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ。れいの事にて、御供つかうまつる人々、みさまおひ、御おとべ仕ふまつれる。渚に遊ぶ蘆たづのあゆみして、疾からず遲からず、列をみださずねり出でさせ給へるを、大路に膝折ふせ、かしこみ奉る人あまたあるに、けいめいして、あなとだにいはせず、世に儼しくたふときみ有樣なり。かへりまをしして、御手輿にめさせ給ふほど、さとき御まなじり

いさりす―漁獵す

榜ひればかりの―布きれ程の

貫之―紀貫之

躬恒―凡河内躬恒

洞庭―湖南省にあり

西湖―江蘇

入來る大船、いさりすとや漕出づるちひさき舟、秋の木葉のみだれに散りうきたり。鴉のいづこにか、やどりさだめて飛びかへる空、鷗のあさりすとをりぬる渚、さしくる汐の波がしらに躍る魚の光は、昔もあまたゝび見しを、この夕あそびそむる心地せられて、いともたのし。おのれよりさきにうかべし舟、あとより追ひくる舟、皆千里の外に心を遊ばしむとぞ見ゆ。絲あり、竹あり、調いとをかしうて、海の神をおどろかしつべし。月はいと花やかに澄みわたるほど、宮人のかくる榜ひればかりの雲もなびかず、星の林のもみぢも、こよひの光にはまけたりな。風いさゝか吹きいでて、波のあやいとよう見極めらる。暮れはてぬれば、繞れる山はをぐろうなりて、淡路さすがに見えずなりぬ。友垣一人が云ふ。こよひの遊、誰々も心くまなくこそおはすらめ。唐歌やまとうた、きたなげなりとも打ちうめき出でばや。翁先よめと云ふ。あひなの言や。昔の貫之躬恒にあらずば、今夜の影に光あらそふべきかは。洞庭西湖にこがれ出でたらん棹の歌も、醉のすゝみにこそ、ほこりかにも打出づべけれ。翁が木の芽煎て、はかなう荒めるこゝろに、何ごとかまねび出でん。舟のよそめばかりに、歌や文やはかなう遊ぶらんと見おこせたらんを、譽にしてやみなまし。此さしあふげる影にも、面ふせつべき業なれと云ふ。一

罪なくて云々—中納言顯基の詞
都府樓云々—菅原道眞の詩
ともしく—愛すべく
みなつぐし—澪標
はろ／＼—遙々

ものとも打守り給ふらめ。老が家をうしなひ、人をもさきだて、世に落ちはぶれよろぼひつゝ、命生きたらんを、暫時にてもといふ人々に扶けられて、女々しくあなづらしき身の、月見て遊ぶは何心ぞや。

歌もよむとはなしに

月こそはかげも身にしめはつあきのさよ風涼しかもの河づら

月見つつ夜の更けゆくはひさかたの天の河原も河たがひして

○中　秋

八月十日まり五日、あしたより空いとよう晴れたり。故郷人誰かれ、こよひ月見んと言語ふ。野や分けまし、棹やとらせんといふ。翁今は都住して、野山の秋ともしくもあらじ。みをつぐしの邊まで漕ぎせんにはとて、輕らかなる舟もとめて、酒よき物などはととのへたるべし。五百津舟つどふ中を漕ぎそけて、河尻に漂ひ出でぬ。月はやく生駒根にさゝけ出でたれば、夕潮滿ちたゝへ、風そよめくにぞ、蘆の浦廻きたなくもあらず。武庫の高嶺に入日のにほひ残りて、西の海はろ／＼しと見わたさるゝ、帆手打ちつれて

かいそゝぶり―かき廻し
竹の中より生れ出でし云々―竹取物語の赫夜姫
面輪―月かげ
夕とゞろき―夕暮のさわぎ
もろこし人の―蘇東坡赤壁の遊

持たらず、酒もとむる家もちかゝらずとて、たゞさし仰ぎて語りことすとはなしに、大方の人は、古の跡につきて、八月のこよひ、文作り、歌よみ、杯の流のまゝに遊ぶよ。さはをかしき一節をはらみなしては、夜よしとのみ思ひたのめしに、あしたより雲立ちまよひ、野分たつ物の音して、村雨さとふり通りし跡の雲まより、さし出でたる面輪うれしけれど、さすがに思ふに違ふ事のあるには、とばかり眺めすてゝ、さしこめし閨戸のすきまより、物にさはらてさし入りたる光は、目さめ心もすむらんかし。さてしも君まつばかりに夕とゞろきして、居たちつゝあらんも、あひなう若々しかるべき。時はいつにもあれ、宵あかつきをもいはじ、垣根の荻の葉のさわぎ、草深き蟲の音のみやは、朧夜の花の木がくれ、時鳥一二聲の音づれ、片山里の門涼みに、螢三つ四つ飛びかふには、命も延へなん心地もせらるべき。雪霜のしら〱しき光などは、餘りにすざましとや言はん。しらぬ浪路の舟とまりして、笘のすきもる影は、いかに佗しからんものぞ。もろこし人の、友どち舟うかべて、さがしき山の岸陰に、物の音かなしく遊びたらんには、さすらへずば何で。かゝる境の秋を見るべきと、おぼすらんと、罪なくてさる邊までをと、ひとりごち給ふといづれ。都府樓近きにも、垂籠めていませし君こそは、月をかなしき

秋つの野邊に―萬葉集第一卷、幸于吉野宮之時柿本朝臣人麿作

月は流を―石川や瀬見の小川の清ければ月も流を尋ねてぞすむ長明の歌

柿本の朝臣の、秋つの野邊に花ちらふと詠みませし、かしこの昔をこゝにうつし出でられて、かひあるけふの山踏なりけり。下市の水驛にて、墨壺を取忘れし事をさへ思ひ出でしかば、こゝよりの道は、むなしくて止みぬべくなりぬ。

この昔語は、秋の夜のつれ〴〵言に、いにしへ何くれの事どもいひ慰むが中に、吉野の奥のたゞずまひを語り聞ゆとて、つゞめき出でたるを、あるじの信美さかしく筆とりて、書いつらねられしなり。三十年餘の古は、おぼろかにこそあれ。されど譌言して何せんに、違へるふし〴〵は、垣根の萱草にかいつみやりてん。

○初秋

月あかき夜を誰かはめでざらん。文月望のこよひ、庵を出でて、わづかに杖をひけば、鴨の河面なり。雨降らぬほどなれば、月は流を尋ねてやすむらん。音をしるべにとめくれば、むべも清しとて、人々手にむすび、かいそゝぶりなどして遊ぶ。風高く吹き、雲消え、影さやかにて、何をか思ふくまのあるべき。月見ればすゞろに物の悲しきぞとは、竹の中より生れ出でし貌よ人の、天にいまやの別をしむにこそ、泉涌れども凉るべき物も

—南朝
かんさび—神々しく
まぢの小路殿—萬里小路源藤房

へ再びこゝに遷しませしとや、むべもさる御造ざまなりと見給へしらる。何をおぼし知るにはあらねど、昔しのばるゝに身にしみておぼえ奉る。

みよし野の奥こそあはれ世を捨てて入りにし人の憂は數かは

むかしも山口の花見に分けこし時、如意輪寺にたゝせます後醍醐の御陵墓に詣でたいまつりしに、木立いとかんさび、物心ぼそく、すゞろに悲しくもおぼえ侍りしかば、

みやま木のひかげももらぬ下露にふりそふものは涙なりけり

まぢの小路殿の諫めおぼしに叶ひなんには、かゝる所におはさふべきやはと、恐れみながらも思ひはべりし事をさへ思出でにき。こみなみ坂といふは、河南と書くべきを、下れば河戸の里といふにむかへられては、この坂路荒野の狀にて、細枝だにおはぬ草の原なり。時しる花のくさぐ〲、そよ吹くかぜに靡きあひたり。萩の花、しのゝをすゝき、桔梗、女郎花、野藍、りうたん、我見しらず名づけもしらぬ花々、行くてに色をまじへて咲きみだれたるが中に、何ならん芳しきが、吾荒妙の袖にしめる物から、いといたうすずろに物いはまくすれど、此見るにはまけて、口はふたがりながら、

またも來て衣はすらん露ふかき野はみながらの秋のいろ香に

やつこらま—奴、下男
魯褒—晉の人錢神論を著す
この煙—護摩の煙
さな下り—直下に
南のみかと

り。大菩薩のまへしりへに、萬をつかんまつりたる。かくれ神のみ末の人と名のる。行者達よ。御身を守の札いたゞかせ給へとて、唯錢ほしげなり。さるはおく山人といへど、此御爲には、やつこらまとなりて立走るよ。もろこし魯褒と云ひし人、これが神變を擧げて空ぼめせしを、人あさはかに、又是をば大菩薩とあがむるなりけり。行の時になりぬ。神變利元の御堂の前に、護摩木高く積みはえ、導師をさいだてゝ、験者たちあまた、いかめしき容してまゐりたり。千人にあまれるといふ行者、この前後へにはひふす外は、木にかゝり、岩に腰うたげて、拜みせんとす。げんざの讀經、鈴錫ふり立てて、螺はとき〲に吼ゆる。ごま木の煙、御堂の軒に繞りて、空に昇る、黒くすさまし。日の光をさへて、谷峰にたなびくを、聲のかぎりあげて、いみじく尊とがる。天の下の事は、この煙のなびくまゝにしるし見るといふ。事果てしかば、おがどちおがどち呼びかはしつゝ、歸る山路あわたどしげなり。どろ辻と云ふ所より道たがへて、どろ川に下る。さな下り八十町と云ふ。下りて、右手の高きに岩屋ありといへど、足折たればいきても見ず。寺あり、洞川寺とまうす。文字につきて思へば、どろ川のどろの岩穴なるを、今はとうろうと呼ぶよ。寺は南のみかどの、足利の爲にせばめられ給ひて、實城寺の皇居をさ

月五日寂

山づみ―山神

大名持の神―大國主神

閼迦―水

ぎ見れば、

　山こそはかさぬとを見れ瀧つ浪雲をひらきて雲に落つるは

あやし、山づみの工なせることは、人の思ひかねの外なるが多かる。物しり達は、何物をもいとせめて理盡さんとするこそ淺はかなれ。こもり屋の上に、大こくの窟といふは、大名持の神のすませたまひしにや。世に大黒と稱ふるは、一に大己貴と書けるよりや。こゝに集へるにひ行者達が、一夜さんげといふ事して後に、この岩屋戸に詣づ。其詣づるさまは、閼迦汲む桶を荷ひつれ、楊が枝のけづりかけしを、手に持ちそへ、口にくはへしさま、いと戯たりな。あまた打ちつゞきてのぼり行く。いきて何わざ行なふらん、小笹分けしにうみつかれて、追ひものぼらず。此夜月いと淸し。

　みよしのの芳野の奥に旅寢して世に似ぬ秋の月を見るかな

光は宵のまにて、入るかたとおぼしきより、雨しきりなり。今夜もうく、わび泣きして明けぬ。七日の行、あしたより雲の名殘なくて、人々歡ぶ。まろうど來れり。奥山住の里人といふ。老いたる人の、頭に黑き巾をかうぶりてあやし。額に角あるかたちを作りなし、身には駕輿丁の著るべき麻布衣をふし染にして、僧俗のけぢめ知られぬ出立した

清見原のおほんに—文武天皇の御時

三芳野の云云—萬葉集第一卷にあり

丸かせ—球

行尊僧正—天台の高僧にて朱雀帝の歸信を得讃を善くす長承四年二

れやの御かたみどもを見奉るにも、寔にかくれ神は、この御爲にたぢからを盡して仕んまつりしにこそ、神變大菩薩の御ことわり言まくも惶かりけりと、天の下にものの悟りある人のかぎりは、あふぎてたゝへ奉るべき御名なりけり。今朝より雨はをやみたれど、簑笠あゆひしとゞに濕れとほりて、時しらぬ寒さに、思もぞ出づる清見原のおほんに、三芳野の、みゝ我の峰に、時じくぞ、雪は降るちふ、時じくぞ、雨はふるちふ、と詠みませしは、將まことなりける。みゝ峨の嶺、一つには御かねが嶽とよみしも見ゆ。山の神を金精明神と申す。又古き物語に、此山にて、こがねの丸がせを拾ひしといふことも見ゆれば、おろそけなる翁が思ふには、御金が嶽てふ名の由心うべかりける。

みよしのの山分ごろもひろまなみ秋のしぐれに涙そへつつ

行尊僧正の笙の窟の雫は、おこなひ人のあはれなるを、何におとす涙ぞやと、おのれとがめられて、かいやりすつべく、猶分入れば、釋迦が嶽、三かさねの瀧にも到るべしと聞く。人々思し入らねば、もとの小篠かき分けつゝくる。此三層の瀧は、西上人のいきてよめる歌ありしかと思ゆ。いざ見まほしきを、一人はいかでと、今ひとつの心の許さねばえゆかず。その時こそあれ、今はうつゝなく迷ひゆく心の、すゞろに到りて、仰

れよ
かしらの髮云々—驚怖の貌
ひりかけ—汚穢物
大ぼさち—神變大菩薩役小角
ずんの峰—順の峰
聖寶僧正—讃州の人光仁帝之後也

ちたるに、入りつどひし人々千々あまりなりとや。草高く生ひて、常には人すまねば、むづかしげなるに、ひりかけをさへし散らしたれば、物うくわびしき事かぎりなし。木立は、おみ、むろ、岩楠のたぐひのみにて、松杉などは見えず。鳥蟲の音も、ふつに聞えぬわたりなり。山ふかき所は、なべてかゝるにや、ならはぬには、いと悲しくおぼしなりぬ。我やどりなる人の三四人、こゝより奥の、經が岩屋拜みせばやと云ふ。したがひ侍らんにはとて、簑笠よろひ、跡につきて行く。山をめぐり、谷を越えつゝ、道も無き小篠原の、肩すぐるばかりなる中を分迷ふ。十町ばかり來て、もとの小篠と云ふ。ここにも大ほさち、利元大師の御堂ならび立てたり。今の所には、後の世に移されしと云ふ。行く〳〵道もありやなしや。されば年に一度はこゝに分入りて、紀の三熊野に行すとか。昔はそなたより拜みめぐりつゝ、御嶽に到るを、ずんの峰と申せし。逆なりといふ吉野の道は、再び聖寶僧正の開かせしと云へり。僧正は光仁の御裔にて、修驗道のたふとき御傳のかしこみを思ひ給へらるゝにも、ひたぶるに心して、賴みたいまつるべき御蔭なりけり。利元大師と申すは、僧正の御諡名なり。からうじてさす所に到る。見れば、いとも大なる巖をうつろにゑりて、けたに削りなしたれば、御經いくらをも納むべし。何やく

心あかくて―心安くすて

天狗つぶて―天狗のうてる飛礫

あなとて―あゝとて

くはや―さればよ、こ

明すべく聞ゆ。圍爐のほだ木のもゆる光に、人々さぐりあひつゝ、誰がしはこゝにか、あなうしや、腹の寒きと云ふ。飢ゆともこゝに死なん命のかたじけなき、たゞ〳〵大菩薩をたのみ奉れと云ふ。親戀ひし女戀しとかこてるが中に、こゝに置きつるもの、いづちへか行きし。かくたふとき御山にも、盜人の入りぬるよと云ふ。あなかま、あないみじ。さるものうたがひなせそ、心あかくてあしたをまで、神だにつかふまつる御德には、物失ふべくもあらず、今日こゝ彼所にて誓ひしこと忘れやせし。天狗といふ神の、屋の棟に立ちて聞せや給ふ、ゆめ〳〵といましむ。皆わなゝくわなゝく、夜の明くるを念じをる。五日の夜の月、窓のひまにさし入るを、佛の來迎ありしやうに、人々手すりて伏拜む。山ふかき所は、月あかしと見しは、忽にむら雨木立を鳴し降りくる。枯枝などの吹折れてや、屋の上にばさと落つるを、あはや天狗つぶてなめり、あなとて、死入るばかりの聲して泣きさやめぐ。己が聲だに山彦の呼びかはしつれば、くはやと云ひあへつゝ、夜はやう〳〵明けぬ。かしら髮もしらけぬべし。立出でて見たれば、思はずよ、こゝは山のかひのいとさく道もなきに、大なる木どもの、雲すきも見えずおひ茂りたるに、よべの雨の名殘の雫、絶ず落ちて、身にしむ所なり。こもり屋こゝかしこ、十あまりぞ立

て—苦まれて

大菩薩—役小角

北畠中納言—源親房

山ふところ—山の凹所

より親兄によく仕へんとて、手をすりてわぶる、いとも見るめの恥しきは思はぬなるべし。御堂にまうづるまでに、まがり路を行く〳〵、みなおこなひする所々のついで、今しれたり。ひんがしの覗岩、蟻のとわたり、平等石、何れも〳〵からき目見する所なり。修行らが、おそろしきに身も冷え、足は土を踏まず、髪ひげそびえ立ち、聲いといたうかなしげに、陀羅尼や何や口やまず、夜路がへりして、御堂のうしろよりめぐり下る。いと大けく造られしに、雲霧つねに蒸しこめたれば、木が根のけぢめ知られず、たゞ黒にすさまじ。こゝに釣りたる鐘は、大菩薩の御杖にかけて、はる〴〵こゝにといふ。遠江の國何の郷、何がし寺の物なりとか。一つの傳には、北畠の中納言殿の、奥より上られし時、道にて陣がねにとり來られたるともいふ。そのまこと僞を問ひあきらめんも由なしや。又こゝより五十町ばかり奥まりたる所を、小篠と云ふ。そこは年毎にこの七日といふ日。天の下平らに安けからんを、いのり行ひ奉るなり。この御法にあはばやとて、今日なんこゝに詣づるなりける。谷にくだり、坂路ふみこえつゝ、からうじて到る。日は山ふところに暮れはてゝ、物ども見さだめがたし。板屋のあやしげなるに、板敷の上に、おみの木の葉打ちしきて、藁むしろを其上に竝しけり。ともし火もかゝげず此處に

西上人—西行法師

我に事たる云々—淺くともよしや又汲む人あらじ我に事たる山の井の水

宇婆塞—優婆塞

くだしも見れば—下方を見れば

さいなまれ

にてぞ、其時すら、今一うたも思し出でんやは。安禪寺にのぼりつく。西上人の、やがて出でじとの三年の跡とどめしを、來て見れば、此處ならめとは思へど、心もなくてつくりしかば、今はなつかしくもあらず。我に事たる山の井はあとなくて、筧をとく〳〵と落しかけたるはうたてし。青根が峯、こゝよりさし向ひてのぞまるゝ。

宇婆塞が旅寢の床ぞあはれなる青根が峯の苔のさむしろ

御嶽によぢのぼる。南無行者が聲あとさきにかまびすしく、しばし杖とゞむべくもあらず。巖をはひ、かづらをたよりに、或ははし立をつたひてのぼる〳〵、いと險しきがあひだも、をちこち見さけ、くだしも見れば、この來る道々、高くあふがれし山々峰々は、原野田畑のやうにて、たゞ高見山ぞさゝげ出されたる。蛇腹、小天上、大てんじやうなど、恐ろしげなる名も、追ひのぼされつゝ、かね掛といふ巖の本に至りて見れば、ここなん山のつかさなりける。久方の光こそあれ、ゆく雲も吹く風の音も、我より下の物にぞ有りける。西ののぞき岩と云ふは、いくち尋しらぬ谷の深きにさし出でたる巖なり。さし覗けば、白雲その下を走り過ぐるひま〳〵に、を闇う見ゆるは、此ふかきに生ひ茂る松杉の群立なるべし。修行どもこゝに押しおろされてさいなまるゝ。さいなまれて、今

うたてなど云々—甚しなど言はゞ
建武の帝—後醍醐帝
三柱—藏王千手彌勒の三尊
蜂ぶき—うそぶき
松—松明

追ひくるがごと、金剛杖とかいかめしく突き鳴らし、都田舎ひとつ聲して、南無行者大菩薩と、高く叫びをらびつゝ來る。うたてなどつゝめかば、うちも殺しつべし。こも修行のひとつに念じて追はれ行く。むつ田のわたりに來りて見わたせば、

柳ちる六田の淀のきしかげに秋をときとて鳴くかはづかな

こゝにて河垢離といふことす。河におりて、かみつ瀬ははやしなど、ひとりごちてみそぎす。これにこゝろのあらたまりて、山路にかゝる。此行手、建武の帝の、都をこゝにうつし給ひし時の作道なりとや。昔は飯貝の方より登りしとか。藏王權現に詣うづ。ふん怒の御かたち三柱、夕暮のほのにはいとも恐しな。こよひ吉水院の前なる家にやどる。相枕の行者たちは、はやりかにたけ〴〵しく、物がたりからかふが如くに、隔の障子とりやり、知る知らぬどちもいと睦しげにて、やう〳〵眠るほどに、蜂ぶきや、あがきや、夜すがらにて、貝鐘たえず耳驚かすが如し。すがうの數々にはたふべけれど、忘れては何しにと打ちうめきて明しぬ。夜ごめに出づるは、此宿のみにあらず。松あまたともしつれて、南無がうざ谷峯にとよめかしつゝ登る。此ゆくも、きのふも、物となへよと敎ふるは、文字の數こそ歌のやうなれ。こゝろ言がらもえ心うまじきを、陀羅尼などのやう

康
上宮太子―厩戸皇子
惡き物―蠅
人丸―柿本人丸
歌聖傳―僧快存著
菩薩―役小角

を截れ、かしこをたて、後あらじのみことには似ず、いかめしき御跡なり。山背王の御みづからわなゝきて、後を斷せ給ふにはかなふべくおもへど、こも御罰かうむるべきにや。いと闇うなりしかば、山はえ越えず。山口なる春日の里にやどりぬ。蚊のいと多きに、帳はやれまよひて、いを寢られず。かの檜わり子にむらがりし惡き物にまさりて、いとつらし。こも修行のからきにや數ふべき。いとうれしきこと、辛きことは忘ぬものから、三十とせまりの昔を、おろ〳〵にも思し出でられて、この筆のあゆみはすなりけり。つとめて竹の内の山道こゆる。雨いさゝか降りそゝぎて、簑笠の下に汗ながれ、いと苦しげなり。行手に柿本の里の柿の本寺といふに、人丸の御墓、石ぶみも立てりといふ。此神の御跡とめて、歌聖傳といふ文かいあらはせしに、こゝも確ならぬものなれば、いきても見ず。茅原寺、よぎ路なれど詣づ。菩薩の若うておはせし御かたちをうつし留めしは、世にも稀らなりと云ふ。今木の里を過ぐ。こゝの古物がたりは、花の頃吉野の山ぶみせし、岩橋の記に書き出でたれば、同じこと思出づべくもあらず。車坂越えて、吉野川の邊に出づ。山のたゝずまひ、水の流、いとおもしろし。岸陰亭にすだくは、機織が鳴く音よ。河内女の窓のあたり過ぎらん思ひせらる。下巨勢野の方より、我おとべより、

菅原道眞の伯母學壽をりて左遷の時當寺にて別を惜みて涕泣せしと

譽田天皇—應神天皇

石川郡—河内國にあり

阿妻の大との—徳川家

に、光の御子の頓にはかなくならせしこと、大宮の内に鳴るいかづち災ありしことどもは、この御祟ぞといふおよづれ言の、大路にまでいひあへりしかば、やがてもとのつかさくらゐにかへり給ひ、世を經て後、ひだんの大臣、又太政大臣をも贈らせしが、またほどなくて、大富天神といはひまつるべく、御使給へりしことも見えたり。天滿大自在天神と崇めまつるは、いつの御代のかしこみにや、博からぬ眼にはかけても云ふまじく、いみじき御罰かうむるべきを、産砂神にてましませば、あはれみ許させ給はんかし。先づこの旅路恙みなかれと、幣ちらしかけて、寺を出づれば、南の方わづかにして、譽田天皇のみさゝぎにいたる。里人はこん田と横なまれるよ。この大宮所なりし輕島のあきらの宮は、いづこぞ。此國のこのあたりには、丘陵のあまた見ゆるが、こと〴〵御墓所の名やあるべきを、空にはおぼし定めがたくて過ぎぬ。古市といふも、此さとつづきの市町なり。細川畠山の軍の君のこもりし大城の跡もあるべし。もとめても見ず。石川郡の石川、繼橋してわたる。越ゆればあすかべ郡なり。壺井の祠と申すは、源の頼義、よし家朝臣の御たま屋なり。阿妻の大とのゝみおやの君達にてましませば、いとしも造りみがかせ給ふべき由ある所なり。上宮皇子は級長の御はか、いとたふとし。こゝ

押しらん—檀にせん

順逆の道—春は大和路よりするを順といひ秋は反對に吉野路より登るを逆といふ

晝の物—辨當

この御神—菅原道眞をまつりし事

はるけき觀音寺の云々—土師寺に

き。おほけなく、一たびは國つ罪にあたらせしかど、まが事にしも侍りしかば、やがての世より今にいたりて、うつゝの事、後の世のこと、この御陰をひたぶるに頼む人おほかりき。昔は御嶽さうじ、順逆の道たがてひ詣でしとや。今は世こぞりて、芳野を山口に登る。これなん往古の秋山の逆の峯の坂路なりける。翁三十あまりの古、この高根に登らまくのすずろごころして、年々詣づる行人のしりに立ちて門出す。八月三日のあした、猶あつけさの名殘に、道芝は眞砂のやけに燒けて、足うらをさすばかりに、歩みぐるしかりしをさへ思し出られぬ。大和川のつぎ橋中絶えて、水なきかちわたりす。藤井寺に詣づ。門の前なる水うまやに入りて、晝の物とう出たるに、憎し、蠅のむらがりてけがすを、修行のはじめに、かゝる事物のかずならじとおぼす。土師寺にまうづ。この御神のことを、こゝにつたへ給ふは、國つ文にあらぬことどものいぶかしきを、さるいはれのありつらめ。我見たるものには、いまそかりし御時は、龍の雲に乘りて、大虚に登るごとくに、つかさ位御心のまゝなりしかば、誰ぞや忌みにくみて、あらぬ御とがめをばかうむらせ給ひき。三清公の革命のいさめいれさせ給はましかば、はるけき觀音寺の鐘に寢ざめかなしませ給はじを、みかくれさせて後は、天の下に惜み奉りし餘

役の優婆塞行者—役小角文武帝の朝にありし行者

優婆塞—善宿男、僧籍に入らずして佛に歸依する人

時の帝—文武帝

此家のたつる柱のえだえだはたがとし木にかやどに積むらん

右賀ニ荷田信美新室ニ詞

○御獄さうじ

ことし、寛政十一年の春三月それの日、役の優婆塞行者の一千年にあたらせ給ひき。おほけなきみことのりして、神變大菩薩の御名を贈らせ給へりとなん。千とせの後に、光をかかげさせ給ふことの忝なさのそひ給へる事を、誰もたふとみ奉るなりけり。大和の國かづら木の郡、茅はらの里にうまれさせ給ひて、いときなきよりも、道に御こゝろざしふかく、かたちは優婆塞ながら、修行世の人にこえ、孔雀明王の法をうまくおこなはせ、まこと雲風に乘り、かくれ神を使はしめ、吉野葛木の高根を常の住家にて、凡天が下のけがれなき所には、いきて住み給はぬもあらずとなん。韓國のむらじ廣足といふ人、つねにしたしく參りて、敎へかしこみつゝつかうまつりしが、後には、其才の高きを忌み憎みて、時の帝に優婆塞こそ、うちうち天の下おししらんの汚き心ありと奏せしかば、やがて伊豆の島國に流しやり給ふこと、文武の御卷のそれの年にしるされたり

賦

つゝみなくて—恙なくて

不材の木云云—莊子逍遙篇にあり

御釜木—正月十五日百官より奉る薪

えつり—椽たるきの類

つみなくて、この年も暮れぬるを、悦のあまりに、まろうど設くべき新室二間立ちそふるとて、手斧つちの音いと賑はしく、加茂の河瀬のあまびこに呼びつたふるこそ、年むかふる中には、殊にはえ〳〵しきを、待つことなき翁さへ、打ちゑみさかえ、いとも頼しう思ふたまへらるれ。むな木、うつばり、柱、簀の子の板になひ入るを、工の長がおもひがねに造りたるわざの、いともかしこき。もろこし人の、不材の木天年に終ふると云ひしを、理なるなるものに思ひしめりしが、今おもへば、あはつけき徒事なりけり。其ねぢけゆがみし木も、はた斧にくだかれては、御釜木をはじめに、賤が朝夕の煙にたきほろぼさるゝを思へ。和泉の杣がひきたつる宮木はもとよりなん。今この造る家居の新しきが、子うまごの裔のすゑらまで住ふわたらんを、何かは命短かきといはん。打出でて見れば、山づみのゆるさぬ谷峰もあらず、こりくだき、かづきつれて、都にもてはこぶを見よ。不材の木の天年をまたぬ事、またかくの如し。此新室のついたつる柱は、あるじが心のふとしきなり。千木えつりのしげきは、あるじが心のにぎはひなり。かく造りたてゝは、幾春をか迎ふらん。迎へて先いたる客人は、ひんがしより來たる朝彥の君なりけり。

莊子至樂篇にあり
莊周―莊子名周、
大江の翁―佐國
ゆほびかに―ゆるやかに
もちひ―餅
蜀の山兀たらん―杜牧之の阿房宮

侍るには、此集よみふける我もあやし。死しては人の園にや遊ぶべきと、いとはかなき思ひこそせらるれ。

さまざまに色ある衣の袖はへてこひすてふとや花にたはるる

○年　木

唯心尼

とし木こりつむといふことをよめる

たき木こる峰の手斧の音きけばほどほどとしも暮果てぬめり

あら玉の年を送り迎ふるわざこそ、千年のいにしへ、今のうつゝ人も、變らぬ喜びはすなりけれ。春のまうけ、つかさ〳〵の衣はかまの色あひ、ゆほびかに、新ならんがめでたし。民草もおのがほど〳〵につけて、染めぬひするめでたし。貧しきは解き洗ひ調ずる急ぎの哀ながら、そもよろこびする心ばへなん、おろそげならずめでたし。米積みはえ、もちひ臼づき、海のもの山のもの、何くれと送りかはす、あかずたのしき。おはら賤原、大江山、生野の道を、都にかづき持てはこぶ年木のにぎはしきを見れば、蜀の山兀たらんと言ひしをさへおほゆるかし。此あるじなん、今年五十のよはひを、事なくつ

新撰字鏡—僧昌狂の著寛平四年の作

園蔬の葉—爾雅に、嘗見二園蔬一其葉有三爲レ蝶者二三分二、已蝶矣烏足云々—

開元遺事に、明皇宮中春宴、令三妃嬪挿二艶花一、帝親捉二粉蝶一放レ之、隨二蝶所一レ止幸レ之。楊妃專レ寵不レ復二此戲一。

花に驕る君がかほよを憎してふつばさの風にうちてゆくらん

手に摘めば床しき袖の色につくこやこてふとて人のめづらん

新撰字鏡といふ文に、蝶をかはひらこと讀みたるを、和名鈔には、蛾をひびると見えしが、東にては手ひら子と呼ぶとも聞きし。蛾は蝶の小さきを云ふとなれば、ひとつ物にてぞある。堤の中納言の物語の、蟲めづる姫君の巻に、かは蟲の恐しきを手にすゑさせ給ひて、蝶とて人のめづるも是がなるなり。よろづのもの、其をはりをまで見はてゝこそと見えたりき。さは烏毛といふかは蟲のなれるをもて、かはひらごとは呼ぶか。しかすがに是のみにはあらで、園蔬の葉、三つが二つは蝶となる。ゆゑに字は葉にしたがふと云へり。又烏足といふものの根は蠐となり、葉は蝶となれりとや。又百合の花かならずなれりと云ふ。猶さま〴〵にくげなる蟲のなりかふるを、昔の非中住に見たりき。又蟲や木草の葉のみならず、人もなるなり。莊周、大江の翁も是になりにたるなりけり。その佐國といふ人は、御堂の關白どのの仰ごとたうびて、萬葉集をよみて奉りしとも聞き

大江佐國—後雀朱帝の朝詩文に長ず

華甲—六十一歲をいふ

句。沒後其子某夢父來告曰、我今化爲胡蝶、每春遊于花園。某不堪感慕、多種花木、塗蜜于花房、以供養群蝶云。其事極奇、而詩不見全扁、因竊補之。續以後事、命曰愛花人詞。

一花看損一花新。占斷百花領九春。六十餘囘看不足。他生定作愛花人。

他生不待更爲人。蛺蝶居然是後身。歲々化成千百億。醉芳詡々了前因。

前因方了舊園花。花作寢牀香作家。昨夜分明來入夢。不知何蝶是爺々。

聚芳迎蝶意何深。手取蜂糖仔細淋。休問恩情知也否。這般難得憶親心。

迷惑三生芳樹霞。癡心未必笑他家。卽今我亦値華甲。花已滿園又買花。

この事まことといつはりを知るべからねど、誰採り出でて昔をしのぶ人もなかりしに、君常に花めづる性のおはせるには、相憐みて、この詞はつがるゝなるべし。さは思ひをやるほど、我や蝶やのふるごとの、香を嗅ぎ露をなめつゝ、花に心を遊ぶらん。我もこれにいざなはれては、

夢に入りうつつにはまた身をかへて春は胡蝶と花につけけん

それとだに親のつかへをたのめては花の日數の惜まるるかな

眼を青く云々—喜悦得意の貌
陶隱居—晉陶淵明
汝は—蝶をいふ
ねぢけ人—唐李林甫、口有蜜腹有劍と
なさいなみそ—責むる勿れ
あかれ〳〵—別れ〳〵
うべ〳〵—宜なり

なかりき。世うつり、人の心あだ〳〵しければ、眼を青くし、鼻をさがしがるこそ、うたて女々しき心ざまなれ。おのが友はしからず。昔の陶隱居がまめ心をまなび、甘きを吸ひも食ひもしつゝ、腹みたんことを務むるなり。汝はかは蟲の恐しきよりなりたるを、わすれ貌に、今の容のなよびかなるに誇りて、人の目おこせたらん事をつとむるよ。あなつらにくと云ふ。蝶は長き袖たれて、いとも聞にくしかし。人とても、このめる道に名を揚げ、そしりを求むとや。ましてあなづらしき己が類の、さる辨やはある。たゞ心のすゝめる方にたはぶれて、命生きにはしかじ。何がしとか聞えしねぢけ人を、口に蜜して、心に針ありとたとへしは、誰が上ぞや。さあれ、誰々も親のうみて給ひしまゝなるを如何にせん。物とがめしていたくな責みそとて、彼方の枝に移りぬ。木末の小鳥どもの、この理をうべ〳〵しとにや、花に實におのが好めるかたに、あかれ〳〵にいきぬ。花にあかぬ人の家には、鳥蟲さへもあかぬ遊して、爭ふ樣なることはすなりけり。

　花ありて住みやはつきしすみつきてうつしや植ゑし山本の庵

また此頃、栲亭源子の愛花人の詞を見せらる。其詞、

　野史載、大江佐國者、性太愛レ花。嘗有二六十餘回看不足、他生定作愛花人一之

石はじき—遊戯
へん次—偏突、漢字の旁を見せ偏をあてしむる遊戯
むくつけもの—恐ろしき者

めのくるしげに、あへがたうも見奉らぬ、いと心ありや。東路なるわたり瀬の、高浪をあげ、岸を越えては、國の守のまゐりまかれるも、わりなくさへられては、武士のたけき心も、手弱女にうみつかれ、千さとゆく駒も、鼠の如くつながれゐたる、何も〳〵無德にこそ見ゆれ。人待たぬ家には、若き女どもまどゐして、古代の綺ども巻きかへしつつ、あるは石はじき、へん次、貝合せなどして遊ぶ。かゝる夜にこそ、ぬす人どもはたよりよしとや、下笑しつゝ打ち入らめ。あはれあはれ老がまづしき庵には、欲きものもたらねば、かれら入りてぬすまんともせず、燈火かゝげあかし、文よみ、手ならひはかなう書きすさびて、曉しらず起きあかしたる、昔のしのばしきは、林にやどる目無鳥の、今の身のうきことになん。

○花園　題上田耕夫東山第

園の花々に戯れて、おかぬさまなる胡蝶の、眠をおどろかして、蜂といふむくつけものの、いと腹たゞしげにいぶきちらしつゝ、飛び來りて云ふ。いにしへの世には、南山の蕨、東門の栗、おつる梅、その實いくらなど云ひて、淺に花の色香をのみ懐しめる例は、

者時之餘と魏略に見ゆ
春の木芽—茶
鳥の跡—文字
いつきむすめ—愛孃
ふゝめて—含くめて
御使ざね—使者
目塞笠—細く編みたる筒の編笠

から、まなこ暗く、齒落ちつきて、何をかよみ、なにをか語らん。雨をなつかしきものにするは、家富み人多くもたりて、賑はしきあたりにも、友垣のとひくる道を絕え、家の業などもさへられて、宿にのみこもりをり、文を讀みては、いにしへをしのび、鳥の跡はかなう書きすさび、或はいつきむすめに琴かきならさせ、酒あたため、作物とりなめて、日ねもす夜すがらならむ、いとたのしき。あしたよりおきいでて、夕暮過ぐるまでも立走りても、たつる烟たえ〴〵に、人の情をだにうくる由なき者等は、たゞ打ちうめき、つら杖つきて、つれなしやこの雨とながめたらん、いとはかなし。宿りなき乞丐者らは、こゝかしこの軒、木蔭などにくぐまをり、むさき髮かきなで、ふたつの乳、ふたりの子にふゝめて、難波すが笠破れたるを打ちかづき、空さしあふぎては、今日をいかにせんと佗しがるさま、いとかなしき。高き御あたりのありさまは思ひかけねば、おぼし知られぬを、祭の日、馬も御車も、なべて雨衣打ちかづけ引出でたる、今日の御使ざねをはじめ奉り、歌づかさ、御隨身、小舍人、わらは、仕丁なんどに至るまで、大笠目塞笠にかくれかねて、しとどに濡れつゝ、脛たかくかゝげて、步みなつめるを、これ見るとて出でたつ人も、今日はいとすくなく、さふ〴〵しげにて、かい連ね出で給はんを、見る

云々―陰暦十七日十八日の月

時しぐ雨―晴まなくふる雨

この心ひとつ―この戀の心

冬は年の餘云々―冬者歳之餘夜者日之餘陰雨

かなくさし出でたらん影に、垣根の草の露、玉とちり時雨とそゝげるこそ、いともいともあはれとは眺めらるれ。打ちかはす雁の翅のひまもりて、木末に滴するばかりなるは、こや長月のしぐれの雨なるべし。山の色の微かにそむると見るに、こゝかしこ山めぐりしてふる雨は、すゞろ寒げなり。神無月の雲のけしき、宮古も田舎もおなじ様にはるゝ日なきは、これや時じく雨のよしなるを、其頃すぎにては、みぞれとふり、雪あられとこりて、枕をおどろかし、窓のもとに夜更くるまで、文よむ人の、心すさびをもよほすなん、いとあはれとおほゆる。戀する人ばかり、時をもいはず、いつの夜もいつの夜も、これが障をかこてるこそ、いともなきめかしう、かつは物ぐるほしからめ。この心ひとつは、老がわかゝりし昔より、露も思ひしらぬかなしみなりけり。

○十雨言　其二

冬は年の餘、夜は日の餘、雨は陰のあまりなり。文讀む人は、此三のあまりもてなると云ふ。かたり言にはいへど、老がたぐひのおろかものは、唯いたづらに、埋火に炭たきつぎ、春の木芽を煎つゝ、飽ずすゞろひをる己は、何をして齢たもつらんとは思ふもの

云々—奈良時代
雨ざはり—雨障つねする君は久堅のきのふの雨に籠にけんかも
雨たばれ—雨賜れ
唐土云々—蘇東坡の喜雨亭記
ながめ—霖雨
はらめるこころ—抱ける思
立待居まち

かねて、ことしの秋いかならんと、夜を晝につぎつゝ、男ら立走り、池沼も小川も、淺はつるまでせきあぐる此頃、空に乞ひ神にいのりつゝ、夜もいをねず、鐘つゞみの聲、里里とゞろきあひ、燒くかゞりの火影は、をちかた野邊の隈々をさへ隱れぬものにてらし、雨たばれなど、聲々によびのゝじる、且はかなしく、且はいさましげなり。やがておそろしげなる夕雲の、空に立滿ちて、降りくる雨は、玉うちなどする音して、風吹きそひ、林をゆすり、河波をあげ、とぶ鳥は翅を折られ、蛙の歌もしばしは聲なくなん。さは思ふに叶ふ今日ぞとて、里ごと家ごとに、千秋よろづ代をうたふたのしさよ。唐土にても、かゝるに雨をよろこぶてふ文かきて、世に寫し傳へし例もありき。風は野分こそかなしけれ。ながめと降りかへては、いとさふ〴〵しき秋になん。八月十日あまりの空の雲のまよひ、人の心をなやましうするよ。文つくり歌よむ人の、はらめる心をたがへ、酒くみ舞ひあそばんのをかし業も空しからめ。望の夜の更行くまでも、軒の雫のつれなく音するは、誰も〳〵思ひきゆらんかし。曉がたのおぼつかなき空に、雲間もりてきら〳〵しき影をば、大かたの人は見ずてやあらん。立待居まちして見る月は、すこし虧損なはれこそすれ、待戀ひし夜にいかで劣りなん。夜はいつにまれ、村雨過ぎし名殘の雲に、は

田子―農夫
ひぢりこ―泥土
さうどき―躁き
しらまなご―白眞砂
殿守の云々―下部
星の契へだつてふ―天河
ならの葉の

ゆるも嬉し。田子の裳裾のひぢりこにそみつゝ、早苗とりはやす、五月雨のはれまのいそぎを、里つゞきに、何とやら唄ひつるゝ、いと賑はしな。やす川すゞか川などの岸のをちこちに、あすや晴るると、心の外の旅寢する人、いかにわびしからん。みな月立ちぬれば、峯なす雲の、夕ごとにたつも崩るゝも、天にますいづれの神のたくみならん。蟬なく木かげのやどりに、汗をぬぐひ、岩間の淸水を結びてあかぬ人の、行つかるゝさまなるに、風さと吹きくる跡より、黑き雲の追ひしきて、降りくる村雨は、瓶にたゝへし水をくつがへすが如くに、御格子おろせ、簾よなど立ちさうどきつゝ、見たまへれば、大庭のしらまなごは、忽ち淺川の瀨に流れあひて、殿守のともの宮つこら、こゝかしこの御垣のくま〳〵に這ひかくるゝなど、いとめざましな。落瀧つ瀨の水上にはしらぬ濁の、いはほを越え、岸をくづしつゝ、みかさ增ると見しも、たゞ片時にながれ落ちて、水陰草の露おもげに萎へふし靡きあひたる、今朝よりの暑わするゝ夕なりけり。初秋の空に横たはりて、星の契へだつてふかたり言は、唐土人のまこと僞はしらねど、文に書き歌につくりてもてはやすを、こゝにも、ならの葉のはやき昔より雨ざはりやすと、打ちまねび出でたるはかなげなり。大方の年並を見れば、夏秋のあひだは、山田澤田水をそぎ

び云々―玉充論衡に、太平之世五風十雨

夕つけて―夕暮

はつはつ―微に

木の芽春雨―木の芽はるを春雨にかけたり

あそび敵―相手

凋みくたつ―萎み腐さる

一年すぐる程のついでをしも見れば、睦月立ちて、人の心を春にあらたむるにはあらで、鶯の初音のおとづれ、梅の南の枝に綻びそむるとこそ見れ。山々に霞かゝれるも、夕つけて風さえ、立ちまふ雲は猶冬の名殘して、沫雪の梢どもにはつ〳〵かゝれど、土に落ちては、つみがてになん見ゆるも、都邊は照日ながらに、日毎うち散るを、山里いかならん、思ふもすゞろ寒けしや。其ほど過ぎにては、木の芽春雨けふいく日ふり次ぎて、野は古草に新草まじりて萌出づれば、四つの澤水もやゝ滿ちぬべし。三吉野の花にとて旅たつ人の、あまぎぬ打ちかつぎて、散りや過ぎなんと、心あわたゞしく分登るぞわりなき。また垂籠めて籠りをる人は、春のものと眺めくらしつゝ、酒あたゝめさせ、友なき夕は、家刀自呼びいでゝよくみかはし、あそび敵とするこそ、よそめもいとたのしけれ。若きほどは、これを恥らふさまなるも、中々になまめかしき。山もはた、おそきもはやきも、嵐にさそはれて、櫻の花は散りつきぬべし。夏の林の緑に染めますに、夕をつぐる鐘の音さへ、打ちしめるばかりにふるは、袂すゞしき初なりけり。垣根の卯の花の雪ならば、などや凋みくたつらん。短夜の月のあゆみいと疾きやうなるに、小雨打ちこぼしつゝゆく雲のかゝれるかと見るに、時鳥の一聲鳴捨てて、又遠方に二聲三聲、かすかに聞

額田王の歌
すかい—時機に應じて誘ひたる
綱ひかせ—從はずして逃る
なげの旅寢—假初めの旅寢
なべに—上に
越の國紙—越前奉書
立田姫—秋神
五日に一た

ねば、蔭の休らひも、なげの旅寢も、哀ならず成んて、秋の野山に交るかたをなん長閑うおぼえしが、かう老いくたちては、また若がへるにはあらで、夕ならぬにも、秋は唯さふ〴〵しくて、今一たび春にあひて死ばやと思ふは、心のひたと哀ふるにこそ有りけれ。此殿の御もてあそび草は、よろづ老らかに、御齡の程には、似げなく打ちしづもりませば、秋に御心をとゞめさせ給ふなべに、おまへの庭の風のすゑに、色よきを擇びとらして、うるはしき越の國紙に、おしとゞめさせしが、いともかたじけなく、かたゐ翁めしでて、はしに物書くべくおほせたうぶ。いみじく匂ひなき言は、立田姫の思はんがやさしきを、さりとて辭み奉つらん事のかしこさに、くらき眼見はたけて、朽葉一ひら拾ひとりて、書いつけてさゝげ奉つる歌、

風に散るかろきもみぢのいろ〳〵は千秋にあかぬきみが御爲に

寛政十二年の冬、おまへに在りてつかうまつり侍りき。

○十雨言　其一

五日に一たび風ふき、十日にひとたび雨ふると云ふ、聖の御代のためしにぞ云ふめるを、

春のあした云々—劉禹錫の詞

花もひとつに—あさみどり花もひとつに霞みつゝ朧に見ゆる春の夜の月

秋山ぞ我は—萬葉集第一卷にあり

藤簍冊子 卷之四

○落葉　ある御方の御もとめに奉る

いにしへより春秋に心々なることを、爭ひざまに言るなん、いともはかなけれ。折につけ事に臨みては、常あるべきことかは。我は春のあした、秋の夕にまされりといひし人は、そらに飛びたつ葦たづの、正目のどけく、歌ごころをさへいざなふよと見しなげきなり。花もひとつに霞まれてと詠みて、秋の月めづる人々にむかひしは、女々しからぬまけじ心のおどろかるゝなりき。秋山ぞ我はといひしをこそ、一向にこめいたるさがと覺さるゝなれ。又何某のおとゞの、事よくすかい給へるをば、すぐ〳〵しき操もて、つよく綱ひかせたまひし、こや秋に打ちしづもりませる賢さよ。山賤らがあやしう常なき心には、まだわかうて、物のあはれ辨まへざるほどは、春の花の林、百千とり〴〵の囀に、深き山ぶみを專おぼし立ちたるに、やう〳〵物の心おぼし知りては、そのかた怠りざまになりぬるを、老のはじめにて、人あまた立ちこみたる所はけのぼり、心おちる

ろを短く、事すくなきをは長はへたらむ、ほと〳〵かたきわざにしもあるが、千さとゆく龍の馬も、あまりにおひ荷はせたらんには、あゆむにたふまじくや。から猫の毬ころばせてたはるゝ如くに、歌もふみもあそばめ。歌といふも言なり。文といふも言なり。いづれをか安きにおかむ。いづれかおろそけならむ。小車のふたつの輪、かた〳〵にして道ゆかんやは。言かよはんやは。言にあげてによぼひ、言をしらべてうたふ。是を語靈のさきはひとも、又こと玉のたすくるとも、いにしへ人はたふとびてなもいへりける。ほたる飛ぶ小草川のべにやどりする旅人云ふ。

歌と云ふも言なり、文といふも言なり、事しあれば言に出づる、是を言擧といひしがいにしへなり。其事のよろこびうれたきにも、うたふにあかず、こちたきには言をつらねてつはらかならむとす。是を文といふ。歌てへど、事につきて長くもみじかくも、ことの數定まらぬがいにしへなり。歌垣たてゝしらべあはするには、春の鶯の囀に、あなたぬしとも人皆耳かたぶくるよ。中とみのをらび聲、物まをしのによほひ、秋鹿のつま戀に、ちかきにたけく、遠きにかなしげなるものか。されば事おほきは言永はへて、あまとぶ雁のつらつらなしては、蟹のたくつなゆるびたはめる、事少きには板屋うつあられの玉の聲、冬のもみぢの風の散かひに、彼も是もおのづからなるものとしられてこそ言はつらぬべけれ。ながきこゝ

眉のまよひ
—衣服の肩の邊のほころび

おく霜のしろきを見れば旅路へし我なれ衣のいとど物うき

肩のまよひも淺ましけれど、秋過ぎぬれば、つゞりさせとも聲せぬ枯生の道を分迷ふにも、いとど故郷のはるけさに、今一夜ふたよも、八千夜しふべき心地してなむ。

御夢
つゝみ—恙
よしみ—吉見、和泉國日根郡にあり
よしめき—趣ある
こくりやうの坂道—國領の坂道

べし。見わたせば、山ひらけ、川長くながれて、天の眞名井が原てふ、いにしへをとゞめし國がたになんある。社傳寺記にしるせることども、國史古記錄にたがへるが少からず。しかすがに幣ちらして、今日までつゝみ無りしを、ゐや申奉る。福智山の宿のむづかしげさに、いぎたなき朝出しつれば、けさおく霜はわきて身にしみて思ゆ。よしみの竹田といふ鄕は、家づくりの誠によしめきたるに、都とほからず思ゆるは、夜べのわびねの心づからにやあらん。こゝなる人の、物いふとはなしに、

　よしみの竹田すぎがてにする

と、

　さゝやかに聞ゆるに、

　難波人芦火たく屋をしのぶにも

と、とりあへずかいつく。右手の山にそひて、煙のたつが賑しく見ゆるをとへば、氷上の黑井といふ。この聞ゆる鄕は、おや祖父達の住み給ひし古鄕と、かねて聞きしものから、斯る序につけて尋ねゆかましを、母刀自のいかに待侘びたまふらんとおもひ棄てて、こくりやうの坂道にかゝる。丹波の國にはふたつなき高嶺といふ。誰も〳〵足なければ、かづかれて越ゆ。又のあした、霜の痛くふれるを、れいの物わびする人、

といふは、したゝかなる巖に、むせぶたき浪の音すさまじ。そのかみ大神のおましの岩床なりと云へり。こゝもてつけごとにて、たふとくもおぼえず。神山のもみぢ葉今は散りつきしも、猶かつ〴〵見ゆるさへ、嵐にきほひて目もあやなり。

　神風にいぶきちらして紅葉せし山より冬はふかくなるらん

大神の宮居あり。又豐宇氣の大神もたゝせます。社傳なりと云ふを聞けば、此國の鎭座をはじめと申せど、いぶかしきは、垂仁天皇の御代に、やまと姬のみこと、大神の鎭りますべき國求めありき給ふに、近江美濃の國々を歷て、伊勢に到ります時、御神、姬命に告げたまはく、此神風の伊勢の國は、とこよの浪、しき波よする國なり。かたつ國のうまし國なり。この國にをらまくおぼすと諭し給ふまゝに、もゝ船わたらへの郡さく鈴いすゞの河上に、宮造りし玉へりしと云ふこと、日本書紀をはじめ、何くれのふるき文らに載せて著じるかりけり。又こゝのいはれは、延曆の儀式帳に見えたり。天てらす大神、眞木むく玉木の宮の御代に、伊勢の國渡會の宇治のいすゞ川の邊に、大宮づくりしましゝ後に、雄略天皇の、大みゆめの諭かうぶり玉ひて、丹波の國比治の眞名井が原より、遷らせまし給ふ由をしるされしかば、うたがひなくこゝは、豐食の大神の御跡なる

大江山の剛賊を滅す、治安元年歿
そのかみ—昔時
神風の—伊勢の枕詞
しき波—繁く寄する波
もゝ船—冠辭
眞木むく玉木の宮—垂仁天皇
大みゆめ—

細川の法印—細川幽齋
えいやさら—呼聲
しとゞにて—濕れ通りて
變化—鬼
源頼光—源滿仲の子左馬頭となり

おきつ風さむき日ねもすいさりして夕日の浦にかへる釣舟

西の方をば枯木の浦といふは、昔細川の法印このわたり領じ給ひし時、吉野山の櫻をうつし植ゑさせしが、其後跡なく枯朽しかば、さる名呼びそめしと云ふ。花と人と共にむなしかれど、猶今の世にしのび參らする君なりけり。行手の磯廻に、網引する子らが、えいやさらなどをかしき聲あはせて、栲繩くりよする、いとめづらしみて、これ見はつべく佇めば、月出づるまでもと言ふに、さまではいかでと、この腰うたげし石に、かいつけて立ちさる。

與謝の海や夕汐かけて引綱のつなでのゆたに物もひもなし

こよひ宮津にやどりて、有明月の夜ごもりにこゆるは、この國にふたつなき高嶺なり。ふかうの嶺と云ふ。降來る雨にきほひつゝ分登る、竹輿の中だにしとゞにて、登り果つれば、風に晴れて憂を寒さにかへてくだりて、こゝに昔おにの住みしといふ大江山は、八重山隔てゝおくまりたる方に、しげ山高く見ざけらるゝ、變化のあやしく恐しかりしこと、源の頼光朝臣の猛かりしことどもを、物かづくものらが語りつゞくれど、耳留めて書いつくべきにもあらず。越えてのこなたに、天照す大神の、岩戸ごもりませし跡なり

し

瓊矛―玉にて作れる矛

およづれごと―僻説

天の眞井―天淳名井とも書く、天原にありし井

都なりせば―思ふことなくてや見ましよさの海の天の橋立都なりせば

き橋にたゝせまして、瓊矛もて、海の底をかきなし玉ひ、この國土をつくりはじめ給へりと云ふ其浮橋の、天よりおちて、こゝに跡留めしと云へり。むかしも來て、今日また此崎のなれるかたちを見るに、さる謂あるべき物とも見えず。この人の力もて造りなせる、今の世に陂戸とかよべる物よと、見定めつるはいかに。はやくの世より事好む者の、かゝるおよづれごととして、世をまどはすぞかし。心あらん人來て見よ、石をたゝみてつめるさま、内海の有がたち、國の利にこそなしつらめ。又是につきては、天の眞井もこゝにありと云ふ。廿年の昔こゝに遊びしことあり。けふまた來るも命なりけり。ある人はいたうめでて、

ふみ見んとおもひかけきや白波の上にわたせる天のはし立

都なりせばとは、昔もねぎごとせし、うべもいひ玉へるはとあはれがる。才のほどこそ比ぶべからね。女々しさのみは變らざりけり。とかくこそ言へ、こゝをおきて何處ならんとて、[illegible]

いくそたび松の千年もおひかはりとこ波よする天のはし立

夕日の浦は、文珠師利の御寺のあたりを云ふとや。名のをかしさに、

ひさかたの云々―久方は枕詞、桂の花は月の異名
宿世―前世の緣
柏木ならで云々―枕草紙に、柏木いとなかし、葉守の神のますらんもいとかしこ

冬枯のこずゑにかけてひさかたの桂のはなを軒に見るかな

つとめて宿を出づ。雨もひまある空なり。久美の入江に來たる、いとおもしろき所なり。れいの物おぢする人あはれがるは、波てふ物の聊かも立たぬがうらやすしとや。蜑舟二人して漕出づとて、あなうたて、あの雲なんたゞ今降り來。あはれ宿世なき生業かなと、わびごとすを聞きて、此心よわき人の、

見るめにもまづぞ涙はさしぐみの入江にぬるる蜑ならぬ袖

雨猶なごり惜むか、追ひくるが如くに降り來。いとわびし。野中といふ郷の岡のべに、秋の色こく薄く、むら松の中に立ちまじりたる、こも見過しがたくて、

時雨には袖こそしほれもみぢ葉よ風より先に我見はやさむ

柏木ならでも守ります神はありけり。天の橋立、まだ見ぬ人々のしるべして、此道芝はわくるなりき。あふちの嶺より、與謝の海原いとよく見ゆ。岩瀧といふ浦邊に、小き舟かりて、こぎわたり來て、此梯立の上をあゆむ〱物がたりす。この國の風土記に、與謝の郡はやしの里に、天の橋立といふは、長さ二千二百二十九丈、ひろさ九丈あまりとしるされたり。さてこれを天の梯立といふいはれは、伊邪奈岐いざなみの大神、天のう

を以てせんには

うぶすな神—産土神、土地を護る神

おだしくて—穩かにて

やましさ—疾

そなはし給ふが如く、美麗しきをめで、虫ばめるを切賺しなどしてこそ恵ませ給ふらめ。いと有りがたき心ばへならずや、と言へば人皆いみじがる。己ぞ博士めきて嗚呼がましかりける。雨はいよ／＼降りつゞきて、かしらさし出づべくもあらず。あした、山の井のもとにきて見れば、

　雨ふかみけさは岩井のみづこえて山下しづく音まさるなり

十五日は、うぶすな神のかんいさめする日なり。一里立ちさうどきて賑はし。例は九月の九日なるを、其よひ八日の夜に、里人どち酔ごこちに、いちはやく過し出でたれば、やがておほやけに召捕られけり。さるさはりにて怠らせしを、今日なん行はせらる。午の時にわたせ玉へり。今朝より雨はれて、日の光さへそひたれば、きら／＼しく拜まれさせ玉へりけり。例はみやびかなる事ども多かるを、こたびは愼しむべきにて、何事もおだしくて已みぬとなり。神もおほやけにはけおさるゝ事とて、別當のいたう打ちうめかるゝとなん。山里人はよろづに古代にて、いと有難かりける。十六夜の月いとよくみがかれ出でたり。親のたまへりし日數、今はみちぬれば、猶やましさの名殘あるにも、明日なん立出づべきにて、宿の別さへ今更に覺えて、夜ふくるまで月をながめをり。

眠れたる邊かれ―猨

よる蔭―頼り

あきもの―商品

二つの神―二匹の猨

あつかひ―調停

なしのぼし―任用す

斯るさがなきもの―猨

袖打覆はんには―慈愛

しく喰ひつくされしとなむ。いと珍しき語草ならずやと、いと口とくかたり出でたり。聞人みな驚きあへるに、かれは猛きものの中にも、殊にさがあしく、いと賴しげなしとこそいへ。されば世をおししる惡人のうへにたとへて云ふめるを、又かゝるも有りけりといふ。あはれさる惡き類の人も、まげて打賴まんには、其爲にまめだちたる仕業もありとや。さりとも、其人ながくよる蔭とも賴れがたくなん。昔欽明天皇の御代の始、山城の國深草の里に、秦の大津父といふ人、あきものあまた積みもて、伊勢の國へ行く時、道に二つの神くひあひて、血にまみれしに行き合たり。大津父志ありがたき人にて、馬よりおりて、情しく此たゝかひをあつかひ、血にぬれしをまで拭ひつゝ、引きわかちやりしとなり。其頃帝の御夢に、此人なしのぼし給へと、神の告を見そなはしゝかば、國々にもとめて召上され、何の德をかなしつるを問はせ給ふに、しらず侍る。只この頃かゝることなん侍りきと奏す。聞しめして、それが報したるなりと知食して、大藏つかさにめさせ給へりしとぞ。斯る性なきものも、我爲あしからぬには、かくむくいよくすなり。まいて世の爲よからぬ人も、大けなく袖打覆はんには、あなたふとゝ陰たのむらんかし。されば大き聖の君は、たかきいやしき、善き惡きも、なべて木草の花の咲きにほへるを見

らげて
おきつ物―海の物、魚類
まめ人―愛人
綱びきて―つれなくして
ことの心―事のわけ
こむらのあたり―脛の

後はいきかひごとに、おきつ物の數をつくして、かづき詣づるに、あしたは跡なくなん將ありける。こゝに竹野の濱のこなたなる松本といふ里に、山賤のやもを住にてあるが、此女をけさうして、時々いひよれど、さるまめ人持りしかば、いたく綱びきて、一ことをも答へず。山賤いとつらしと思ひて、この女のかしこに通ふと聞きて、ある夜、峠の岩陰に待ちふしたり。女かゝるをも知らで、例の物かづきてこゝを過ぐるを、山賤ふと捕へたり。聞えつる事いつまでとか、いとさがしき御心の、猶思ひ堪がたくて、今宵さだかに承らばやと、あながちなるにぞ、こゝに人と云ふべくもあらず。うち〳〵親のゆるせしにぞ、斯しのびに通ふところの侍る。君がおそき御心に、今は答へがたくなん。ここゆるして通させ給へといふ。今宵の關守いかで過しやらん、强ひても本意とげんとて、こゝに待ちつれ。ひたぶるに心づよくは、命うしなひてんと、おそろしき眼していひおどろかしつゝ、つよく囚へたり。命めすともいかで從がはん。あが御神、あが御神、この仇追ひ給へと叫ぶ〳〵、山賤ことの心もしらねば、猶しひ言きこえんとするを、此尾上より走りくる者のありて、山賤がこむらのあたりを、骨までつよく喰ひつきたり。あなやとさけびて倒る。女、あが御神あが御神と申す〳〵、山を逃げくだる。山賤はむな

舟の我をば外にへだてつるかな

天の川瀬—牽牛織女の天の川瀬にて相逢をいふ

あはれなる言の葉—歌

かきけちて—かげも無く

あじか—ざるの類

机しろ—机の代り

御心なごして—心やは

からず問ひゆかん。そも遠からぬ程にと、いひ慰めて別れぬ。都の人ならば、あはれなる言の葉なども詠交すべきを、さるもの言ひも知らねば、明けぬさきにと出でたつ。女こよひなん夢路たどるやうにて、泣く〳〵來る。心たましひもきえ〴〵なり。此峠にのぼりつくに、かきけちて物も見えず。いかに聞きわきつらん、いぶかしけれど、命得たるうれしさに、山を早くくだりぬ。さすがに恐しうて、しばしは絕ゆるやうなりしが、猶はたえあらで、ある夜また出でたつ。人に聞きつる事やありけん、あじかといふ物に、あざらけきもの、何やくれや取入れて、かづきもて來て、かのたむけなる岩を掃ひ淸めて机しろとなし、この贄つ物をおき竝べ、峯にむかひて、手をすり額をつき、獨言に誓言するやうは、あが大神、あが大神、かしこき御耳ふりたてゝきこしめせと申す。今まうづるは、親のたま物にあらず、寔に神の賜りし命なり。さきの夜の御德には、何わざして報い奉らん。貧しければ、いさゝかの寶も持たらず。此さゝぐる大贄は、物のけがれなく、おのが心のかぎりなり。ねがふは御心をなごして聞しをせと、千たび禮拜づきつつ、こゝにこえて、さて例の曉またで歸りくるに、取竝みしもの殘なく、茅籃のみぞ打散したる。いとたのもしうて、こん夜も又奉らんとて、躍りいさみつゝ歸り來。この

〳〵―戰慄しつゝ
道の空―途中
しばし給へ―暫時待ち給へ
虎の口云々―危を遁ること
うけひしこと―契言
浦よりをちに―みくま野の浦よりをちに漕ぐ

きての世に、命ばかりいつくしきものはあらぬを、それに代へんものは、思ふ男に逢ふことのうれしきなり。蜑の子なれど手弱女なるを、神のしめ玉ふ險阻しき岩根ふみこえて、夜とも晝とも分ずいきかふなん、身を惜らしとにもあらず。されど道の空にて喰れん事の口惜しき、男の許にいきて歸らんほどしばし給へ。よぎ道だになきものから、明けぬさきに此所に詣でて、必ず奉らん。神にてましませば、僞るともはた遁るまじきをと、國の守にうたへごと申すがごとく、なく〳〵云ふ。聞入れたるにや、打ちゆるび、喰附かんけしきなし。扨こそたふとき御神にてましますれ。やがて奉らんとて、はひ〳〵もそこを逃去る。虎の口まぬがれしと云ふは、正しうこのことなるべし。さて男にあひて、このこと打出でんには、はた丈夫心して送らんに、うけひし言そむけりとて、男をも倶に喰はんがいとほしき。只なほざりにて別れんを、と思ひ定めて、又逢ふべきにあらねば、限なりと思ふにぞ、さめ〳〵と泣く。男いぶかりて問へど、よく〳〵念じてあかさず。たゞ母のおもき勘當に宣へば、しばしはえこそ參らじ。さは浦よりをちに忘られなんことの悲しき事と、涙とゞめかねたり。男、さる事いかで思ひしるべき。あなはかなげ。天の川瀬はへだつるとも、誰故にかみだれん。己ひたすらに身をぬすみて、疎

まゆごもりにて—未婚にて
つぶれする男—下男
あふにしかへば—命やは何ぞは露のあだものをあふにしかへば惜しからなくに
亥の一つ—今の午後十時
山の手むけ—山の峠
大口の眞神—狼
わなゝく

きものの女の、まゆごもりにてあるが、この里の何がしが家につぶねする男と、いつの程よりか、いとかなしう言語ひけり。男時々通ひけるを、あるじの翁腹あしき人にて、聞附けて許さざりけり。さは心にもあらで、かれ〴〵になりにけり。女いたう思ひわづらひつゝ、今は露ばかりのあだものを、あふにしかへばとて、いとさがしき山路を、母の前よく言構へて、出立ちくる。春の夜の月の朧なるに立ちかくれて、亥の一つばかりに、辛じてこゝに來けり。男いとうれしうて寢にけり。短夜なれば、物らいふ程もなくて、おきて行くを、男おぼつかなさに、後に立ちてゆけど、許多の坂路を隔てたれば、彼處までえいかで、山の手むけに手をわかちて歸り來。かくてぞ時々かよひける、いとも悲しき契なりけり。五月雨のはれまある夜、例のたど〴〵しからで越來るに、山のたむけ過ぐるほど、草高くしげりあひて、風そよげると見る〴〵、巖なりと見し物、むく〳〵と起きあがりて、此方ざまに向ふを見れば、あないみじ、あなおそろし、大口の眞神と云ふものなりけり。あなやといへど、人け遠ければいかがはせん、只戰くわなゝく、しりへにゐざるを、神ゆるすまじき眼つきして、くひつくとぞ見ゆる。かぎりなりと思ひて、この前にうつぶし、額に手をすりあはせて、いとかなしき聲して、大神聞しめせ、生

酒樓

日晡―夕暮　晡は午後四時

くさはひ―話柄

けて眺むれば、山の影江に沈みて、水の面のをぐらきに、鷗の立ちゐる聲々、釣舟のこぎてかへる。是や滿壁山水の堂と打誦じつるにも、唐歌ならはねど、

水國陰山秀にして　江村楓樹稀なり　日晡風浪湧き　漁父收ㇾ魚歸る

俄に雲おこりて霰ふり、風もはげしう吹く。

冬の夜は雲のたえまに月さえてあられ音あるささのうら風

月またさやかに、時雨も打ちそゝぎ、道のほどをかしき夜なりけり。初夜過ぐるより、吹く風家をゆすり、雨も霰もたゞふりに降りて明けぬ。

木の葉うく山下みづのあつごほり心とけずも日數へにけり

又、

斯てのみ住み果つべくば山風の烈しき音もうたてからまし

とぞおもふ。今日もおなじ空にて在りわびぬ。十一日の夜、猶けしき立ちてさふ〴〵しきに、何くれの物語して遊ぶ。里人何がし訪らひ來て、いでや新しきくさはひ一つ奉らん。やがて昨夜の夜のことなれば、我鄕の者すら、此夕づけて承るを、まろうどのおまへに、己よりさきに語れるものは侍らじ。さいつ日詣で給ふ竹の濱に住みて、いと貧し

たて—うれしきを何に包まん唐衣袂ゆたかにたてといはましを

浮だから—船

きほひつゝ—勇み立ちつゝ

夕さり—夕暮

うどん花の遊—稀れなる遊

庖丁が家—

りもあらで、いとかひある遊とや言はん。

　わたつみのたむけのちぬさ散りみだり渚にあきの錦をぞしく

心地あしといひし人も、これに生出でて、

　とめくれば雪のしら濱名のみして千ぐさに玉の色は見えけり

こゝに驚かるゝは、蜑乙女ら四人して、ちひさき舟漕ぎかへりたるが、やがておりつれて、この浮だからを、やすく／＼と渚に引きあぐると見しほどに、おふなく／＼荷ひもて來て、この眞砂のうへにおきすゑたり。浪のとりていねばかくはすなりとぞ。鬼のすだきてなすにや、いとめざましくぞある。かへる山、七日の夜の月にきほひつゝ、くらぶの山路ならで越えく。いとさがしな。

　山高みあらしのうへに身をのせて空にさやけき月を見るかな

又の日の夕さりより雨ふりて、昨日なんうどん花の遊せしと、人々喜びあへる。住む軒のかへでのもみぢ、夜の間にあさましう散りはてぬ。山もはた、

　苔ふかき庭はもみぢの散りしきてくれなゐくゝる冬のやま里

夕月のおもしろきに、二さゝの浦まであゆむ。こゝに庖丁が家あり。此樓の欄干に時をか

雪の白濱―かきくらしふれど波にはかつ消えて積れる方や雪の白濱
檜わりご―辨當
なごろ―海の荒れて後大なる餘波の逆卷く事高野に高くをかけたり
によぼひ―叫ぶ、呻吟す
袂ゆたかに

も見ぬ濱邊に來たる。はやくの人の、雪のしら濱とよみし所と聞ゆ。げにもまさごはそれが降りつみたるやうになん。里人は高野の濱とよべり。今日はのどかにて、海はたひらかなりと云ふも、よせくる浪は、山もこゝに動きくる樣なり。かゝるさかひは見ぬ人のみにて、たゞあきれにあきれて打望めり。しろき帆あまた見ゆ。此見るがうちに千里や行く、雲に入ると見れば、又追ひくるが見ゆ。心魂も空にたぐへゆくかと思ゆ。浦の神の丘にのぼりて、檜わりご小がめ取りちらして遊ぶ。此よする浪は、たゞこゝもとに打ちかけらるゝ心地す。例の人に、いかにながむやと問へば、おそろしさに、氣ののぼりてとのみに、物もいはず。

天の原やへのしほぢを吹きこしてなごろ高野のはまのゆふ風

浦人數ふ。此東にさし出たるをかしま山と申す。又あの黛なすは、鄰の國の經が岬也。是がさへて、猶其方は見えず、後なる山にのぼれば、西の方は、隱岐の島雲るに見ゆると云ふ。萬里の秋に驚くと云ひしは、かゝる境にやによぼひけんとぞ思ゆ。渚におりて、貝ども拾ふ。色々の染物して、世にもきようらなり。人皆あきなげにて、袂ゆたかにたてと言はましをと囀りうたふ。老もわかきも、稚心してくらべ遊ぶ。まくる人ひと

ならびの國—近國

つらにおくれし—連に後れたる

かたまけて—贊成して

る人となげく。此人も打ちながめつゝ、

なかぞらの雲のまよひにたぐへつつたびねの袖は時雨ひまなき

とぞかこつ。冬はまだきに、霰のたし〳〵と音して、いといたう寒し。夜べはみぞれなどもふりたると云ふ。物の音も聞きわくべからぬ宿なりけり。

染めもはてず散りもはじめぬ山陰に早くも冬のけしき立ちけり

神無月に成りぬ。風吹きあれ、雨は夜ひるふる。日の影今はわすれにたりと人々わぶる。丹後の國の人のかたれるは、なべてこのならびの國は、西の風吹きくれば、冬は必ずしもかくて日頃ふるなり。さなきだにも、雨は都あたりよりもおほくふるを、わたくし雨とはいひならはす。又雪ふれば、三尺五尺もふりつむといふ。聞くにさへすゞろ寒しな。夜なか過ぐるほど、雁の啼きわたるを聞きて、

小夜中にかりなきわたる常世出てつらにおくれし雁なきわたる

五日といふあした、からうじて日のさし出でたるを、影忘れし人々、立ちさうどきつゝ、山によぢて岡見やせんといふ。河邊に釣や垂れましといふ。心々に定めかねつるを、荒磯の小貝ひろはんと云ふに、皆かたまけて出立つ。限もなくひろき海の、雲と浪のけぢめ

千名の五百名に立つ—名聲喧傳の形容
ひゝな立ち云々—雛を竝べたる如く暫時も離れず
なれたれど—古びたれど
時じく—時をわかず
はゝそば—母君

れず、おもなげにもあらで、たゞひゝな立ちならべたる樣にてぞ有りける。このをんな何ばかりの人ぞ、きぬなどなれたれど、いやしげにもあらず。いつき子も持たりとや、家司なども具し、うからやからも廣しとや。さる人々までいみじき恥あたふるなん、女ばかり許し難かりけるものはあらじ。女はた此頃は目をいたくやみて、いぶせくはれあがり、物などもつや〳〵いはず、打ちふしたり。氣ののぼりたるにこそ。峰山の法師ぞ前の世の報にやと、打ちうめきをる。いといたはしきことと云ふ。わかき人は、されどうしろめたくや御座すらんなど云ふ。かゝるはて〳〵の國にても、人のものいひさがなさよ。雨は時じくにふりて、日數へにけり。今日いくかぞと問へば、夜には九夜といふ。山おろし梢吹きならしつゝ、おどろ〳〵しく、幾夜ねざめがち也。

　山里は雨さへ夜さへあらしさへよに似ぬうさのひまなかりけり

又おもひつゞけて、

　いを寢ねばゆめてふものも夜がれしてたよりほどふる故鄕の空

はゝそばのいかに寂々しくてやおはすらん。かう捨て奉りて來ぬる罪かしこし。彼方にも山里いかに侘しからんなど、思ひおこせ給ふべし。いとかたじけなきことを、こゝな

斧の柄云々—晉王質の故事、長き時を經たりとの義
木のはし—法師をいふ、枕草紙に本づく
千賀の浦波—ちかの浦に波よせかくる心地してひる間なくても暮しぬるかな
をゝ〳〵と—泣く聲
蜂ぶきたる—脹ひ惡む貌

中やどりやし給へる、斧の柄今はすげかふべし。あの木のはしにすかされ給ふよ。さるあだ〳〵しさもしらで、心のかぎり御宮づかへし奉ることの悔しさよ。今はやくなきおのれが、こゝに侍りて何せん。たゞ今たゞ難波に出立ち侍らんとて、旅脛巾とうでて、いとあわたゞしく、聲しわがれふるふ〳〵、おももちほてりたるに、猶鼻の先に、ひら柿ばかりのもの脹れあがりて、赤く熟えたるには輝りまけたり。をんなおどろきまどひつつ、あが君〳〵、なにごとをかゆくりなく聞え給へる。故郷出でて道の空より、御心のうれしさを聞え給へるに、千賀の浦波よせかゝる心地してひるまなき袖も、君が思ひにほして日ごろふるものを、時雨すぐるばかりの暇に、さるあだ浪のかゝるべきかは。すぢなき濡衣うちきせて、つひの世見はてじとや、あはつけく捨て給はば、こゝの海にも入りね。あの法師いみじきおこなひ人なり。すゞろなる物うたがひして、佛の御罰かうぶり給はんこと、御爲いと悲しきを、とをゝ〳〵と泣く。あの木のはしが首とりたりとて、なにの報がある。ひく方に宣へるが、いよゝうしろめたきとて、あかき鼻いらゝぎ、蜂ぶきたる、いとあさまし。此やどりなる人々、これを見きゝて、みなあきれまどひて、やがてこの鄕に、千名の五百名は立ちにけり。いとむくつけ、さるのちは人にもはひかく

すかい出で—賺し出でて
ひたやごもり—専ら家に籠りをること
かたほならず—美くし
しぢやう—實體
有りがたき—希なる
おこなひ人—法師

れたまひて、三年こなた、いたうおもひくづをれつゝ、人に立ちまじり給ふをうたてきものに、山住などおぼしたゝせ給へりき。太郎子の慰めかねておのれにあつらへ、此處にすかい出でたゝせ給へる也。ことどもあらば後見させ給へといふ。何事をも承らん。うしろやすくおぼせと答ふ。この女いかさまにも世をうんじたると見えて、人に見ゆることをもせず、ひたやごもりに垂れこめて、湯あみなどもをさ〳〵せず、よろづにつゝましう、操ある人とぞ見ゆ。かたちなどもかたほならず、一向になよびかに、やせやせと色しろく青みて、睦月の半の梅の、垣根に散りこぼれたらんにほひしたり。この鄰しめしは、ならびの國の峰山といふ所の法師なり。よはひ高く、しぢやうにて、聊かも亂りたる事なく、あしたゆふべにも、湯壺の中にても、阿彌陀佛の御名をとなへやまず。有りがたきおこなひ人なり。湯あむいとまには此山にたゝせます藥師如來、觀世音の御堂を拜み廻り給へりき。ひたやごもりの君も、けふは物の氣のひまありとや。此法師にいざなはれて、かしこにまうづ。道のほど、後の世の事などまめやかに教へさとし給ふに、罪とがの恐しとにや、繰言はてしなく問ひ奉りつゝかへりて、しはぶる人何ごとにかあらん、いと腹あしく、すさまじき眼つきして、このふた心人よ、いづこに

—藤原兼輔
夕月夜—夕づく夜おぼつかなきをたまくしげ二見の浦はあけてこそみめ
船びらきして—船をいだして
およずけて—成長して

かなきをと、詠みませし二見の浦は、此わたりなりと云ふを聞きて、ある人、

　けふいく日とりも見なくに玉くしげふたみの浦のあさ明の空

それは播磨なるをこそ言へ、往古こゝに來る人は、難波津に船びらきして、かしこを經つゝ、加古の島など云ふあたりより、陸路をこゝには來ぬらん。所のさまを見るに、しか名づくべきにもあらず。見わたせば、霧のひま出づる蜑舟の、櫂棹とり〴〵に、何處にあさりすとかこぎ出づる。いとすさまじき秋の江には、是ばかりにぎはしき詠もあらずなん。城崎に來て見れば、やどりは昔ながらにて、もと見し人はあらず。たまたま君われを忘れずやと云ふを見れば、むかしの人なり。髪髭まだらなる翁のかなたよりも、我をいかに淺ましとか見らん。あるじと云ふも、あげまきなりし人の、今はおよずけて、昔物がたりなどす。例の局して住ます。故郷人もこゝに在りて、訪ひ來たるにぞ、旅心地すこし忘るゝやうなり。こゝにつどひたる人は、都なるも田舍なるも、男も女も、朝夕にとひかはし、馴昵びて、打ちみだり禮なきは、斯る世界とぞおほゆ。むかひの局に住む人あり。難波人と聞ゆ。四十餘と見ゆるをんな君に、六十過ぎたる皺ぶる人ひとりかしづきたり。この翁、あるじのもとに來りて、我たのめる人は、男君に別

山ぶところ―山に抱かれたる所

めさまし草―茶の異名

露金―山城宇治の銘茶其名に金をかけたり

堤の中納言

の影あらはにさし入つて、尾上の松風、軒端ゆく水の音にひゞきあひて、おかしき旅寐なりけり。明石の浦の夜遊かたり出づれば、或人、

うら波のゆたに見しよの月よりもなほ山里はのどけかりけり

波風こそたゝね、いとはるけうて、しづ心もなかりしと云ふ。いと幼めきて。山ぶところなる所は、月はやく見えずなりぬ。つとめて、雨の餘波の道芝露けく、身にしみておぼゆ。但馬の國に入りぬ。粟賀といふ郷に、よき茶ありと聞きて、其家にいる。寔や仙虚と云ふ名は、懸まくもかしこき藐姑射の山のかひより賜はせしと聞き侍るには、道行く土産にもとめて出づ。

朝さむにめさまし草をもとめては山路の露金おきてゆくなり

さて故郷いでて、七日といふに、心さす所に來たる。なやと云ふ所より、かろき船もとめて漕れゆく。このあひだ、山も川も、元見したゝずまひながら、昔は春山の霞こめたる空の氣はひも、おのが齡もいとわかゝりしほどなりき。今や二十年へし心には、朝たつ河霧の、覺束なささへそひて、古きをしのぶ涙ぞ、秋の時雨めきたる。江山皆舊游と誦じつゝ行く。いにしへ堤の中納言の、こゝに湯あみすとて來られし時、夕月夜おぼつ

家もあらなくに—苦しくも降りくる雨か三保が崎佐野のわたりに家もあらなくに

雨のやがて—雨後

此處にとさだむ—宿所を此處に定む

かうの殿—國守殿

取らば拇指やそこなはん、是彼摘みはやして手束にあまりぬ。他かずおもしろきに、立ちぬるゝ憂もわすれて、

雨そそぎ風吹き立ちて秋の野の花のひもとく時はきにけり

家もあらなくにと、人々わびしがるにぞ、人里もとめて、晝の物くひなどして出れば、日ははや西に傾むけり。辻川といふは、市川のみなかみにて、いと大きなり。瀬々の岩むらに、むせび流るゝ水の音の凄じきは、雨のやがてにやある。左右に山立なみて、眺いとよし。嵐山、大井の渡のおもかげよといへば、吉野川、六田の淀瀬にやと云ふ。いづれによするとも、鮎はこの頃くだりぬらんといへばあらず。この川なん生野の谷々より落ちくれば、かの山の白銀ふく氣の滴には、たえてえすまぬと云ふ。さればこそこれが劣りたるといふ。館と云ふは、いともわびしき山里なり。家どもむづかしげなれど、暮れはてしかば、此處にとさだむ。打見しよりも、住みたる樣よしめきて、よろづ心ありげに、粥なども淸うしてくはす。此處をやかたと云ふは、誰殿の夢の跡にや。赤松山名の昔語あるべし。主人呼びいでてもとむれば、只此國のかうの殿の往古こゝにとのみに委しからず。臥すべき所ははしの間なれば、山風吹入りて、すゞろ寒けなれど、望の夜

良の歌による
ねるは誰が子ぞ—銀の目拔の太刀をはきさけて奈良の都をねるは誰が子ぞ
總角—わかもの
あつかひわざ—仲裁
はろ〲—遙々
よめが萩—よめな

猛に人おしわきゆく。ねるは誰が子ぞ、と言問はまほしく、見る人も是羨むなん、いみじき面目なりける。こよひ豆崎の宿にて、夜べの濱風名殘なやましきに、此家の總角が、乞丐者と、何事をかからがひて、聲高なるほどに、鄰むかひなるも出來て、口々なるは、雨蛙のやうにて、あはれ互に疵つきやすと心ならねど、あつかひわざも由なければ、障子引きたてゝ籠りをり。いつしか心の限いひ果てて、別れ〲に打ちしづまりぬ。よべも今宵もねられぬ草の枕なりけり。行き〲て、播磨の國何の郡とか、西光寺野とていと廣き荒野に來たる。行手百丁ばかりと云ふ。西も東も南も山立竝みて、目もはろ〲なり。行く〲稻葉そよぐ風も吹きたゝず。小草花さき小松おひ、芝生がくれの澤水に、鳥どものうきて魚をくふ。この景色えもいはず面白し。雨いさゝか打注ぎくるに、遠山は見る〲雲立ちこめて、風まぜにふりみふらずみ、人のいきかひもあらずなりぬ。色色の花ども、露を帶びてうるはし。くらゝ、りんだう、女郎花の名殘なる、よめが萩の花、白菊のよろほひながら芳ばしき。大和撫子は濃からねど、時過したるがあはれなり。つゝじ花、薊のかへりざき、いひつゞくれば、春夏秋のくさ〲を、花一時のながめしたり。尾花ぞ繁く招きあひたる、折知がほにてなん。さるとりいばらの赤玉かゞやかしけれど、

すまひ—相撲

えいや聲—掛聲

白玉とかしづくらん—我稚子を白玉とたふとぶ事山上憶

或人もよめる。

いづこにも露おく袖をこよひしも月にあかしのうらの旅寝は

さてしも濱風をひきしかば、朝は歩くるしくて、をちこち尋ねも見ず。曾根崎の社に詣づ。今日ぞ新嘗奉る日なりとて、いと賑はゝし。おそく詣でつれば、何わざもえ拝み侍らず。此廣前の松陰に、潮の涌くが如く人立ちこめて、叫びのゝしる。何ごとぞと見たれば、すまひが庭の、今ぞ手合せすと聞ゆ。此國の手力男は、けふ〳〵と待ちつけたれば競ひ立ち、西東と、百手つがひ定めたるべし。見る人もえいや聲をつくりて、おのれおのれが引く方をたのむ、いと勇しな。足よわき者は、岡にのぼり、木の枝にさがりてあやふげなり。あるが中にも、老いたる人の幼き者を脊におひて、いかで〳〵是見んとする。人ひし〳〵と立並みたれば、岩をさくに似て、幼がいたう物おびえして泣く。いといたう危し。殘の齢いつまでとか、かゝる物見はする。此うま子しら玉ともかしづくらん。おしうたれば、いかばかりか泣きまどはん。世に憎き者の限なりける。やがて事はてしよ。雲井とゞろく聲して、人立ちさわぎ、山も動き出づる如くなるも、別れ別れに散行きぬ。それが中に今日の抜出ならめ。勝はこり大路ふみはらゝかし、いと

さぐり

かたはなり—偏せり

あさり—漁り

あはと見ながらも—あれと見ながらも

其世のさまのまばゆき限を、きら〳〵しく寫し出でたれど、その遠からぬ世に亂たるを見れば、まめ人のいかで推戴くべき。今のおほん時ばかり忝なきは、往古よりも稀なれば、君をあふぎ奉るあまりには、己がどち喜びする暇には、讀みて遊ぶべけれど、さばかり心いりて讀むとも、何の益なきいたづら文なり。かまへてかまへて惑ふべからずと、いとすぐ〳〵しく聞えたり。心ざすかたの違へるには、行手にわかれぬ、猶しりへに立ちて行かまほしく、ことゝひまなぶべき法師なりけり。からす崎とか云ふわたりの、清き渚におり居て、時過ぐるまであさりをり。日も山の端ならんは、と云ふに、

　暮るるともいとはんものか燈火の明石の浦にむかふ旅寢は

大藏谷と云ふ所にやどる。今宵なん世こぞりて月見る夜なる、所がら徒にやあらんとて、濱邊に出でたれば、月花やかにさし出でて、風波いさゝかも立たず。さすがに海面は、青鈍の衣著たるには、かの這ひ渡る程といへど、こしかたは夜ぎり立ちこめて見えず。あはと見ながらも淡路の島はたゞさし向ひて、かち路やあると思ふばかり也。濱づとにとて、

　うら風に雲吹きはれて長月のながき夜わたる月のさやけさ

あまがけりて—天翔りて
有識—博識
戀の山には孔子たふれ—戀には孔子も迷ふの義
雨夜のものがたり—帚木の卷にあり
あなぐり—

の、此世ばかりはさてもあらめ。神さりましても、猶愛慾のまなこ明らかならず、汝は罪なき身を、いかで斯る荒磯に朽ちんとやすると、都にあまがけりては、朱雀の帝の雲りなきを、いかりにらみて、御光をなやませ給ふは、さしもさとりなき御神にぞましませる。朧月夜のしひたるさゞめ言、王命婦を責めありくなどは、いかめしき國罪ならずや。夜居の僧が饒舌、老やぼけたる、光にや媚びたる大學の君ぞ、いみじき有職にて、まめ人の名をほむるかと見れば、小野の夕霧分迷ふは、友垣のまことなし。見よ〳〵、筆のすさびのさかしきまゝに、此源氏の君ぞ、ひとの國なる聖達にも、をさ〳〵劣らじのまけじ心もていひなしたる、戀の山には孔子たふれ、口かしこきがうたてけれ。かうやうの筆つきなん、をみなの女ゝしき本性にてこそあれ。されど言のあやに妙なる、心ばへの巧なる、この類のものには、和漢にもならびなきを、若強ひてこれが徳見んとならば、雨夜のものがたりに、大かたの人の心のくま、名殘なくあなぐり出でたれば、却りて讀見ん人の、嫉心の穢なきを戒しむる敎ともなるべき。おほよそよろづの事も、私言もてことわり爲むには、あやしう僻める心も、直くまめ〳〵しく取爲すべかめり。さるわざのうたてさよ。我佛の道も、怪しうめづらかに說きなすはかたはなり。此物語も、

父の爲時―紫式部の父藤原爲時

交野少將―古物語の主人公なり不詳

まつりごちては―治めては

文王の子武王の弟―自ら周公旦に比したるなり

この君―源氏の君

たるが、今はとりかへさまほしき年月なりけり。さるをかゝるまめごと、いかで女業ならん、父の爲時が筆加しと云ふは、しひてあが佛とあがむる人の、ぬしなき眼なりき。そも詳にかへし見ば、我がことまたずも、おのづから悟りぬべきものぞ。其一つ二つをかたらん。先光君の人がらいかにぞや。容姿のめでたきは言ふもさら也。才の程も、古に競ぶべきは難ぞある。本性のまめだちたる、交野の少將には笑はれ給はんよと云ふ。よく見れば、あらずならん。ひたぶるに情ふかく、親しきにも、疎きにも、萬にゆきたらひて覺ゆれど、下には執ねく、ねぢけたる性なんおはす。薄雲の御ことは、人皆罪ふかしとこそ見れ。空蟬の裳ぬけのきぬも、猶わかきほどとゆるすべきを、前齋宮、玉かつらの、うたてもてわづらひ給ふは、親ざまあしきわろ人なるを、世の中まつりごちては、文王の子、武王の弟と誦じたる、いと聞きにくし。右衞門の督の唐猫のかよひ路は、心とまらぬあたりにさへ、いかが岩根の松よこたへん。ゆるしなき眼に、人のこゝろをやましめ、野分のあしたの垣間見は、親子の中らひにだに、執ねきこゝろづかひも何事ぞや。夫があまりのわれたる戲言も、此君の情しきは、世の人には過ぎけんかし。さるを須磨のさすらへ、おのれ罪なしと思したるは、教なき山賤の心とやいはん。又桐壺の帝

彼の式部—紫式部

おそろしき所云々—地獄、この事は寶物集今鏡等にあり

羅氏—羅貫字本中、水滸傳の著者

石山の佛—石山寺の觀世音

しとにや。齡のほど五十にたらぬ法師の、おなじ松陰にあるが、瞰まへる樣のつらつきして、この都人よ、さるあだし事を、まさなげに打物語りたまひそ。かの式部とかは、あとなしごとゆゑ〳〵しく作出でたる報に、おそろしき所につながれ、永劫の苦しみをうけたるぞかし。もろこしにても、斯樣のこと書ける者の報なん、いと罪深しかし。羅氏が三代まで啞子をうみしなども云ふ、かまへてかまへて信ずまじき文ぞと聞ゆ。思ひかけず、めざましうこそ有りけれ。法師もおなじ道ゆく人なれば、行く〳〵物語しつゝなぐさむ。いとかたじけなき事おほかりけり。只今の御さとしこそ、世に珍しくも承り侍れ。さればかの物語は、佛の教の尊きにも、旨おのづからかよひ、現の世にも、かしこきいましめと成りぬる由、昔の人々の論じおきてつるを、如何樣におぼし分きて、かうまでくたし給ふらむ。そのことわり、片端ばかりも承らばやと云ふ。さればよ、道道の文のことわり說く人は、あながちにも其旨深からんとては、兎ざま角ざまにもてつけて言ひしらふ程に、はてはては本つ心にもあらぬ私言をさへ取囃すなり。此物がたりの道理いふなん、わきて鳴呼なる。しかのみならず、式部は石山の佛の變化なりと、いと狂はしきまでほめなせるを聞けば、己がかしこむ道の案内にもやと、あたら眼を費え

つくし綿―筑紫綿に心をつくすをかけたり

小瓶―酒器

光源氏の君云々―源氏物語須磨の巻にあり

　情ある人のこころをつくし綿身にそへゆかば寒けくもあらじ

宜しも天の羽衣とたてまつりぬるは、こゝろざすところなん。山陰の國にて、いといたう寒き所なりける。須磨のうみづら如何にながむらん、明石の泊はさぞなと、たれ〴〵もうらやみ聞ゆるにぞ。まづかのわたり歴つゝゆかばやとて、西をさす。草の枕のをかしきは、蘆屋川の松陰にしばしおりゐて、土くぼかなるに、小石をつみて、木葉松笠うちくべつゝ、茶を煎てあそぶ。鶴けむりを避くるといふ句のこゝろしたり。かしこくも小瓶一つは持せたりけり。

　蘆の屋の蜑のたく火のそれかとて道ゆき人も過ぎがてに見む

日高けれど、住吉の里にやどりぬ。須磨の浦傳ひする今日は、海の面なごやかに、百船のゆきかひ、苅菰のうち亂れつゝ、渚には釣ほこりて遊ぶを見れば、この磯山松の色も、人々の眼もひとつ縁なる、ざえある人も口とづるわたりを、まいて打出べうもあらず。此つれたる人の、いにしへ光源氏の君の、罪なくて流浪たまひしといふ跡はいづこぞ。巳の日の高潮とは、此海の荒れたるにこそ。今日のにはよきには、さること如何でかとおぼゆるを、斯る所にも、年月ねんじ過させけんよ、など打呻きかなしがる。いと聞にく

足びきの云々—足引に足病をかけたり
いで湯—温泉
はふそば—母君
玉鉾の—枕詞
あつごえたるもの—綿入

藤簍冊子 巻之三

○秋山記

秋の山見にとにはあらで、此三年がほど、足曳のやまひにかゝづろひて、世のわたらひも何もはかゞゝしからぬ。かゝるを、昔は但馬の城崎のいで湯にしるし見しかば、此度もまた思し立てるを、後に立ちてくる人も、年頃ふかうそみし事あれば、ともにとて、はそばの仰のまゝに召連るゝなりけり。長月の十日あまり二日といふ日、かど出す。親しき友垣の女の許より、明日なんと聞え給ふにぞ、ゆくりなくも思ふたまふる。玉鉾の道もたえゞゝにとか、覺束なささへそひて、胸つぶるゝぞわりなき。

朝なゆふな馴れにし君が出てゆかば何わざをして月日過さん

秋風もいたう身にしむ頃にして侍れば、いとよういたはりて、御事もなく彼處にいたり給ひね。此あつごえたるもの、いとあらゝゝしげなれど、山里の朝宵しのがせ給はんにはとてなん、と聞えこしに、

四阿

打ちつけに其人かたを垣間見のあなあやしとも思ひこそなれ

浮舟

河島にいざよふ波のいかにしてふたゆくこころせきや止めん

蜻蛉

それとだに思へどすべな宇治川の玉藻になびく妹がくろかみ

手習

己が上をよそにききては且つ嘆くたがゆるさねば死なぬ命ぞ

夢浮橋

有りてなき世の常をしも渡らへばなきが有りてふ夢のうき橋

紅梅

折りてやる花に心をそへつればこをば幾春みませとぞおもふ

竹河

亂碁のみぎまけたりと聞くからにめでし櫻はちりぬともよし

橋姫

都にも色をあらそふ秋ながらひとかなつかし宇治のやまざと

椎本

あはれ君世をうぢ山の奥ふかくほだしの綱はたちて入りけん

總角

なさけある人もつらしなはすのはの上に心をのせし身なれば

早蕨

法の師のこれをたきぎにかへて摘む野のつくづくし山の早蕨

寄生木

見まさりにかく咲く花を根分してぬすままほしき園のしら菊

柏木

そむきても世にあふべき心にはまけてはかなき人のかなしさ

横笛

取りつたふ世々のかたみの笛の音の殘りて寒き秋にざりける

鈴虫

それにとて告げし心をふえたけの節たがへりと嘆きてぞよる

夕霧

まよひ入る心の奥もきりこめてしののみだれの小野の山ぶみ

御法

花やぎしつかさのきぬと見しいろは野邊の煙の雲のむらさき

幻

春さむみあはたつ雲にかくろひてひかりはいづら峯のしら雪

匂宮

昔にはぬしこそかはれ梅さくらにほひおくれぬ春は來にけり

行幸

小鹽山みゆきのためし野にみちてうちちる雪に御鷹よぶこゑ

藤袴

焚合すけふのくらべは秋ふかき野にぬき捨し衣にや有るらし

眞木柱

むぐらおふ壁のこぼれの蝸牛這ひかかりてはゆくかたもなし

梅枝

うぐひすの巣立のとりは久方の雲井にいまや名のるひとこゑ

藤末葉

大島のなるとならずとしほぶねの辛きわたりも風を待ちえて

若菜　上

なほ若きけこそ添ひぬれ春の野につむ菜を君が老のはじめに

若菜　下

陸奥にいつか來にけんたならしのことは緒絶の橋となりにき

たまかつら

筑紫路をいかになれとか立出てみやこにも世をうみや渡らん

初音

雪わけてけさ谷いでしうぐひすの春の方にはこゑもこほらず

胡蝶

春の日をくるるにあかで飛蝶のゆくへは花のちりのまがひに

螢

見ゆをいとひ見えぬをうらむ夏虫の光は人のためならなくに

常夏

稀に遊ぶ庭のまうけの水うまやとこなつかしき花のゆふばえ

かがり火

まどはせし箱のふたみのあひ難み蔽ふははかな何のみだれぞ

野分

たまだれの小簾の見いれに心さへすさびにけりな野分てふ風

蓬生

藤浪の懸けてまつとはとひてしる露ふる宮のかどのしるしに

關屋

こころにはゆるせし關にあふ坂の山したしづく袖ぬらしけり

繪合

須磨浦にすみは果じと繪に寫し事にかこちてけふを待ちけり

松風

うつり來て我宿ながらあかしがたなれし岡邊の松のあらしか

薄雲

さりし世をむなしき空にかへり見るこころの鬼よ我を誘なふ

朝顔

あさがほの花田は色を深むれどうつらでおける庭のしらつゆ

をとめ

少女らがつれまふ衣のおとさえて夜やふけぬらん庭火濕れる

花宴

かすむ夜もしづえやすげに手折らるるうすはな櫻色に匂ひて

葵

わりなしや妬さ一つの浮瀬には人をも身をもしづめつるかな

さか木

神風の伊勢は其方とさしぐしのさしてのらねば戀のしげけん

花散里

いろは香にまけてにほへる橘の花散るやどもたえずとはまし

須磨

心から身はやまがつにやつせどもなほこりずまのうら嘆して

明石

みやこにもひびきのなだの潮合にかづぐ白玉たれにささげむ

澪漂

忘らるる身はかつしれど墨江の濱によりこしかひはありけり

桐壺

宵のまにはかなの月はいりにけり妬める雲を懸けしながらに

帚木

さまざまにさだめあらそふ人の上にはては心もさみだるる空

空蟬

やり水のほまれのかどをひき入るる車は戀のおもになりけり

夕顔

けやすしと思はばなどてよりて見ん明くるをまたぬ夕顔の露

若紫

ここのへの北山ざくら咲きにけりかけし霞もなごりなきそら

末摘花

中川にことよき橋をわたされて見るめなき野を分けもこし哉

紅葉賀

もみち葉の光をけふはこりそへて千秋と君をいはふべらなり

よはひとて人のいはふは憂きことの數そふ年の積るなりけり

翁の齢我には一とせを越えさせしかばいとほしさに言ひやりけるなりむかし今をおもひめぐらすに唐の郭汾陽此國にては皇后宮大夫俊成卿をおきて終の世までうき事しらず富と齢とためしなく聞えたるはあらずならん侍りき

冬の夜のながきをかこつ老をあはれみてかたはらにある人の何くれとなぐさめかねつるあまりに光源氏の物語をつぶつぶと讀みて聞ゆ一夜に一まき或は二卷長きはふた夜三よにも卷々の終るごとに是があたひに歌よむべく云ふいなまでよみつるがそのこころをやたがへつらんもしらずいみじきをこわざなりけらし

茶如レ接二高貴之人一失レ度其悔不レ可レ歸

天しろや眞名井の水のえらびなき悔のちたびはしれ人のとも

法にいり法をいでずばあぢきなくすむも濁りて後の世や經ん

　空也堂の法師茶筅の歌乞ひしに

草木にもあらぬ小竹の穗になびき末はみどりの波も立ちけり

　茶盒子を作りて其土色もて冬衣と名づけたるに

こく薄くかさねてもなほふゆぎぬの神まもらね寒げなりけり

　香煙一嘘遣悶といふ事をよめと云ふに

憂き事を空のけぶりにふきやれば垣根の夏のくさやなになり

　河内の尼足袋ぬひておくりしに

淺沓のあさましきまで老いぬれば此度を世のかぎりとぞ思ふ

かへし　唯心尼

あさぐつの淺くはきみを頼まねばなどこのたびや限なるべき

　伴蒿蹊の女のとみの病にむなしきと聞きて

世の中はかくこそありけれ軒わたる蛛の巣がきに秋の風ふく

軒こぼれかはら碎けてふるでらの蛛の網にもつきのかかれる

鷲

かか鳴きてゆふべはかへる荒鷲のつばさにしのぐ筑波やま風

鳩

野分ふく風にはねきり飛ぶ鳩のやどりまどへど友ははなれず

雀

二むらの竹のうてなのねぐら鳥とのゐ呼び起すゆきのあさ聲

色をわかちて人々とよみける中に

花に咲き絹に染附くくれなゐのうつろふ色を見はてずもがな

常に茶を煎てあそび敵とするによめる

あかでしも春のこのめをつみて煎て心は秋のみづとこそすめ

東坡云　佳茗似二佳人一

すむといひ淸しといふもよき人の常とし聞かばあかぬわが友

猪

ふみまよふ不二のすそわの眞茅原荒猪のかよふ道は見えけり

鯛

安濃の浦の鯛つる蜑がけふも又釣りほこりては酒にかふらむ

鯉

淵ふかくすむとはすれど淀舟のさをにぞ鯉のおどろきをして

鱸

出雲なる松江の鱸あきかぜにすがたを見せて立てるしらなみ

鯨

松浦がたかよふ鯨の跡見ればあまぢにけぶる八重のしほかぜ

蟹

蘆原のことば茂くてかひなげに世にすむわれと人も見るがに
津の國のなにはにつけてうとまるる蘆原蟹のよこばしる身は

蛛

船

から櫂を五手にたてて四つの船わたりし三代のためし忍ばゆ

空かすむ難波のうみの朝なぎに帆手うちつれて出づるふな人

車

東にたついち見ればをぐるまのはこぶあき物ところせきまで

馬

なかなかに翅は折れん一日にも千里行くてふ甲斐のくろこま

牛

五月雨の晴間もとめてすきかへす水田のあゆみ牛とこそみれ

犬

夜ひよひに垣もる犬におどされてにくも妹を思ひこそなれ

戸ざしせぬ野寺のかどに伏しなれて稀にぞ犬の何をとがむる

猫

たが家を離れてここにまよひこしとどむ一夜になるるから猫

鶯のねぐらの竹のふしはかせ世のをさびとといはふべらなり

しるしらぬ人の齢つめりとていはひの歌こふ毎にいつも贈れるうた

かぎりなく齢たもちて春秋をちぢよろづよとかぞへても見よ

あるやんごとなき御かたに時々參りて物ら聞えたいまつるなべにわづかに散りとどまりしふみどもをめなし鳥のやくなき物から取りあつめ奉るとてよみてくはへし歌

今はただ老波よするくづれぎしふみとめよともたのむ君かな

御かへしろくにそへてたまひつれどかしこければしるさず

四天寺囘錄　三章　雲水とは五層の浮圖の名なり

雲水もやけか亡ぶとまだき世をしるせし文に在りやあらずや

名ぞ誠あれにしをかの冬がれのむかしにかへる風のおとかな

始ありしむかしのときを人は見し今のをはりにあふが悲しき

岡男鳥と云ひしは友垣の中に物ら問ひかはしついとうれしきかたらひ人なりしに病して俄に失せしかば打泣きつつ

我こそと思ひ定めて捨てし世の人におくれんものと知らずて

まさのりと云ひしもまめがたりする友なりしが打つづきてはやう死にけりえがたき人々をさいだてて後は友とてもとめずなりぬ

脱換んひとへごろももあらでただ露おきそふる秋にざりける

或人世にありわびて云ひこせる

ゆく末の遠きをさてもわすられて身の一つだに今はたまはせ

と聞えしによね一斗をおくりて

行末もあすの便もしらぬ身の晝間ばかりはすごせとぞおもふ

岩井何がしといふ謠曲の上手の七十の賀をもとめ來たられしかばよみてあたふ

いづこにと人のとひければ

風の上に立ちまふ雲のゆくへなく翌のありかはあすぞ定めん

とこたへしかば爪はじきして憎きものにいふとなん聞えし又長柄の濱松陰にかりほつくりてすむとて

むすぶより荒れのみまさる草の庵を鶉の床となしや果てなん

庵を鶉居と名付けしは聖人鶉居鷇食の謂にあらず鶉は常居無しと云ふによれるなり此いほりにある夜ぬす人いりていささかある物をかつぎていにけりあしたおもふ

我よりもまづしき人の世にもあれば茨からたち間くぐるなり

その入りし壁のこぼれを窓に作らせて盗窓と名づけて風を入るる便りよしと人にかたりしかばあなしれじれしとてあしく云ふとも聞えし

かへせし歌

埋火のすみつきがたきみやこにも思をおこすともはありけり

かへし　　　翁

思ひやるかひこそなけれうづみびの炭つきて唯久にあれこそ

河内の國にとひゆく人のありてはろばろ來りき
こぞの秋なき人をここに伴ひこし事を思ひ出で
てすゞろに打泣かれつつ

身はおなじ家にありとももののおもふ心をいづち宿りかへてん

とし月うとかりし人のもとより度々おとづれす
れど聞えぬはいかにぞやうらみつべきものぞと
いひおこせしに

なかなかに我おこたりをしるべにてうれしき人の心をぞ見し

といひしかば心とけぬとなん又の使にいひこせ
しなりすみかさだめずをちこちしあるくを今は

橘の經亮やまと琴かきあはせあるじせられしに

よめる

山里のふたきのまつの聲あひて秋のしらべは聞くべかりけり

かへし　翁

やまかげのふた木の松の秋の聲人に聞かるるときも待ちけり

二木の松とはこの庵の庭もせに年深きが立てるをもていひよするなりき翁世を去られし時にも

たまごとの緒はたちしかば君が庵のふた木の松よただ秋の聲

南禪寺の庵にありし時

君がすむやどの水音ききつれば濁るこころもあらはれにけり

かへし

我庭のさざれ石こすたにみづのすむとばかりは人目なりけり

年の暮にはいつも炭を切りて贈らるるによみて

の花の　いつも榮えむ

反歌

ついたつる君が新室もろびとのほぐ豊御酒にうたたのしせな

送㆓佐々木眞足東行㆒歌

あづま路は　はるけかりけり　わたつみの　へた行く道を　海わたり　河舟よばひ　ぬてゆらく　馬に鞭さし　眞木立てる　山をもこえて　ゆく人も　登りやはえん　雲だにも　いゆきはばかる　不二の峰を　何にたとへん　打ちよする　駿河の國と　なまよみの　甲斐にうしはき　伊豆相摸　國のことごと　たちきそふ　高峯ことごと　八尺瓊の　五百つつとひを　緒にぬきて　きすめる玉の　あな玉は　ふたつやはある　天にます　玉のおやちふ　神わざに　造りみがきて　たちいでの　峰にとこしく　つむ雪の　光かがよふ　走出の　麓の海の　田子の浦に　ゆふ花さけり　みすまるの　玉拾はずば　浪の穂の　ゆふ花つみて　濱つとに　もてこわがせこ　歸りこん日は　見ぬ老がため

小澤蘆庵をはじめてとひゆきしとき翁箏の琴

この神崎の　河隈に　夕潮待ちて　よる波を　枕となせり　黒髮は　玉藻とな
びき　むなしくも　過ぎにし妹が　をきつきを　納めてよよに　かたり次ぎ
いひつぎけらく　この野邊の　淺茅にまじり　露ふかき　しるしの石は　たが
手向ぞも

右遊女入水之事、見二圓光大師傳記一

賀二荷田信美之新室一歌

かけまくも　かしこけれども　いはまくも　あやにたふとき　すめみまの　神
の尊の　御心を　たひらの宮と　定めまし　御代のつぎつぎ　老松の　千歳な
せれば　枝葉おひ　根はひ廣ごり　天雲の　上につどへる　臣達の　末にまゐ
出て　夜の守　晝のつかへに　雲に乘る　龍の尾をふみ　鵲の　橋をわたりて
かしこしと　身もたな知らす　汐干の　荷田のうぢびと　功あれば　この大宮
のとのへなる　鴨の河岸　つきならし　岩根とりなめ　眞木柱　えつり壁草
はこびもて　造れる家は　さき草の　さきてまさきく　うみの子の　末のするゐ
まで　すみつがん　始おこせば　大鳥の　羽がへはせじな　河のべの　いつ藻

の浦と　名には聞えて　かしこしや　海をたのめて　背ともなる　山に畑うち鹽木こり　寒きよひよひ　なみのうへに　ちどりつまよぶ　あまの子の　いづちとまりと　こぎこねば　妻待ちかぬる　枕邊に　波の音さわぎ　あとべには山風さえて　いく夜あかすも

反歌

海の底のにきめかる夜は荒鹽の干るもみつるも神のまにまに

見二神崎遊女宮木古墳一作歌

うつせみの　世あたるわざは　はかなくも　いそしかりけり　たち走り　高きいやしき　おのがどち　はかれるものを　ちちの實の　父や捨てけん　ははそばの　母が手はなれ　世の業は　多かるものを　何しかも　心ゆもあらず　たをやめの　操くだけて　しながどり　猪奈の湊に　よる船の　かぢ枕して　浪のむた　かよりかくより　玉藻なす　靡きてぬれば　うれたくも　悲しくもあるか　かくてのみ　ありはつべくは　いける身の　生けりともなしと　朝夕にうらびさぶしみ　年月を　息次ぎくらし　玉ぎはる　命もつらく　おもほえて

眞白根の日枝のみ雪のあかつきはふじ見ぬ老の思ひ出にして

老梅

なべてとふ人もあらじなふるさとの老木の梅の春のはつはな

立雛

別れすむをしへ習はぬいにしへのかはすの鳥に遊ぶさま見よ

明烏

夜がらすとたのめし聲をいぎたなきまくらに明くる東雲の空

其かたと云ふに

あさづまにとまりする舟寒からしたえず伊吹の山おろしの風

早友追門の圖

うみ苧なす　長門の國と　豊國の　中のわたりは　はやともの　神のまもれば
百舟の　小戸の汐あひ　潮まちて　眞かぢしじぬき　風待ちて　漕ぎこそ渡れ
この神の　相うづなへば　鯨うく　大海原の　西をさし　北へ廻らせ　よくゆ
きて　好くもぞ歸る　此浦の　磯回に立ちて　人さはに　住みぬる里を　たに

ふる雪に羽ぐくみかぬる夜の鶴かなしき聲もあめにきこえん

小原女の柴に腰うたけ煙くゆらせたる

休らひてあだにくゆらすけぶり草それも眞柴の空になびきて

旅人雨を凌ぎつつつれだつ

三吉野の花にこころの急がれて雨やめてともいはで行くらむ

庵山雨

しらくもの上のいほりと思ひしを夜をすがらの雨のおとかな

綠毛龜

こきとても綠の衣のくらゐやまおふてふ龜の名こそをしけれ

鶴むれとぶ

なきわたる天のたづむらこゝろなくば空めの秋のかぜのしら雲

松に月かかれり

月すみて松にこゝろなき秋の夜は緒すげぬ琴のあそびなりけり

比枝に雪つもれり

ふるさとと思ひしものを年經ては知らぬ國にも我は來にけり

東方朔偸」桃

すまじきはぬすみなりけり幾千歳ののちの世までも語り傳へて

六歌仙

言の葉も人のほまれもおのづから六つてふ數にあふや何なり

陶淵明

秋菊の露のおきふし安き身をなど世に出でて立ちやまどひし

能因窓よりかしらさし出したる

いつはりを我心からゆるされてまよふか道のはて知らぬそら

蓮性倒騎

西をさすこころの方はたがへどもそむかで法のみちあゆむ駒

西行猫の火爐戸にすゑたる

つゐかさの外には何をから猫の火とりの灰のかかる身にして

雪中常磐子

紅葉散り鹿の足跡あり

此秋もゆきて歸らぬあと見れば我さへもねに鳴きぬべらなり

蔦蹊

もみぢ葉は猶散りしけやさを鹿の跡をさつをの目に立てぬ迄

くれてゆく秋を男鹿の跡とめて深山にわれもかへろとぞなく

屛風に殿つくりの上を時鳥鳴きて過ぐ

殿守の宿直人かもたきぐちに名乘りて過ぐるさよほととぎす

たかき山に雪つもり月空にすむ

白山をおろすふぶきの風のうへに冬のよなかの月すみわたる

楠公讃　三章

君が思ふ君にありせばつるぎ太刀ときし心のかひぞあらまし

君こそは君をしらざれ天つちの神し知れらば知らずともよし

ほまれある名をば仰ぎておほかたは君が心を知らぬなりけり

浦島子

月下草露のかた

更けゆかば霜やむすばんしら露のひかりを寒み月すみわたる

山田に喬松立てり

植ゑはてし山田の岸のひとつ松かげいとはるる時は來にけり

小松に雪かかりたる

嵯峨の山おとねのけふも風さえて小松がうれに積るしらゆき

手毬胡鬼の子

うぐひすの軒端の聲をはじめにてももちとりどり遊ぶ春の日

河柳三日月

涼みとる淀のさとびと河ぞひのやなぎに落つる月を見るかな

鶺鴒石上に遊ぶ

いその上におりゐるほどもいとまなき教に遊ぶ庭たたきかな

池水氷り千鳥群れとぶ

冬の池のささ波とづるあかつきに氷らぬ聲を鳴くちどりかな

鷹すゑて分くる野山にひく犬のさときは人にうとまれぞする

澄月

畫題　初夏晩來微雨

よしや降れこの夕暮にほととぎす旅たちぬべき雨もよのそら

蘆庵

緑そふ小雨やくらきこがくれにほの見えそむる窓のともし火

蒿蹊

舟とむる江の波くれて打ちそそぐ雨に待たれつ山ほととぎす

立齋

橋見ゆる野川の岸のなつこだち暮れゆくいろも雨をふふみて

夕つげて水におとなく降る雨のうの花くたすはじめなりけり

海島暮天舟泊圖

名もしらぬおきの小島のいそまくら夕浪さわぎあきの風ふく

溪舟圖　天地一釣竿の心を

海原にただひとすぢの釣の絲の外にうつさじおのがこころを

思はぬも思ふも夢のまくらとふおもふに見えて早もさめなん

竹與レ心倶空

ためずとも直き心はおのづから竹とともにやむなしかるべき

野渡無レ人舟自横

冬枯の野川の風を身にしめてあはれやひとりわたり呼ぶこゑ

世人結レ交用ニ黄金一

まじはりをこがねに結ぶ世の人のつひの心ぞつねなかりける

白眼看ニ他世上人一

世の中の人をさぐれはおのづから塵なき庭のまつのしたぶし

悔教ニ夫壻覓ニ封侯一

何にかく出し立てけん劒太刀名のをしけくも今はあらなくに

調與ニ時人一背、心將ニ靜者論一

我をしる人しなければ我しらぬ人に見すべきことぐさもなし

元興寺の僧にならへる

機による

千々わくる絲のみだれや高機のそらなる人もこころあひては

絲に寄る

神ごとの祟にかけてくる絲のたえばつがんよ戀ひなみだれそ

荻に

みだれあふ荻の葉風のさやさやに人ぞいふなる夜には隠れよ

女郎花に

掘植ゑてかひある花はをみなへしくねるも我を頼むなりけり

秋もはやすゑの原のをみなへし人に折られむ時もすぎけり

ないがしろ

さりともとたのむ心も我からにあくたがはにぞ身を流しつる

怠

怠はわれと恨みんつなひきてあふ夜あはぬよこころ見しから

堪へしのぶ

餘りにも老いぬる人のこころかなとはねど恨む節も見えぬは

三年たゆる

三とせこぬたよりをきけば東路の草のまくらに妻もとむてふ

月へだつ

今こんといひしもひさし我ならで親を思はばはやかへりこね

一夜をへだつ

隔つるはひとよばかりのさね床に心づからやちりのつもれる

不逢

たらちねのゆるせしわれを人言の千名の五百名にあはぬ此頃

片戀

なかなかに思はずもあらぬ風のおとの聞えて苦し片戀にして

弓による戀

引きならす宿直が弓弦音更けて誰が上ならんうしと告ぐなり

若子

弓箭おひ君がみゆきのみさきおふわく子うつくし我聟にせん

樵父

大木曾や小岐曾の山のふかければ眞木の杣人ここた入るてふ

漁父

ちぬの海のなみまにうかぶ櫻鯛あびくや花をちらすなるらん

懸想

やまがはの岸に根はへる藤かつら思ひかけては橋とならめや

疎くなる

たまだれの小簾にかかれる葵草かれがれ秋にあはんとやする

夜ひとりをり

君は今は越えはてぬらんたつた山ながむる峰の月はいりにき

名をかる

立名をば外におふせてかつ歎くそれをたよりに人や戀ひよる

引きはへし山田のひたの縄くちて守りにしままの岸のふせ庵

窓

餘所はまたくれもはてぬを森陰にふみ見る人の窓のともしび

法の師のおこなふ窓のかみやれてたのめる西の風はさむしも

竹窓夜雨

ねざめては文見る窓にうゑ竹の葉をうつ小夜のむらさめの音

軒

軒ならぶ都のにしのにしきおり音たかしもよしづかなる世に

關

逢坂のゆるさぬせきにたたずみて時雨をよそに過しつるかな

僧

木葉うくあか井は雪にうづもれてほとけのつかへ今朝ぞ怠る

翁

百年をかぞへも知らぬふるおきなこのひと里の神とかしづく

神まつるくろきの殿のかりそめを松の一木につくりけるかな

里近き野中にたてるかみやしろ木深からねど茂りあひにけり

寺院

小初瀬の寺のながやのかりまくら夜ごろになじむ鐘の音かな

墨染のくらまの寺ときゝつるは雪にあかるきやまぢなりけり

今はもよ片われ月のこゝのへにひがしの寺のにしにたつ見ゆ

曉はうれしとを聞くかねの音をゆふべの寺にあはれすゝめる

門

かどひろきひとの情を見聞くには交りがたきものにざりける

隣

頼めこし壁の隣のともすればあふさきるさにうたて世のなか

宿

朝とくと思ひし宿をうぐひすの鳴音ほだしにいでがてにする

田廬

海上眺望

もろこしを出て幾日の波の上に不二の高峯は見ゆとこそきけ

河

津國にありといふなるたまがはは卯花くたすながれなりけり

瀧

岩根よぢかづらに懸り越えくれば落つ瀧つせの水かみにして

ちる花は春のみなわに消えはててとはにながるる三芳野の瀧

池

かふちなる狹山の池のひろければ稻葉かりつむ舟も見えけり

道ゆかばとひても見ませ笠縫の眞菅刈るてふまののふるいけ

皇都

神ながらえらびさだめて國土をたひらのみやこ今さかりなり

ここのへのうちとにあそぶ鶯の春はくるれどふるすわすれて

神社

高嶺こそときをも知らね春さればあをしばやまに霞たな引く

消えてふる雪かちりけむみな月のふじの裾野のゆふだちの雨

いほはらの清見が崎に朝はれて不二は秋こそ見るべかりけれ

箱根路の雪ふみわけて眞しらねのふじの高峯を空に見るかな

谷

誰か來てすみつきにけん山深き谷のひとつ屋けぶりたつ見ゆ

原

下野や那須のしのはらしのぶともみやこは遠しあゆめわが駒

野

むらさめの名殘は草にうづもれて野末の小川おとまさるなり

海

越の海は浪たかからじももふねの渡りかしこき冬は來にけり

伊豆の海をこぎつつくれば浪高み沖の小島よ見えがくれする

わたつみのそことも知らぬ泊して袖には波の懸けぬ夜もなし

煙霧

ゆふぐれのきりの籬の島松はけぶりにたてる眞しばとも見ゆ

雨

三芳野の山にいりにし人とへば花にもあめはさはらざりけり

露

白露にきえはおくれぬあだ物のいのちを人はたのむなりけり

風

まきむくの檜原さやぎて吹く風に初瀬をとめの袖かへる見ゆ

おもひつつけふも暮れぬる都邊に山風さえていでがてにする

山

ふたら山吾妻の空とききつるをしげき御陰はここにし有けり

あのくたら我たつ杣をはじめにて比枝の山彦よばぬ日もなし

萬世の國のしづめのふじのねをあふげばそらにうつしみの神

田子の浦や千尋の底にはしりでの富士は仰ぎて高きのみかは

天

八百よろづ千よろづ神の神ごとも天まづなりて後とこそきけ

日

ひさかたの日のたてぬきに春秋をあやにおりなすたく機の神

星

闇だにも忍ぶさはりとさやけきは天のかがせ男あしき神なり

雲

晴曇る人のこころにくらぶれば雲のまよひはかごとなりけり

暁雲

よしの山雲にまがへる花さけば花にもまがふあかつきのくも

雲有帰山情

まがはじと花にわかれて小初瀬にゆふべはかへるはるの浮雲

青靄

淺みどり我まづそめて春の色を野やまに見する朝がすみかな

反歌

浦島がはこゆたなびくしらくもの天にもゆかな老においては

其二

年てへば　明くる暮るると　ひととせを　一日のごとに　いひつつも　過ぐるを惜しみ　新らしき　春をむかふと　よき人の　家のためしに　淸まはり　ゆまはりしつつ　神にねぎ　こと穗咲して　うからやから　にぎひゆきかひ　たぬしきを　へめとぞいはふ　内日さす　宮のとのへの　水鳥の　鴨の堤に　草枕　假庵にはあれど　六年まで　おき居ふしなれ　世の人の　なすわざしらず　鹿じもの　ひとりある子も　うちたのむ　せなに別れて　ぬば玉の　衣著まどひ　ひたぶるに　後の世たのむ　すべのすべなさ

反歌

いきしにの二つの海の中つ瀨にかかりてあまた年も經にけり

○雜　歌

りて

年きりと思ひし花も咲きにけりにほひおくれて見ゆる物から

客舍感懷

其一

年といへば　月日あまたに　はる霞　秋たつ狹霧　ほととぎす　鳴くや五月の
さみだれの　けふをいく日と　長きけに　いぶせくもあるか　神無月　しぐれ
の雨の　晴れ曇り　雪にこもれる　比までを　久しとをいへ　其年を　十はた
三十　四十ちふ　老の初めも　いつのまに　遠ざかりぬれ　百足らず　經ぬる
齡は　海にある　物とし聞くを　天雲の　よそにはあらで　おのが身に　積み
つるやなぞ　山河の　七瀨よどます　此年も　暮れ果てぬめり　何すとか　世
には有りけん　うつし身と　我思はねば　花の如　榮ゆる人の　今までも　世
にはあらじと　住の江の　濱によるちふ　しら玉の　忘れてぞある　宿さへも
訪るをやさしみ　松の戸を　さなしかためて　釘さして　入れじとぞすまふ
此戸ひらくな　ここにある子よ

せしを　此年は　何ぞのとしぞ　あら玉の　來經ゆく月日　暮れはてて　月もかくれぬ　其月の　入りぬるがごと　闇夜なす　黒き御車　とどろかし　よみちふ國に　出ましの　御供の人も　鶴ばみの　にぶ色衣　にふふにぞ　あゆみや疲ると　をろがみの　心もあらねば　弱車　ひかれも出でず　葎生の　門さしこめて　此夜らを　もりてぞあかす　かけまくも　かしこけれども　玉きはる　命なにせん　老が身に　あくるを春とも　おもほえず　あわれあわれと此夜らを　なげきてあかす　かしこけれども

反歌

立ちさへしよもつ平坂岩くえてとほらふみちと何日なりけん

よわぐるまとほらふ道ぞたのまるる老のこゆべきよもつ平坂

右國母御葬送之大路、與二寓居一相近、因有二斯作一。

年かへりて睦月のおほやけ事どもみなとどめさせたまふが二月ついたちをはじめに御ためししきしきおこなはせたまふともり聞きたいまつ

え　三冬盡き　春はちかけと　西の市に　立ちも走らず　ひんがしの　市にも出でず　あしびきの　山邊の家に　庭雀　うずくまりをり　堅鹽を　とりつつしろひ　さす鍋に　湯わかしくみて　あら玉の　來經ゆく年を　むかふとやきく

右寛政五年六月、漂然來ニ京師一、玆歳冬十二月廿八日夜賦レ之。

歳晩夜坐感懐

この年や　何ぞのとしぞ　この夜らや　いかなる夜らぞ　あら玉の　來經ゆく月日　老が身に　たへぬ重荷を　弱車　かけてしのべば　いにしへは　うけきがうちに　よろこびも　あり經し事を　白浪の　あとなき方に　過し來て　今のうつつの　よろこびに　うけきがそふは　我のみか　豐葦原の　久方の　天のます人　おのが世の　よけきに飽かねば　悲しびを　むかひの岡の　櫻花咲のををりに　ぬば玉の　一夜の風に　散りか過ぎなん　其花の　みさかりのごと　やすみしし　國のはたてに　仰ぎ見て　阿部橘の　とこ宮と　思ひたのみて　夜の守　晝のまもりの　をとめらが　赤裳曳きはへ　神の如　つかへま

まうでんとていぬ試みらるるにやと僻こころするに日暮れて信美の來られしに筆とりてよとて

つつめきし歌

うつせみの　世はうみにかも　われはもよ　たななしをぶね　沖邊ゆかば　風
をいたみか　澳つかい　とりがてぬかも　ありそ邊は　波のさわげば　邊津械
も　とりえぬかもや　人皆は　然にはあらじを　我はもよ　世のしれ人ぞ　難
波江の　蘆の八重葺　ひまもなく　物をぞ思ふ　こころから　すみかさだめず
草枕　たびとあはれと　都人の　見らくをやさし　水無月の　あつきひるはも
夏蟲の　ほむしの衣　一重こそよき　夜はもよ　露にぬれつつ　秋されば　ひ
ぢこそまされ　天の河　仰ぎて見れば　月影は　滿ちてぞかくる　わが齢　わ
が世もしかぞ　長月の　夜寒になれば　雁がねの　おほふ翅に　もる霜に　は
だへ凍れど　冬ぎぬの　神も守らず　やれくだつ　しぐれの雨の　ふる衣　身
にとりまとひ　ぬる夜稀に　わびつつぞある　然はあれど　世は海なれば　大
船に　眞檝しじぬき　わたりする　人のうけきも　よろこびも　われは知らず

かれあしにこもれる沼の岸見れば花さむげなる梅のひともと
開くやと冬のきたまど明け見ればふふめる梅に雪のかかれる

佛名

こゝろきよく唱ふる御名を頼まれて身は罪なしと思ひこそなれ
御名となふ夜ゐの法師が緋衣明けて出づともたれかとがめむ

追儺

年毎にやらへど鬼のまうでくるみやこは人の住むべかりける

歳暮

谷水の音羽のかはもこほりゐてよどめど年はとまらざりけり
老らくはやすきことなり年月のくるとあくとの跡につきては

田舍にありし時

世中にさはらで年もくれにけりやへむぐらさへかれし垣根は

年の暮に荷田信郷とひ來てめづらしく都の春を
迎へらるる事よ客中の歳暮よみてきかせ給へ豈

おほむくの入江の小船漕ぎはたち歸ればうかぶをし鳬のこゑ

風ならば閨戸にきくをしづかなるそらに嵐のあぢのむらどり

池の島松のさえだにゐる鴛のつま呼びかねてなみの上におつ

翠池浮鴨

おのが名のあをなみたてて冬の池にここだ浮べる鴨といふ船

千鳥浦つたふ

須磨の山の松ふく風やおくるらん生田の浦にちどり鳴くなり

大井川冬はあらしのやま松のかげ見るふちにちどり鳴くなり

網代

夜舟こぐ宇治の河波さわぐらし網代にかかる氷魚のみだれは

打ちかけし波さへ氷るあじろ木をもりあかすらん宇治の里人

冬の梅

こぬ春にあらぬ物から待つ程を梅はこころにまかせてぞ咲く

難波江や西ふく冬のうらかぜにそむけてひらく梅のはつはな

いつしかと待たれし雪を旭さす松のしづくに見るがわびしさ

雪深し

ききしより思ひしよりも冬ふかき雪のしたなる越のたびねは

ふるさとの難波江いかにさむからん鴨の河原に雪のふれれば

根芹おふ田井のみしぶの色ながらこほれる上に雪のつもれる

但馬なる雪のしら濱かぜさえてなほ降りつもる雪のしらはま

冬ふかみ雪ふりつけばみこしぢの松の木ずゑはみちのしば草

積雪のところに崩づるやまかげは朝戸をおそき里のかどかど

感懷

ここのへに八重降りつめる白雪のしたに埋れて老やくちなん

沫雪のあはれは老がおもふ事つむとはすれどしたくづれして

狩

おほぎみの御鷹あはすと狩杖の音たかしもよ野路のふしはら

水鳥

散りはてて寒げに靡く枝ごとに芽ばりて見ゆるかどやなぎ哉
かつまたの池の蓮のかれぐきに風ふきわたるあしたさむしも
千鳥なくすま山陰のはまつづら浦つたひしもふゆがれにけり

雪

故郷はいかに降りつむ今日ならん奈良のあすかの寺のはつ雪
ひととせの昔に絶えしやま里をけふとはずばと雪踏みまよふ
大原の岡のおがみがふらす雪やまとくにはらみちもなきかな
杉がえを雲はしりてよしのなる樫のをのへにはたれ雪ふる
大空をうちかたぶけて降る雪に天のかはらはあせにけんかも
誰が戀のつひの夜がれと成りぬらんけぬが上ふる雪のみち芝
丹波路にうちこえくれば野も山も照日ながらにはたれ雪ふる
くぢらよる浦山まつにつもる雪波にけたれてまた降りつもる
呼びかはす聲をたよりに夕こゆる山路をしらず雪のふれれば

雪淺し

霙

みぞれ降り夜のふけゆけば有馬山井出湯の室に人のともせぬ

おぐら江の堤を冬ゆく　二章

風わたる枯葉に朝のしも消えてあしの穂しろし淀のおほさは

何にこの莖葉とどめしはなはちす浪もこぞめの色に見えしを

冬月

ささなみの滋賀のうみづら月冴えて氷に浪のたつかとも見ゆ

雪ふると見し夜の雲は名殘なくはれてふけ行く月のさやけさ

池の面にとづるとぞ見し月影は空にさやけくこほるあかつき

更科やをばすてやまの風さえて田ごとにこほる冬の夜のつき

神無月の比宇治の橋本にやどりしあした

風もなき朝たつきりのそれをさへ流れてはやき宇治の川なみ

冬枯

ふゆがれて荒のみまさる菅原やふしみも西のみやこなりしを

森ふかき神のやしろのふるすだれすげきに留るかぜの落葉は

散りはててその木ともなき冬がれに一葉名殘の色は見えけり

有馬山落葉にみちはうづもれぬ君がみゆきのあと絶えしより

遊二佐保山一歌

神無月　しぐれの常に　佐保のうちは　露霜さむみ　ここに來て　いにしへもへば　草木すら　しなえうらひぬ　ゆきおへる　伴の男ひろき　大伴の　ますらたけをが　家居せし　山路にけふは　袖ぬらすかも

霜

おきわたす霜の絶間と成りにけり今朝は落ちたる野路の棚橋

氷

夜のほどに降りしや雨の庭たづみ落葉をとぢてけさは零れる

信濃路のかしこきみさか越え來れば氷をわたる海もありけり

霰

みやぎひく杣がかりねの板ぶきに霰おときくさよの寢ざめは

藤簍冊子 巻之二下

○冬 歌

霷（しぐれ）

世のことは聞えぬ冬のやまざとにけふも時雨の音づれぞする

音たつるしぐれも知らでいなこきの夜聲にぎはふふゆの山里

笘上げて夜の程見ればともぶねの其方しぐれて波さわぐなり

霜にのみこころつくしのきせわたにうたて時雨るる秋菊の花

片岡のもりて日影はさしながら木葉をさそふゆふしぐれかな

　蘆庵しぐれのやどりして其あした傘もたせこさ
れしにいひやる

むらしぐれ降るにとなれる笠の山かさでぞ君を止めましもの

落葉

秋はつる日信美の家に庚申をまつらるるにいき
あひて歌よめといふに讀める
枕にはよらぬならひのこよひしも秋のわかれをかねて惜まん
信美
かへし
たが宿もまくらによらぬ今宵とて行く秋さへも止らざりけり

遊箕面山歌

かみ代より　いひつぎけらく　あめつちの　はじめのときゆ　もちわきて　お
ほやまつみの　なしませし　いづこはあれど　あめにきる　みのおのやまの
たにま行く　きよきかふちは　まさかきの　枝に取りかけし　かがみなす　そ
こひもすめり　このやまに　しづもるかみの　にぎたまと　見てやすぎなん
眞木たてる　みねのいはがね　切りとほし　おちくるたきは　あまのはら　ほ
ろに踏みあたす　いかづちの　音にまがへれ　このやまを　うしはくかみの
あらみたまかも

瀧の肩に紅葉一木立てり

うつせども影はとどめずおちたぎつ岩垣紅葉いろふかきさへ

秋のはて

秋もはやはつかみそかと手ををりて山の紅葉を思ふころかな
ひさかたの天の河原もかげきえて秋の夜くらく雁鳴きわたる
豐年のにひなめまつる神のまへに幣をちらして秋はいぬめり

時雨して宿りやはせしさよ中におどろくのきの鹿のひとこゑ

しかりとて合せし夢の野にひとり妬きをおのと恨むばかりぞ

聲のみやひとり月見る窓のまへにをのへの鹿の影もおちくる

奈良に遊びし時

もみぢ葉をとめつつくれば春日野の男鹿の床に我もやどれり

紅葉

朝戸明けてやどりの野邊を見わたせば近き林に紅葉いろづく

大原や里のなかみち秋ゆけばあをばまじりにもみぢ散りしく

とめこしをかひなくぞ見る山寺の早き戸ざしの庭のもみぢ葉

ここのへの秋はにしよりひがしより紅葉かざしてかへる宮人

庭の面にみだれて遊ぶ沓おとのありやと見しも散る紅葉かな

あらちやま關路の北のもみぢ葉に雪かしぐれか雲のたちまふ

大荒木の森のしたぐさ時雨にも霜にもあはでもみづるやなそ

やま里の稲ほす賤がかどむしろしぐれぬけふは紅葉ちりしく

てる月に雁のまれ人なきわたるわが待つ友はこよひ來なくに
とぶ雁のゆくへは霧に埋もれて鳥羽田の千町ゆふぐれにけり
たが衣かりがねさむく鳴くなべに月見し庵も戸ざしせるかな

擣衣

里はまだねぬころすなりから衣うつの山邊をこえて來つれば
なにくれとかたりつづけてあしがきの隣へだてず衣うつなり
里はあれて尾花つゆ散る夕暮に秋をうづらのころもうつおと
人やりの我ふるごろもうつ音をふもとの家にきく夜さむしも
寢よとつぐかねよりのちに音ふけて人まちがてら衣うつなり

小鷹狩

武藏野の尾花たかかや踏みしをり小鷹手にすゑ行く人やたれ

鹿

月かかるこずゑのもみぢ散果て牡鹿のたちとあらはなりけり
霜の上におきふししげきさを鹿の鳴く聲ごとに我もねざめて

おとの　遠に聞えて　もろびとの　心ぞすめる　かけまくも　かしこけれども
いはまくは　たふとかりけり　しらぬ火の　筑紫の蚊田に　あれましし　そが
あととめて　里の名を　宇瀰とたたへて　永き世に　あれつきけらく　大神の
おほみ心は　遠しろき　河内の國の　輕島の　あきらの宮に　天の下　治めた
まへば　たく衾　しらぎの國も　言さやぐ　百濟も高麗も　草木なす　風に靡
きて　年のはに　八十船うけて　貢もの　奉るなべに　もろこしの　賢き道の
ふみどもを　よみて聞ゆと　から人も　つかへまつれば　萬世の　今のをつつ
に　傳へ來て　大御代ことの　すめみまの　神ながらしも　みはかりに　えら
びとらして　國民を　をさめたまへば　そが法に　あめのます人　ますますも
さかゆく事は　この神の　おほみ心ぞ　いはまくも　かしこかりけり　かけま
くも　たふときろかも　しぬのめの　ほがらほがらと　天の原　あさ霧こもり
いづる日は　このいつきます　すめ神の　遠つみおやと　あがめます　大日靈
女の　神ながら　天照します　御影ぞと　あく世もあらず　拜みつるかも

雁

唯ならぬ雲の氣色にかどたてゝすはさればこそ野分ふくかせ

詣二八幡山放生會一歌

秋風は　日にけに吹きぬ　白露は　朝に夕べに　淺茅原　玉と見るまで　おきそふと　人のかたれば　うつせみの　世わたるわざの　いとまあらば　いきて見ましと　おもふ空　やすからなくも　たまさかに　たち出でけらし　堀江川舟きほひつつ　夕河の　みをさかのぼり　漕ぎ行けば　秋はもなかの　十日あまり　四日の夜よしと　月影は　高くさし出ぬ　伊駒山　常ゐる雲は　秋風に晴れみ曇りみ　岸つたふ　水陰草に　鳴く虫の　こゑをし聞けば　かにかくに秋ぞかなしき　衣手に　露はそぼちて　波の路　遠く來にけり　ぬば玉の　夜さへ更けぬれ　月讀の　光のさやに　見さぐれば　我心さす　八幡山　神さび立てり　この夜らや　神いさめすと　宮つこら　まるりつどひて　白妙の　袖ふりはへつつ　須賣神の　いでましの道は　岩がねの　こりしく道ぞ　綴たてる　さかしきみ坂　たひらけく　あゆみ行くめり　神遊の　三くさの笛は　春鳥の　百千の聲と　うちならす　鼓の音は　あま雲の　よそにとどろく　神の

青柳の　かつらぎ山も　生駒峰も　常ゐる雲は　秋風に　いぶきはらひて　月讀の　出ましの空は　夕霧の　たちも昇らず　住の江の　敷津にたてば　あからひく　入日のかげに　沖見れば　網引綱ひく　磯回には　小船釣する　秋の葉の　風のみだれに　岸見れば　あらら松原　よる浪に　根ごとさらせり　白鷺の　ねぐらをほのに　夕闇の　くるると見しを　月讀の　神の尊の　いでましの　みさきをはらふ　秋風も　身にししまねば　潮みつる　清き濱邊に　秋の夜の　ふくるをしらに　あそびすわれは

反歌

伊駒峰にいざよふ月を波の上のなかぞらまでも見つつ遊ばん

てるつきにあられ松原ひま見ればかつらの花の地に散りしく

月前述懐

秋風に月すむ夜半のしらくもをはらへどかかる吾こころかな

夜ひ夜ひに月はいでぬかなぐさまぬ心の隈をてらすばかりに

井中住せし時

秋の月あふぎてのみもありがてにふでの林を分けぞわづらふ

世のうさを昔になして月見れば秋をさかりとながむばかりぞ

かぞへ聞く秋てふ秋のこゑたえて月かげ高く夜はふけにつつ

ひとへ山隔つみやこは秋の夜の月をにぎはひ見るものにして

山月

世に出づる道は絶えにし山ずみの月のあはれは秋ばかりかは

峯月

ねざむれば比良の高根に月落ちて残る夜くらし志賀の湖づら

田家月

いはけなき里のわらべが夕まどひ月に指さしかどあそびして

故郷月

ほどもなくうつりしゆけば長岡のふるさと寒く月はてるらし

秋夜遊㆓墨江㆒歌

にぎはやび　神のみことの　翅なし　こぎこし船ゆ　空に見つ　大和島根の

枕によれど　いねがてに　夢もむすばず　荻の葉に　秋風さやぎ　こほろぎの
なくよひよひの　さね床ぞあはれ

霧

みかの原夕こえ來ればいづみ川いづこわたりも見えぬ秋ぎり
朝霧の海のたまもと見しはこのふもとにしげき杉のむらだち
おぼつかな濱名のわたり霧こめて引馬のうまや朝立ちかぬる

河内の國に人をとむらひし時道の空にて讀める

伊駒根の雲はあらしに吹きおちてふもとの里をこむるあま霧

河内のくさかと云ふ里にやとりてあるほど

我すめどかどた叩くべき人もなしこのやまでらの秋の夜の月

月歌

山の端にさし出づる月の影見れば西をはじめの秋ならなくに
我がすれるはなだの衣のつきぐさの色なる空に月すみわたる
千里までてらせる影とゆふなみの潮のたたへに月さしのぼる

つづりさせ我機おらん秋の野にいとまをなみの虫のこゑごゑ

思ふことありとはなしに悲しきは秋のならひのゆふぐれの空

秋夕

傷二岡雄之亡妻一歌

夏過ぎて　秋は來ぬらし　吹く風の　日にし見えねば　朝影を　涼しと人の　夕暮は　さびしかりけり　荻の葉の　音はさやぎて　蟋蟀の　なくこゑきけば　いにしへの　ひとのあはれと　言ひつぎし　ときにはなりぬ　その秋の　あはれちふ事を　われのみの　身にしおふかは　妹なねは　あき立つ空のすずろにも　よみちふ國を　なにしかも　ふる郷のごと　たちて去にし　むなしき床に　止まりて　いかにせよとか　男じもの　腋ばさみたる　はらからのみどり兒と共に　泣子なす　したひなげかひ　こいまろび　足摺しつつ　まどふらん　人こそあはれ　あすよりは　いかにせましや　年月を　長くともひてかたらひし　ことの悔しき　妹なねは　よみちふ國に　さきだちし　うなゐはなりに　あひ見つつ　手たづさはりて　あそぶらん　面影をだに　見まくほり

香にめでぬ人こそなけれ藤袴たれにゆるしてはなのひもとく

鴨頭草

月草にすらまくきぬをめうつしにあやな千種の色にまよへる

紫苑

我ならぬあだなもよしや醜草のしこちし人もなき世なりせば

苅萱

風わたる野路の苅萱したをれて穗に出し秋のかひやなからん

虫

秋の日の峰にいるさを待ちかねて草むらごとにすだく虫の音

虫の音の多かる方に露わけて野路のたなばしいくつ越えけん

矢田野の淺茅にすだくまつむしの鳴音をとめて我立ちまどふ

こゝにこむる友を忍びて松虫の野にさそふとやもろごゑに鳴く

にはぐさになきにしものを蛬うたて夜さむのとこにちかよる

虫聲非ㇾ一と云ふことを

しらくもに心をのせてゆくらくら秋のうなばら思ひわたらん

秋野

君が家のかべぐさかりに野に出れば花盛なる秋にもあるかな

萩花

朝なさな露だにおもき萩が枝のすゑふすまでに雨のふれれば

朝露はまだきしたばに消えのこる野寺のにはのあきはぎの花

萩が枝の末はさざれにながれあひてなみも花なる野路の玉川

女郎花を植ゑて孫思邈を思ふ

あまた植ゑて人や妬めるをみなへし老を養ふいろかとを見よ

花ごとに露をむすべる女郎花こころこまかに見るべかりけり

槿花

ひとひてふそれも榮を朝露のひるまを待たぬ野邊のあさがほ

ふぢ袴

花々に色はまけぬるふぢばかま野はみながらの香に匂ひけり

残暑

朝がほのしぼまぬほどにふりはれて雨より後の秋のあつさは

暮れなばとたのめし秋の空見れば風ふきとづる西のやへぐも

秋蝦

秋さればしものやしろのみたらしに人まを待ちて蝦なくなり

稲妻

秋立ちて幾日もあらぬに風をいたむ窓よりもるる宵のいな妻

稲妻のひかりならずばくれはてて野中の松をそこと見ましや

秋風

吉野山紀の路にかよふみち行けばささわくる野の秋のゆふ風

むらさめのはるる淺茅の露原にぬれてや秋のかぜは吹くらむ

初秋十七夜三井寺の高きに上りて月を見る

てるつきのかげは浪もてくだけども光は海をわたるなりけり

あした湖上の樓に遊ぶ

反歌

古をけふにむかへてしのぶともいや年さかるあすの日よりは

夏祓

唐崎のみそぎは果ててたが里にたもとすずしみ漕ぎかへる船

大幣のしがらみかけてとどむとも流るるなつの夕ばらへかな

○秋歌

初秋

紀國の室のわさ田の穗むきよりけさ吹きわたる西のあきかぜ

晴砌風梧脱

軒ふかき玉のみぎりのこけの上に夜のまの秋のきりの一葉は

七夕

あまのかは舟さす棹のさはればや月のかつらの花ちりみだる

あまの川河波高し夜ごもりにかへすはすべな明けばおもなし

鳥がなく　あづまの國の　武藏の海　大江の水戸に　高殿を　たかしりまして
天の下　まをしあづかり　すめろぎの　みことのままに　民草を　靡びけ給へ
ば　物部の　八十氏人は　夜の守　晝のまもりと　かしこみて　つかへまつれ
り　國つちを　たひらの宮の　大城には　みこともち人　わりすゑて　外のへ
まもらひ　すめろぎの　日々のみことを　はゆまして　まをしたまへり　中の
へは　千々の軍を　こめおきて　弓とりしばり　ちはやびと　たはわざやすと
夜のまもり　晝のまもりに　めしくはふ　天のかな機　足玉も　手玉もゆらに
神の織る　しづ屋のうしは　卯の花の　うき事もなく　いでてこし　道の空よ
りわづらひの　神やつきけん　手束弓　杖につきつつ　中の重に　さもらひ
しさへ　ほととぎす　來鳴く五月の　さみだれの　はるる日もなく　すゑつひ
に　うちこやしぬれ　さね床の　夜をすがらに　故郷の　家をぞしのぶ　晝は
もよ　息つきくらし　みな月の　照日を闇に　ゆく水の　すぎてむなしき　あ
らたまの　來經ゆく年を　手ををりて　かきかぞふれば　十あまり　三とせに
なりぬ　すべもなく　ねのみしなかゆ　おきつきどころ

清水むすぶ

旅人のいく度ひでてむすぶらんいづみの河のなつのわたり瀬

ゆふだち雨

かき濁し岩こす波もやがて住むきよたきがはの夕だちのあめ

ゆふだちののきのやどりを始にてうれしき老が友もとめけり

湊入の五手のふねははやきかも漕ぎそけてくる沖のゆふだち

風はやみ鞭さすかたに雲落ちてわが駒いばふ野路のゆふだち

秋にまた色はならはぬ葛の葉のうら吹きかへすゆふだちの風

夕顔

たそがれにほの見し花はしらじらと有明の月の影にのこれる

撫子

朝寐髪かきなでしこの花の上の露のしばしもめかれずぞ見む

藤原の宇萬伎ぬしの手向を洛陽三條の三寶寺の

御墓に烟に上げて奉れる歌

わた殿の下吹く風のひやゝかにてせき入れし水に螢とびかふ

このゆふべひきやわすれし螢火の光に見ゆるかどのいたばし

蟬

明けぬれば樗花さく葉がくれにやめばつかるるひぐらしの聲

なく蟬のやどりの松の木の本にもぬけのきぬの風に吹かるる

照射

夏山のともしのかがりうちしめり雨うちそそぐあけぼのの空

よひのまの月はかくるる雨もよにともし雲やくしがらきの峰

扇

夏ならぬ繪書すさべるかはほりのそれも涼しき花のくさぐさ

鵜飼

御舟近く波をこがせるかがりびに鵜のとる魚の數も見えけり

西山夏雲

夕ごとに峰なす雲はくづをるる花にあたごのあらきやまかぜ

早苗

梅雨をおもひのままにせき入れて小田の益荒男早苗とるなり

五月雨は繼ぎてふらねば近江の海磯回の早苗植ゑぞたらしつ

夏月

まつかぜの音羽の山を越えくれば夏ならぬ夜の月澄みわたる

夏河にひかりを見せて飛ぶ魚のおとするかたに月はすみけり

夏夜

夏はただよるなき里と思ひけり立のいそきのくさのまくらに

涼み

入りつどふ千船のひまをこぎいでて夕涼みするなには人かも

水音は絕えし名こその瀧殿にゆふべすずしきかぜも吹きけり

都をば夜ごめに出でてあさひ山あさかぜすずし宇治の河づら

水亭

蘆茂み葉うらにすがる夏蟲のかくれてもほのみゆるひかりは

あやめ

故郷の長柄の沼のあやめぐさうべしもながき根をばひくてふ

あやめふくためしたえねば都邊に花咲きうづむ沼もありけり

競馬

駒きそふ神のみにはに立つ人もわがかた岡のかたをこそひけ

棟花

さればとて陰たのまれぬ隣かなあふち花咲くまどのくらきに

蚊やり火

風もなきがやりの煙なびきあひて暮なほあつき里のなかみち

玉だれのすげきにもれて香に薫る薄きけぶりや蚊遣なるらん

五月

なにはびと蘆荷おもげにこぐ舟の著岸もなきさみだれのころ

梅雨にすまの苫屋の蘆すだれ垂籠めてけふも暮れぬとぞ見る

うとからぬ隣ながらも蘆垣のまどほになりぬさみだれのころ

夏の夜の月におくれて出でぬれど山ほととぎすをちかへる聲
たびにして小夜時鳥きく我をしのびていもがいねがてぬかも
高野山槇の木立のほととぎすこのゆふぐれもあはれとぞ思ふ
時鳥をしまぬ聲をいまぞ鳴くおのがさつきのさみだれのそら
大荒木のもりにやどりてたかだかといむことなげに鳴く時鳥
植ゑはてし山田の長が門に來てしこほととぎす何を鳴くらん
花の枝のあをばたつくきこのごろは時鳥なく志賀のやまごえ
さみだれは夜中にはれて月に鳴くあはれその鳥あはれその鳥
たかさごのをのへ落ちくる時鳥きくやひびきの灘わたるふね
信濃路は野をあまたなり杜鵑すがのあら野をなのりてぞなく

夏草

いぶきやまさせもが草のしげければ打散る露も雨とふりつつ
山里は垣ほのひまのあらければうちともあらず茂るなつぐさ
むな分けて行くやをじかのあともなく茂りにけりな夏草の原

けふてへばたかきいやしき葵草かけて神世をしのびつるかも

加茂山のかみのおまへのするがまひ袖に桂のかぜもかをれる

かきつばた

身におはぬつかさの色の杜若きぬにすりつけおもひ出に著む

時鳥

ほととぎす待つをならひと夕かけて山の庵にながゐせしかな

待ちまたぬ宿をわきてや忍音に小夜ほととぎす鳴きて渡れる

橘のしまの御門にとのゐしてやまほととぎす聞かぬ夜もなし

世を捨てておもふことなき暁に山ほととぎす鳴きて過ぐなり

ここだ鳴くさとには住めど時鳥初音はいつもうれしとぞきく

我宿をいつすごしけむほととぎす有明の月にをちかへりなく

人やどすここは庵ぞほととぎすこのあかつきの聲なをしみそ

わが袖にかけてをうれしほととぎす卯花山のあかつきのつゆ

郭公またぬとなりも聞きやせし人のけはひのしののめのそら

くれなゐの色ゆるされし深見草あてなる種にいかで生ひけめ

朱砂紅　益

ませの内にあけなる玉や敷きたると見えて花さく深見草かな

紫　間　實

時めける濃き紫のひともとにうべも貴盛しきはなとこそ見れ

○夏　歌

更衣

わた殿をいきかふ裾もかろげなり夏立つけふの衣のおひかぜ

人妻のこれや卯月のなつごろも馴ればかふるならひある世に

新樹

奥深くわけしかへさのやまぐちは青葉茂りてなつたちにけり

いとはやも蟬鳴く陰とききつるは青葉にこもる瀧のみづおと

加茂祭

て泣きかなしむをとりてふとまへにささげよみて
奉れる
折ると見ば罪はかしこし大直日みなほしたまへぬさの手向に
牡丹を人々とよめる
色にこそ物おもはすれおほけなく國かたむけに咲ける花かは
楊太妃一捻紅を
いささめの色にそみても其君のおもかげ見する花の名たてに
淺紅　信美
花にそむ人のこころの深見草うすくれなゐのいろににほへど
白　布濟
めでたくも咲きみてるかな白重にほひけだかき花のきみにて
白帶紅　默軒
あけぼのの薄花ざくら忘れめやほたにのいろに匂はざりせば
深紅　敬儀

是につきて

冬の野の枯生に交る草のとこにいつ立つ空とひばり鳴くらん

翁も思ありげなり我もしかりとや人聞くらんかし

かはづ

夕さればかはづなくなり飛鳥川瀬々ふむ石のころびごゑして

躑躅花

みよしのは青葉にかはる岩陰にやましたてらしつつじ花さく

藤花

神松にかかれる藤も手はふれんいでや引くてふおほ幣にして

春と夏こなたかなたに咲く藤の花やいづれになびくなるらん

大原野の春日の社に詣ではべりしとき藤の花の松にいとおもしろくかかりたるを我ずさの童の何の心もなくて折りつみければ里の子らがそれは神の木なりたたりやあらんと云ふにおどろき

行きくれて獨のみ見るはるの夜の月に花ちる志賀のやまごえ

ほととぎす鳴くべくなりぬ花はみな散らせし雨の名殘ある空

さくらばな散るをこころのはてにして殘る日數の春は春かは

根にかへる花としいへば賴まるる又くる春もこずゑにぞ見ん

花遲し

花おそき櫻がもとをとめくればあをねが峰のとかげなりけり

けふと暮るる日數に洩てみ山には遲げにもあらぬ花咲にけり

花ざくらかさねてにほふ袖の色に春をとどむる雲のうへびと

すみれ草

あすもこんすみれ花さく春の野の芝生がくれに雉子鳴くなり

雲雀

春の野はひばりの床とおもひしを空にやどりのゆふやみの聲

賀茂の翁のよめりし

霞たつ春野のひばり何しかもおもひあがりて音をやなくらん

けは　霧の籬の　霧ごめに　面輪も見せじ　かにかくに　遠つあすかの　すめらぎの　言擧ませし　花くはし　櫻のめでの　姫神の　いろ香おもほゆ　庭もせの　我花妻よ　散りこすなゆめ

反歌

櫻花あかぬなげきをわれすれど一夜のかぜに散るがさぶしも

ながかれとたのみこそせね櫻花ひとよの風にちらむものかは

落花

散るまでとたのめし庭の花にうき曉がたのむらさめのおと

櫻ちる木のもと見ればひさかたの星のはやしに我は來にけり

とめこじな花に初瀬のやまおろし春もはげしき習ひなりせば

山風の吹くとはなしに玉だれのそともに花のけさは散りくる

龍田彦風をまもりのかみやまにおのがときとや散るさくら花

朝鳥のこゆるはかぜにいろながらをのへの櫻散りそめにけり

よしのやま岩のかげ道春ゆけばたきつかふちに花ちりうかぶ

瓶にさすはなはきのふの山苞をとひ來て人のけふも見はやす

やまざとは夕暮さむしさくら花散はそめねどにほひしめりて

山里花

愛花篇

うちなびく　春さりくれば　百鳥の　さまよふ野邊は　新草の　もゆる垣根を　誰しめて　すむ人たのし　あしびきの　山の庵に　むらぎもの　心すませば　かたらはん　人とほしきを　庭もせに　櫻花さけり　ふふむより　散りはつるまで　風をいとひ　雨をぞうらむ　春ごとに　われをたのめて　あけたてば　閨戸遲しと　夕やみは　ほのに見えつつ　言とひを　われにはすなり　花くはし　櫻のめでと　いにしへの　遠つ飛鳥の　すめらぎの　ことあげませし　にぎたへの　衣とほりて　にほはせる　神のみことの　ゐまひにも　くらべおとらぬ　花妻の　あれを頼める　里にいでば　人戀よらめ　家にあらば　人とひくべみ　山口に　守部やすゑんと　岩波の　千々に碎けて　思をぞする　よしゑやし　戀はよるとも　袖はへて　とひもくべきを　朝されば　霞かくりて　夕つ

石川のこまのたはれ男花にあそび主あるひとの帯な取らしそ

嵐山花三章

たには路をくだるいかだの岩にふり幾瀬碎けて花はみるらん

大井川くだすいかだのあとたえてゆふべの波に花ちりうかぶ

大堰河きしのさくらのかげくれて月になりぬる波のひかりは

老木花

としふかき櫻が枝はこけむして松をともなるよはひをやへん

山寺花

葛城や高間のやまのみねの寺さむき日かげにはなも咲きけり

あはと見てかへるぞはかなをとめらが門ゆるされぬ寺の櫻は

谷渡るみちはあらねどいとふりし寺こそ見ゆれ花にこもりて

古墳花

しめはへし苗代小田にかげ見えて年ふる塚のはなも咲きけり

瓶花

題吉野宮

名くはし よしのの國は 山つみの 守りてませれば 山なみの よろしき國ぞ よき人の よしと見ましし 瀧つ瀬は 淸き河内ぞ しかれこそ 大宮人は 春花の 咲のををりに 鶯の 聲をとめつつ 秋霧の はれぬまよひに 暇なく 瀬々をとぼしみ いきかひて 見れどもあかず 遊びせし 秋つの小野の とこ宮は とこにはあらで 夏見川 ながるる水の たちやかへらぬ

反歌

御船やま常ゐるくものつねならば瀧の宮古にいまもあらぬか

禁庭花

山里にあらぬ色香のさくら花かよりかくよりそふひかりかな

御かはみづ花ぞながるる大宮のうちにも春はとまらざりけり

花頂山のふもとに住みそめし春

すまでわれ見やはさだめん粟田山あわたつくもは櫻なりけり

花下遊

だり　瀬おりつ姫の　河社　ところどころに　響きあふ　水のたぎちも　廣きせに　流れてゆたに　淺花田　深みどりなし　木綿疊　千むらの絹は　天にます　たくはた姫の　神わざか　妻よびかねて　夕河に　かはつとよめり　よき人の　よしと見ましし　みゑし野の　ゑしのの山は　峰高み　河遠じろし　昔見し　春の盛を　おもほゆるかも

反歌八首

芳野川かはぐまことに水泡なしよどめる花をむかし見しかな

櫻花うきてながるるあと見れば象のをがははまことさやけし

しらくもはあしたに晴れて三舟山ゆふゐる峰の風のしづけさ

夏見川よどせなからじさしくだすいかだが聲のはやも霞める

河かみの國栖の里人春こずばとはれぬやどとおもひたらまし

大瀧をくだけておつる白浪のおとはあらしのたえまなきかな

ゆふかはづ秋をさかりの聲ならばたのめて又も我かへりこん

宿かさぬよしさとならば秋津野のいはが根枕夜をさむくとも

人世態動譔、則所レ感固淺矣。春花粉飾、蛛子遇レ雨、忽失二其美一焉。那處山水最奇絕、但遊以二花時一者俗士耳。今教道以二數言一。

其歌

空に見つ　大和島根の　國原ゆ　雲井に見ゆる　みよし野に　うちこえくれば　遠じろき　河音さやけし　舟よばふ　六田の岸の　柳原　風になびける　河のべを　のぼりてくれば　花くはし　雲に埋める　麓邊の　秋津の小野の　いはむらの　中切りとほし　行く河は　瀬々にむせびて　たぎちあふ　みづのまにまに　棹とりて　くだす筏の　岩にふり　みだるをあやな　をちこちの　岸にたたずみ　我見れば　水に影ある　山吹の　かさねの衣　ときあらひ　ほすいとまなみ　山風に　櫻吹きまき　帶にせる　象の小川の　みなわなし　河瀨におちて　瀧波に　亂るる見れば　風のみに　ちりやはまがふ　いにしへの　かたりにつたふ　とつ宮は　こことしきけば　三舟山　常ゐる雲を　ふりさけて　見つつしぬべる　夏見河　よどめるすゑは　ゆふ花の　ぬさの手向か　さなく

須磨の浦のいそ山櫻さきにけり波ここもとに立ちくとや見ん

風まちてとまりする舟いそやまに咲き散る花の日數へしかな

しほなれしいくたのもりの櫻花春のちどりもなきてかよへる

雨中花

うちむれてきのふは見しを櫻花雨しづかなるかげとなりにき

さくら花うれしくもあるか此夕嵐にかへてこさめそほふる

客來問㆓吉野之花時㆒。答、登山兩回、山水最奇絕、其多㆑花之處、坂磴開谿、人跡絡繹、可㆑謂㆓淸雅之㆒矣。思夫上古飛鳥藤原之世々、春秋屢行幸、美㆓此山河之美㆒、而臨㆑水營㆑宮、雖㆑見㆓田獵捕魚之御遊㆒、更無㆓望㆑雲踏㆑雲之轍㆒、故好古士到㆓于那處㆒則懷㆑古以永言也。又問、翁嘗詠㆑花、專用㆓那處㆒者如何。答、凡題詠春花秋月采㆓摘其地㆒、以調㆓風姿㆒、猶㆔之生且上。場、雖㆑使㆓人歎娛悲涙㆒、比㆓之良

奈呉の海の餘波の玉藻われからん潮みち來ともおきにをれ波

櫻花

いつはらぬ春のひかずをかぞへ來て山の櫻はさきそめにけり
卷向の檜原すぎむらかすみけりほのにさくらの色にこぼれて
ひなぐもる櫻がもとをたちくればみどりの空に薫るはるかぜ
おもふことあらぬ枕に花の香のあさらに薫るはるのあけぼの
しばしとてたたずむ花に相坂の關はゆふべの戶ざしせしかな
さくらばな咲けるを見ればかほよびと衣にとほる光なりけり
さくら戶をおしあけがたの空見ればけさもおのへの花曇して

山路花

おくれじとおひこし人にあはぬかなこころ空なる花の山ぶみ
舟うけてたがものの音をあそぶらん嵐の山のはなの木がくれ
夜にかくれ遇ひにし人に花やまの道にゆきあふおもなしや我

海邊花

桃花

はるの水あさくながるる片岸はもものはやしのやまもとの里

折花におなじ色なりあら染のあさらのころもまくり手にして

春日遊ニ墨江一

蘆原の　みづ穂の國を　中におきて　そと行く波の　千重浪の　ゆたのたゆたに　五百津船　千船をのせて　神代より　天のさくめの　あととめて　入りくる船は　玉はやす　武庫山風を　追風に　夕はなして　あけたてば　生駒高峯を　吹きおろす　嵐のかぜに　朝びらき　漕ぎてぞいづる　大作の　三津の濱邊に　ありたたす　神の御前の　住の江の　いつはあれども　春の海　奈呉の浦邊に　家わすれ　ひろへる玉を　くぐつもつ　手たゆきまでに　をとめらが裳のすそぬらし　みつ潮の　夕さりくれば　あはと見し　淡路の島も　霞こめほのにも見えず　葦田鶴の　歸るあし邊は　潮騒に　さわぐ入江を　こぎたみて　行くちふ船は　蜑ならぬ　難波をとめの　家路ゆく船

反歌

きさらぎや八重さく梅の紅にうたてはひさす野邊のあくた火

春雨

こちかぜのけぬるき空に雲あひて木の芽春雨いまぞふりくる

けふ幾日はれぬ雲間に長閑なる日影をこめてはるさめぞふる

おもしろく雨ふるからに春の夜を短しと思ふはじめなりけり

春雨に著ならしごろもかたしきて柴のおき火を埋みかねつも

庵春雨

稀にとふ人をやどしてはるさめのよるをすがらに語る庵かな

春雨枕に雫す

春の夜のあめもる山にやどりして枕にちかきしづくをぞ聞く

春月

みよしのの花おそげなる年だにも河瀬おぼろに月はかすめる

三島江や玉江のみづも濁るなりかすみてうつるはるの夜の月

白眞弓張りてかけたる月影はみつれどいく夜はれぬかすみか

山がつのくだくたきぎにゆるされて立枝あまたの岡のべの梅

梅の花風にちることうぐひすの笠とられたるここちやはする

鶯

高圓の野邊見にくれば新草にふるぐさまじりうぐひす鳴くも

かげろふのもゆる春日のこまつばら鶯あそぶえだうつりして

宿しめてねよげにもあるか鶯のうめのこまくら我にかさなん

春の野の鵙の草くき誰見ねどおどろきがほにうぐひすのなく

鶯はまくらのまどにかげ見えて春日なぐさむたけのしたいほ

柳

おほでらの門邊にたてる古柳つち掃くまでに枝はたれにけり

ここのへもちかくやなりぬ道ひろきゆくてにもゆる春の青柳

一葉よりうかべならひしかはふねをつなぐ岸根のたまの緒柳

紅梅

此殿の八重のくみ垣えだこえてくれなゐふかき梅のさがりば

柳もえあしつのぐみて津のくにのながらの堤ひとのいきかふ

梅

此里はうめの林にこめられて薫るものとも知らずぞありける

江をわたる梅の追風香をとめて花のところにふねはよせなん

おなじくは梅の木本とめてましうづみぞまどふ春のたきもの

梅の花香にかをらずばかすみこめ雪に埋れてはるもすぎなん

かへし著る夜の衣にしめる香はきみがこてふに似たる梅かな

雪わけてむかしの友をとひくればよし野の里に梅も咲きけり

くもり日はことにぞにほふ梅の花風ふきとづる深きかすみに

うぐひすの鳴きからしたる朽めより立枝うれしき梅のはつ花

野鴉のはぶきのかぜに散らされし名殘の枝のうめかをるなり

空さえて香ごめに風のおくりくる雪と梅とをわきて見なまし

梅の花峯をくだりのはやしには里に出でじとうぐひすのなく

我岡のはやしの梅をみやびとの酒にうかべてわれにたまはす

子日する野邊の小松にふるゆきの白髪づくまで年は經ななん

元日宴

けふよりぞことたつ春のくらゐやまつぎつぎたまふ千代の盃

白馬節會

いまぞひく馬の寮のあゆみまであなおもしろの駒と云ふなり

賭弓

眞手つがふ弦音たかしまとがたのうらめづらしきはるの朝庭

早春歌

みなせ河さざれに雪のふりつみて春のみづばなした通ふらし

春來てもとけぬ汀のいはむらにいつ波かけてこほりゐにけむ

はるの雪あかきにくたき信濃なる菅のあら野の駒いさむなり

ゆきとけし岩田の小野の春日影みちゆきびとも若菜つむらし

あだまもる飛火絶えにし春日野にただ新草のもゆるをぞ見る

一夜來てたびねうれしきふるさとのあれし垣根にもゆる若草

のどかなる日影はもれて笹竹にこもれる庵もはるは來にけり

　春盤に五穀を盛りてくはへし歌

うけもちの神代ながらの田なつ物としの初に見るがたのしさ

　元日に子日ありし年垂水の神岡に松ひきて遊びし歌　神祠在二本國豐島郡一

あらたまの　年のあしたに　めづらしき　初子のけふを　むなしくも　宿にはあらじと　新草の　もゆる野こえて　岩そゝぐ　たるみの神の　岡のべにのぼりて見れば　遠山は　霞に匂ふ　朝雲に　田鶴なきわたり　遠じろき　三國の河に　舟よばふ　人しも見えず　瑞垣の　下ゆく水の　音さむみ　衣をさむみ　刀自も我も　五十がうへの　百足らぬ　老にしあれば　わがために　おふる小松の　根をはへて　千本さかゆる　引きつれて　しるしもあれやと　菅の根の　永き日くらし　夕雲の　雪をさそへば　風さえて　衣をうすみ　肌さむみ家路を遠し　かへらなんいざ

　反歌

藤簍冊子　巻之二　上

○春歌

立春

ひさかたのはてなきそらに朝霞たなびき渡りはるたつらしも

春霞たつのの野邊のかみやしろむかふ朝日はけふをはじめに

去年よりも姿を見せでけさぞ鳴くたけの林のうぐひすのこゑ

立春霞

風はやき山はけしきを立ちかへて横川の杉にかすみたなびく

われこそはおもがはりすれ春霞いつも生駒のやまに立ちけり

迎二春東郊一

ひんがしの野に出で見れば錦織の近き里からけさはかすめる

田舍住せし時春のあしたに

武士

ゆみやおひいざ駒なめてもののふの花見がてらに鳥狩する岡

僧

墨染に裁ち縫ふ業のなくもがな浮世のかどは明けずあらまし

市賈

畝火山こずゑに譟ぐあさどりのさきに群れたつ輕のいちびと

散人

花鳥の色にも音にもほだされていとまある身のいとまなき哉

松

あしびきの遠山松を見さくればあらしにたえて年もへにけり

浪にふし岩根にたてる松の聲須磨のうらやまのぼりくだりに

風をいたむ渚の松になみかけて下葉のもみぢ沖にいでにけり

ふるはおち霜にはまだき凋まねば秋こそ松のさかりなりけれ

ありあけの月の光はうづもれて峰しろたへのゆきのふりはも
御幸まちて野山の神もつかふらし鳥だちもらさぬ朝かりの場
廣澤の水にうきねてをしどりの羽きるおとを聞く夜さむしも
たのかみのかはべの家に宿からんあじろの波に千鳥しばなく
やどりする宇治の橋本さよふけてなかの河洲になくは千鳥か
かぞふれば年はあまたにつみつるを猶をさなきは心なりけり

鳳闕

思へどもおもひやはえんいろに香にひだりの櫻右のたちばな

舊都

いにしへの高津の宮にたつ民はよろづよまでと造りけんかも

里

九重にとなりてすめるさとびとは宮なれてしも物はいふなり

貴公子

よき人のながきこころは初春のうらうらてらす日影なりけり

時雨の雨早くもふりて大比枝や小比枝にかかる雲と見しまに

奈良に遊びし時

春日野の時雨ののちのけふなれや山はみながら紅葉しにけり

高雄山

おく山の岩垣もみぢこのごろはあした霜おきゆふべ散りかふ

枯かづらたぐればたゆる百濟野の萩のふるえの眞柴ゆふとて

はふり子が淸むる跡に木葉散りて神のみたらし氷りゐにけり

枯草原晨霜

このあさけ茅生も薄もかれふして霜の原野は見るべかりけり

井中住せし時

さむき夜をあかしかねてぞ今朝見れば生駒嶽に雪のつもれる

ふねきはふ音もきこえず堀江河かきくらしふる雪のゆふべは

こやの野に宿りてましを夕つけて降る雪かなしゐなのふし原

雪峰寒月

紀の海のみなみのはての空見ればしほけにくもる秋の夜の月

かふうちの國くさかの里に在しし時

生駒山かげまだみねにわかれぬを浪花のうみは月になりけり

出て入る山の彼方のをちこちに身をしわけても月を見てしが

天原あきの夜わたり照るつきのひかりをさまるあかつきの空

蘆がちるあきの入江のゆふやみに光とぼしく飛ぶほたるかな

このゆふべ雁なきわたる山城のふしみの早田かりやそめけむ

しなのぢをむかへこしより荒駒のあらき心もなれもこそすれ

御狩野はきのふとすぎし草村にいづち逃れて鳴くうづらかな

袖たれて秋の外山をながむればもみぢにけりな時雨せぬまに

津の國のこや野をゆけばつゆしもに小草花さき葉は紅葉せり

峯にたつ鹿の八聲のひまはただ紅葉ふきおろす風のおとかな

秋よりもしぐれしぐれて木枯のふゆにうつろふ雲の立ちまひ

松が崎にて

たちばなのみえりの里の時鳥ぬかぬたまなる音をもなくかな
鶯の古巣のたにはこほり解けいつかあを葉のかげとなりにき
かぐ山の尾の上にたちて見わたせば大和國原さなへとるなり
早苗とる時にはなりぬをとめらが難波すがかき紐はつけてん
五月雨は降るともゆかな住吉のみとしろ小田の早苗とる見に
山彦のこたへて悲しわがをかの照射のねらひあやまたぬかも
けふもまたよそにと見しを上蔀おろすまもなきゆふだちの雨
あすか河あらしふきそふ夕立にたぎちながるる淵瀬はなしに
なでしこのはなの盛の久しきにはつあき風も吹くといふなり
ふぢはらの三井の清水はむすばなむ天の香山かげも見えけり
初秋のあさけの風を身にしめて思ふにかなふ比にもあるかな
女郎花さが野のはらにほりつれてたが宮つこぞ夕いそぎする
男花ならぬ方こそなけれ大原や野中ふるみち分けまよひては
あをぞらに光みちぬる秋の夜も月のところはさやけかりけり

花林朧月

櫻さく春のはやしはひさかたの月のかつらもはなぐもりして

禪林寺にて

さくら咲くこの山陰のゆふぐもり空さへ花のいろにまがひて

高砂のをのへにたてる櫻ばなはやもあらしのさそひやはせん

夕日影かがやくみねのさくら花けふもながめてくるる庵かな

太田南畝子のあづまにかへらるるを送る

かぜあらき木曾山櫻このはるは君をすごして散らばちらなん

あほの山をのへの櫻たづねきて伊勢までと誰も思ひこゆらん

故郷を荒るやと訪へば　菫草すみうくもあらぬ垣根なりけり

吉野川かはづつまよぶ夕ぐれにやどかる我もひとりねにして

宮の中はをのこをみなも白栲のころもゆゆしみ夏立ちにけり

郭公　ゆふかけていつもあさづまの片山岸になくといふなり

曇日の岩瀬の森のほととぎすあなかま鳴きてうとむとも聞く

藤簍冊子 巻之一 題云

藻屑

すみの江の浦のはま藻のよる時々なること草どもを荷田の信美の家の屛風にえらぶとはなしにかいすさめる歌

都邊はちまたのやなぎ園の梅かへりみおほき春になりにけり

大原やかすがの神もゆるさなん子の日の松はもりのしたぐさ

わが宿の梅の花さけり宮人のかざしもとむとつかひこんかも

をらばやと立ちよるうめに鶯のゆるさぬ聲をおどろかすかな

とのゐ人よるをすがらの梅が香のしきりにかをる明や近けむ

おもふ人こんといふまに梅のはなけさの嵐にちりそめにけり

を、七十をかぎりのわざに、つゞらごの中、又こし方かゝることのありきなど、むかし今、前しりへなく書きなめつゝ、猶それの所の障子にかゝるを見し。誰屋の壁になど、友垣の告聞ゆるをも書き集めつゝ、六まきとなりき。翁、此道に門をひらきて、しるしらぬをいざなふにあらねば、よしやあしやの褒そしりをも厭はれぬもて、其人がらをも世の人見たまへかし。

一、木にのぼすまじき巻々猶多かれど、ゆるしなきには、題號をだも書きあらはさず。翁の常言に、命はかぎりあり、知るは涯なし。かぎりあるをもて、かぎり無きにしたがふは、危しと云ふ古ことをずんじたまへる、うべことわりとは聞つる也。

文化紀元三月是の日、昇道杜多、岡崎の竹間裏にしるし侍る。

はかりことすを、翁聞つけて、うたて、をこわざするかな。世にはひわたらんほどは、必しも有まじきわざ也とせらる。いなや、此ぬしはすでに世を見はてて、今はおはさずとこそ聞つれ。我もの顔にのたまへる、いとあやしきと云ふ。翁打もだして、我刀に疵かうむれるよとて、長き息つぎつゝ、ゐざり入たまひぬ。

一、ふみの名の由は、常に机のかたはらに、あさらなるつゞらごをかいおき、人來たれば見せじと、しかまへらるゝを、れいの翁がつゞらごよと、妬くいひあへりしもて、今は呼ぶことゝなりき。

一、歌や文や、翁の齡にしてはいと少きは、わかくておはせし昔は、よろづ打ちたはれがちに、まめ〳〵しき道に心ざしもあらざりき。四十と云ふ年より、よみ書ならひしといふ物がたり、べちにまち文と題せられし一卷あるを、こは恥あることどもありとてゆるしなし。さは四十を初めの手習の、それすら黄岐の術のいとまを偸みたる遊びなれば、うべも多かるまじく、大方はしるしもとゞめられざりし

附言

一、此集は、翁時々のあはれにつき、且事に臨みて口すさばれし、歌や文や、物語、道ゆきぶりを、紙のはし、ものゝ裏などに、かいつけられしを、取つどへて、えらぶとはなしについでられたる也。この比かたりたまはく、思はずよ、七十と云ふ齢を數へつめるは、うつゝの夢路のたどりとや云ふべき。いでや、今歳を老が世の限りに、打みだりし事ども皆しをへ、筆とるわざも、かしこきながら、獲麟のためしに、けふよりのちは、きのふの我にはあらで、みどり子のわきまへしらぬ遊びして、世をのどかにも終らばやとて、それの御寺に、おきつき所をさだし、かつ柩をさへつくらせて、此ふみ等をも、した書のまゝに納めてんと、うち〳〵おきて聞ゆ。おのれ、翁にしたしく交り遊ぶなべに、はし〴〵讀見し事のあれば、翁をしれる人々と心あはせて、是を櫻木にさかすべくとてなん。御寺にまゐりて、

むともおとしむとも、なに心してとおもへば、ひとつものに耳過しつゝ年は經にけり。君と我、土をつみて城をかまへ、竹にまたがりてかけはしりし昔より、何のたがふ節なくて、あひおひの今までゆきかひ問かはしぬるには、歌よませたまはずとも、己がひがごころを知られまるらすには、見せたいまつりて、ひと言をだにをかしとおもはれなん、いとうれしき。見をへて後に、はし一くだりにても書くはへてよと聞ゆ。あなわづらはしとはおもふおもふ、百たらずのとし波よせかへりて、まじらひし人のためには、國つ罪こそかしこけれ。我犯さぬ天つ罪を老が瘦ぼねいたきまで仰せらるゝともとてなん。かしら髮禿なる筆に、此こと打出こそすれ、歌やふみや露ばかりも學ばぬみちは、みよし野のよしとも、あしがらぬのあしかるとも、あげてはいふべくもあらぬを、古ことの葉にならひてぞ世人さだめよ、世ひとさだめよと云ふ。享和二年の秋、ふなきはふ堀江のわたなべの岸なる生島の叟記す。

序

林にあそぶ鳥のやどりところえて、おひさかゆる木草の花、人の友垣のかたらひも、おのれおのれが好めるにひかれてこゝろはゆくめり。ちゝ母に別れたいまつりての世には、うからはらから賴みつべきが、おほかめるにも思ふをあかし、憂さうれしさを語りなぐさむなん、いとゞほしき。たゞまがりねぢけだにせずは、おのがむきむきしわざいかさまにもあれな。今や老らくの世にかへり見れば、この入江の蘆が散る夕風、心さむらにおほしょめりしをも、大かたにさいだてたりしに、たゞひとり世にとゞまれるは上田の翁なり。我には齡いつゝばかりおくれたまへど、よろづにこゝろさとく、兄とも推ゆづるべかめる。常に國ぶりの歌をよみて、獨りたのしとせる、其した書めくものあまた、つゞら箱につみ入れ、我まへにもて來て、これなん、年月に刈つみし磯廻の藻屑なり。固より蘆原のしげき小屋におひ出て、ひぢりこに染みたるあのやしこと草は、久方のあふき望む御あたりには、あま彥のよびたふましく、またおなじ民草の中には、ほ

來慰問云、覺後思之、冷落失路、爲之窮厄、則不可樂、爲之命祿、則何以憂耶。余之薄命、及耄而無居無産。惟是愚盲淺識之歎。終日閉門、兀坐乘筆、雖不勝富勝貴之文、聊以爲消間之策耳。享和壬戌晚春。鴨塘頭乞丐翁鶉無常居士。拭盲眼書之。

浪速　竹陽森世黄書

藤簍冊子自序

古人云、文章窮而後工、非窮之能工也。窮則門庭冷落、無車塵馬足之鬧、事務簡約、無簿書酬應之繁。親友斷絶、無徵逐遊宴之忙。生計羞澁、無求問舍之勞。終日閉門、兀坐與書爲仇、欲其不工不可得已。不獨此也、貧文勝富、賤文勝貴、冷曹之文勝於要津、失路之文勝於登第、不過以本領省而心計閒耳。到聖人拘囚演易、窮厄作經、常變如一、樂天安土、又不當一例論也。適有此語、聊足以暢閒情焉。頃一夜夢、垢面短鬢之老翁來云、兄也薄命不遇、去鄕土離六親、無居無產、自恣爲狂蕩、而乘閒作文、然句々皆寒酸夏愁、世塗之人誰不以蔽目哉。夫前人慷慨之言、各自愛才舞文、解悶發憤者矣。兄也不然。居常讀書有感、將以安不遇乎。抑亦過不遇、共天地間之動物、人稟之性、不可以爲如何已。故

此文首尾照應せず、文脈不連、且てにをは語格のあやまり數々なるを、いささかづつ引直したれど、尙かくてよしといふにはあらず。をしきかな、此作者こゝろ才氣は有ながら不文なるは、其性懶惰にて、學問に粗鹵なるゆゑなるべし。蠢愚なる人は、刻苦して學ぶとも、かゝる文は書く事あたはず。秀才なる人は、つとめて學ばざる故に、かゝる文は書くといふとも、一篇の始末精細なる能はず。實に兩全の得難き可歎々々。

文政壬午淡暑新秋　　四不出齋

痾癖談終

に矢を投げ込むあそび

ば重ねむ、餉らば食はむ。驕らずといふにはあらで、貧しきがなす身の行ぞとて、こま王のから〳〵と笑へば、百千とり〴〵にわらふ。うそ姫もきゝと笑へば、山もわらひ野もわらふ。はるの眠ざまし、かんぺき談とも、くせものがたりとも、何ともかとも、あらうつゝなの世がたりや。

文政六年　仲春　　歌城居士

文武周公—周の文王武王周公
堯舜—帝堯陶唐氏、帝舜有虞氏
壬生のしやでん—壬生狂言の鉦聲
虞世南—唐十八學士の一人、博文能書の士
投壺—遊戯　壺上の壺中

おし立てられてはおこなへど、猶かひなきものか、筆をとりては、文武周公をもそしる人古よりすくなからず。今の世には堯舜をさへ、悪しくとりなしていふ人もあり。さてそれらがさとれる顏に書きあらはす、其墨の干かぬあひだも、我は及ばぬことを知りつつ云ひ出づるが、われ賢のしわざなりけり。世におし立てられても、おのれ濁らぬは先よしといへり。それも、表面をにごらざれば世にはまじはり難し。此あるじが輩は、これ行ふこと能はぬものなり。にごるといへば悪むべきを、たゞ世のあり様と見ば、ことぐしく忌むべきにもあらず。花見嫁入のはれの衣は、いつしか壬生のしやでんのをどり小袖となり、俳諧師のあたまに烏帽子がとまれば、神の忌がきの七五三繩は、關取の褌にまとふ。はした寶のやまに入りて、ときぐ市にくすりを商ふかぶき仙人もあれば、穢多に福者の高名あり。遊女のとはせぶみに、虞世南の書風あり。大名仕立の町人あれば、阿蘭陀おさへの機關士あり。發學、天文、投壺、盆石、琵琶、明樂、世にすたれたる遊も、ひろふ神のまもりはありけるものを、それこれのたがひをいはで、世におしうつりつゝ、見聞かむには、怒も怨も、あるまじきことならずや。それをたがへるものに打ちなげくは、我がしこの心をごりなり。淡きをくらひ、薄きを著るとも、與へ

害にだにならぬことは、たくまずして、なすまゝなるを、それらを見聞くたびごとにうち歎き、あるひはいかりなどもしつゝ、また書よめば、昔のみしのばしくて、今の世をうとみ、藝にあそべば、ふるき世の人は、上手も下手も、こゝろたかしと仰ぎ、いまの眼の、つけどころをさげしみて、樂しまぬにより、とし月を、いたづらに暮らすなり。世にあはれむべきものなりと答ふ。こま王きゝて、から〳〵とわらひ、さればこそ、世のおごりものか、あさましの心ざまなれといふ。うそ姫いはく、主は常によき衣を身にまとふことなく、あまきをくらはず、紙のふすま、紙の帳に事足りて、何ごとにも儉をまもりげにて、奢れるを見ずと。こま王いはく、わが奢れるといふは、さることわりにあらず。あるじは世にいふ癇癖の病を、つのらして、え養はぬおろかさより、我を尊しとは思ひあがらねど、世の人はみな濁れるものにするこゝろ奢の人なり。この主が思ふにかなふ世も人も、いにしへよりあることなし。漢土のやまとの書どもに、あかず教ふるも、世の人の直からず、おほかたは佞けのみ行くを、なげきてにあらずや。其ことわりを推しいたどきても、その敎のまゝに行ふ人はあらぬげなり。あるじもこれがたくひなるべし。よしや、なすもなさぬも、われ賢し愚のみにはあらで、かしこき人も世に

三八の釜日—月六齋の茶湯日

しつぽくもどき—料理の名、雑煮蕎麥の類

うそひめ—鷽のこと、擬人法に由りてかくいふ

のあり、もとの身よりなり上れるあり、またうはべは如何にもあそびずきと見せて、下のこゝろおそろしく、妾宅のまかなひかた、揚屋ばらひの取次に、一わりを貪るほかにも、時々の附とゞけを、あてことの中やどは、三八の釜日に手どり鍋のしつぽくもどき、なにかと小手のきくさがしさ。其人々のこゝろ〴〵は、そのなす所によりて見むに、かれいかでか廋哉、かれいかでか廋哉。

○むかし、深草のさとに、世を倦じてや住家もとめて、隠れたる人ありけり。しばし宿れるとおもふも、はや四とせ五とせばかりになりぬ。さすがに、都なつかしきをり〳〵は、そなたの空をのみながめてありけり。いとまがちなる窓のもとには、枕のみ友として、うちねむれる夢のうちに、庭の梢にあそぶ小鳥どもの囀づるなかに、こま鳥の舌はやなるが、人のものいふにかはらで、ひとりごとするは、はるごとに、この庵に来てあそぶに、このあるじは、何を生業にするともなきいたづら人なり。かくても世にすむかひありや、いと悪むべきものなりといふ。下枝にあそぶうそひめ、これを聞きて、されば、このあるじはもと都の人なるが、生れつきて心せばく、世をわたらむとすれば、おひかりのおそろしく、人は心のひろきまゝに、あしきといふことも、いつはりも、世の

まはしの伊助―はこまにし伊助

中居―遊里にて遊女を助けて客をとりなす老功の下女

妙見―妙見菩薩

赤山―赤山大明神

關帝―關羽廟

藝とするに至りては、よき人の子はせず、板もとの喜八、まはしの伊助など、こわいろ二三ならふより、座にをどりいで、いかにも〳〵、興あむとするほどにいと騒がしく、頭痛き心地ぞせらる。それがなかにも、老いたるは見世かり藝子、やとはれ中居などと庵して、路次のおく清らかに住みなし、よろづつましく娘のかたなりなるをも、絲の音色、なつかしきばかりに教へたて、それにたすけられて終をよくするもあり。また時を得たるは、茶屋あげやに、なりのぼれるもありき。なべて昔のごとく、物むさぼりても、やがて手を空しくするはまれ〳〵にて、泥のごとく醉ひても、著たる衣のいたはり露わすれず、大師めぐり、妙見、主夜神、赤山、關帝などに、絶えずあゆみを運びつつ、身のすゑの幸あらむことを祈るに、むかしのよき人の子なるは、さること思ひもよらず、さかづきの流にしづみて、身にいたづきの入るをも知らず、娼婦、藝子の密かに情あらむことをのみ、心底に願ひつゝ、はて〳〵如何ならむとも思ひたどらずなむ。また、わかき醫者などひたすらざればみて、われを粋とも通とも、おもひほこりては、あげやの臺所酒、樂屋のすつぽん汁に、うたてきまでうち解けたる、いとあさまし。これは醫者のみにあらず、なべて藝道もて世をわたる人にはおほかるべし。親の家藏なくして

都にあり

惣嫁—辻君

扇子の一手—踊

うちたのまむをと、思ひくらしつゝ、さる人えらび出でて、今の人目よくうしろやすき世を經ぬるぞかし。かの時めきしたぐひの女に、をり〳〵六波羅の藪かげ、ひる惣嫁たてる軒づたひに行きあへるに、肩すそおなじ色ならぬもの身にまとひ、かごしま下駄の音こぼ〳〵と、手にはあやしの器に、豆腐のからこぼるゝばかりして、われを見て露はづる氣色もなく、現にうち笑みたる、なか〳〵に面憎うなむありしと語られき。

○むかし、人のあそびの座にいでて、よく心をとれる男ありけり。こはもろしにては幇間とよび、この國にてはたいこもちとも、辨慶ともいへりけり。これらも昔ありしは、これぞと、面おこしなる藝もあらねど、ひたすら人の心に、たがはじとのみ用意せしかば、遊所のみにあらで、月花の宴、または伊勢參宮、吉野山ぶみなどにもめし連れて、物よくまかなひつゝ、たゞ快からむ事をのみ、つとめたるなりけり。また、よき人の子の、家をうしなひて、世にたよりなく、もとよりすける道とて、さるあそびの座に出でて、興を助けけるに、それらは扇子の一手、笛、つゞみ、絲竹、茶かきたて、香くゆらする事らにもたど〳〵しからず、よろづに事なれ、立ちふるまひ騷がしからずてめでたし。やゝくだりての世なるは、ひたすら、歌舞妓ものゝ聲色、身振をのみやつすを、

はしたなめられ—情なくもてなされ

卵の中の時鳥—娘をさしていふ五月は時鳥の鳴く時なれば娘の全盛に譬へたるなり

北野—北野天神社、攝津國西成郡

をりには物さびしく、寢がほなど恐ろしくなり、あしたの別に、あらはならじともて隱せど、しろきものの剝げたるひまより、にきび、面瘡など、さすがにうち見えたる、いとあさまし。さるは思ふにたがひ、吾こゝろさへ後れては、にはかに誘ふ水あらばと、こゝろいられては、かへりてもたれ氣なりなど、はしたなめられ、恐しなども疎まれ、はてはては、いづち行きけむ、かき消してあらずなりぬ。さるものの時めけるには、海道の馬士、あるは、人のひまうかゞふ小盗人等にひとしく、かや斯くして、おし取りし物のかぎり、わけなくつかひ棄てて、またも得んと思ふなりけり。さるものの母といふは、おほかたが卵の中のほとゝぎすの、五月待ちえてぞ、四尺帽子ひざ過ぐるまでうち垂れ、花見ものまうでなどに、女のわらはに包める物さゝげさせて、したり顏にあゆめるを、おなじ世界の人の、うちうらやめるも、たのむかげ雨もりては、ひきかへ見る目もいぶせきを、それはもとの水なればいかにせむ。また、むかしはあるものとも知られざりしが、人妻となりて、はした女、小童、下男など召連れて、北野、淸水まうでなどに、たびたび行きあひし。かれは時にあはず、友朋輩にあなどられ、常に心おかれて、いかで老いたる人にもあれ、形にくさげにもあれ、こゝろだに賴もしくば、つひのよるべと、

竹の中より生れ出でたる人―赫夜姫

いばらじ―人妻、家主

うちしをり―責めこらす義

籠められしと―かこはれしとの義

らせ、友朋輩はありて無きものによびつかひ、よろづこゝろの行くまゝに、うち振舞つつあるほどに、つひによき人に思はれて、黄金あまたに請けいだされて後は、いよ〳〵竹の中より生れ出でたる人のやうに、ころも調度、あさゆふの物も、時にさきだち時におくれたる品をのみ、好みごととして、猶あくときもあらず、よろづ思ひ誇れるあまり、昔しのびあひし男、また今のいへに、夜晝まゐれる八百屋、さかな屋などの、こざかしき男とかたらひて、つひに見あらはされてぞ、身のひとへのみに逐ひやられ、その男のもとの妻をば別れさせて、おのれいばらじとなりても、髪は人にあげさせ、裁縫ふわざも知らねば、姑に逐ひうたれ、をとこもまたはじめこそあれ、すゑはいかならむと、心づきては、言葉もあら〳〵しく、時々うちしをりぬるにぞ、なによ斯くまづしき男をたのみ來つらむと、負じごころに投げうちなどして、いさかひては、また此をとこにもわかれて、なほいさゝかも、思ひよわることなく、もとの川竹に流出れば、こゝかしこの好者らは、いと珍らしみて、我さきとあひ見るに、しばし籠められしとおもへど、かぞふれば、はや三とせ四とせになりぬれば、三十や過ぎぬらむと、思ふ心より見れば、いとよくけはひて、をかしからぬ事をもをかしげに、興あるさまにもてなせど、とある

辻君―夜鷹
白きもの―白粉
道頓堀―大阪の町名、劇場のある所
みそかごと―密事
おくれさせ―臆れしめ

手には鳥籠のおしつぶれたるに、朽ちたる簀のこ板持添へて、今宵の焚火のれう得たりとや、うれしげに走りゆく。辻君五六人、髪はぬれ〳〵とあげて、白きもの衿にうつらふまで、きは〴〵しく塗りたて、色あひ確ならぬもの、ひきかさね著て、低きあしだの音こほ〳〵と響かせ、から〳〵と物たからかに言ひつゝ、北ざまにあゆみゆく。さらに〳〵なさけしくこそあらね、彼もまたかなしう言ひかはしたる男もあるべし。また親男の爲に、我身はあるものともせず、よひ〳〵出でたつもありとや。あはれの操や、わりなのまことやと、うち眺めらるゝ。やう〳〵道頓堀に來れば、たちまち異國にいたりしかと覺ゆ。夜芝居のまうけ明日の夜よりと、櫓幕翩々とひるがへれる、此ふく風は、さき〴〵のにはあらぬにやと、思ふも移りやすの人ごころや。

○むかし、色ごのみなる男老いて語りけるは、遊女ほど、世にをかしき者はあらじかし。おのれときめきて、ひく手あまたなるには、よるべの末のことなど露ばかりも思ひしらず、逢ふごとの男に心をおかせ、夢いふに違はじと思はせ、又みそかごとありとても、妬き言葉思ふなかばをも、え言はぬものにしこなし、はした金くるゝには手もふれず、男のこゝろをおくれさせ、または親かたに血の涙を流させても、おのが心をと

うばら—せきぞろの妻

はりの木染—榛にて染めたる

身にしみて覺ゆ。此ほとりに宿とるとて、あさましげなる者等、たち續きてかへり來るを見れば、老いさらぼへる目くらの、竹杖のかた手には、十一二なる童にひかせて、ゆく／＼うち倒るべくあゆみ來る。このあたりにては米をよばねど、聲をしあげば聞知りたらむものぞ。垢じみたるものに、面おし包みたるうばらの、手に蕪菜二かぶばかりくゝりさげて、物得たり顏に行くもあり。ゐざり法師の頭髮おどろにあひ延びて、つゞれの肩のひまより、氷れる肌のあらはれたるが、なにごとやらむ、ひとり言しつゝゐざり行くは、今日の寒さをかこつなるべし。はやく宿れるは、一錢が鹽、二錢がもち、これかれもとめありく。此あきなふ家も、こゝに年月すみふりたるは、さるものらもいぶせう卑しめず、それ召すか、これぞ良かめるなど、こゝろよげなり。此きたる中に、紺ぞめの尻たかくからげ、はりの木染の脚袢しめはきつゝ、眞鍮鐔の長劍さしこはらしたるが、やどりいそぐに、さうし紙のおほ烏毛、さびしげにふり擔げたるに連れだちて、辻だちの歌舞妓藝者の、紅粉おしろい斑らにけはひたる、若者とむつましげに、うち物がたりしつゝ行くは、あるが中にもいさぎよげなれど、さすがにおどふるふ鼻のさき、太脛など、鮪いろに凍えて寒げなり。またあやしの男の、目ばかり見えて、

鐵炮—空贅、太平樂

むづかしげなる家—むさき家

火おこさぬ夏の云々—火おこさぬ夏の炭櫃の心地して人もすさめずすさましの世や

かく恐しげなる物をもとめたまふと問ふに、君が鐵炮をうけむ爲なるはと云ひけり。いとくちがしこき男になむありける。

○むかし、をとこ友どちかい連ねて、住よしのこほり住吉のさと、住吉のやしろにまうでけり。霜月のはじめころにて、ゆふさりがたのそら霜をれて、うみなく風の汐しみていと寒し。生駒山を見れば、冬がれのところ〴〵赤ばげて、西に入る日のかげにあらはにてあいなく、見る〳〵さむげなり。今宮村を北に横をれくれば、長町の南がしらなり。むづかしげなる家ども、ひし〳〵とたち竝びたるなかに、はたごやのところ得顔ながら、時ならねば、ゐなか人のやどりもまれ〳〵にて、火おこさぬ夏の炭櫃のと、うちながめて過ぐるに、青物菓物あきなふ家は、葭簀たて圍ひて、束薪、はかり炭、それこれと賑はし。鹽魚なにやかや、しびら目黒の切賣、干鰯のいさゝか皿に盛りたる、また何とかいふ魚のあぶりもの、鮪の大魚をいまはしげに、切りさいなみたるに、にしんの舌たるげに煮こゞらせし、唐きびもち、あかむしの切目高なるにも、おほ路のつちかぜやかづくらむ。香の物、くきづけのにほひ花やぎたるが中に、芋むす湯煙ぞあたゝけなる。日は西にしづみはてゝ、颪いとあらぶきだち、厚肥えて著たるさへ、ゆふしめり

みしんの水牢—年貢未納のため牢獄の下水に浸しておかるゝ刑

まれ人に云—伊勢物語の歌の飜作

うかれ女—遊女

かづけたまはらば—送り給はらば

さけにて、やう〳〵かへるべければ、こゝろにもあらで、見すて行くなり。都に行きて後、いかにも〳〵、さばかりの事は、おくり越すべき。親なる里は横田むらにて、みしんの水牢などいふ罪に、しづめるにあらずやと、いとしら〴〵しくいふにぞ、女いと憎しと思ひて、つと立ちてまたも來ずなりぬ。さて朝がへりの手水のついでに、爪の長きを切りて、それをおしつゝみて、表に書きつけて女の許へやりける。

　まれ人にすかさずのばす爪しあれば

をんな、此すゑを、なづなの葉に書きて出しける。

　またあふ坂もあらじと思ひて

互にあさはかなる心を見せあひて、明日は松坂どまりにと、立行きけり。

○むかし、おのが爲にもならぬ事まで、何くれと能くいつはるうかれ女ありけり。あるをとこの田舍に行くとて、いとまごひしに來りければ、この女、さらば馬のはなむけに、小袖ひとかさねして、おくりたてまつらむ。夜寒をしのがせ給はむには、おのが思を添へてこそと云ふに、をとこ、我にものかづけ給はらば、さねよくおどしたる鎧一領たまはれといひければ、それとても、御こゝろのまゝにたてまつるべし。何のれうにとて、

—賣渡されきりまして
—年を重ねること
たて烏帽子
—強盗の名、今昔物語に見ゆ

ろのまゝしさに由りてなるを、猶このたびもいま二年をきりまして、こがね五兩おくりこせと、しきりにせめらるゝ、いつまでとか、かくつれなさのみ聞ゆるぞや。此度をかぎりにて、親子の緣だに、切りてたまはらば、望みたまふまゝならむといふ。流石にうけがひしかば、たのもしき人々に打ちたのみて、此半金ばかりはとゝのへぬ。なほ今なかばに思煩ひたるを、つきせぬ御ちぎりに、あひ見たてまつるものから、むかしの御情わすれたまはずば、あはれおほしめぐませたまへと、うち泣きつゝいふ。男いと悲しきことを聞くものかな、さばかりのはした金物にもあらぬを、こゝにふようの事こそありつれ、まうで來しつち山の宿にて、友どち酒くみすごし、日もかたぶきぬ。今宵坂のしたのとまりにとさだめて、人々は行きけるを追ひて、鈴鹿やまをたゞふたり、月かげささぬ岩のがけみち越え來るに、ものすさまじき木陰より、深山のあゆみ出づるやうにて、たて烏帽子のこゝにあるを知らぬ歟、えこそ通すまじ、ふところのかぎり置いて行け、いのちばかりは得させんと、雷のおちかゝるごとき聲していふにぞ、魂も身に添はず、ありつる限さゝげ出して、逃げのびぬ。此おどろきに心地あしければ、夜べこよひ、うさはらしにこそ來れ、またこのあはれなる事を聞くは如何に。されど我さへ人のな

ちよんがれ―浪花節
しんばう藝―世話場の立役が無理なる事柄に辛抱して復讐する如き藝
置山―淺尾爲十郎
市紅―市川團藏
あんにやー伊勢の方言遊妓
しかへられ

ば、ひたすらに興あらむとて、筆はさかしきに過ぎてうちはやり、口疾くいひもて進めるほどに、讀むにいとあはたゞしく心いそがれて、ちよんがれなどを、聞くやうになむありける。

〇むかし、歌舞妓ものがたり可笑しくする翁ありけり。それが常にいへるは、古姉川がしんばう藝鈒擊、訥子が時代世話、獅々吼が武道はなどいひて、頭うちふり聲さまぐ\にて、今の世なるは、それらが面影にもあらずといふを、わかき人露ばかりも信ぜず。いかで置山が逸風におとるべき。市紅もまた古市紅にをさく\まけじものを、れいの翁が、むかしものがたりよとて、かへりて嘲りわらひけり。翁はらだたしき人にて、うちなげき、今は山にやこもらむ、海にやうかばむと、ひたすら巾されけるとなむ。

〇むかし、伊勢の御神に、講まゐりする男ありけり。色ごのみなりければ、御師のもとに、草鞋解棄つるより、まづ古市のあんにやに酌とらせけり。おもひきや、都にてむかし會ひかたらひし女の、こゝにありて出來て、互にうちおどろかれ、すゞろになつかしくて、寢ものがたりあはれに、打ちかたらひけり。二夜といふ夜、いとおもひありけにて云ふやう、かくはるかなる國にしかへられ、世にたのしみなくさまよふも、親のこゝ

からうた―詩

奥の細道―芭蕉翁の奥州旅行記

象潟―羽後國飽海郡にあり

なる御聲をだに、聞きたがふこともありけり。また漢文からうたに遊ぶ人も、おのれうち誇りて、木に彫らせつゝ、世にみて呉れをなす人、その世にはいとおほかりけり。我なからむ世に、人のしたひて物すべかりける事なるを、さる世はおぼつかなかりけむ、みづからものせらるゝことにぞありける。こは腹ちからなき人の我かしこになむありける。また、これを名利の功能書をちらすなりと、ある人はいはれき。

○むかし、俳諧のすさびありけり。芭蕉翁の奥の細道のあとなつかしく、はるぐ〱のみちのくに下りけり。ある國の守の御城下にて日くれなむとす。一夜あかすべき家もとむれどあらず、思ひつかれたるに、そこに門だちしたる翁のあるに、立ちよりて、ねんごろに宿をもとむれば、翁うち見て、法師は達磨宗なるかと問ふ。いな、さる修行にあらず。芭蕉の翁のながれを學ぶものなるが、松がうらしま、象潟のながめせむとて、はるばると來れるなりと云ふ。おきな聲あらゝかにて、何がしどの御下には、俳諧師と博奕うちの宿する者はなきぞと、云ひけるとなり。いかなれば、おなじ列に疎まれけむ。いとあさましくなむ。

○むかし、都がたに物がたりいとをかしう書く人ありけり。もとより才ある人なりけれ

癇癖談 下

えりあつめ―撰集のこと
京極中納言―藤原定家
偏執―頑固
つけ―失敗あやまり

○むかし、市のなかに住みて、歌よくよむ翁ありけり。世の譽高きまゝに、いつしか思ひあがりて、えりあつめ、おほしたゝれける。まづ住吉の神に詣でて、此こと冥加あらせたまへと、祈りものせられけるに、其夜の夢に内殿の御戸ひらくと見しが、うちより妙なる御聲して、なんぢつき明らかなりと、敎へさせたまふと、おぼえて目さめぬ。こはむかしの京極中納言の君のためしに、かなひし事のありがたくて、やがてえらびものせられけり。さて世におしひろめたりけるに、此所かしこよりよからぬ風説ども聞えけるを、それが方なる人は例の偏執の世のさがぞとて思ひやみけるを、翁なほき人にて、神の御告のありがたきを思ひたのめりしに、いかでかゝりけむ、猶おもひあやまれる節もあるにやと、ふたゝび詣でてなげきたてまつりしに、また先のごとくうちより高らかに、なんぢつけ明らかなりとこそ告げつるをと、聞えたまへりとなむ。神の妙

此春ばかり
墨染にさけ
把針者—裁
縫者兼梵妻

こは唐土(もろこし)にてはなにといふを、此國(このくに)にては然(しか)よぶものなりなど、いともくはしかりけり。されど、まれ〲には辨(わきま)へがたき物(もの)もあるにや。此(こ)は何(なに)の類(たぐひ)なりとも答(こた)へらるゝを、或人(あるひと)これを聞(き)きて、何(なに)の類(たぐひ)の、類(たぐひ)の字(じ)は、祇園町(ぎをんまち)のむすめぶんの分(ぶん)の字(じ)にひとしく、いとまぎらはしとなむ言(い)ひける。

心かたましく｜心ねぢけて
さもしげなる｜見すぼらしき
きもいり婆｜口入婆
此春ばかり｜深草の野べのさくらし心あらば

行にあらずとて、もて來し袈裟、衣、小袖まで、おほかたに奪ひとりて、あら〳〵しく身に添はぬ麻木綿の、糊さへいとこは〴〵しきに、取かへられ、菜つみ水くみたくはつなどは、修行のならひなるを、物くるゝ檀家へは、さもしげなる重のうち、たえず持ちはこばせ、男僧の夏冬の物の解きあらひの賃仕事、よる晝といとまあらず、人のかげぐち、見きくまゝにいひちらし、嫁とりのなかだち、産家の夜とぎ、不義むすめのあづかりものなど、うき世のことにのみ、かゝづらひつゝ、朝夕の誦經のほかは、なにを佛のみちに入りしともなく、いとあさましき世界に迷來ては、また爰をも遁出でばやの心しきりなるにぞ、なか〳〵にありし世の戀ひしくもなりぬる事よ。つひにこの庵室をも疎んじ出でて後は、そこと頼むべきかげもなく、さまよひ歩くほどに、はじめの道心もいづちにか醒めはてゝ、手かき歌よみしむかしは、夢の浮橋かけたえて、春さむいと、秋何とやらいふに堪へかねて、つひに恐しききもいり婆にかどはかされ、ある遊里へ、夜ばかり人目をしのぶ尼出の苦界、四尺ばうしの淺黄ざくら、この春ばかりのすみぞめか、はては何がしの院の把針者とは、たしかそれぢやと、見し人のかたられし。

○むかし、鳥獸草木のたぐひの、世に見知らぬをば、あまねく能く見わかつ師ありけり。

きつしら波—たての緣語

二條家の流—藤原俊成卿の歌風世に傳りて一家の流をなせり

手まさぐり—手なぐさみ

心さがなくして—心わるくて

かりそめならず云々—假りの事にあらず深く思ひしみての意

○むかし、人のおもひ者なる女ありけり。裁ちぬふわざよりして、手などしをらしく書きすさみ、和歌は二條家のながれをまなび、絲をかしくかきならし、茶かきたて、香炷き薫らしなど、なにわざにもなみ〳〵ならざりけり。そのたのみつる人は世のつねの人にて、道々のあはれをも知らず、たゞ朝夕酒くみ遊び、めぐりなど手まさぐりして、露も物の心なき人なりければ、よろづおとしめられて、まめ〳〵しく言ひかたらふべくもあらず、いとたのもしげなく、年月おもひくらしけり。このあるじのやどの妻は、心さがなくて、ときどき妬しきことといひおこせ、ことにつきては、恐ろしき心ばへども見せつゝ、つらさのみおもひ知らせければ、わが身のうへ、今ははかなくのみ思ひなされて、ほとけの道かりそめならず思ひしみて、經よみ花つみ精進などして、おこなひけるほどに、これもまた、主の心にかなはぬよしにて、あいなくのゝしられ、さては道に入るべき時こそ來るなれとて、つひに髪をきりて、こゝを遁出でにけり。さるこゝろは、世をはなれたる庵ずみして、松のあらし、筧のみづのおとに、こゝろを澄せつゝ、おもひのまゝに念佛して、後の世たのもしからむをと、ふるき物がたりざまに身をやつせしに、ことたがひて、師とたのみたる尼の、心かたましく、今よりかく尊げにては、修

こゝろよしが方―おもひものゝ方
はした女―下婢
すゝばな―鼻汁、鼻洟
鍋どころ―竈
飯匕―飯匙に同じ、飯杓子
風ふけばお

帯鈒まで、問ひもとめつゝ、出したてゝやりけり。をとこ不圖こゝろづきて、もし二ごころありてやと疑つきぬるより、例のこゝろよしが方へ行くふりして、せんざいの厠のうちに隠れて、うかゞふ程に、此をんな、かゝりけりとも知らで、いとうれしげに、をとこの出でしまゝに、はした女をよびて、耳に口つけて物いひければ、うけたまはりて出行きぬ。さればこそ、二ごころあるなれ、猶見あらはさばやと、よく忍びてあるほどに、暫してはした女のしりにつきて、男の入りきたるを見れば、つねにまゐれる八百屋の翁なりけり。なにやらむ、物うち入れたる籠わきばさみて、つと入來る。あなあさまし。年は六十にこえ、歯落ち頭はげ、すゝばな垂れたるを、これに見かへられぬ事のいと口をしく、さあれば如何にすらむと、なほたへ忍びつゝ見るに、あなこゝろ憂、戀するにはあらで、そこを焚け、かしこに炭つげとのゝしりつゝ、俎板の音にぎはしく、鍋どころあまためう〳〵と湯煙たちて、うまくさき香の此所にまで薫りて、あるじの女うち誇りつゝ、手づから、飯匕とりて盛食ふありさま、餘にうちとけて、いとあさましく、つと出でんにさへあぢきなく、風ふけばおきつしら波、立てこされてはならぬと、心づきしより、其後は夜ごとに出でありかずなりにけり。

さし櫛につもる云々—梁塵の故事昔虞公の美聲梁上の塵を動かせりと云ふによる
人の女のまゆごもり—處女のこと
やつし—化粧すること

む。

○むかし、絲竹のあそびに、こゝろを入れたる男ありけり。かなたこなたのはれの座にも參りて、うち聞く人のこゝろを、動かするあまりに、さし櫛につもる塵をもたゞすばかり、またさらへ講などいひて、いみじき晴れわざありけり。棧架たかくかけあげ、毛氈まばゆきまで、燈灯の光に輝きあひて、いと目さむる遊なりけり。これには人の女のまゆごもりなるをも、出したつることにて、髪のかざり衣の色あひ取りあはし、見めよくして、なにも〳〵あらはなりけり。色このむ男等、若き醫師など、いたうやつしめかして立ちならび、絲に竹に聲をかしくかきあはせたるなむ、いとをかしきものから、はてばては、よからぬ口說なども出來にけり。さて、かの上手の名ある男のつひのよるべは、なにがしの自賄藝子などが、かくし夫となりて、いふがひなく路次のおく住居に、ふきはきの朝夕のいとまには、錢湯、髪結どこに來て、はかなきおのが昔語などしつゝ、あな太平やなど、後指さゝるゝをもえ知らでなむある、いと淺まし。

○むかし、人の妻ありけり。其をとこ、外ごころおほき癖ありて、夜ごとにいづちとも知らず、うかれありきけり。さりけれど、此をんないさゝかも怨みたる氣色なく、小袖

と―身をくだくこと
すゝどく―するどく
鬼―おそろしき物といふに用ふ

と、つねに傲りていひけり。さはいへど、相應にかねもつかひけり。まはりごころ人にすぐれて、いとすゝどくありければ、逢ふごとの娼婦は、もてわづらひにけり。たまたま、よるべにと思賴みては、身もくづるゝばかりに、心づくしすれど、とにかくにあばずれにて、たのもしげなく、うたて疎むべきふしも多かりけり。月のあかき夜、このまめ男たゞ二人、陰くらき軒づたひして、金五郎、八郎兵衛など、つれ節に聲をかしく流しあるきけり。鬼ある所とも知らで、とほく來にけり。そこなる辻のかくれより、顏よくおし裹みたるをとこの、背たかくおそろしげなるが、ふと出來て、此まめ男に強くあたりけり。いとすさまじければ、立煩ひけるひまに、女のさせる髮のかざりどもを、いち早く拔取りていにけり。あなやと云ひけれど、人氣遠き所なれば、いづちにか逃げうせにける。男あしずりして泣けども甲斐なし。さるは思ひがけぬ事にしあれば、いかにせむ。そのあした血の涙を流しつゝ、ありしにかはらぬを、取りそろへて償ひにけり。その價は黃金二十兩ばかりを、重ねあげてやりけり。さて後よく聞けば、彼夜の盜人は、娼婦の兄といひて、實には、深くいひ交したる男になむありける。それを鬼ともいふなりけり。如何にすりおろされじとするとも、娼婦ばかりかしこき者はあらずな

千金方—遜思邈撰
あからさま—あらはにの義
調度—道具
束帛—禮物の事
身をうつこ

りけらし。さりけれど、藥の價におきては、何十錢、何銅などと、あからさまなりけるにぞ、世の人いとゞ心やすがりて、初めには、まづこの人にと思ひつきにけり。かゝりければ、世の醫者だちの爲惡しくて、密かに妬む時もありけるとや。やう〳〵、行はるるにつきては、髪を立て頭まろげなどして、醫者の列に數まへられけるほどに、おほ方は流行らずなりにけり。また、佛の教にかしこき法師おはしけり。現世をもひろく救はんの、大願をおこしたまひて、人のやまひを療したまひけり。やまひおこたりぬれば、恩謝にとて、金銀をさゝげ持てまゐれるは、いさゝかも納めたまはず、たゞ、絹綿、調度のたぐひをば、いなみたまはずとなむ。さるは、こゝに參れる人は、唐山の、やまとの、世に珍らしきかぎりの物を買求めて、たてまつりけるとなり。唐山にては束帛といひ、我國にては神には幣といひ、君には貢といひてたてまつるも、おほかた帛錦の類なりけり。さて人の世に賄賂といひ、俗にはこれを鼻ぐすりとも、袖のしたともいふは、金銀のみにもあらざりけり。それを納め給ふは、異なることなるに、佛のをしへには、さらぬ理ありや、いとぶかしと、人いひけり。

○むかし、色ごのみのかしこき男ありけり。金は使はねど、娼婦はわれに身をうつこと

ひだりまへなる人—運勢よからぬ人
工手間—大工の賃金
傷寒論—張仲景著
金匱—金匱要略

らず。室お茶にあらざれば入らず、割截お茶にあらざればくらはず。道具書附なきは買はず。すかさぬはお茶と稱し、ぬかればお茶がないとそしる。よい女房は書院もの、いけぬ妾はさびもの、利休ばし、利休下駄、大工、中瀬、八百屋、魚屋も、草鞋解捨つるより、花月のふだとりて、すり足のたちふるまひ、是をちやつた世の中となむ、こゝろある人はいひける。

○むかし、人の家の相を見て、惡しきは善きに作り改めて、幸福得さする師ありけり。さて、それがなすことどもを、後によく〳〵かへり見れば、おほかたは時いたりぬる人のうへにこそ、幸福は得るなりけれ。やう〳〵ひだりまへなる人の、何事に心まどひしては、竈をつきかへ、厠うつしなどすれど、たゞ〳〵ひた衰へにおとろへ行くには、さらにその驗もかひなきのみならず、工手間、釘繩のつひえのみして、いよ〳〵のこりすくなの財寶をも失ひつゝ、こゝろ憂き世に立ちさまよふ、いとうたてし。

○むかし、藥あきなふ人の、醫者かねたるが、世におほくありけり。それらの人も、傷寒論、金匱、素難、千金方の、たふときことわりをあきらめ、また、醫通、溫疫論など、後の世にても、いとかしこき書にもわたりて、ひとり衆方規矩、手引草のみにもあらざ

螢の火かげ　―晉車胤

雪のひかり　―晉孫康

鄰の壁云々　―漢匡衡

源氏物語にいへる　―源氏物語乙女巻にあり

かふこと、われにまさりける程に、かゝりけるとなむいひける。うべ理にこそありけれ。

○むかし、おきなありけり。常のことにいへりけるは、書をよむは貧をまねくためなりと、あながちに言はれけり。螢の火かげ、雪のひかり、鄰の壁のこぼれをたのむたぐひ、おほかりけり。みやこに、浪華に、書籍あまた買ひつみて、持たりといふ人も、こがね千枚をつひやせし人は、いと稀なりとや。茶器などもてあそぶ人は、手にすゑて見るばかりの物にも、それらの價なるは、いくらも買入れて持ちたるをや。このためし今の世のみにあらず。源氏物語にいへる、家より外に求めたる裝束どもの、うちあはず、かたくなしき姿などをもはぢなく、おもゝち、聲づかひ、うべ／＼しくてもてなしつゝ、座につき習ひたる作法よりはじめて、見も知らぬさまどもなりしと書きしは、おほやけに仕うまつる儒者だちの、貧しきさまを見るに、淺ましといへるなり。また、田舍より上る書生は、國を出るより、人の世話にはなりうち、寫本はぬすむもの、書物は借り取に返さぬものと、まづ覺えて來るなりけりと、ある師のかたられし。

○むかし、一天下こぞりて、茶の湯なる時代ありけり。其世の人は鄉黨お茶なきには語

りて多くある中に鹽政—鹽町に住める傾城師政太夫

ぬかれけり—先ぜられけり

しか思ひつくものなり。博奕など達者に打ちぬらむ。人形はつかふや。鹽政など、よく寫しぬらむといふ。娼婦うちゑみて、粋とおぼして黑がりたまへど、いとまへかたなり。此方のむすこさむに限らず、なべて、今のむすこさむだちは、色事心に入れたまはず、おほ方は、茶の湯、俳諧、學文とやらいふ事にこりたまひて、人形、淨瑠璃、物眞似など、古風な遊したまへるは、あらずとなむ、答へけるとなり。世のなかのうつりかはるこそ、あやしうはかなきものなれ。儒者は、詩文の風流こそ日々にさかむなれ。むかしありし師のごとく、こゝろおかるゝはなく、おほかたは、通を專らに、秀句、口おひなど拍子よくいひ興じ、酒をかしく酌みあそび、さらぬはまた古本、古筆のうりかひに利を射る。また、歌舞妓役者は、五十にして天命を知り、舞臺をひくを見識とし、おやま藝子は、四十を猶老いたりともせず、花やかがるなむ、世のすゑ又いかならむ、いと覺束なしと、こゝろある人のなげかれし。

○むかし、色このむ男ありけり。いかにもして娼婦に思はれむと、心をつくしけれど、やゝもすれば茶屋あげやの亭主、子息、役者、牽頭持などにぬかれけり。彼いかばかりの情して、われに優りぬらむと、年比こゝろをつけて見れば、さることにこそ、金をつ

御髭の塵助—追從者
さそく—早速
何格—何々家格
色きかす—大阪方言
けつくあるが中に—却

きが、遠き田舍の果ばてまで、歌ひはやせるなりけり。何事にもあれ、暫はやりもて躁ぐことの、淺はかならぬはあらじものを。

○むかし、やむごとなき家にはあらぬ人の、世の中の事はかばかしくも學びしらぬが、たゞ金銀おほく持たりければ、御前さらずの御髭の塵助等は、もとより然るものにて、知る知らぬ人までも、羨みたふとがりけるほどに、いつしか思ひほこりつゝ、恩見せぬ世の人までに、無禮になめちらしけり。國の守といふ御あたりよりも、餘にまばゆきまで、あしらひもてはやさせ給ふは、陸奥の小田の山より、さそく出金の花を咲すにぞ、利足の外に扶持かたを賜はり、何格、何の席などと、武功の家柄のひざをも乘越えて、いと烏滸がましく、いみじき振舞などもありて、腹ふくらしけり。

○むかし、なまさがしき男ありけり。ある遊所の娼婦に、酌とらせて遊びけり。いたう醉のすゝめるまゝに、例のわるじやれ言ひけり。家のむすこはいとよい男なり。さだめていろをきかすらむ。おほかたの娼婦は、うちの息子と睦じきもの、娘などは、かへりて、中あしく心あはぬ者にて、よき絹など惜みて著せじとするを、息子はけつくあるが中によきを選出して、はれの夜のめいぼくを起さするほどに、娼婦のかたよりいつ

ねむりめなる—くすみ色なるの意

線—三味線

屈したり—窮屈なり

家居ひろく住みなし、藏高く作り、藥種は時をはかりて買ひいれ、その益を見る。さばかりならぬも、嫁とりのなかだち、茶器のとりうり、茶屋あげ屋の文かよはする中宿などするは、愛敬を專らとすれば、おのづからにぎはしきぞかし。また國のかみより、祿たまはりし面目あるも、おのが術の譽かと見れば、さるかたなるは、いとも稀にて、おほかたは、銀主ひきつけの働なるが多し。また、男をんなの髪の風、櫛のかざり、衣の色あひこそ、きのふのひわ茶はけふの栗皮いろ、みやこのは吾妻にうつり、吾妻のは浪華にうつし來るも、あら忙しの世にもあるかな。人の心ばかり賴まれぬ者はあらじかし。白茶、あさぎ、鼠などのねむりめなるをさへ、花やかなりと見し世も、まのあたりなりしを、いつしか萠黄、瑠璃紺、紅かけ、花色の、深きにうつろひ行けり。ふるき翁だちの、ひたすら昔をしのぶげにて、羽織のたけ、小袖の仕たて、紋のおほきさ、いさゝかも今に移らじとするも、それ將おのが若き昔の、浮きたるはやりごととは、思知らぬぞかし。いまの短羽織は昔の短きにあらず、寸尺おなじくて、著る人の心たがへばなり。また、新曲などとて、線にあはするも、よき人の心づくしせしは、あな屈したりやなど言ひて、人興ぜず唱歌つゞかず、あまりなる迄さればみて、なにの心もな

つなく｜物心なく
思ひ出ぬばかりの世｜遠き昔の事
神おろせし者｜神靈を我身に寄せて託宣を我が口より述べし人

なることを見聞くなり。または人妻、かしづき娘など、はて〴〵、よからぬ風説どももも出來てぞ、やう〳〵物ごりして、さることありしとも、思出ぬばかりの世と、醒めはてぬるは、いと淺まし。また稻荷のおさがりとて、をり〳〵うつしまうづる事あり。こゝにあつまる人は、おのがもとありしよからぬ仕業どもをも、今のこゝろきたなきことをも、あからさまに言ひあらはされて、なほ愚なることのみを、祈りもすれば、大かたはこゝろあくまでのしるしも見ず、重きやまひも、及ばぬねがひも、はた甲斐なくて止みぬるぞ、いとあぢきなき。老いたるきつね狸など、さすがに愚痴かたくなの人の、心は動かすれど、よき人、なほき人に向ひては、何のしるしを見することなく、これもまた、はては何方いにけむ、その神垣といふも、後に見れば、のき朽ち、御はしは草むして、もとの藪原と生ひなりぬ。かつ其神おろしせしものゝ身のをはりも、大方よからずなりはつるを、まのあたり見しぞかし。また醫師も昔もてはやされしたぐひの人は、世にあらで、うちむかふに賑はしく、もの能くいひとりて、病める人、看病の人の心をもうちたのませ、人の家のよろこびかなしみ、人より先に使して、物を贈りつゝ、酒さかな調じて、をり〳〵呼迎へ、茶の湯などして、呼呼ばれする門には、人の出入おほく、

し事ありがたき人—世に稀れなる高僧

こなし—所作

大師めぐり—大師佛を巡禮すること

もののうつ

び、酒をかしく酌みあそぶもとへは、人あまた集まれり。ほとけの道にも、よにありがたき人は、山に籠りてあらはれず、亭主ぶりよく、うときを訪らふ言葉にも、うれしとおもはせ、物きよく調じてくはせ、今の世の茶の湯もて呼呼ばれ、よろづに愛敬づきたらむには、まづ詣づるなり。翁うばらとても、さるかたに、一度まゐりては、若き人の遊所に通ひそめしにひとしく、あはれ一日も怠らじと、思ひしめるぞかし。説經者といふも、尊き經文の意を、一すぢに説聞ゆるには、心もうつ〱として、眠を誘ふのみなりとて、聲高くも、ひきくも、あるひは、ころもの袖に涙をうちはらひ、またはまなこをいからしなどして、歌舞妓もののこなしをまねつゝ、唐のやまとのものがたりをも、詩歌のふかきこゝろをも、おのがよくも心得ぬあまりに、得手勝手なるかたに説こかし、また此ごろなりし世説の中に、めざまし草なるをまで取りまじへて、ひたすら興あらむとするなり。觀音めぐり、やう〱おとろへぬめり。大師めぐりなむ、難波人はいと猛に立ちさわぎける。神にも御陰まゐりなどは、遠き田舎のはてまでも揺りうごきて、晝とも夜とも、くふともくはぬとも、をとこも女も、老いもわかきも、わらべも、田かへす牛も、垣もる犬も、物のうつゝなくうつし詣づるが、道に病倒れ、はかなくあはれ

俗あたま―俗人
仲景―漢の張仲景
東垣―元の人、李杲字明之
丹溪―元の人、朱震亨
猿が餅に―猿が餅喰ふ如く速にの義
いちびりたる―狂喜せる
實體―修身治國平天下の道を修め

あたまの座禪観法、二代金持の縁者のぞみ、世になし人の先祖よばはり、小借家ずまひの茶の湯ぶるまひ、また醫者の漢魏見識も、おなじことながら、仲景、孫思邈、東垣、丹溪も、瘧をまじなふ八はらひのそろばん、爺も猿が餅になほすが正銘、それをおきては、引經運氣論も、病因隨症も、筆端辨正は木太刀の芝居事、いづれ其しるしを見ずには、信じられぬ事どもなりけり。むかし人は、斯いちびりたる我がしこをなむ、りきみあひける。

○むかし、物ふかくも思ひわたらぬ人の、世の事心得顔にいへりけるは、大方の世にもてはやされぬ事は、そのわざのよからぬが故なりと、あながちにおし極めていはれたりけり。世にはやるといふことどもを見聞くに、道々しきにも、藝能にも、よきことのみ行はるゝにはあらで、大方が成しやすく、學びやすきことの、まづはやるなりけり。さりとて、あしきことのみ行はるゝと云ふにはあらず、人のうたてがること、將よしといふにもあらず。いたりてのわざは、倣ねやすからず、行ひがたしとは、むかし〳〵の人のいひしぞかし。儒者といへども、むかしありしは、ひたすら實體にて、たのもしかりしを、今はさる師は世にまれにて、詩文はな〴〵しく作りもて、手など風流にかきすさ

上古こがれ―古代をしたふこと

癇癖談　上

○人ごとにひとつの癖とは、むかし〱の諺ぞかし。今の世の人は、心詞のくせの外にも、たつに癖、居るにくせ、それにもこれにも、癖なきはあらぬを、みづからは癇症と遁るゝを、他人からは悪癖とも、氣まゝ病とも名づけたり。さてその誹れる人も、亦この癖のなきはあらねば、人のくせが世のすがたとなりて、高きも卑しきも、みやこも田舍も、あまねく云ひはやす癇癖談を、癖ものがたりとも、讀めばよめかし。きのふもむかし、さきの間もむかし、をとつひ、跡の月、去年の大むかし、十とせ廿とせのとつとの昔までを、語りつゞけて、册子めくものとはなりにけり。

○むかし、をとこありけり。ならぬ狂言を、かりにも出かしたがりけり。それをたとへて言はば、儒者だちの經濟りきみ、國學家の上古こがれ、えせ歌よみの萬葉ぐるひ、俗

御うはさのくせものがたり、拜借にて、寛々拜見いたし候。天王寺の法師がくすしの條、物産老人の類盡屈候書家のくだり、其人々を見るやうにて、あかずくりかへし見申候。誠に人には一くせとて、才有人は才を相手とし、わるがうる者はわるがうを言ひ倒さんとする癖にて、いづれ其才其くせを持ち腐りにはし難くて夫を捨てて仕舞、塵芥場を掠らふる物なれば、此本の作も、定めて其ごもく場なるべし。其種につかはれたる人も、定めて才子か、わるがう者なるべし。是を面白と見る人も、亦痴人にはあらざるべし。われらも其仲間入にと一本を寫して、原本を御返上申上候。法論味噌一曲、薪より貰ひ候。其御口へ御あがり可被下候。　かしこ。

竹　窓

上田翁の御もとへ參る

癇癖談序

この物がたりは、朱雀のくつわが塗桶の中に、へしこめてありしなり。作者は誰とも記さゞれど、傳へていふは、在鄉の中將とかや。さだめて、田舍道場の新發意どのが、やつし腹して、才まぐるものか。文辭の京めかせると、故事を雅俗に摘み來れるとを、これやそれと闇のつぶての、當粹なかしら書して、おのが洒落社中にひけらかさむとす。されば吾妻に京傳あり、こゝに都のやほ傳がまはらぬ筆は、春日野の若紫のすりこ木ぢやまで。

秋　成

笠被り

かづき杖つきて、身を細め市町を通りて見れば、いとも賑しきが恐し。住吉、天王寺などもえ見ずて、河内、和泉、紀の路を越え、大和路の此處彼處見巡りて都に來り、難波の騒しきには似ねど、人目多ければとて、この冬はみ越路の雪に籠りて、春は東の國々見巡らむとて、急がぬ旅にも心せかれ、近江の海面を右に眺渡して、越の國へと志す。

春雨物語 終

詣づること

二貫文——一貫とは一千文にあたる今日の一圓の如し

義皇上の人——伏羲時代より以上なる義、人品の高きこと

笠かづき——

錢二貫文に代へて參らせむ。米ならば我もたねば、社の町へいきて、三斗に代へて參らすべしぞ。樊噲惡くなりて、こゝにも持ちたるなり、國巡すれば、いくらも價も聞きたり。米は一石、錢ならば七貫文には買ふべしと云ふ。この妨に詞なくて、商人もおのが商ふ物の外は、能くも知らずとて、迯げて去ぬ。あの商人めは盜人にもあらねど、我居ずば騙取るべし。必ず〳〵人に見すな。今夜の宿には、今一ひら增して與ふべしとて、百兩の中使ひしは僅かなれば、光きら〳〵と、此ひとつ屋の中には、目ざましかりけり。あしたも飯たき芋羮て、僧に供養申せ、一夜の價に金たまひしぞとて、かく里離れたる所は、義皇上の人と云ふに似たるべし。樊噲、南無大師高らかに唱ふれば、朝戸出の柴人、この家には鬼が入りたるか、恐しき聲聞ゆるとて、立寄りて見ては、僧はかかるぞ貴き。親の日がらなり。よく供養申せとて行きぬ。樊噲もをかしき宿して、別を告げて出づれば、又來たまへ、明石の浦の若布、椎茸、氷豆麩も、惣の社にいきて調へりとてたのもし。うなづく〳〵出でて、足疾ければ、野こえ山にそひて、今日の日暮に難波に出でたり。日本一の大湊にて、何處の浦舟もこゝに泊まると聞けば、我見知りたる者も有るよとて、宿とらず、野寺の門に轉寢して明かす。鳥の鳴くに驚きて、又笠

戎祭―正月十日今宮廣田神社なる蛭兒神の祭禮
鞍馬の初寅詣―正月初寅日に獅々頭山鞍馬寺の多門天に

取られむ物なければ、死にたる男の日がらなり。息子は米買に、惣の社と云ふ所まで行けば、入りて經讀みて手向したまふべしと云ふ。心得たりとて、先這上りて、圍爐のあたり暖なりとて、手足あぶりて居る。食ふ物なし。息子が歸るを待たせよとて、芋の鹽に煮たるを進む。これにて腹膨らさむとて、いくらをも盛りて與ふるを、甘し〱とて食ふほどに、鄰の人なりとて入來る。谷川のあなたの家よりなり。あとにつきて、商人一人、息子はいまだ歸られずや。この商人殿は何時もこのあたりへかへ事に來る人なり、この家に黄なる金といふ物を持ちたりと語りければ、それは珍らしき物なり、贋の金ありて、春は大坂の戎祭に、又京の鞍馬の初寅詣にも商ふ、それらは皆僞物なり。能く見て參らすべしとて、夕飯の箸收めて、たゞに來るはと云ふ。息子が何處に置きつる、入らぬものなりとて、人にもやらじと云ふほどに、息子米負ひねて來り、僧をとめたり、供養の物たきて參らせよ、米洗へ飯たかむとて、柴たきくゆらせ、かの黄なる金見せよとて、鄰へ來る商人殿が、待ち久しく居らるゝよ。それはこゝにとて、神祭る棚より取出でて見するに、包みたる紙の破れたるより、光きら〱してまばゆきは、手まさぐりせぬ故なり。されど、僧の眼つきの恐しさに、僞も得せず、これは眞の金なり。

ゐ判金を見ざれば珍しくて納めたる意

身すぼめて―身かくして

逢坂山―近江國滋賀郡にあり

くて手通らず。これをも忝しとて禮ごと申して、寺を下り湯の宿に歸りぬ。村雲待ちわびたらむとて、急ぎて參る。見て、さても〳〵、貴き法師ぶりなり。よき衣一重買ひて與へむとて、主人に計り、これも鼠染の少し廣きを裁縫はせて與ふ。身にかなひたらむには、却りて人目恐ろしからむといふ。身すぼめて修行し歩け、笈も見當らば、買ひて與へむと云ふに、否、何を入れて負歩かむ。佛こそ頼みつれ。大師遍照金剛と高らかに唱ふ。うち笑ひつゝ、さて、何時までかあらむとて、向の播磨路に舟求めて渡りて、飾磨の津に叔母あり。こゝに先とて、門に入る。門に入るより、叔母如何におはすと云へば、そなたの問來ぬ故に錢米乏し、みやげ物に多くくれよとて、立走り酒買に行く。こゝに又二十日ばかりありて、東の方つひに見ねば修行し歩かむとて、包物一背に負ひて笠うちかぶり、狹き物衣からげ纏ひて別を告ぐ。都の東へ越ゆる坂路に、逢坂山と云ふ里は、軒毎に繪を書きて賣る中に、鬼の鐘たゝいて念佛申すがあり。お僧のうつし繪なるぞとて笑ひて門出にぎはしくす。酒飲み食ひ飽きて、大道に出でなば、見や咎むる。山につきてぞ行かむとて行く。廣き野らなる所に日暮れたり。宿求めむにも家なし。ひとつ屋のやうにて、一夜貸したまへと云ふ。恐ろしき僧なれど、盜人にておはすとも、

春咲く花の外には云々―春季の花の外に黄な

て來れど、いと寒きほどは浴して、後に出でたつべしと云ふ。主人聞きて、大師の遍照金剛にも、交り難き人も有るよとて、日頃あらせる。樊噲と云ふ名こと〴〵し、又いづちに旅行くとも、この事觸れ流しに逢ひては、身盡きぬべし。僧にやつしてん。あの見ゆる山の峰に寺あるを、行きて住みたるさま見れば、老いかゞまりし翁法師の、南無大師の聲いとさゝやかに唱ふ。案内して、我は都方の者なり。母につきて四國巡しほどに、昨日舟を上るとて、母が踏み違ひて、海に落ちたる。あれよ〳〵といへば、舟子が云ふ。こゝは底深くして、鰐と云ふ魚の住みて、人を呑みくらふ、今は呑まれたるべし、力無しと云ふ。能く思へば、父は無し、兄は賢き人にて、云々の事にて母を失ひしとて國に歸らば、惡みて追出すべし。世の稼知らぬ子は、僧になりて大師の所々巡りはたし、又六十六國に行きめぐりなむと思ふなり。頭の髮煩はし、剃りてたべ。衣古きを一重たまへとて、村雲が分ちし金百兩の中を、一兩取出でて、ゐや〳〵しく參らせたれば、山法師春咲く花の外には、黄なる光見ねば、おし戴きて納め、受戒授けむといへば、否、たゞ大師遍照金剛の外には事煩はしとて、手合せて高らかに唱ふ。髮剃落されて、快く成りぬとて喜ぶ。破れたる鼠染の衣をとう出てうち着せたり。假名にはあれど、いと狹

などといひて—唯と言ひて

飾磨津—播磨國

て飛びかけり山を下る。夜はまだ暗きに、海邊に走下りぬ。波よする山濁りありやと問へば、あとこたへて、笘舟漕寄せたり。男二人出迎へて、今夜如何と云ふ。よき男めを召しかゝへて、稼よくしたり。喜の酒飲まむと云へば、をといひて、海に釣りたるとて、鯛や鰆や膾につくりて出す。樊噲と申すなり、これより兄弟とおほせよとて、盃二三續けて、かしら髪かき探り喜ぶ。善き世に逢ひしよとて、飲みくらふさま、盗人等も恐れて見る。さて御名いまだ承らずと云へば、村雲と云ふ。昔は相撲とりなり、喧嘩して罪輕けれど、追ひやらはれしかば、故郷にかゞまりをらむいと寒し、盗みしてあふれ歩かむとて、この三年こなたは、野山に立ち、海に浮びて、人の寶をうばふ事いと易ければ、東國の方へ出でず。この海の向、山陽道、筑紫、九國の間、また伊豫、土佐、讃岐に漕寄せて、公の手に當らず。こゝは伊豫の國なり、千兩の寶費すべき所にはあらねど、春になるまでは、熟田津の湯に入りて遊ばむ。酒よし、海の物よしとて、夜明けたれば、漕ぎよせぬ。二人の男どもは、こゝに一日二日あれ。見咎められぬために、向の國にて春を待て金與へむ。盗すな。商人にやつして、わが飾磨津へ至るを待てとて、物分ちて舟を漕出さす。樊噲には百兩を分與へたり。何處の人よと問へば、大師の御跡巡らむと

金一分―金一分は一兩の四分の一

山だち―山賊

丁ばかり下りて、水驛の戸敲き、酒買はむといふ。まだ宵のほどなれば、をと答へて戸明けたり。善き酒肴、何にても〳〵出せと急ぐ。夜あるきなれば、價先とらすぞとて、金一分とり出でて投與ふ。主人立走りて、鄰の家に鮪の煮たるありとて、酒溫める間に求來て、鰒のつくり膾、豆麩の汁物あつくして出す。よしとて二人飲み飽くほどに、夜更けぬ中にとて出で行く。主人、あの脊高き男は、大盜人なり。附きて來るは、見知らずといへども、手下にぞあらめとて、殘の酒肴物食飲みて寢たり。二人の山だちは、こゝよとて木むらの陰にたゝずみしほどに、馬の鈴ゆらぎて聞ゆ。ぬかるなといへば、手空しきはと云ひて、松の木の一丈餘なるを根拔ぎにして、振りたてゝ見する。よしよし、いさぎよしとて笑ふ。馬の足音こゝに來れば、ものをもいはで、松の木振りたてゝ、口とる男も馬もうち倒しぬ。老いたる足輕のこれはとて、刀拔くわざも知らぬにや、あわて迯げむとす。又追ひつきて、首細き奴かなとて、谷の深きと思ふ所へ投げ落したり。馬は遂に踏殺さぬとて、力足して腹強く踏めば、斷叫びて死にたるべし。荷の繩も解く手なしとて、ふつ〳〵とちぎりていざと云ふ。よし、よくせしとて、荷ほどきて見れば、思ふ如く黄金千兩の包あり。殘の物何せむ。寒しとて馬が泣がむよとて、うちきせ戲れ

おどろ髪—荊の如く亂れたるかみ

の大藏が呻く聲を聞きて、何者ぞと咎む。己は旅人なり。病してこゝに日頃ありしが、やゝ醒むるにも物食はねば足立たず、物食はせてたべと云ふ。燈火持ちたるあかりにて見たれば、鬼の如くにて衰へ、おどろ髪振り亂し、たゞ物食はせよと乞ふ人なりけりと、見とゞめて、思ふ心あれば、こ奴助くべしとて、腰の餌袋より飯とうでて與ふ。ただおし戴き、うゝと云ひつゝ喰ふ。くらひ盡して、さて云ふ。御恩忝し。いつにても報申さむと云ふ。旅人笑ひて、おのれはおもしろき男なり。落ちはふれて何をかする。盗して世を渡れ。わが下につきて稼げと云ふ。うち笑ひて、盗人殿、よくも出合ひたる。博奕うち誇りて、かく田舍へはさまよひ來るなり。博奕打つも盗も、罪は同じ。博奕は負け色に成りて、力わざもせさせず、盗人は筋一筋なるはとて喜ぶ。さて己は膽太き奴なり。伯岐の國の親兄殺して迯げし男めかと問ふ。それなり。人里に出で交りては安き心なし、御手につきて、野山に立稼がむ事、よし〳〵とて喜ぶ。今夜こゝ過ぐる旅人あり、馬に荷重く負せたり。足輕一人老いたる男つきたる外には障なし。馬士めも、共にうち殺して、荷の中に金ありと見たれば、よき稼ぞ、手初して見せよと云ふ。これはいと易き事なり。なほ力づけに、麓に下りて酒飲ませてたべ。我も寒かりつればとて、十

樊噲―漢の勇士なれば勇士の意に用ふ

熊掌駝蹄―熊の掌肉駝の蹄共に珍肴

雜式―雜色、無位の侍

疫やみして―病して

力益々盛に成りて、我女出せよとて踊狂ふ。奥の方に、唐人の宿りて遊ぶ所へ亂入りて、屏風も蹴倒して、唐人の前に膝高くかゝげて、どうと座したり。驚懼れて、樊噲排闥々々、免したまへ、我はたゞ何ごとも知らずとて詫ぶる。主人この客人過たせてはとて、手すりわび、御妻なる人は此處に來て、また何處へか迯げたりし。心靜めたまへ。いづちにか隱れむ。倶にさがし求めて參らせむ。酒飲みたまふよとて、熊掌駝蹄こそあらね、山の物海の物さゝげ出でてもてなすにぞ、これに心折れて飲みくらふ。唐人のつけし樊噲と云ふ名よしとて、今より後名とせむと喜ぶ。夜明けはなれたり。雜式いかめしき男、四五人つれ來りて、親兄を殺せし伯耆の國の大藏出せ、繩かけむと聞きて、如何にすべきにあらねば、心を据ゑて躍出で、我は親殺せし者にあらずとて、詫ぶるさまして、前の男の持ちたる棒奪ひとりて、誰彼なくうち散らすほどに、え捕へずして迯したり。こゝより何方へともあてどなくて、野に臥し山に隱れて歩くほどに、疫やみして、山陰の所にころび臥したり。狼のおらび聲して叫べば、ゆきゝの人懼しとて、見とゞむる人なし。やう〱あつき心地醒めがたになりしかど、この頃物食はねば、足立たずして、道に這出で人の來るを待つ。夜に入りてこゝ過ぐる人あり。月あかりにこ

はん

日ごろありて—數日ありて

五ひら—五枚、判金を枚を以て數ふ

たゞ、形を書き、ことわりて言ひ流したまへと申す。然らむとて、身の丈五尺七寸ばかり、面つき鬼々しく肥えふとり、物もよく云ふぞとまで、委しく書附けて、國々へ言流す。大藏は迯げのびて、今はとて遠く筑紫に渡り、博多の津に日ごろありて、博奕うつ中に入りて、何の幸ぞ、錢多く勝ちたり。こゝへも云々の大罪人捕へよと觸流さるゝ。このあふれ者等も、大藏なるべしとて、目くはせたるを見て、早くこゝを遁れて、錢は重しとて、木の下に投棄て、黃金五ひらあるを心だよりに、旅人にやつし、長崎の津にさまよひ來りしが、こゝに孀住のわびしくてあるに身を寄せて、博奕の修行しきりにて、勝ちほこり、財の主ぞとて、酒醉はせ明暮醉ひごととして、理なきが恐しさに、孀は迯出でて、丸山の揚屋がもとへ、縫事に雇はるゝを便に隱してよとこゝにあり。大藏醉ひさめて、何處にぞと呼べどあらず。さては、わがほしきまゝを惡みて、迯行きしよ。何時も丸山に某の所へとて行く物語したれば、其處にこそ居らめとて追ひ行きて、わが女を返せとて、荒く云罵る。主人も家の內の者等も、こゝに宿りし客人も、如何に如何に鬼の來るはとて騷立つ。障子みな蹴放ちて、此處彼處に亂入りて、まづ醉醒めたればとて、盃の散じたるを取りて、飮む〳〵、肴物、鉢や何や引寄せて食ふほどに、氣

山賤—いやしきもの

あふれにあふれて—大にたけりて

さうどきて—さわぎて

重く行はん—重罪に行

此時にやう〳〵追ひつきて、後よりしかと抱きとむるを、年寄の力だて、いたづら事ぞとて、片手にて前へ引廻はし、横ざまに投げたれば、道細きに溜池の氷解けぬ上に、轉落ちたり。兄は親をなんとするとて、助上らすほどに、遠く成りぬ。父も山賤なれば、心はたけくて、濡れし衣からげ上げてまた追ふ。谷渡る所にて友達が行合ひ、向立ちて強く捕へたり。これは力ある男なれば、おのれも腕の限して面をうち、ひるむと見て蹴たれば谷の底へ落ちころびぬ。水いと寒き頃なれば、心猛きにもえ這上らぬを、己れが博奕の負債責むるから償はんとて、親の錢なれば、もて出でたるぞとて、岸に立つ石の大いなるを、また蹴落したれば、這上るとする程の上に、轉掛りて、谷の深きに倶に落入りて、この度はえ上らず。兄と父とは追ひかねて、この間にやう〳〵來て、錢たゞ奪返さむとす。今はあふれにあふれて、親も兄も谷の流に蹴落して、韋駄天足して、いづち知らず迯げうせぬ。父兄も淵にともに沈みて、え上らず、凍え〳〵て死にたり。一里さうどきて追へど、手なみは見つ、目代へかけり行きて、しか〴〵のことと訴へたり。さても〳〵、悪き大罪人なり。追捕へて重く行はん。足疾き奴なれば、國の内に今はあらじとて、容貌繪に書きて觸れ流し、捕へむとす。里長申す。山里には繪書く者なし。

ば—午後五時すぎなば

男の—夫の

韋駄天走—韋駄天の如き疾走

らもたまへと乞ふ。お山に詣づとて、多くは何する。是ばかりをとて、櫃の蓋あけて摑み出で、亂れたるが百文に餘りぬべし。持行けと、櫃の蓋する内を見れば、からげし錢二十貫文あり。母に云ふ。春毎の遊して錢負けたり。友だちが償へとて、度々責むるに、その錢しばしたまへ。山かせぎして本の如く積むべし。あすよりは山に入るよとて、乞ふ面にくし。さても〳〵、心改めしかと思へば、博奕やめぬよ。目代殿より春毎に戒めたまふいたづら事なり。神も惡ませたまはむ。この錢は兄が入れおきたるぞ。ゆるさねば手は觸れじとて、櫃の鑰さゝむとす。例の心より母を執へて動かせず。聲立てな、父が晝寢覺むるぞとて、片手に蓋開きて、二十貫文摑出して、母は櫃のなかへ押込めて、錢肩に置きてゆらめき出づ。兄嫁見て、その錢何處へ持行きたまふよ。男の數へて入置きたるなり。父目覺したまへ。又いたづら心の起りしぞとて、おらび聲して云ふ。父驚きて、おのれ盜人め、赦さじとて、朸とりて庭に下り後より丁とうつ。うたれても骨かたければ、嘲笑ひて門に出づ。憎し〳〵とて追ひしけど、足は韋駄天走して迯行く。あれ捕へてよと、呼ばはり〳〵追ふ。兄も歸路に行合ひて、おのれこの錢盜まさむやとて、奪返さむとすれば、手に當らずして、蹴倒されたり。父足弱くて、兄に後れたれば、

心太―大膽

心おくれ―氣おくれすること

申かたぶか

と云ひてゆるさず。父聞きて、憎しとおぼしたまはば、命たまはらむやは、急ぎまうで來よと云ふ。兄嫁つきて上りたまへといへば、嘲笑ひて、父のおほせ道理なり、一人上れ。己が心の改まりたるを、神佛はよくしろしめすべしとて伴はず。大藏もとより心太なれば、一人上りて、御詫申して來らむとて出づる。はやく歸りて、何の事もなかりし。錢たまひしは、かの御前に奉りてよく拜みて、さて、その夜の簑笠の木陰にありしを取りかへりしと云ふ。母、なほ強き事して、また御罰蒙るな。引裂き捨てたまふとて、人は言ふよ。事無くて還したまふはとて、物食はせて喜ぶ。この後は心改まりて、兄がしりに立ちて、木こり柴荷ひ歸りて、親の心をとる程に、大力なれば兄とは刈り勝り、錢多に稼ふるを、母と嫁とは、ほめごとして喜ぶ。年も暮れぬ。いつの年よりは、大藏がかせぎするに、錢三十貫文を積みて、この年よしと、父も兄も心よく云ふに、母と嫁とはまことにとて、大藏に布子ひとへ新しく調じて著す。年かへりて、春の長閑なるに、またいつもの宿に遊びて、博奕はじめ負けたりしかば、錢乞はれて、流石に心おくれたれば、一夜二夜はえ行かず。母にいふ。春の御ゐやまひに山に上らむ、友だちが詣づるにといひて、錢乞ふ。早く歸れ。申かたぶかば恐ろしとて、藏に行く。後につきていく

午前八時

申の上刻—午後四時少しすぎ

笞杖—笞杖の刑罰

うまく寐れたり—熟眠したり

國に著きぬ。こゝに崎守のありて、事の由問ひ明らめ、さても世のいたづら者なり。憎しとて、面に吐唾きかけて、過書文與ふ。里の次々に、二人の男に圍まれて、七日とい午時に、故郷に來る。目代に引出され、罪重からねば、笞杖五十うたせて、里正召して渡さるゝ。一里聞きつけて、大藏がかへり申すぞとて、まづその家に走り行きて告ぐる。母と兄嫁はいかにしてとて、嬉しくも悲しくも、門立して待つほどに、送の人に、圍まれて來る。まづ迎へて、物食へ足洗へと、立ちさうどく。父は持佛に前に、膝たかく組みて、烟くゆらせ空に吹き居たり。兄は山に出づるとて、朸鎌とりて、生へ歸りしは不思議の事なり、問ふもうるさしとて。面をきとにらみて出行く。里の友達あつまり來て、腕こき止めよかし、神に裂かれぬこそあり難けれとて、喜云ひて皆かへる。いつもの臥所に入りて、翌の晝時までうまく寐ねたり。今はたゞ親に從はむとて、兄につきて山かせぎす。出雲へ渡り、隱岐の島より歸るは、罪ある者の大赦にあひしなりとて、大藏と云ふ名は呼ばで、大赦大赦と、あだ名したり。日數經て母に云ふ。權現の賜ひし命なり、心淨くして、今一度詣でんと云ふ。母危がりて、身をよく淸め心あらためてあらば、如來も神も同じ事にこそ。よく拜みて、御るやまひ申して、兄と連立ちて、お山には登れ

を行ふ人

をこ業—馬鹿わざ

目代—國司の任に赴かざる時代りて其事を司る人

辰のとき—

の贄つ物御臺に捧げて歩み來るが、見咎めて、いづこより來る、怪しき男なりと問ふ。伯耆の大山にのぼりて、神に戒められ、遠くこの幣の箱と倶にこゝに投げ棄て、神は歸らせたまふと言ふ。いと怪し、汝はをこ業する愚者なり。命たまはりしこそよろこべ。こゝは隱岐の國のたく火の權現の御社なりと聞きて、目口はだけて驚き、二親ある者なり、海を越させて里に歸らせたまへと言ふ。他國の者の故なくて來れば、掟ありて國所を正しく問ひて後に、送り歸さるゝなり。暫し居れ。これ奉りて後、わがもとに來れ。問糺して、目代に行きて申すは、今朝の御贄たてまつる、ふと祝詞言高く申す手に、物のはら〳〵とこぼれしに、御戸たてゝ歸ると夢見たり。驚きて、急ぎ御贄調じて御社に參るに、松蔭に見知らぬ者の立てり。何處の人と問ひしかば、伯耆の國の者なり、しかじかの事にて、こゝに知らず參りたりと申す。卽ちわが家に居らせて、訴へ奉るとぞ。目代聞きて そやつは神の御咎に、こゝまでいたされしなり。この國の者ならねば、罪すべきやうなしとて、その日の夕、潮待つ船に、向の出雲の國に送らす。八百石といふ船にて、小さくもあらぬを、風追ひていと早し。されど、よんべの神の廻にかけしよりは、遅しと云ふ。三十八里の渡を、辰のときに出でて、申の上剋と云ふに、向の出雲の

眉をひそめて―憂ありて澁面すること

木むら―樹木枝の繁茂したる所

おらべど―叫べども

神巫―神事

だ今出で行く。友達が中に老いて心あるは、無益の爭なり。渠必ず神に引裂き捨てられむと、眉ひそめて言へど、追ひ止めむとも更にせず。この大藏と云ふは、足もいと早し。まだ日高きに、御堂のあたりに行きて、見巡るほどに、日やゝ傾きて、物凄じく風吹きたち、檜原杉村さや〳〵と鳴りどよむ。暮れはてて、人なきにほこり、このあたり何事もなし、山の僧の驚かすにこそあれとて、雨晴れたれば、簑笠投げやり、火切り出して煙草のむ。いと暗うなりて、さらば、上の社にとて、木むらが中を、落葉踏分け踏みはらかして、登る〳〵、十八丁とぞ聞く。こゝに來て何のしるしをか置かむとて見巡るに、幣たいまつる箱の大きなるがあり。これかづきて下りなむとて、重きを輕げに、うちかづきてむとするに、この箱のゆらめき出でて、手足生ひ、大藏を安々と引提げ、空にかけり上る。こゝにて心よわり、免せよ助けよとおらべど、答なくて飛びかけり行くほどに、波の音のおどろ〳〵しきを聞き、いと悲しく、こゝにうちはめられやするとて、今は箱を強く執へて頼みたり。夜やう〳〵明けぬ。神は箱を地に投げ置きて歸りたり。眼を開きて見れば、海邊にて、こゝも神の社あり。松杉神々しきが中に、立たせたまへり。神巫ならめ、白髮交りたる頭に、烏帽子かゝぶり、淨衣なれたるに、手には今朝

白髪づくまで—老年まで
申の時—午后四時
あふれ者—無頼漢

なれど妖に交りて魅せられず、人を魅せず、白髪づくまで齢は經たり。明けはなれて、森陰の己が宿に歸る。女房童女は、神人のこゝに止まれとて誘ひ行く。この夜のことは、神人が百年を生延びて、日なみの手習したるに、書記したるがありき。墨黒くすくくしく、誰が見るとも、能く讀むべき。文字のふりは、大方に誤りたり。己も能く書出でたりと思ひしならめ。

○樊噲（卷端に什之上とあり）

昔今を知らず、伯耆の國大智大權現の御山は、恐しき神のすみて、夜はもとより、晝も申の時過ぎては、寺僧だに下るべきは下り、行ふべきは行ひ明すとなむ聞ゆ。麓の里に、夜毎若きあふれ者等集まり、酒のみ博奕打ちて、爭遊ぶ宿あり。今日は雨降りて、野山のかせぎゆるされ、午時より集來て、跡無き語言して樂しがる中に、腕だてしてにくき男あり。憎しとて、おのれは強き事いへど、お山に夜登りしるし置きて歸れ。さらずば、力ありとも心は臆したりとて、數多が中に辱かしむ。それ何事かは。今夜登りて、正しくしるし置きて歸らむとて、酒飲み物食ひ滿ちて、小雨なれば、簑笠かづきて、た

優曇華なり―稀有なりの意
親あるからは云々―孔子曰、父母在、不遠遊、遊有方
土器―杯

りて參らす。扇とりて、唐玉や〳〵と歌ふ。聲めゝしくはあれど、これもまた凄まじ。法師云ふ。おのれは扇かざすとも、尾太く長きには、誰かは袖引かむ。若きものよ、神の教に從ひて、疾く歸れ。山にも野にも盜人立ちて、容易くは通さず。こゝまで來ること優曇華なり。修驗の、東の使に下るに、衣の裾にとりつきて疾く歸れ。親あるからは、遠く遊ばぬと云ふ教は、東の人も知りたるべしとて、盃さす。己に肴物臭しとて、袋の中より大きなる蕪根を干固めしを取出でてしがむ面附、童顏してまた懼し。何れの御心も同じく聞きしらせたまへば、都には明日と志したれど下らじ。御しるべにつきて、文讀み歌學ばむ。こゆるぎの蜑が目ざす道は栞得たりとて喜ぶ。土器幾回か巡らせたれば、夜や明けむと申す。神人も醉ひたるにや、矛とり直して、物まをしの聲皺ぶる人なれば、をかしと聞きたる。山伏いざ暇賜はらむと、金剛杖とりて、若者に是に取りつけよと云ふ。神は扇とり直して、一目連がこゝに在りて空しからむやとて、若男を空に扇上ぐる。猿と兎は手打ちて笑ふ〳〵、木末に至りて待ちとりて、山伏は、飛び立つこの男を腋に挾みて、飛びかけり行く。法師は、あの男よ〳〵とて笑ふ。袋取りて背に負ひ、低き足駄履きて、ゆらめき立ちたるさま繪に見知りたり。神人と僧とは人なり。人

封食の地―封土
わろもの―下手者
道のたづき―道の便

きたる心地は無くて、這出でたり。四めの土器とらせて、飲めと仰す。これを飲まずばとて、多くは好まねど飲干す。宍むら、膾、いづれも好むを與へよ。汝は都に出でて物學ばむとや、事遲れたり。四五百年前にこそ、師といふ人はありたれ。亂れたる世には、文讀み物知る事行はれず。高き人も己が封食の地は掠奪はれて、乏しさの餘には、何の藝は己が家の傳ありと僞りて、職とするに、富豪の民も、また武士のあらくしきも、これに欺かれて、幣帛積みはへ習ふ事の愚かなる。すべて藝技は、よき人の暇に玩ぶ事にて、傳ありとは云はず。上手とわろものの差は必ずありて、親さかしき、子は習得ず。況いて文書き歌詠む事の、己が心より思得たらむに、如何で教のまゝならむや。初には師と事ふる、その道のたづきなり。たどり行くには、いかでわがさす枝折のほかに、習やあらむ。東人は心猛く夷心して、直きは愚かに、賢しげなるは佞曲りて、頼もしからずといへども、國に歸りて、隱れたらむ善き師求めて、心とせよ。よく思ひ得てこそ己がわざなれ。酒飲め、夜寒きにとぞ。祠の後より法師一人出でて、酒は戒破り易くとも又醒めやすし。今夜の間、一飲まむとて、神の左坐に足高く結びて居たり。面は圓く平たく、目鼻あざやかに、大きなる袋を携へたるを右に置きて、土器いざと云ふ。女房取

筑石―筑紫國
宍むら―肉
心も空にてある―失心驚怖の樣
正木づら―蔓草、蔦の類

神人申す。修驗は昨日筑石を出でて、山陽道經、都に在りしに、何某殿の御使して、ここを過ぐるに、一度御目給はらずやと申して、山づとの宍むら油に煮こらしたる、また出雲の松江の鱸二尾、これは從ひし輩にとらせて、今朝都に來りと、あざらけきを膾につくりてたいまつると、修驗者申す。都の何某殿の東の君に聞立ち、申合さるべきにて、御使に參るなり。事起りても、御あたりまでは騷がし奉らじ。神云ふ。この國は無益の湖水に狹められて、山の物、海の物も共に乏し。賜物急ぎ酒酌まむと仰す。童女立ちて、御湯たいまつりし竈のこぼれたるに、木の葉、小枝、松毬かき集めて薫らす。めらめらと焔の立昇る明に、物の隈なく見渡さるゝ恐ろしさに、笠うち被きねたるさまして、いかに成るべき命ぞと、心も空にてあるに、酒疾く煖めよと仰す。狙と兎が大いなる酒瓶さし荷ひて、歩苦しげなり。疾くと申せば、肩弱くてと、かしこまりぬ。童女事ども執行ふ。大なる土器七重ねて、御前に重たげに擎ぐ。白き狐の女房酌まゐる。童女は正木づらの襷掛けて、火たき物煖むる樣、まめやかなり。上の四を除きて、五め參らす。湛へさせて、甘し〳〵とて、重飲みて、修驗客人なりとて、賜へり。さてあの松が根枕して、空寝入したる若男、呼びてあへせよと、言へとぞ。召すと女房の呼ぶに、活

よんべ―昨夜

猿田彦―瓊瓊杵尊天降り給ひし時案内せし神

おらび聲―叫び聲

からぬ思して、立煩ふ。落葉小枝道を埋みて、淺沼渡るに似て、衣のすそぬれ〳〵と悲し。神の祠立たせます。軒こぼれ、御階崩れて、昇るべくもあらず、草高く苔むしたり。誰がよんべ宿りし跡なる、すこしかき拂ひたる處あり。枕はこゝにと定む。負ひし物下して、心落ちゐたれば、恐しさは勝りぬ。高き木群の茂く生ひたる隙より、きら〳〵しく星の光こそ見れ、月は宵の間にて露冷かなり。されど明日の天氣頼もしと獨言して、物うち敷き、眠に就かむとす。怪し、こゝに來る人あり。脊高く手に矛取りつ、道分したる猿田彦の神代さへ思ゆ。後につきて、修驗の柿染の衣肩に結上げて、金剛杖つき鳴らしたり。その後につきて、女房の白き小袖に赤き袴の裾糊こはげに、はら〳〵と踏みはらゝかして歩む。檜のつまでの扇かざして、いとなつかしげなる面を見れば、白き狐なり。その後に童女のふつゝかに見ゆる、これも狐なり。社の前にたち竝びて、矛とりし神人中臣の、おらび聲高らかに、夜まだ深からねど、物の答ふるやうにてすさまじ。神殿の戸荒らかに明放ちて、出づるを見れば、頭髮面におひ亂れて、目一つかゞやき、口は耳の根まで切れたるに、鼻は有りや無し、白き打衣のにぶ色に染みたるに、藤色の無紋の袴、これは今調じたるに似たり。羽扇を右手に持ちて、歩みたるが恐ろし。

し歩くよと語りしとぞ。これは我欺かれてまた人を欺くなり。筆人を刺す、また人に刺さるれども、相共に血を見ず。

○目一の神　四

阿嬬の人は夷なり、歌いかで詠まむと云ふよ。相摸の國小よろぎの浦人の、やさしく生ひたちて、萬に志深く思ひ渡り、如何で都に上りて、歌の道學びてむ。高き御あたりによりて、習ひ傳へたらむには、花の蔭の山がつよと、人の云ふばかりはとて、西をさす心頻りなり。鶯は田舍の谷の巣なりとも、だみたる聲は鳴かぬと聞くをとて、親に暇乞ふ。この頃は、文明、享祿の亂につきて、行きかひぢを切られ、便惡しゝと云ふなど、一度は諫めつれど、强ひて思入りたる道ぞとて從はず。母の親も、亂れたる世の人にて、鬼々しくこそなけれ、疾く行きて疾く歸れとて諫もせず、別悲しくもあらずて出立たす。關所數多の過書文とりて、所々の咎なく近江の國に入りて、明日は都にと思ふ心すゝみにや、宿取惑ひて、老曾の杜の木隱、今夜はこゝにと、松が根枕もとめに、深く入りて見れば、風に折れたりともなくて、大樹の朽倒れしあり。踏越えて、さすが安

丹波守となり同九年事に坐して貶せらる承和年中卒

文明—後土御門の御世

享祿—後奈良帝の御世

過書文—關所を過ぐる手形

槐位―三公の位
勃平―周勃陳平―漢高祖に仕へ輔佐の功ありし臣
詩三百篇―詩經三百篇
文屋の秋津―承和年中に撿非違使に補せられ

槐位者、吉備公之外無復與美。伏冀知其止、則足察其榮分。由是思之、吉公當妖僧立朝之貶、持大器而不傾殆、建勃平之勳矣。今也公以朝之寵遇道之光輝、與左相公有釁、終所貶黜、故雖無辜、亦不免不幸也。然生而得人望、死而耀神威。有德之餘烈、可見赫赫然于萬世矣哉。

言のこゞしき、ほしきまゝなる、かの海賊が文と知らる。また副書あり。前の對面に言ふべき事を、言に餘りて漏しつ。汝が名以一貫之と云ふ語を、取りたるものとは知らる。さらばつらぬきと讀むべけれ。之は助音、こゝには意ある事なし。之の字ゆきと讀む事、詩三百篇の所々にあれど、それは文の意につきて、訓むなり。汝歌よめど、文多く讀まねば、目いたくこそあれ。名は父の擇びて附くるためしなれば、汝知らずば、歌の名をおとすべし。歌暫し止めて、窓の燈火かゝげ、文讀めかし。ある博士の以貫と附けしは、つらぬきとこそ讀みためれ。可惜男よと、荒々しく憎さげに書きて、木頭殿と書附けたり。このこと學文の友にあひて、誰ならむと問へば、文屋の秋津なるべし。文讀むこと博かりしかど、放蕩亂行にして、遂に追ひはらはれしが、海賊となりて、あふれ歩くよ。それはた渠儂が天祿の助くるならめ。さてなむ罪にあたらずして、今まで縱横

木偶殿—貫之は木工權頭なれば也

やんらめでたーあなめでた

幸—罪也

致仕—官を辭して退く意

にあらず。我は詩つくり歌よまざれど、文讀む事を好みて、人に誇り憎まれ、遂に酒の亂に罪蒙り、追ひやらはれし後は、海に浮びわたらひす。人の財をわが財とし、酒飲み肉食ひ、かくてあらば百年の壽は保つべし。歌よみて、道とのゝしる輩ならねば、物問へ。猶云はむ。咽渇く、酒ふるまへと云ふ。さかな物とり添へて與ふ。飽くまでくらひ飲み、今は興盡きたり。木偶殿よ、暇申さむとて、己が舟に飛び移り、舷叩いて、やんらめでたと、聲たけく歌ふ。貫之の舟にもそろ〳〵と、舟子等が歌ひつるゝ。海賊が舟は、はやいつか漕ぎ隱れて、後しら浪とぞ成りにけェり。都に歸りて後にも、誰とも知らぬ者の文もて來て、投げ入れて歸りぬ。披見れば、菅相公の論と云ふ事、手は鬼々しくて淸からねど、理正しげに論じたり。讀むに、

懿哉菅公、生而得人望、死而耀神威、自古惟一人已。曾聞、君子無幸而有不幸、小人有幸而有不幸。如公則有德而非幸。然亦不幸貶于外藩。其所以不冤者、蓋遇君臣刻賊之天運、而不能致仕以令其終、又罵辱藤菅根、而結其冤、不擧三淸公、人以爲私。且不納其革命之諫、抑非求之乎。淸公之言云、明季辛酉運當變革、二月建卯將動干戈。遭凶衝禍、雖未知誰是、引弩射市、當中薄命。自翰林超昇

—三善清行の作

翰林の士—文筆の士

坎壈の府—不遇の士のなる所

凍餒の舍—凍ゑ餓ゆるものゝ舍

を踏み違へじとて、頑愚の言もあるなり。第一條に、齊明天皇西征の時、吉備の國を過ぎたまふに、人烟いと賑はしき里あり。誰住みて如何なる所ぞと、御問ありしかば、里の長答へりし。近き頃、年に月に人多く住みつきて、今は幾萬人か住みたる、もし軍民を召されなば、二萬の兵士は奉るべしといふ。さば、この後里の名を二萬の里と申せとありしに、延喜の頃には、國の守が數へしかば、幾人も出すべくもあらぬものに數へしと云ふを、榮枯地を易ふると云ふも思はず、國の爲に患へしは愚なり。何處に棲りて榮ゆらむ、是は徒事なり。人民は利益損益につきて移る事、蜂の巣を組みかへるに同じ。又學問の事は大臣公卿の勸にて、翰林の士高しとも、進むべきに定まらず。これこの國の俗習なり。學校に集まる童形の君に讀書奉り、文の心を解く道開き申すのみなるも、思はずして朝政の時々に改まりて、この時學寮は坎壈の府、凍餒の舍とうち歎くも、心ゆかざりしなり。又播磨の印南野の魚住の泊は、行基がこの間違し、舟泊の便よからずとて造りしなり。その後、度々風波につき崩されしは、天造に違へるものから、終の世に益あるまじ。惻隱の心あるもむなしきものから、朝廷には見放ちて、置かせ給ひしなるべし。これら聖教にあらぬ老婆心にてこそあれ。かく至らぬ事どもは、鹽梅の臣の任

六いはひ歌
濱成―藤原濱成
大寶の令―大寶年間に制定せられし法令
五卷―古今集に戀部五卷あれば也
かの國―支那國
四人の筆―古今集撰者四人 紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑
封事十二條

られし後は、人の道に良媒なきは、犬猫の挑み爭ふものに、必ず亂るまじく事立てられしを、歌よしとて敎に違へるを集め、人の目に心を寄せては忍びあひ、見咎められたりとて出でゆく別の袖の泪川、聞きにくきをまで、えらびて奉りしは、政令に違ふなり。さらば罪は同じき者ぞ。戀の部とて五卷まで多かるは、いたづら事の愼なきなり。淫奔の事、神代の昔は、兄妹相思ひても情のまことぞとて、その罪にあらざりし。人の代となりて、儒者盛に成んたりしかば、夫婦別あり、また他姓を娶らずと云ふは、外國の賢しきをまで、選び給ひしならはせなり。さらば淸涼後涼の造立はありしなり。かの國にても、初は同じ姓ならで、相近寄るべからぬを、國榮えて、他姓とも交篤くして境を廣め、人多く產むべき便の爲なりしかば、これを必ず善き事とはしたるなり。歌賢しくよむとも、選びし四人の筆誤りしは、學文なくて違へるなり。菅相公ひとり惡ませおはせしかど、やがて外藩に貶され給ひしかば、御咎なかりしなるべし。延喜を聖代といふも、阿諛の言ぞ。君も御眼暗くて、博覽の忠臣をば、黜けさせたまふ世なり。三善の淸行こそ、聊かも違へずして、仕ふまつるをば、參議式部卿にて停められし。選擧の道暗し。意見封事十二條は、文もよく事共も聞くべかりけるを、たゞ〳〵學者は古轍

には喜怒哀樂につきて、聞くに喜ぶべく悲しむべきがあり。故に聲に長短緩急ありて、歌ふに調整はぬがあり。草木と枝葉の風に音するも、疾風ならば、誰かはあはれと聞くべき。さて柯葉とのみにては理足らず。そのかみの人、わづかに釋名に就きて字を解く。人の愚なるにもあらで、かく心を誤りしが世の姿なり。同じ代にも、許慎が說文には、歌は詠なりと云ひしは、舜典に歌は永言なりと有るを、據所として云ひしはよし。字を解くさへぞ、道の敎のさま〴〵なるを思へ。主が序に、やまと歌はひとの心を種として、萬の言の葉となれると云ひしは、文めきたれど明かに誤りつ。言、語、詞、辭は、こと〴〵くことと讀むより他無し。言の葉、ことばとも言ひし例なし。釋名によりて、題の意を助くるとも、古言に違ふ罪、國ぶりの歌にも文にも、見許すまじきを、大臣參議の人々、己が任にあづからねば、他目つかひてありしなるべし。又歌に六義ありと云ふは、唐土にても僞妄の說ぞ。三義三體と言はゞ許すべし。それも數の定あるべきにあらず。喜怒哀樂の情の數多に別れては幾らならむ、數ふるも徒事なり。濱成が和歌式に云ふは、十體なりと云ふも、同じ淺はかごとなり。汝は歌よく詠めど、古言の心も知らぬから、帝さへも誤らせ奉るよ。又大寶の令に、唐土の定に習ひて、法を立て

釋名—書名

舜典—書經にあり

主が序—紀貫之の古今和歌集の序

六義—一そへ歌、二かぞへ歌、三なずらへ歌、四たとへ歌、五ただごと歌

あふるゝ―横行する
國ぶりの歌―和歌
○―缺字
續萬葉集―古今和歌集の別名
柯―えだ

に出でたまひて、なぞこの男、我に物云はむといふやと宣へば、これはいたづら事なり。然れども波の上隔てゝは、聲を風のとりてかひなし。許させよとて、翅ある如くに吾船に飛乘る。見ればいとむさ〳〵しき男の、腰に廣刄の劒帶びて、恐ろしげなる眼つきしたり。朝臣けしきよくて、八重の汐路を凌ぎて、こゝまで來るは、何ごとと問はせたまへば、帶びたる劒取り棄てゝ、己が舟に抛入れたり。さて申すは、海賊なりとて、仇すべき事おぼし知らせたまはねば、うちゆるびて、物答へて聞かせよ。君が國に五歳の間參らむと思ひしかど、筑紫、九國、山陽道の國に守等が怠を見聞きて、その遠近し歩きて、今日に成りたるなり。海賊は心幼きものにて、君が國能く守らすのみならず、淺ましく貧しき山國にて、あふるゝに便なければ、餘所にして怠りたるにぞ、都の御館へ參るべけれど、こと〴〵しく、且人に見知られたれば、世狹くて、とにかくに紛歩くなり。さて問參らすは、延喜五年に勅を奉りて、國ぶりの歌えらびて奉りし中に、君こそ長○たれと聞く。續萬葉集の題號は、昔の誰が集めしとも知らぬに次がれしなるべし。是はよし。題の心を聞けば、萬は多數の義とは是もよし。葉は後漢の劉熙が釋名に、歌は柯なり、いふ意は人の聲あるや草木の柯葉有るが如しとぞ。是はいかにぞや。人の聲

紀の朝臣貫之—紀長谷雄の子古今集の撰者天慶九年卒
船は風に云云—船順風を得ずしての義
守夫婦は云云—貫之夫婦は赴任中京都にて愛子の死せる事をのみ口にせる義
すは—さはこそ

紀の朝臣貫之、土佐守にて五年の任果てゝ、承和某の年十二月某の日、都にまう上らせ給ふ。國人の親しき限は、名殘惜みて悲しがる。民も昔よりかゝる守の、あらせ給ふを聞かずとて、父母の別に泣く子なして、慕ひ歎く。出舟のほども人々こゝかしこ追ひ來て、酒よきもの捧げ來て、歌詠み交すべくする人もあり。船は風に順はずして、思の外に日を經るほどに、海賊恨ありて追ひ來と云ふ。安き心こそなけれ、たゞ〱平に都へと朝夕海の神に幣散して、ねぎたいまつる。舟の中の人々擧りて、海の底を拜みす。和泉の國までと船長が云ふに、下りし所々は眺め捨てゝ、さる國の名覺えず、今はたゞ和泉の國とのみ唱ふるなりけり。守夫婦は、國にて失ひしいとし子の無きをのみ言ひつゝ、都に心は指せれど、跡にも忘られぬ事のあるぞ悲しき。こゝ和泉の國と船長が聞え知らすにぞ、舟の人皆生き出でて、まづ落居たり。嬉しき事限りなし。こゝに釣舟かと覺しき木葉のやうなるが散り來て、わが船に漕ぎよせ、苫上げて出づる男聲をかけ、前の土佐守殿の御舟に、對面たまはるべきことありとて、追來ると、聲荒らかにいふ。何事ぞといへば、國を出でさせしより、追來れど、風波の荒きにえ追はずして、今日なむ對面たまはるべしと云ふ。すは、然ればこそ海賊の追來るよとて、騷立つ。貫之舟屋形の上

世を捨てし云々―後撰集に世をそむくと、又遍昭集には山ぶしのとあり
時の帝―光孝天皇
才―學問
内に參りし事―參內せしこと

世を捨てし苔の衣はたゞひとへかさねて薄しいざ二人寝む

かく云ひて、其處を早く立ち去りぬ。小町さればこそとて、をかしく思ひ、五條の太后の宮に見せ奉る。先帝の御かたみの者よとて、捜し求めさする時なり。如何で止めざると、うち呻かせたまひぬとぞ。

内つ國の此處彼處に修行し歩けば、遂にあらはされて、内にしき〳〵參りたりき。また時の帝の才有る者ぞとて、頻りになし昇し、僧正の位に進めたまふ。遍昭と名は改めたりき。これも修行の徳にはあらで、冥福の人なるべし。男子二人、兄の弘延は公に仕へて賢き人なりけり。弟は、法師の子は法師になれとて、髪おろさせ、素性と申せしはこの人なり。歌の譽、父に次ぎて聞えたりしかど、時々よからぬ世心のありしは、心より發せし道心にあらざればなり。僧正、花山と云ふ所に寺作りて、行よく終らせたまへりとぞ。佛の道こそいと〳〵あやしけれ。世を捨てし初の心に似ずして、色よき衣、唐錦の袈裟纏ひ、車轟かせ、内に參りし事、かにかくに人のよしあしは、稟け得たるおのがさち〳〵と、云ふ人ありき、御みづからも然か思されぬらむかし。

○海賊　三

諒闇—天皇崩御の御喪
嘉祥—仁明帝の御字

小町—小野小町
石の上云々—石の上は後撰集にいはの上とあり、苔の衣は桑門の士のきる衣也

逸勢等、嵯峨の上皇の諒闇の御謹の時に乘じて、謀反ある事を、阿保親王の漏れ聞きて、朝廷にあらはしたまへば、官兵すなはち至りて搦めとる。太后これをも逸勢が氏の汚をなすとて、重く刑せよと、ひとりごたせたまひしとぞ。太子はこの反逆の主に名づけられて僧となり、名を恒寂と申したまへるなり。嗟乎、受禪廢立の惡しき例は、唐土の文に見えて、これにならはせたまふよとて、憎む人多かりけり。帝は嘉祥三年に崩御ありて、御陵墓を紀伊の郡深草山につきて、葬り奉るなべに、深草の帝とは申し奉るなりけり。御葬の夜より宗貞行方しらず失せぬ。これは太后、大臣の御憎を恐れてなり。殉死といふ事、今は停めさせしかど、この人生きてあるまじきに、人はいひあへりける。衣だに著ず、簑笠に身をやつして、此處彼處行ひありきける。淸水寺に籠りて、ある夜小町も今夜局して念じ明すに、鄰の方に經讀む聲凡ならざりし、もしや宗貞ならむかとて、歌よみて持たせてやる。

石の上に旅寢はすれば肌さむし苔のころもを我に貸さなむ

宗貞の法師、この紙の裏に墨壺の墨して書きてやるは、手を見れば小町なりけりと知りてなり。

黄耆、人蔘云々―薬品

桃の子食ひつみしを云―彌子瑕、食桃而甘、不盡而奉君、君曰愛我哉

梅の宮―山城國葛野郡梅津村にあり

りたるに同じ。我呪術は黄耆、人蔘、附子、大黄の功有るを選びて、因より症をしたひて病探りて、病癒えしむるに似たり。車の二輪相並びて、道は行かむと申す。祿たまひて、うなづかせたまへりき。帝、宗貞が色好みてあざれあるくを、あらはさむとて、後涼殿のはしの間の簾のもとに、衣かづきて忍びやかにあらすを、宗貞たばかりたまふとも知らで、御袖ひかへたれば御答なし。歌よみて忍びに、

山吹のはないろ衣ぬしや誰問へどこたへず口なしにして

と申す。帝衣ぬぎて見合ひたまへり。驚き惑ひて迯ぐるを、たゞ參れと、召したまひて御氣色よし。唐土に桃の子食ひつみしを、これめせ、味いとよしとて奉りしを、忠誠の者に召しまつはせし例になむ。山吹を口なし色とは、この歌をぞはじめなりける。淳和の后の宮、今太后にてましませり。橘の清友の大臣の御女なり。圓提寺の僧奏問す。橘の氏の神をわが寺に祭るべしと、先帝の夢の御告ありしとぞ。帝さる事を許さまくおほすを、太后の宮きこしめして、外戚の家なり、國家の大祭にあづからしむるは、却りて非禮なりとて、許させたまはざりしなり。葛野川のべ今の梅の宮の祭はこれなり。かく男さびたまへば、宗貞が性の善からぬを、密かに惡ませたまひしとぞ。伴の健宗、橘の

豊の明—豊明節會
浄見原の天皇—天武帝

齋の宮—伊勢大神また加茂の社にいつき仕ふる女宮

金村—笠朝臣金村、萬葉歌人

素難—醫書

ず、たゞ御遊につきし事どもを、然せし例など、御心を取りて申す。色好む男にて、花花しき事をなむ好みけるが、年毎の豊の明の舞姫の數をすゝめて加へさせし。これは浄見原の天皇の、吉野に世を避けたまひしが、御國しらすべき性にて、天女五人天下りて、舞妓を慰め奉りし例なれば、五人の少女こそ古き例なれと申す。同じく色好ませしかば、今年の冬を初に宣旨下りて、花咲かせたまへりけり。大臣納言の人々の御女達、つくりみがかせて、御目うつらばやと、し構へたりき。眺め捨てさせたまふは如何にせむ、伊勢加茂の齋の宮の例に、老い行くまで、こめられはてたまひき。國ぶりの歌、この御代より又榮え出でて、宗貞につぎて、文屋康秀、大友黒主、喜撰などいふ上手出でて、又女がたにも伊勢、小町、古ならぬ姿をよみて、名を後にも傳へたりき。帝五八の御賀に、興福寺の僧がよみて奉りしを、見そなはして、長歌はいま僧徒に殘りしよと、仰ありしとぞ。今見ればよくもあらぬを、そのかみは珍しければにや。人丸、赤人、憶良、金村、家持卿の手ぶりは、知らぬものにぞ見えける。或時空海に問はせたまへる、欽明、推古の御時より、經典しきしまに渡りても、なほ一切の御經々は數足らぬとか。汝が眞言の呪は如何と。空海答へ申さく、經典は、たとへば醫士の素難の旨を學び、運氣六經を悟

中納言清麿—中納言和氣清麿

今上—淳和帝

良峰の宗貞—號良少將安世の子僧正遍昭

ひて、如來の大智の網に込められたまふよと、下なげきする人もありけり。中納言清麿の高雄山の神願寺は、妖僧道鏡きほひて、宇佐の神勅をためさするに、清麿明らさまに奏せしかば、怒りて一度は因幡の員外の介に貶せしを、猶飽きたらずして、庶人にくだし大隅の國に謫せしむ。忠誠の志よきに、稱德崩御の後に召し還されしかど、やゝ老にいたりて、中納言に擧げられたり。本國の備前に下りて、水害を除き、民を安きに置かれし功勞もありしよとて、いとほしと申さぬ人もなかりし。神德の報恩の寺なりとて、後に神護寺と改めしこと、命祿の薄きを如何にせむ。今上の皇太子正良、御位受けさせたまひて、淳和の帝ほどなく下り居させて、例なき上皇御二方と申す事、唐國にも聞かぬためしなりと申す。天皇仁明と尊崇し奉りて、紀元を承和と改めたまふ。佛道はなほ盛んなること恠むべし。儒教も相並びて、行はるゝに似たれど、車の片輪の聊か缺け損ひて、足遲き如し。さて政令は唐朝のさかんなるを羨みたまひ、終の御心は驕に伏したまひたりき。良峰の宗貞といふ六位の藏人なるが、才學あるものにて、帝の御心にかなひ、近う召しまつはさせ、時々、文よめ歌よめと、御憐みのたうぶしかば、何時となく朝政も密かに問ひきゝたまへるとぞ。宗貞賢しくて、政は片端ばかりも、御答へ申さ

岩總―手力男神の別名

賈誼―漢雒陽の人

五筆和上―弘法大師、左右の手足口に筆を挾みて書きければ五筆といふ

賈誼が三代の古をしのびて、政改めさせよと申せしを、賢臣等いさめ奉りしは誠なりけりと、漢書の某の巻探り出でて、今を仰ぎ奉りしとなむ。上皇おり居の宮に、若う花やぎたまへば、たゞ參るものに、唐土の書よめとすゝめたまふ。草隸よく學び得させたまひて、おほく海舶の使に求めえらばせし中に、空海を召して、これ見よ、王羲之が眞の筆なりと、示したまへば、下して見奉り、これは空海が彼處に在る中に、手習ひし跡なり。これ見たまへとて、紙の裏を少しそぎて見せ奉りしに、海が筆と記し置きたるに、御言なくて、嫉くやおぼしなりにけむ。空海は手よく書きて、五筆和上と云ひしは、書體さま〴〵に書き分ちけむかし。皇太弟受禪したまひて、後に淳和天皇と申し奉りしはこの御代なり。元を天長と改めたまふ。奈良の上皇は、この秋七月に崩隱れさせたまへば、これを平城天皇と、尊號贈り奉りたまへりき。嵯峨の上皇の識度々改まりては、法令事繁く、儒教專らに取用ゐさせたまへり。されど、佛法は專ら衰へずして、君の上にこの御佛のたゝせ給へるよとて、堂塔年なみに建ちならび、博文有驗の僧等、司人に同じく、朝には立たねど、政をさへ時々奏したれば、おのづからかの教に引導せられ給ふことも、少からずぞありける。如何なれば、佛法の冥福をかうぶらせたま

木にもあらず—木にもあらず草にもあらぬ竹のよのはしにも我はなりぬべらなり

毛を吹き疵—直き木に曲れる枝も有る物を毛をふき疵をいふがわりなき、高津内親王之詠

茅茨剪らず—節約なる表象

豐岩眞戸櫛

帝の嵯峨の(破損不明)ければ、御代おし知らせたまひしなり。萬機を試みたまふに、唐土の賢き書どもを取りえらびて、行はせたまへば、御世はたゞ國土も改りたるやうになむ人申す。皇女の御すさびにさへ、木にもあらず、草にもあらぬ竹のよの、または毛を吹き疵をなど、口附こは〴〵しくて、國ぶりの歌よむ人は、おのづから口閉ぢてぞありき。上皇僅に四年にて、下り居させたまひしを、下なげきする人も少からず。今一度取り返さまほしく、おほみおぼえぬらむと、額集めて、申し合へりとぞ。嵯峨の帝もおほしやらせて、御弟の大伴の皇子を太子に定めたまひて、上皇を慰めたまへるは、これぞ貴き歡慮ぞと、人申す。やがて御位下り居させて、嵯峨野と云ふ山陰に、茅茨剪らずのためしして、遷らせたまへりき。是は先帝の平城の結構を、この邦にては例なし、瑞籬、石垣の宮居にかへさせしなるべし。されど長岡は餘に狹くて、王臣だち家を奈良に止めて、通ひて仕うまつるもあり、民はまいてなりしかば、これは誤りつとおぼして、今の平安の宮を作らせて、遷らせたまふなり。土を均して、百敷ついたて、豐岩眞戸、櫛岩窓の神々に、ねぎごと誓ひて遷らせしかど、人の心は花にのみ、移り榮ゆるものなれば、いつしか王臣の家、殿堂の大さ、奈良の古きに復させたまへば、老いたる物知は、

兵仗—逆亂
上皇—平城帝
貞觀—清和帝の御世
葱嶺—印度の山名

知らず侍る。聖代に生れあひて、誰かは兵仗を思ふべきと申す。さらばとて、すなはち官兵を遣はされて、仲成を捕へ、首刎ねさせ、奈良坂に梟けさせ、藥子は家におろさせて籠めをらす。又御子の高丘親王は、今の帝の上皇の御心とりて、儲の君と定めたまひしを、停めさせて、僧になれと宣旨あれば、親王頭を薙ぎ、改名して眞如と申し奉る。三論を道詮に學び、眞言の密旨を空海に習ひたまひ、猶奥あらばやとて、貞觀三年唐土に至り、行々葱嶺を越え、羅越國にいたり、御心ゆくまで問ひ學びて、歸朝ありしとぞ。この皇太子の御代知らせたまはばやと、密かには上下申し合へりきとや。藥子おのれが罪は悔まずして、怨氣焔なし、遂に刄に臥して死にぬ。この血の、帳かたびらに飛び走りそゝぎて、ぬれ〳〵と乾かず、猛き若者は弓に射れどなびかず。劍に打てば刄缺けこぼれて、たゞ恐しさのみ增りしとなむ。上皇には固く知し召さゞることなれど、たゞ誤りつとて、御みづからおぼし立ちて、御髪下し、御齢五十二といふまで、世におはせしとなむ、史に記したりける。

○天津處女 二

今の帝―嵯峨帝

北に聞えて―京都にきこえて

からもていさつとなむ語り傳へたる。兄の皇子如何にせむ、御位に昇らせしを、聖王と申し奉り、御名は世々にあり難く申し傳へたりき。君僅に四年にて下り居させたまへば、臣も民も望失ひて、悲しと申すとぞ。今の帝は唐の書讀みて、彼處の簒ひ代る惡しきを識らさせしよと申す。あなかまと制し給ふ。否、此處に仕う奉る臣達は、今一度平安の宮を都として、御位に還らせむことをこそ、ねぎ奉ると申す。太弟に心通はす奈良坂の人も有りて、聞きもらし、あなとぞ、さゞめきたりし。仲成これにつきて、君の下居は暫の御惱なりと申して、御卽位またあらせたまへ、今上の御心に違はゞ、われ兵衛督なり、奈良山、泉川に軍だちして、稜威示さむとぞ申す。また市町の童が歌ふに、

　花はみなみにまづ咲くものを雪の北窓こころ寒しも

と歌ふが、北に聞えて、平城の近臣を召して、推し問はせたまへば、これは藥子、仲成等が勸め參らすことなり。この春の正月の朔に、例の御藥參らすに、屠蘇、白散をのみ進めて、度嶂散奉らず。いかにと問はせしかば、君峭壁をこえたゞせまじきに、奈良坂平なれど、青垣山の外のへの山路なり。この御墻の内だに、こと〴〵は貢物奉らぬ、悲し悲しとて、淚を袖に包み漏らしたり。この時御前に侍りて、聞きし外は、正しきこと

大寺—奈良の東大寺
今の都—平安京
西の國—印度
御烏帽子傾けて云々—主上の沈思の御様
彼處に都あらせし帝—仁徳帝
御父—應神天皇
弟御子—菟道稚郎子

故郷ともあらぬたゞずまひなり。東大寺の毘盧舍那佛拜まむとて、まづ出でさせたまふ。見上げさせたまひて、思ふに過ぎし御容なり。西の國のはてに生れて、この陸奥の黄金花に、光添へさせ給ふとぞ、いぶかしと仰せたまへば、近く參りたる法師が申す。これは華嚴と申す御經に說かせし御容なり。如來の變化、天にあらせれば虚空にはせだかり、又芥子の中にも所えさするよしに申したり。肖像はこゝにも渡せし。御足の裏に開元の年號あるが、三度の御うつし姿にて、五尺に過ぎさせしを、眞とは賴み奉ると申す。露御答なくて、たゞたがはせて、物言ひたまはず、この本性こそ貴けれ。藥子、仲成等、悪しく撓めむとするには、御烏帽子傾けてのみ御座すがいとほしき。御臺參らす。よくきこしめして、難波の蜑が貢ぐは、此處も近きかとぞ。藥子申す。彼處に都あらせし帝は、御父の弟御子を立てて、日嗣とは定めたまひしかば、神去りたまひては、兄皇子等も、たゞ宇治に仕う奉りたまふを、菟道の皇子は、われ兄に踰へて登極せむ事、聖の道にあらずとて、讓りたまへど、否、旣に日嗣の皇子とは君を定めたまひしぞとて、三年まで相讓りて、御座空しかりしかば、弟皇子は遂に刄に伏して、世を去らせしとぞ。難波の蜑等みつぐ眞魚は、遠近さまよひて、道に腐れたりしとぞ。蜑なれや、おのが物

朝日山—山城國にあり、櫻の名所

小島が崎—山城國宇治にあり、橘は冠辭

二おもてに—奈良山の兒手柏のふたおもてかにもかくにもねじけ人かも

北に—山城の平安に

朝日山にほへる空はきのふにてころもでさむし宇治の川波

と申せば、河風は涼しくこそ吹けとてうち笑ませたまふ。左中將藤原の惟成詠む。

君が今日朝川わたる淀瀬なく我はつかへむ世をうぢならで

兵部大輔橘の三繼詠む。

妹に似る花とし云へばとく來ても見てましものを岸の山振

それは橘の小島が崎ならずや。飛鳥の故鄕の草香部の太子の宮居ありし處よと仰せたまふ。猶多かりしかど忘れたり。奈良坂にて御晩饗まゐる。兒手がしはいづれと問はせたまふ。それは二おもてにて、心ねぢけたる人に例へし忌事なり。御供仕うまつる臣達、いかで二おもならむと申す。よしと宣ひて、古宮に夜に入りて入らせたまひぬ。あした御簾かゝげさせて見はるかさせたまへり。東は春日、高圓、三輪山、南は鷹むら山を限り、西は葛城や高間の山、生駒、二神の峰々、青墻なせり。うべも開初より宮居こゝと定めたまひしを、先帝のいかさまにおぼして、北に遷らせたまひしと、獨言たせたまふ。北は元明、元正、聖武の御墓立ち並びたまひたりと申せば、杳かにふし拜みしたまへり。大寺の甍高く層塔數を數へさせたまふ。城市の家どもも、まだ今の都に遷り果てねば、

高祖—漢太祖高皇帝
呂氏の亂—漢呂太后の亂
今盛なり—青丹吉寧樂の都は咲く花の匂ふが如く今盛也
この板橋—宇治の板橋

にすればか長かりしとぞ。太弟賢しくましませば、御心を計りて、答へたまはく、長しといへども周は七十年にて漸く衰ふ。漢家もまた高祖の骨いまだ冷えぬに、呂氏の亂起る、謹の怠にもあらずと答へ給ふ。さらば天の時か。天とは日々に照らしませる皇祖の御國なり。儒士等、天とは則あめを指すかと聞けば、命祿なりと云ふ。また數の限にも云へり。これは多端なり。佛氏は天帝も我に冠傾けて、聽かせたまふと申す。あな煩はしと、太弟御答なくてまかむで給へり。あした御國讓の宣旨下る。故郷となりし平城に下り居させたまはむとぞ。元明より先帝に至るまで、七代の宮所なりしかば、昔は宮殿のありしさまを、咲く花の匂ふが如く、今盛なりと、詠みしをおほし出でたまひ、其處にと定めたまへりき。日を擇びて今日出でさせたまへり。宇治に至りて、鸞輿しばし止めさせて、河面を眺めて御詠ませたまへる。

　武士よこの板橋のたひらけく通ひてつかへよろづ代までに

これを歌人等七度歌ひ上ぐる。網代の波は今日見ねど、千代々々と鳴く鳥は、河洲に群れ居るをとて、また御土器めす。藥子例に擎げ參らす。處に附けて詠めと、仰せたうぶ。藥子まづ詠む。

うづまさにつらはへ—堆づ高く盛り連れ
丁—課役に服する男
大殿ごもらせ—御寝につかせられ
日出でて云云—治世の相

弓矢取りしばり、御佩刀きらびやかに帶びたまへり。百取の机に幣帛うづまさにつらはへ、賢樹の枝に色こきまぜてとり掛けたる、神代の事も思はるゝなりけり。雅樂寮の左右の人々立ち竝みて、三くさの笛鼓の音面白しと、心なき丁さへ耳傾けたりけり。怪し、後の山より黑き雲霧立ち昇りて、雨降らねど、年の夜の暗きに等し。急ぎ鳳輦にて我も我もと、數多の丁等のみならず、取りつぎて左右の大中將列を亂して、備へたり。還御高らかに申せば、大伴の氏人開門す。御常にあらじとて、藥師等急ぎ參りて、御藥調じ奉るに、かねておぼす御國讓のさがにやとおぼしのどめて、更に御惱なし。御土器參る。栗栖野の流の小鮠に、わらびの岡の蕨とりてはへて、膾や何や進めたいまつる。御氣色よくてぞ、夜に月出で時鳥一二聲鳴き渡るを聞かせ給ひて、大殿ごもらせたまひぬ。空海あした參る。問はせたまへるは、三皇五帝は遠し、その後の物語申せとなむ。空海申す。いづれの國か教に開くべき。三隅の網一隅我に來れと云ひしが、私の始なり。ただただ御心の直くましますまゝに、おぼし知りたまへとこそ。日出でて起き、日入りて臥し、飢ゑては食ひ、渇して飮む、民の心に私なしとぞ。うちうなづかせたまひて、よしよしと勑らす。太弟參りたまへり、御物語久し。宣はくは、周は八百年漢四百年、如何

御土器—御杯
太弟—神野親王
養老の紀—養老は元正天皇の御字にて續日本紀をいふ
柏原の御陵—桓武帝の御陵

歌、

さを鹿は夜こそ來鳴け置く露は霜結ばねば朕わかゆなり

御土器取らせたまへば、藥子扇取りて立舞ふ。三輪の殿の神の戸をおし開かすもよ。幾久々と袖かへして祝ぎたいまつる。御心すがく〵しく、朝政怠らせたまはず。太弟の才學長じたまふを忌みて、密かに知らし奏する人もありけり。帝獨言たせたまふ。皇祖尊矛とりて道開かせ、弓箭み取らして仇うちしたまふより、十つぎの崇神の御時までは、記すに事なかりしにや、養老の紀に見る所なし。儒道渡りて、賢しき敎に惡しきを撓むかと見れば、また枉げて言を巧みにし、代々さかゆくまゝに靜かならず、朕は書讀むこと疎ければ、たゞ直を勤めむとおぼす。一日大虛に雲なく風枝を鳴らさぬに、空に轟く音す。空海參り合ひて念珠おしすり、呪文高らかにぞ唱ふるに、卽ち地に隕ちたり。怪し、蠻人車に乘りてかけるなり。捕へて櫃にこめ、難波穿江に沈めさせ、忌部の濱成おちし所の土三尺を掘らせて、神やらひおらび聲高らかなり。一日皇太弟柏原の御陵に參りて、密旨の奏文さゝげまつらす、何の御心とも誰傳ふべきにあらず。天皇も、一日御墓詣したまふ。百官百司、御前追ひ後べに備ふ。左右の大將、中將、御車のをちこちに

早良親王―御母は高野新笠、後崇道天皇と尊號を奉る

玄賓―俗姓弓削河内の人弘仁九年六月寂

妖魔をやらひし―惡魔をはらひし

けさの朝げ鳴くなる鹿のその聲を聞かずば行かじ夜の更けぬとに

うち傾きて、御歌の心おぼし知りたまへりき。またの夜先帝の御使あり。早良の親王の靈、橿原の御墓に參りて罪を謝す。只おのが後なきことを訴へ歎く、と申して、使は去りぬ。これは御心のたよわさにあだ夢ぞ、とおぼし知らせたまへど、崇道天皇と尊號贈らせたまひき。法師かんなぎ等祭壇に昇りて、加持參らせはらへしたり。侍臣藤原の仲成、妹の藥子等申す。夢に六のけぢめを云ふ。よき惡しきに數定まらむやは。御心の直きに惡しき神のよりつくぞと申して、出雲の廣成に仰せて、御藥調ぜさせたいまつる。また參議の臣達謀りあはせて、此處此處の神社大寺の御使あり。また伯岐の國に、世を避けたる玄賓召して、御加持參らす。この法師は僧都になし昇したまひしかど、一族弓削の道鏡が暴惡を汚らはしとて、山深く此處後處に住みて行ひたりけり。七日朝廷に立ちて、妖魔をやらひしとて、御暇たまはれと申す。み心すが〱しくならせ給ひしかば、猶參れと勅らせしかど、思ふ所やある、またも遠きに歸りぬ。仲成外臣を遠ざけむと計りては、藥子も心合せなぐさめたいまつる。善からぬこともうち笑みて、これが心をもとらせたまひぬ。よひ〱の御宴の歌垣、八重めぐらせ遊ばせたまふ。御製を歌ひあぐる。その

天の大國高日子の天皇―續日本紀に天推國高彦天皇とあり平城天皇

大同の佳運―大同は平城帝の年號

佳運は隆運に同じ

先帝―桓武帝

春雨物語

○血かたびら 一

天の大國高日子の天皇、開初より五十一代の大政きこしめしたまへば、五畿七道水旱無く民腹をうちて豐年歌ひ、良禽木をえらばず巢くひて、大同の佳運、記傳の博士、字をえらびて奏聞す。登極あらせてほどもなく、太弟神野親王を春の宮造らして遷させ、これは先帝の御寵愛ことなりしによりてなりけり。太弟聰明にて君として例なく、和漢の典籍に涉らせたまひ、草隷、唐人のおし戴き乞ひもて歸りしとぞ。この時、唐は憲宗の代にして、德の鄰に通ひ來り、新羅の哀莊王、古の跡とめて數十艘の貢物奉る。天皇、善柔の御性にましませれば、早く春の宮に御位讓らまく、内に沙汰したまふを、大臣參議さること暫しとて、おし止め奉る。一夜、夢見たまへり。先帝のおほん高らかに、

春雨物語序

春雨今日幾日靜かにておもしろ。水入の筆研とう出たれど、思ひめぐらすに、言ふべき事もなし。物語ざまのまねびは、初事なり。されど己が世の山賤めきたるには、何をか語りいでん。昔此頃の事どもも、人に欺かれしを、我また僞と知らで、人を欺く。よしやよし、寓言語り續けて、書とおし戴かする人もあればとて、物言ひ續くれば、猶春雨は降る降る。

堯蓂—堯帝の故事、治世の瑞草蓂莢なるものなり

ん事ちかきにあり。君が望にまかすべしとて、八字の句を諷ふ。其詞にいはく、

堯蓂日杲　百姓歸家

數言興盡きて遠寺の鐘五更を告ぐる。夜既に曙けぬ。別を給ふべし。こよひの長談まことに君が眠をさまたぐと、起ちて行くやうなりしが、かき消して見えずなりにけり。左内つら〳〵夜もすがらの事をおもひて、かの句を案ずるに、百姓家に歸すの句、粗其意を得て、ふかくこゝに信を發す。まことに瑞草の瑞あるかな。

雨月物語終

百が百的らず云々—百發百中なるをいふ

謙信—上杉謙信

柴田—柴田勝家

丹羽—丹羽長秀

に居らしめんや。又誰にか合し給はんや。翁云ふ。これ又人道なれば、我知るべき所にあらず。只富貴をもて論ぜば、信玄がごとく智謀は百が百的らずといふ事なくて、一生の威を三國に震ふのみ。しかも名將の聞は世擧りて賞ずる所なり。その末期の言に、當時信長は果報いみじき大將なり。我平生に他を侮りて、征伐を怠り、此疾に係る。我子孫も卽て他に亡されんといひしとなり。謙信は勇將なり。信玄死しては天が下に對なし。不幸にして遽く死りぬ。信長の器量人にすぐれたれども、信玄の智に及かず。謙信の勇に劣れり。しかれども富貴を得て、天が下の事一回は此人に依ざす。任ずるものを辱しめて命を殞すにて見れば、文武を兼しといふにもあらず。秀吉の志大なるも、はじめより天地に滿つるにもあらず。柴田と丹羽が富貴をうらやみて、羽柴と云ふ氏を設けしにてしるべし。今龍と化して太虛に昇り、池中をわすれたるならずや。秀吉龍と化したれども、蛟蜃の類也。蛟蜃の龍と化したるは、壽わづかに三歲を過ぎずと。これもはた後なからんか。それ驕をもて治めたる世は、往古より久しきを見ず。人の守るべきは儉約なれども、過ぐるものは卑吝に陷つる。されば儉約と卑吝の境よくわきまへて、務むべき物にこそ。いま豐臣の政久しからずとも、萬民和はゝしく、戸々に千秋樂を唱は

豊臣―豊臣秀吉

づかに一生を終る。心のうち如何ばかり淸しからんとは羨みぬるぞ。かくいへど富貴のみちは術にして、巧なるものはよく湊め、不肖のものは瓦の解くるより易し。且我ともがらは人の生産につきめぐりて、たのみとする主もさだまらず。こゝに湊まるかとすれば、其主のおこなひによりて、たちまちにかしこに走る、水のひくき方にかたぶくがごとし。夜に晝にゆき〳〵て休むときなし。たゞ閑人の生産もなくてあらば、泰山もやがて喫ひつくすべし。江海もつひに飲みほすべし。いくたびもいふ。不徳の人のたからを積むは、これとあらそふことわり、君子は論ずる事なかれ。ときを得たらん人の儉約を守り、つひえを省きてよく務めんには、おのづから家富み人服すべし。我は佛家の前業も知らず。儒門の天命にも拘らず。異なる境にあそぶなりといふ。左内いよ〳〵興に乘じて、靈の議論きはめて妙なり。舊しき疑念も今夜に消じつくしぬ。試にふたたび問はん。今豊臣の威風四海を靡し、五畿七道漸しづかなるに似たれども、亡國の義士彼此に潛み竄れ、或は大國の主に身を托せて世の變をうかゞひ、かねて志を遂げんと策る。民も又戰國の民なれば、耒を釋てて矛に易へ、農事を事とせず。士たる者枕を高くして眠るべからず。今の體にては長く不朽の政にもあらじ。誰か一統して民をやすき

ひ―時節の宜きに適ひ

三のもの―天神佛

天蒼氏―造化神

きらめて、産を治めて富貴となる。これ天の隨なる計策なれば、たからの此所にあつまるも、天のまに〳〵なることわりなり。又卑吝貪酷の人は、金銀を見ては父母の如くしたしみ、食ふべきをも喫はず。穿べき物をも著ず。得がたきいのちさへ惜しとおもはで、起きておもひ、臥して忘れねば、こゝにあつまる事まのあたりなる理なり。われもと神にあらず、佛にあらず、只これ非情なり。非情のものとして人の善惡を糺し、それに從ふべきいはれなし。善を撫で、惡を罪するは、天なり、神なり、佛なり。三のものは道なり。我ともがらのおよぶべきにあらず。只かれらがつかへ傅く事の、うやうやしきに集るとしるべし。これ金に靈あれども、人とこゝろの異なる所なり。また富みて善根を種うるにも、ゆゑなきに惠ほどこし、その人の不義をも察めず、借しあたへたらん人は、善根なりとも財はつひに散ずべし。これらは金の用を知りて、金の德をしらず。かろくあつかふが故なり。又身の行もよろしく、人にも志誠ありながら、世に窮められてくるしむ人は、天蒼氏の賜すくなく生れ出たるなれば、精神を勞しても、いのちのうちに富貴を得る事なし。さればこそいにしへの賢き人は、もとめて益あればもとめ、益なくばもとめず。己がこのむまに〳〵、世を山林にのがれて、し

宗廟これを云々—孝經の文句
惡業—あしき行
慳貪—苛酷
天の時に合

にのべさせ給へ。翁いふ。君が問ひ給ふは往古より論じ盡さゞる理なり。かの佛の御法を聞けば、富と貧しきは前生の脩否によるとや、此はあらましなる教ぞかし。前生にありしとき、おのれをよく脩め、慈悲の心專らに、他人にもなさけふかく接りし人の、その善報によりて、今此生に富貴の家にうまれきたり、おのがたからをたのみて、他人にいきほひをふるひ、あらぬ狂言をいひのゝじり、あさましき夷ごころをも見するは、前生の善心かくまでなりくだる事は、いかなる報のなせるにや。佛菩薩は名聞利要を嫌み給ふとこそ聞きつる物を、など貧福のことに係ひ給ふべき。さるを、富貴は前生のおこなひの善りし所、貧賤は惡かりし報とのみ說きなすは、尼媽を蕩かすなま佛法ぞかし。貧福をいはず、ひたすら善を積まん人は、その身に來らずとも、子孫は必ず幸福を得べし。宗廟これを饗けて、子孫これを保つとは、此理の細妙なり。おのれ善をなして、おのれその報の來るを待つは、直きこゝろにもあらずかし。又惡業慳貪の人の、富昌ふるのみかは、壽めでたくその終をよくするは、我に異なることわりあり。霎時聞かせたまへ。我今假に化をあらはして話るといへども、神にあらず、佛にあらず、もと非情の物なれば、人と異なる慮あり。いにしへに富める人は、天の時に合ひ、地の利をあ

裘―毛衣
葛―葛の繊維にておりたる帷子
顔子―顔回孔門第一の賢人

世にくだりしものゝ田畑をも、價を賤くして、あながちに己がものとし、今おのれは村長とうやまはれても、むかし借りたる人のものをかへさず。禮ある人の席を譲れば、其人を奴の如く見おとし、たま〳〵舊き友の寒暑を訪ひ來れば、物からんためかと疑ひて、宿にあらぬよしを應へさせつる類、あまた見來りぬ。又君に忠なるかぎりをつくし、父母に孝廉の聞えあり、貴きをたふとみ、賤きを扶くる意ありながら、三冬のさむきにも一裘に起臥し、三伏のあつきにも一葛を濯ぐいとまなく、年ゆたかなれども朝に晡に、一椀の粥にはらをみたしめ、さる人はもとより朋友の訪ふ事もなく、かへりて兄弟一屬にも通を塞れ交を絶れて、其怨を訴ふる方さへなく、汲々として一生を終ふるもあり。さらばその人は作業にうときゆゑかと見れば、夙に起き、おそくふして性力を凝し、西に東に走りまどふ蹺蹺さらに閑なく、その人愚にもあらで、才を用うるに的るは希なり。これらは顔子が一瓢の味をもしらず。かく果つるを佛家には前業をもて説きしめし、儒門には天命と教ふ。もし未來あるときは、現世の陰徳善功も來世のたのみありとして、人しばらく此所にいきどほりを休めん。されば富貴の道は、佛家にのみ其理をつくして、儒門の教は荒唐なりとやせん。靈も佛の教にこそ憑らせ給ふらめ。否ならば詳

七のたから—金、銀、瑠璃、珊瑚、琥珀、硨磲、瑪瑙

こゝろやり—鬱散

紙魚—學者を罵りていふ

て、字を學び韻を採ぐる人の、惑をとる端となりて、弓矢とる英雄も、富貴は國の基なるをわすれ、あやしき計策をのみ調練ひて、ものを戕り人を傷ひ、おのが德をうしなひて、子孫を絶つは、財を薄んじて名をおもしとする惑なり。顧ふに名と財ともとむるに、心ふたつある事なし。文字てふものに繫がれて、金の德を薄んじては、みづから清潔と唱へ、鋤を揮うて棄てたる人を賢しといふ。さる人はかしこくとも、さる事は賢からじ。金は七のたからの最なり。土に瘞れては靈泉を湛へ、不淨を除き妙なる音を藏くせり。かく清よきものゝ、いかなれば愚昧貪酷の人にのみ集ふべきやうなし。今夜此憤を吐きて、年來のこゝろやりをなし侍る事の喜しさよといふ。左内興じて席をすゝみ、さてしもかたらせ給ふに、富貴の道のたかき事、己がつねにおもふ所露たがはずぞ侍る。こゝに愚なる問事の侍るが、ねがふは詳に示させ給へ。今ことわらせ給ふは、專ら金の德を薄しめ、富貴の大業なる事をしらざるを罪とし給ふなるが、かの紙魚がいふ所もゆゑなきにあらず。今の世に富めるものは、十が八まではおほかた貪酷殘忍の人多し。おのれは俸祿に飽き足りながら、兄弟一屬はじめ祖より久しくつかふるものゝ、貧しきをすくふ事をもせず。となりに栖みつる人のいきほひをうしなひ、他の援さへなく

腹みつれば—腹ふくるれば
呂望—齊の
管仲
范蠡—越の
陶朱公
子貢—衞人
白圭—周人
共に孔門の
高弟
貨殖傳—史
記

感でて、翁が思ふこゝろばへをもかたり和まんとて、假に化を見はし侍るが、十にひとつも益なき閑談ながら、いはざるは腹みつれば、わざとにまうでて眠をさまたげ侍る。さても富みて驕らぬは大聖の道なり。さるを世の惡ことばに、富めるものはかならず慳し。富めるものはおほく愚なりといふは、晉の石崇、唐の王元寶が如き豺狼蛇蝎の徒のみをいへるなりけり。往古に富める人は、天の時をはかり、地の利を察らめて、おのづからなる富貴を得るなり。呂望齊に封ぜられて民に産業を敎ふれば、海方の人利に走りてこゝに來朝ふ。管仲九たび諸侯をあはせて、身は倍臣ながら富貴は列國の君に勝れり。范蠡、子貢、白圭が徒、財を鬻ぎ利を逐うて、巨萬の金を疊なす。これらの人をつらねて、貨殖傳を書し侍るを、其いふ所陋とて、のちの博士筆を競うて謗るは、ふかく頴らざる人の語なり。恒の産なきは恒の心なし。百姓は勤めて穀を出し、工匠等修めてこれを助け、商賈務めて此を通はし、おのれ〳〵が産を治め家を富まして、祖を祭り、子孫を謀る外、人たるもの何をか爲さん。諺にもいへり。千金の子は市に死せず。富貴の人は王者と樂を同じうすとなん。まことに淵深ければ魚よくあそび、山長ければ獸よくそだつは、天の隨なることわりなり。たゞ貧うして樂むてふ言葉あり

崑山の璧―崑崙山より出づる明珠
棠谿―劉晒新論に棠谿之劍天下之銛也
墨陽―淮南子曰墨陽之莫邪也
刀をも赦して―帶刀を赦して
容色―樣子

て惡みけり。家に久しき男に、黃金一枚かくし持ちたるものあるを聞きつけて、ちかく召ていふ。崑山の璧もみだれたる世には瓦礫にひとし。かゝる世にうまれて、弓矢とらん軀には、棠谿墨陽の劍、さてはありたきもの財寶なり。されど良劍なりとて、千人の敵には逆ふべからず。金の德は天が下の人をも從へつべし。武士たるもの漫にあつかふべからず。かならず貯へ藏むべきなり。儞賤しき身の分限に過ぎたる財を得たるは、嗚呼の事なり。賞なくばあらじとて、十兩の金を給ひ、刀をも赦して召しつかひけり。人これを傳へ聞きて、左内が金をあつむるは、長啄にして飽ざる類にはあらず。只當世の一奇士なりとぞいひはやしける。其夜左内が枕上に、人の來たる音しけるに、目さめて見れば、燈臺の下に、ちひさげなる翁の笑をふくみて坐れり。左内枕をあげて、こゝに來るは誰ぞ。我に粮からんとならば、力量の男どもこそ參りつらめ。儞がやうの耄げたる形して、ねぶりを魘ひつるは、狐狸などのたはむるゝにや。何のおぼえたる術かある。秋の夜の目さましに、そと見せよとて、すこしも騷ぎたる容色なし。翁いふ。かく參りたるは魑魅にあらず。人にあらず。君がかしづき給ふ黃金の精靈なり。年來篤くもてなし給ふうれしさに、夜話せんとて推してまゐりたるなり。君が今日家の子を賞じ給ふに

作麼生—如何に同じ

初祖の肉いまだ乾かず—達磨未だ死せず

武篇—武士

禪師見給ひて、やがて禪杖を拿りなほし、作麼生何所爲ぞと、一喝して他が頭を撃給へば、忽氷の朝日にあふがごとく消えうせて、かの青頭巾と骨のみぞ草葉にとゞまりける。現にも久しき念の、こゝに消じつきたるにやあらん。たふとき理あるにこそ。されば禪師の大徳、雲の裏海の外にも聞えて、初祖の肉いまだ乾かずとぞ稱歎しけるとなり。かくて里人あつまりて、寺内を清め、修理をもよほし、禪師を推したふとみて、ことに住しめけるより、故の密宗をあらためて、曹洞の靈場をひらき給ふ。今なほ御寺はたふとく榮えてありけるとなり。

○貧福論

陸奥の國蒲生氏郷の家に、岡左内といふ武士あり。祿おもく、譽たかく、丈夫の名を關の東に震ふ。此士いと偏固なる事あり。富貴をねがふ心常の武篇にひとしからず。倹約を宗として、家の掟をせしほどに、年を疊みて富昌えけり。かつ軍を調練す間には、茶味翫香を娯まず。廳上なる所に許多の金を布班べて心を和むる事、世の人の月花にあそぶに勝れり。人みな左内が行跡をあやしみて、吝嗇野情の人なりとて、爪はぢきをし

―歸路に

三の徑さへ―三徑就荒の意

ふが、かの一宿のあるじが莊に立ちよりて、僧が消息を尋ね給ふ。莊主よろこび迎へて、御僧の大徳によりて、鬼ふたゝび山をくだらねば、人皆淨土にうまれ出たるがごとし。されど山にゆく事はおそろしがりて、一人としてのぼるものなし。さるから消息をしり侍らねど、など今まで活きては侍らじ。今夜の御泊にかの菩提をとぶらひたまへ。誰も隨緣したてまつらんといふ。禪師いふ。他善果に基きて遷化せしとならば、道に先達の師ともいふべし。又活きてあるときは、わがために一個の徒弟なり。いづれ消息を見ずばあらじとて、復山にのぼり給ふに、いかさまにも人のゆきゝ絶えたると見えて、去年ふみわけし道ぞとも思はれず。寺に入りて見れば、荻尾花のたけ人よりもたかく生茂り、露は時雨めきて降りこぼれたるに、三の徑さへ解らざる中に、堂閣の戸右左に頽れ、方丈庫裏に緣りたる廊も、朽目に雨をふくみて苔むしぬ。さてかの僧を座らしめたる簀子のほとりを求むるに、影のやうなる人の、僧俗ともわかぬまでに、髭髪もみだれしに、葎むすぼふれ、尾花おしなみたるなかに、蚊の鳴くばかりのほそき音して、物とも聞えぬやうに、まれ〱唱ふるを聞けば、

江月照二松風一吹　永夜清宵何所爲

鬼畜に墮罪したるは―罪として鬼畜生におちたるは

江月云々―弘法大師之句也

かへるさに

ず。師はまことに佛なり。鬼畜のくらき眼をもて、活佛の來迎を見んとするとも見るべからぬ理なるかな。あなたふとと頭を低て默しける。禪師いふ。里人のかたるを聞けば、汝一旦の愛慾に心神みだれしより、忽鬼畜に墮罪したるは、あさましとも、哀しとも、ためしさへ希なる惡因なり。夜々里に出で人を害するゆゑに、ちかき里人は安き心なし、我これを聞きて捨つるに忍びず、わざ〳〵來りて敎化し、本源の心にかへらしめんとなるを、汝我がをしへを聞くや否や。あるじの僧いふ。師はまことに佛なり。かく淺ましき惡業を頓に忘るべきことわりを敎へ給へ。禪師いふ。汝聞くとならばこゝに來れとて、簀子の前のたひらなる石の上に座せしめて、みづから被き給ふ紺染の巾を脱ぎて、僧が頭に被かしめ、證道の歌の二句を授け給ふ。

江月照松風吹　永夜淸宵何所爲

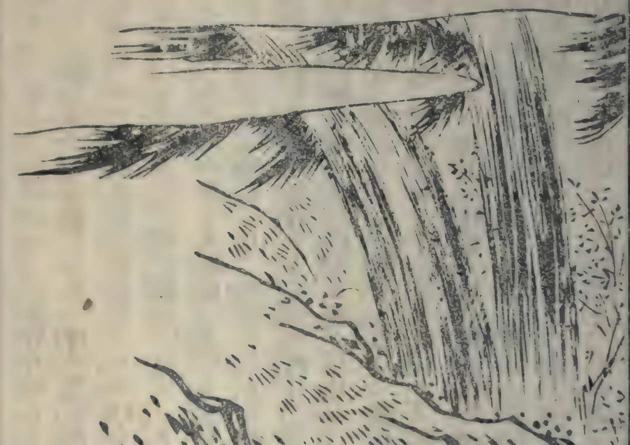
汝こゝを去らずして、徐に此句の意をもとむべし。意解けぬる則は、おのづから本來の佛心に會ふなるべしと、念頃に敎へて山を下り給ふ。此後は里人おもき災をのがれしといへども、猶僧が生死をしらざれば、疑ひ恐れて人々山にのぼる事をいましめけり。一年速くたちて、むかふ年の冬十月の初旬、快庵大德奥路のかへるさに、又こゝを過ぎ給

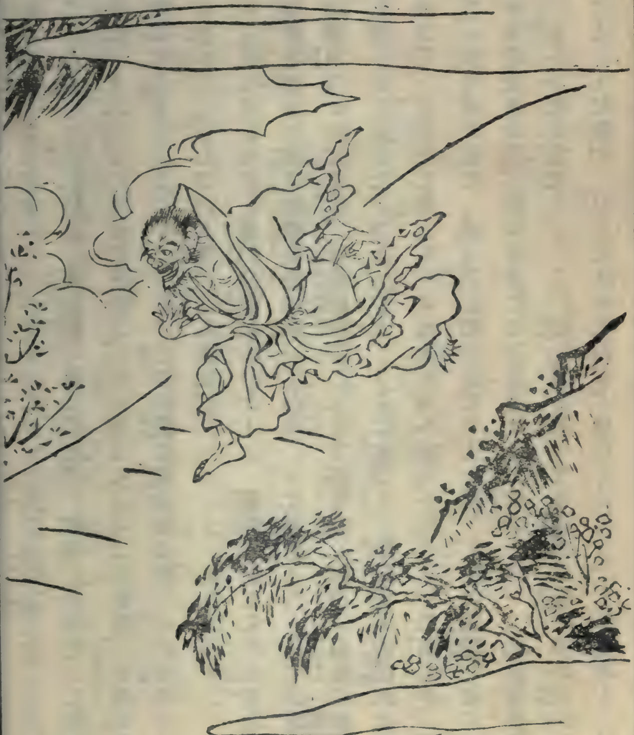
あなり―あるなり

禿顱―原本くそぼうずと註す

夜もすがら―終夜

したまへ。あるじの僧いふ。かく野らなるところは好からぬこともあなり。強てとゞめがたし。強て行けとにもあらず。僧のこゝろにまかせよとて、復び物をもいはず。こなたよりも一言を問はで、あるじのかたはらに座をしむる。看る〳〵日は入果てて、宵闇の夜のいとくらきに、燈を點げざれば、まのあたりさへわかぬに、只澗水の音ぞちかくきこゆ。あるじの僧も又眠藏に入りて音なし。夜更けて月の夜にあらたまりぬ。影玲瓏としていたらぬ隈もなし。子ひとつとも思ふ比、あるじの僧眠藏を出でて、あわたゞしく物を討ぬ。たづね得ずして大に叫び、禿顱いづくに隱れけん。こゝもとにこそありつれと、禪師が前を幾たび走り過ぐれども、更に禪師を見る事なし。堂の方に駈りゆくかと見れば、庭をめぐりて躍りくるひ、遂に疲れふして起來らず。夜明けて朝日のさし出でぬれば、酒の醒めたるごとくにして、禪師がもとの所に在すを見て、只あきれたる形にものさへいはで、柱にもたれ、長嘘をつぎて默しゐたりける。禪師ちかくすゝみよりて、院主何をか歎き給ふ。もし飢給ふとならば、野僧が肉に腹をみたしめ給へ。あるじの僧いふ。師は夜もすがらそこに居させたまふや。禪師いふ。こゝにありてねぶる事なし。あるじの僧いふ。我あさましくも人の肉を好めども、いまだ佛身の肉味を知ら





の自稱

申にかたぶく—西南に傾く

の鬼を教化して本源の心にかへらしめなば、こよひの饗の報ともなりなんかしと、たふときこゝろざしを發し給ふ。莊主頭を疊に摺りて、御僧この事をなし給はゞ、此國の人は淨土にうまれ出でたるがごとしと、涙を流してよろこびけり。山里のやどり、貝鐘も聞えず。二十日あまりの月も出でて、古戸の間に洩りたるに、夜の深きをもしりて、いざ休ませ給へとて、おのれも臥戸に入りぬ。

山院人とゞまらねば、樓門は荊棘おひかゝり、經閣もむなしく苔蒸しぬ。蜘網をむすびて諸佛を繋ぎ、燕子の糞護摩の牀をうづみ、方丈廊房すべて物すざましく荒れはてぬ。日の影申にかたぶく比、快庵禪師寺に入りて錫を鳴し給ひ、遍參の僧今夜ばかりの宿をかし給へと、あまたゝびよべども、さらに應なし。眠藏より痩槁れたる僧の、漸々とあゆみ出で、咳びたる聲して、御僧は何地へ通るとて、こゝに來るや。此寺はさる由縁ありて、かく荒れはてて、人も住ぬ野らとなりしかば、一粒の齋糧もなく、一宿をかすべきはかりごともなし。はやく里に出でよといふ。禪師いふ。これは美濃の國を出でて、みちの奥へいぬる旅なるが、この麓の里を過ぐるに、山の靈、水の流のおもしろさに、思はずもこゝに詣づ。日もなゝめなれば、里にくだらんもはるけし。ひたすら一宿をか

煬帝―隋の第二世、名は廣

無明の業火―道ならぬいかり

老衲―老僧

ゑの聞えけるが、頃刻して僧のねぶりをうかゞひて、しきりに齅ぐものあり。僧異しと見て、枕におきたる禪杖をもて、つよく擊ちければ、大きに叫んでそこに倒る。この音に主の嫗なるもの、燈を照し來るに見れば、若き女の打倒れてぞありける。嫗泣々命を乞ふ。いかゞせん。捨てて其家を出でしが、其後又たよりにつきて、其里を過ぎしに、田中に人多く集ひてものを見る。僧も立ちよりて何なるぞと尋ねしに、里人いふ。鬼に化したる女を捉へて、今土に埋むなりとかたりしとなり。されどこれらは皆女子にて、男たるものゝかゝるためしを聞かず。凡女の性の慳しきには、さる淺ましき鬼にも化するなり。又男子にも隋の煬帝の臣家に、麻叔謀といふもの、小兒の肉を嗜好みて、潛に民の小兒を偸み、これを蒸して喫ひしもあなれど、是は淺ましき夷心にて、主の語り給ふとは異なり。さるにてもかの僧の鬼になりつるこそ、過去の因緣にてぞあらめ。そも平生の行德のかしこかりしは、佛につかふる事に志誠を盡しゝなれば、其童兒をやしなはざらましかば、あはれよき法師なるべきものを、一たび愛慾の迷路に入りて、無明の業火の熾なるより、鬼と化したるも、ひとへに直くたくましき性のなす所なるぞかし。心放せば妖魔となり、收むる則は佛果を得るとは、此法師がためしなりける。老衲もしこ

連忙―慌て周章して

楚王の宮人云々―異迹記に、楚莊王時宮人一旦化爲野蛾との事にや

呉生が妻云云―越王蛇の故事の誤か

まに、火に燒き、土に葬ることをもせで、臉に臉をもたせ、手に手をとりくみて、日を經給ふが、終に心神みだれ、生きてありし日に違はず。戯れつゝも、其肉の腐り爛るゝを吝みて、肉を吸ひ骨を嘗めて、はた喫ひつくしぬ。寺中の人々院主こそ鬼になり給ひつれと、連忙しく迯去ぬる後は、夜な〳〵里に下りて人を驚殺し、或は墓を發きて、腥々しき屍を喫ふありさま、實に鬼といふものは、昔物語には聞きもしつれど、現にかくなり給ふを見て侍れ。されど如何してこれを征し得ん。只戸ごとに暮をかぎりて堅く閉してあれば、近曾は國中へも聞えて、人の往來さへなくなり侍るなり。さるゆゑのありてこそ、客僧をも過りつるなれとかたる。快庵この物がたりを聞かせ給うて、世には不可思議の事もあるものかな。凡人とうまれて、佛菩薩の敎の廣大なるをもしらず、愚なるまゝ、慳しきまゝに世を終るものは、其愛慾邪念の業障に攬れて、或は故の形をあらはして恚を報い、或は鬼となり蟒となりて祟をなすためし、往古より今にいたるまで、算ふるに盡しがたし。又人活きながらにして鬼に化するもあり。楚王の宮人は蛇となり、王含が母は夜叉となり、呉生が妻は蛾となる。又いにしへ、ある僧卑しき家に旅寢せしに、其夜雨風はげしく、燈さへなきわびしさに、いも寢られぬを、夜ふけて羊の鳴くこ

水丁―灌頂、佛に香水を灌ぐ儀式

典藥のおもたぶしき―評々たる醫者

きにもあらぬを、なあやしみ給ひそといふ。莊主朸を捨て、手を拍つて笑ひ、渠等が愚なる眼より、客僧をおどしまゐらせぬ。一宿を供養して、罪を贖ひたてまつらんと、禮ひて奥の方に迎へ、こゝろよく食をもすゝめて饗しけり。莊主かたりていふ。さきに下等が御僧を見て、鬼來りしとおそれしも、さるいはれの侍るなり。こゝに希有の物がたりの侍る。妖言ながら人にもつたへ給へかし。此里の上の山に、一字の蘭若の侍る。故は小山氏の菩提院にて、代々大德の住み給ふなり。今の阿闍梨は何某殿の猶子にて、ことに篤學修行の聞めでたく、此國の人は香燭をはこびて歸依したてまつる。我莊にもしばしば詣で給うて、いともうらなく仕へしが、去年の春にてありける。越の國へ水丁の戒師にむかへられ給ひて、百日あまり逗まり給ふが、他國より十二三歲なる童兒を倶して歸り給ひ、起臥の助とせらる。かの童兒が容の秀麗なるを深く愛でさせ給うて、年來の事どもゝ、いつとなく怠りがちに見え給ふ。さるに玆年四月の比、かの童兒かりそめの病に臥しけるが、日を經ておもくなやみけるを、痛み悲ませ給うて、國府の典藥のおもたぶしきをまで迎へ給へども、其驗もなく、終に空しくなりぬ。懷の璧を奪はれ、挿頭の花を嵐に誘はれしおもひ、泣くに涙なく、叫ぶに聲なく、あまりに歎かせ給ふま

大德の聖—高僧
杓—天秤棒の義
檀越—檀家

雨月物語　卷之五

○青頭巾

むかし快庵禪師といふ大德の聖おはしまりけり。總角より教外の旨をあきらめ給ひて、常に身を雲水にまかせ給ふ。美濃の國の龍泰寺に一夏を滿しめ、此秋は奧羽のかたに住むとて、旅立ち給ふ。ゆき〳〵て下野の國に入り給ふ。富田と云ふ里にて、日入りはてぬれば、大きなる家の賑はしげなるに立ちよりて、一宿をもとめ給ふに、田畑よりかへる男等、黄昏にこの僧の立てるを見て、大きに怕れたるさまして、山の鬼こそ來りたれ。人みな出でよと呼びのゝじる。家の内にも騷ぎたち、女童は泣きさけび、展轉びて隈々に竄る。あるじ山杓をとりて走り出で、外の方を見るに、年紀五旬にちかき老僧の、頭に紺染の巾を被ぎ、身に墨衣の破れたるを穿て、裹みたる物を背におひたるが、杖をもてさしまねき、檀越なに事にてかばかり備へ給ふや。遍參の僧今夜ばかりの宿をかり奉らんとて、こゝに人を待ちしに、おもひきや、かく異められんとは。痩法師の強盜などなすべ

現なく伏したる━夢心地に眠りたる

へりぬ。豊雄を窃に招きて、此事よくしてよとて袈裟をあたふ。豊雄これを懐に隠して、閨房にゆき、庄司今はいとまたびぬ。いざたまへ。出立ちなんといふ。いと喜しげにてあるを、此袈裟とり出でて、はやく打被け、力をきはめて押しふせぬれば、あな苦し、爾何とてかく情なきぞ。しばしこゝ放せよかしといへど、猶力にまかせて押しふせぬ。法海和尚の輿やがて入來る。庄司の人々に扶けられて、こゝにいたり給ひ、口のうちつぶつぶと念じ給ひつゝ、豊雄を退けて、かの袈裟とりて見給へば、富子は現なく伏したる上に、白き蛇の三尺あまりなる蟠りて、動きだもせずてぞある。老和尚これを捉へて、徒弟が捧げたる鐵鉢に納給ふ。猶念じ給へば、屏風の背より尺ばかりの小蛇はひ出づるを、是をも捉りて鉢に納れ給ひ、かの袈裟をもてよく封じ給ひ、そがまゝに輿に乘せ給へば、人々掌をあはせ、涙を流して敬ひ奉る。蘭若に歸り給ひて、堂の前を深く掘らせて、鉢のまゝに埋めさせ、永劫があひだ、世に出づることを戒しめ給ふ。今猶蛇の塚ありとかや。庄司が女子はつひに病にそみてむなしくなりぬ。豊雄は命恙なしとなん語りつたへける。

我弓の本末なも知りながら—武道なも知りながら

眠藏—家の納戸の如きもの

るに、かりそめ言をだにも、此恐しき報をなんいふは、いとむくつけなり。されど吾を慕ふ心ははた世人にもかはらざれば、こゝにありて、人々の歎き給はんがいたはし。此富子が命ひとつたすけよかし。然て我をいづくにも連れゆけといへば、いと喜しげに點頭きをる。又立出て庄司にむかひ、かう淺ましきものの添ひてあれば、こゝにありて人人を苦しめ奉らんは、いと心なきことなり。只今暇給はらば、娘子の命も恙なくおはすべしといふを、庄司更に肯けず。我弓の本末をも知りながら、かくいひがひなからんは、大宅の人々のおぼす心もはづかし。猶計較りなん。小松原の道成寺に、法海和尚とて、貴とき祈の師おはす。今は老いて室の外にも出でずと聞けど、我爲にはいかにも〳〵捨て給はじとて、馬にていそぎ出でたちぬ。道遙なれば夜なかばかりに蘭若に到る。老和尚眠藏をゐざり出でて、此物がたりを聞きて、そは淺ましくおぼすべし。今は老朽ちて驗あるべくもおぼえ侍らねど、君が家の災を默してやあらん。まづおはせ。法師も而て詣でなんとて、芥子の香にしみたる袈裟とり出で、庄司にあたへ、渠をやすくすかしよせて、これをもて頭に打被け、力を出して押しふせ給へ。手弱くあらばおそらくは逃去らん。よく念じてよくなし給へと、實やかに教ふ。庄司よろこびつゝ、馬を飛してか

いふいふ絶え入りぬ—言ひつゝ死す

徒々しき御心—浮きたる御思

にてましますものを、など法師らが祈り奉らん。此手足なくば、はた命失なひてんといふいふ絶入りぬ。人々扶け起すれど、すべて面も肌も黒く赤く染なしたるが如く、熱き事焚火に手さすらんにひとし。毒氣にあたりたると見えて、後は只眼のみはたらきて、物いひたげなれど、聲さへなさでぞある。水灌ぎなどすれど、つひに死にける。これを見る人いよゝ魂も身に添ぬ思して、泣惑ふ。豊雄すこし心を收めて、かく驗なる法師だも祈得ず、執ねく我を纒ふものから、天地のあひだにあらんかぎりは、探し得られなん。おのが命ひとつに、人々を苦むるは實ならず。今は人もかたらはじ。やすくおほせとて、閨房にゆくを、庄司の人々こは物に狂ひ給ふかといへど、更に聞ず顔にかしこにゆく。戸を靜に明くれば、物の騒しき音もなくて、此二人ぞむかひゐたる。富子豊雄にむかひて、君何の讐に我を捉へんとて、人をかたらひ給ふ。此後も仇をもて報い給はゞ、君が御身のみにあらじ。此郷の人々をもすべて苦しきめ見せなん。ひたすら吾貞操をうれしとおぼして、徒々しき御心をなおぼしそと、いと懸想していふぞうたてかりける。豊雄いふは、世の諺にも聞けることあり。人かならず虎を害する心なけれども、虎反りて人を傷る意ありとや。爾人ならぬ心より、我を纒うて幾度かからきめを見するさへあ

つ—宥めて賺しつの意ならん

蠱物—妖怪術をなすもの

雄黄—鷄冠石

閨房を免れ出て、庄司にむかひ、かう〳〵の恐しき事あなり。これいかにして放けなん、よく計り給へといふも、背にや聞くらんと、聲を小やかにしてかたる。庄司も妻も面を青くして、歎きまどひ、こはいかにすべき。こゝに都の鞍馬寺の僧の、年々熊野に詣づるが、きのふより此向岳の蘭若に宿りたり。いとも験なる法師にて、凡疫病、妖災、蝗などをもよく祈るよしにて、此郷の人は貴みあへり。此法師請へてんとて、あわたゞしく呼びつげるに、漸して來りぬ。しか〴〵のよしを語れば、此法師鼻を高くして、これらの蠱物らを捉へんは、何の難き事にもあらじ。必靜りおはせと、やすげにいふに、人々心落ゐぬ。法師まづ雄黄をもとめて、藥の水を調じ、小瓶に湛へて、かの閨房にむかふ。人々驚隱るゝを、法師嘲みわらひて、老たるも童も必そこにおはせ。此蛇唯今捉りて見せ奉らんとて、すゝみゆく。閨房の戸あくるを遲しと、かの蛇頭をさし出して、法師にむかふ。此頭何ばかりの物ぞ。此戸口に充滿て、雪を積みたるよりも白く、輝々しく、眼は鏡の如く、角は枯木のごと、三尺餘の口を開き、紅の舌を吐いて、唯一呑に飲むらん勢をなす。あなやと叫びて、手にすゑし小瓶をもそこに打ちすてゝ、たつ足もなく、展轉びはひ倒れて、からうじてのがれ來り、人々にむかひて、あな恐し、祟ります御神

身の毛もたちて―恐怖の貌なり

和めつ驚し

へられて見るに、此富子がかたちいとよく、萬心に足ひぬるに、かの蛇が懸想せしことも、おろ〱おもひ出るなるべし。はじめの夜は事なければ書かず。二日の夜、よきほどの醉ごこちにて、年來の大内住に、邊鄙の人は將うるさくまさん。かの御わたりにては、何の中將、宰相の君などいふに添ひぶし給ふらん。今更にくゝこそおぼゆれなど戯るゝに、富子卽て面をあげて、古き契を忘れ給ひて、かくことなる事なき人を時めかし給ふこそ、こなたよりまして惡くあれといふは、姿こそかはれ、正しく眞女子が聲なり。聞くにあさましう、身の毛もたちて恐しく、只あきれまどふを、女打ちゑみて、吾君な怪しみ給ひそ。海に誓ひ、山に盟ひし事を速くわすれ給ふとも、さるべき緣のあれば、又もあひ見奉るものを、他人のいふ事をまことしくおぼして、強に遠ざけ給はんには、恨み報いなん。紀路の山々さばかり高くとも、君が血をもて峯より谷に灌ぐくださん。あたら御身をいたづらになし果て給ひそと云ふに、只わなゝきにわなゝかれて、今やとらるべきこゝちに死入ける。屛風のうしろより、吾君いかにむつかり給ふ。かうめでたき御契なるはとて、出づるはまろやなり。見るに又膽を飛し、眼を閉て、伏向に臥す。和めつ驚しつ、かはる〲物うちいへど、只死入たるやうにて、夜明けぬ。かくて

妖災—物怪

覺しぬ—諭しぬ

家の羈—家の手足まとひ

て、翁が惠を謝し、且美濃絹三疋、筑紫綿二屯を遺り來り、猶此妖災の身禊し給へと、つゝしみて願ふ。翁これを納めて、祝部らにわかちあたへ、自は一疋一屯をもとゞめずして、豐雄にむかひ、畜儞が秀麗に奸けて、儞を纏ふ。儞又畜が假の化に魅はされて、丈夫心なし。今より雄氣して、よく心を靜りまさば、此らの邪神を逐はんに、翁が力をもかり給はじ、ゆめ〳〵心を靜りませとて、實やかに覺しぬ。豐雄夢のさめたるこゝちに、禮言盡きずして歸り來る。金忠にむかひて、此年月畜に魅はされしは、己が心正しからぬなりし。親兄の孝をもなさで、君が家の羈ならんは由縁なし。御惠いとかたじけなけれど、又も參りなんとて、紀の國に歸りける。父母太郎夫婦此恐しかりつる事を聞きて、いよゝ豐雄が過ならぬを憐み、かつは妖怪の執ねきを恐れける。かくて鰥にてあらするにこそ、妻むかへさせんとてはかりける。芝の里に芝の庄司なるものあり。女子一人もてりしを、大内の采女にまゐらせてありしが、此度いとま申給り、この豐雄を聟がねにとて、媒氏をもて大宅が許へいひ納る。よき事なりて、卽て因をなしける。かくて都へも迎の人を登せしかば、此采女富子なるものよろこびて歸り來る。年來の大宮仕に馴れこしかば、萬の行儀よりして姿なども、花やぎ勝りけり。豐雄こゝに迎

たろ麻絲

雨篠を亂して―暴雨の形容

命得させ給へ―助けて生を全からしめ給へ

遠津神―遠津御祖として

あゆみ來る。人々を見てあやしげにまもりたるに、眞女子もまろやも、此人を背に見ぬふりなるを、翁渠二人をよくまもりて、あやし。此邪神、など人を惑す。翁がまのあたりをかくても有りやと、つぶやくを聞きて、此二人忽ち躍りたちて、瀧に飛び入ると見しが、水は大虚に湧きあがりて見えずなるほどに、雲摺墨をうちこぼしたる如く、雨篠を亂してふり來る。翁人々の慌忙惑ふをまつろへて、人里にくだる。賤しき軒にかゞまりて、生けるこゝちもせぬを、翁豐雄に向ひ、熟そこの面を見るに、此隱神のために惱まされ給ふが、吾救はずばつひに命をも失ひつべし。後よく愼み給へといふ。豐雄地に額著きて、此事の始より語出でて、猶命得させ給へとて、恐れみ敬ひて願ふ。翁さればこそ、此邪神は年經たる蛇なり。かれが性は婬なる物にて、牛と孳みては麟を生み、馬とあひては龍馬を生むといへり。此魅はせつるも、はたそこの秀麗に姧けたると見えたり。かくまで執ねきを、よく愼み給はずば、おそらくは命を失ひ給ふべしといふに、人々いよ〳〵恐れ惑ひつゝ、翁を崇へて遠津神にこそと拜みあへり。翁打笑みて、おのれは神にもあらず。大倭の神社に仕へまつる當麻の酒人といふ翁なり。道の程見たててまゐらせん。いざ給へとて出たてば、人々後につきて歸り來る。明の日大倭の鄕にいき

行幸の宮—齊明帝の御宇離宮をおかれたるをいふ

石ばしる—瀧の枕詞

績麻—うみ

ぞいと憂けれ。山土産必ず待ちこひ奉るといふを、そは歩みなんこそ病も苦しからめ。車こそもたらね。いかにも／＼土は踏せ參らせじ。留り給はんは、豐雄のいかばかり心もとなかりつらんとて、夫婦勸めたつに、豐雄もかうたのもしくの給ふを、道に倒るゝともいかでかはと聞ゆるに、不慮ながら出でたちぬ。人々花やぎて出ぬれど、眞女子が麗なるには似るべうもあらずぞ見えける。何某の院は、かねて心よく聞えかはしければ、こゝに訪ふ。主の僧迎へて、此春は遲く詣で給ふことよ。花もなかばは散過ぎて、鶯の聲もやゝ流るめれど、猶よき方にしるべし侍らんとて、夕食いと淸くして食せける。明けゆく空いたう霞みたるも、晴れゆくまゝに見わたせば、此院は高き所にて、こゝかしこ僧坊どもあらはに見おろさるゝ。山の鳥どももそこはかとなく囀りあひて、木草の花色々に咲きまじりたる、同じ山里ながら目さむるこゝちせらる。初詣には瀧ある方こそ見所はおほかめれとて、彼方にしるべの人乞ひて出でたつ。谷を繞りて下りゆく。いにしへ行幸の宮ありし所は、石ばしる瀧つせのむせび流るゝに、ちひさき鮎どもの水に逆ふなど、目もあやにおもしろし。檜破子打散して喰ひつゝあそぶ。岩がねづたひに來る人あり。髮は績麻をわがねたる如くなれど、手足いと健やかなる翁なり。此瀧の下に

杉をしろしとして相見んとちかひし戀歌あればかくはいひしなり

葛城や云々―相見し夜の短くて直ちに明けやすく逢ひにしことの遲を恨む意

よき人のよしと見給ひし所―吉野

うけさせ給へとて、さめ〴〵と泣く。豐雄或は疑ひ、或は憐みて、重ねていふべき詞もなし。金忠夫婦、眞女子がことわりの明らかなるに、此女しきふるまひを見て、努疑ふ心もなく、豐雄の物語にては、世に恐しき事よと思ひしに、さる例あるべき世にもあらずかし。はる〴〵と尋ねまどひ給ふ御心ねのいとほしきに、豐雄肯はずとも、我々とどめまゐらせんとて、一間なる所に迎へける。こゝに一日二日を過すまゝに、金忠夫婦が心をとりて、ひたすら歎きたのみける。其志の篤きに愛でて、豐雄をすゝめて、つひに婚儀をとりむすぶ。豐雄も日々に心とけて、もとより容姿のよろしきを愛でよろこび、千とせをかけて契るには、葛城や高間の山に夜々ごとにたつ雲も、初瀬の寺の曉の鐘に雨收りて、只あひあふ事の遲をなん恨みける。三月にもなりぬ。金忠、豐雄夫婦にむかひて、都わたりには似るべくもあらねど、さすがに紀路にはまさりぬらんかし。名細しの吉野は春はいとよき所なり。三船の山、菜摘川、つねに見るとも飽かぬを、此頃はいかにおもしろからん。いざ給へ。出立ちなんといふ。眞女兒うち笑みて、よき人のよしと見給ひし所は、都の人も見ぬを恨に聞え侍るを、我身稚より、人おほき所、或は道の長手をあゆみては、必氣のぼりてくるしき病あれば、從駕にえ出立ちはべらぬ

計較りつる｜謀る
二本の杉のしるし｜古初瀨川の邊にある二本

をもかたり、御心放せさせ奉らんとて、御住家尋ねまゐらせしに、かひありてあひ見奉ることの喜しさよ。あるじの君よく聞きわけて給へ。我もし怪しき物ならば、此人繁きわたりさへあるに、かうのどかなる晝をいかにせん。衣に縫目あり。日にむかへば影あり。此正しきことわりを思しわけて、御疑を解せ給へ。豐雄漸人ごこちして、猶正しく人ならぬは、我捕はれて、武士らとともにいきて見れば、きのふにも似ず淺ましく荒れ果てゝ、まことに鬼の住むべき宿に一人居るを、人々捕へんとすれば、忽青天霹靂を震うて、跡なくかき消えぬるを、まのあたり見つるに、又逐來て何をか爲す。すみやかに去れといふ。眞女子涙を流して、まことにさこそ思さんはことわりなれど、妾が言をもしばし聞せ給へ。君公廳に召され給ふと聞きしより、かねて憐をかけつる鄰の翁をかたらひ、頓に野らなる宿のさまをこしらへし。我を捕んずときに鳴神響かせしは、まろやが計較りつるなり。其後船もとめて難波の方に遁れしかど、御消息知らまほしく、この御佛にたのみを懸けつるに、二本の杉のしるしありて、喜しき瀬にながれあふことは、ひとへに大悲の御德かふむりたてまつりしぞかし。種々の神寶は何とて女の盜み出すべき。前の夫の良らぬ心にてこそあれ。よく／＼思しわけて、思ふ心の露ばかりをも

御明—神佛にさゝげる燈明

によりて、百日がほどに赦さるゝ事を得たり。かくて世にたち接らんも面俯なり。姉の大和におはすを訪ひて、しばし彼所に住まんといふ。げにかゝる憂め見つる後は、重き病をも得るものなり。ゆきて月ごろを過せとて、人を添へて出でたゝす。二郎の姉が家は、石榴市といふ所に、田邊の金忠といふ商人なりける。豐雄が訪ひ來るを喜び、かつ月ごろの事どもをいとほしがりて、いつ〳〵までもこゝに住めとて、念比に勞りけり。年かはりて二月になりぬ。此石榴市といふは、泊瀬の寺近き所なりき。佛の御中には泊瀬なんあらたなる事を、唐土までも聞えたるとて、都より邊鄙より詣づる人の、春はことに多かりけり。詣づる人は必ずこゝに宿れば、軒を竝べて旅人を止めける。田邊が家は御明燈心の類を商ひぬれば、所せく人の入りたちける中に、都の人の忍びの詣と見えて、いとよろしき女一人、了鬟一人薫物求むとてこゝに立ちよる。この了鬟豐雄を見て、吾君のこゝにいますはといふに、驚きて見れば、かの眞女子まろやなり。あな恐しとて内に隱るゝ。金忠夫婦こは何ぞといへば、かの鬼こゝに逐來る。あれに近寄り給ふなと隱れ惑ふを、人々そはいづくにと立騒ぐ。眞女子入來りて、人々な怪み給ひそ。吾夫の君な恐れ給ひそ。おのが心より罪に墮し奉る事の悲しさに、御有家もとめて、事の由緣

古き帳を立て——古き帷幔をはりて

緋——目堅く織りたる絹布

老が申されしといふに、さもあれ。よく見極めて殿に申さんとて、門押しひらきて入る。家は外よりも荒れまさりけり。なほ奥の方に進みゆく。前栽廣く造りなしたり。池は水あせて、水草も皆枯れ、野ら藪生ひかたぶきたる中に、大きなる松の吹倒れたるぞ物すざまし。客殿の格子戸をひらけば、腥き風のさと吹きおくりきたるに、恐れまどひて、人々後にしりぞく。豐雄只聲を呑みて歎きゐる。武士の中に巨勢の熊檮なる者膽ふとき男にて、人々我後に從きて來れとて、板敷をあらゝかに踏みて進みゆく。塵は一寸ばかり積りたり。鼠の糞ひり散したる中に、古き帳を立てて、花の如くなる女一人ぞ座る。熊檮女にむかひて、國の守の召しつるぞ。急ぎまゐれといへど、答もせであるを、近く進みて捕ふとせしに、忽地も裂くるばかりの霹靂鳴響くに、許多の人迯ぐる間もなくてそこに倒る。然て見るに、女はいづち行きけん見えずなりにけり。此床の上に輝輝しき物あり。人々恐る〳〵いきて見るに、狛錦、呉の綾、倭文、縑、楯、槍、靱、鍬の類、此失せつる神寶なりき。武士らこれをとりもたせて、怪しかりける事どもを詳に訴ふ。助も、大宮司の妖怪のなせる事をさとりて、豐雄を責むことをゆるくす。されど當罪免れず。守の館にわたされて牢裏に繋がる。大宅の父子多くの物を賄して、罪を贖ふ

土にて犯せる罪
木伐る老—木をきる老翁
米かつ男—米を搗く男

種の財はいづちに隱したる。明らかにまうせといふ。豊雄漸此事を覺り、涙を流して、おのれ更に盗をなさず。かう〳〵の事にて縣の何某の女が、前の夫の帶びたるなりとて得させしなり。今にもかの女召して、おのれが罪なき事を覺らせ給へ。助、いたく怒りて、我下司に縣の姓を名のるものある事なし。かく僞るは刑益々大なり。豊雄、かく捕はれて、いつまで僞るべき。あはれ、かの女召して問せ給へ。助、武士らに向ひて、縣の眞女子が家はいづくなるぞ。渠を押して捕へ來れといふ。武士ら畏りて、又豊雄を押したてて、彼所に行きて見るに、嚴めしく造りなして、門の柱も朽ちくさり、軒の瓦も大かたは碎けおちて、草しのぶ生ひさがり、人住むとは見えず。豊雄是を見て、只あきれにあきれゐたる。武士らかけ廻りて、近きとなりを召しあつむ。木伐る老米かつ男ら、恐れ惑ひて跪る。武士他らにむかひて、此家何者が住みしぞ。縣の何某が女のこゝにあるはまことかといふに、鍛冶の翁はひ出でて、さる人の名はかけてもうけ給はらず。此家三とせばかり前までは、村主の何某といふ人の賑しくて住侍るが、筑紫に商物積みてくだりし、其船行方なくなりて後は、家に殘る人も散々になりぬるより、絶えて人の住むことなきを、此男のきのふこゝに入りて、漸して歸りしを奇しとて、此漆師の

淺ましき事—かなしきこと

國津罪—國

臣殿の御願の事滿しめ給ひて、權現におほくの寶を奉り給ふ。さるに此神寶ども、御寶藏の中にて頓に失しとて、大宮司より國の守に訴出で給ふ。守この賊を探り捕ふために、助の君文室の廣之大宮司の館に來て、今專らに此事をはかり給ふよしを聞きぬ。此太刀いかさまにも下司などの帶くべき物にあらず。猶父に見せ奉らんとて、御前に持ちいきて、かう〳〵の恐しき事のあなるは、いかゞ計ひ申さんといふ。父面を青くして、こは淺ましき事の出できつるかな。日來は一毛をもぬかざるが、何の報にてかう良らぬ心や出できぬらん。他よりあらはれなば、此家をも絶されん。祖の爲子孫の爲には、不孝の子一人惜からじ。明は訴へ出でよといふ。太郎夜の明くるを待ちて、大宮司の館に來り、しか〳〵の由を申出でて、此太刀を見せ奉るに、大宮司驚きて、是なん大臣殿の獻り物なりといふに、助聞き給ひて、猶失せし物問ひ明らめん。召捕れとて武士ら十人ばかり、太郎を前にたてて行く。豐雄かゝる事をもしらで書見ゐたるを、武士ら押しかゝりて捕ふ。こは何の罪ぞといふをも聞入れず縛めぬ。父母太郎夫婦も今は淺ましと歎きまどふばかりなり。公廳より召給ふ、疾くあゆめとて、中にとりこめて、館に追ひもてゆく。助、豐雄をにらまへて、儞神寶を盗みとりしは、例なき國津罪なり。猶種

面俯―面伏
不面目

後身して―後見して

保正―村長

ぬぞといふ。豊雄、實に買ひたる物にあらず。さる由縁有りて人の得させしを、兄の見咎めてかくの給ふなり。父何の譽ありて、さる寶をば人のくれたるぞ。更におぼつかなき事、只今所縁かれり出でよと罵る。豊雄、此事只今は面俯なり。人傳に申出で侍らんといへば、親兄にいはぬ事を誰にかいふぞと聲あらゝかなるを、太郎の嫁の刀自傍にありて、此事愚なりとも聞侍らん。入らせ給へと宥むるに、つい立ちていりぬ。豊雄刀自にむかひて、兄の見咎め給はずとも、密に姉君をかたらひてんと思ひ設けつるに、速く責まるゝ事よ。かう〳〵の人の女のはかなくてあるが、後身してよとて賜へるなり。己が世しらぬ身の、御赦さへなき事は、重き勘當なるべければ、今更悔ゆるばかりなるを、姉君よく憐み給へといふ。刀自打笑みて、男子のひとり寢し給ふが、兼ていとほしかりつるに、いとよき事ぞ。愚なりともよくいひとり侍らんとて、其夜太郎に、かう〳〵の事なるは、幸におぼさずや。父君の前をよきにいひなし給へといふ。太郎眉を顰めて、あやし。此國の守の下司に、縣の何某と云ふ人を聞かず。我家保正なればさる人の亡くなり給ひしを聞えぬ事あらじを、まづ太刀こゝにとりて來よといふに、刀自やがて携へ來るを、よく〳〵見終りて、長嘘をつきつゝもいふは、こゝに恐しき事あり。近來都の大

ふさはしからず―相應せず

邌る―徐々と歩み行く義

けゆく。太郎は網子とゝのふるとて、晨起出で、豐雄が閨房の戸の間を、ふと見入りたるに、消殘りたる灯火の影に輝々しき太刀を枕に置きて臥したり。あやし、いづちより求めぬらんとおぼつかなくて、戸をあらゝかに明くる音に目さめぬ。太郎があるを見て、召給ふかといへば、輝々しき物を枕に置きしは何ぞ。價貴き物は海人の家にふさはしからず。父の見給はばいかに罪し給はんといふ。豐雄、財を費して買ひたるにもあらず。きのふ人の得させしをこゝに置きしなり。太郎、いかでさる寶をくるゝ人此邊にあるべき。あなむつかしの唐言書きたる物を買ひたむるさへ、世の費なりと思へど、父の默りておはすれば、今までも言はざるなり。其太刀帶びて大宮の祭を邌るやらん。いかに物に狂ふぞといふ聲の高きに、父聞附けて、徒者が何事をか仕出でつる。爰につれ來よ。太郎と呼ぶに、いづちにて求めぬらん。軍將等の佩給ふべき輝々しき物を買ひたるは好らぬ事。御目のあたりに召して問ひあきらめ給へ。おのれは網子どもの怠るらんと云捨てて出でぬ。母、豐雄を召して、さる物何の料に買ひつるぞ。米も錢も太郎が物なり。吾主が物とて何をか持ちたる。日來は爲すまゝに置きつるを、かくて太郎に惡まれなば、天地の中に何國に住むらん。賢き事をも學びたる者が、など是ほどの事わいため

び立つ云々—嬉しき形容

孔子さへ倒るゝ戀の山云々—孔子さへ戀はすて難きとの意、孔子は仲尼、周の聖人

は思へど、おのが世ならぬ身を顧れば、親兄弟のゆるしなき事をと、かつ喜しみ、且恐れみて、頓に答ふべき詞なきを、眞女兒わびしがりて、女の淺き心より鳴呼なる事をいひ出でて、歸るべき道なきこそ面なけれ。かう淺ましき身を海にも沒らで、人の御心を煩はし奉るは、罪深きこと。今の詞は徒ならねども、只醉ごこちの狂言におぼしとりて、こゝの海にすて給へかしといふ。豐雄はじめより都人の貴なる御方とは見奉るこそ賢かりき。鯨よる濱に生立ちし身の、かく喜しきことをいつかは聞ゆべき。即ての御答もせぬは、親兄に仕ふる身の、おのが物とては爪髮の外なし。何を祿に迎へまゐらせん便もなければ、身の德なきをくゆるばかりなり。何事をもおぼし耐給はば、いかにもいかにも後見し奉らん。孔子さへ倒るゝ戀の山には、孝をも身をも忘れてといへば、いと喜しき御心を聞きまゐらするうへは、貧しくとも時々こゝに住ませ給へ。こゝに前の夫の二つなき寶にめで給ふ帶あり。これ常に帶せ給へとてあたふるを見れば、金銀を餝りたる太刀の、あやしきまで鍛うたる古代の物なりける。物のはじめに辭なんは祥あしければとて、とりて納む。今夜はこゝに明かさせ給へとて、あながちに止むれど、まだ赦なき旅寢は親の罪し給はん。明の夜よく僞りて詣でなんとて出でぬ。其夜も寢がてに明

高杯平杯—食物をのする臺

花精妙し—櫻の枕詞

受領—國守

塒の鳥の飛

き物にて、倫の人の住居ならず。眞女子立出でて、故ありて人なき家とはなりぬれば、實やかなる御饗もえし奉らず。只薄酒一杯すゝめ奉らんとて、高杯平杯の淸らなるに、海の物、山の物もりならべて、瓶子土器擎げて、まろや酌まゐる。豐雄また夢心してさむるやと思へど、正に現なるを却りて奇しみゐたる。客も主もともに醉ごこちなるとき、眞女子杯をあげて、豐雄にむかひ、花精妙し櫻が枝の水にうつろひなす面に、春吹く風をあやなし、梢たちぐく鶯の艶ひある聲していひ出づるは、面なき事のいはで病みなんも、いづれの神になき名負すらんかし。努徒なる言にな聞き給ひそ。故は都の生なるが、父にも母にもはやう離れまゐらせて、乳母の許に成長りしを、此國の受領の下司縣の何某に迎へられて伴ひ下りしは、はやく三とせになりぬ。夫は任はてぬ。この春かりそめの病に死し給ひしかば、便なき身とはなり侍る。都の乳母も尼になりて、行方なき修行に出でしと聞けば、彼方も亦しらぬ國とはなりぬるをあはれみ給へ。きのふの雨のやどりの御惠に、信ある御方にこそとおもふ物から、今より後の齡をもて、御宮仕し奉らばやと願ふを、汚なき物に捨給はずば、此一杯に千とせの契をはじめなんといふ。豐雄もとよりかゝるをこそと、亂心なる思妻なれば、塒の鳥の飛び立つばかりに

現ならましかば—現ならましかばいかに嬉しからましとの意
了鬟—女子
努—決して
壁代—壁に代用する帳

の方にいざなひ、酒菓子種々と歡待しつゝ、喜しき醉ごこちに、つひに枕をともにしてかたるとおもへば、夜明けて夢さめぬ。現ならましかばと思ふ心のいそがしきに、朝食も打忘れてうかれ出でぬ。新宮の郷に來て、縣の眞女兒が家はと尋ぬるに、更にしりたる人なし。午時かたぶくまで尋ね勞ひたるに、かの了鬟東の方よりあゆみ來る。豐雄見るより大に喜び、娘子の家はいづくぞ。傘もとむとて尋ね來ると云ふ。了鬟打ちゑみて、よくも來ませり。こなたに歩み給へとて、前に立ちてゆく〱、幾ほどもなく、こゝぞと聞ゆる所を見るに、門高く造りなし、家も大きなり。蔀おろし簾たれこめしまで、夢の裏に見しと露たがはぬを、奇しと思ふ〱門に入る。了鬟走り入りて、傘の主詣給ふを誘ひ奉るといへば、いづ方にますぞ。こち迎へませといひつゝ立出づるは眞女子なり。豐雄、こゝに安部の大人とまうすは、年來物學ぶ師にてます。彼所に詣づる便に、傘とりて歸るとて、推して參りぬ。御住居見おきて待れば、又こそ詣で來んといふを、眞女子强にとゞめて、まろや。努出だし奉るなといへば、了鬟立ちふたがりて、傘强て惠ませ給ふならずや。其がむくいに强てとゞめまゐらすとて、腰を押して南面の所に迎へける。板敷の間に床疊を設けて、几帳御厨子の飾、壁代の繪なども、皆古代のよ

くろしくも—萬葉集第三巻にあり長忌寸奥麿の詠

こゝなんいにしへの人の、

くるしくもふりくる雨か三輪が崎佐野のわたりに家もあらなくに

とよめるは、まことけふのあはれなりける。此家賤しけれど、おのれが親の目かくる男なり。心ゆりて雨休め給へ。そもいづち旅の御宿とはし給ふ。御見送せんも却りて無禮なれば、此傘もて出で給へといふ。女、いと喜しき御心を聞え給ふ。其御思に乾してまゐりなん。都のものにてもあらず。此近き所に年來住し侍るが、けふなんよき日とて、那智に詣侍るを、暴なる雨の恐しさに、やどらせ給ふともしらで、わりなくも立ちよりて侍る。こゝより遠からねば、此小休に出侍らんといふを、強に此傘もていき給へ。何の便にも求めなん。雨は更に休みたりともなきを、さて御住居はいづ方ぞ。是より使奉らんといへば、新宮の邊にて縣の眞女兒が家はと尋ね給はれ。日も暮れなん。御恵のほどを指し戴きて歸りなんとて、傘とりて出づるを見送りつも、あるじが簑笠かりて家に歸りしかど、猶俤の露忘れがたく、しばしまどろむ曉の夢に、かの眞女兒が家に尋ねゆきて見れば、門も家もいと大きに造りなし、蔀おろし、簾垂れこめて、ゆかしげに住みなしたり。眞女子出迎へて、御情わすれがたく待戀ひ奉る。此方に入らせ給へとて、奧

遠山ずり—青摺に遠山の景をすりたるもの

三山—熊野の三山、本宮、新宮、那智是なり

もやゝ頻なれば、其所なる海郎が屋に立ちよる。あるじの老はひ出でて、こは大人の弟子の君にてます。かく賤しき所に入らせ給ふぞいと恐まりたる事。是敷きて奉らんとて、圓座の汚げなるを清めてまゐらす。霎時息むるほどは、なにか厭ふべき。なあはたゞしくせそとて休らひぬ。外の方に麗しき聲して、此軒しばし惠ませ給へといひつゝ入來るを、奇しと見るに、年は廿にたらぬ女の、顔容髪のかゝり、いと艶ひやかに、遠山ずりの色よき衣著て、了鬟の十四五ばかりの淸げなるに、包みし物もたせ、しとゞに濡れてわびしげなるが、豐雄を見て、面さと打赤めて、恥しげなる形の貴やかなるに、不慮に心動きて、且思ふは、此邊にかうよろしき人の住むらんを、今まで聞こえぬことはあらじを、此は都人の三山詣せし次に、海愛らしくこゝに遊ぶらん。さりとて男だつ者もつれざるぞいとはしたなる事かなと思ひつゝ、すこし身退きて、こゝに入らせ給へ、雨もやがてぞ休なんといふ。女しばし宥させ給へとて、ほどなき住なれば、つひ並ぶやうに居るを見るに、近まさりして、此世の人とも思はれぬばかり美しきに、心も空にかへる思して、女にむかひ、貴なるわたりの御方とは見奉るが、三山詣やし給ふらん。峯の溫泉にや出で立ち給ふらん。かうすさまじき荒磯を、何の見所ありて狩りくらし給ふ。

鰭の廣物―大魚
狹き物―小魚
都風―風流の意
覊物―手足のまとひ

雨月物語 卷之四

○蛇性の婬

いつの時代なりけん、紀の國三輪が崎に、大宅の竹助といふ人ありけり。此人海の幸ありて、海郎どもあまた養ひ、鰭の廣物、狹き物を盡して漁り、家豐に暮しける。男子二人、女子一人をもてり。太郎は質朴にてよく生産を治む。二郎の女子は大和の人の娶に迎へられて、彼處にゆく。三郎の豐雄なるものあり。生長優しく、常に都風たる事をのみ好みて、過活心なかりけり。父是を憂ひつゝ思ふは、家財を分ちたりとも、即て人の物と爲さん。さりとて他の家を嗣がしめんも、はたうたてき事聞くらんが病しき。只なすまゝに生し立てて、博士にもなれかし。法師にもなれかし。命の極は太郎が覊物にてあらせんとて、強て掟をもせざりけり。此豐雄、新宮の神奴安部の弓麿を師として行通ひける。九月下旬、けふはことになごりなく和ぎたる海の、暴に東南の雲を生して、小雨そぼふり來る。師が許にて傘かりて歸るに、飛鳥の神秃倉見やらるゝ邊より、雨

髻ばかりかかりて—髻ばかり軒にかゝりて

して風冷やかに、さて正太郎が戸は明けはなして、其人は見えず。内にや逃入りつらんと走入りて見れども、いづくに竄くるべき住居にもあらねば、大路にや倒れけんと、もとむれども、其わたりには物もなし。いかになりつるやと、あるひは異み、或は恐る〳〵ともし火を挑げて、こゝかしこを見廻ぐるに、明けたる戸腋の壁に、腥々しき血灌ぎ流れて、地につたふ。されど屍も骨も見えず。月あかりに見れば、軒の端にものあり。ともし火を捧げて照し見るに、男の髪の髻ばかりかゝりて、外には露ばかりのものもなし。淺ましくもおそろしさは、筆につくすべうもあらずなん。夜も明けてちかき野山を探しもとむれども、つひに其跡さへなくてやみぬ。此事井澤が家へもいひおくりぬれば、涙ながらに香央にも告げしらせぬ。されば陰陽師が占の著き、御釜の凶祥もはたたがはざりけるぞ、いとも尊かりけるとかたり傳へけり。

四更—午前二時

五更—午前四時

尻居に坐す—尻もちしてすわる

を敲きて、夜の事をかたる。彦六もはじめて陰陽師が詞を奇なりとして、おのれも其夜は寢ねずして、三更の比を待ちくれける。松ふく風物を僵すがごとく、雨さへふりて常ならぬ夜のさまに、壁を隔てて聲をかけあひ、既に四更にいたる。下屋の窓の紙に、さと赤き光さして、あなにくや。こゝにも貼しつるよといふ聲、深き夜にはいとゞ凄じく、髪も生毛もこと〴〵く聳立ちて、しばらくは死入りたり。明くれば夜のさまをかたり、暮れば明くるを慕ひて、此月日頃千歳を過ぐるよりも久し。かの鬼も夜ごとに家を繞り、或は屋の棟に叫びて、忿れる聲夜ましに凄じ。かくして四十二日といふ其夜にいたりぬ。今は一夜にみたしぬれば、殊に愼みて、やゝ五更の天もしら〳〵と明けわたりぬ。長き夢のさめたる如く、やがて彦六をよぶに、壁によりていかにと答ふ。おもき物いみも既に滿てぬ。絶えて兄長の面を見ず、なつかしさに、かつ此月頃の憂怕しさを心のかぎりいひ和さまん。眠さまし給へ。我も外の方に出でんといふ。彦六用意なき男なれば、今は何かあらん。いざこなたへわたり給へと、戸を明くる事半ならず、となりの軒にあなやと叫ぶ聲耳をつらぬきて、思はず尻居に坐す。こは正太郎が身のうへにこそと、斧引提げて大路に出づれば、明けたるといひし夜はいまだ暗く、月は中天ながら、影朧々と

陰陽師―吉凶を占ふ人

篆籀―篆書籀書

三更―午後十二時

佛のみぞ立せまします。里遠き犬の聲を力に、家に走りかへりて、彦六にしかじかのよしを語りければ、なでふ狐に欺かれしなるべし。心の臆れたるときは、かならず迷し神の魘ふものぞ。足下のごとく、虚弱き人のかく患に沈みしは、神佛に祈りて、心を收めつべし。刀田の里にたふとき陰陽師のいます。身禊して厭符をも戴き給へと、いざなひて、陰陽師の許にゆき、はじめより詳にかたりて、此占をもとむ。陰陽師占べ考へていふ。災すでに窮りて易からず。さきに女の命をうばひ、怨猶盡きず。足下の命も旦夕にせまる。此鬼世を去りぬるは七日前なれば、今日より四十二日が間、戸を閉て、おもき物齋すべし。我禁を守らば、九死を出でて全からんか。一時を過るともまぬかるべからずと、かたくをしへて、筆をとり、正太郎が脊より手足におよぶまで、篆籀のごとき文字を書き、猶朱符あまた紙にしるして與へ、此咒を戸毎に貼して、神佛を念ずべし。あやまちして身を亡ぶることなかれと教ふるに、恐れみ且よろこびて家にかへり、朱符を門に貼し、窓に貼して、おもき物齋にこもりける。其夜三更の比、おそろしきこゑして、あなにくや。此所にたふとき符文を設けつるよとつぶやきて、復び聲なし。恐ろしさのあまりに、長き夜をかこつ。程なく夜明けぬるに、生出でて、急ぎ彦六が方の壁

黑棚—ちがひ棚

たゆき眼—疲れたる眼

まりを來て、細き徑あり。こゝよりも一丁ばかりをあゆみて、小暗き林の裏にちひさき草屋あり。竹の扉のわびしきに、七日あまりの月のあかくさし入りて、ほどなき庭の荒れたるさへ見ゆ。ほそき燈火の光、窓の紙を漏りてうらさびし。こゝに待せ給へとて、内に入りぬ。苔むしたる古井のもとに、立ちて見入るに、唐紙すこし開けたる間より、火影吹きあふちて、黑棚のきらめきたるもゆかしく覺ゆ。女出來りて　御訪のよし申しつるに、入らせ給へ。物隔ててかたりまゐらせんと、端の方へ膝行り出給ふ。彼所に入せ給へとて、前栽をめぐりて、奥の方へともなひ行く。二間の客殿を人の入るばかりあけて、低き屛風を立て、古き衾の端出でて、主はこゝにありと見えたり。正太郎かなたに向ひて、はかなくて病にさへそませ給ふよし。おのれもいとほしき妻を亡ひて侍れば、おなじ悲みをも問ひかはし參らせんとて、推して詣侍りぬといふ。あるじの女屛風すこし引きあけて、めづらしくもあひ見奉るものかな。つらき報の程しらせまゐらせんと云ふに、驚きて見れば、古郷に殘しゝ磯良なり。顏の色いと青ざめて、たゆき眼すさまじく、我を指たる手の青く細りたる恐しさに、あなやと叫んで、たふれ死す。時うつりて生出づ。眼をほそくひらき見るに、家と見しはもとありし荒野の三昧堂にて、黑き

心放―なぐさみ

刀自の君―家婦の君

心のうつるとは―心ひかるゝとは

へり見て、我身夕々ごとに詣で侍るには、殿はかならず前に詣で給ふ。さりがたき御方に別れ給ふにてやまさん。御心のうちはかり奉らせて悲しと、潸然となく。正太郎いふ。さる事に侍り。十日ばかりさきに、かなしき婦を亡ひたるが、世に殘りて憑なく侍れば、こゝに詣づることをこそ、心放にものし侍るなれ。御許にもさこそましますなるべし。女いふ。かく詣でつかふまつるは、憑みつる君の御迹にて、いつ〳〵の日こゝに葬り奉る。家に殘ります女君のあまりに歎かせ給ひて、此頃はむづかしき病にそませ給ふなれば、かくかはりまゐらせて、香花をはこび侍るなりといふ。正太郎云ふ。刀自の君の病み給ふもいとことわりなるものを、そも古人は何人にて、家は何地に住ませ給ふや。女いふ。憑みつる君は此國には由縁ある御方なりしが、人の讒にあひて領所をも失ひ、今は此野の隈に侘びしくて住ませ給ふ。女君は國の鄰までも聞え給ふ美人なるが、此君によりてぞ家所領をも亡し給ひぬれとかたる。此物がたりに心のうつるとはなくて、さてしもその君のはかなくて住せ給ふは、こゝ近きにや。訪ひまゐらせて、同じ悲をもかたり和まん。倶し給へといふ。家は殿の來らせ給ふ道の、すこし引入りたる方なり。便なくませば時々訪せ給へ。待侘び給はんものをと、前に立ちてあゆむ。二丁あ

幽靈
窮鬼―生靈物怪
曠野の煙―火葬をいふ
黃泉―死して後魂の行く所
しみら―專ら

あらず。此禍に係る悲しさに、みづからも食さへわすれて抱き扶くれども、只音をのみ泣きて、胸窮り堪がたげに、さむれば常にかはることもなし。窮鬼といふものにや。古鄕に捨てし人のもしやと、獨胸苦し。彥六これを諫めて、いかでさる事のあらん。疫といふものの惱しきは、あまた見來りぬ。熱き心少しさめたらんには、夢わすれたるやうなるべしと、やすげにいふぞたのみなる。看る〳〵露ばかりのしるしもなく、七日にして空しくなりぬ。天を仰ぎ、地を敲きて哭悲しみ、ともにもと物狂はしきを、さまざまにいひ和めて、かくてはとて遂に曠野の烟となしはてぬ。骨をひろひ、壠を築きて、塔婆を營み、僧を迎へ、菩提のことねんごろに弔ひける。正太郎今は俯して黃泉をしたへども、招魂の法をもとむる方なく、仰ぎて古鄕をおもへば、かへりて地下よりも遠きこゝちせられ、前に渡なく、うしろに途をうしなひ、晝はしみらに打臥して、夕々每には壠のものに詣でて見れば、小草はやくも繁りて、蟲のこゑすゞろに悲し。此秋のわびしきは、我身ひとつぞと思ひつゞくるに、天雲のよそにも同じなげきありて、ならびたる新壠あり。こゝに詣づる女の、世にも悲しげなる形して、花をたむけ、水を灌ぎたるを見て、あな哀、わかき御許の、かく氣疎きあら野にさまよひ給ふよといふに、女か

路の代―旅費

よろづに頼なく―所詮回復の見込なく

鬼化―物怪

淺しき奴なりとも、京は人の情もありと聞けば、渠をば京に送りやりて、榮ある人に仕へさせたく思ふなり。我かくてあれば、萬に貧しかりぬべし。路の代、身にまとふ物も誰がはかりごとしてあたへん。御許此事をよくして、渠を惠み給へと、ねんごろにあつらへけるを、磯良いとも喜しく、此事安くおぼし給へとて、私におのが衣服調度を金に貿へ、猶香央の母が許へも、僞りて金を乞ひ、正太郎に與へける。此金を得て、密に家を脱れ出で、袖なるものを倶して、京の方へ迯げのぼりける。かくまでたばかられしかば、今はひたすらにうらみ歎きて、遂に重き病に臥しにけり。井澤香央の人々、彼を悪み此を哀みて、專ら醫の驗をもとむれども、粥さへ日々にすたりて、よろづにたのみなくぞ見えにける。こゝに播磨の國印南郡荒井の里に彦六といふ男あり。渠は袖とちかき從弟の因あれば、先づこれを訪うて、しばらく足を休めける。彦六、正太郎にむかひて、京なりとて人ごとに頼しくもあらじ。こゝに駐られよ。一飯をわけて、ともに過活のはかりごとあらんと、たのみある詞に、心おちゐて、こゝに住むべきに定めけり。彦六我が住む鄰なる破屋をかりて住ましめ、友得たりとて怡びけり。しかるに袖、風のこゝちといひしが、何となく惱み出でて、鬼化のやうに狂はしげなれば、こゝに來りて幾日も

異域此縄繋不可易」

大虚にのみ聞きなして―意とゞめずして

なれば、深く疑はず。妻のことばに從きて、婚儀とゝのへ、兩家の親族氏族、鶴の千とせ龜の萬代をうたひことぶきけり。香央の女子磯良、かしこに往きてより、夙に起きおそく臥して、常に舅姑の傍を去らず、夫が性をはかりて、心をつくして仕へければ、井澤夫婦は孝節を感でたしとて、歡に耐へねば、正太郎も其志に愛でて、むつまじくかたらひけり。されどおのがまゝの奸けたる性はいかにせん。いつの比より鞆の津の袖といふ妓女に、ふかくなじみて、遂に贖ひ出し、ちかき里に別莊をしつらひ、かしこに日をかさねて、家にかへらず。磯良これを怨みて、或は舅姑の忿に托せて諫め、或日は徒なる心をうらみかこてども、大虚にのみ聞きなして、後は月をわたりてかへり來らず。父は磯良が切なる行止を見るに忍びず、正太郎を責めて押籠めける。磯良これを悲しがりて、朝夕の奴も殊に實やかに、かつ袖が方へも私に物を餉りて、信のかぎりをぞつくしける。一日父が宿にあらぬ間に、正太郎磯良をかたらひていふ。御許の信ある操を見て、今はおのれが身の罪をくゆるばかりなり。かの女をも古郷に送りて後、父の面を和め奉らん。渠は播磨の印南野の者なるが、親もなき身の淺しくてあるを、いとかなしく思ひて、憐をもかけつるなり。我に捨てられなば、はた船泊の妓女となるべし。おなじ

心もおちゐ侍らず—心も安ぜず

祝部—神主

赤繩に繫ぐ—夫婦の約をなす事幽怪錄に「問囊中赤繩云繫夫婦之足雖仇家

ていふ。我女子既に十七歳になりぬれば、朝夕によき人がな娶せんものをと、心もおちゐ侍らず。はやく日をえらみて、聘禮を納れ給へと、強にすゝむれば、盟約すでになりて、井澤にかへりごとす。卽て聘禮を厚くとゝのへて送り納れ、よき日をとりて、婚儀をもよほしけり。猶幸を神に祈るとて、巫子祝部を召しあつめて、御湯をたてまつる。そも〳〵當社に祈誓する人は、數の祓物を供へて、御湯を奉り、吉祥凶祥を占ふ。巫子祝詞をはり、湯の沸き上るにおよびて、吉祥には釜の鳴音牛の吼ゆるが如し。凶きは釜に音なし。是を吉備津の御釜祓といふ。さるに香央が家の事は、神の祈けさせ給はぬにや。只秋の蟲の叢にすだくばかりの聲もなし。こゝに疑をおこして、此祥を妻に語らふ。妻更に疑はず。御釜の音なかりしは、祝部等が身の清からぬにぞあらめ。既に聘禮を納めしうへ、かの赤繩に繫ぎては、仇ある家、異なる域なりとも易ふべからずと聞くものを、ことに井澤は弓の本末をもしりたる人の流にて、掟ある家と聞けば、今否むとも承はじ。殊に佳婿の麗なるをほの聞きて、我兒も日をかぞへて待ちわぶる物を、今のよからぬ言を聞くものならば、不慮なる事をや仕出でん。其時悔ゆるとも返らじと、言をつくして諫むるは、まことに女の意ばへなるべし。香央も從來ねがふ因

嘉吉―後花園帝の御宇

大人―尊稱

の憂をもとむるにぞありける。禽を制するは氣にあり、婦を制するは其夫の雄々しきにありといふは、現にさることぞかし。吉備の國賀夜郡庭妹の郷に、井澤庄太夫といふものあり。祖父は播磨の赤松に仕へしが、去んぬる嘉吉元年の亂に、かの舘を去りてこゝに來り、庄太夫にいたるまで三代を經て、春耕し秋收めて、家豐に暮しけり。一子正太郎なるもの、農業を厭ふあまりに、酒に亂れ色に耽りて、父が掟を守らず。父母これを歎きて私にはかるは、あはれ良人の女子の貌よきを娶りてあはせなば、渠が身もおのづから脩まりなんとて、あまねく國中をもとむるに、幸に媒氏ありていふ。吉備津の神主香央造酒が女子は、うまれだち秀麗にて、父母にもよく仕へ、かつ歌をよみ、箏に工なり。從來かの家は吉備の鴨別が裔にて、家系も正しければ、君が家に因み給ふは、果吉祥なるべし。此事の就らんは老が願ふ所なり。大人の御心いかにおぼさんやといふ。庄太夫大に怡び、よくも說かせ給ふものかな。この事我家にとりて千年の計なりといへども、香央は此國の貴族にて、我は氏なき田夫なり。門戸敵すべからねば、恐くは肯ひ給はじ。媒氏の翁笑をつくりて、大人の謙り給ふ事甚し。我必ず萬歲を諷ふべしと、往きて香央に說けば、彼方にもよろこびつゝ、妻なるものにもかたらふに、妻もいさみ

鄰の口ー鄰の謗

霹靂ーはげしき雷

る者なり。例の悪業なせさせ給ひそといふ詞も、人々の形も、遠く雲井に行くがごとし。親子は氣絶えてしばしがうち死入りけるが、しのゝめの明けゆく空に、ふる露の冷やかなるに生出でしかど、いまだ明けきらぬ恐しさに、大師の御名をせはしく唱へつゝ、漸日出づると見て、いそぎ山をくだり、京にかへりて、藥鍼の保養をなしける。一日夢然三條の橋を過ぐる時、悪ぎやく塚の事思ひ出づるより、かの寺眺められて、白晝ながら物凄じくありけると、京人にかたりしをそがまゝに書るしぬ。

○吉備津の釜

妬婦の養ひがたきも、老ての後其功を知ると。咨これ何人の語ぞや。害の甚しからぬも、商工を妨げ物を破りて、垣の鄰の口をふせぎがたく、害の大いなるに及びては、家を失ひ、國をほろぼして、天が下に笑を傳ふ。いにしへより此毒にあたる人、幾許といふ事を知らず。死して蟒となり、或は霹靂を震うて怨を報ゆる類は、其肉を醢にするとも飽くべからず。さるためしは希なり。夫のおのれをよく脩めて教へなば、この患おのづから避くべきものを、只かりそめなる徒ごとに、女の慳しき性を募らしめて、其身

頭に髪あらば云々—驚怖失心の貌
修羅の時—闘争の始まるべき時刻
泡吹かせん—周章させん

三十郎、不破萬作、かく云ふは紹巴法橋なり。汝等不思議の御目見つかまつりたるは、前のことばいそぎ申上げよといふ。頭に髪あらばふとるべきばかりに凄じく、肝魂も空にかへるこゝちして、振ふ〳〵頭陀袋より清き紙取出でて、筆もしどろに書きつけてさし出すを、主殿取りてたかく吟し上ぐる。

　鳥の音も祕密の山の茂みかな

貴人聞せ給ひて、口がしこくもつかまつりしな。誰ぞ此末句をまうせとのたまふに、山田三十郎座をすゝみて、某つかうまつらんとて、しばしうちかたぶきてかくなん。

　芥子たき明すみじか夜の牀

いかゞあるべきと紹巴に見する。よろしくまうされたりと、公の前に出すを見たまひて、片羽にもあらぬはと興じ給ひて、又杯を揚げてめぐらし給ふ。淡路と聞えし人、にはかに色を違へて、はや修羅の時にや。阿修羅ども御迎に來ると聞え侍る。立たせ給へといへば、一座の人々忽面に血を灌ぎし如く、いざ石田増田が徒に、今夜も泡吹かせんと勇みて立躁ぐ。秀次、木村に向はせ給ひ、よしなき奴に我姿を見せつるぞ。他二人も修羅につれ來れと仰せある。老臣の人々かけ隔たりて、聲をそろへ、いまだ命つきざ

某が短句云―某が俳諧は耳なれ給ひて興なからん

殿下―關白にも用ふる尊稱

は幾らをもしいづるなり。足下は歌よむ人にもおはせで、此歌の意異み給ふは、用意ある事にこそと篤く感でにける。貴人をはじめ人々も、此ことわりを、頻に感でさせ給ふ。御堂のうしろの方に、佛法々々と啼音ちかく聞ゆるに、貴人杯をあげ給ひて、例の鳥絶えて鳴かざりしに、今夜の酒宴に榮あるぞ、紹巴いかにと仰せ給ふ。法師かしこまりて、某が短句公にも御耳すゝぎましまさん。こゝに旅人の通夜しけるが、今の世の俳諧風をまうして侍る。公にはめづらしくおはさんに、召して聞せ給へといふ。それ召せと仰せらるゝに、若きさむらひ夢然が方へむかひ、召し給ふぞ、近う參れと云ふ。夢現ともわかで、おそろしきまゝに、御まのあたりへはひ出づる。法師夢然にむかひ、前によみつる詞を公に申上げよといふ。夢然恐る〳〵、何をか申しつる。更に覺え侍らず。只赦し給はれといふ。法師かさねて祕密の山とは申さゞるや。殿下の問せ給ふ。いそぎ申上げよといふ。夢然いよ〳〵恐れて、殿下と仰せ出され侍るは、誰にてわたらせ給ひ、かゝる深山に夜宴をもよほし給ふや。更にいぶかしき事に侍るといふ。法師答へて、殿下と申奉るは、關白秀次公にてわたらせ給ふ。人々は木村常陸介、雀部淡路、白江備後、熊谷大膳、粟野杢、日比野下野、山口少雲、丸毛不心、隆西入道、山本主殿、山田

風雅集—萩原法皇御撰の歌集光明帝貞和二年十一月九日成る

玉川てふ川は國々にありて—世に六玉川といひて六國にあり

や。いぶかしき事を足下にはいかに辨へ給ふ。法師笑をふくみて云ふは、この歌は風雅集に撰み入れ給ふ。其端詞に、高野の奥の院へまゐる道に、玉川といふ河の水上に、毒蟲おほかりければ、此流を飲むまじきよしをしめしおきて、後よみ侍りけると、ことわらせ給へば、足下のおぼえ給ふ如くなり。されど今の御疑僻言ならぬは、大師は神通自在にして、隱神を役して道なきをひらき、巖を鐫るには土を穿つよりも易く、大蛇を禁しめ化鳥を奉仕へしめ給ふ事、天が下の人の仰ぎたてまつる功なるを思ふには、此歌の端の詞ぞまことしからね。もとより此玉川てふ川は國々にありて、いづれをよめる歌も、其流のきよきを譽げしなるを思へば、こゝの玉川も毒ある流にはあらで、歌の意もかばかり名に負ふ河の此山にあるを、こゝに詣づる人は忘る〱も、流の清きに愛でて、手に掬びつらんとよませ給ふにやあらんを、後のひとの毒ありといふ狂言より、此端詞はつくりなせしものかとも思はるゝなり。又深く疑ふときには、此歌の調今の京の初の口風にもあらず。おほよそ此國の古語に、玉蘰、玉簾、珠衣の類は、形をほめ清きを賞むる語なるから、清水をも玉水、玉の井、玉川ともほむるなり。毒ある流をなど玉てふ語は冠らしめん。强に佛をたふとむ人の、歌の意に細妙からぬは、これほどの訛

瓶子—酒器
紹巴—姓里村半醒子と號す連歌に名あり慶長五年歿す
大德—高僧の義、弘法大師を云ふ

らめと奏す。又一群の足音して、威儀ある武士、頭圓けたる入道等うち交りて、禮たてまつりて堂に昇る。貴人只今來りし武士にむかひて、常陸は何とておそく參りたるぞとあれば、かの武士いふ。白江熊谷の兩士、公に大御酒すゝめたてまつるとて、實やかなるに、臣も鮮き物一種調じまゐらせんため、御從に後れたてまつりぬと奏す。はやく酒殽をつらねてすゝめまゐらすれば、萬作酌まゐれとぞ仰せらる。恐りて美相の若士膝行りよりて、瓶子を捧ぐ。かなたこなたに杯をめぐらして、いと興ありげなり。貴人又曰はく、絕えて紹巴が說話を聞かず。召せと宣ふに、呼びつぐ樣なりしが、我跪りし背の方より、大なる法師の面うちひらめきて、目鼻あざやかなる人の、僧衣かいつくろひて、座の末にまゐれり。貴人古語かれこれ問辨へ給ふに、詳に答へたてまつるを、いと〱感でさせ給うて、他に祿とらせよと宣ふ。一人の武士、かの法師に問ひていふ。此山は大德の啓き給うて、土石草木も靈なきはあらずと聞く。さるに玉川の流には毒あり。人飮む時は斃るが故に、大師のよませ給ふ歌とて、

　わすれても汲みやしつらん旅人の高野の奥の玉川のみづ

といふことを聞傳へたり。大德のさすがに此毒ある流をば、など涸せては果し給はぬ

松の尾の峯—山城國にあり、藤原光俊朝臣の詠

前驅—さきをおふ武士

松の尾の峯しづかなる曙にあふぎて聞けば佛法僧啼く

むかし最福寺の延朗法師は、世にならびなき法華者なりしほどに、松の尾の御神、此鳥をして常に延朗につかへしめ給ふよしをいひ傳ふれば、かの神垣にも巣むよしは聞えぬ。こよひの奇妙既に一鳥聲あり。我こゝにありて心なからんやとて、平生の樂とする俳諧風の十七言を、しばしうちかたぶきていひ出でける。

鳥の音も祕密の山の茂みかな

旅硯とり出でて、御燈の光に書いつけ、今一聲もがなと耳を傾くるに、思ひがけずも遠く寺院の方より、前を追ふ聲の嚴めしく聞えて、やゝ近づき來り、何人の夜深けて詣給ふやと、異くも恐しく、親子顔を見あはせて息をつめ、そなたをのみまもり居るに、はや前驅の若侍橋板をあらゝかに踏みてこゝに來る。おどろきて堂の右に潛みかくるゝを、武士はやく見つけて、何者なるぞ。殿下のわたらせ給ふ。疾下りよといふに、あわたゞしく簀子をくだり、土に俯して跪る程なく、多くの足音聞ゆる中に、沓音高く響きて、烏帽子直衣めしたる貴人、堂に上り給へば、從者の武士四五人ばかり、右左に座を設く。かの貴人人々に向ひて、誰々はなど來らざると仰せらるゝに、やがてぞ參りつ

三鈷—佛具獨鈷の類

一世ならぬ善縁—前世からのよき因縁

詩偈—佛頌

寒林云々—僧空海著性靈集に在り

三寶—佛法僧をいふ

にわたり給ひ、あの國にて感でさせ給ふ事おはして、此三鈷のとゞまる所、我道を揚ぐる靈地なりとて、杳冥にむかひて抛げさせ給ふが、はた此山にとゞまりぬる。壇場の御前なる三鈷の松こそ、此物の落ちとゞまりし地なりと聞く。すべて此山の草木泉石靈ならざるはあらずとなん。こよひ不思議にもこゝに一夜をかり奉る事、一世ならぬ善縁なり。儞弱きとて努々信心怠るべからずと、小かにかたるも、清みて心ぼそし。御廟のうしろの林にと覺えて、佛法々々となく鳥の音、山彦にこたへて近く聞ゆ。夢然目さむる心ちして、あなめづらし。あの啼鳥こそ、佛法僧といふならめ。かねて此山に栖みつるとは聞きしかど、まさに其音を聞きしといふ人もなきに、こよひのやどり、まことに滅罪生善の祥なるや。かの鳥は清淨の地をえらみて棲めるよしなり。上野の國迦葉山、下野の國二荒山、山城の醍醐の峯、河内の杵長山、就中此山にすむ事、大師の詩偈ありて、世の人よくしれり。

寒林獨座草堂曉　三寶之聲聞㆓一鳥㆒
一鳥有㆑聲人有㆑心　性心雲水倶了々

又ふるき歌に、

艱みて

扶桑—日本

大師—弘法大師

法施—説教念佛などすること

道にさかふ云云—道に接したる河の水音

し。此山すべて旅人に一夜をかす事なしとかたる。いかゞはせん、さすがにも老の身の、嶮しき山路を來しがうへに、事のよしを聞きて、大きに心倦みつかれぬ。作之治がいふ。日もくれ足も痛みて、いかゞしてあまたの道を下らん。弱き身は草に臥すとも厭なし。只病み給はん事の悲しさよ。夢然云ふ。旅はかゝるをこそ哀れともいふなれ。今夜脚をやぶり、倦みつかれて山をくだるとも、おのが古郷にもあらず。翌のみち又はかりがたし。此山は扶桑第一の靈場、大師の廣徳かたるに盡きず。殊にも來りて通夜し奉り、後世の事たのみ聞ゆべきに、幸の時なれば、靈廟に夜もすがら法施し奉るべしとて、杉の下道の小暗きを行き〳〵、靈廟の前なる燈籠堂の簀の子に上りて、雨具うち敷き座を設けて、閑に念佛しつゝも、夜の更けゆくをわびてぞある。方五十町に開きて、あやしげなる林も見えず。小石だも掃ひし福田ながら、さすがにこゝは寺院遠く、陀羅尼鈴錫の音も聞えず、木立は雲をしのぎて茂みさび、道にさかふ水の音、ほそ〳〵と淸みわたりて、物がなしき。寢られぬまゝに、夢然かたりていふ。そも〳〵大師の神化、土石草木も靈をひらきて、八百年あまりの今にいたりて、いよゝあらたに、いよゝたふとし。遺芳歴踪多きが中に、この山なん第一の道場なり。大師いまそかりける昔時、とほく唐土

浦安の國―日本
不知火の―筑紫の枕詞
別業―別莊
道のゆくて云々―途中の道のけはしきに行き

雨月物語 卷之三

○佛法僧

浦安の國久しく、民作業を樂むあまりに、春は花の下に息らひ、秋は錦の林を尋ね、不知火の筑紫路も知らではと檝枕する人の、富士筑波の嶺々を心に占るぞそゞろなるかな。伊勢の相可といふ鄕に、拜志氏の人、世をはやく嗣に讓り、忌むこともなく頭おろして、名を夢然と改め、從來身に病さへなくて、彼此の旅寢を老の樂とする。季子作之治なるものが、生長の頑なるをうれひて、京の人見するとて、一月あまり二條の別業に逗まりて、三月の末吉野の奧の花を見て、知れる寺院に七日ばかりかたらひ、此ついでに、いまだ高野の山を見ず、いざとて、夏のはじめ、青葉の茂みをわけつゝ、天の川といふより踰えて、摩尼の御山にいたる。道のゆくての嶮しきになづみて、おもはずも日傾きぬ。壇場諸堂靈廟、殘なく拜みめぐりて、こゝに宿からんといへど、ふつに答ふるものなし。そこを行く人に所の掟をきけば、寺院僧坊に便なき人は、麓に下りて明かすべ

紙繭―紙絹

古き物がたり―古今著聞集

りける。其終焉に臨みて、畫く所の鯉魚數枚をとりて湖に散せば、畫ける魚紙繭をはなれて水に遊戯す。こゝをもて興義が繪世に傳はらず。その弟子成光なるもの、興義が神妙をつたへて時に名あり。閑院の殿の障子に鷄を畫きしに、生ける鷄この繪を見て、蹴たるよしを、古き物がたりに載せたり。

嗚呼—愚者
旁等—諸君

かさねて思ふに、今は堪へがたし。たとひ此餌を飲むとも、嗚呼に捕れんやは。もとより他は相識ものなれば、何のはゞかりかあらんとて、遂に餌をのむ。文四はやく緡を収めて我を捕ふ。こはいかにするぞと叫びぬれども、他かつて聞かず顔にもてなして、縄をもて我腮を貫ぬき、葦間に船をつなぎ、我を籠に押入れて、君が門に進入る。君は賢弟と南面の間に奕して遊ばせたまふ。掃守傍に侍りて菓を啗ふ。文四がもて來し大魚を見て、人々大に感でさせたまふ。我其とき人々にむかひ、聲をはり上げて、旁等は興義をわすれたまふか。宥させたまへ。寺にかへさせたまへと連に叫びぬれど、人々しらぬ形にもてなして、只手を拍つて喜びたまふ。鱠手なるもの、まづ我兩眼を左手の指にてつよくとらへ、右手に礪ぎすませし刀をとりて、俎盤にのぼし、既に切るべかりしとき、我くるしさのあまりに大聲をあげて、佛弟子を害する例やある。我を助けよ助けよと、なき叫びぬれど聞入れず。終に切らるゝとおぼえて、夢醒めたりとかたる。人々大に感で異み、師が物がたりにつきて思ふに、其度ごとに魚の口の動くを見れど、更に聲を出すことなし。かゝる事まのあたりに見しこそいと不思議なれとて、従者を家に走らしめて殘れる鱠を湖に捨てさせけり。興義これより病愈えて、杳の後天年をもて死

水府—龍宮城
志賀の大曲—近江の琵琶湖にあり
波にうつろふ朱の垣—辨才天の朱の垣ならん
河伯—河神

功徳多し。今江に入りて魚の遊躍をねがふ。權に金鯉が服を授けて、水府のたのしみをせさせ給ふ。古餌の香しきに昧されて、釣の絲にかゝり身を亡ふことなかれといひて、去りて見えずなりぬ。不思議のあまりに、おのが身をかへり見れば、いつのまに鱗金光を備へて、ひとつの鯉魚と化しぬ。あやしとも思はで、尾を振り鰭を動かして、心のまゝに逍遙す。まづ長等の山おろし、立ちゐる浪に身をのせて、志賀の大曲の汀に遊べば、かち人の裳のすそ濕すゆきかひに驚されて、比良の高山影うつる深き水底に潜くとすれど、かくれ堅田の漁火によるぞうつゝなき。ぬば玉の夜中の潟にやどる月は、鏡の山の峯に清みて、八十の湊の八十隈もなくておもしろ。沖津島山、竹生島、波にうつろふ朱の垣こそおどろかるれ。さしも伊吹の山風に、朝妻船も漕出づれば、蘆間の夢さまされ、矢橋の渡する人の水なれ棹をのがれては、瀬田の橋守にいくそたびか追れぬ。日あたゝかなれば浮び、風あらきときは千尋の底に遊ぶ。急にも飢ゑて食ほしげなるに、彼此に求食得ずして狂ひゆくほどに、忽文四が釣を垂るゝにあふ。その餌はなはだ香し。心又河伯の戒を守りて思ふ。我は佛の御弟子なり。しばし食を求め得ずとも、なぞもあさましく魚の餌を飲むべきとて其所を去る。しばしありて飢ます〳〵甚しければ、

奕の手段—碁の手なみ
鱠手—料理人
籠の鳥の雲井にかへる—自由に快きことの喩
海若—海神

碁を圍みておはす。掃守傍に侍りて、桃の實の大なるを啗ひつゝ奕の手段を見る。漁父が大魚を携來るを喜びて、高杯に盛りたる桃をあたへ、又杯をたまうて三獻飮しめたまふ。鱠手したり顔に魚をとり出でて鱠にせしまで、法師がいふ所たがはでそあるらめと云ふに、助の人々此事を聞きて、或は異み或はこゝち惑ひて、かく詳なる言のよしを頻に尋づぬるに、興義かたりていふ。我此頃病にくるしみて堪がたきあまり、其死したるをもしらず。熱きこゝちすこし冷さんものをと、杖に扶けられて門を出づれば、病もやゝ忘れたるやうにて、籠の鳥の雲井にかへるこゝちす。山となく里となく行き行きて、又江の畔に出づ。湖水の碧なるを見るより、現なき心に浴びて遊びなんとて、そこに衣を脱去てて、身を跳らして深きに飛入りつも、彼此に游ぎめぐるに、幼きより水に狎れたるにもあらぬが、慾ふにまかせて戲れけり。今思へば愚なる夢ごころなりし。されども人の水に浮ぶは、魚のこゝろよきにはしかず。こゝにて又魚の遊を羨むこゝろおこりぬ。傍にひとつの大魚ありていふ。師のねがふ事いとやすし。待せたまへ、とて杳の底に去くと見しに、しばしして冠裝束したる人の前の大魚に胯りて、許多の鼇魚を率ゐて浮びきたり、我にむかひていふ。海若の詔あり。老僧かねて放生の

殿原―人々

露たがはじ―少しも違ふまじ

路次の勞云云―道すがらのつかれを謝しければ

がりて、人々にむかひ、我人事をわすれて、既に久しき日をか過しけん。衆弟等いふ。師三日前に息たえ給ひぬ。寺中の人々をはじめ、日頃睦まじくかたり給ふ殿原も詣でたまひて、葬の事をも計畫りたまひぬれど、只師が心頭の暖なるを見て、柩にも藏めでかく守り侍りしに、今や蘇生りたまふにつきて、かしこくも物せざりしよと怡びあへり。興義點頭きていふ。誰にもあれ一人、檀家の平の助の殿の館に詣りて告さんは、法師こそ不思議に生侍れ。君今酒を酌み、鮮き鱠をつくらしめたまふ。しばらく宴を罷めて寺に詣でさせたまへ。稀有の物語聞えまゐらせんとて、彼の人々のある形を見よ。我詞に露たがはじ、といふ。使異みながら、彼館に往きて其由をいひ入れてうかゞひ見るに、主の助をはじめ、令弟の十郎、家の子掃守など居めぐりて、酒を酌みゐたる。師が詞のたがはぬを奇とす。彼館の人々此ことを聞きて大に異み、先箸を止めて、十郎掃守をも召具して寺に到る。興義枕をあげて、路次の勞をかたじけなうすれば、助も蘇生の賀を述ぶ。興義先問うていふ。君試に我いふ事を聞せたまへ。かの漁父文四に魚をあつらへ給ふことありや。助驚きて、まことにさることあり。いかにしてしらせたまふや。興義、かの漁父三尺あまりの魚を籠に入れて、君が門に入る。君は賢弟と南面の所に、

延長—醍醐帝の御宇

細妙—精妙に同じ

鮮—鮮肉

○夢應の鯉魚

むかし延長の頃、三井寺に興義といふ僧ありけり。繪に巧なるをもて名を世にゆるされけり。常に畫く所、佛像山水花鳥を事とせず。寺務の間ある日は、湖に小船をうかべて、網引釣する泉郎に錢をあたへ、獲たる魚をもとの江に放ちて、其魚の遊躍ぶを見ては畫きけるほどに、年を經て細妙にいたりけり。或ときは繪に心を凝して眠をさそへば、ゆめの裏に江に入りて、大小の魚とともに遊ぶ。覺むれば卽て見つるまゝを畫きて壁に貼し、みづから呼びて夢應の鯉魚と名付けけり。その繪の妙なるを感て、乞要むるもの前後をあらそへば、只花鳥山水は乞ふにまかせてあたへ、鯉魚の繪はあながちに惜みて、人每に戲れていふ。生を殺し鮮を喰ふ凡俗の人に、法師の養ふ魚必ずしも與へずとなん。其繪と俳諧とともに天下にきこえけり。一年病にかゝりて、七日を經て忽に眼を閉ぢ、息絶えてむなしくなりぬ。徒弟友どちあつまりて、歎惜みけるが、只心頭のあたりの微し暖なるにぞ、若やと居めぐりて守りつも、三日を經にけるに、手足すこし動出づるやうなりしが、忽長嘘を吐きて、眼をひらき、醒たるが如くに起きあ

手兒奈―原本手兒女に作る萬葉集卷三、九、十四等に見ゆ

麻衣に青衿つけて―古代の賤者の服裝

防人―外寇を防がんためおかれし武士

手兒子―手兒奈

いにしへの云々―こは萬葉集にあり

ふ。翁が祖父のその祖父すらも生れぬ、はるかの往古の事よ。此鄕に眞野の手兒奈といふいと美しき娘子ありけり。家貧しければ、身には麻衣に青衿つけて、髮だも梳らず。履だも穿かずてあれど、面は望の夜の月のごと、笑めば花の艶ふがごと、綾錦につゝめる京女臈にも勝りたりとて、この里人はもとより、京の防人等、國の鄰の人までも、言をよせて戀慕ばざるはなかりしを、手兒奈物うき事に思沈みつゝ、おほくの人の心に報いずとて、此浦曲の波に身を投げしことを、世の哀なる例とて、いにしへの人は歌にも詠みたまひてかたり傳へしを、翁が稚かりしとき、母のおもしろく語り給ふをさへ、いと哀なることにきゝしを、此亡人の心は、昔の手兒子がをさなき心に幾等をかまさりて悲しかりけんと、かたる〳〵涙さしぐみて止めかぬるぞ、老は物えこらへぬなりけり。勝四郎が悲はいふべくもなし。此物がたりを聞きて、おもふあまりを田舍人の口鈍くもよみける。

いにしへの眞間の手兒奈を斯ばかり戀ひてしあらん眞間のてこなを

思ふ心の端ばかりをもえいはぬぞ、よくいふ人の心にもまさりて、あはれなりとや云はん。かの國にしば〳〵かよふ商人の聞傳へてかたりけるなりき。

烈婦―宮木のこと
足蹇ぎて―足をやみて歩行しがたきこと
矢武に―心づよく
蘋蘩行潦―水向に同じ

翁といふ人なり。勝四郎、翁が高齢をことぶきて、次に京に行きて心ならずも逗りしより、前夜のあやしきまでを詳にかたりて、翁が壠を築きて祭りたまふ恩のかたじけなきを告げつゝも、涙とゞめがたし。翁いふ。吾主遠くゆきたまひて後は、夏の比より干戈を揮出でて、里人は所々に遁れ、弱き者どもは軍民に召さるゝほどに、桑田にはかに狐兎の叢となる。只烈婦のみ主が秋を約ひたまふを守りて、家を出で給はず。翁も又足蹇ぎて百歩を難しとすれば、深く閉てこもりて出でず。一旦樹神などいふおそろしき鬼の栖所となりたりしを、稚き女子の矢武におはするぞ、老が物見たる中のあはれなりし。秋去り春來りて、其年の八月十日といふに死りたまふ。惆しさのあまりに、老が手づから土を運びて柩を藏め、其終焉に殘したまひし筆の跡を壠のしるしとして、蘋蘩行潦の祭も心ばかりにものしけるが、翁もとより筆とる事をしも知らねば、其月日を紀すこともえせず。寺院遠ければ贈號を求むる方もなくて、五とせを過ごし侍るなり。今の物語をきくに、必ず烈婦の魂の來り給ひて、舊しき恨を聞えたまふなるべし。復かしこに行きて、念比にとぶらひ給へ、とて杖を曳きて前に立ち、相ともに壠のまへに俯して、聲を放げて歎きつゝも、其夜はそこに念佛して明しける。寝られぬまゝに翁かたりてい

過活—活計

菩提を弔はせ—成佛を祈らせ

日高くさし昇りぬ。先ちかき家に行きて主を見るに、昔見し人にあらず。かへりて何國の人ぞと咎む。勝四郎禮ひていふ。この隣なる家の主なりしが、過活のため京に七とせまでありて、昨の夜かへりまゐりしに、既に荒廢みて人も住侍らず。妻なるものも死りしと見えて、壠の設も見えつるが、いつの年にともなきに、まさりて悲しく侍り。知らせたまはば教へ給へかし。主の男いふ。哀にも聞えたまふものかな。我こゝに住むもいまだ一年ばかりの事なれば、それよりはるかの昔に亡せたまふと見えて、住みたまふ人のありつる世は知り侍らず。すべてこの里の舊き人は、兵亂の初に逃げうせて、今住居する人は、大方他より移來る人なり。只一人の翁の侍るが、所に舊しき人と見えたまふ。時々あの家にゆきて、亡せたまふ人の菩提を弔はせ給ふなり。この翁こそ月日をも知らせたまふべし、といふ。勝四郎いふ。さては其翁の栖みたまふ家は何方にて侍るや。主いふ。こゝより百歩ばかり濱の方に、麻おほく種ゑたる畑の上にて、其所にちひさき庵して住せたまふなり、と教ふ。勝四郎よろこびて、かの家にゆきて見れば、七十可の翁の、腰は淺ましきまで屈まりたるが、庭竈のまへに圓坐敷きて茶を啜居る。翁も勝四郎と見るより、吾主何とておそく歸りたまふ、といふを見れば、この里に久しき漆間の

五更―今の午前四時

我身ひとつ「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとの身にして

水向―死者の靈をまつること

ひかゝり、庭は葎に埋れて、秋ならねども野らなる宿なりけり。さてしも臥したる妻はいづち行きけん見えず。狐などのしわざにやと思へば、かく荒果てぬれど故住みし家にたがはで、廣く造り作し奥わたりより、端の方、稲倉まで好みたるまゝの形なり。呆自れて足の踏所さへ失れたるやうなりしが、熟おもふに、妻は既に死りて、今は狐狸の住みかはりて、かく野らなる宿となりたれば、怪しき鬼の化して、ありし形を見せつるにてぞあるべき。若又我を慕ふ魂のかへり來りてかたりつるものか。思ひしことの露たがはざりしよと、更に涙さへ出でず。我身ひとつは故の身にしてと、あゆみ廻るに、むかし閨房にてありし所の簀子をはらひ、土を積みて壠とし、雨露をふせぐまうけもあり。夜の靈はこゝもとよりやと、恐しくも且なつかし。水向の具物せし中に、木の端を削りたるに、那須野紙のいたう古びて、文字もむら消して所々見定めがたき、正しく妻の筆の跡なり。法名といふものも年月もしるさで、三十一字に末期の心を哀にも展たり。

　　さりともと思ふ心にはかられて世にもけふまでいける命か

こゝにはじめて妻の死にたるを覺りて、大に叫びて倒伏す。去りとて何の年、何の月日に終りしさへ知らぬ淺しさよ。人は知りもやせんと、涙をとゞめて立出づれば、

楚襄王の故事、男女の會を云ふ
漢宮の幻―漢武帝の故事、意義前に同じ
玉と碎けても云々―操を守りて死すとも不義の妾は求めじ
逢ふを待つ間―人知れず逢ふを待つ間にこひ死なば何に代へたる命とかいはん

くりごとはてしぞなき。妻涙をとゞめて、一たび離參せて後、たのむの秋より前に、恐しき世の中となりて、里人は皆家を捨てて、海に漂ひ山に隱れば、適に殘りたる人は、多く虎狼の心ありて、かく寡となりしを便よしとや、言を巧みていざなへども、玉と碎けても瓦の全きにはならはじものをと、幾たびか辛苦を忍びぬる。銀河秋を告ぐれども、君は歸りたまはず、冬を待ち、春を迎へても消息なし。今は京にのぼりて尋ねまゐらせんと思ひしかど、丈夫さへ宥さゞる關の鎖を、いかで女の越ゆべき道もあらじと、軒端の松にかひなき宿に、狐鵂鶹を友として今日までは過ごしぬ。今は長き恨もはれ／＼となりぬることの喜しく侍り。逢ふを待つ間に戀死なんは、人しらぬ恨なるべしと、又よゝと泣くを、夜こそ短きに、と云ひなぐさめてともに臥しぬ。窓の紙松風を啜りて、夜もすがら涼しきに、途の長手に勞れ、熟く寢ねたり。五更の天明けゆく比、現なき心にもすゞろに寒かりければ、衾被かんとさぐる手に、何物にや籟々と音するに目さめぬ。面にひや／＼と物のこぼるゝを、雨や漏りぬるかと見れば、屋根は風にまくられてあれば、有明月のしらみて殘りたるも見ゆ。家は扉もあるやなし、簀垣朽頽れたる間より、荻薄たかく生出でて、朝露うちこぼるゝに、袖濕ぢてしぼるばかりなり。壁には蔦葛延

たれど—甚老いたれど

餬口ひて—養はれて

巫山の雲—

ゐりたれ。かはらで獨自淺茅が原に住みつることの不思議さよ、といふを、聞知りたれば、やがて戸を明くるに、いといたう黒く垢づきて、眼はおち入りたるやうに、結げたる髪も脊にかゝりて、故の人とも思はれず。夫を見て物をもいはで潸然と泣く。勝四郎も心くらみて、しばし物をもきこえざりしが、やゝしていふは、今までかくおはすと思ひなば、など年月を過すべき。去ぬる年、京にありつる日、鎌倉の兵亂を聞き、御所の師潰えしかば、總州に避けて禦ぎたまふ。管領これを攻むる事急なりといふ。其明雀部にわかれて、八月のはじめ京を立ちて、木曾路を來るに、山賊あまたに取りこめられ、衣服金銀殘なく掠められ、命ばかりを辛勞じて助りぬ。且里人のかたるを聞けば、東海東山の道はすべて新關を居ゑて人を駐むるよし、又きのふ京より節刀使もくだり給ひて、上杉に與し、總州の陣に向はせたまふ。本國の邊は疾に燒きはらはれ、馬の蹄尺地も間なしとかたるによりて、今は灰塵とやなり給ひけん。海にや沈みたまひけんと、ひたすらに思ひとゞめて、又京にのぼりぬるより、人に餬口ひて七年は過ごしけり。近曾すゞろに物のなつかしく有りしかば、せめて其蹤をも見たきまゝに歸りぬれど、かくて世におはせんとは努々思はざりしなり。巫山の雲、漢宮の幻にもあらざるやと、

泉下の人―彼世の人

繼橋―眞野の繼橋

いたうねび

逗り、由縁なき人の惠をうけて、いつまで生くべき命なるぞ。古鄕に捨てし人の消息をだにしらで、萱草おひぬる野方に、長々しき年月をすごしけるは、信なき己が心なりける物を、たとへ泉下の人となりて、ありつる世にはあらずとも、其あとをももとめて、壠をも築くべけれと、人々に志を告げて、五月雨のはれ間に手をわかちて、十日あまりを經て、古鄕にかへりつきぬ。此時日ははや西に沈みて、雨雲は落ちかゝるばかりに闇けれど、舊しく住みなれし里なれば、迷ふべうもあらじと、夏野わけ行くに、いにしへの繼橋も川瀨におちたれば、げに駒の足音もせぬに、田畑は荒れたき儘にすさみて、舊の道もわからず、ありつる人居もなし。たま〳〵此處彼處にのこる家に、人の住むとは見ゆるもあれど、昔には似つゝもあらね、いづれか我住みし家ぞと立惑ふに、こゝ二十歩ばかりを去りて、雷に摧れし松の聳えて立てるが、雲間の星の光に見えたるを、げに我軒の標こそ見えつると、先喜しきこゝちして歩行むに、家は故にかはらであり。人も住むと見えて、古戸の間より燈火の影もれて輝々とするに、他人や住む、もし其人や在すかと心躁しく、門に立ちよりて咳すれば、内にも速く聞きとりて、誰そと咎む。いたうねびたれど正しく妻の聲なるを聞きて、夢かと胸のみさわがれて、我こそ歸りま

落草―盜賊

産所―鄕里

同根の爭―同族の爭

一劫の云々―劫に成住壞空の四劫あり、こゝは住劫の盡きて此世の滅ぶるならんといふ意

を目ぐらしに蹈えけるに、落草ども道を塞へて、行李も残なく奪はれしが上に、人のかたるをきけば、是より東の方は所々に新關を居ゑて、旅客の往來をだに宥さゞるよし。さては消息をすべきたつきもなし。家も兵火にや亡びなん。妻も世に生きてあらじ。しからば古鄕とても鬼のすむ所なり、とてこゝより又京に引きかへすに、近江の國に入りて、にはかに心地あしく、熱き病を憂ふ。武佐といふ所に、兒玉嘉兵衞とて富貴の人あり。これは雀部が妻の産所なりければ、苦にたのみけるに、此人見捨てずしていたはりつも、醫をむかへて藥の事專なりし。やゝこゝち淸しくなりぬれば、篤き恩をかたじけなうす。されど歩む事はまだはかゞゝしからねば、今年は思ひがけずも此所に春を迎ふるに、いつのほどか此里にも友をもとめて、揉ざるに直き志を賞せられて、兒玉をはじめ誰々も頼しく交りけり。この後は京に出でて雀部をとぶらひ、又は近江に歸りて兒玉に身を托せ、七年がほどは夢のごとくに過ごしぬ。寛正二年畿内河内の國に、畠山が同根の爭果さゞれば、京ちかくも騒しきに、春の頃より瘟疫さかんに行れて、屍は衢に疊み、人の心も今や一劫の盡くるならんと、果敢なきかぎりを悲みける。勝四郎熟思ふに、かく落魄れてなす事もなき身の、何をたのみとて遠き國に

夕つけ鳥—鷄のこと
三貞—婦人三從の德
攻むる—原本責むるに作る、以下同じ
八州—關東八州
よき德—莫き利益
涿鹿の岐—戰場、蚩尤と黃帝と戰ひし所

身のうさは人しも告げじあふ坂の夕つけ鳥よ秋も暮れぬと

かくよめれども、國あまた隔てぬれば、いひおくるべき傳もなし。世の中騷しきにつれて、人の心も恐しくなりにけり。適間とぶらふ人も、宮木がかたちの愛きを見ては、さまざまにすかしいざなへども、三貞の賢き操を守りてつらくもてなし、後は戸を閉てて見えざりけり。一人の婢女も去りて、すこしの貯もむなしく、其年も暮れぬ。年あらたまりぬれども猶をさまらず。あまさへ去年の秋、京家の下知として、美濃の國郡上の主、東の下野守常縁に御旗を給びて、下野の領所にくだり、氏族千葉の實胤とはかりて攻むるにより、御所方も固く守りて拒戰ひけるほどに、いつ果つべきとも見えず。野伏等はこゝかしこに塞をかまへ、火を放ちて財を奪ふ。八州すべて安き所もなく、淺ましき世の費なりけり。勝四郎は雀部に從ひて京にゆき、絹ども殘なく交易せしほどに、當時都は花美を好む節なれば、よき德とりて東に歸る用意をなすに、今度上杉の兵鎌倉の御所を陷し、なほ御跡をしたうて攻討てば、古鄕の邊は干戈みち〳〵て、涿鹿の岐となりし由をいひはやす。まのあたりなるさへ僞おほき世說なるを、ましてしら雲の八重に隔たりし國なれば、心も心ならず、八月のはじめ京をたち出でて、岐曾の眞坂

心のはやりたる—心の荒立ちたる
梓弓—すゑにかけていふ冠辭
浮木に乘り—心の安らかならざるの譬
享德—後花園帝の御宇

ゆくといふを、うたてきことに思ひ、言をつくして諫むれども、常の心のはやりたるにせんかたなく、梓弓末のたづきの心ぼそきにも、かひ〴〵しく調へて、其夜はさりがたき別をかたり、かくてはたのみなき女心の、野にも山にも惑ふばかり、物うきかぎりに侍り。朝に夕にわすれたまはで、速く歸りたまへ。命だにとは思ふものの、明をたのまれぬ世のことわりは、武き御心にもあはれみたまへといふに、いかで浮木に乘りつも、しらぬ國に長居せん。葛のうら葉のかへるは此秋なるべし。心づよく待ちたまへと言ひなぐさめて、夜も明けぬるに、鳥が啼く東を立出でて、京の方へ急ぎけり。此年享德の夏、鎌倉の御所成氏朝臣、管領の上杉と御中放けて、館兵火に跡なく滅びければ、御所は總州の御味方へ落ちさせたまふより、關の東忽に亂れて、心々の世の中となりしほどに、老たるは山に逃竄くれ、弱きは軍民にもよほされ、けふは此所を燒きはらふ、明は敵のよせ來るぞと、女わらべ等は東西に迯げまどひて泣きかなしむ。勝四郞が妻なるものも、いづちへも遁れんものをと思ひしかど、此秋を待てときこえし夫の言を賴みつゝも、安からぬ心に日をかぞへて暮しける。秋にもなりしかど、風の便もあらねば、世とともに憑なき人心かなと、恨みかなしみ思ひくづをれて、

足利染―下野國足利より產する絹布

雨月物語 巻之二

○淺茅が宿

下總の國葛飾郡眞間の鄕に、勝四郎といふ男ありけり。祖父より舊しくこゝに住み、田畠あまた主つきて、家豐に暮しけるが、生長りて物にかゝはらぬ性より、農作をうたき物に厭ひけるまゝに、はた家貧しくなりにけり。さるほどに親族おほくにも疎んじられけるを、口をしきことに思ひしみて、いかにもして家を興しなんものをと、左右にはかりける。其比雀部の曾次といふ人、足利染の絹を交易するために、年々京よりくだりけるが、此鄕に氏族のありけるを、屢々來訪ひしかば、かねてより親しかりけるまゝに、商人となりて京にまうのぼらんことを賴みしに、雀部いとやすく肯ひて、いつの比はまかるべしときこえける。他が賴しきをよろこびて、殘る田をも販りつくして金に代へ、絹素あまた買積みて、京にゆく日をもよほしける。勝四郎が妻宮木なるものは、人の目とむるばかりの容に、心ばへも愚ならずありけり。此度勝四郎が商物買ひて京に

骨肉の人―兄弟

士たる義なし。伯氏は菊花の約を重んじ、命を捨てて百里を來しは信ある極なり。士は今尼子に媚びて骨肉の人をくるしめ、此横死をなさしむるは友とする信なし。經久強てとゞめたまふとも、舊しき交を思はば、私に商鞅、叔座が信をつくすべきに、只榮利にのみ走りて、士家の風なきは、卽尼子の家風なるべし。さるから兄長何故この國に足をとゞむべき。吾今信義を重んじて、態々こゝに來る。汝は又不義のために汚名をのこせとて、いひもをはらず、拔打に斬りつくれば、一刀にてそこに倒る。家眷ども立騒ぐ間に、はやく逃れ出でて跡なし。尼子經久このよしを傳へ聞きて、兄弟信義の篤きをあはれみ、左門が跡をも強ひて追せざるとなり。咨輕薄の人と交は結ぶべからずとなん。

と水沫の如く

翼ある物—雁の便にて漢蘇武の故事

諱むべからず—死去のこと

商鞅—商の公孫鞅

かしつゝ、十日をへて富田の大城にいたりぬ。先赤穴丹治が宅にゆきて、姓名をもていひ入るに、丹治迎へ請じて、翼ある物の告ぐるにあらで、いかで知らせたまふべき謂なしとしきりに問尋む。左門いふ。士たる者は富貴消息の事ともに論ずべからず。只信義をもて重しとす。伯氏宗右衛門一旦の約をおもんじ、むなしき魂の百里を来るに報いすとて、日夜を逐うて此所にくだりしなり。吾學ぶ所について士に尋ねまゐらすべき旨あり。ねがふは明かに答へ給へかし。昔魏の公叔座病の牀にふしたるに、魏王みづから詣でて、手をとりつも告ぐるは、若諱むべからずのことあらば、誰をして社稷を守らしめんや。吾ために教をのこせとあるに、叔座いふ。商鞅年少しといへども奇才あり。王若この人を用ひ給はずば、これを殺しても境を出すことなかれ、他の國にゆかしめば、必ずも後の禍となるべしと苦に教へて、又商鞅を私にまねき、吾汝をすゝむれども、王許さゞる色あれば、用ひずばかへりて汝を害したまへと教ふ。是れ君を先にし臣を後にするなり。汝速く他の國に去りて、害を免るべしといへり。この事士と宗右衛門に比へてはいかに。丹治只頭を低れて言なし。左門座をすゝみて、伯氏宗右衛門鹽冶が舊交を思ひて、尼子に仕へざるは義士なり。士は舊主の鹽冶を捨て、尼子に降りしは

九月九日に再會せんとする約束なり

渇する云々—白樂天の詩に「渇人多夢飮」

輪墨—學問

生は浮きたる漚の如く—人の生のはかなきこ

殽をもて迎ふるに、再三辭みたまうて云ふ。しかぐ\のやうにて約に背くがゆゑに、自刃に伏して、陰魂百里を來るといひて見えずなりぬ。それ故にこそは母の眠をも驚かしたてまつれ。只々赦し給へと潸然と哭入るを、老母いふ。牢裏に繫がるゝ人は夢にも赦さるゝを見、渇するものは夢に漿水を飮むといへり。汝も亦さる類にやあらん。よく心を靜むべしとあれども、左門頭を搖りて、まことに夢の正なきにあらず。兄長はこゝもとにこそありつれと、又聲を放げて哭倒る。老母も今は疑はず、相叫びて其夜は哭きあかしぬ。明くる日左門母を拜していふ。吾幼きより身を翰墨に托するといへども、國に忠義の聞なく、家に孝信をつくすことあたはず、徒に天地のあひだに生るゝのみ。兄長赤穴は一生を信義のために終る。小弟けふより出雲に下り、せめては骨を藏めて信を全うせん。公尊體を保ちたまうて、しばらくの暇をたまふべし。老母云ふ。吾兒かしこに去るとも、はやく歸りて老が心を休めよ。永く逗りてけふを舊しき日となすことなかれ。左門いふ。生は浮きたる漚のごとく、旦に夕に定めがたくとも、やがて歸りまゐるべしとて、泪を振うて家を出で、佐用氏にゆきて老母の介抱を苦にあつらへ、出雲の國にまかる路に、飢ゑて食を思はず、寒きに衣をわすれてまどろめば、夢にも哭きあ

腹心爪牙―輔弼の義

刃に伏し―自殺し

菊花の約―

へども、智を用ふるに狐疑の心おほくして、腹心爪牙の家の子なし。永く居りて益なきを思ひて、賢弟が菊花の約あることをかたりて去らんとすれば、經久怨める色ありて、丹治に令し、吾を大城の外にはなたずして、遂に今日にいたらしむ。此約にたがふものならば、賢弟吾を何ものとかせんと、ひたすら思ひ沈めども遁るゝに方なし。いにしへの人のいふ、人一日に千里をゆくことあたはず、魂よく一日に千里をもゆくと。此ことわりを思出でて、みづから刃に伏し、今夜陰風に乘りてはる〴〵來り、菊花の約に赴く。此心をあはれみ給へといひをはりて、泪わき出づるが如し。今は永きわかれなり。只母公によくつかへ給へとて、座を立つと見しが、かき消えて見えずなりにける。左門慌忙てとゞめんとすれば、陰風に眼くらみて行方をしらず。俯向につまづき倒れたるままに、聲を放ちて大に哭く。老母目さめ、驚き立ちて、左門がある所を見れば、座上に酒瓶魚盛りたる皿どもあまた列べたるが中に、臥倒れたるをいそがはしく扶起して、いかにと問へども、只聲を呑みて泣く〳〵さらに言なし。老母問うていふ。伯氏赤穴が約にたがふを怨むるとならば、明日なんもし來るには言なからんものを。汝かくまでをさなくも愚なるかとつよく諫むるに、左門漸答へていふ。兄長今夜菊花の約に特來る。酒

井臼の力―薪水のつとめ

陽世の人―現世の人

よ。いざ入らせたまへと云ふめれど、たゞ點頭きて物をもいはである。左門前にすゝみて、南の窓の下にむかへ、座につかしめ、兄長來りたまふことの遲かりしに、老母も待ちわびて、翌こそと臥所に入らせたまふ。寤させまゐらせんと云へるを、赤穴又頭を振りてとゞめつも、更に物をもいはでぞある。左門云ふ。旣に夜を續ぎて來し給ふに、心も倦み足も勞れたまふべし。幸に一杯を酌みて歇息たまへとて、酒をあたゝめ下物を列ねて勸むるに、赤穴袖をもて面を掩ひ、其臭を嫌放くるに似たり。左門云ふ。井臼の力はた欵すに足らざれども、己が心なり。いやしみ給ふことなかれ。赤穴猶答もせで、長嘘をつぎつゝ、しばししていふ。賢弟が信ある饗應をなどいなむべき理やあらん。欺くに詞なければ、實をもて告ぐるなり。必ずしもあやしみ給ひそ。吾は陽世の人にあらず。きたなき靈のかりに形を見えつるなり。左門大に驚きて、兄長何ゆゑにこのあやしきことかたり出で給ふや。更に夢ともおぼえ侍らず。赤穴いふ。賢弟とわかれて國にくだりしが、國人大かた經久が勢に服きて、鹽冶の恩を顧みるものなし。從弟なる赤穴丹治、富田の城にあるを訪ひしに、利害を說きて吾を經久に見えしむ。假に其詞を容れて、つらく經久がなす所を見るに、萬夫の雄人に勝れ、よく士卒を習練すとい

却物怯して—かへりて物おそれして

な恚みたまひそ—いきどほる勿れ

銀河—天の河

氷輪—月

窓の門の泊は追ふべき。若き男は却物怯して、錢おほく費すことよといふに、殿の上らせ給ふ時、小豆島より室津のわたりし給ふに、なまからきめにあはせ給ふを、從に侍りし者のかたりしを思へば、このほとりの渡は必ず怯ゆべし。な恚みたまひそ。魚が橋の蕎麥ふるまひまうさんにと、いひなぐさめて行く。口とる男の腹だたしげに、此死馬は眼をもはだけぬかと、荷鞍おしなほして追ひもて行く。午時もやゝかたぶきぬれど、待ちつる人は來らず。西に沈む日に、宿り急ぐ足のせはしげなるを見るにも、外の方のみまもられて心醉へるが如し。老母左門をよびて、人の心の秋にはあらずとも、菊の色こきは今日のみかは。歸り來る信だにあらば、空は時雨にうつりゆくとも、何をか怨むべき。入りて臥もして、又翌の日を待つべしとあるに、否みがたく、母をすかして前に臥さしめ、もしやと戸の外に出でて見れば、銀河影きえ〱に、氷輪我のみを照して淋しきに、軒守る犬の吼ゆる聲すみわたり、浦浪の音ぞこゝもとにたちくるやうなり。月の光も山の際に陰くなれば、今はとて戸を閉てて入らんとするに、たゞ看る、おぼろなる黒影の中に人ありて、風の隨に來るをあやしと見れば、赤穴宗右衞門なり。踊りあがるこゝちして、小弟蚤くより待ちて今にいたりぬる。盟たがはで來り給ふ事のうれしさ

菽を啜り水を飲む奴となりて親につかへんの義

重陽―九月九日

嚢をかたぶけて―財を投じて

八雲たつ國―出雲國

に御恩を返したてまつるべし。今のわかれを給へといふ。左門いふ。さあらば兄長いつの時にか歸り給ふべき。赤穴いふ。月日は逝きやすし。おそくとも此秋は過さじ。左門云ふ。秋はいつの日を定めて待つべきや。ねがふは約し給へ。赤穴云ふ。重陽の佳節をもて歸來る日とすべし。左門いふ。兄長必ず此日をあやまりたまふな。一枝の菊花に薄酒を備へて待ちたてまつらんと、互に情をつくして、赤穴は西に歸りけり。あら玉の月日はやく經ゆきて、下枝の茱萸色づき、垣根の野ら菊艷やかに、九月にもなりぬ。九日はいつよりも蚤く起出でて、草の屋の席をはらひ、黃菊白菊二枝三枝小瓶に挿し、嚢をかたぶけて酒飯の設をす。老母いふ。かの八雲たつ國は山陰のはてにありて、こゝには百里を隔つると聞けば、今日とも定めがたきに、其來しを見て物すとも遲からじ。左門云ふ。赤穴は信ある武士なれば必ず約を誤らじ。其人を見てあわたゞしからんは、思はんことの恥しとて、美酒を沽ひ、鮮魚を宰て厨に備ふ。此日や天晴れて、千里に雲のたちゐもなく、草枕旅ゆく人の群々かたりゆくは、けふは誰某がよき京入なる。此度の商物によき徳とるべき祥になんとて過ぐ。五十あまりの武士、廿あまりの同じ出立なる、日和はかばかり好かりしものを、明石より船もとめなば、この朝びらきに、牛

諸子百家―老子莊子などの如き多くの子類

青雲の便―立身出世の便

菽水の奴―

日比經るまゝに、物みな平生に邇くぞなりにける。此日比左門はよき友もとめたりとて、日夜交りて物がたりするに、赤穴も諸子百家のことおろ〳〵かたり出でて、問ひわきまふる心愚ならず。兵機のことわりはをさ〳〵しく聞えければ、ひとつとして相ともにたがふ心もなく、かつ感で、かつよろこびて、終に兄弟の盟をなす。赤穴五歳長じたれば、伯氏たるべき禮義をさめて、左門にむかひていふ。吾父母に離れまゐらせていとも久し。賢弟が老母は即て吾母なれば、あらたに拜みたてまつらんことを願ふ。老母あはれみてをさなき心を肯け給はんや。左門歡に堪へず、母なる者常に我が孤獨を憂ふ。信ある言を告げなば齡も延びなんにと、伴ひて家に歸る。老母よろこび迎へて、吾子不才にて、學ぶ所時にあはず、青雲の便を失ふ。ねがふは捨てずして伯氏たる敎を施したまへ。赤穴拜していふ。大丈夫は義を重しとす。功名富貴はいふに足らず。吾いま母公の慈愛をかうむり、賢弟の敬を納むる、何の望かこれに過ぐべきと、よろこびうれしみつゝ、又日來をとゞまりける。きのふけふ咲きぬると見し尾上の花も散りはてて、涼しき風による浪に、とはでもしるき夏の初になりぬ。赤穴、母子にむかひて、吾近江を遁來りしも、雲州の動靜を見んためなれば、一たび下向りて、やがて歸來り、菽水の奴

不慮に—思ひもかけず

見る所を忍びざる—惻隱の情をいふ

つらんといふ。左門諫めて、ちからなきことはな聞えたまひそ。凡疫は日數あり。其ほどをすぎぬれば壽命をあやまたず。吾日々に詣でてつかへまゐらすべしと、實やかに約りつゝも、心を用ひて助けけるに、病漸減じてこゝち淸しくおぼえければ、あるじにも念比に詞をつくし、左門が陰德をたふとみて、其生業をもたづね、己が身の上をもかたりていふ。故出雲の國松江の鄕に生長りて、赤穴宗右衛門といふ者なるが、わづかに兵書の旨を察めしによりて、富田の城主鹽冶掃部介、吾を師としてもの學びたまひしに、近江の佐々木氏綱に密に使にえらばれて、かの館にとゞまるうち、前の城主尼子經久、山中黨をかたらひて、大三十日の夜不慮に城を乘りとりしかば、掃部殿も討死ありしなり。もとより雲州は佐々木の持國にて、鹽冶は守護代なれば、三澤、三刀屋を助けて、經久を亡したまへとすゝむれども、氏綱は外勇にして内怯えたる愚將なれば果さず、かへりて吾を國に逗む。故なき所に永く居らじと、己が身ひとつを竊みて國に還る路に、此疾にかゝりて、思ひかけずも師を勞はしむるは、身にあまりたる御恩にこそ。吾半世の命をもて、必ず報いたてまつらん。左門いふ。見る所を忍びざるは、人たるものの心なるべければ、厚き詞をさむるに故なし。猶逗りていたはり給へと、實ある詞を便にて、

いとほしさ—あはれさ

愚俗のことば—俗説

病を看る—看護する

宿を求めらるゝに、士家の風ありて卑しからぬと見しまゝに、逗めまゐらせしに、其夜邪熱劇しく、起臥も自はまかせられぬをいとほしさに、三日四日は過しぬれど、何地の人ともさだかならぬに、主も思ひがけぬ過し出でて、こゝち惑ひ侍りぬといふ。左門聞きて、かなしき物がたりにこそ。あるじの心安からぬもさる事にしあれど、病苦の人はしるべなき旅の空に、此疾を憂へ給ふは、わきて胸窮しくおはすべし。其やうをも看ばやといふを、あるじとゞめて、瘟病は人を過つ物と聞ゆるから、家童らもあへてかしこに行かしめず。立ちよりて身を害し給ふことなかれ。左門笑うていふ。死生命あり、何の病か人に傳ふべき。これらは愚俗のことばにて、吾們はとらずとて、戸を推して入りつも、其人を見るに、あるじがかたりしに違はで、倫の人にはあらじを、病深きと見えて、面は黄に、肌黒く痩せ、古き衾のうへに悶え臥す。人なつかしげに左門を見て、湯ひとつ恵み給へといふ。左門ちかくよりて、士憂ひ給ふことなかれ。必救ひまゐらすべしとて、あるじと計りて、薬をえらみ、自方を案じ、みづから煮てあたへつも、猶粥をすゝめて病を看ること、同胞のごとく、まことに捨てがたきありさまなり。かの武士左門が愛憐の厚きに泪を流して、かくまで漂客を恵み給ふ。死すとも御心に報いたてま

孟氏の操―孟母の貞操―三遷の故事ありしなど蒙求等に見ゆ

青を彩りなして、稜威を崇めたてまつる。かの國にかよふ人は、必ず幣をさゝげて齋ひまつるべき御神なりけらし。

○菊花の約

青々たる春の柳、家園に種うることなかれ。交は輕薄の人と結ぶことなかれ。楊柳茂りやすくとも、秋の初風の吹くに耐へめや。輕薄の人は交やすくして亦速なり。楊柳いくたび春に染れども、輕薄の人は絶えて訪ふ日なし。播磨の國加古の驛に、丈部左門といふ博士あり。清貧を憩ひて、友とする書の外はすべて調度の絮煩を厭ふ。老母あり。孟氏の操にゆづらず。常に紡績を事として、左門がこゝろざしを助く。其季女なるものは、同じ里の佐用氏に養はる。此佐用が家は頗富さかえて有りけるが、丈部母子の賢きを慕ひ、娘子を娶りて親族となり、屢事に托せて物を餉るといへども、口腹の爲に人を累さんやとて、敢へて承くることなし。一日左門同じ里の何某が許に訪ひて、いにしへ今の物がたりして興ある時に、壁を隔てて人の痛む聲、いともあはれに聞えければ、主に尋ぬるに、あるじ答ふ。これより西の國の人と見ゆるが、伴に後れしよしにて、一

よしや君昔の玉の床とてもかゝらんのちは何にかはせん

刹利も須陀もかはらぬものをと、心あまりて高らかに吟ひける。此ことばを聞しめして感でさせ給ふやうなりしが、御面も和ぎ、陰火もやゝうすく消えゆくほどに、つひに龍體もかきけちたるごとく見えずなれば、化鳥もいづち去きけん跡もなく、十日あまりの月は峯にかくれて、木のくれやみのあやなきに、夢路にやすらふがごとし。ほどなくいなのめの明けゆく空に、朝鳥の音おもしろく鳴きわたれば、かさねて金剛經一巻を供養したてまつり、山をくだりて庵に歸り、閑に終夜のことどもを思出づるに、平治の亂よりはじめて、人々の消息年月のたがひなければ、深く愼みて人にもかたり出でず。其後十三年を經て、治承三年の秋、平の重盛病に係りて世を逝りぬれば、平相國入道、君をうらみて、鳥羽の離宮に籠めたてまつり、かさねて福原の茅の宮に困めたてまつる。頼朝東風に競ひおこり、義仲北雪をはらうて出づるに及び、平氏の一門こと〴〵く西の海に漂ひ、遂に讃岐の海志戸八嶋にいたりて、武きつはものども、おほく鼇魚のはらに葬られ、赤間が關壇の浦にせまりて、幼主海に入らせ給へば、軍將だちも、のこりなく亡びしまで、露たがはざりしぞ恐しくあやしき話柄なりける。其後御廟は玉もて雕り、丹

が如し

刹利も須陀も―印度種族の階級の名、王侯も農民の義

いなのめ―黎明

治承―高倉帝の御世

平相國入道―平清盛

幼主―安德

荊の髮—おどろの如くみだれたる髮

干支一周—十干十二支の一周六十年をいへど此處には十二年をいふ

に報ふべきぞと、御聲いやましに恐しく聞えけり。西行いふ。君かくまで魔界の悪業につながれて、佛土に億萬里を隔て給へば、再びいはじとて、只默してむかひ居たりける。時に峯谷ゆすり動きて、風叢林を偃すがごとく、沙石を空に卷上ぐる。見る〳〵一段の陰火、君が膝の下より燃上りて、山も谷も晝のごとくあきらかなり。光の中につらつら御氣色を見たてまつるに、朱をそゝぎたる龍顏に、荊の髮膝にかゝるまで亂れ、白眼を吊りあげ、熱き嘘をくるしげにつがせ給ふ。御衣は柿色のいたうすゝびたるに、手足の爪は獸のごとく生ひのびて、さながら魔王の形あさましくもおそろし。空にむかひて相模々々と叫ばせ給ふ。あと答へて、鳶のごとくの化鳥翔來り、前に伏して詔をまつ。院かの化鳥にむかひたまひ、何ぞはやく重盛が命を奪りて、雅仁清盛を苦しめざる。化鳥こたへていふ。上皇の幸福いまだつきず、重盛が忠信ちかづきがたし。今より干支一周を待たば、重盛が命數既につきなむ。彼死せば一族の幸福此時に亡ぶべし。院手を拍つて怡ばせたまひ、かの讐敵こと〴〵く此前の海に盡すべしと、御聲谷峯に響きて凄じさ云ふべくもあらず。魔道の淺ましきありさまを見て、涙しのぶに堪へず。復び一首の歌に隨緣の心をすゝめ奉る。

朝

忠正―原本忠政に作る平忠正也

家の子―家人長田忠致

經をかへせし云々―崇德院の書き給ひし大乘經をかへせし罪との義

應保長寛―二條帝の御世。

に命を捨てしに、他一人朕に弓を挽く。爲朝が勇猛、爲義、忠正が軍配に贏目を見つるに、西南の風に燒討せられ、白川の宮を出でしより、如意が嶽の嶮しきに足を破られ、或は山賤の椎柴をおほひて雨露を凌ぎ、終に擒はれて此の島に謫られしまで、皆義朝が姦しき計策に困しめられしなり。これが報を虎狼の心に障化して、信頼が隱謀にかたらはせしかば、地祇に逆ふ罪、武に賢からぬ淸盛に逐討たる。且つ父の爲義を弑せし報偪りて、家の子に謀られしは、天神の祟を蒙りしものよ。又少納言信西は常に己を博士ぶりて、人を拒む心の直からぬ。これをさそうて信賴義朝が讐となせしかば、終に家をすてて宇治山の坑に竄れしを、はた探し獲られて、六條河原に梟首らる。これ經をかへせし諛言の罪を治めしなり。それがあまり、應保の夏は美福門院が命を窮り、長寛の春は忠通を祟りて、朕も其秋世をさりしかど、猶嗔火熾にして盡きざるまゝに、終に大魔王となりて、三百餘類の巨魁となる。朕が眷屬のなすところ、人の福を見ては轉して禍とし、世の治まるを見ては亂を發さしむ。只淸盛が人果大にして、親族氏族ことごとく高き官位につらなり、おのがまゝなる國政を執行ふといへども、重盛忠義をもて輔くる故、いまだ期いたらず。汝見よ。平氏も亦久しからじ。雅仁朕につらかりしほどは終

烏の頭は云云—燕丹の故事、有り得べからざるの意

濱千鳥跡—文のこと

信頼—藤原信頼

義朝—源義朝

は白くなるとも、都には還るべき期もあらねば、定めて海畔の鬼とならんずらん。ひたすら後世のためにとて、五部の大乘經をうつしてけるが、貝鐘の音も聞えぬ荒磯にとどめんもかなし。せめては筆の跡ばかりを、洛の中に入れさせたまへと、仁和寺の御室の許へ、經にそへてよみておくりける。

濱千鳥跡はみやこに通へども身は松山に音をのみぞなく

しかるに少納言信西がはからひとして、若呪咀の心にやと奏しけるより、そがまゝに返されしぞうらみなる。いにしへより倭漢土ともに、國をあらそひて、兄弟敵となりし例は珍らしからねど、罪深きことかなと思ふより、悪心懺悔の爲にとて寫しぬる御經なるを、いかにさゝふる者ありとも、親しきを議るべき令にもたがひて、筆の跡だも納れたまはぬ叡慮こそ、今は舊しき讐なるかな。所詮此經を魔道に回向して、恨をはるかさんと、一すぢにおもひ定めて、指を破り血をもて願文をうつし、經とともに志戸の海に沈めてし後は、人にも見えず深く閉ぢこもりて、ひとへに魔王となるべき大願をちかひしが、はた平治の亂ぞ出できぬる。まづ信頼が高き位を望む驕慢の心をさそうて、義朝をかたらはしむ。かの義朝こそ悪き敵なれ。父の爲義をはじめ、同胞の武士は皆朕がため

兄弟牆に云云ー詩經小雅之篇にあり
あまさへーあまつさへ
一院ー鳥羽帝
殯の宮云々ー崩御ましますや否や
高遠が松山の云々ー保元物語に高季とあり

ふ敵も出づべしと、八百よろづの神の惡くませ給うて、神風を起して船を覆へしたまふと聞く。されば他國の聖の敎も、こゝの國土にふさはしからぬ事すくなからず。且詩にもいはざるや。兄弟牆に鬩ぐとも外の侮を禦げよと。さるを骨肉の愛を忘れ給ひ、あまさへ一院崩御れたまひて、殯の宮に肌膚もいまだ寒させたまはぬに、御旗なびかせ弓末ふり立て、寳祚をあらそひ給ふは、不孝の罪これより劇しきはあらじ。天下は神器なり。人のわたくしをもて奪ふとも得べからぬ理なるを、たとへ重仁王の卽位は民の仰ぎ望む所なりとも、德を布き和を施し給はで、道ならぬわざをもて代を亂したまふ則は、昨日まで君を慕ひしも、けふは忽ち怨敵となりて、本意をも遂げたまはで、いにしへより例なき刑を得給ひて、斯る鄙の國の土とならせ給ふなり。たゞ〳〵舊き讐をわすれ給うて、淨土にかへらせたまはんこそ、願はまほしき叡慮なれと、はゞかることなく奏しける。院長嘘をつがせ給ひ、今事を正して罪をとふことわりなきにあらず。されどいかにせん。この島に謫れて、高遠が松山の家に困められ、日に三たびの御膳すゝむるよりは、まゐりつかふる者もなし。只天とぶ雁の小夜の枕におとづるゝを聞けば、都にや行くらんとなつかしく、曉の千鳥の洲崎にさわぐも、心をくだく種となる。烏の頭

儒教
譽田の天皇
―應神天皇
兎道の王―
菟道稚郎子

ことわりをかりて、慾塵をのがれ給はず。遠く震旦をいふまでもあらず。皇朝の昔譽田の天皇、兄の皇子大鷦鷯の王をおきて、季の皇子兎道の王を日嗣の太子となしたまふ。天皇崩御たまひては、兄弟相譲りて位に昇りたまはず。三歳をわたりても猶果べくもあらぬを、兎道の王深く憂ひ給ひて、豈久しく生きて、天が下を煩はしめんやとて、みづから寶算を斷たせたまふものから、罷事なくて、兄の皇子御位に卽せ給ふ。是れ天業を重じ、孝悌をまもり、忠をつくして人慾なし。堯舜の道といふなるべし。本朝に儒教を尊みて、專王道の輔とするは、兎道の王百濟の王仁を召して學ばせ給ふをはじめなれば、この兄弟の王の御心ぞ、卽て漢土の聖の御心ともいふべし。又周の創、武王一たび怒りて、天下の民を安くす。臣として君を弑すといふべからず。仁を賊ひ義を賊む一夫の紂を誅するなりといふ事、孟子といふ書にありと、人の傳に聞き侍る。されば漢土の書は、經典、史策、詩文にいたるまで渡さゞるはなきに、かの孟子の書ばかり、いまだ日本に來らず。此書を積みて來る船は、必しも暴風にあひて沈沒むよしをいへり。夫をいかなる故ぞととふに、我國は天照すおほん神の開闢しろしめしゝより、日嗣の大王絶ゆることなきを、かく口賢しき教をつたへなば、末の世に神孫を奪うて、罪なしとい

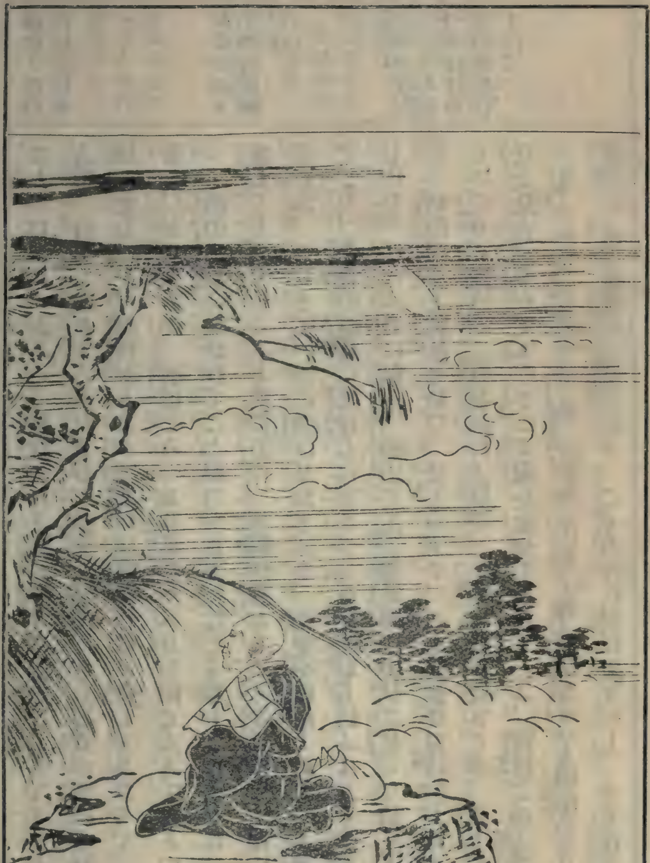
永治―崇徳帝の御宇

父帝―鳥羽帝

牝雞の晨する代―婦人の權を恣する世

堯舜の教―

の教へ給ふことわりにも違はじとて、おぼし立たせ給ふか。又みづからの人慾より計策り給ふか。詳に告せ給へと奏す。其時院の御けしきかはらせたまひ、汝きけ。帝位は人の極なり。若し人道上より亂す則は、天の命に應じ、民の望に順うて是を討つ。抑永治の昔、犯せる罪もなきに、父帝の命を恐みて、三歳の體仁に代を讓りし心、人慾深きといふべからず。體仁早世ましては、朕皇子の重仁こそ國しらすべきものをと、朕も人も思ひをりしに、美福門院が妬にさへられて、四の宮の雅仁に世を簒はれしは、深き怨にあらずや。重仁國しらすべき才あり。雅仁何らのうつは物ぞ。人の徳をえらばずも、天が下のことを後宮にかたらひ給ふは、父帝の罪なりし。されど世にあらせ給ふ程は、孝信をまもりて、勤色にも出さゞりしを、崩れさせたまひては何時までありなんと、武きこゝろざしを發せしなり。臣として君を伐つすら、天に應じ民の望にしたがへば、周八百年の創業となるものを、ましてしるべき位ある身にて、牝雞の晨する代を取つて代らんに、道を失ふといふべからず。汝家を出て佛に婬し、未來解脱の利慾を願ふ心より、人道をもて因果に引入れ、堯舜の教を釋門に混じて朕に說くやと、御聲あらゝかに告せ給ふ。西行いよゝ恐るゝ色もなく、座をすゝみて、君が告せたまふ所は、人道の



圓位―西行法師の法名

松山の云々―西行法師の咏

隔生卽忘して―生を隔つる時は前生の事をわすれて

るともなきに、まさしく圓位々々とよぶ聲す。眼をひらきてすかし見れば、其形異なる人の、背高く痩おとろへたるが、顔のかたち、著たる衣の色紋も見えで、こなたにむかひて立てるを、西行もとより道心の法師なれば、恐しともなくて、こゝに來るは誰ぞと答ふ。かの人いふ。前によみつる言葉のかへりを聞えんとて見えつるなりとて、

　松山の浪にながれてこし船のやがてむなしくなりにけるかな

喜しくも詣でつるよと聞ゆるに、新院の靈なることをしりて、地にぬかづき、涙を流していふ。さりとていかに迷はせたまふや。濁世を厭離し給ひつる事のうらやましく侍りてこそ、今夜の法施に隨緣したてまつるを、現形し給ふはありがたくも悲しき御心にし侍り。ひたぶるに隔生卽忘して、佛果圓滿の位に昇らせ給へと、情を盡して諫奉る。新院呵々と笑はせ給ひ、汝しらずや。近來の世の亂は朕がなす事なり。生きてありし日より、魔道に志をかたぶけて、平治の亂を發さしめ、死して猶朝家に祟をなす。見よ見よ、やがて天が下に大亂を生ぜしめんといふ。西行この詔に涙をとゞめて、こは淺ましき御心ばへを承るものかな。君はもとよりも聰明のきこえましませば、王道の理は諦めさせたまふ、こゝろみに討ね請すべし。そも保元の御謀叛は、天の神

紫宸―禁中の正殿
清涼―主上の常殿
藐姑射の山―仙洞御所のある所
神がくれ―崩じ、死す、
松山の浪の云々―西行法師の咏

のぼれば、咫尺をも鬱悒きこゝちせらる。木立わづかに間きたる所に、土墩く積みたるが上に、石を三かさねに疊みなしたるが、荊蕀葛蘿にうづもれて、うらがなしきを、これならん御墓にやと、心もかきくらまされて、さらに夢現をもわきがたし。現にまのあたりに見奉りしは、紫宸清涼の御座に、朝政きこしめさせ給ふを、百の官人は、かく賢しき君ぞとて、詔恐みてつかへまつりし。近衞院に禪りましても、藐姑射の山の瓊の林に禁めさせ給ふを、思ひきや、麋鹿のかよふ路のみ見えて、詣でつかふる人もなき深山の荊の下に神がくれたまはんとは。萬乘の君にてわたらせ給ふさへ、宿世の業といふものの、おそろしくも添ひたてまつりて、罪をのがれさせ給はざりしよと、世のはかなきに思ひつゞけて、涙わき出づるがごとし。終夜供養したてまつらばやと、御墓の前のたひらなる石の上に座をしめて、經文徐に誦しつゝも、かつ歌よみてたてまつる。

　松山の浪のけしきは變らじをかたなく君はなりまさりけり

猶心怠らず供養す。露いかばかり袂にふかゝりけん。日は沒りしほどに、山深き夜のさま常ならで、石の牀、木葉の衾いと寒く、神清み、骨冷えて、物とはなしに凄じきこゝちせらる。月は出でしかど、茂きが林は影をもらさねば、あやなき闇にうらぶれて、眠

雨月物語巻之一

○白峯

むらさき艶ふ―武藏野の枕詞
歌枕―うたに詠みこむ名所
仁安―六條帝の御宇
新院―崇德院

あふ坂の關守にゆるされてより、秋こし山の黄葉みすごしがたく、濱千鳥の跡ふみつくる鳴海潟、不盡の高嶺の煙、浮島が原、清見が關、大磯小磯の浦々、むらさき艶ふ武藏野の原、鹽竈の和ぎたる朝げしき、象潟の蜑が笘屋、佐野の舟梁、木曾の棧橋、心のとどまらぬかたぞなきに、猶西の國の歌枕見まほしとて、仁安三年の秋は、蘆がちる難波を經て、須磨明石の浦ふく風を身にしめつも、行く〳〵讃岐の眞尾坂の林といふに、しばらく笻を植む。草枕はるけき旅路の勞にもあらで、觀念修行の便せし庵なりけり。この里ちかき白峯といふ所にこそ、新院の陵ありと聞きて、拜みたてまつらばやと、十月はじめつかた、かの山に登る。松柏は奥ふかく茂りあひて、靑雲の軽靡く日すら小雨そぼふるがごとし。兒が嶽といふ嶮しき嶽背に聳ちて、千仭の谷底より雲霧おひ

雨月物語序

羅子撰水滸、而三世生啞兒。紫媛著源語、而一旦墮惡趣者、蓋爲業所偪耳。然而觀其文、各々奮奇態、啽哢逼眞、低昂宛轉、令讀者心氣洞越也。可見鑑事實于千古焉。余適有鼓腹之閑話、衝口吐出、雉雊龍戰、自以爲杜撰、則摘讀之者、固當不謂信也。豈可求醜脣平鼻之報哉。明和戊子晩春、雨霽月朦朧之夜、窻下編成、以畀梓氏。題曰雨月物語云。

剪枝畸人書

道しるべせし深草の歌比丘はうづらとなりて今ぞ音になくいそぎまゐらすべきよし、親伊右衛門へ使者のおもむき、おかめも不思議のいんねんといやおうなしに笑のまゆ。はじめからお國御前とあふがれて、御男子を設け、よろこびに悦をかさぬるめでたさ。妹の木幡も伏見の古里に、楓屋松右衛門といふ屋根板屋の有徳なる人に受出されて、宿の妻と成りければ、親伊右衛門の機嫌なほりて、表むきの舅いり、萩山殿より五百石の御とりたて、むかしの武士にかへりしも、治まる御代のかたり草也けり。

世間妾形氣　終

櫛の歯を引くがごとし—間断なく連續する比喩

しにと、詞をかけて走りよれば、物をもいはず逃げらるゝを、衣の袖はやく取りてうごかせず。三が年いぜん、お國を立退き給ひてより、大殿さま御前樣の御歎、草をわかつて御跡をしたひ參らせんと、御附人の誰々は今に本國へも歸らず。其御歎につゞいて、弟君鶴吉樣は疱瘡の御惱おもく、終に早世遊ばされ、今は御代嗣も絶えなんと、猶々御悲深く、又々御有家を尋ね參らせんと、諸家中幾組をか出し候ふ所、不思議に今日御顏を拜し參らす事、御家運の盡きざると申す物、一旦の御不孝は大願の覺立ち、しひては家國を亡す極惡人同前。いかに仰せらるゝも放すまじと、家來を走らせ追々の注進に、諸武士櫛の歯を引くがごとし。歌比丘涙を流したまひ、今は大願を立んとすれば、かへりて國の讎と成りて、不孝の罪永劫にいたる。よく〱三世の諸佛にも見放されまゐらせしとの御悔。すは御得心ぞと無體に乘物に移しまゐらせ、大殿への御對面、御親子めでたくお國入。舟謳ざんざめかして筑紫にくだらせ給ひけり。御還俗めでたく一國の悦、大殿は御隱居なされて、歌比丘今の御名は萩山鹿之介殿と申して、仁義五常の明君。かゝるありがたき御胤を一日もはやくとすゝめ申せば、吾思ふ方ありと、伏見の砂川なるお瓶が方へ、手づから御筆しめされて、

撞木町―山城國伏見の遊廓のあるところ

南無阿彌陀ほとけの御名のたふときもしらぬ昔が佛なりけり

かくして無言の大行を發しければ、人みな歌比丘とよびはやして、たふとむもの多かりける中に、伊右衛門が娘のおかめ、ことさらの歸依にて、一にぎりの報施に無量の心をこめ、女は罪がふかいとやら助けさせ給へと、伏しをがむ信心は、年に似合はぬ殊勝さを、歌比丘深く感じ給ひて、おかめを見れば、につたりと打笑はせ給ふも、いつとなく信心の實かよひて、淺からぬ佛縁なるべし。いつの年にや五月雨のはるゝ間もなく、十日あまり降りつゞきて、吹晴す風雲さわがしく、晝さがりより近江の吹越とて、高波山のごとく、宇治、槇の島、六地藏、小倉、八幡も一面に、伏見の船場問屋旅舍の軒もすでに波打ちよせて、子を負ひ親の手をひき、迯げまどふ聲あはれにも悲し。簞笥、長持、桶、小桶の流るゝ事夥しく、是は〳〵とあきるゝばかりなり。折ふし西國方の大名二かしらまで舟どめに、四五日の御泊。家中小者は日永の退屈に鎌の工合のゆるぐまで、かゝるときにこそ墨染撞木町の賑めづらし。筑紫の太守萩山殿の御家老、伊萬里新左衛門といふ武士、供人あまた召しつれて、藤の森稲荷山へ殿の御代參にまるらるゝ道すがら、寶塔寺前にて、かの歌比丘を見るより大に驚きて、御行方いかにと尋ねまるらせ

あい—諸

三密の云々—三密行法にて眞言の行法をいふ

出世の事なれば、直にあいと申したき物ながら、私はとかく尼に成りたい望にて、かねがね心に誓ひましたれば、是ばかりは不孝の段、御ゆるし下されませ。其替には好いて居やる妹をやつて下さんせと、よほど望みこんだ顔ばせ。終に親にさからはぬ心入に、是一つの事叱りもならず。又より〳〵にもと其夜はいひやみぬ。妹は固よりきうくつな大名奉公望にあらず。口入嚊をもつて二親へ茶屋奉公の訴訟。浪人形氣にあいさうつかして、とても根性魂のくさりたる女郎め、高家の奉公思ひもよらず。勘當ぞと忿の涙。母親の心にて、表は不通にしてよろしくお世話をと、年季親判も爹親へしらさず。島原の桔梗屋へ五年百兩の定、身の代は其まゝ親方に預置きて、娘が不自由にないやうにと、世間に子を賣る親とはきり替つた慈悲心も、さすがに氏素性は恥しき物なりけり。こゝに伏見にとなる深草の里に、かすかなる庵を結びて、觀念修行の若僧あり。三密の牀に一衣の起臥こゝろかろく、眞如の月に煩惱を洗ひて、あれば喰う、なければ寢る氣さんじ。末世も末法ならぬ出家なりけり。朝ごとの頭陀に、人の門々に米はよべども、錫杖をならすばかりにて、一遍の念佛をも申さず。さゝげたる鐵鉢に、一首狂歌をはりつけたり。

すれ—ちぶれ毛
三筋—少し

にして、大名方へ出さばと、夫婦談合しめて、はじめの角を笑にかくして、口入嚊をたのめば、口が明いたと嚊が悦。京中の妾口入をかけ廻りて、尋ぬれば又廣い事。諸國の大名方より妾の器量恰好年ばいまで、繪圖にして幾口といふ事をしらず。毎日五人三人目見のなき事もなし。奥御用の役人目鏡をたのみに、繪圖に引合せて、器量はよけれども、瘦肉にて子はあるまじき恰好とつきさませば、あの子の母御は有馬の人で、あちに伯母樣があれば、湯治がてら一年もいてござつたれば、御懷妊の所は受合ひますと出はうだい。年ばいとて合點せず。侍形氣、忠心形氣、けがな黒痣一つちがうても、大事の役目を仕損ずると覺えて、笑ふ時に齒莖が出るの、髮の中にはすねがあるのと、繪圖にあふは希なれども、又相應に兀げてゆくもをかし。此役人第一に腋臭に鼻のはやきを手柄とする事ぞかし。木幡もあちこちと目見に出れど、三筋足らぬ所ありて思はしき口もなし。去る北國方の高家より御注文の器量風俗、姉のお瓶に寸歩も違はず。しかも大金を出さるゝよし、口入嚊目を光らして、伊右衞門夫婦に咄せば、先づすゝめて見ませうとお瓶をよんで、出世なり、ことによりて我等も武士の家を起す事もあるべし。そちさへ得心ならばと、合點のゆくやうにいへど、おかめはあぢな望にて、成程おまへ方の御

賃苧—打麻をなして賃金をうる事

鐵槌抄—徒然草の註釋書、青木宗湖著

樫竿—三味

八文字—遊女のあげや入りにふむ足の樣

の境をのがれさせて、人らしき者の宿の妻となすならばと、朝夕の看經に、卽現長者身得度者を深く念じて他事なし。女房は糞焚の間に賃苧をうみ、二人の娘は近所の嚊達にさそはれて、一里にちかき小倉の里へ、鶯の餌小魚十串さして二文、さすがに都ちかきとて、はかなき營もいやしからず。同じ種にさへ心はひとつならぬ物ぞかし。姉のお瓶は、稚き時よりおとなぐろしく神佛を信じ、小倉通の道すがらに、豐後橋の古道具屋で、つれ〴〵の鐵槌抄を十八文に買ひて、朝夕手を放さず。爹親の看經について、觀音經よみならふより、萬にさう〴〵しからず。妹のこばたは辯目ものにて、毎日の行戻に中正島の色屋の店に足をとめて、三味線の心がけ、はやり謳に耳をかたぶけて、間がな透がな、煙筒を取りて稽古の指づかひ。相借屋の肝いり嚊が咽ずんばいうつて、祇園か島原へやらば黃な物たんとに成る代物と、樫竿に古絲かけて、我もむかしはお町にてかぎりならひし五尺いよこの手拭、よし野の山を雪かと見ればを敎へ、折がな色奉公廓の活計をうそ八百とりまぜて勸めこまれ、稚心に八文字がふんで見たく、年よりは前うしろ見るいき過者、爹親の心に叶はず。何とした因果で、あの下作者には育てしと、女房をうらむれば、女房は又相借屋の嚊を恨みて中よからず。いつそ妾もの

守隨の秤ー吉川守隨天正年間初めて秤座となりし人これより世々秤を稱してかくは呼べり。

うも住みあらさず。脊戸の朝顏、葉雞頭を目鏡ながらのながめに、澁茶のたのしみ、心は貧しからねども、鼻のさきの桃山のさかりを見る事なく、大路の往來に春をのみ知りて、いくとせをか過しぬ。相借屋五軒いづれも切りつめし世わたり、壁鄰は六十も旣にかたぶく禪門、ひとりの息子を板橋町の文珠四郎へ弟子にやりて、今二とせの年明をたのしみに、楊枝けづりていざり仕事いと佗し。其鄰なる寡男は、烏とともに朝戸を出で高瀨の舟曳。西鄰はかんてん草にて、三島海苔を仕出せし親仁。井戸のはたの家は、守隨の秤竿に目をもりて、こまかなる身過。獨居の噂なん撞木町のやり手の巢にて、今に前巾著を放さず。なれし事とて小娘の口入。泥町中正島で、折ふしは二三十日とかたまつた銀をとれば、此借屋中にて鹽物をたやさぬ暮。いづれこのあたりには、大三十日に掛乞の聲も聞えず。氏神のまつりに提燈出した事なし。貧しうしてたのしむといへるふる語も、かゝる所にやあるらめ。扇畫工の伊右衞門、もとはそとした武士の巢にて、貧苦にわろびれず、二人の娘をもてり。姉はお瓶妹は木幡とて、十七と十五の春の梅櫻。いづれも器量すぐれて、心だてもしほらしく、二親に孝行なる振舞さかしければ、親親のいつくしみ深く、とても我は老いゆく身、弓も刀も望なし。生さきある娘には貧苦

―岩の上に旅寝をすれば肌寒し苔の衣を我に借さなん
掻暮に―全く
氣でくへ―男は氣でくへとの諺

さなん。京もいつしか立退きて、其後は掻暮に行方も知らざりしが、小野寺の門前に、卒都婆屋の女房が、たしか其お橋ぢやと、いふ人がありしとやら。

第三　貧苦に身をしぼる油扇の繪

さま〴〵にかはる願をいのるてふ、ひとつまことを神やうくらん。人と生れて思ふ事なきものはないに、それも氣のはたばかりに高下ありて、一本の朸で百貫目屋敷を荷ひ出す上根あれば、譲の金箱いつしかかき餅入にする息子あり。おのれやれと褌しめたことの。九梯子七はあがらるゝ物ぞかし。惠心僧都は佛にならんとのみ願ひて、胸つぼに白蓮が生えたるよし。聖人をまねぶ人の鼻の下は、日々に長く成るにたがはじ。われ手で伯母の死跡のこけこみしと、山の芋の鰻に成るはおのれしらずの理外、氣でくへといふ譬はかいなぐりがたし。されば男山のむかし、一時をくねる女郎花の跡たえて、髭牛房のむくつけなる名所となりぬ。淀野の眞こも草、五月の粽の外には言ひいづる事なし。伏見の呉竹のみぞ、職人のよるべと成るはをかし。砂川といふ邊に小店をかりて、夏冬なしに油扇の繪千枚畫いて一匁五分。筆の命毛はかなくも親子四人口、さのみむさ

妲妃—殷紂王の寵后　褒姒—周幽王の后

濡人—情を交す人

苔の衣云々

さつそく首尾なりて、座敷も住馴れたれば、其まゝに手生祕藏の箱牡丹。比翼の鳥は閨の酒事の燒肴、連理の枝の爪楊枝、可愛い愛しの夭とれとは、こんな中をやいふならし。されどもお橋が取りじめもなき榮耀氣ずるは日增夜增にて、此蝦夷錦はあつくろしい。淺黃印金の夏帶が拵へたい。はらげ髮には一角獸の水櫛がよからうか、火鼠の蒲團はあたゝかさうなと、見た人さへ希な物好には、金の山でもくづしかねぬ妲妃褒姒が生れがはり、さすがの大盡よわらせられて、さりとは可愛い奴なれど、あの奢にはたてあはれぬ。妾も身代ありてこそ、あらしようやと逃じりにて、花屋の嚊にへんじやう米。これ嚊、彼はけしからぬ氣ちがひ、人の榮耀も程がある。物うか〳〵とは世話がならぬ。ぎやまんの入齒して呉れといふまでは、いかな身代もつゞきはせぬ　江戸の店へ下つては、恐らく京にはあるまいぞ。あら勿體なの妾やと、身ぶるひしてさらば〳〵。お橋戾らぬとなりと、囘國に出て行方がしれぬとなりといふで逃げてたも。此後もかゝりも此手をはなれてより、見に來る人もあるなれど、聞合してはこり須磨の、しほぬれ衣濡人もなく、さそふ水さへあるならば、手鍋もさげたい心でも、浮草の根もたえはてたすたり者。眺めせしまにふるされて、賣り喰ひなれば肌さむし、苔のころもを我にか

手前―茶の手前
のんこの赤手―古陶器の名品
すはま―菓子の名
七度半―使の多きをいふ古諺にいづ
廣蓋―衣服など藏むる匣の蓋の稱にて賜與の服など載せる器

れませと、時代蒔繪のたばこ盆も、朝脉の療治人あしらひに、いか樣嚊がいふ通、たゞものではないわいのと、見ぬ戀に待退屈。又入替りて二十ばかりの小姓が、鹽瀨の巾紗に持添へて、是は御寮人の手前澁うございますれど、一服召上られて下さりませと、差出す茶碗ものんこの赤手、口取は大文字屋のすはま、心ある饗應に、是はけしからぬ高尙者。てんとたまらぬ御馳走と、心は空に釣上られ、今か〳〵と脊中には、汗を催して待ちかけけるに、旦那樣お性が盡きましよと、嚊がしらせの七度半。繻珍の蒲團正面に敷捨て、入る小姓に引きちがへて出るお橋が勿體。裲さばきしとやかに、春木がかへは目もやらず。お内儀大儀とふうわりと座につけば、思はずしらず春木大盡、はつと頭をさげたるも可笑しかりき。お橋しとやかに、始めての御めもじ、萬事は内儀によろしうとばかりにて、これ蘭、内儀の帶が垢付いていぶせい。どれぞ一筋進ぜてといひ付くれば、はいと答へて、廣蓋にわたり繻子のくけ帶。仕ふるしたれど始めてのしるしまで、おなたへ御ゆるりとお休み遊ばしてと、ついと這入りて仕舞ひける。春木大盡荒膽をぬかれ、門口へ出るやいな、扨嚊の咄よりは、見事で高尙で、近年の大掘出。給金はいか程でも我等世話いたすなり。きまつて跡から戻りやれと、足も地につかず歸られけるが、

案じてばし―案じてばかり

すつぱ―盗人

木に餅がなる―甚だ都合よく巧なる

しませいで、はゞかりながら案じてばし下さんすな。君傾城に沉みても、あら〱しい打著などは、著せます事ぢやござんせぬと、小町形氣のはねぎり者には、取りつく所もなかりけり。さての奉公口入には、河原町の花屋嚊とて、名うてのすつぱが駈けあるきて、中立賣の大金持、春木徳右衞門といふ大盡を釣りかけ、かう〱した譯ある娘御。器量育は私が口で百日千日申したとて、いひ盡されぬ美人草。藝は萬能に達してござる。母御一人で厄介なし。その又母御の心入。以前が思ひやられまする。あのやうなお子が手入らずで、此すばやい京中にござつたは、旦那樣の御果報。私も口入冥加に叶ひましたと申す物と、古狸が辯にまかせて、木に餅のなるいひかたに、それは急に見たいまで、外へしらすな。其替りに嚊の骨は盗まぬと、何角なしに一角はづみ切つた談合に、いつ何日に則娘御の方へ、あなたを御供いたしましよ。是も東山邊でと申したら、京の道は石高で徒歩ひにくいとむつがるゆゑ、左樣ならばと、御供致してまゐる筈に、約束申して歸りました。そりやどうなりと打ちつれ立ちて、ほんと町の借屋敷。先づ私が案内申しましよ。玄關へおあがり遊ばせと、勝手口へ嚊は這入る。春木大盡はつゝほりと立ちて居らるゝ内より、十四五の小娰先程よりお待遠にござりませう。暫くおひかへ遊ばさ

お國樣—諸侯の夫人

緣邊—結婚

ころりと逝きし云々—死せること

人にくれるとは、思へば心外のいたりなりと、それから思案が打替り、大名目見の思入。それも餘所なみ同前に、扶持給金の望なく、發端からお國樣といはして見たい慾目には、誰しもいろふといふ人なく、娘ももとが世間みずを、あまやかしたる育がらに、かな草子の端々を聞きはしりたるいき過者。男えらみは親一倍にて、著類、手道具、人遣も、法慮なき榮耀沙汰。襟垢つけばむさいとて、あたりの人にやりちらす。此やうな仕入染は縮緬なりやとて著らるゝかと、噛みさき引裂くすね者も、育てた親があやまりにて、異見いさめも聞かばこそ、母のなげき梶右衞門が後悔。愛慾に心みだれて、かゝるてんばに仕あげしは、親の仕付がわるさゆゑ、支離な子が可愛いと、あの行末はどうなることと、緣邊の望もどこへやら、浪人の貯の田畑の藪のあての實も、内證からの早損水損。十荷の嫁荷も著潰して、いつの間にやら空簞笥の、くわんともちんともいかぬあげくに、梶右衞門が心痛にて、ころりと逝きし京の土。母のお歎が悲は推量してもあまりあり。今はさらりとつまらぬぞ。どうする心と引きよせてのとひ狀に、お橋はいかな弱なく、器量自慢の鼻のさき、かく成りました事なれば、私が身を奉公になりと參りまして、お母樣に不自由はさせませぬ。お前も私も乗物で、神參見物に出るまでは致

氣付けて來たずんばい―ずんばいは接尾語

雛人形―艷麗なる女

嬉しさ限なく、此草中であらうとも、生先をこそ頼みなれ。紡績はをしへたとて、迚も賤しきわざくれぞ。手書物よみ琴のくみ、十五や十六のはや覺に、をしふる親がはだしにて、逢ふ人ごとに、自慢の鼻は屋の棟よりも高かりし。近郷のとり沙汰、天の河の梶右衞門殿に、天人を産れたげな。いや觀音の化身ぢやと、見に來る人も多かりけり。麥刈り草引く小娘さへ十五六ははぢけ時、ましてかゝるしやれ者が、洗磨も小がしこく、前うしろ見る智惠つけば、あそこからも爰からも、嫁入の口はさま〴〵に、耳かしましくいひ來れど、土百姓のふつゝかさ、油氣のなきそゝけ鬢。娘がいや氣、二親がやらぬ氣に、どの談合も取りあへず。氣付けて來たずんばい。桃手折らせじとぞまもりける。二親の思はるゝは、とても此片里にては、頼しい聟がねも有るまじければ、京のたゞ中を聞合して、天晴都の男ぶり、それもえらみに撰みてと、子に狼狽ゆる夜の鶴。家内の下人諸道具まで、すつぺらぽんと町の座敷をかりて引きこしの明日より、お橋が緣の事のみにて、御忌御影供の人だちへ二親が引きそうて、娘自慢のうはの空焚。物好小袖につくりすませし品かたち。京にも希な雛人形。よいや大名道具めと、譽められた一言が、梶右衞門の耳にしみ付きて、我も昔はよしある家、一人娘をむざ〳〵と無祿の町

> 赫夜姬―竹取物語に委し
>
> 玉味噌―木曾の玉味噌にて山家にあり
>
> 鵲の橋―七夕の夜天河に鵲の羽にて掛渡す橋

のかぎりなく、はからずも得し仙藥を、ものした物がものしらるゝ、其盜人は千年もと契をこめし妻がねが横著。奔月托身月中仙とは、不心底のうはもり。夫を尻に敷金、かなゆづすり持ちて來りつらん。又赫夜姬がむかし咄、八月の十五夜に天津空よりむかへの輿、帝に不死の藥をすゝめたるは、出尻あらさぬ神妙を、世に珍しく書殘せり。然れども此二女がふるまひ、むさいさもしい凡情にて、非難をいふべきことならじ。我福分を以て其福分を損う奢者でも、身一生にある果報なら、削つても落すべからず。迂作と聞きては、おとし咄さへせぬ正直ものが、貧乏神の中宿と成るは、天數のまゝならぬ世の中。說法僧の付けこみ所。因緣とも業障ともお口にまかせて仰せらるべし。又女は氏なうて玉味噌のあぢしらぬ身と成るは、天地のめのこ算に、はづれたやうに思はるゝぞかし。河内の枚方天の河内の邊に、平戸梶右衞門とて、有德なる浪人あり。常のすぎはひに謠の指南して、麥豆綿の禮物に、心やすく世を渡りける。女房のお琴ある夜の夢に、鵲の橋の上で、かけ盤で茶漬喰ふと見て、お腹のかさ高くなり、終に女の子を産落せしより、父梶右衞門此子の名をお橋とつけて、撫でつさすりつ愛憐しみ、千箱の玉と育てしが、脊たけ延るにつれてあいくろしく、器量發明只ならぬ生立なれば、父母の

節用集─辭書、其書に記されし如き作法

ためつすがめつ─注意して見ること

后羿─有窮氏

つけば、介副加の役々の女中、立ちかはり入替り、節用集の式作法。お供のくわい介ごん藏まで、おめでた雜煮の腹鼓、うちをさまりし三々九度に、嫁御は先づ色なほし、御一家方へのお近付と、帽子を取れば、見たような顔に、隱居の母ためつすがめつ眺め入つて、よう思ひ出せば、狐の子買つて戻した眞田山の白子女郎、是は不思議とあきれた顔に、嫁のおたねも恥しさうに、指しうつむいて挨拶出でず。いざお休みと快庵が引取つてのきり盛に、立ちてゆくうしろから、尾は見えぬかとお母老の疑も、心一つに日はたちて、よく〳〵聞合せたれば、嫁の親里青葉半之介といふは、玉造の黑門に、屋根草おふる軒のつま、よめ菜川苣たんぽゝも、いつを春なる荷うりして、青菜勘兵衛といふその日すぎ、藝子の小袖がおやもとなるよし。お母老はじめて夢がさめ、これ和三郎、嫁女の廣めしやるなら、小豆の蒸飯に油あげ七つばかり添へて配りやと、にがり切りていひ付けられぬ。

第二　一人娘の奢は末のかれた黃金竹

あかなくに月のうちなる檗もが、老をかくして幾秋も見む。錦繡萬花にいはく、后羿が慾

常脉のお出入—常に定まれる出入

氣伏し—承知の意

いきり—息張りの義

てら〳〵日和—曇り乍ら晴る日和

むべも富みけり—東遊の呂の句を引用す

眞田山の稲荷へ、御膳百燈の賽し、和三郎は其日より、勘定場にはひぬきの商人形氣。上鹽町の妾宅は、しばしの榮花とさめ果て、世帶道具に片付代五十兩、いづち行きけん郭公、雲井のよそに歸りけり。常脉のお出入醫者信多快庵、したり顔に隱居へ來り、私存じたる西國の浪人衆、青葉半之介殿と申すが、玉造邊に蟄居せられてござる。息女おたね殿と申すが當年十八歳にまかりなられ、容儀發明さすがに武家の育がら、しかも兩親に孝行なる事日本の孝子傳、金の釜の掘出し嫁。今日和三郎樣へもちよとお咄申したれば、手前ははなはだ氣伏したれども、母の思はくいかゞとの儀ゆゑ、其のまゝ是まで伺候仕つたと、いきりかゝつて物語れば、それはまあいかい御親切。殊に系圖正しき浪人衆とあれば、娘御の行儀はさぞかし。和三郎さへ得心ならば、私はもとよりの事。一時もはやうとてものお世話と、かさね〴〵の悦。又兩社の稲荷樣へ御湯神樂のお禮參。神の結びし縁にや。結納の往來も事をさまりて、三月二十一日は稲荷樣の御縁日なればと、婚禮の日はお母老の望にて俄の設。普請上塗の干るまなき、苗代時の風寒み、てらてら日和に降る小雨も、淸めの雨といはひ歌。むべも富みけり其夜の設、媒人信多快庵案内にて、舅青葉半之介夫婦、五十有餘の友白髪、嫁の乘物舁入させて、おの〳〵座に

あのゝものの道行―兎や角の道行

山吹の道具立―黄金には

眉おろさせて―落籍の上眉を落させての意

に游ぎそめて、岩井風呂の小袖といふ藝子に、夜晝の居つゞけ、愚痴な悋氣からいひあがり、いつそ身請の談合しめて、身の代の三百兩に、あのゝものゝ道行に、まきちらす山吹の道具立には埒せぬ事もなく、先は此春の二の替と親方の悦。眉おろさせて上臘町の座敷住居、妾珍しき水の出端、宿の妻さへ去りこくりての無理氣儘。老母のいかりも憎さ可愛さの涙川。歸りくるかに取りついての理詰づくしも、うはの空ふく戀風に、たちゐる雲の足とまらで、我屋を旅の一夜もまれなる枕の海、はやくも瀬となりて、ある朝母の看經の終を待ちてかしこまり、暫くも御心に違ひて、段々の不行跡、やう／＼始めて夢さめ、きつと分別致し、袖が事は早々暇遣して、向後は店の勘定ぬかりなく、せめてものお心やすめ。是までの不孝御免下さるべし。しかし本妻義は一旦離別狀遣したるうへ、わが心なほせしとて、今更あらためて呼戻す事も心外なれば、外々にて似合しき緣を聞きたて、天晴御安堵させます間、何事も御宥免と、本心にかへりたる和三郎が言ぶん、隱居大きに悦び、其心にし聞くうへは、何をか後世の障ならん。茶屋者でさへあらずば、何人の娘でもくるしからず。一日もはやく初孫の顔を見せてたもと、世に嬉しげなる有さま。是こそ狐の恩がへしと、其まゝ僕兒下女引きつれ、玉造

脇に成り—他事となりて

後生も水にならう—後生の願も無になりて亘くなからんの意

野干—狐

葛の葉—蘆屋道滿大内鑑の姫の名

わんざん—和讒の義いひがかりなり

異見してもらひたさに、其譯を話がてらの天王寺參。今は如來樣も脇に成り、此事のみ心すまず願ひこんだ。後生も水にならうかと悲しうござると、眞實に子を思ふ親の慈悲、狐も感入りて、やう〱に頭をあげ、お心やすう思しめせ。それ程に子を思ひ家を思ひての御心勞、佛神の加護ばかりにても、思召の通に成りませいで、此お情の御恩報にきつと思召にまかせまする。かならずしるしを見すべきぞ。今はとて立上り、野干の姿もあらはさず。角結のくけ帶に尾をかくして、女房ぶりしほらしく、宵月夜の朧に眞田山の方へかきうせにけり。久三は始終を見入り聞入りて、扨も替つた狐ぢや。去にしなには是非に箔置の杖かたげて、畜生足と出かけさうなもの。富十郎が葛の葉の正眞を見る事と、たのしんで居たのに、中々尻のあたりのよせ皺引きのばして、尻聲もかはいらしい鶯ごゑ、とんと呑みこまぬ女房。あの狐の子も持ちていんで藥喰にするか。又は黑燒にして髮生藥にするのではござるまいかと不思議がるを、はて扨そんな惡口いふ物か。狐は執心の深いもの。ことに賴置きたる事もあるぞかし。かならず宿へ歸りしとて、わんざん噂もすまいぞと叱りつけ、狐がことばを賴みに、心まめしう急ぎて宿に歸りける。實に其言瑞あるかな。一子和三郎は、去年のいつよりか、ふと道頓堀の水遊

去狀—離緣狀

若代—若き手代

をうなだれて、深く恩をむくふる有樣に、隱居も大かたならぬ悅、先はそなたの望叶ひて、さぞ嬉しからん。それについて昨日そなたのいうた詞に、何なりとも一品の望は心にまかさうとありしゆゑ、其詞に付きて賴みたき事有り。其譯といふは、わしが事は內平野町にて、日光屋和三郎といふ人參の問屋なるが、今の和三郎といふは、わしがひとり子にて、今年三十二に成りまする。器用發明は町內の譽もの。去年今橋邊より嫁をもらつて、もはや世に不足なき身と、わしは隱居しました所に、何とした佛樣のばちでやら、息子和三郎其嫁を嫌ひて、去狀つけて親里へいなしました。其おこりといふは、島の內の藝子に深うなじみ、此春身うけして、爰から程ちかき上鹽町に圍うてあるからの事。此比はいつそ商賣の勘定もうはの空にて、晝夜妾の所へはいりこみて、一向內にとては尻すわらず。若代なり手代共も多い事、家の主がそれでは身代も心もとなく、さまざま異見すれど、唐の倭の引言に、口がしこく云ひぬけて取りあへず。さらば其妾を內へいれうにも、一家世間の思はく、茶屋者は嫁にも成りがたし。賴むといふは爰の事。何にとぞ、そなたの通力にて、妾と手のきれるやうにして、又外より似合しき緣組もあるやうに、まもつてさへ下さらば、その上もなき恩がへし、きのふも旦那寺の和尙樣に、

玉造―攝津國東生郡にあり

六貫―一貫は八十文なり

みだを流して賴みけるに、老女もほろと涙ぐませられ、扨々不思議な哀な話を聞く事かな。子の可愛いは人間畜生に替る物か。かならず心やすかれ。明日はいかにもこの鳥屋町を尋ねて、何程にても買戻しておませうぞと云はるゝに、それはまことか。あら嬉し。此程の憂さをけふぞ忘草なれ。とてものお慈悲にあすの暮がた。此野まで御あゆみ下されませ。先程も申すごとく、此御恩には何事なりとも、一品はお心にまかせ申すべし。日も暮れきり候へばとて、念比に禮をなして、畦道を小走りに、菊菜畠の中へ見えずなりにける。供の僕兒がこはがるを、力をつけて手を引きたて、玉造の町を横切に、内本野町の本家に歸られけるが、其夜は目もあはで、明ると其まゝ手代太兵衛をひそかに呼びていひつけ、鳥屋町をせんさくすれば、はたして此比生捕りしとて、子狐の繋れ居るを、五百文より六貫までに、付きあげて買取り持歸れば、隱居の悦、誰にも知らすなと口どめして、我小座敷へかくし置き、なでつさすりつ、食物をあたへなどして、其日の暮れやくれずより、件の子狐を久三がふところに抱かせつゝ、眞田山の下なるきのふの木陰に立ちやすらへば、あんのごとく母狐、ありし姿にて立出で來りて、物もいはず、伏しをがみ伏しをがみ。子狐を抱取りて、嬉しげなる顏ばせにて、地に跪き、かしら

心妙―神妙の義

鳥目三百文―金三百文に同じ

いしよげに引結びて、靜にあゆみ來るに、人すくなき道をば、わかい女中の供もつれず大膽なと、見かはす顏に小腰をかゞめ、申しく御隱居樣。なれくしい事ながら、あなたをお慈悲深い御方と見かけまして、お頼み申上たき品。一通お聞なされて下されしうへ、御聞屆け下されますならば、まことにうへなき御恵と、いと心妙に思沈みたる風情。見た所が錢銀の無心いひさうな身の廻にもあらず。終に見もせぬ女中のしみぐとしたお詞、年寄に相應の御用ならば、何なりとも聞きて進ぜませうに、先其譯はと尋ねられ、頼しきお詞にあまえまして、あからさまに申上ます。かならず人にはお話下されまじ。恥しながら私は、この野邊に百とせをかさねて住みまする狐でござりますが、去秋の末産みました子狐、此ごろ人に取られました。其子が鳥屋町へ鳥目三百文に買取られましたゆゑ、夜晝啼きあかしてばかり暮しまする。今は命も終るばかりの悲ゆゑ、かりに人の容と成りて、これぞと頼しげなる人を待ちてをりまするに、あなた樣のお年恰好と申し、殊に後生參のお歸なれば、此悲をお嘆き申したらばと、先程よりのお願。人ならぬ身の哀さを御推量遊ばして、何とぞ我子を買戻して給はらば、生々世々の御慈悲。この御恩報には何事にても、一つのお望は叶へませうと、黄なるな

陰獸—野狐

結願—立願

修法の果の日

世間妾形氣 巻之四

第一 息子の心は照降しれぬ狐の嫁入

諏訪の海氷のうへの通路は、今朝ふく風に跡たえにけり。信州諏訪の湖水は、年毎に三冬の時いたりて、氷千尋の水底に徹りぬれば、野狐其上をはしりて、旅客輿馬の途を曳き、又春氣地中より冒り撼ぐる比、野狐かへりて往來をとゞむとなり。かの陰獸恩のために酬い、冤を懐きて訪ふためし、ふるき夜話につきずしも。ちとせの後の鳥居數にはいさをしを立て、うとくも見えぬ。西行が花の匂も日にみがくと詠みたる玉造は、家居たてせばまりて、旅店の朝もよひ、唐弓の弦うつ夕ぐれ、難波の里のふるき佛も、此わたりには殘りて見ゆ。梅はちりがてに彼岸櫻の比も違へず。天王寺の大法會、けふしも結願とて、六十あまりの老女の隱居めきたるが、小僕兒に巾紗物もたせて、旦那寺の因縁ばなしに日もかたぶき、まだ春ながら、野風の寒きに心せかれて、眞田山の下道をかへる薄暮の木陰より、年の比二十二三の女房、其美さしほらしさ、古金襴に抱帶か

春秋の紋日—春秋の祝日

列女傳—漢の劉向の著書

るれば、藤野事はちと樣子ござりまして、たとへいか程の身の代を下されても、お心にまかせ遣はしまする事叶ひませぬと、ちり灰つかずかてつけねば、腹たてちらす客もあり。わけてこそと木折ならぬ人は、粹といふたぐひ成るべし。春秋の紋日おくりむかへて、定めし年も首尾よくつとめ、八疊敷の宿這入、木綿布子に前だれ引きしめ、くだの襷りゝしげに、身のすぎはひは此里の女髮結、一生やもめで身をかため、才太郎が追善をねんごろに弔ひしは、毛唐人の書きし列女傳にも、此なるはあるまじ。さて此かみゆひといふ事、敵討御未刻の太鼓といふ淨るりに、なんぼ廣い大阪でも、男のとりあげ婆と女の髮ゆひはないと書きしは、四十年そこらのむかしなるに、何事もさかしく移りゆくは、色里のすがた。是も風流のひとつならんかし。

月日の關路―過ぐるの縁語より關路といふただ月日の義

ほだしを打たぬ―心をとめぬ

には旦那寺の和尚をよんで、あみだ經を供養すべしと、殘る所なき深切。あんまり勿體なうござりますと、聲をあげての悦涙。親方夫婦に助けおこされ、其夜より二階なる小座敷に閉ぢこもりて、髮すきなほし小袖をあらため、硯を清めて机にむかひ、晝となく夜となく、てらす燈の思のけぶり、胸にあまりて空にたつを、みせばや富士の峰にまがへて、吾妻の方にむかひつゝ、觀音經の倭文字、心ぼそさはかぎりなし。月日の關路はやくも過ぎて、四十九日が内つとめをこたらず。思のまゝにとぶらひて、其夜一夜を通夜にあかして、人よりはやく起出でて、常々よりも心かろく、友傍輩に立交りて、この程はすきと樣子も聞きませなんだが、誰さんはどうぞ。かれさんはいつ見えしかと、笑ひたはぶれて打遊ぶけはひ、きのふと替る立ふるまひに、親方夫婦猶々哀をもよほしぬ。髮化粧いつよりも派手につくりすまして、其夜よりのつとめ、前にこゆるもてなし、誰いふとなく此沙汰、此里にひろがりて、其心いきにほだしを打たぬものなく、今は全盛ならぶ者もなかりし。金を積みても身請せんと、あふごとにせむる客あれども、御志は忘れませぬ。さら〳〵僞にて、お心を慰めまするでは無けれども、この事はかさねて申出して下さんすなと、いくたびいうても同じいらへに心をいりて、親方榮五郎へいひ入

冥加—惠、冥利

いきぢ—意氣

今更あやまる事なかれ。生きる死ぬるの二つより、外に心をみだすなと、男をみがく亭主が一言と、夫のおもき遺言と情の道の二筋、いづれ涙に見えわかず。只手を合せて拜むばかり。榮五郎立上りて、女子共持佛へ燈明をあげて、一本花を立てかへよ。藤野が居やる小座敷へ誰もゆく事無用。折ふし襖ごしに用があらばと、尋ねてやれと、そこそこに氣をつけて、佛間に入りて看經の聲いと殊勝なり。藤野はそこに夢うつゝともなく、其日の暮るゝまで泣倒れしが、夫の文をくり返し〳〵よみかへして、始めて心を取りなほし、親方の前にあゆみ來りて、さき程の御詞、あまりなるお慈悲ふかさに、冥加の程もおそろしく存じますから、才太郎樣の書置に、只あなたの御恩を忘るゝなと、くれぐれ申置き給ふ心と引きくらべまして、うへが上にも有がたう存じます。其お情をくみわけまする程、猶さら死にまする所にあらねば、遺言にしたがひ、數ならねども屹度御恩を送りたう存じます。只いつまでも御見捨なく賴上げまするど、物のわかる事、さすがに川竹のいきぢより出で、地女の及ばぬ所、榮五郎大きに感入りて、何にもいやんな。呑みこんだ。おどろき入りし心底。其心ならばけふよりは四十九日が間、つとめには出さぬぞ。小座敷へ引きこもりて、才太郎殿の未來の爲、經を寫して追善しや。七日ごと

さだかならで―不明にて

ひたすらに―専らに

契に候。くどくも御申聞可レ被レ下候。わざと藤方へは文どもおもひよらず候。これしも報せ申さぬこそ、そのことは存じ候へども、そこまでは思ひ捨がたく候。頼みなき者の身の末、よく〱御情の御介抱こひねがひ候。盡きぬくりごと申とゞめ候已上。

霜月十三日の朝　　才太郎

岸屋榮五郎樣

讀むうちより藤野が悲いふばかりなく、兩眼より涙わき出るがごとく、只いふ詞もさだかならで、物ぐるはしく見えにける。榮五郎も不便さかぎりなく、暫く案じて云ふやうは、死ぬるにも死なれぬ心の內、推しやりて申聞す事有り。涙を止めてよく聞すべし。流をたつる身は、末ひとつをたのしみとして、さま〲心にすゝまぬ氣色をもつとむる事ぞ。あまた人づかひし中には、良きと惡しきとの志多く見來りしに、そなた程なる女らしき人を見ず。才太郎殿の節義も感じてもあまりあれども、この書置に呉々云ひおかれしは、ひたすらに我方への義理を思過しての事なれば、われさへ赦す物ならば、且は歎くにも及ばず。生きて成りとも、死んでなりとも、是までまもりし貞女の道

いたくなふきそ妹もあらなくに

年も殘りて―年季ものこりて

横死――自害

まだ未來の事までは、言ひなぐさむ月日にもあらず候に、しほらしき誠を思ひつめて、我爲に又のつとめを致しくれ候段、永き未來までも忘るゝ時はあるまじく候。我死にゆきしと聞候物ならば、其まゝかれも死にはつべき樣にも思ひとり候はん。其事によりてこそ、此くり言をも申入候。いまだ大恩あるこなた樣方に年も殘りて、おのれ儘ならぬ身に候なれば、自害など致し候は、其身を盜て恩をむくいず。死にゆく夫まで人でなし者にいたし候事、草葉のこなたより願はざるふしに候。とても過者のかへる道はなく候へば、よく〳〵物を辨へて、仇なる命をすて申候はぬやうに、御申聞せ可ㇾ被ㇾ下候。もし御詞に付申さず候て、横死致し候はゞ、あの世にて行合候とも、物をも申まじく候。又は死なれぬ命を悲み、とみに尼法師などにも成りて、跡とぶらひ候とも、恩と義理とを忘れたるまことなき回向は、露ばかりも受申まじく候。其譯とくと御申聞可ㇾ被ㇾ下候。只過ゆく身の願には、此心をよく〳〵聞わけ、こなた樣への奉公をこたりなく、末々年もあき申候はゞ、丈夫を見立て嫁し、其上にての一遍の回向をこそ頼しく存申候。幾重にも此詞をまもり候はぬ物ならば、永き夫婦と思ひ入候まことも情も草の上の露、朝日にあふ霜と消るばかりの

すぎはひ―生業

いたくな吹きそ―海原に浮寢せる夜は沖津風

候。當夏の末、其地を出候て、江戸仙臺川岸に、賴しき人の方に落付申候より、立身のたくみ夜も眼もとぢず、心にとゞめ申候へども、土地に委しからず。只うち見に心かけ候ては、京難波に替りたるすぎはひもあらず候。宿の鄰なる人、伊豆の八丈の絹買ふ業を手馴れておはし候にすがり、あの島へ渡り、絹どもあまた買ひあつめ、先づ一たびのぼりてと、舟出急ぎ候所に、伊豆の沖の名さへ知らぬわたりに泊舟せし夜、海賊といふ者におどされ候て、積みたる荷ども殘らずうばひ取られ候。その者どもの手にて死なんず命にて候物を、おろかにもからうじて、よしなき命を迯げまどひ候事、後にこそ淺ましく存候。今は世の中の望も綱きれて、親々の罰せられ候とまで思ひしられ候まゝ、古鄕近き所よりは、人しらぬ遠き國こそ、せめて恥しめのすくなきまゝ、伊豆の三島にてこの文認め、我は此暮にかならず身を終り申候。此事藤方へも申遣したく候ひしかども、いとゞ物思ふ身は、いたくな吹きそともうけたまはり候物を、何事もこなた樣まで申入候。我事はかく朽果候とも、身にある罪の身を責るなれば、例珍しからず候。只藤事は二年ばかりのなじみにて、い

心も空になりて—失心驚怖して

かずまへられたく—世の人に数へられたく

そなたの夫の才太郎殿、事は不慮なる事にて相果てられしぞ。定めて聞きておどろくべしと云ふをまたで、それは何時のいづくにて、いつの日にあなたのお耳には入りし事ぞと、心も空になりて尋ぬれば、成程、此文飛脚が投入れて行きしより、我も今朝こそ知りたるなれ。よみて聞かさん。心をしづめて聞かれよと、袖より一通を取出して、

誠に片便ながら一筆申入候。拙者事不覚悟より存じよらず、御情の御取はからひに預り、殊更格別の御深切など粗うけたまはり、放埒の身深く恥入候。しかし人界の定は、前の世よりやくそくある事も、かねて聞きおきしにまかせ、心やりをも致し有レ之候。藤事厚き志より、二度淺ましき苦界につながせ候段、今更に候へども、悲しきかぎりに候。女たる道の誠は、あの方にとゞめられしが、をのこの情は露ばかりも我身には思ひよらず候。いかにもして今一たび、世の人にかずまへられたく存候より、いひがひなき金ともかへり見ず、物見付たるがましく、はる〴〵と古郷をはなれ候事、世にしたがひて、かくも愚には成りくだり候。あはれ苦しき事をも凌ぎなば、めでたき日をむかへんとのみ思ひはかり候ものを、今は其心さへ搔きうせたるは、世の因果とある因果、此身をひしとはなれず。終に命のきはのくり言に及び

大文字の送火—七月十六日京都如意嶽にて大の字形に火を點ずること

こちたるは、とてもなるくり言。生は難し、死はやすし。生きてなれぬ事の、いかにあの世まゝなるべきや。金は世の寶にて、かへりて人を損ふと、あながちに云ふべからず。人一生に福あり、禍あり。死なでつまらぬ大三十日ぞと思はば、伊勢へ年籠と出かくべし。三月の二日には天王寺に經供養の舞あり。五月の際には賀茂の足揃より上りて避くべし。七月は大文字の送火、九月八日桂の宮の相撲會、泉涌寺の舍利會、皆これ神佛の御めぐみ、命は捨てずとも、此厄難のがるゝ方はあるぞかし。一夜こしては春の日のゆたかなる人心より、三が日に借金の目やすのつきしこと、神代よりあるべからず。蜆川の岸屋の藤野は、其後才太郎が音づれを待ちくらして、つとめも可笑しからねども、親方榮五郎が殘る所なき深切のうれしさに、奉公に陰ひなたなく、友傍輩とも情を盡して馴染みければ、其誠あるもてなしを感ぜぬ者もなかりけり。ある日朝迎より藤野をはじめ皆々歸りて、いつものごとく一所に打ちよりて、憎い可愛の人ごと、笑をつくりて咄して居る所へ、小女郎のおつる走來て、藤野さん、旦那さんのお呼びなさつてといふより、何の御用ぞと立ちてゆけば、榮五郎、そなたにひそかに咄す事あり。こちへとつれて二階の小座敷へともなひ、聲をひくゝして、とつくと心を落しつけて聞くべし。

氷の如き物
一刀劍

に、才太郎悦び、當世上方が八丈縞の時花る折から、せめてそれをともみ立の相談、鄰家の男頼しく、幸八丈へ出船の比なれば、才太郎も同船にて、伊豆の國なる八丈に漕渡り、好める縞模樣思ふまゝにえらみて、五十兩の金有りだけの思入。上り日和の手つがひよく、名もしらぬ磯邊に泊舟せしに、其夜の九つばかりに、あやしき小舟一艘こぎ付けて、恐しげなる男五六人、氷のごとき物を拔持ちて、こなたの舟にとび乘、是は此わたりの海賊なるぞ。命をしくば荷物を渡せと、聲々に罵りければ、船中あわて騷ぎて逃げまどふを、はやく艀に乘りてさるべし。命や取るべきかとにらむ眼に、心消え〳〵として、才太郎と水主一人、艀に飛乘りて、磯にこぎよせて、人をしらず道もわかず逃げまどひて、足にまかせけるに、やう〳〵夜明けて、爰はいづくにやと尋ぬるに、伊豆の内にて御崎といへる所なるよし。扨も淺ましや。かくまで悲しき事の續く物かは。

第三　二度の勤は定めなき世の蜆川の淵瀬

さりともと待し月日も過ぬれば、こや絕えはつる始ならん。去にても命の二つある物にしあらば、一つは捨てて愁をたちてん。一つは世に殘りて、戀しき人に宮仕せばやと、か

大びらな銀子―大金

入口商賣―周旋屋

買出しする仁―買出しする人

賄ひまして、藥種膏藥の出所もござらぬ。又よろしい口もござらばと出でゆきぬ。才太郎亭主にむかひ、しらるゝ通の我等、高五百石にあまる田畠、五とせの夢と失ひて、身すがらと成りくだりしは云ふてかへらず。とかく大びらな銀子まうけして、今一度古鄕の松が見たし。當地の案内かつて知らねば、とかく力は貴樣ぞと、ぶらさがりたる詞。いかにも呑込ましたれど、私も此地へ下りまして、きざみたばこ上塵紙のかたげ賣。日に八九里づつの道を、足を棒にかけ廻りましても、小商のはかもゆかず。ことに諸色の高きにおはれ、水道の泥水さへ呑まるゝ事にあらず。うろ／＼と致すうち、此家の死跡の入家致して此口入商賣。只今の江戸なか／＼大づかみなる事、小本錢にては見えわたらず。通町の大商人は多く京伊勢近江よりの出店にて、地のおひたちは希なり。千兩設けやすく、千兩出でやすし。淀河の水の味おわすれなく、江戸の濁水の御しんばうは、もとよりいつ御出世ともはかりがたし。とかく爰は思召をかへられて、お上りなさるゝが上分別と、實ある諫いかさまと思ふ程力落ちて、途方にくれたる體。八兵衞思案をめぐらして、折角のお下まんざら手ふり棒にてお歸りなさるゝも殘念。此鄕に私內外の懇意、八丈絹の買出しする仁あれば、是へ御談合なされて、八丈物の思入はいかゞといふ

一口―山城國紀伊郡にあり

なら茶―奈良茶飯

ねまつた―寢そべる

所で小口も利いたる者。伊丹の牛市に、男づくのいきさきにて、二三人に手疵を負はせ、江戸へ立ちのきて、五六年このかた爰に居くろめて、頼しづくの世渡。やう〳〵に尋ねあたりて、内に入れば、是はどうしたお下、薄々様子もうけたまはり、いかゞと案じてをりました。扨お下の思召はと、頼しげなる詞に力を得、あらましの物語。先はおしたく風呂にめせと、心一ぱいの深切。旅草臥しばらく休息と、枕かりて横になるあたまの上へ、落ちかゝるやうな聲して、唐犬びたひの男、親方、おらは大膳太夫殿へなら有付くべい。今一口の長尾殿へはよしなさい。とても十兩や十五兩の給分では、なら茶、ぶつかけの錢にも足らない。爰にねまつた野郎も奉公人殿か。見た所が大がい寸にはかゝるべいが、上方野郎はなましらけて、おかちにも道具にも親方の骨折だと、跡さきなしにきほふ所へ、廿四五の庸醫、檳榔子染の木綿衣裝、羽織著物一對に、小脇指の柄絲きれて油じみたるもいぶせき人柄。御亭主昨日は始めて、段々のお世話。今朝より手前相應の口も申して參らぬかと尋ぬれば、さればさき程相馬様から、外科本道かねて、十兩に二人扶持と申すがいうて來てござれど、おのぞみには足りますまいと云へば、それはなんぼう末々の療治でござると申して、藥種屋の埃飲しても置かれませぬ。手前が身分を

お身のくろまる―お身の爲なるたもる程―賜はる程

かれいひ―乾飯

たのむの鴈―田面に賴をかけたり

らなし。お心たしかに思しかへて、又御出世の時を待ちて下さんせ。お前さへ御得心ならば、私が身をばもとの流に沈め、今までの親方さんに、何もかも打明けて、借らるゝだけは借りましてなりとも、お身のくろまる御恩報が致しましたいと、實のまことに涙をそへていひ出れば、才太郎も嬉し涙身にしみ通りて、さりとは志の程かたじけない。さういうてたもる程、又奉公をさす事が男の身では口惜い。忘れはせぬぞと、手を合せての悦。お藤は我身をそれに極めて、もとの親方へ二度のつとめ。岸屋榮五郎といふ男、粋といふ字には、命でもと思ひこんだる生付。さつそく呑みこみて、五十兩かして心のまゝの奉公。才太郎は此金を肌につけて、命二つと思ひこみ、おのれ人並なるべきか。しばしの憂目は凌ぐとも、親の恩より義理の恩、金さへあらば報ずる物と、生付きたる大摑。心の矢猛はる〴〵と、江戸のよしみを賴みにて、伊勢や尾張の海面に、過行く方の戀しさは、胸にあまれど腹さびしくて、忍涙にかれいひの、ほどへにけりな旅衣、きつゝ馴れにしつまからげ、錦よみなす蔦楓も、金の蔓なら眺もあかじ。あかぬ眺の山は富士の根いつとてか、歸る日をなんたのむの鴈の、君が方にぞよるとなく。あゆみつづけて十日旅。仙臺川岸に紅紐の八兵衛といふ大名奉公人の口入あり。此男は櫻塚の生、

心のやる方　―慰方

ぬ。かう仕果せしは、長からぬ縁の限にや有るらめ。京の親達へ一まづ歸りて、身のかたづきの談合もあれかし。今とてあかぬ中なれども、さらに心は殘すまじ。逢見ぬとても心替らず、互に身のゆくすゑを神にいのりて、よき音信をきくまでのたのしみぞと、心おちたる男の詞に、なほも淚せきあへず。扨も〳〵世の中に勤せし身は、女の淺ましきかぎりにや、年月お世話に成りまゐらせて、あはれ我心の底をうらなくも見せしらせ申せしとこそ思ひしに、只今のお詞にて、今に流の身は誠すくなき遊をおぼし止めて、かゝる事をもいうて下さんすなれば、聞えませぬといふ恨さへ、我身に恥ぢて申されず。つとめて居りました節より、いつお心に違へし事もなく、まことを盡しましたればこそ、つらき苦界をのがるゝ樣になされては下れしぞかし。おち目には隙取らうと、よその女中はいうてか知らず。私ばかりは其やうなさもしい心露ばかりも持たねば、勿體ないながら、恨みませんより外に心のやる方なし。京の親達とて眞實のでもなし。たとへ血をわけて下さつたのにもせよ。かなしい奉公に賣りて下さる心入、ことさら丸八年も隔りては、親とは名ばかり賴しうも思はれず。又ぞや勤せよとあるとて、夫にはなれし女の身、親の爲なら是非もなきならひなれば、京へとては歸る心夢さ

似つゝもあられ―似つつもあられば の意か

堂島―大阪にて米商のある所

飛鳥川―大和國にありあすの縁詞にて用ふ

人目繕ふ中にも、丹後の一番鰤は、是非大釜の上にぶらつかす事ぞかし。扨わつと寄る初相場より、その十日には、さらりと小拂まで殘りなくしめきり、春に春をかさねて八千代の壽。又百貫目とらまへる事珍しからず。是扶桑の第一の都會、唐土の長安洛陽とても、此所に似つゝもあらね、鋤鍬の柄のゆに成るまでつかうたとて、いつかはと無分別おこして、池田に鄰る櫻塚に、才太郎とて所ふがき大百姓。舟渡二つこへて五里に近き道を、田畑家藏のこりなく持運び、堂島の人の雪踏のうらにつけてしまひし事、今更に夢さめしとて、物がたき在所の一家は、人外と覺えてよせつけず。堂島通の内になじみかさねて、身代しまふ足代にもなりし蜆川の女郎、岸屋の藤野といふを身請して、曾根崎の裏町に、夕顔咲ける垣根の内、池田山の愛宕火居ながら見ゆる座敷をかりて、櫻塚より米商の足やすめにと、しつらひ置きし住居に身をよせて、飛鳥川のあすを如何にともあだてなく、なじみ深きお藤にさへ、身の上を打明けかねて、心を沖の日和見に、渡邊橋に立明しつゝ、何をあてなる浮雲の、空だのめなる身のあじきなく、よく〳〵いはじと忍びしさへ、けふと成りてはつまらぬ盡し、聞いてお藤が胸打ちさわぎて、涙より外に詞もなし。才太郎いふやう、そなたのしんてい常々あだならぬ志、一つとして忘れはせ

ずつしりとした―重味のある

とちめん棒をふりて―急ぎ立ちて

積りて一軒に五人口、一人五匁雜用に當てゝも、年分に壹萬二千七百貫目の歩口錢をさまらでは過されぬ所。それにつく仲衆働人といふ者、草鞋しめはきて、矢立手拭はなさぬ人柄に、島の内、曾根崎、新地の惡所狂につかひ捨てる銀、一節季に壹貫目づつは何程の事にもあらず。道頓堀の芝居どもが、顏見世の初日の三ばん太鼓を、夜半過ぎても打ちやまず。櫓下といふ名目の銀子を、今と成りて雲の裏まで借りあるきても出來ぬ所。此人柄の中より北といふ字を先へ立て、十貫目箱二つ、ずつしりとした意氣込。三番叟に、よいよ〳〵の聲かけさするなど、又となきためし。それをつかふ上たる人の心意氣はからるべし。ある人の岡目に、六十日に二萬貫目、年分に十二萬貫目の銀、此島へ落ちてこねば、此所の諸商人まで門松立て、ものまうの聲きく事ならず。爰こそ人の出世の種植うる土地と見立て、出かけて見れば、いかにも萬事大まかにて、有る無きをくるしまず。さあつまらぬといふ時は、拾匁にとちめん棒をふりて、大三十日の夜半ごろに、道具屋の戸をたゝきて、佛壇戸棚を置質の談合。敷きて居る疊も、一疊を三分のうり賃。銀受取りて賣渡したるしるしに、簞笥の小引出一つ抽いていぬれば、はや元朝の壽。年禮にくる人の見るも恥しと、ぬいて去にし引出の跡に、女房の前だれかけて、

今宮の心中─淨瑠璃の曲名近松門左衛門の作

ど、それが中にもそろばんあり、果報有りて、身のをさまりよく狂ひやむ事ぞかし。船車にもつまれぬ思の、うたてくも違ひて、親の讓り塵灰のこらず人の物になして、はては町々御評判の今宮の心中と、草雙紙の口ずさみにかゝるなど、其身にては底までゆかねば、生きてもの義理あるとは見えたり。其もとは皆金づくならでほかなるはすくなし。さらば金さへあれば、世の中に何かは儘ならぬ事なきとて、銀子まうけの心付きそめて、立出でて峰の雲、花の都の四條五條に所せきまで、建てならびたる商人、皆腹の中から十露盤蛸のある人心。あれかこれかと見れども、是ぞよき銀の蔓といふべき手業も見えず。只燃ゆる火の中にも、涼しい風が吹く物といふ禪宗のさとりのやうに思うて居ねば、今時の商人心のゆりる物にもあらず。江戸は身上の定めかやと、歌にうたふ本町駿河町さへ、昔とはことさびて、千兩の掘ぬき井戸も近年ほらする家も見えず。ましてや小店商人の劍の刃を渡る世の中の姿。そろばん詰のちゑ才覺にも、大まうけあるべきとも思はれず。まだしも大阪の堂島の米市こそ、千里一とはねの大商。六十餘州の大小名の身代を受けこみて、日本國が一所へよるとは、よい事する時のやうな詞僞ならず。千三百六十軒の米仲買、米方兩替五十軒、ひとつにして千四百十軒の仲間。隨分ちいさう

きつさう——顏色

付けねらふ澁谷藤作なるぞ。すなはち證據はそちが父四郎兵衛を討ちし時、寢ながら一刀はらひし切先、わが内股にも付けられて、其疵久しくなやみしかば、今に跡の付きたりしをこれ見よと、横根のなほりし瘡口をまくりかけて見せ。さあ立ちあがつて勝負せよと、きつさうを替へてかゝれば、繁野は口から出次第の敵討、うつ心もとよりあらう筈もなし。さしあたつて返答も出ず。扨はおまへがとゝさんを討たんした藤作樣か。顏みぬさきは憎い〳〵と、思うて居たれど、此間から馴染かさねまして、情らしい殿御ぶりに、恥かしながら惚れました。もはや敵うつ氣はござんせぬ。かへり討にして下さんせと、帶解いて抱付きしもをかし。よく〳〵聞けば、この女湯島の天神にて、軍書講釋する朝倉一東といふ者の娘なるよし。此うはさ廣くなりて、かへり討の繁野とて、部屋めぐりの名うて者、誰しらぬ人もなかりし。

第二　米市は日本一の大湊に買積の思入

鯨とるかしこき海の底までも、君だにすまば波路しのがん。心は法界にして無量なる物ながら、一念のよる所多くは戀にとゞまりて、銘々身分不相應の仕過しせぬ人もなけれ

し仇を報いんとせし臣

伍子胥—父兄の仇を報ぜんとて呉に奔り楚平王を討ちし人

家中—屋敷

藩邸

小指—情婦

ねぢて金子壹兩。いつまでも見捨てぬぞ、心おとすないぞをれと、いさみ進んで歸らるゝ。されば此敵討うさんなる事、あの屋敷にも、この家中にも、助太刀を賴まれし者幾人といふ數をしらず。熊谷次郎太夫が傍輩岡部六之介といふ侍、前の丁子屋丁山に、所望せぬ小指もらいし男。色友達の夜咄に、繁野が敵うちのうはさ。次郎太夫が心を盡して、不便を加へるまで聞出し、てつきり此女くせものと、脇より傳手こしらへて向ひよれば、四五囘すむと、はやくだんの助太刀を賴み出し、私が父は京の堀川にて、靜四郎兵衞と申せし薙刀の名人、弟子のうちに澁谷藤作といひし侍、武藝の奥義を傳へぬを恨とて、父四郎兵衞殿の寢ごみへしかけ、蚊帳の四すみを切りおとして、だまし打に討ちて立ちのきました。私は其時は三つ四つの比ゆゑ、前後もわからず、其敵の顏も見しらず、かか樣の懷にだかれて、敵討の手がかりに、この江戸へ下りました。貧しきあまりにかやうな勤致しますも、一は敵にめぐりあはうかと、それをたのしみ、あはれ助太刀と成りて、敵のありかを尋ねて下さんせと、取付きて泣出せば、六之介さてこそと可笑しく、扨はそちは靜四郎兵衞の息女か。其時は誠に乳呑子にてありしゆゑ見忘れたが、いかさま稚顏殘りてあり。其方が志の切なるを感じて、我本名を申し聞すなり。我こそ其方が

刀冥理—刀冥利の意にて武士の體面を重んじて誓ふ語

豫讓—晉の智伯の爲に趙襄子を殺

武士の入りこみ所と、母諸とも此地へ移りしかど、浪人の家ことさら女の身、朝夕の煙もたえ〲なれば、一は敵を尋ぬるため、又一つには誠あるお侍を見かけ、助太刀をも賴みません爲にこそ、此淺ましい身と成りくだりしなり。これまで多くの武士にも逢ひませしかど、あなた樣のやうなる誠のお侍樣を見受けませぬ。哀れ不便とも思しめさば、われ〲親子が力ともなりて、一太刀恨みさして給れと、一部始終を物がたれば、次郎太夫最前より諸手を組んで聞入りしが、手を打つて大きに感じ、さすが武士の胤とて、女には希なるたくましき根性、我を武士と見ての賴もだしがたし。刀冥理、とも〲に探し出して討たすべし。外に少の手がかりもなきかと尋ぬれば、何も心あたりは無けれども、父の最期に拔合はされしと見えて、刀の切先に血がしたうてござりました。すれば相手も手を負ひしと申すもの。刀疵のある者こそと、帶紐といて、肌をさぐりますれども、いまだ尋ねあたりませぬといへば、尤々神妙なる計略。此後とても敵を尋ぬる手がかりなれば、多くの武士に枕をかはすべし。先祖も正しき其方。かくまでいやしき業をするとは思ふべからず。晉の豫讓は炭を呑みて其身を變じ、伍子胥は道に飢ゑて食を乞ふ。はげしきかな。孝成るかな。此一包は其方が母へ某が寸志ぞと、鼻紙にひん

得心ー承知

さねてと別れしより、忘られぬ所ありしが、四五度にも及びし日に、繁野涙をはら〳〵と流し、誠にかやうな恥しき宮仕を致しまするも、深きわけありての事。この程より厚きお情に預りまするに付きまして、あなたのやうな、誠あるお侍様をつひに見ませぬ。お頼しい所を見こみまして、私が身の一大事をあかしたう存じます。何事によらず、お得心下されませうやと云へば、實ある武士と見て頼みたきとある儀、刀の手前聞捨てにも成りがたし。命は主君に奉りし物、金銀は萬寶の第一、澤山にはせぬ物。其外の事ならば何事にてもうけ給はり、届けてくれんとある詞に、手を合せてよろこび、先はさつそくのお受有がたう存じます。然らば一大事を明しまする。一通お聞きなされて下されませ。もと私は三州の生。先祖は岐阜中納言殿の御内にて、百々越前守とて忠功の武士。岐阜落城の節、搦手の大軍河田川に攻めよするを、三千の小勢にて三度までかけなやまし、終に討死せし大剛の家。父なる百々彌三兵衛まで六代の浪人、然るに淺井藤八と申す侍、何の意趣ありてか、父を闇打にして立退く。聞くとひとしく母諸ともかけつけ申し候へども、もはや行方しれず。死骸のそばに落ちありし小柄を證據に、顏も容も知らぬ敵を女の身として、七年が間付けねらへども、尋ねあふべきやうもなし。江戸は諸國の

石に根繼ぎ—極めて堅固なることの諭

胸ゆゑ—考ゆゑ

口入—肝煎

相對にて—相談づくにての義

ことなれと、石に根繼ぎなるいひかた。上總かしこまり、旦那はかやうの儀、御案内にござりませぬゆゑ、左様に思召すは御尤。只今江戸にかぎらず、京、大阪、駿府にも御在番の方々の御酒の相手、お寢間のあげおろしまで、致します部屋めぐりと申す女、一年一月ないし一夜二夜にても、謝儀を定めて參ります者がござります。是をお伽に差上げまする胸ゆゑ、早速にお受申したのでござりますと云へば、次郎太夫横手を打つて、はて珍しい說を聞きしかな。左様の辨なる女のある事、只今が聞きはじめ、實に〳〵太平ならでは、其類の身過する者有るべからず。誠に治世のありがたき事ならずや。然らば其中にて隨分はすはならぬ女を、先一夜會合いたしたし。其上にて又々再會の夜をはかるべし。此謝禮には干菓子一斤思ひ切りて調ふべしと、一廉心をはられし所が、金百疋には付けられず。是にても賣らぬよりはと、御用仰せ付られ有がたいと、百遍程いうて歸り、早速に口入を頼み、かの繁野を一夜百疋の相對にて、ひそかに次郎太夫方へ通達すれば、過分のよし仰せられて、手筈を定め、淺草の觀音前に小宿の世話まで、菓子屋受けこみ逢はせしに、繁野いづ方にて聞きしぞ、次郎太夫がよい物たんと持つて居る事をよく知り、初會にはしんじつに憘悦らするもてなし。次郎太夫ことの外に感心し、又か

江戸在番—江戸の勤番にあること

賣女—遊女

四歳の秋より江戸在番仰付られ、今年にて十三年。御本國に居る妻は、某二十三の時婚姻調ひ、わづか一年夫婦同じく臥し、同じく喰ひたるのみなり。恥しながら長夜などには、古郷の事を思出して、鬱々としてたのしまず。然れども武士たる者の、廓遊所などへ忍びあるく事、もし相知れる人にもあはゞ、一生の瑕瑾悔ゆるとも效なく、品によりて切腹を致さねば、ならぬ事もあるべし。高祿をいたゞき、重き主命をまもる身の、恥づべき第一ならずや。又妾などを召抱るものならば、本國の妻方へ聞えても、放埓と思ふ所もめいわく。爰をもつて其方に密々に相賴みたきは、何とぞ、不行作になき女の、刀さす道理も知りたる者あらば、一二回の鬱散を遂げたし。大切の金銀なれども、此密事において多少の費はいとふまじと、赤面汗を流して語らるれば、菓子屋上總をかしさをこらへ、何事を仰付られますと、存じをりましたに、左樣の儀ならば、何よりいとやすき御用。今晩明夕の間にも、御注文相調へまする事と申上れば、次郎太夫にがり切つて、これ〳〵、其方は何と心得られしぞ。賣女やうの望ならば、即刻にも間に合せ申すべき事。お江戸ひろしとて、左樣の女早速に尋ねあたるべきか。一月二月遲く成りてもくるしからず。某が名の出ぬやうこそ大事なれ。不用意に事をはからひ、汚名を先祖に致す

扇の一手―踊

石部金吉―手堅き人

日本堤―淺草より吉原に行く間の堤

早打―急使者

れて、酒あひに琴、三味線、扇の一手する程の藝、さしてしほらしみもなく、たつしや一ぺんの仕こみ、大かた器量も十人並よりはうちばにて、郡内紬の類に縫紋の一向つきりとせねども、まづ第一には、武家方の挨拶をよく間に合せて、國々の訛詞ぐせを聞きわけ、萬事行儀がましければ、吉原へ手の屆かぬ方の寵愛に預かる事なり。此筋の名うてものに、かへり討の繁野といふ者あり。其名のいはれを知りたる人に尋ねしに、去る北國大名の御家中に、熊谷次郎太夫とて、千石頂戴の家柄、いまだ四十に足らぬ人物なれども、物堅き事石部金吉にて、忠義專の武士、殊に萬事發明なれば、江戸勤久しく年をかさねて、御大切の役目を承る。此次郎太夫天性儉約を肝要として、金銀を貯ふる事、いにしへの岡左内にもひとしき癖あれども、さすがに武士たる道をまもりて、賴しき志は深かりけり。かく久しき在番のうちにも、いまだ日本堤の舟やどに、流れよりし事なく、品川へとばす三枚肩は、どこの御屋敷の早打ぞと、尋ねるむくつけにも、折にふれては壯年の夜床さびしく、ひそかに出入の菓子屋をまねきて聲をひそめ、其方、つね〴〵懇意に物語を致すにつき、誰々よりも賴しく存じまかりある。それに付きて我心腹の煩を咄し申す。かならず他言めさるれば、拙者武士道の恥辱になり申す事。拙者二十

西川―浮世繪師西川祐信ならん
本詰――としま藝者
おやま―妓女

世間妾形氣　卷之三

第一　武士の矢たけ心もつまる所は金

いで人は言のみぞよき月草の、うつし心は色ことにして。人によりて法をとくといふ詞、佛も聖人も同じ思召なるに、いかなれば蒟蒻色の親仁、越中ふんどしは懸けども、義理はかゝず。死ねがな目くじろに取溜めたる金屎から生れた息子。西川が枕繪に聲がはりして、手習より眉なしの本詰をこなす發明は、打ちたゝきの強異見にてはゆくまじ。色小白うらやかなる生付は、女の方より十路盤はぢかせて置かねば、一日もはやく器量よき嫁をよびてあてがふべし。女房に惚れたる男の身代持ち崩すはまれなる物ぞ。孔子に盗跖は生膽をぬかれんとし、楮遂良は武后の爲に刑せらる。木折の異見より、親は慈愛の道をうしなひ、子は不孝のゆびざしに逢ふぞかし。方便の空言は釋迦のおゆるし。おやまのにせ癪、野郎の素股とらするもの、あながちに知るべからず。今の世に妾者の色品多き中に、部屋めぐりといふ名目の女は、在江戸の武士方の部屋々々へ呼びよせら

棹の箪笥が元手にて、釣りならべたる古手店。小袖類、をどり浴衣、御出家方御ぞめき鬘ありとは、さりとはむごいぞ、氣づよいぞ。

らす

相賊ー仲間の騙りもの

り笠、奴かづら、すつぽ〳〵と脱けた跡は、殊勝げのなき坊主あたま。扨こそ、いよいよ贋僧ども、町所を聞きて断れと、くち〳〵にいひ立れば、先々いづれも待ちてたべ。我々は一寺の住職、かたり言いふやうな者にあらず、是には譯のある事なれど、かうみす〳〵の爭を、今更しらべる程となれば、我々が表向もすまぬしだら。是吟七、お糸、女夫とは今が聞きはじめ、むごいめに合したの。出家六人たまにかけて、未來の程も思へよと、無念涙にくもり聲。まだ口きくか、光棍ども。其なりで一寺の住持とは腹いたし。はて殊勝な住持達、物をいはすな。引剝げと、相賊ども一時に寄りてかゝつて、むき鬼燈。褌一でほひちらせば、ほう〳〵迯げてぞかへりける。かゝる工もあらおそろし。當世の髮切後家、釣るとおもふが釣らるゝで、遠慮ぶかいは持ちかける。町よりお寺の小くらがり、無常のあらし戀風に、たふとい所が迷はする。扨此吟七が致しかた、憎くさも憎しと思へども、聲立られぬ内兜を、見すかした工面には力及ばず。明くれ心にくよ〳〵と、忘れぬあまりに問ひ合せば、たばかられたも尤なれ。北野西陣にかくれなき、千本搗のお糸とて、寺々の柱くさらし。それなれば理と、皆得心はしたりしが、やつぱりそこに居る事かと、餘所ながら通つて見れば、二條新地にありし住居、六

ぬ顔に物いはず。これは兄弟喧嘩かの。二人ともすまぬ顔色。腹立ち給ふな。これ君よと、しなだれかゝるを、吟七取りて突倒し、大あぐらに眉をしかめて、こなた衆はどこから來て、家移の取搜した所へ、仕組をどり所望にない。そして人の女房を取らへて不埒千萬。嗅あのわろだちは近付かと、取つてもつかぬ挨拶に、お糸も尖聲にて、ほんにをかしい衆ぢや。ぬしのある身を捉へて、なめ過ぎたものいひ、氣違か門たがひかと、みす〳〵なるいひかたに、六人ながら肝をつぶし、こりや吟七。そりやどうした訟ぶんぞ。一たいそち達は兄弟の筈ではないか。其上今まで此連中の世話に成りて、此家移の普請も誰が陰で出來きたとおもふ。まんざらのやり仕事にかけうとしたとて、それ喰う樣なこちとらではない。屋財家財をあけ渡し、丸裸で出る氣なら、いがみなりとかたりなりと、勝手次第と口々に罵るを、吟七大きにいかり、何といふぞ。こちの内に有る道具が、どうしてわごれ達の物ぢやぞ。たしかな證據うけ給はらうと、大ごゑになりわめけば、お糸が脊戸へ走り出で、やれ御近所の來てたまはれ。あばれ者が來ましたと、泣聲によびたけるにぞ、相借屋の者ばら〳〵と、寄りて來る人がらのすさまじさ。雲つくやうなあら男、先づ門しめよ。一人もいなすなと、理非もわけずにたゝき立れば、をど

みす〳〵なる云々—知つてゐながらとぼけたいひ方

いがみ—邪

わごれ達—和御寮達にて御身といふこと

いなす—去

わろ達―そなた達

頭香にかへて―あらあらしきに代りての意

知識―僧

合て咄しまするに付ては、あなた方の事を何角と申しますげにござります。それではお寺のお名が立ちまする段、氣の毒に存じますゆゑ、爰をとんと宿替して、人目すくなき所をかり、ひそかにお出なさるを、目だちませぬこんたんが致したう存じまする、と、おとなしきいひかた。はて扨氣の細いわろ達。我々は少しも厭はねど、兄弟の心に住みにくゝ思うてなら、どれへ成りとも變宅めされ。いか樣にこちとらも少しは世間を厭へとて、さつそくに取りきまり、吟七が聞き出したる、二條新地の町はづれ、人さびしき表家をかり受けて、とやかくと取りしつらひたる内普請も、六箇寺の立合物好、いつ比が家移と取急いでぞ催しける。時しも秋の盂蘭盆會、棚經の世間役も仕廻るれば、町踊のにぎはしさに、なんといづれも家移の夜の一趣向。揃浴衣の雀をどりで、奴仕立の客ぶりはどうあらう。こりや新しいと浮調子。奴鬘に編笠の紅絹紐は、頭首にかへて燃えたつ色の緋衣ならぬちりめんの腰繻絆、丸ぐけ帯の引結に、ぞれえ〳〵、やあとさの高聲は、たれか知識と、白河橋より三條通を河づたひ、二條新地の妾宅へをどりこんで、お糸吟七どうぢや〳〵、かたづいたか。我ら今宵の一趣向、家移の壽をふみかためる。これを來て見よかしのゑ。さあ滅法寺始めんかと立ちさわぐを、お糸は一向そしら

名を記して鹿島神社に供へ婚を定めし布の帶

しこり―凝り固まれる

宮川町―京都の陰間ある町

宵ぞめき―宵の素見

れも樣のお志、淺い深いもあらざれば、姉貴もとんと當惑。爰は私が存じ付、たとへば一年十二月を、二月づゝ六人樣にふりわけの御契。かたみ恨のないやうは、南無阿彌陀佛の六字のもみ鬮で、前番後番の月を定めましたらば、どうござりましやうぞと、したり顔にいひ出せば、六人の和尚横手を打つて、さりとは智惠がな粹方がな。それで我らが一分はたつといふ物ぢやが、お糸殿さへとくしんなら、我々は一蓮托生、それに否應いふ者なしと、しこりかゝつた談合に、お糸もつんと恥かしながら、とかくどうとも片付られぬ義理なれば、あなた方の思召、何しにもれます心ならずと、さつぱりこんたん極りて、其月々々の客坊もち。爰が出家ぞ。悋氣すな。はて褌一筋で寺開く法もあれと、天窓も中も丸う成りて、打ちこんじたる夜咄の、あたり月が亭主方。泥龜どちやう、貝燒のあばれ喰。衣は人目あればと、銘々簞笥一棹づつ、吟七が方に預け置き、皆一體の黑小袖に長羽織、頭巾すつぽり打ちかぶりて、宮川町の宵ぞめき。非番の月は外稼ぎ、罪もむくいも忘れ果たる遊なりけり。ある夜吟七六人にむかひ、扨いづれも樣のお心やすう御出下されまするにつき、私が内證の械もふり廻し易う成りましたも、全くお陰と兄弟ども悅んでをりまするに、近所のそねみつよく、又しても私どもを寄

してー口の周圍を舌にて舐めて

黑紬ー言うて吳れの意をかけたり

常陸帶ー正月十四日相思せし男女

俗めらに打つて取られぬさきにと、千束の文ことばの媒、仕立物に事よせて、白無垢づきん、袈裟、衣ゆがんでなりとも苦しからず。姉御の手際がゆかりぞと、爰かしこから持ちせく中に、東山の六本杉とて、名うての惡僧、滅法寺、墮落院、无佛庵、梵妻寺、婬亂寺、殺生坊各々ぢごくの釜焦連中、お糸にふかく思ひ川。心をよする始より、まさりおとりもあらずして、雨につけ風につけ、無事をとはせの送物。櫛、香包、南草入、不祥帽子の返事でも、せめてはいうて黑紬。つむがるゝともよしや其、君が名による糸縞の、物ならなくに氣づよやと、負けずさらずに口說きけり。お糸も初の程には、こは淺ましの戀衣と、なさけらしき答もせざりしが、あまり切なるこの人々の志、一度は捨し身なれども、戀てふ人も墨染を、色にかへてのかこちごと、身をまかすとも未來の種と、心の紐は解けながら、どれへどうとも云はれぬしだら。此身はいづれ樣へなりと、まかせ參す心なり。そなた樣方の御中へ、身一つなげ出し候へば、よきにとばかりの返事なれば、六人の和尚打ちよりて、我こそ先の思はくなれ。愚僧がなづみ深かりし。さうはさせぬと角芽だちて、常陸帶のえにし引つぱり合に事はてねば、とかくは君が思ひざしのお盞、それが輪廻の切所。恨はせじとかこちけるを、弟の吟七もてあまし、いづ

阿迦—閼伽に同じ、水のこと

髪のかゝり—髪の樣子

咽かわく—羨む

舌なめずり

極らくの玉の臺のはちす葉に、我をいざなへゆらぐ玉の緒。彼志賀寺の老法師が、修驗の月の明らかなるも、情の道にはぐれては、闇の闇なるたゞずまひ。初音のけふの玉はばき、手に取るからに妄執の雲消えて、又正覺に立歸りしは、仇惚ならぬ誠より、眞の道も得やすしとかや。女房ざかりの二髻が手折る樒はかざしの櫻、阿迦のそゞぎも思ひざしの酒事と、見ゆる凡僧の心ならば、眞如の月は見えぬ筈のもの。一念の往生も不の字なるべきか。然れども牛馬はくはぬ物と心得たるは、まだしもの取得ぞかし。京の東邊建仁寺町に、仕立物屋吟七とて、一間半口に折障子さしこめたる、家内は姉のお糸といふ若後家と二人寡の過ぎやすき世帯方。近比西京よりの引こしなれば、近所鄰もなじみ薄く、うひ〳〵しき所がらにも、姉のお糸が器量のうはさ。年は三十でもあろうか。脊恰好爪はづれ中肉なれど尋常にて、寢起からも笑顔のすき通る髪のかゝり、あれが後家かと見るたびに、咽かわかさぬはなかりけり。しかも心だておとなしきやら、朝夕の佛壇に、過ぎゆかれし人の菩提を念比に弔ひて、間暇さへあればそろ〳〵と、知恩院、誓願寺にあゆみを運び、水晶の念珠につたふ涙の神妙さ。思はくよする人もあまた有る中に、寺方の和倘談義僧、後家とさへいや、舌なめずりまして、お糸が色よきに現ぬかして、

蝶花形―婚禮用の銚子提子につけある紙折の蝶の形

糠悦―實質なき悦

と恩がましく候間、三人共おろそかに存申さるまじく候。しかし著替手道具はせめてもの胸ばらしに候ゆゑ、一も遣はし申さず候。二百兩の枕金尤僞に候。もはや今夕手代共に家内取拂ひ申付候。是にて濟せ候段かへす〴〵仕合成る方々に候。むくいの程わきまへらるべく候以上。

九月二十八日　　三郎七

八左衞門殿

おすみ殿

傳介殿

よみをはりて、三人とも途方にくれて物もいはれず。土器酒のほろ醉も、蝶花形の夢とさめて、糠悦の花聟に、丸のはだかの嫁御寮。手ふり棒の仲人と、これを合せて三々九度。面目なさが又とたまらず。身上すつきり駿河町の住居も疵持足。其後はどうなつやたら噂もきかず。三郎七が發明、さりとは手段もあればある物。

第三　若後家の寺參はてつきり仕立物屋の宿替

こんたん—たくみにて
つくらひ—修繕の義
譯どり—分配

一此諸譯のはじめは、當六月兩國の花火見物、舟にて我等まかり出候所、本家より御屋敷方急用申參り、手代ども差越候ゆゑ、すぐに駕にて同道致し候時、八左衛門に舟の留主預け申候。其の夜仄くらがりが不埒の發旦に候。申さずとてもそなた二人共心に有之候事。

一其後座敷にては我等參り候程もはかられず。又は召使の女共が手前をはゞかり、八左衛門こんたんにて、鄰の傳介方を神かけて賴み、中宿に致し候。傳介儀貪慾の義理しらずゆゑ、わづかの袖の下にほだされ、あるまじき不埒を受込み候。當八月傳介方内普請、店まはりのつくらひ、竈などつきかへ候も、おすみまかなひにて出來候よし。其節聞とゞけ候。

一當八月。召使の下女たけ事。其譯どり候ゆゑ、繻子の帶一筋遣しこまづけ候へども、猶口がるき者ゆゑ心元なく、九月の出がはりに今十日ばかりの所、不勤のよしにて、いとまつかはし候事。

右のあらまし一々聞屆け申候へども、右申すごとく微細にしらべ候ては、我らかへつて一分のすたる品に候へば、よく〳〵こらへ、此方より緣に取組申候。其段きつ

分一致—徳川時代の奴詞にて分は接頭語なり

盃のさざんざに—盃の忙しき獻酬に

わけだち—條理を糺明すること

跡の跡まで頼しい諸譯ぢやと、傳介が足かぎりに分一致す爪だくみ。旦那が昨日おつしやるは、表向の嫁入格式だての譯ならねば、おすみを先へ入りこまし、跡は我らが呑込みて、諸式も送遣はせよとのお心付、これもつてよい手つがひ。先婚禮の日は何日か。上段なるとは嫁取よし。おすみは駕にて綿帽子、傳介がせんだく袴、糊けのある仲人顔に引きそうて、駿河町の富士屋方へなりこめば、八左衞門も出でむかひ、待女郎も花聟も、かね合したる寡住。盃のさざんざに三國一の果報者と、傳介がもつれくだ、南無三かんじんのことを失念したりと、懐中より一封を出し、これはあらたまつた樣なれど、跡からまゐる荷物の目錄。今夜盃の上で披露せよとて渡されしと取出せば、これは丁寧ななされかた。いで拜見と封〆切りて開きみれば、目錄にはあらず、一書の文なりけり。

一おすみ事。とし月不便をかけ遣し候所、我ら目を掠め八左衞門と竊にこんたん致し候うて、すなはち鄰傳介諸事呑込み申候事、たしかに聞屆け候。早速わけだち致し申候はんと存候へども、我等名も立ち候事なれば、此度大やうに取りはからひ致し候事、過分に存られべく候。

手段といつぱ―手段と言はば

一分―面目に同じ

行器―食器

みが爲もよいなれば、是非にたのむ引きしはせぬ。扨てそこに又我らが手段といつぱ、あの富士八もいつまで寡で居やうより、似合の縁なり氣中もしれた中なれば、あの男に遣したい。此思案はどうあろう。女房でも持たしたら、向後家業も精出すであろ。すれば互の爲といふ物。此詞反古にしては、我ら一分たゝぬなり。きつと世話してたもろかと、僞りのなき談合に、旦那の思召極りましたら、私は世話致し、うちとくとお定め遊ばせ。いや／＼我らはちがはせぬ。おすみにとくと呑みこますうち、そちは始終をしらぬふりと、あらまし内證かためつゝ、別れて宿へかへりけるが、其事終に傳介が媒介にて、親分やら仲人やらで、丸うをさまる道行にも、八左衛門が數遍の辭退。粹に似合はぬかた藏と、三郎七がしひぶんに、夢なら醒めなとかしこまる。おすみも幾たびか、主樣に放れて外へとてゆく心はなし。高麗唐土のお留主でも、幾とせなりと待つ心。それもお赦なきならば、よしや、此身は墨染の尼となりても、女の道はそむくまじと泣口說くを、さうではないぞ。さりとては世になき例ぢや有るまいし、心底きつと嬉しいと、これもすかしつ割口說に、涙の中の得心なり。扨日を定めて、おすみが手道具、簞笥五棹、夜具三荷、櫛笥、琴箱、松明、行器、あらましざつと十八荷に、二百兩の敷金も、

入津―輸入
ぼつかり―ほかりに同じ明の義

の事とて、毎日の見舞も生物に氣づかひげなる親仁なれば、勝手廻のそこゝを如才だらけの忠義者。二人の下女が陰口も、八左衞門樣はよい氣だて、あの傳介の慾面と、憎みたてるも道理なり。ある時三郎七傳介一人つれ立ちて、淺草の觀音參の道すがら、扨親仁そちにきまつて談合せねばならぬ事がある。外でもない。おすみが事、倦いたと云うでは根からないが、今度我らも長崎へ繻子ちりめん織物の類が、たんと入津したに付いて、一下くだつて來るが、終半季ばかりと思へど、上方も見物がてら、凡そ一年隙どる所存ゆゑ、おすみが事もとても女房にするではなし。爰は一段よい仕舞所と思うて居る。たんとの事はせまいなれど、二百兩そこらはつけて片付うといふ胸。親もない彼れがこと、いつそそなた親分に成りて、緣につけて吳れまいかと、ぼつかりと云はるゝに、傳介興をさまし、旦那、それは誠でござりますか。私はとんと途方を失ひました。一年二年お留主で御座りませうと、はゞかりながら私がお預り申しますれば、お案じなさるる事はござりませぬ。左樣な事をおすみ樣のお聞きなされたらば、御當惑なされませう。御座興ならば旦那お胴慾でござりますといふを、いや〳〵座興でないぞ。眞實ぢや。留主心もとないとての事にもあらず。女房子のある我ら事、末かけてともならぬ品。おす

紙花—饅頭

猪牙—猪牙船、遊里に通ふ舟

薄雪仕出し—福やかに愛敬ある風して

なれ過ぎた—古び汚れたる

町の呉服所、本家は伊勢の出店にて、白子屋の三郎七、大名方の御立入多く、軒ならびの一番手といふ大商人。掘ぬき井戸の底しれぬ身代に、旦那三郎七三十に足らぬ若烏なれど、十露盤にぬけめなき掛引、しかも頑愚氣質にもあらず。折々は大門のむかひ提燈の舟宿の紙花など角のとれた取捌。いやでなければ昵近もせず。産ながらの粋方なれば、押しきる猪牙の一夜流なる色よりはと、いつの間に取りよせしぞ。千住の貸座敷に、廿三四の姫うるり、薄雪仕出してぬるからぬ立ふるまひ。おすみとつけしも所から、名にし河邊の都鳥にも恥ぢぬ器量の自慢とぞ聞えし。どこも此身は御退屈、隙ふさぎなる縫くゝり、帶に房つけ笠の紐、紅絹の小猿に豆巾著の手なぐさみ。十種香、茶の湯、琴、三味線、どれ友となきつれ〴〵に、堺町木挽町の芝居へも、狂言のかはるごとに、一度もかゝさぬ。幇間には駿河町の富士屋八左衞門とて、京大阪はおろか、府中三國の色酒まで、しみこんだ野等道具や、なれ過ぎた黑羽織の脫げば、まゝよのしこなし風。晝夜を分かずはまりこみて、三郎七がお髭の塵とり、半太夫のつれ彈。伊勢音頭は旦那の事ぢや。其ふしがいきませぬと、あぢな所を堪能さして、心やすくなる程、おすみには遠慮がちなる挨拶も、幇間功ある男なりけり。此座敷のかい鄰なる燒餅屋傳介、壁あはせ

晝比なる―中ぶるなる

口入―周旋業者

蜘の圍―蛛の絲

て下されといふより、是をとて出して著する晝比なる糸縞の薄綿、黒繻子の中幅帶にしかへさして、此間もいうて置いた通り、さきへは去る浪人衆の死にわかれといふてある程に、其口のちがはぬやうにと、お菊がさしづ。心得ました、皆樣これにゆるりと咄さしやりませよと、出て行くうしろ影に、皆々哀をもよほしぬ。此女房男の長わづらひより忍のつとめ、一月定めて錢壹貫文の内を、口入に四百の口錢。扨も世はさま〴〵のある物やと可笑しくもかなし。

第二　敷金の二百兩はあいた口へ燒餅屋

蜘の圍にあれたる駒は繫ぐとも、ふたみちかける人はたのまじ。外姪の謗、男女ともに愼むべき第一ながら、薰る蚊遣の夕涼み床、小夜の巨燵の手そゞぶり、ありやうが眞事の浮氣勝なる世の中。今は貴布ねの山風に、鐵輪のともしあふたねは、嫁入の輿も宇治橋を大手ふつてぞ通りぬ。日本武の尊の吾妻としたはれしより、東とよびて、水くさからぬ人心。ずんと惚れたと出かけては、みさを尖きを江戸の意氣張。葭原品川の諸譯はもとより、地女でもまさかその、烈女がいのちの塵芥、捨られた物ではあるまじ。傳馬

おづ〳〵—怖ぢつゝ

濕病—黴毒

いづましい—厭はしき

まの浦の鹽なれ衣しみたれし、古袷の上に帶さへせず、前垂の紐引きしめて、かご島下駄の音せぬやうに內へ入りて、伯母樣、この間はいかい御厄介に成りましたのよ。それからお禮に出ませうと存じたばかり、其あけの日は、どうか腹がにがりまして出ませなんだが、それから三四日も、こちのお人の腫物がわづらひまして、手がはなれませぬゆゑのよ。忘れちや居りませぬげにと、おづ〳〵腰をかくれば、お菊も茶を汲みてさし出し、それからわしも便したかつたれど、節季前なり、何やかやで不沙汰ばかり、そして內がたのはすぐれもせずが、ほんにお前はいかい苦勞をしてぢやのうと云ふに、彼嚊うち涙ぐみて、いかさま、此やうにつらい世を渡りますも、皆お主のばちでがな。悲しいあまりのお咄を致しますのよ。こちとら女夫は藝州廣島にて、何の何某といふ三百石どりの家にをつて、だんなのお手がかゝり、お妾に成りましたげに、こちのお人はお草履とりの奉公人。ふと申しかはしてお國を立ちのき、大阪へまゐつたげに、なじみのないに、こちのお人が今の濕病のよ。いづましい病ぢやげに、人ばたらきもならず、けふ此比のめいわく。恥しい事も忘れて、伯母樣のやつかいに成りますのよ。又こよひはお客樣にやくそく致した夜なれば、小宿まで出でまする。たび〳〵ながら伯母樣の着物かし

末社—幇間

伊豆藏—貞享年中江戸本町一丁目にありし呉服店

・でつち打出した云々—雙六にて調一を打出せる如き幸運なる義

た末社衆を引きつれてのお出。内にござれば琴、三味せん、香、茶の湯と取りかへ引きかへてのお鬱散。裸人形につぶれます裂ばかりが、三井、伊豆藏へ一節季五十兩づつのお拂。御自身のお召しなさるゝお小袖はもとよりの事。帶は折りてたゝめば、折目がつくとて、帶箱といふ物をお誂へなされましたに、此繁花の地でも、ない物はないに極りました。長さ一丈一尺、幅一尺八寸の島桐の一枚板。せんじ詰つて佐渡とやらいふ遠い國へ挽に參りましたげな。中々本家の方の奥樣でも、あのやうな樂はなされまい。あんまりお隙なゆゑ、此間も旦那樣と何やらいさかひが出來まして、茶の湯の茶碗をおれん樣が取りて、ほつて破らしやりましたが、あとで聞けば紅葉五器とやらいふ名の茶碗で、七八十兩程する物と、道具屋衆の咄。わたしらが身體を葬禮ごみに賣つても、其茶碗のかけでもない事と、心があぢきなう成りましたと咄すにぞ、扨も〳〵聞いてさへ咽のかわく事。あの子はでつち打出した出世。お世話申した私まで嬉しうござります。其茶碗はわれても、澤山な御身代なれば苦しからぬが、其やうないさかひ遊ばして、旦那の御機嫌がわれずばと、菊が案じて居つたと申して下されと、二人が物語るを、月君たち聞入れて、顏見合せてうらやむ所へ、四十五六ばかりの女房の、こゝら邊にす

おすそわけ—分配
加賀笠—加賀國より出するすげ笠
虎屋伊織—山城國伏見町なる饅頭屋

ました見事な花ゆゑ、筒のまゝにおくりまする。又此重の内もお雛様へ供へまして荒しましたれど、少しおすそわけ申しますると差出す。加賀笠ほどな大菊にそへて、時代蒔繪の重箱に、虎屋伊織が金糖もち五十。是は〳〵、まあお珍しい。けつこうなお菓子、見事な花、さつそく賞玩致しませう。この間は何やかやにまぎれて、お見廻も申さぬが、お上にも御機嫌はよござりますか。幸こちも雛様のお神酒、内がたのやうな結構な酒ではなけれど、一つまゐつて下さんせと、有りあふどさん盃にもてなせば、久七是は有がたい。左様ならお辭義なしに一つたべます。いつそこの茶碗に致しませうと、一つのんでの機嫌上戸。内にも酒は、朝ぬつと起きるから寢ますまで、出入の道具屋衆や醫者衆が相がはりに見えて、盃の出つゞけ、毎日三斗といふ酒のいらぬ日は、ござりませぬけれど、私共は吸物の下たいたり、風呂たいたりして、一向ゆるりと一つ下されます隙がござらぬ。いかさま、人の果報と云ふものは結構な物。手前のおれん様のやうな、うまい身ぶんと申しては、廣い大阪にも澤山はござりますまい。不斷ちりめん羽二重を、五六づつ引きかさねて、ちよつとどれへござるにも、手竹輿にめして黒土ふまず。芝居はいつも初日、棧敷を西の三四間めに極め、勸進能、月見、花見と、氣に入つ

はすはな―浮氣なる
ありべかゝり―ありふれたる
いきはり―意氣張

茶屋者は多くの客にあふを全盛として、妾者は一人の男にまもらるゝを、おのがさかえとする物ぞ。只かゝさんの爲に、恥しい奉公を致します。お心替らずお見捨なうよりは、せりふ有るまじき物を、さまぐ\のはでな詞づかひ、はすはな物ずきより、かへつて茶屋者の第二におちて、地女のまこと仕出はどこへかゆき、終に人のさげすみにあふ事ぞ。此道のかく成りゆくは、よせてはかへる浮枕、月切とのみ思うてよりの事。ええうにする奉公ならば、三人五人にもかゝらねば、髪かしら足袋までのつばめあはぬ事是非もなし。灸すゑにゆくの、芝居見にゆくのと、ありべかゝりの虚言も、今更とがむる愚痴な世界にもあらねば、新しき手くだにも及ばず。只おぼこに誠ふかく見ゆるには、月もかさなりてかはゆく成り、長に極めて浮世小路砂原の住居より、後は宿の妻とも成りのぼらるゝは、茶屋者のいきはりより出づるとは格別の事ぞ。かならずく\、一月切のかけ流しなる心いきは、よろしからぬ事と、長談義の最中へ、お菊樣お宿にござりますかと男の聲。どなたぞと立出で、是はしたり。おれん樣の所の久七殿。ようこそ、さあ掛けさんせと、あいぐろしき挨拶に手をつかへ、お上に申して居られまする。今日は菊のお節句、めでたう存じます。この菊の花は高津の植木屋吉介方より、お雛樣にとこし

國府—國府煙草

色柄にぎりて—色事に關係して

背中には、生灸のたやされぬ義理合ゆゑ、おのづと達者で、一月に五六人もお勤なされても、跡のいたまぬと申す物と、憎てらしいわる口なれど、さすがに太夫遊もした程有りて、此たばこ入をもてというて、國府一たま添へてくれたが、拾匁より下にはつかぬくれ物と、出してひけらかすれば、花やのおすが手枕ながら、お前がたにいうておく事がある。長堀の石屋とて六十ばかりのかた藏、兀天窓に黑紬の衿まき、いつも白茶の木綿羽織に、紋はたしか丸の内に抱柊。すみどりの紙入に、文字替の錢を鞐につけて居る親仁。それは〳〵、六日の勤を三日にことわりいうても、身の痛に成るつよさ。もし其親仁なら、始めから言譯いうて戻りなされと、口々のそしりはしりが、はしりもとへ聞えて、あるじのお菊料理ごしらへも大かたに座敷へ出で、さきにからの咄は、打とけての憂鬱はらしとは云ひながら、あまりなるかけ口。人も聞くぞかし。さる事なくてさへ、色柄にぎりて揚屋のかしかりの諸わけに陷りたる衆は、妾者はかへりて實なき仕出と、一概に定めらるゝ事も無理ならず。妾はもと地女にて、宿の妻にひとしく、はやり詞しらず。口舌不得手にて、生娘の心もち、ことに初目見はいつも嫁入の夜の恥しく、なじみかさねては實すくなからず。一際しめやかならでは、心のとまる物ならず。

御靈樣—六月十四日の祇園まつり

其家の白鼠—家の役に立つ老功の番頭

でやる方もなく、恥かしい奉公を致しますと、涙まじりに眞實らしうやつたれば、それは不便な身の上。聞いた上は見捨ぬぞ。きつと世話してやる事ぢや。賴もしうおもへと、ぬかすのが半分の半分に聞きても、一月と二月はかゝりをらうと思うたのに、其翌の朝、銀一兩で詫言して來をつたげな。憎さも憎しと、此間とゝさんとつれ立ちて、御靈樣へ參つたとき、平野町を心がけて通つたら、一間半口のきたない扇屋、店のはなで、錢なら五文の事を芋賣と喧嘩して居をつたを、きつと睨んでこましたら、あつちにもわしを見てから、これ芋屋、天狗につかまれたと思うて、五文弱みを喰ふぞと、ぬかしくさつたと咄せば、それは憎てらしい事で有つたなあ。お梅さんのいひぢや通りに、茶屋のおやまが來る粋よりも、こぬ野暮がしにくいといふげな。流をたてる者のいふことは、それに違うたことはない。靱の干鰯屋の番頭といふもの、新町島の内がよひに、親方の手前二三度も不埓な品も有つたとの咄。今はきつとしまりて其家の白鼠、すいもあまいも知りぬいて居る相手ゆゑ、こちから何もかも打ちあけて、實づくしの寢物語。月に六日の定の外にも參らねばならぬしかけ。明晩われら手すきなれど、是へ參つても、てつきり上町の伯母樣へ灸する爲にと、おことわりの有りさうな事。いかさま其方だちの

評判あこぎ―評判のかずかずに

黄檗―黄檗山禪宗の開山

しんぞ―眞に同じ

山上樣―大和金峰山をいへるなるべし

り、雛介金作の評判あこぎに、後は身の上の咄すみて、お常さんに云うて、笑ふ事がある。後の月お前と一所に目見えした、平野町の涼風堂といふ扇屋の旦那め、きつい贅こき。こゝ生とは見えぬ。いつ引こして此難波の住居ぞ。京はどこらと、あてずゐな事ぬかすゆゑ、どうしてそれが見えますえ。わたしは伏見の生、わけありて親父さんに生きわかれ。歸らしやるを待つ間に、三右衛門町の伯母さんを頼に、かゝさんと一所に下つてさんじたと、出ほうだいに云うてのけたれば、伏見が古郷で親父に生きわかれとあれば、大かた宇治の黄檗へすわる後住のむかへに、唐か天竺へ供にやとはれたと、いふやうな事でがな有うず、長の留主さし詰りての此奉公でこそ、色氣のけても頼もしづくなら、そなたおふくろ二人までの賄何程の事ぞ。仕つけもせぬ身で、しらぬ人の機嫌とるは、さぞかし。しんぞ口から出した詞は、ひかぬ男とぬかすゆゑ、その詞につけこんで哀れらしう、いえ／＼、とゝさんは去年の四月に、山上樣の戸明とやらいふ事に參り、天狗につかまれさんして、それから今に便がしれませぬ。御鬮にも八卦にも命が有りて、一度は戻らしやんすと申しますゆゑ、悲しい中にも假初いたのしみ。かゝさんは持病に頭痛が有りて、月のうちに五日七日は枕のあがらぬお人ゆゑ、わたしが女の身

くなき

肝入―男女の周旋者

ついまつ―歌かるた

木綿布子、青梅縞の類、繻子の裏打帶まとはして、氏なうて玉の輿の足代。かごや町の按摩取は去る御屋敷から扶持の來る咄。釣鐘町の糊屋の娘の產んだ子が、本町の何屋殿の代取なるよし。うまいづくしの口車に乘らぬ者もなく、それ〲の生れだちに品定りて、年季、半季、月切、うち切と、思ひ〲の色稼。一割の兩口錢、五節句の付屆、鹽鯛牛房添へて鏡すうるを上の品として、かさね草履一足、あらひ金のたばこ入、蜜柑饅頭の土產まで、出る息なしの世渡多かる中に、上町のすみどりや、天滿に茶碗屋の狐婆、島の内の備安、順慶町の人形屋など、此道に名だたる肝入の兀頂。同じ流を西堀に汲みてしる、山路のお菊とて隱れなきしてもの、けふしも長月菊の節句とて、六そぢ過ぎぬる身も女の數とて、雛祭おぼめかしくものして、客あるふきさうぢ。伯母樣のけふはよう呼びて下さんすと、お梅、小吟、お石、おすが誘合て、足袋屋のお露さんは、お腹が痛いとて、ようお禮云うてというてでござんした。それは殘多い事。さあ〱皆上つて、お雛樣をいはうてと、人よりのよき住居さへおく口かけて、十六疊六枚屛風引廻したる雛館によりたかりて、ついまつむべ山の遊。寺子げのぬけぬ聲に上の句のそら覺も、いづれなまめかしきけはひには、大象もよくつながるゝ髮の出來を褒めあふよ

世間妾形氣　巻之二

じんき―食物、しのまき

まめしげのなき―面白

第一　雛の酒所は山路のきも入嗅が附親

こゝにしも何に匂ふらん女郎花、人のものいひさがにくき世に。なりのほれども、もとよりさるべき筋ならぬは心かだましく、譏口勝ちて、己が利口をふるまふとて、つれそふ夫のぬかりを數ふるなど、多くは菩薩まさりの、足もめ肩うてから、ずる〳〵の奥様なり。在所の甥に跡やつて下されと、脚布のしめくゝりより、いつしか一家の中も、むつましからぬ品に成るは膳の箸。妾と飯蛸はあれで果る物にして、女房は表向の呼むかへをこそ、願はまほしきわざなれ。難波の梅のみばえより、色づきはつる妾種、十三四よりめき〳〵とおいぐろしく、前うしろ見る心つくより、宮芝居見あるきて、丁稚役者に思はくの小いたづら、親の身にも、今時からき世にじんき巻しても、百を三文のむすび昆布結ばしても、一日に廿か三十のつまみ錢。まめしげのない手仕事さすのみか、妾なし子の政道にあらぬ氣もせをやかうより、ぢやんぎり鍋へ入る事なれば、ひわ茶の

九十九髪――老女の白髪

り。何といらへん九十九髪、いはでもこもる恨の涙。今はた残す言にも、我死しても有ならば、一念のとゞまる所。世の中の鼠のかぎり、殺しつくさである物かと、いかりさけびて死なれしより、此婆の靈を祭り、お猫様と尊敬して、鼠よけの守神。塚の石をとりて家に祭れば、まさに鼠のあれぬよし、蠶飼する家ごとに、悪鼠の難をたすかりけると、幾野あたりの人には聞きし。

ろもの

老のなみ―老の皺

地獄落―鼠を捕ふる具

まじり、何としてけはしい老なりやうと、起きあがる拍子に腰がつくり。あゝどうやら致しましたと、いふ聲さへをかしく、一夜の間にそなたの姿かはりしは何いふことぞ。先づ鏡をと取出してあてがへば、私が姿が何とせしと、ふたを取つてさしむかへば、あら悲しや。きのふまで油ぎりたる女房の、たちまちに頭は夜半の霜を戴き、ひたひに老のなみ打ちよせて、腰に梓の弓さへはるに力なく、百とせちかき嫗の姿に、お春は夢かとばかり、何ゆゑに此有樣、いつまで草のとし波、誰なすわざに此俤。あがめ祭れる玉手箱を開きしはお主ならでと、恨みつ叩きつ泣きくどけば、多門さら〱覺なし。先づ其箱改めんと神棚より取りおろせば、いつのまにかは鼠穴、一文餅程喰ひあけたり。是はいかい鼠のしわざ。にくし〱と多門が詞に、手に取りみればこは淺間しや。かぢる物こそ多きに、此箱の喰ひざまはと、或はいかり或は泣き、箱を打付け打たゝきて、涙に老を噛みまぜたるくり言。思へば敵は鼠ぞと、恨ばかりにとゞまりて、地獄落升落。後は夜ごとにまどろみもせで、鴨居膳棚走りさき、手づかみの鼠狩に、近所鄰の惡口、猫いらず鼠取婆といひはやしぬ。多門お春にいふやう、かゝる事も皆前世の因緣誰をか恨みん。今よりは女房の名を取りおいて、我爲には養母と、勝手だらけの孝行ぶ

とつゝおひつ―かにかくと思案にくれて

左右―おとづれ

地黄煎―藥名、地黄の根を飴に和へて製した

した。いつまで生きてござつても、お年のよらぬ不思議なおうまれ、よそ並の人ならば、もはや七十ばかりの上様であらうのに、それなればお前と私は、世間はれて思ふまゝに女夫に成り、此悲しみはござるまいとのくやみ言。いか樣替つた女房を持つて、つらい悋氣にせたげられ、こちばかり年のよる事よ。因果人とは此二人ぢやと、手に手を取りて、かこち涙に目もあはで、あれる鼠の物さわがしく何をかぢるぞ。夜もすがら耳にかゝり、とつゝおひつの知恵袋、ほどけし趣向に心うきたちて、まだ夜深に別を告げ、必ずよい左右聞かすべしと、歸る足に町口の果物や、地黄煎玉二つ三つ袖にして宿に歸り、何げなきもてなしにて、お春にむかひ、かりそめの浮氣に、しばらくも其方の心をくるしめし事、今更恥しき次第、誤入りて、小染が事は今日こそまことに兄が方へ送り戻し、外へ緣につくる筈、この事さらに僞ならずと誓言だてに、お春が心はれ渡り、いつ〳〵よりも機嫌よく、寢酒の床に心ゆりて、よく寢入りしを伺ひて、そつとぬけ出で、彼地黄煎玉を取出し、神棚の玉手箱にぬすくり付けて、さらぬ體に歸りて臥しぬ。其夜もこして二夜三夜、むつましき相末も明の烏に起されて、是は晝ぢやと起きたつ傍に、かはり果たるお春が俤に大きに驚き、是はどうぞ、お春〳〵とゆり起されて欠

なる木を折たるやうにて、そつけなきことと

しつぼり—睦言

小糠三合—諺に、小糠三合持たら入婿すな

山の神—妻

度かさなりて可愛さもまし、小染が兄は金太郎といふ漁人、おもてむきに對面し、ゆくゆくまでも見放すまじ。足下のおゆるし有るならばと、浮氣ならぬ相談さらりとすみて、上宮津のかたかげに藪がくれなる妾宅。筧の音のとく〲と枕に響く小夜のかね言。此しつぼりは都にもあらぬいたりと、心ゆりして契りしに、天の口が鄰のみそこし婆が鼻の下へ宿替し、壁の耳に生ひさがりが出來きて、女房お春が焰となり、付けつ廻しつの悋氣も、心ばかりは老女房のしなせに小腹はたてど、小糠三合の聖語、耳の底にありて胸をさすり、十日一月通路をたちて納得させんと、敷居一寸出ずに居れば、女房の機嫌はよけれども、小染が方に心をいり、此まゝにして捨て給はば、いつそ死ぬると、藝氣のなき田舎娘の一筋をあしらひかね、そなたを捨てよい物か。去るにても山の神が悋氣のつらにくさ、若しやつれても奔らうかと、此比は引取りて錢一文の自由もさせねば、駈落せんにもてだてなし。戀の道の發明は女こそさかしきに、何とした物であろと、さすがの學者も、此道にはゆきつまつたる溜息に、小染も涙をとゞめて、始より主あるお前の事なれば、まさかは死ぬると極めてをりますれども、さきの世で女夫にならるゝも嘘かして、お花半七佛といふも、終にをがんだ事もなし。お春樣の事は叩にも聞きま

葛だまり―葛粉を煮固めたるものをいふ

きりはたりてふ―機をおる音

木折―すぐ

賞翫せず。汗吐下梅毒の古方は人恐れて、後藤流とやら云ふものは、荒療治でこはい物ぢやげなと、田舎形氣にかてつけねば、錢と間とを友として、久世戸の文珠に日詣。門前の茶店にきせる一本のたのしみ、知恵の餅、思案酒に祇園南禪寺の葛だまりなつかしく、橋立に遊びて、一盞の醉のうち、詩作に自負をあらはし、夕日の浦に舟をよせては、細川幽齋が移しうゑし吉野山に、むかしを感じつゝ、心のゆくまゝ成るたのしみにも、まかせぬは繩手石垣の色酒。寢衣の油くさきも、宿の大夜著に勝りてをかしき物をと、大切がる女房に、聞かさぬやうの獨言は、ねられぬ夜ざえの樂なるべし。されば此宮津の地は、いにしへいかなる織姫の跡とめて、かよるすさびを傳へけん。都の西陣におとりなき織殿、五百機たてゝ、きりはたりてふ丹後ちりめん丹後縞。色なる絹のかぎりを織出せる、夏びきの手引の絲くり女とて、此里の女原。小娘の比より蠶のわざになれぬれば、自然に育も鄙びず、なよやかなる立ふるまひは、田舎に京の女房ぶり多かる中にも、ちかき岩瀧村の小染とて、器量はもとより心だて出過ぎず、しめり豆ならぬ仕出、今小式部といひはやして、近郷の名うて者。いつの比よりか、多門に見そめられて、都の水に角とれて、木折ならぬ手くだに仕かけられ、一二夜のたはぶれも、

いつまでも年のよらぬ受合の女房と、いひ廻つて挐えらみ、是ばかりは媒口ならず。

第三　織姬のほつとり者は取りて置の玉手箱

夏の夜は浦島が子の箱なれや、はかなく明けてくやしからまし。唐の則天皇后といふは、天性の婬亂にて、文宗高宗の二皇を追ひたふし、白馬寺の懐義和尙の精進料理に喰ひつき、張氏兄弟が男ぶりになつまれて、其身七旬にかたぶきても、淺づけ程の皺もよらず、若き昔にかはらで、油ぎりたる俤は、お春が身の上によそならず。三人の夫を喰ひ殺しても、眉目容貌はもとより心の若々しさ、一つとして古びのこぬは、我ながらもめんような玉手箱の奇特と、神酒を供へ燈明をてらして、彌勒の代までもかたち替らで、よい男百人も持しかへさせ給へと、朝夕いのるかひ有りて、成相寺の甥多門、幼少より京學にのぼせしが、今年廿五歳にて本國なつかしく下りしを、すゝめこみて伯父坊の媒。儒は宇野三平が書生、醫門は古法を信じて、傷寒論に臆說の見識自慢。爰らまれなる博識に、上京風のいたり仕出な男ぶり、お春深くなつみて、此人こそは何時までも年よらであれかしと、玉手箱が一つほしい心入。されば醫者と干瓢は若い内には

めんような—面妖にてあやしき意

傷寒論—醫書漢の張機の著

おろ／＼と—泣く貌

心外—心ならぬ事

てかゝつて、傳三郎を抱へすくめて働せず。藤左衛門暫思案して、これは傳三殿の短氣といふ物。手前が了簡を聞かつしやれ。其許の胸のすむやう、六右衛門殿も落付手段、お春殿も二人の夫へ云譯のしやう。お氣には參るまいなれど、愚案の通り申して見ませう。先づ難船にて生死の知れぬ其許を、三年待つて居られたれば、お春殿の不心底とも云はれますまい。又六右衛門殿も先の人が戻られたとて、私はお暇申しませう。是で緩となされませと、出ていぬる家もなし。三人の尤を一にして、丸う治める時は、もとの傳三郎殿は此家の名前をつぎ、お春殿と夫婦に成り、相續を致さるべし。又六右衛門殿の事は、此鄰の借屋を明けさせて、萬事此内よりの賄、お春殿の妾分になりて事を濟さるべし。心外にも思し召されうが、がうした間違と、其許の目の不自由なに免じて、堪忍へさつしやれと、事をわけたる挨拶に、何が扨、傳三郎殿さへ得心ならば私はと、おとなしき詞にむかふ刃なく、其まゝに治りて、傳三郎はもとの夫婦。六右衛門は男妾。女房一人に二人のますらを、友しら髪まで意恨なく打語らひ、七十三と六十八で二人の夫はすぎゆきしかど、お春はやつぱり二十四五の女房ざかり。玉手箱の千歳をこめし浦島が血脉と、聞く人感じ羨みぬ。媒婆が駈けあるきて、身代の能い器量の能い、

しつかへ人—後夫
刄物ざんまい—三昧とは其事にのみかたよること

ら朝鮮へおくられ、こゝにて又二百日あまりの船待して對馬へわたり、何やかやとの隙入、あたる三年の今日、やつと戻つた。珍しい國の咄はゆる／＼と致しませう。先づ長長の留主、いかい御世話と、たくりかけて咄す内より、同行中のびつくり、お春が當惑。死なしやつたと思うて、後夫を持ちましたと打ちつけて言ひにくゝ、六右衛門はそこ氣味わるう挨拶なし。皆々顔を見合せて吐息をつき、誰何といふ者もなければ、講頭の幾野屋藤左衛門といふ分別者、見かねて罷出で、先は御堅固で久々の歸國、この上もなきめでたい事。それにつき氣の毒なはお春殿、其許の事を泣きこがれて、三年の此春まで、きつと待ちてござつたれど、ついぞに風の便もなければ、死にめされたに究めて、春の末つかた、爰に居らるゝ六右衛門殿もやもめの事、殊に按摩は先々の壽齋殿のめされた醫者のはし、似よりな事にて談合極り、しつかへ人に入られました。其許の事わすれぬ證據は今日の法事、そこへ戻つて見えたゆゑ、差しあたつて當惑の體。だまつて居てもつまらず。年役に咄しまするを聞く内より、傳三郎大きに腹立てゝ、不心中者密夫と、前後も聞きわけぬ憤に、聲あらくなりて刄物ざんまい。六右衛門は目かい不自由の身皆様よろしく御挨拶をと、おろ／＼と涙ぐむ。お春は汗になつて返答なし。同行中寄つ

なまいだ—南無阿彌陀佛

福州—支那福建省にあり

なければ、今は海に沈みしにきはめて、又入聟のせんさく。あちこちと聞く内に、出入の按摩とり六右衞門といふ者、もとは此宮津の足輕奉公人にてありしが、久しき眼病よりお暇をもらひて、すべて手職もそこひ目の薄き眼力につとまらず、按摩をとりならひて、杖を賴の元手入らず。お春が痞をさすり覺えて、手入足入毎夜の咄伽。足手の達者な男は、外稼より難義もおこると、目の不自由な六右衞門に、注文きはまりて表向の祝言、かほうな仕合せと宮津中の取沙汰。前の夫傳三郎があたる三年に、初めての佛事、七日々々も百箇日もひとつにして、三回忌の弔。船譽入水信士なまいだ〲と、同行寄つて百萬遍の最中へ、不思議の命たすかりて、夫傳三郎三年ぶりにて立歸り、内へ入るよりそれと知りて、扨は死んだと思うての法事か。女房どもさぞ泣いたであろ。同行衆いかい御苦勞千萬、出雲沖から大きな陰に出合ひて、帆柱檣も折れ、船中みな覺悟きはめて風次第の命、三十日餘西北の方へ吹付られ、其間粮米は喰ひつくし、積合はせた油粕をかぢりて、漸と命をつなぎ、山を見付けて漕ぎよせましたれば、そこは福州といふ國で、唐人どもが見つけ、所の王樣へつれて出で、通辭をもつて委細を聞屆け、百日の餘とめられて、そこから北京といふ都へ送られ、爰に又百五十日餘の逗留。そこか

眞切りて―舟語にて風を斜にうけて舟を進むる義よりよく事を處するをいふ
當住―當住職
白はへ―六月末の南風
萬年草云々―卜占の法

今度の聟は由良の舟乘傳三郎とて、荒けづりなる背組が思はしと、若死にこりた物好の戀男。入聟といふ日和をよく勘へて、女房に眞切りてあしらふ楫取の名人には、海ならば海山ならば山と、人のうらやむ女夫中のむつまじさ。成相寺の本堂久しき大破にて、當住ことは再興の大願を發し、鉢を飛せて身をこらし給へども、片田舍の勸化柱一本の施主さへまれ成るによりて、出開帳の思立。目當は京大阪とこゝろざして、所々の舟開帳大きにはづみ、ずつしりとした納、回向袋米都合して百三十俵ばかり、下の關へ水揚げ、傳三郎身を投打ての世話人。本尊什物は先へ出船させ、我は下の關に殘りて奉加米賣拂ひて跡よりと、宮津の女房へこまぐ\とのことづてして十日計の逗留。幸に由良までの便船ありて、五月初めつかた、中國の地を放れしに、白はへ日和して乘出せしそらのにはかに陰けて、出雲沖にて高波山をかくし帆柱を折られて、東南の風に吹立てられ、生死の海そこはかとなく流れゆきぬ。難船の便月をこえて、由良宮津へも聞えて、お春が驚き、もしや活きて戻らるゝ事もやと、神佛に祈り加持、萬年草をしたしものにする程漬けてみれば、命は今にあるとの報告も、たしかな便にあらねば心ゆりせず。案じ暮して其年もくれ、明くる年もまた暮れて、あしかけ三年といふ物、そよとのおとづれも

ものまうの聲—他人の家に行きて案内を乞ふ聲

腎虚火動—腎臓病

や明けゆく春の光。横雲に色そひてのどやかなる、町はまだほの〴〵のかはたれ時に、ものまうの聲ならで、ほぎやあ〳〵と子の泣く聲。まさしく我軒端と走寄つて見れば、まだ産のまゝなる子をば、おさだまりの蜜柑籠。壽齋大に悦びて抱きあげ、龍神の御めぐみ、家に久しき賜と戸を推して入るよりも、いつもならぬ元朝の壽に家内の賑、女子なれば其まゝお春とよびて、うどんげの花さき草の、三葉四葉の比より、おとなしく生立ち、春をむかへ秋を送りて、十八の初花までに育てし壽齋は、今年八十八の升かけをきりて、先祖の浦島が數とりの賀振舞に、引續いて聟とりの定。久美の町に古き入江屋甚太夫が二男甚藏といふをもらひ、かさね〴〵なる悦。家屋敷田畑まで殘なくゆづり渡し、今は世の中に心殘とてもなく、其秋こゝちすぐれぬとて、二三日よろづにおもげなるが、老病の名もつかで、たふとき往生をなしにける。甚藏養父の醫業を受けつぎて、忌中の月代を其まゝに四方髪の厚びたひ。長羽織にはみ出し鍔の、醫者柄はよけれども、我身しらずの不養生、婚禮してから十年餘、小いさかひ一つせず、殊に同年女夫の火吹く力さへなく成りて、腎虚火動といふものに病臥し、三十五才の年はやくも世を去りければ、女房お春が悲しみ。ともに本のかこち言さへ、月日につれて疎きならひ、

いりわけ——理由

家の接木——子孫

さゞれ石の苔むすまで——千秋萬歳をいふ

る。燈の光にそれと見て、龍女の御聲やはらかに、いかなれば年高き人の、此寒き夜にかゝる荒磯の浪枕ぞと、御尋に心生出でて、しか〴〵の物語、家のためにこそ此願。老が身の嘆をあはれと思召し給はれと、涙にしみ〴〵とのくり言。龍女もむかしなつかしく、さては浦島殿の血すぢの人か。太郎殿を此土へ送りしもあかぬ別。其いりわけといへば、遠き釋迦の御國、もろこし、日本、我龍の國とて、浮世の義理にかはりなし。さればこそ年の夜毎に、爰に詣來るも、この松を其俤のしるしと頼みて、永き未來の明を照すせめてもの手向草、むかし戀しき今宵しも、そなたに逢ひし嬉しさよ。家のためなる望にまかせて、家の接木を得さすべし。此一品はみづからが情を磨く玉手箱、あやまりて開き給ふゆゑ、はやくも此土を去りたまふ。其後はしばらくも放さでありし形見、今得さする子の齡をひめて、家に久しき壽をさゞれ石の苔むすまでと、心をこめて與ふるぞ。爰は伊勢路の浦ならねば、ふたみに開くる事なかれと、箱を渡して別を告げ、燈籠を松にかけさせ、浪の都に歸り給ふと見て夢さめぬ。壽齋不思議のあまりにあたりを見れば、さきの玉手箱はそこの岩根にありて、授けるとありし子種は見えず。かゝる正夢の瑞こそあらめと、彼箱を家土産の袖のにしきと戴き〳〵て、立歸る空は早

の意

文珠様―京都東寺大西寺にある文珠菩薩

な文句の悪口ならぬを、壽齋が耳にとまり、厄はらひのあだ口にまでいはふ家の規模、七世の孫の代まで、むかしにかはらぬ俤と、今にいたりてのかたり草。其龍宮は何たる所で、年のよらぬ國ぞ。龍宮城の娘はこちの先祖の嫁なれば、一家というても遁れぬ中。ことに此里の切戸の磯に立てる龍燈の松は、年ごとに大三十日の夜には、龍神燈明をあげ給ふ事、目前に見る所なれば、いまだに便のなる所。いざ今宵あの松の下に立ちこえて、龍神に近より、我おもはく家のためなる操をかたり、子孫長久をはからばやと、思ひ立つより家内へは、文珠様へ年籠、知恩寺殿で年をとると、何氣なき顔に我家を出で磯つたひ、犬堂鷄塚を打過ぎ、片枝の松の下道闇く、星のひかりにすかし見て、雲に聳し一木こそ、年月見なれし松ならめと、この下かげの下臥、風ふきわたす天の橋立物すごく、浪のたちゐる音さへ、龍宮の神使や出でくると、待ちくらす夜の心清みて、松が根枕寝るとなき夢心に、更けゆく風の浪を起し、此世目なれぬ人の、古き金燈籠に燈火をてらし、跡よりあでやかなる乙女の、浪の上を靜に歩み來て、松の下に立ちより、人あるを見て、隨神大きに憤り、龍女こゝに來り給ふ。何者なればと、おそろしき眼を見出して睨付ければ、壽齋あわてて地に臥して、罪をゆるし給へと泣きわぶ

見落
喰うた人魚の靈云々—人魚を衝くと同義、いらざる世話をやくこと
過ぎゆく—逝く
煎豆に花咲くこと—僥倖もあると

がめ祭れる例あれども、これらは喰うた人魚の靈につかはるゝ、借屋かして本家とられたるの道理。實に神仙の人といふ者にはあらじ。其國の鄰なる丹後の宮津の町に、浦島が血脉にて、凡そ此津に百の代を重ねて、住みこしめでたき家なれば、人の用もおろそかならぬあまり、代々長命にて、田畑の物生も一とせの賄にあてて、樂々とした暮、なに不足なき身なれども、浮世の月滿れば虧くる習にて、壽齋丁年七十歳までに、男子女子七人まで設けしかど、皆々繦褓より二十までの内にて、一人も取りとめず死にはて、女房もかさなる患に六十をこしての病附、おなじく過ぎゆかれけるにぞ、壽齋の力おとし。かゝるめでたき血脉の絶えなんを嘆きかなしめども、妾目かけに子種とるべき年にもあらねば、養子の望にはかに方々聞合すに、あの家はとんと子が育たぬといひはやして、誰とりあへる人もなし。今はすべき樣とてなく途方に暮れ、ゆく年のあしも、今四五日にせまりて、松立て注連餝る春の設の若々しきさへ、身につもる年月を何に急ぐらんと可笑しからず。殊に今年は大三十日に、節分とりませたる年じまひ。軒並よりはやく片付けて、暮れやくれずにいはひはやす煎豆に、花咲くこともあるぞと、思ひなほして壽く門には、やあら、めでたいな。浦島太郎は八千歳と、此家にはさし合

食器なり

大津繪—浮世繪

はんなりと—花やかなる

百年に云々—伊勢物語に見ゆ

目こぼし—

少々本錢があればとて、竹釘一本箸かたし、削る手職はもとよりも、肩に朸の小商さへすべ知らねば、身過のたづきは宛もなし。二人暮さうばかりなり。しかれども爰は東海道のさしぐちにて、往來しげき逢坂の關路なれば、本錢入らずの茶店を出し、そなたもお園と名を替させ、われらが少しの繪心に、所がらの大津繪畫いてと、世渡の手段かねてあり。心おとすな、世の中に無祿の人はないとやら、それもさうよと絕念めて、女夫茶店の竹床几、はんなりとした信樂茶。よごす繪筆や腰をれ歌も、憂もわするゝ口だんばく。春過ぎて夏は來にけり瘦世帶。空の暑さは凌ぎよけれど、山科の藪蚊を防ぎ兼ねて、賣り殘したる史記一部を、手細工の紙蚊帳に、繼目はなれぬ女夫中と、羨むうはさも一むかし。

第二　やあらめでたや元日の拾子が福力

百とせに一年たらぬつくも髮、われを戀ふらしおもかげにみゆ。堪へられぬ物、灸の端のかゆきと、老女房のしたゝるきとは、清少納言の目こぼし。むかしむかし若狹の國に八百比丘尼とて、千年ちかきまで春秋を見過せし人の物がたり。彼國に跡をとめてあ

外しら露の云々―しら露に知らぬなかけ粟田口にありなかけたり
蹴上け水にぬれた同士―戀せる同士の意
ひじきもの―鹿尾菜の海藻に敷物なかけたり
はつむいたが―機に乘したがの義 俚言集覽に見ゆ
五器―或は吳器に作る

て西ひがし、どこがおちつき所ぞと、外しら露の御所育。たのみも夢の粟田口、蹴上の水にぬれた同士。これが晝日の岡ならば、人がとがめて御廟野ぞと、小夜の狐火つまゝるゝを、しらぬ女の淺はかさ。戀のうはもり山科に、兼てしるべにかり置きたる藁葺のひとつ家。軒端も店もすかんぴん。風は來次第の古柱。ひじきものさへあら筵三枚。きのふの玉の臺には、ちと替損な住居なり。花園心をおとしつけて、先は二人がねがひのまゝに、此所へは來た事ぞ。其五十兩の本錢にて、なにする氣ぞと、女心の先のさきなるとひ狀に、半平爰では腰をする、是まではつむいたが、何をかくさう此しだらと、ぐわらりほどけば石瓦、これはどうぞとあきれ果て、吐胸に魂も消ぬるばかり。半平が云ふやうは、さすが女のうはがしこく、金と思うてちから草、ひかれ爰まではしり來て、當惑はもつともなり。しかし能う思うても見よかし。あの尻ぬけの中將殿に、大枚の五十兩を引きあてなしに用達てよい物か。よしそれならば罪に罪、戀には許すかたもあり。貧の盜も盜なれば、金と出かけては尻むづかし。おれはそなたに首だけ游いで居るなれば、あつぱれ五器も提げる氣なれど、そなたには尻くゝり、逆代なしにはいやといふ。色と銀との手詰にてあるまじき光棍ごとも、そなたをおびき出すまでの手くだ、

梅の御符―京都梅宮の神符
盗根性の小夜鳥―盗根性を出して去り行くの義ならん
式臺―玄關にある板敷
お部屋―諸侯の妾

おれやそなたの身の廻、油、元結、紅紛、小櫛、梅の御符よ、香包と浚込みたる小風呂敷。持るゝだけはと儒書、和歌集、切紙傳授、職原式、我の主の差別なく、三つ四つ二つとりあつめ、盗根性の小夜がらす、打ちかたげてぞ出でにける。あくる日の晝時に、こくめいらしき手代風の男、一腰に袴いためつけて、賴上げますと案内乞うて、式臺にかいつくばへば、花園は今朝よりも今やとの待ごころに、はやくも聞付けて、玄關の障子ほそめにあけて、誰いづれよりと尋ぬれば、かの男兩手をつき、私は三條室町の御用達、白銀屋金七手代共でござります。昨日御賄方御用とて、眞葛半平様をもつて仰付られました金子五十兩持參仕りました。半平様に御目にかゝり、お渡し申したう存じますると申せば、成程、其事は半平の沙汰して居られた。今日は殿の御名代に、上加茂北野へ參詣せられたれば、かへる程はしれまい。自事は殿のお部屋花園といふ者、御用の物みづからが取次で進ぜうとあれば、是は〳〵恐れ多い。お部屋様とも存じませず、慮外のお目見。然らばあなたへ差上げますと、封印かたき金五十兩、式臺にさし置いて立歸りぬ。程なく半平も立ちかへりて、扨右のはとさゝやけば、首尾よしと知らせの目づかひに心おち付きて、其日の暮るを待ちこがれ、裏門よりもしのび出で、手に手をとり

ぬれ衣―戀衣におなじ

おてき―おぬし

本錢のしがく―本錢の仕覺にて用意の義

この屋敷へくるから、ほれて〱此不埒、一夜までの情をと、おしつけわざのぬれ衣、それが宿世のあくえんにて、此所やかしこの小くらがり、おてきならでとしめられて、あのくちがしこい男めと、虚言のまことにたらされて、身につく程の可愛さも、つまらぬ末のどれ合中。もし知れたらばあぶな物。爰をすつかりぬけて出でて、いづくの里の住居でも、女夫と云うて暮す樂しみはどうあらうと、せき切つた男の詞、花園が思案にも、いかさまかう成るからなれば、いづくまでもと思へども、內裏上﨟もどうやらと云ふふしにて、在所古町の住居でも、所在なうては過されず。それはといへば、何事も本錢のしがくなうては、手すさみありとて又つまらず。其工面さへ出來たなら、鬼住む里へもゆく心。爰を思案して下されと、急な所へぬけめなきは、妾形氣の京女。半平これに吐息をつき、いかさま、是はもつともな氣のつけ所。其工面こそ第一なれ。きつと發明いたすなりと、其夜はそれで別れしが、又あけの夜の囁に、よき才覺を設けたり。明日の晝比には、御用達の掛屋より金子五十兩持つてくる筈、すなはち某が名をいうて來るべし。そなた其處をぬからずに、取次顏にちよろまかして置かるべし。それで二人が命綱、菜摘み水汲み暮すなら、こゝを退いてのたづきもあり。まづは今宵の才覺は、

どうぶくら—胴腹にて最中の義

朧月夜—照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしく物ぞなき

秀句—駄洒落

めつさう—方外の義

らせ給ふ氣色もなく、いかう更けたやら、風もひやゝかに覺ゆる。なんぞあたゝかに煮た物で、盪酒一つ乾して寢ようとのお物好に、畏つたと半平が御臺所へ立ちてゆけど、最早勝手はごろ〳〵と、あそこや爰に轉寢の、料理人水仕男が鼾に寢言こきまぜて、今こそ夢のどうぶくらなれば、引起してもうつゝなし。宵の御膳の殘もやと、厨こそこそ尋ぬる内の待遠さ。まことに此半平は何して居るぞ。花園見てこよと、欠まじりに仰せらるれば、ほんによほどの間、御前のお待ちかねはお道理。自呼んで參じましよと、つい立ちて勝手の方へあゆみ出で、半平殿何してぞ。殿樣のお待ちかね。朧月夜に煮る物もないかやと、秀句まじりの酒機嫌に、色香まさりて憎からぬけはひに、半平心ときめきて、幸あたりの人も性根なければ、胸だくみして、是は花園樣、追付きそれへ參りますに御覽じませ。此通に皆ねぶりこけてたはひなしゆゑ、私が手づからの庖丁をと、只今獻立の隙入。それに付きていつそはと、思うて居たによい首尾と、急遽にひたと抱付けば、これあの人は酒が過ぎてかめつさうなと、こゑ立つる口をおさへて耳にさしよせ、

　今宵しもたなさがしとや夕月のおぼろげならぬ契とぞおもふ

定家―藤原定家

後京極殿―藤原良經

花實一體―形式內容の整然たること

于鱗之美―明の詩人、李于鱗王元美

石川のこまうど―催馬樂の呂の曲

の辯舌もの、中將殿のお伽にちかう參りて、今日殿の御所で遊ばした、曉に寄戀の御詠は、及ばずながら感じ入りました。定家の骨法に後京極殿の幽艷、花實一體の風體、中中どなた樣も御批判はござりますまい。先日一位樣へ進ぜられました禪院の梅の七律も、于鱗元美を一變せられました御發明の句調。まことに殿樣は和漢に秀でさせ給ふと申す物でござりますと、さしつけたる追從に、あま口ならぬ中將殿も、聖天の油責成る辯舌に蕩されて、出づるに半平居るに花園と、寵愛出頭、只この二人にとゞまりぬ。比しも春の彌生中の八日餘、前栽の花散りがてに咲亂れて、やり水に風の小皺もなく、寺々の夕ぐれ告ぐる鐘の音に、山の月もやゝおそくして、雪かとぞ白くさし出る影の、松に櫻にうつろひて、春の夜のながめ一しほ心うきたちて、花園が膝を枕にして、半平に酌とらせつゝ、今昔の物語とりまぜて、石川のこまうどに帶をとられてと、うたひ興じさせ給へば、半平も御前酒が額面にわき上りて、申し殿樣、催馬樂より朗詠より、私が隱藝を差上げましよと、扇しやにかまへて、宮古路がいたづら節。傳兵衛さんのう我夫と呼べどさけべど、河風に聲をとられて聞えぬかいのう。我夫戀しと、首打ちふりての思入。殊更の御機嫌にとり上ぐる小盞、かたぶく月の夜半になれども、中々臥戸に入

の拙きこと

わざくれ—悪戯者

ぬれ衣—戀衣

こきは口さがなく、縫針好は尻おもたし。病身ならねば法會だち、こゝらをもつて見るときは、外聞、手利、人挨拶、世帶、敷金、閨の花、それ〴〵の女房を凡そ十人ばかりまでは、誰しも持ちたい物ならずや。春秋に次妃と策し、武家にはお國樣とうやまふ。京洛中の妾種、蒔いた一粒が萬倍の五人扶持に、數百兩の捨金のあたゝかな暮仕ても、娘さへ產みやあての槌。世はならはせの鄰づからも、うらやみこそすれ恥ならず。腹かさぬ子の義理へちまなく、似我蜂のそだてがらに、延びる脊丈の肩越した借金も、濟ますてだての外にはなければ、本の親がうらみもせず。されば萬卷の佛經を地中にしき、四神擁護の王城に生るゝ人の心意氣、加茂川の水のすみ濁る芥屑藻屑に、染みやすきわざくれも、汚う稼いで淸う暮せとなり。こゝに都しら河に櫻戶の中將殿とかや申して、やんごとなき方のおはしける。御筋目もめでたく時めき給ふが、和歌、管絃、有職に長じ、唐土の文の道も博達におはすあまり、情のみちもかしこく、あまたなれ昵れさせらるる中に、花園といへる新命、年は廿に一つ二つ點からぬ才發ものの、白く油つきたるにとんと打込んで、大内の勤ことしげき外に、間がな透がなぬれ衣の足かさなれば、お妾と定りて、しんぞ可愛がらせ給ひけり。今參の雜掌眞葛半平とて、唐も倭もないまぜ

世間妾形氣 巻之一

第一　人心汲みてしらたぬ朧夜の酒宴

戀せじと御たらし川にせし御祓、神はうけずも成りにけるかな。むかし伊勢加茂兩社の齋宮をたてられし例、彼六條の御息所が、伊勢まで誰が思ひおこさんと、もてはなれたるすね詞も、かち人のわたれば濡れる業平への自墮落より、今も在原の氏なる人は、お影參もならぬよし。戀に和ぐ國の風俗も、たはれ過しの浮世之介は、無筆むくつけの角内にも劣りやせんと、殘口が艶道通鑑のおもむきに洩れたるは、必ず繰言成るべし。天子に十二人諸侯に七人と、聖人の任米。いづれ家督相應に、三千の後宮でも有つて、つまる勘定なら、それが果報といふ物よ。たとへ町人百姓でも婬欲の外に、一人でことは足らぬがち。先づ女房は大黒ばしら、其家のたて物とするは、夫は外へ稼に出れば、女房は内をまもる。それにこそさまぐ\あるなれ。容色がよければ手づつなり。世帯かし

戀せじと云云―古今集第十一卷にあり

かち人のわたれば云々―伊勢物語にあり

殘口―增穗殘口、艶道通鑑の著者

手づつ―手

ふくるゝよと、宵よりつどひて七つの鐘聞く夜は數多たび、それが中にえるとはなくて、當世てかけものゝ厚薄の情、をかしきあり、はかなき有り、編みて册とし、故によりて妾容氣と號く。されば二老が文理は、五卷に猶名殘ぞをしまる。この弊言數ふれば、はたちに餘り、撰めば一つとして採るものなし。偶なぐさむ一ふしは、さてもさても八文字が糟粕。これを除き是を棄てて、そぞろにものして、十種に充しめ、四卷に已みぬ。自笑をしれる人は嘲みなん。自笑を知らざる人は、見ずも棄つべし。時に明和丙戌の冬。

和氏譯太郎述ぶ

世間妾形氣序

八文字が草紙、其積自笑の戲作多かる中に、近世俗間の模樣有りとあるまゝの序に、鶴翁が絲に引きそめし傳授車の、綱手にすがりて商賈のそろばん形機書出れば、親爺の吝嗇質氣は、其中に求めたりと見ゆ。石門藝に親の財を空し、惡所がよひに家藏を失ふむす子の、我まゝ形氣やむ時ぞなき。その諫めかねし忠心の手代形氣、母おやかた氣の愛憐も、よむにさこそと感あり。又小むすめの婿婚待たで、こがれまゐらせの偸ならひ、若紫の歌舞妓子に思はくよするまで、猪もかしこしや狸老が筆談、眞似てまねえんか、誠にまねられず。荒れにし我軒は、いつしか浮浪子の中宿となりて、長き代のかたみにはあらで、荒唐世説をいはざれば、衣食の腹

—名にめでて折れる許ぞ女郎花我落ちにきと人に語るなに擬せり

の詫言がすみ、お笛もろとも故郷へは錦の小路の掛屋敷を貰ひ、綿服に仕替への商形氣。槌で打出すやうな金まうけして、大黒屋富太郎が長暖簾。五日の風のそよくと、十日の雨にしつぽりと、夫婦中よく富み昌え、豊に住めるぞ目でたけれ。

諸道聽耳世間猿　終

原冬嗣の奈良興福寺に建てし佛堂

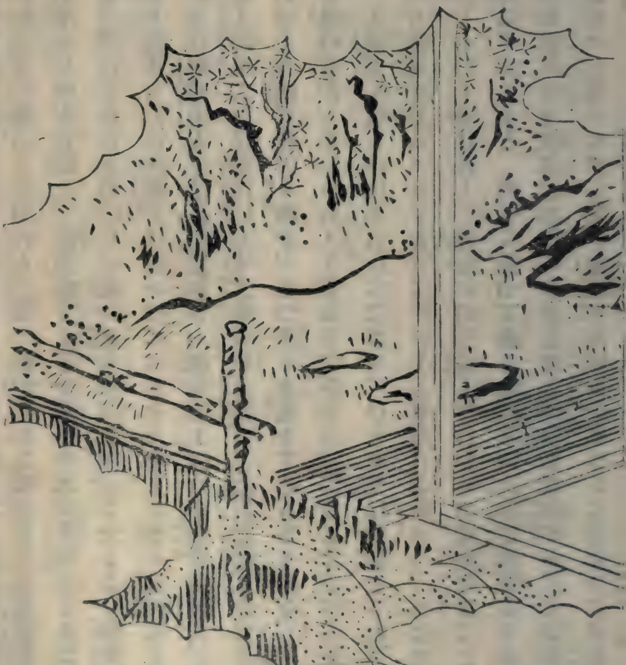
山水な醫者―さびたる醫者

我落ちにき

有狀。是はいかにと驚くうち、浪人楊枝つかひながら、扨貴樣にちと談じ申す事がある。承れば姉が小路の大黑屋福右衞門、惣領の富太郎殿とやら、傾城狂の不埒ゆゑ、此所の住居めさるゝよし、最早本家は舍弟の名前にて、親父は隱居の身分、詫言してから傾城つれていなれぬ首尾。代の替つたは幸千兩ばかり合力申してつかはされい。其使は拙者辯舌で天晴仕おふせて進ぜう。なんと思案めされぬかと、初對面からわる性根の腰おし。成程御深切のお詞、とくと思案仕りて又御世話にもと、うぢ〳〵とした返答を、はて氣の弱いお人。本家の身上で千兩はわづか。拙者にさへお任せなさるゝと、後々には身上半分は取つておます事ぢやと、鑷ひねくつてひらじひの尖さ。是はひよんな所へ來た。どうぞ去にたい物ぢやがと、見合せて居る所へ、先生御在宿かと、ずつと這入るは、黑紬の小豆色繪師とも見ゆる山水な醫者。扨此間の一休の自畫贊は鹽梅ようはまつたが、芭蕉の手紙が文がうま過ぎるといきかねる。もそつと御氣を付けられい。是は其割符と金一兩渡して跡のもくろみ、樣子を聞く程座にたまられず。つひとはづして迯歸り、こり果てた嵯峨の奧、妓王妓女より擬筆士やら追剝やら、しばしの住居もおそろしく、わが落ちにきと人にかたるなと、家主に口どめして、ひそかに京へ立歸り、親々

笠の臺—首をいふ
どやがしやれ—よび給へ
御時分—食時
南圓堂—藤

心者。しかし今に働いてをつたら、笠の臺がばれるであらう。御手前も御夫婦さうなが、こゝも不用心な所ぢや程に、なん時でもどやがしやれ。片腕でもまだひとりや二人は朝飯仕事と、聞いてゐるうちから、癪の上る身の上咄。さやうなら殊更殊勝に存じます。いや又盗も捨てられた商賣ではないげにござりますと、恐々挨拶して内へ戻れど、肌刀さいたやうな鄰同士と、うす氣味わるく、向の庵主は六十有餘の浪人、見かけから實體な恰好。盗人坊主よりは念比にして大事ない人柄、ちと御見舞申しますといひつゝ通れば、浪人はいづくも同じ秋の夕飯を、ねつ〳〵と喰うてゐらるゝにぞ、是は御時分でござりますにと氣の毒がるを、いや〳〵苦しうござらぬ。御かけなされ。ちと上られぬか。しかし京中と違うて喰ものは不自由にござる。ひとり住は御覽なされ。冷飯がすゑりましたゆゑ、木香丸を菜にいたすと、にが〳〵しき顔付に興さめ、扨はこゝもつまりし困窮。しかし心にくき住なし、腰をれの一首も詠むからの嵯峨住居。これは咄せる風雅人、座敷の壁にべた〳〵と、何やら張つてあるは、歌の詠草懷紙でこそあらん。所がらとて定家卿の小倉色紙を學びたるは、さりとはしほらしき物好と、よく〳〵見れば歌ではなく、南圓堂の足代のくさらぬ仕用帳、木津川のあさくならぬつもり書、おそろしい事の



唐犬額—俠客唐犬權兵衛の始めし角額

性根玉—根性

しらなつて—昔をわすれて善にかへりて

經。是は〱ようござりました。まそつとぢや、仕舞ひますと云ふ。人相六尺ばかりの大入道。唐犬額の跡もするどく、殊勝げのなき物ごし。扨は名ある武士の果、暗君を諫兼ねての桑門と一入たのもしく、兎やかうするうちに烟草盆提げて立出で、ようこそござりました。まあ是へと竹緣につくも筵。四方山の咄がしみても、どこか一つ侍めかぬ詞づかひの卑さ。一圓よめねば、なんと御坊樣には、幼少よりの御出家とも見えませぬが、定めて以前は、一廉の御知行でも、御取りなされましたと云ふやうな御方と、見受けましたと問ひかくれば、いや〱愚僧は武士でござらぬ。鄰合で向後念比にいたすから隱し申さぬ。おらはもと東海道を働いた無間の鐘介というて、盗人の張本でござつた。手下も五十人計有つて、おそらくは大名でも、剝兼ねぬけちぶとい性根玉ゆゑ、指さす者もなかつたに、三年跡の師走の廿四日の夜、江戸の店の勘定しまひて、上る手代と見え、百兩餘の小判を首にかけて供一人、夜道かけて急ぎの道中、府中と鞠子の山中で出つくはし、供めは大袈裟にぶち放し、直に親方めもしまひ付けうと切りかける刀を、何の苦もなう引つたくり、おらを眞二つと切付けるを、逃げるひやうしに谷へ轉落、命は助かつたかはりに、此の如く左の腕が叶はぬゆゑ働やめ、しらになつての道

平家座頭―琵琶法師
世尊寺樣―藤原行成の書風
ちびり暮―豊ならぬ生活

づくでもらひしが、女房は出來ても家がなく、脇ひら見ずに嵯峨の奧、妓王寺の邊を借りて、面白づくしの宿這入。殘る金ではそなたもわしも紙子仕立、藤色羽二重に媚茶繻子の火打、下には何を白絖の反古染。心一ぱい物好して、富太郎は名を瀧口と改め、花野が名もお笛とかへて、平家座頭に謠はれたさの風流。こゝまでは仕ならべしが、殘る金は廿兩あまり、是喰うて仕舞ふはちつとの間と、世渡の心つき、何にても卑しからぬ手ずさみをと、いろ〳〵と工夫して、富太郎は嵯峨野の茶杓を削り、お笛には花の露をとる事を敎へて、浮氣がさする夫婦の身過。入口の柴折戸に千家御茶杓四季花の露と、世尊寺樣の看板も京からまでは買ひにこさず。花の露の香も褪めて、茶杓はいつしか朝餉の焚つけに打ちくべて、始末といふ事せねばならぬといふ事、氣がついても、ちびり暮の明暮は、名にし嵯峨野の秋の暮、壁に鳴く蛬、窓に音づるゝ棹鹿、廣澤の月も酒がなうてもをかしからず。桂の錆鮎も十を百文にはよわりて、今ぞ不自由が身にしみじみと鉦の聲は鄰の庵の御坊、まだ近付にもならねば、憂を忘るゝよすがにもと、烟管提げて御宿にござりますか。私は近頃となりの庵を借りて參りました京の者でござります。淋しう暮しますゆゑ、ちと御咄に參りましたと、云ひつゝ這入れば、庵主は夕暮の看

まりて拂ふべき代金の倒の義

筏士よ云々ー筏士よ待てこと問ん水上はいかばかり吹く山の嵐ぞ

よう知つてゐながら、たゞ取るやうな口車、乘るかふぞるか、借錢の淵およぎつかれぬ人多し。見一無體ざつきやくでは、儲けられぬ錢銀とは、後にぞ思合すなり。昔より世を捨つる身の置所とて、都に近き嵯峨野の末、嵐山は名ばかりにて曉の夢も破らず。名社の瀧の音もせで、丸裸にて喰はずに居よなら、此上もなき隱里なれど、此處にも季日の滅鬼殺鬼があればこそ、はや瀬の鮎を追ひあるき、腰だけ濡れても口一つ、ふさぎ兼ねたる膝がしらで、掘りやしつらん硯石の、窪い所へ水も溜らぬ商店、どこへ廻つても、たゞ居てはつまらぬに究りぬ。筏士よ待てことゝはんと詠みし大堰川、渡月橋のわたりは嵯峨第一の風景。こんな所に能い女房持つて暮したらと、思ふは誰しも姉が小路の銀屎息子、大黑屋富太郎。島原の榮種の匂伽羅の油が鼻の先へしみ付いて、親の異見手代の忠言、云ふほど募る居びたれ遊。弟もあるなれば、いつそまくり出して仕舞ふに、一家衆の談合極まりて、母御の歎御機嫌のなほるまでは、是にて何なりともして辛抱せよと、百兩餘の枕金、袖の下から遣らるれば、勘當の富太郎此金に力を得、いつそ思案が固りて、是で太夫が苦界を引かせ、手前仕たら兼々の望の通と、その足で島原へ駈出して、桔梗屋の花野太夫、半季に足らぬ末年を借金ごみ五十兩、賴母し

まや藥—ごまかし藥
大年の夜—大晦日
集禮倒—定

て、宮内主從を棒ずくめにて追立てければ、所の住居もならぬしだら。はふ〳〵の體にて大坂へ立退き、齒藥の居あひ拔。あの奴めが討手まゐると、主從息勢はつての思入、摩耶の天狗でしくぢつたゆゑ、今まや藥と出かけるも、より所なきにしもあらず。

第三回　浮氣は一花嵯峨野の片折戸

桑名屋の德藏といふ船頭、大年の夜に舟を走らせしに、いづくの沖にてかありけん、凄じき雲出でて、浪風あらく吹きしかば、船中大きに便を失ひしを、德藏船櫓にあがり、心を用ひて下知しけるに、空中より怪しき聲して、いかにや德藏、今宵はいつの夜なるぞと尋ぬれば、德藏少しも恐れず、年の夜にて候ふと答ふ。妖神また汝世に恐るゝ物ありやなしやと問ふ。德藏重ねて、世には身過ばかり恐しき物はなく候ふと申せしかば、再び聲なくして風波靜り、船も思ふ方へ走りけるとなん。行餘力ある時は文を學ぶとやら、米櫃の底さへ見ゆる山の井のとも詠みてをかしからず。とかく身過が大切と稼いで見れば、諸商賣ともに先達の巧者ありて、あまい滴の垂らぬ世の中。親の代から仕にせの家業、あはづの森のせいらいでも、知らぬ事は集禮倒。かへぬが理詰といふ事は、

かくやく—赫灼

光棍一騙兒

ごなしなら、其時はさぞ苦しい事であらう。最早息が切れるやうなれば、どうぞ此金毘羅參は止めに仕たい。斷をいうて下れと泣き詫ぶるを、いや〳〵、それでは講中へ主人の約束が違うて一分立たず。それともに苦しくば、是より歸つて、人々には金毘羅山を拜み來りしと、よい加減に間に合はすなら、御詫申してくれん。それも後日に親兄弟に限、其方の口より、箇樣々々と語りなば、其詞の終らぬ内、魔神來りて引裂き給ふべし。如何にや如何にやと云ひつゝ、頭をはりまはせば、何々の誓文、人にいふ事にはあらずと、段々の口がために、よろめきながら立ちあがれば、又背中に負ひて走り歸る。内には又燈明かくやくとして、祈の聲の澄渡る座敷先を、手ごろの石をとつて、軒口へ打付ける響に、すはやと參詣立騷ぐ所に、緣の障子を明けて、善次郎髮も著物も泥まぶれにて、よろ〳〵と立歸り、只今讚岐から戻りました。扨も〳〵有がた痛い事でござりました。どなたも參詣なされたくば、やはり舟をかり切つて、御參なされませと云ふを、小平六が臺所より握拳を見せる顏が、天狗よりも怖しく、人にはもとより寢言にもいはじとぞ心に誓ひける。誰が見て居たやら、此樣子を翌日より一まいに取沙汰あれば、憎い光棍めと、近在の荒者どもいひ合せて暴れ込み、壇も注連も鳥箒も引きむしつて捨

甘口の男─智慧の廻りのわろき男

次郎とて、ちと甘口な男なれば、もとより殼の智惠袋ふるひ〲出でけるを、宮内手をとりて緣の障子の外へ出して、また壇に返りて祈りけるに、不思議や、十二の燈明一陣の風にはた〲と消えて、障子雨戸ぐわた〲とすさまじく鳴響けば、皆々あつと魂きれて、暗がりに手を取りあひ、活きた心地はなかりし。扨善次郎は障子の外に、恐れながら立つて居るを、灯の消えたを相圖に誰とも知れず、善次郎を背に負うて、闇路を飛ぶが如くに走り行く、是正しく天狗殿と目を閉ぢて、心中に南無金毘羅大權現と息をも繼かず申すうちに、虛空へは飛びあがらで、西代村の蓮池のあたり、深田の所へ下しけるに、是は如何にと目を明いて見れば、天狗ではなく藥箱持の小平六なり。こりやどうぢやといふ所を物もいはさず、力に任せて善次郎を深田の中へ突倒し、あがる所をふんごみ、引きずり揚げてはたゝき込み、目鼻の別なく握拳にてはり廻しければ、やれ人殺しなるぞ。助けよと大聲に泣きわめけど、人家は遠し殊に深夜なれば、誰かけ付ける人もなし。小平六聲をひそめて、今宵魔神、こなたを象頭山へ暫時の間に參詣せさせ給ふ。其間は天狗道の熱鐵の苦を受くる事、中々なみ大抵の苦ならず、それゆゑ魔神來り給ふまで、荒こなしをしておますのぞと云へば、善次郎かた息になり、是が荒

羽團—羽團扇

象頭山—琴平神社

しく罪をなだめ進ずべし。いづれも加持人は燈明代として、銀五匁づつおいてかへられよ。是は手前の徳分ではない。天狗頼母子と申して、直にあなたへ捧げるのでござると、未前過去の事ども皮肉に入りしごとく占ふに、皆々恐れ謹みて、扨も／＼不思議な有難い事でござります。一つ御尋ね申したい事は、あなたの持つてござるは、灸屋にあるやうな鳥箒、天狗樣に御貰いなされましたら羽團でありさうな物。鳥箒もあなた方は御持ちなされます事でござりますかと問へば、宮内うなづき、尤の不審。是は天狗の羽箒とて、ずんどかるい末の衆の持たせらるゝ物。羽團はたしないゆゑ、是を貰うて來ましたと語られぬ。ある時宮内いつ／＼の夜は、各信心深き人々をえりて、我家より讃岐の象頭山へ、暫時が内に海上を越えて參詣さすべし。しかしあまたの人は神も御苦勞なれば、打ちよられしうち一人、神前にて御鬮をとり、神の御心にあがりし人を參詣さすべしと聞くより、是は奇妙な事ども。どうぞ御鬮にあたりたいと、頭に血の多き若者ども、それを見よとて老たる人々、其夜は暮れぬうちから、宮内が方へつめかけゝる。さて宮内はいつ／＼よりも壇に十二の御燈をてらし、數の供物夥々とかざり立て、先づ祕文を唱へ鈴をふり立て、既に御鬮を取りけるに、あたりし人は兵庫騎馬の町越中屋善

冠付—俳諧宗匠が末句を出して初句をつけさすること

信心他事なかれと、教へ給ふと思へば、其跡は夢のごとくにてかつて覺えず。我今日より神の教に從ひ、祈加持して衆生を救はんと、俄に家内を清めて壇をまうけ、朝夕の鈴の音喧しく聞えければ、やれ駒が林の醫者殿が、天狗につかまれて戻つてから、見通の八卦を占ひやるげな。なんといな病でも愈しやるげなと、近在より日々に人をうつしける。宮内はそれ〴〵の加持人を呼出して祈禱をなし、彼烏の羽にて頭より鼻を撫でおろす事三遍にして、其人の氣質病根をさす事神のごとし。前な親仁は、家業は檜物屋なるべし、僞飾なき生付なれども、是までに我知らず愛宕の杉を切りくだきし事あるがゆゑ、此度の病杉の木の如く立煩をめさるゝなり。それがしが加持にて平愈は疑なし。次なるは船乘の女房と見ゆる、其方が夫、先年難風にあひし時、金毘羅へ願立して、杉苗百本奉納せんというて、今に奉らざる咎にての病氣なり。杉苗が大儀なら、杉の神箸でも百膳奉納せらるべし。跡に居る四十ばかりの男は、冠付前句付お淸書屋よな。汝に神の咎あり。いま世上にめくら付の前句なんどを、天狗俳諧と名付けもてはやす。是筋なき事に我名を呼ぶとて、兼て怒り給ふ。向後天狗の二字を除きて、鳶俳諧なりと申すべし。此御詫に生酒五升持參せらるべし。是を捧げて天狗酒盛を勸め、よろ

人顔もたそがれ時—人顔も彼誰とわからぬ時

手んづもんづ—手に手に

呪文—まじなひの文句

し次第を咄しけるに、天狗の所爲は是非なし。又歸らるゝ事もやと、それなりに一月あまり暮れにけるに、或夕暮の人顔もたそがれ時に、表の戸を盤石をもて投付けるかとばかり、凄じき音のしけるに、小平六あわてゝ駈出て見れば、主人の宮内髪もかたちも茫茫然として、右の手に獨鈷鈴を持ち、左に引きむしれる鳥箒を持つて、うつとりと立つて居るを見るより、やれ旦那が歸られましたと、あたり鄰へわめきちらせば、宮内様は戻らしやつたかと、そこらあたりが寄つて來て、先づ内へ入れましやれと、手んづもんづに抱きかゝへて、御無事で怪我もなしにおめでたやと悦べど、宮内つやつや物もいはず。倦みつかれた體なれば、先づ寢さしましたがよからうと、蒲團打ちきせ介抱するに、それなりに打ちふりかいふり、二三日は起きざりしが、四日目の朝、やうやう人心地付いて、小平六に此程の物語。かの僧に誘れて、諸國の靈地到らぬ所なくかけめぐり、九州にあるかと思へば奥州に遊び、北國を行くかと思へば四國に渡り、あるひは樂みあるひは怖しき事語るにつきず。かの僧のいへるは、汝が長直なるゆゑに、一つの法を授く。今此獨鈷と鳥の羽をもつて、教ゆる所の呪文をとなふべし。人間の吉凶外傷不幸の病を治せんに、必ず其驗あるべし。急ぎ家に歸りて、人を救ふ善根をなし、其身も

花やこよひの云々—行きくれて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主ならまし

味噌にも鹽にも使れて—何事にも使れて

ひせし名所ともいうて置くべし。花やこよひのあるじならましとよみし忠度の墳は、兵庫の西須磨の濱邊、駒が林の村中にあり。其片邊に高村宮内といふ老醫、少々は讀もすれど、とかく匕子が廻らぬと、近在の療治もかれ〴〵に、いつ見ても空色加賀の長羽織に、佩しふるしたる柄絲のあかつきかけて鹽はふめども、つとめ甲斐なき親方を、小平六といふ十八九の剃下、小力もある脾腑ざかり、味噌にも鹽にもつかはれて、また珍しい忠義者。何聞きはつょて覺えたやら、二君には仕へじと、いづくまでもの尻からげ。今日は二月の初午なれば、摩耶參と心ざし、主從二騎に錢二十、是であらうかしら波の、和田の笠松打ちかぶり、花隈の城跡より生田の森を横りて、いさご山にのぼれば、まだ消え殘る峯々の、雪より落ちて布引ぞと、瀧にしばらく佇立みて、感にたへても酒はなく、雲内村より摩耶の裏坂をと、木の根岩稜すぢりもぢりて、漸々半腹にのぼるとき、何處からやらひよつこりと、旅僧一人出で來りて、其方は宮内なるか。よき所にてぞ逢ひたり。此方へ來れといふかと思へば、忽ち千鰯くさき風起りて、一山の草木を吹飛ばし、宮内を引きたて虚空にあがれば、小平六大きに驚き、あれよ〴〵と叫ぶといへども、ついてゆく羽も持ち合はさず、詮方つきてすご〴〵と宿へ歸り、近き鄰へもあり

蘆屋道滿―蘆屋道滿大內鑑、竹田出雲の作
葛の葉―大內鑑の中の姬君
月令―林園月令、書名
狗賓―天狗

芝居を仰付けられいと聲かけられて、それは御用捨といはゞ、また怒りかねぬいぶり者と、如何樣にもと、しぶ〳〵に臺所へいひ付けて、棧敷をとらせ、始るといな、皆々見物すれば、世には似た事もある物にて、蘆屋道滿の狂言、葛の葉の道行、畜生足にこり果てゝ、京より歸る與勘平のやうに小首かたげ、惡右衞門が家來の坊主にしらるゝに氣が付いて、あたまを撫で見られぬもをかし。田鼠化して鶉となる、川獺で狐がつれるとは、いまだ月令に見あたらず。

第二回　祈禱はなでこむ天狗の羽箒

京の鞍馬山の僧正が谷には、繞の石悉く刀の痕あり。源の牛若が狗賓に出合ひて、劍術をならひ得し所なりといふ。また唐土の馬鞍山といへる山の石は、試劍石とて滿山劍をあてし痕のこゝに等し。山の名も同じ文字にて、同じ奇石のやまと唐土にはあれど、牛若といふ唐人の若衆が有る事を聞かず。しかれば鞍馬の古跡はうその皮、怪力亂神を語らずとあれど、是も其人の紀念と思ふにぞ、猶なつかしき袖の移香、故きを慕ふ心よりこそ、戀も無常も風流もある世なれば、所詮唐土の馬鞍山も樊噲張飛などが、醉狂

ちんこの呪—いつはりの呪

叱曦—狐釣の狂言の名

弓矢八幡—誓に用ゐる語

やと、走りつまづきてかけ付ければ、狐は釣らで、浪人介兵衛刀の反を打つて聲荒々しく、扨は三人の者ども身が祕事にしてつゝしむ所を、礒右衛門が忍びて來りしは、ちんこの呪を見屆けん結構よな。年かさの七左衛門とやら、それへ出でよ、無體に望みて今宵の催を致して、此仕合は汝が所爲と相見ゆれば、遁すまじと詰めかくるに、七左衛門大きに狼狽て、なん／＼の誓文、町人の儀なれば、狐釣の傳授覺えて何にいたさん。とかく礒右衛門が早りしゆゑと、叱曦のたら／＼いうて誤つた稲荷樣の三人が體、浪人中々聞入れず。いや／＼何事によらず、利欲にふけるが町人のつね、身が祕傳も覺えたら、銀まうけにもならんかと思ひ、某をたばかりしなり。弓矢八幡堪忍せぬと、おどり上つて、鳥居もこえんずいきほひを、ひらとも詫言して、やう／＼靜りたれど、まだ眼ざしの恐しさに、小竹筒の酒もたべあらしたれば、墨五郎殿、どこぞ貴樣方の懇意な料理屋があらば、あなたを御供したい。引きあはせて下されと、日比の吝さも刀に怖れて、折入つて頼めば、兩人畏つて暫し連立ちて、祇園町の一力へ成りこみ、夜の明けぬうちからの酒盛。浪人も打寛ぎて、夜寒をはらふ鷄卵酒に、鍋燒よと社人のいなり喰。どうもかやうな形で、晝中に宿元へも歸られず。七左殿、とても御馳走に、

小竹筒—酒器

夜の八つに—午前二時

野風呂—野遊の時携へて行く火爐

許のお影ゆゑ、然らばせめて小竹筒提重は此方から持たせましやうと、人心がついてから、又とない大氣な事いはるれど心もとなく、金銀ではかなぬ遊山なれば、提重の御肴もちと御念入れられませい。刻限は夜の八つに御誘ひ申しましよと、別れて宿に歸り、明くる夜の丑みつ頃、平野屋の門をほと〳〵と叩けば、内よりはいと答へて戸を明ける。さあ七左衛門樣、只今と三人連。浪人は朱鞘の大小に山岡頭巾、釣竿持つてひかゆれば、一人は袈裟屋墨五郎、是は御苦勞樣と挨拶して、下男に用意の食物持たせ、跡につけば、二條通を東へ、川原の假橋を渡りて、聖護院の森を目あてに露霜を分けて、お辰稻荷の宮近き所に立ちどまり、いづれも是に居給へ。御兩人は先達御案内の通、此方より呼び申すまでござる事は御無用。秘傳を行ひますうち見えさつしやると、向後の妨となりますと堅く制して、浪人は遠く隔てゝ罠をかけに行きぬ。跡に三人家來ともに、冬の夜の寒さに比叡颪烈しく只は居られず。先御酒一つと野風呂の熱燗、提重取りちらして、さいつおさへつ待てど暮せど、何の音もせねば、礒右衛門退屈して、私窃に見て參りましやうと、さし足して行きしが、又是も戻らず。是は如何な事と、二人も待兼ねて、そろ〳〵と行きかけしに、遥むかうの方にて何やら喧嘩の聲、そりや相圖ち

伯藏主—堺耕雲庵の住僧

堅き石となりて—堅く結ばれて

安倍晴明—花山帝の御宇に有名なりし天文博士

狂言見るやうな物ではない。正眞の伯藏主、いなうやれの畜生、足が人間とは又格別のとり廻。罠にかゝるまでの面白さ、どうもはや、いはれた物ではないと、身ぶり交に咄さるゝを、七左衛門現をぬかし、それはけしからぬ珍しい事、金の一歩やそこらは入れても見たい物でござる。どうぞ、亭主の働で見物さして下されと、段々と頼まるゝに、礒右衛門あたまをかき、はてきつい御執心、然らばどうぞ、今一度明日參つて頼んで見ましやうが、得心あればようござりますがと、其夜は約束堅き石となつて、犬追物の杖つき鳴し歸られぬ。扨二三日過ぎて、礒右衛門は七左衛門が方に來たり、この間の一儀段々頼みましてござりますれば、浪人衆申されまするは、何とも迷惑千萬な儀、是は手前が家の一大事の祕傳。今にもあれ玉藻の前が、二度の勤にて御惱ならせられた時、安倍晴明が祈り除けはめされうが、生捕る事は思もよらず。其時は拙者天晴の知行にいたすつもりで、かくの仕合ながら時節を待つてまかりある。町人衆の慰みには、ちと心外にござれど、段々の懇望と有るゆゑ、明晩今一度釣りてお目にかけ申さう。重ねてはきつとなりませぬと、きつい恩にきせられましたと、したり顏にて咄せば、七左衛門大きに悦び、それは段々の御働。左樣な重いことを雇賃なしに見物いたすは、全く其

耳よりな—
聞きたし

なかば、墨五郎亭主磯右衛門に向ひ、先夜の趣向は又とない珍しい事、どうぞ今一度見ることはなるまいかと云へば、いえ〳〵、あればかりは度々はなりませぬ。併珍事というて、又あのやうな錢のいらぬ面白い事はござりませぬと、二人が思出しては珍しがるを、七左衛門聞きとがめ、錢のいらぬ面白い事とは耳よりな。殊にまたとない珍しいとあれば、かた〴〵聞遁しにならぬ咄。どうぞ、今一度の御催の御加へ下されと、めつたに羨ましがれば、磯右衛門がいふは、ま一度見らるゝやうなら、是非あなたをと存じてをりますれど、さきが武士の浪人衆ゆゑ、申しでたとて最早見らるゝ事は出來まいと存じますといへば、墨五郎がさあさうあらうと思うて居る。ふと咄かけた事なれば、申して聞けましやうなれども、他言は御無用。是の亭主の懇意に御出合ひ申す、東國下野那須野邊の浪人、三浦介兵衛殿と申すが、先祖の祕傳とて狐を釣る事が名人でござる事、ふと磯右衛門の咄で承り、段々所望して見物いたし度きよし、磯右をもつて申遣はしたれば、見物とては中々叶はぬが、幸近日さる貴人より賴まれて、一疋釣りてやらねばならぬ。其時餘所ながら見物に參れと、仰せこされたゆゑ、其夜亭主と二人、右の浪人衆同道にて、嵯峨野の方へ參つて、釣る所を見ましたが、中々貞五郎、藤九郎が釣狐の

小半合酒——小量の酒

有徳人——富豪

て素咄の夜半切、折ふしには吸物一つ小半合酒、麪類のあばれ喰には、いか程奢つても端錢の樂。銘々涼の仕過を入合はすつもり。氣のはらぬ遊には、内を出るにも權柄に、店仕廻ふなら提燈持たして迎におこしやと、家内へ響く程な聲して出らるゝ後影、朱雀野の朝歸に日がたけて内入わるうこそ〳〵と、常著が火燵にかゝつてなうても、冷いなりに著替て、勘定場に吐息ついて居るとは、勢の違ふものぞかし。かくして毎夜寄る程に、若いも年寄も打込に、軍書の空覺えなる中老、碁將棊の強き隱居まで、先から先の咄の中に、一夜もかゝさぬ新町の有徳人、平野屋七左衞門とて、年ばい六十過ぎし客親父、蠟燭の費を厭ひ、暮れきらぬうちから來て、去にがけには人の提燈と連立ちて歸らるゝ。煙草入涕紙も人のをあてに、集錢出の夜食があれば、大事の用を忘れたと逃げて去ぬれど、振舞ふとさへいへば蛇の鮓でものがさず。是はよい所へ參りましたと、上座にすわり、御亭主御勝手は存ぜぬが替ましようかと、千枚張の頬の皮、憎まぬ者はなけれども、年に免じていひてもなく、銘々雪踏はき替へられぬ用心のみなり。ある夜雨そほふりて宵より風だち、誰もかれもいひ合はせたやうに遊人なく、やう〳〵衣の棚の袈裟屋墨五郎といふ男、七左衞門と只二人にて、何んとなう打ちしめり、利に入つた咄

斑足太子—身に翼生じ脚は鹿足の如く飛行自在なりと云ふ王
幽王の后—褒姒
白雲の飛助—漢武帝の秋風起白雲飛との辭にちなみて飛助となせるならん

諸道聽耳世間猿 五之卷

第一回 昔は抹香烟たからぬ夜咄

天竺にては斑足太子の塚の神、大唐にては幽王の后、我朝にては鳥羽院の上﨟と化したりしも、はては那須野の叢にかくれて、殺生石となりけるとや。それには事かはりたれど、人をとる事他念なき男、二條室町に店借したる川口屋磯右衛門といふ町幇間、呉服所の歷々へ心安く立入りて、年忘の執持、茶湯の勝手を手傳ひ、酒間の落咄に、腹をよぢらす輕口、とり付き引きつけ迂作が上手とて、川獺と異名をつけられぬ。世上は夏過ぎて盂蘭盆もいつしか暮れのけば、人も袷の肌にしつぽりと、夜は次第に長くなりて、御靈祭の囃子の稽古、月の夜すがら冷々と、何處やらのらぬ拍子のあるも、秋風吹いて白雲の飛助達さへ、今宵は氣も進まねばと、川東のしゆかうもじやみて、其連中四五人、磯右衛門が方へ仕かけて取〆もなき昔咄。兵法喧嘩の仕形から、狐狸の子供すかしを、かの川獺が口拍子に油を乘せての面白さに、每夜々々磯右衛門が方に市をなし

思はます鏡—思のますをかけたり

川竹—遊女

武陵桃源—支那湖南省にある仙境

丹竈—仙藥を作るかまど

ごとの逢坂も關守に見付けられじと忍ぶ程、なほ思はます鏡。見付けた所が深い緣、どうで是なら添はれぬ中、いづくの浦へも立退いて、一日なり共夫婦ぞと、廓を拔けて夜の雁、しるべの方に假寢して、京の友達に賴りゆき、つまらぬ戀の缺落を、かくまはれる氣かくまふ氣。一月あまりは過せしが、こゝへも尋ねて來るとの噂。いまは都の辰巳なる黃檗山の門前に、藁葺の一軒家。唐土が古鄕の名によりて、長崎御菓子唐饅頭の燒き賣りして、貧しき暮も川竹の浮節にかへての樂。俤のかはらで年の積れかしと、中のよいあまりの願ごと。仙家の丹藥に不老不死の歡樂を究むべしと、妻が覺えし藥拵、近き桃山の流こそ、武陵の人の迷道、桃源のしたよりぞと、丹竈をひらいて服するに、聾ほどもきかばこそ、夫は風の心地とて、ぶら／＼と病ひつけば、月宮殿へも入る所が、さしつまりての月がこひ、月に六日の勤のなかに、可愛い男が出來たのか、男の介病に倦いたのか、但は丹藥が利いて仙人になりもしたか、八月十五日の夜、月の明かなるに家出して再び歸らず。

きんくるべいこの云々—未詳

玉の緒もたゆる—死する

文花もなく—作り飾もなく

引舟—下等の女郎

もろこしが返事に　　きんくるべいこのきうらい〱

唐音にて其心はよめず。次に二句詩を賦したり。

青苔匪レ衣岩猶寒　　白雲似レ帶山不レ纏

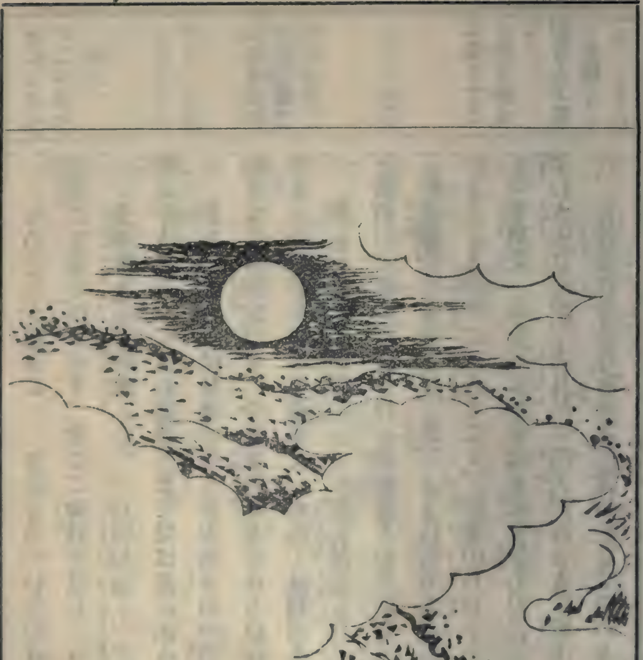
叶ふやうにてかなはぬ返事。よし助は思に沈み、其詩を和して又いひやりける。

苔衣きたるいはほはかたくとも衣々山の帶は解けなん

わりなくも戀佗びて、今は玉の緒もたゆるばかりと聞えしかば、夫程までわしを思うてかと、心根がかはゆうなりて、かへしは例のもろこし太夫、

與レ君相向轉相親　　與レ君雙栖共二一身一

と唐詩の古語になつた口、夢現ともわきかねて、手の舞ひ足の踏所を忘れ、それからこの逢瀬かしこの首尾、忍び〱に契りしが、唐も倭もどこへやら、後は互の實と實、いとし〱の外は文花もなく、傍輩の目口かわきに見咎められ、引舟遣手が付け廻はしての強異見。おまへばかりはと氣を許したに、是はどうしたつまらぬ惡性。全盛出世を望む太夫さんが、香具屋に間夫があると、廓中へ知れたら、お客もばた〱落ちましやう。此浮氣はやめたまへと、責めかけてのわりくどき。よし助も出入をとめられ、宵々



八文字—遊女の道中に足を八文字形にあゆむ事
王昭君—漢元帝の命に由り胡國に嫁せられし美妃
不興—勘當
しやくら商—遊び商

を押しておくれば、客は何んの事やらよめぬながらの負惜、斯いふ事なら其筈ぢやと、機嫌なほして來るもあり。たま〳〵小學文のある客は、あたまからなじるつもりで、太夫殿は日本の俗物はお嫌ひなさるゝに、やはり揚屋入は八文字ぢやが、あれは俗にござらぬかと打込めば、あなた方は書生さん方と見請けましたが、書法に疎いおつしやりかた、わたしが道中は八文字を踏返して、十六點に歩みますと答へぬ。この勤方ゆゑ、終に可愛いといふ男もなく、王照君が胡國の悲しみ、面白からぬ奉公と明暮思ひ暮らしける。出入の香具商人住屋吉介といふ男、もとは京の御所近き中川沖之進といふ歌學者の一人息子、若氣のならひとて、色道より親の不興をうけて、大坂へ立退き、紅粉白粉の荷賣、好の道とて遊廓へはまりこみ、化粧部屋のしやくら商に、ふと唐土が高尚になづみ、寢ても寤めても忘られず。折々はよそながら口說いて見れど、文言がつてとりあへねば、此儘戀に朽ちなんも本意なしと、心のたけを薄雪風のちらし文に、はづかしい事はかない事、筆の命毛くど〳〵としたゝめて、誂の詩嚢袋へ入れてやりけるを、唐土ひらき見て、口の文はよむに及ばずと、戀歌の上に下の句を付けてぞ戻しける。

よし助が文に　　枝たかきはなの木末も折れば折る

韻鏡―音韻の書

吉野折敷―吉野より産する盆類

は座敷へ出でて、立ちながら手を拱いて、中華の禮をなしけるゆゑ、客はすかさず合掌するを、もうし〳〵、それは天竺の禮でござります。あなた方は、やはり日本の禮を遊しますが好うござりますと云ひければ、客はうろたへて、ものもうといはれけるも可笑し。馴染重ねて逢ふ客に、おまへのお字は何んと申しますと問ひかけられ、字といふ事は知らぬが、替名は歌夕といひますといふに、それは文盲なお名。歌は柯也とて、枝葉に風の吹くを歌ふと訓じてよみます文字。又夕は月の字の半にて、月の初めて出る時は、暮に西に見ゆるゆゑ、夕を半月と申します。字義ではいつかうつゞかぬ文字でござりますと貶されて、然らば前の替名は鬼笑といふたが、それに仕らうといふを、いえ〳〵鬼は山川の神靈なれば、何をかわらひ給はん。いつかう熟字いたしませぬ。お前は性質御丈夫なれば、叔雄と御付け遊ばせ。兄御のあるには、叔の字を御付けなさるゝが字例でござります。韻鏡があらば序にかへして上げますにと、眞言寺へ行つた樣なかたつまる睦言に、客は氣をつまらして能名か知らぬが、醫者殿のやうなとむづかしがりて、それぎりに尋ねもせず。機嫌のそこねた客の方へ、血文誓紙は愚痴のいたりと、唐紙の二切一行に、妄心正斷絶、君懷那得レ知と、筆意を振うて書きくだし、吉野折敷ほどな印

亡八—遊廓

過ぎゆきければ—死にければ

文徴明董其昌—共に明の有名なる書家

ねむりめにて—くすめる色にて

粒金丹より高直な物なれど、利目のよき事又とない惚薬。亡八の親方も、今にては抱の太夫に茗荷の子を喰はせけるよし。京大阪の茶屋風呂屋が布袋の土人形をまつるのも、愛敬第一にうだしうなるを願ふゆゑとなり。世は移りかはる難波江の古言、よしあしとは妓女衆の位の事となり。新町の三筋に三の浦の面影残りて、磯臭き昔とは替徳な留壽楠の薫、桃が笑へば柳があゆむ。中に茨木屋の唐土太夫とて、つき出しの美人草。親はもと長崎の生れ、司馬忠庵といふ儒醫。不仕合より大坂へ引越して、おらんだ流の外科を仕かけしに、幾程もなく過ぎゆきければ、内儀は馴染なき土地にてすべきやうなく、ひとり娘のおらんといふを、三年切つて五十兩に苦界に沈め、われは女の按摩とりに、心靜に世を過しける。此おらん幼きより父親の勤學を朝夕に聞きなれ、女子には珍しい博學、手跡も明人の筆意を得て、文徴明、董其昌が骨肉を書き、名も唐土と付けて全盛はすれど、いまだ親の喪中とて、衣裳の物ずきも一きはねむりめにて、上着は鼠縮緬に五岳の眞形の五所紋、黄緞子に印譜の繡帶。襲は淺黄繻子に蘭亭の盃流を肩裾の摺箔。水櫛の梳鬢は片々たる行雲に似て、桂のひき眉は纖々たり。我つかふ禿の髪も鬢づらを結ばせて、名も蛾眉少女と呼び、揚屋の花車をお幸夫人と稱し、初對面の客に

瓜生の連に茄子はならぬ—瓜の蔓に茄子はならぬ諺をかけたり

上東門院—藤原彰子

小野お通—淨瑠璃十二段草子の作者

ば、皆々始めての見物に肝を潰し、如何樣比叡の山を二十ばかり重ねしとはよう書いたぞ。聞きしよりも見事な山の姿。瓜生なんと此山の裾を二三日も通る事かと問はるれば、いえ／＼、此樣に見ゆれど、海道の間は富士三里とて、わづか百五十丁程でござりますと、取つてもつかぬ間に合せ。箱根の關は手判がなうては京へ戻ると、道中雙六で覺えた學文、五十三次はたき散らして、おどろき蟲の俄病。是はと皆の介抱に京までの通駕。肥えふとつた二十四貫目、宮川町のあがり口まで、三枚で金七兩二歩三百文と、足元見られてもしやう事なし。瓜生の連に茄子はならぬとは、此時よりのたとへとぞ聞きし。

第三回　公界はすでに三年の喪服

晉の王羲之が師匠は衞夫人といふ女寺屋。此國にては上東門院の上臈達、源氏、枕草紙、榮花物語の作者、近くは小野のお通が筆力、どれも／＼賢過ぎた言がら、少々の男は尻に敷きさうな嚊達。當世は傾城とても、心たらはぬ方が繁昌する事は、無理いうても腹立てても、言譯ひとつ口説の切もり、出來ぬおぼこが零さす涙、一雫が四匁花、一

どうはれ茶屋―山科十禪寺村の餅を賣る茶屋
げんこ取の餅―五文取の餅
ほいつけて―おしつけて
神おろし―神靈を請じて祈禱する事

し出るやいな、山科のどうはれ茶屋で、此げんこ取の餅はなんぼぞとはたき初め、桑名の渡でごまの灰に、秋葉御夢想の藥を金一歩で賣付けられ、富士見が原では駕のうちから、いつも日和がよいと、こゝから富士が見えると咄しかくれば、前肩舁いてゐる男が、旦那は度々上下なされますかして、よう知つてござりますといへば、跡方の親仁が冷ら笑ひ、よう知つてござる筈ぢや、駕の中で道中附讀んでござらしやると、ひどい所を見付けられて、氣ははり弓の矢矧の橋で、向うから馬追うて來るを、右へよけて待合はす。其方へ馬ほいつけて、やい上方の白瓜野郎め、馬のよけやうさへしらずに、此海道を大手ふつて通りをるか。胴腰馬にふみ折らすぞよと惡口せられて、あの馬士めも酒くらふやら、左勝手へ追ひをると、行く先々を口先で、大井河は海道一の晴軍。こゝではなんでもやつてくりよと、一杯引つかけて頭ごなしにいて見れど、一目見ても遣る物が京の下水溜でさへ水が出ると騒ぐに、およそ一里の川幅に氣を呑まれて、強いことというて居る口のうちには、南無住吉大海神樣、天神樣、金毘羅樣と臆病の神おろし。そこへつけこむ河童共、尻の穴まですひとられ、七十川を一人に十人前づつ、まだしも不入は、浪人ゆゑ挨拶やらひら詫で無難に川は越えぬ。行き〳〵て駿河の國富士の山にいたりぬれ

大盡—分限者

そゝらるれば—うかるれば

三度笠—貞享頃飛脚のかぶりし笠

つたもおぼえなんだ。親仁はどこへじや。いえ、たつた今丁子屋から呼びに來ていかれました。鯉長どんの給銀のあやぢやさうにござります。もう歸られます。まあ、奥へいきなされと、燈を點してはや持ち出る盃は、あひも變らぬ富十郎が江戸土産。棒鱈のこごりで飲みかける所へ、瓜生戻りて、いや御出。今丁子屋の親仁めに一服盛てから、直に樂屋へいて稽古見て來たが、何でも今度は請けたわいな。今七めがよう仕をる。しかしあの場を前の音右衛門にして、喜代三がする所を春水あやめで、團藏が役を親榊山で見たら面白かろとは素人の評判、くろとの幕のうちさして、かはりもないものなり。四塚大盡芝居咄に現を拔かし、來春はこの連中で江戸の二の替、今團十郎見に下らうぢやあろまいかとそゝらるれば、瓜生おほきに悦び、こりやきつと行きたい。柏莚や助高屋にかた〴〵下る約束した。また道中はさす物ぢやない。あの街道ばかりは、始めてなら慘い目にあはしをるぞいと、馬駕のこなし自慢に、いかさま瓜生は度々下つて咄なれば、道中案内に同道しやう。そりや有難いの薄約束が、年改りて彌生の空、四塚屋の東下。連は不入と瓜生に定め、都をば霞とゝもに明六つ立ち、瓜生が出立は一番の三度笠に大津脚半、濱松の草鞋がけ、五十三次一とまたげの御七里仕立。酢でさすやうにいひちら

損かけなぶして―損をかけ嬲りて

尻くらへの仕うち―恩を仇で返して顧みぬ仕方

くろとがる油―通人がる油蟲

鬼日―大晦日

一山越した理窟―更にうは手の理窟

黄金佛―富豪

で來て、おりさを伯母さまあしらひに、涼の間の色事を呑みこんでもらひ、瓜生がいふことをぢり〱として怖がり、酒代鍋燒の取替銘々二三十匁づつ損かけなぶして、江戶大坂へすつぽぬけ、いかに野郎とて尻くらへな仕うちぞかし。入込む客は京中のわるざれ息子、天窓から足の爪先まで、當世につくりすまし、鳥又の鶩さへ寒がつて出ぬ朝の間から川東を飛びめぐり、この玄界谷へ陷込みて、役者の名も小太の嘉七のと、番附にない名をいうてくろとがる油。それ程役者が尊うもなけれど、有やうは我買ふ女郎藝子の間夫吟味、みづから犬に入つての心づかひ、思へばやるせのなき事なり。此若衆打寄つて拂の銀高を見合ひ、どこは遣らいでも瓜生が方ばかりはと、銘々高步の死一倍。女郎の櫛の無理借、此節季は仕廻しが、又來る鬼日の談合も同じせりふをいひ出せば、中から一人たつて、よう思うて見や。瓜生も同じ茶屋ぢやぞやとは、一山越した理窟詰。其から無論の先生家なり。明日は北側の二の替が出る。宵から瓜生で飲明して直にいかうと、下京での黃金佛四塚屋五郎右衞門に、付添ふ幇間は我物不入とて、底なしの酒如來。どや〱と來迎あれば、おりさ立出で、是はどなたもようお出でだ。よう此間扇九からお歸によりなんだなあ。一鳳が告げに來ました。さあ其晚はえら酩酊で、駕に乘

踏みたんだく―踏みしだく
ぞつこん―非常、頗

條の櫓幕、眞葛が原に染めあげし、顏見世の春げしき。年々の上り役者、霜さきの冷めたい銀を、誰は今年二十五貫目で南側へすんだけな。北側の江戸役者は七百兩ぢやと、口にほうばる高給銀、嘘かと思へば、見ては無理ではないぞ。唐織の尻からげに、それなりの泥仕合。女形は所作事とて鮫蒲團より見事な襟數、くるりと廻つて一つ脱ぎ、飛びあがつては一つ脱ぎ、繻子も緞子も踏みたんだく。三保の浦へ下りた天人さへ、一尺二十匁切の伊勢講の曠著ぢや、戻してさへ下さるならば、尻まくつて三べん舞ふと泣いたではないか。それから見れば尤な給銀なり。其尻から思出した東寺邊の生れの男、眞桑瓜程ふとつて居れば、ある名は呼はずに、瓜生と名付け、ぞつこんの芝居好。夕顏の宿ならぬ宮川町に、小家を借りてちよつこと座敷一間、二階も奇麗にしつらうて、所からの建仁寺垣に、海老藏が發句の紙表具、打出しての茶屋ではなく、芝居眞黑の天狗共が、二の替の趣向を三十日前からの評判、がく屋見舞の泥龜のたき所、女房おりさも加茂川の水に灰汁の拔けた粹の果。役者も爰へ入込まねば、評判をわるうしらるゝが嫌さに、打ちとけて念比分。餅つきよ、あたり振舞よと呼びあひ、女夫喧嘩の挨拶、節季の拂の工面までの談合相手、若い立役、制外の女形は淸水の朝參の戻、役場仕舞と飛ん

鳩の杖—老人の杖

三箇の津—京都、大阪、江戸、

旦—若女形

末—實惡

丑—敵役

淨—道化形

ほんじやり—踊、芝居

現あれと、斷食にて責めつければ、本尊もほうと困らせ給ひ、ある夜の曉に鳩の杖もつかず、著のまゝにて枕に立たせ給ひ、微妙の御聲高らかに、善哉々々、牛若丸、汝に兵法の奥儀を傳へん。それ地獄遠きにあらず、極樂はるかなり。急げ〳〵と、あかぬけのせぬ御告に、いとゞ迷の種とぞ成りける。

第二回　評判は黑吉の役者付あひ

笙は鳳凰の聲、笛は龍のなく音ぢやとは、誰が聞いてのたとへごと。よしそれにしてから鶯松蟲のしほらしみもなし。音樂は太平の調子、鼓三絃は殺伐の音なりと、ある學者の片意地。それもへち物好にて、誠太平の遊事は、三箇の津の芝居より外あるべからず。日月は燈、江海は油、風雷は鼓板、天地人は一大の劇場、堯舜は旦、湯武は末、操莽は丑淨、古今來許多の脚色とは、大淸康熙帝の殿上の柱に書いて置れたげな。天地の大芝居で、堯舜は坂田大和山が溫潤、湯王、武王は小佐川柴崎がいきごみで、曹操王莽の惡人方は藤川武左衞門でなければと、唐の帝の芝居好。我日の本は神風や出雲のお國がほんじやり仕出し、名古屋山三が立髪風、花の都の川風に、袖打振りし昔より、今に四

變り行く物にぞありける古今集にあり

つゝもたせ—色に托して金をとること

世人皆濁る云々—楚屈原の漁父辭にあり

首陽の蕨—伯夷叔齊の故事

知識—高僧

一二月にて三條口へ宿替すれば、博奕の盆家、ねたれ者、喧嘩の相手を切つたのと騒しさを聞くたびに、人外の交するがかなしやと、其後そこにも住みかねて、世人皆濁る、我ひとり清めりと、水洟たれて小うさんにさまよふを、別家の手代が聞付けて、兄伊左衛門に段々の訴訟すれば、憎い奴ながら一人の弟、殊に母の末期まで苦にしられたる詞、かれ是を思うて、月に百目の合力を遣はすべし。其方達うち寄つてよきに支配してやるやうにと、ありがたき兄親の慈悲。伊兵衛はいよ〳〵癇癖強く、穢はしや聞きともなや、心のむさき兄が養、首陽の蕨は喰はじと、猿澤の池に耳を洗ひて、どつちへやら行方知れず。別家の者ども驚きて、方々と尋ぬれど、難波で聞けば伏見とやら、大津で問へば堺にと、行く先も〳〵付合ふ人が氣に入らず。最早浮世を捨衣、ごつそり剃つて靑道心。よし野の奥に取り籠りて、

　屎ふむやあまりに奥の山ざくら

と、むかしを悔いての獨ごと。猪小屋程な觀音堂の住居にも、まだ根濟のせぬ事が氣にかゝり、とても沙門の身の上には、極樂世界八苦の地獄がある事かない事か、此傳授が濟ましたいと思へども、尋ぬる知識もなきなれば、御丈二尺の木佛に、夢になりとも示

たり
てゝくり―ちゝくり、馴れ親む
うつぼ物語―平安朝の小説作者未詳
ぼいまくれ―追出す
過ぎ行く―死す
稻おほせ鳥にして―負はせてをかけたり
飛鳥川―あすか川淵にもあらぬわが宿もせに

天に任せて許さぬ潔白が氣に入つたと、うつぼ物語に首打振りては、お妾が鼻のさきで在宮の神子見るやうに舞ひ〳〵すれど、首筋が白いとも帶の結び下げが可愛らしいとも思はず。何がな云ひよるよすがにもと、山吹の薄出端を汲んでさし出し、笑顔つくりて、今もじは朗らかな空に、徒歩も遊ばさず、御氣つまりなお慰。御歌でも御詠じ遊ばすかと寄添へば、伊兵衛目の玉をひくりかへして、其儘煮え茶を女の面へざんぶりと打ちつけ、こいつなめ過ぎた、おれが歌よまうがうぬらが知つた事か。又しても目の先を百度參する程舞ひつきをるさへあるに、手代共この女郎め、ぼいまくれと、抱へて寢る所か、生爪はがして山の薯蕷ほりさうな勢に、とつてつかう島もなく、お母老は明暮これを苦に病んで、程なく過ぎゆかれたれば、いよ〳〵兄弟中疎くなり、物事ひだり袵になれば、内藏の箱傳授もいつの間に空殼となりて、手代共が引負も筆先で旦那へ稻おほせ鳥にして、よい顏で隙とれば、いつしか鹽尻がつまらぬやうになりて、家屋敷も賣拂ひ、帳切の席より伊勢が飛鳥川の歌を吟して、般若坂の邊に小家かりての侘住居。三分筵の相借家には、うつぼの俊蔭に似た人があらばこそ、業平の密夫がはやりて、押へたのつゝもたせのといひ事止まず。近所鄰に物いふ事もうるさく、こゝにも

つまらぬ身上—及ばぬ身の上
佐藤則清—佐藤義清ならん
ほつとり者—美女
とやかくや姫—兎や角と赫夜姫とを通音させ

らぬもの、彼方此方から似合の縁もいうて來れど、是までとりしめて談合も仕やらぬは、どうしたおもわくぞ。一日も早う呼びむかへて、初孫を抱かしてたも。第一母への孝行と詞を盡していはるれど、伊兵衞中々聞入れず。母には風流を遊ばさぬゆゑ御合點がまゐらぬ。妻子に足を繫がれては、諸道共に成就いたしがたし。古の名ある人は、皆家を捨てゝ剃髮し、歌枕修行せられました、既に佐藤則清が西行法師の類あまたある事なれば、私も兼ては歌枕の行脚の望でござります。人は一代名は末代、虎は死して皮を止むと、禽獸すら心なきにあらず。緣邊の事は御免下さるべしと、更に得心の色目もなければ、兎角是は手廻に美しい女を遣はさば、自然箸のかゝる事もやと、京奈良中を吟味して、年恰好十七八のほつとり者、竹取の翁が百目つけて貰うたやうな器量よしを傍近くつかはせ、朝夕の給仕寢道具のあげおろしに、思ひつかるゝやうにせよといひ含めて置かるれば、此女も氣に入つたら、本妻になることゝ、髮かたちはもとより詞遣立居まで、とやかくや姫の立振舞に、色々と心をつくせど、伊兵衞は一心不亂机にかゝり、兼好がつれ〴〵はよう書きたれど、おのれは伊賀の成仲が娘をてゝくり、又師直が艶書の下書してやりしなど、あるまじき不埒者。淸原の俊蔭は一人娘を方々から貰に來れど、

宗長―宗祇の弟子連歌に名あり天文元年歿

御寮人―令孃

髭に油をもつけられしかど、わたり奉公の奴めきて風流ならずと、香をとめられたるよし、宗長が書ける傳書に、さだかに其由をしるしましたと、につこらしく云はるゝを、伊兵衛甚だ感心して、珍しい祕說を承はつた。それでよめた事がござります。町家を往來いたして見ますれば、小間物油などを商ふ店に、髭油と申す看板をしるしましたは、宗長の書を出處にてつけました物と、初めて心が付きました。わづか小間物を商ふ者すら、かゝる風流をいたすものを、我等が只今までのおこたり、恥かしう存じまする。其傳書も御傳へなされ下されませ。まづ書の標題は何と申しまするると尋ぬるに、宗匠ぬからず、されば書の名目は志賀の湖と申すが、白髭の神に思ひよられしと見えますと利口せられぬ。かくて風流に苦みて寢食を忘れ、三十に餘れど、未だ女房の沙汰もなく暮らさるゝを、ひとりの母御が心濟まず。兄伊左衛門と談合すれば、はてほつておかしやりませ、女房持てと勸めたとて、あの奢ものが又高尙ばつて、町人百姓の娘は育が賤しい、公家衆の御寮人がな貰はうといひましよ。とてもつまらぬ身上、子一人持たぬ昔とあきらめて、何事も御世話は御無用と、塵灰つかず取りあへねば、猶更に心落附かず。弟伊兵衛を呼びつけて、其方もいつまでの獨寢ぞ、人の家には眞柱がなうてはつま

言として用ふ

花の本―連歌の宗匠の號、宗祇法師に始まる

古今の三鳥三木―古今集の祕事

勢語―伊勢物語

賄、諸國の出店へ卸荷の世話注文の懸引、目づらもあかぬ抓みどりの繁昌。若草山に櫻が咲かうが、木辻に夜芝居がはじまらうが、敷居一寸外へ出でず。春日樣は慈悲萬行の御誓願なれば、商人の爲にならぬ神樣と、御祭にも參つた事はなかりけり。弟の伊兵衛は兄の氣質とは若干の違にて、生得の廉直より迂作つかず追從嫌にて、身持萬事に高尙を好み、兄の吝嗇を憎みて、常々なかよからず。春は飛火野に若菜摘くらし、夏は佐保川の螢狩、洞の楓樹に小鹿の鳴音を添へて秋を感じ、寒き夜のあられ酒に、冬籠して世事にかゝはらず。今春太夫につきて扇の一手より芝能に羅綾の袖をひるがへし、連歌は京の花の本に入門して、風流もつぱらに修行せられぬ。此男の癖にて何事を稽古しても、最初から論がつき過ぎて、無要の事に念を入れて金銀を積んでも、傳授といふ程の事、さらへてしまはねば氣が濟まず。古今の三鳥三木、源氏物語に三箇の傳、勢語に七箇の大事と殘りなく傳へ得て、宗祇法師の鬚に香をとめられたは、連歌を案じる便になる事にや。もし左樣ならば、私が髭も延して炷きしめましやうかとの執心に、花の本も返答にさしつまり、いや〳〵、あれは其やうな事ではござらぬ。宗祇は歌枕に飛廻られたゆゑ、旅籠屋の蒲團のむさいから、蚤虱わかすまいための用心であつたげな。以前は

因幡鴉に伯耆猫—因幡人の言語は鴉の如く伯耆人は猫に似たりの義

握り墨の吝人—握り墨は吝嗇の縁

諸道聽耳世間猿 四之卷

第一回 兄弟は氣のあはぬ他人の始

神州五畿七道に分れてより、都鄙の文言に其土地そなはりて、因幡鴉に伯耆猫、伊勢人のひがごといふと詠める歌あれば、山城の人は八十宇治つくともいへり。國々郡々にてちがふ筈は、一つ竈の物喰うてさへ、いひごとの絶ぬならはせなれば、人の心同じからざるは、其面のごとしと、いへるもさる事なり。中にも足曳の大和の國は、文字にさへ大きに和ぐと書いて、土あまく山肥えて四神相應の地なれば、皇都もあまたゝびこゝに遷し給ふ。人の心すなほにて、假にも僞をかざらず、上を尊み下を憐み、行くものは道を讓り、耕すものは勞を助けあひて、花の吉野、紅葉の龍田、何に不足なき上國なり。むかし〳〵の京寧樂の町に、鵜飼屋伊左衞門、伊兵衞とて、色も香もある墨商人、軒を並べて兄弟住みけり。兄伊左衞門は幼少より世渡の心がけよく、商賣からとて握り墨の卑吝人。親の讓とは三挺がけの身體にして、手代十人、僕兒七人、家内三十人餘の大

愛想も月の手長猿—愛想もつきたる盗人の意

惣嫁—夜鷹

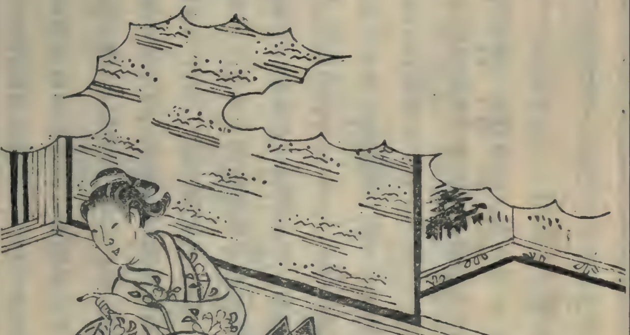
留主のうち、文庫をあけて穿鑿すれば、藥入、香包、小柄、印籠、煙草入、小玉銀四五十、壹歩二十切、蓋のならぬ程おしこんであれば、あきれ果てゝの強異見に、當座は聞いたやうなれど、目のゆきやすい閨のうち、愛想も月の手長猿、尻からはげてくるなれば、迚もなほらぬ根性と、見かぎり果てゝ長のいとま。京の親へも聞えたれば、内へもどるな、勘當ぞと涙を墨にすりまぜて、憎しくのひとつ書。廣いお江戸に住所あらしの夜半も雪の日も、布子一單寒晒し、あはれいにしへは翠帳紅閨にいとしがられし尻の穴、心からとてすぼまりし、肩身もせばき浮世やと、棒藥より辛きめにあふも此身の鏽刀。往來の人に袖引きて、兩國橋で若衆の惣嫁、牛若ならで馬若衆、今宵で丁度千人の情もうすき端錢、引きとめられて提燈の明にちらと見た顔ぢや、たしか堺町の五郎市と、立ちもどりしが氣が付いて、腰の巾著あるかと見れば、南無三はや仕てやられた。

宮川町―かげまは京師にては宮川町と嬉遊笑覧に見ゆ

堺町―陰間看板堺町と三杯機嫌にみゆ

庚申の夜―諺に、庚申の夜に孕む者は盗心ありといへり

と、おこりちらして歸りける。扨此宇治江が卅四五の頃庚申の夜、祇園町の一力で、大寄の雜魚寢に、鬼若の辨藏といふ幇間にくどかれて、たつた一度で其種を孕み、産落せしは玉のやうな男の子。なぜに置いてはこんなだと、悔みながらに育てしが、生先ことに美しく、十一二より舞と三絃を仕込みて、名は石河五郎市と付けて、宮川町の四匁花。よい子ぢやと評判よく、江戸の親方が百兩に飛び付いて談合すれば、一人子ながら又出世の種にもと、十五の春より江戸へ下しけるに、堺町でも見事な繁昌。傍輩の子供を賣りひしげば、親方も近年の銀箱と、朝寐してゐる尻の方へ燈明あげて、南無高野大師遍照金剛とぞ拜みける。されば庚申の夜に宿る子はと、下世話にいふにちがひなく、此五郎市とかく手癖がわるく、客の寐入るを考へて、洟紙袋の中を探し、一歩小玉銀に限らず、目についた物をはづしければ、寐ごきが沛の客衆も、度かさなれば氣が付いて、朝歸の臺所で亭主に囁きて、子供の事なれば、あながち慾でもあるまいけれど、かう〳〵した事ども、段々と肝の太らぬうち、親方に云はしたらよからうと、内證いうて歸らるるに、是は怪しからぬわるい病。捨てゝおかれぬ品ぞと、手紙での付屆。彼處からも此處からも、何がないかゞないと、一犬吼ゆれば百軒の噂。親方大きに驚きて、五郎市が



妓交―遊女通ひの義

百歳に一とせ云々―百年にひととせ足らぬつくも髪吾を戀ふらしおもかげに見ゆ

誠に名うてのすつばの皮―眞に取るに足らぬ奴

こそ、かうしたはでな勤を致してをります。墨に染めても、お心に色香がある故の妓交、なされますのでは無いかえなと打ちこまれて、二人の僧起きなほりて、それは地水火風空の五つは人の體。心は變らぬと云やれども、像も聲も變るからは、若い妓衆と一口に、現世利益はあるまいと、疊叩いて詰めかくれば、いえ〳〵、それは猶不粹、すでに業平さんは百歳に一とせたらぬと詠みて、枕をかはさんしたを、世の戀知りとはいふではないかえ。顔の美しいも外面如菩薩の戒あれば、耆けたとて若いとて、戀に染れば戀衣、一念發起菩提心、色も心、無常も心、いくつに成つても藝子はけい子でござんすと、いひまくられて、ぎつちりつまり、さあ其菩提心があるならば、其年で藝子はせぬ筈ぢや。はでな歌うたふより、念佛の一遍も申すが順緣といふ物ぢや。それも逆緣なりとうかむでござんせう。そんならこちらが斯した遊も、成佛得脫するやいかに。なる程あなた方の墨染も、今宵の座敷の戀衣、女郎の手管も佛の方便と、聲あらゝかに罵れば、誠に名うてのすつばの皮、背中の兀し藝子やと、僧は天窓を掻き〳〵、あのげい子迎が來たら去なしてたもと云はるれば、宇治江は猶も腹たてゝ、

川竹の勤なりやこそあしからめ嬶なら何にがくるしかるべき

十嵐の製する伽羅油
外科―醫者
花車―青樓の新造、鴇母
關寺小町―長唄の曲名
はんなり―花やかなる

ひやうのなき風俗。東石垣の井筒屋に山もどりの年寄客、色氣は有つても肝心の所が間に合はず、わつさりと一つ飲まう、どれぞ舞子をと物好けば、お客の年には相應と、花車が差圖で宇治江を呼びに走らすれば、いつでも内に入まいの惡い舞子、呼びに來たか、えい〱と疝氣さすつて衣裳に著替へ、足もとがあぶないと、中風の用心に弓張提燈、おくらるゝ後影のいぶせさ。座敷へ出るといな、客は興さめて、こりやどうぞ、今日は珍しい三年ぶりの色遊に、皺延にこそ寄つたれ、皺くらべには來ぬ。是なら宿へ歸つて婆と寐酒で樂しみましよと、盃さし捨にいなれける。宮川町の丹波屋で、三味線繼いで本調子に合はせつゝ、歌「はづかしや、人の恨のつもりきて、賴む物には竹の杖、泣いつ笑いつ物狂ひ」と、關寺小町を謳出せば、客は智積院の出家達、よう〱うたうてうたうて、長橋の局へ綸旨受けに行たやうなとの惡口に、一人の和尚が是々老女、そもじが謳ふは、小町が年寄つて物もらひになつた文句、こなたが彈くと、正眞の小町が出現したやうで氣がめいる。何ぞはんなりとした物をと望めば、宇治江少々むつとした顏、不粹な事をおつしやるお方々、歌によそへて年寄をお嫌ひなされますれど、たとへ深山の朽木でも、花さく春もござんした。わたしも盛は過ぎましたれど、心の花がかはらねば

の横倒—金を得んとする無法

市字賀の伽羅煉—京都三條市字賀繩手なる五

案じ暮の上なれば、猶更濟まぬと氣をもんで、手代を迎にやらるれど、二日三日の居つづけに、腰拔かされしみたれ後家。あのやうに云うてなら、まだ四五日も去なれまい。息子の手前もよいやうにいうてたも。お居間にそつと囁いて、櫛笥、鏡臺をおこしてたもと、どこまで白痴をつくも髮の恥白髮。漸く佗言たら〴〵で、一廉のあつかひ代、竊にすめと思へども、世間一ぱいこれ沙汰。こんな母親を持ちし身は、札よき鎧に五枚兜を著てあるいても、突くやうでさすやうで恙蟲の穴へも入りたかるべし。それとは事かはりたれど、京の智恩院の古門前に、辰巳屋宇治江といふ舞子あり。ちよつと聞いては好しい名なれど、三十年前はよい女房でもありし事か、ことし五十にあまれども、心ばかりはうら若み、ねよげに見えねば是までに片付もなく、兎やかくするうちに、百歳の半婆となりしが、幼少より縫くよりに疎く、今更針の穴も通らぬ年で、裸人形の服も縫ひならはれず。いつまで草のうか〱と、やはり宇治江で舞と三味線。每日の鏡立に向ひて、頭の白くなるを悔みながら、其を市字賀の伽羅煉で、きんしやうきんしやうの大吉髷のと、鰹節編んだやうに結立てゝ、腰に梓の弓をのしきり、幅廣繻子の三重廻、吉彌結に金絲の房たつぷりと、塗下駄に青天井の日傘。夜目遠目にも、女の外科とよりは言

逆馬に入ての—逆になりての

銀にする氣

ちやすに暮すもの、親の光は七光。大津八丁の勝劣散とて近年の仕出なるよし。

第三回　雀は百まで舞子の年寄

おそろしき物、老の化粧師走の月と、近松門左衛門が筆まめ、トラヤア〱といふ唐音も、今は昔と成りけらし。されば女は髪容といへど、よい年な後家の逆馬に入つての氣嗜、きはめて其家には、加賀の繻袢著た出頭手代があるものなり。連合の末期に泣きくづをれて、髪尖切つて棺へ抛げこみ、付いてもいきたいやうに歎かるゝ内儀の、もの一年と持ちこたへのしたは珍しい物ぞ。子を思ひ家を思へば、髪切るとも尼になるとも、一家の差圖遺言の趣、其をかまはず早まるは、皆徒者の癖ぞかし。去る富家の後家御が六十にあまる十筋毛を、九萬里に羽をのす大鵬ほど髩出して、紅粉白粉を皺にすりこみ、つくりすましての墓參、和尚樣の精進料理がくひたらず、寡住の達者づくりに吸付けて、花見芝居にかこつけ、臍の下の岩清水をかへほせば、彼まめ男は三界のならず者にて、ある夜の出合から我内へ引込みて、今日より女房にするから去なす事はならぬと、銀にする氣の横倒、世取の惣領は生れたちの實體者、常々母の身持をば、世間の口へ手をあてゝ

代物―代金

まや藥―まやかし藥

居なし―すまひ

には神妙の藥能、其外萬病に用ひて功を見ずと云ふ事なし。かやう申せば、いづれも樣が、其やうに何病でも利く時は、世界に醫者は入らぬものかと仰せられませうが、如何にも當時町方の醫者衆が銀口入、嫁入の仲人、茶屋文の屆處、初日棧敷の使なさるゝ方方の醫案の藥召上らるゝは、必竟追剝ぎ原へ螢狩にござる同前。しかれば手前の勝劣散は諸病本服功驗の外心を用ひず、人を救ふに他念なければ、お立合の方々は、藥の功能御試みの方々は、代物お持合はせがござらずとお召しなされて、如何にも此藥はあの者が申した通、たちまち功を見たと思召さば、又々藥お召しなさるゝ節、其代物を遣されませ。家傳名法勝劣散、はり〳〵とう〳〵と輕業の口上、拍子に間にあひは云ひ次第。元よりまや藥にもあらず、呑んで功を見るもの多く、日まし夜ましに賣りひろめて、次第に手前よろしく、古郷なれば、大津八丁札の辻に、五間口の屋敷を求めて、店つき花々敷く飾りたて、見世物士から引きかへした出世とて、屋根に金の麝香を目印とし、諸國の出店町々の取次所、岡目からも二三百貫目の居なしにて、純子縮緬の常服太に金拵の小脇指、小坊主の僕兒つれて、石山、三井の花に明くれ、此身になりても零落には、長町の宿なし住居。四も八もくはぬとて、名を大津屋四茂八と改めて、世をう

そと致したる者—ちよつと身分あるもの

方劑—藥の調合

剃下の奴—髮を三日月形に後方にそり下げたる奴

の外相を損じめされたと云はるゝに、三平肝をつぶし、是は不思議。何を隠しませうぞ。私も元はそと致したる者の悴、心から落魄れて、わるい身過を致してをります。今日は大坂の長町へ見世物のもくろみに下ります。かやうな事を致しますも不孝の罰と、今思ひ知りました。どうぞ人らしい身に成りたうござりますが、何を致したらようござりますぞ。ついでに御覽じて下さりませと頼めば、怪異に惱む所の相がそれで知れました。貴樣の相も學道がひらいてあれば、そろ〳〵醫でもめさるゝか、藥店なども良うござらうと、いはるゝから心づきて、大津の親元の打身藥、よう賣れた老舗なりしを、今は過ぎゆかれしと聞けば、跡はどうなりし事やら、何でも大津へ是から行て、家主にたより、其方劑を吟味せんと、俄に思入がかはりて、船頭牧方へつけて下され、寄る所があるゆゑあがりますと、人相見に一禮いうて、伏見へ取つて歸し、大瓶谷を大津へ出でて、八丁の親里針屋耳助方へ行きて、段々の不埒を申しわけの嘘八百。世帯道具醫書ともに乞受け、打身藥を調合して、荷物立派に飾立て、剃下の奴にかつがせて、大津より京、伏見、淀、鳥羽の端々まで、足かぎり口に任せて白聲のひねり口上。手前家法勝劣散、功能の儀は、第一打身、脚氣、立ぐらみ、中風、痲痺、痲木、一切不順の妙藥なり。別して産前産後

貰はかして
—寄贈して

り、ふつと思付いて、其猫わしに貰はかして下されと、引きさげて戻るや否、燃えあがる柴火の中へ投りこめば、苦しさのあまりに飛びあがるを、打ちこみ投げこみて、髭も毛もさつぱりと燒きはらひ、口押割りてはり木をかへば、きやつとばかりのなく音も出でず。それを剝金の網へ退ひこみて、さあ〳〵此度紅毛から渡つた生き麝香はこれぢや。正のものを生でお目にかけると、わめき散して、一兩十四五文の五種香をめつたにくゆらすれば、是に珍しい生きた麝香は今見はじめぢや、併しとんと猫に毛のないやうな物ぢやと見て居る内に、口にかうたる木が拔けて、一聲ニャンチと鳴きしかば、見物は可笑がりて、此麝香の名は三毛とは云ひませぬかと大笑にて、それからは虻もたからず。是ではいかぬ。大坂の長町へ下り、何なりと計畫んでと、翌朝晝舟に飛乘りて、錢儲の工夫にこり、うか〳〵と煙管咬へて居る乘合に、五人前借切りて家來一人挾箱一荷の旅人、卑しからぬ仁體なるが、三平が顏をつく〴〵見て、貴樣は何處でござると尋ぬれば、わしは京都の者、急用にて大坂へ下りまするといへば、されば先程から其許の人相を見て居まするに、天晴秀才出世する人なれども、只今の産業何めさるゝか知らぬが、妖怪に心神を破らるゝ相が見ゆるによりてお尋ね申す。●天性人の下にたゝぬ身分なるに、殊

しこり博奕—熱心なる博奕

ちやるめら—支那の樂器

阿彌陀池—大坂和光寺内にあり

しこり博奕に、親方の手前二三貫の仕過し、爰にも又居られぬ首尾、生れ付いた口松に宿引の間にあるがしみついて、張儀蘇秦のやりばなし。舌一枚あれば世界は樂ぢやと、一日暮の胴がすわりて、輕業の口上に雇はれ、天王寺の彼岸中、太夫は長崎仙人鶴之介といふ一本綱の名人、小家がけ高く初日からの大入、喇叭、ちやるめらに三味線を合はして、三平は二挺太鼓のうちまぜ、柿の袴の肩衣ばかりにて、東西々々〳〵、扨まかり出でられましたが、此度の太夫、長崎仙人鶴之介と申しまして、御當地はじめての御目見、最初仕つりますが、懸わたしました一本綱の上にて、式三番叟の一曲、次に花傘居合の一手、達摩大師座禪車、獅子の洞入、鶯の谷渡、猿の木のぼり、大津馬の追がらし、跡は四本綱渡天の一曲、はり〳〵とう〳〵と聲はり上げてしやべりちらせば、輕業もようするが、口上が上手ぢやと近年の評判。そこを仕舞うて阿彌陀池の開帳、天滿天神の境内、京の四條河原の涼にて、太夫仙人鶴之介京女房の脛の白きに通を失ひ、山雀の逆おとしに落ちて眩暈して跡のどよみ、まづさしあたりて間に合はねば、涼の間の大設を取りはづしてはなろまいと、俄に見世物のもくろみ、思はしい支離もなく、どうせうと思案の最中、壁鄰の油屋の絞を働く男が、盗猫を引きとらへて借屋中わめき散すを聞くよ

札の辻の雲助―官の制札の立てる辻にをろかごかき

出女―お晒落とも書く賤しき遊女

所なき不孝ものゆゑ、家出のなりに尋ねもせず。子のない昔とあきらめて、一代切の了簡なれば、幸に療治もはやらず。されど仕舗の打身藥一服廿四文づつ、札の辻の雲助が、日の岡峠をふみくぢつたが、あの藥でよかつたといひ觸せば、矢橋の船頭が舟がはで突腕した痛が、一服で愈かつたと悦ぶ取沙汰、誰いふとなくよう賣れど、老人夫婦が手ずさびなれば、賣切す事のみにて、いつ鍋釜の賑ふ事なく、目の見える蟬丸夫婦、知るも知らぬも哀とや見ん暮成りけり。されば年寄と紙袋は入れにや立たぬといふ譬、腹淋しい事も有りしにや、女夫二三日隔てゝ死なれければ、家主の針屋耳介頼母しい男にて、跡懇に取りたいて、家出の息子が戻つて來る事もやと、破れ道具醫書四五冊我方へ取つて置かれぬ。去程に家出の息子三平といふは、年も三十にたらぬ浮氣もの、ふと八丁の出女に思はくがありて、ないもせぬ親の著そげまで打ちまげて、我も内證の借錢に尻つまらず、あてどなしの缺落、大坂の長町に知己を尋ねて落ちつきしが、いつ限なきかゝり人ゆゑ、あたりの旅籠屋へ身をよせて、住吉堺への宿引、口先の發明にて、熊野參を蟻のつゞく程つれて戻るゆゑ、親方の悦、よい者を抱へて、此春は道者衆が多い、利口者ぢやとほめそやせば、三平これを鼻にかけ、傍輩への我儘、海道の雲介相手に端錢の

小田原外郎—相州小田原より出づる痰の藥

これやこの—蟬丸の詠をいふ

衆方規矩—書名

何にも藥違でない道理。十四經難經は讀むとも、脉はめつたに見えぬ物ぢやげな。人の手取まへて尺八籟の指づかひ、其間に心では、こゝは三分藥にして來れば、陳皮、獨活、桔梗の類をたんと盛らねばと、胸の內の十露盤が二進も三進もゆかぬ段になりて、醫はそも藥料の官、なんぞ死命の官に預からんとは、さりとはよい逃口なれど、定業といふ得心があればこそ、親の敵ぢや立上つて勝負せいというてくる人もなし。近年は賣藥が繁昌して、勸學寮の錦袋圓、富山反魂丹、後藤黑子丸、大黑屋の地黃丸に小田原外郎、俵屋ふり出し、其外數も限らぬ藥店、看板の外に胴木偶、あるひは熊の子に氣にもすゝまぬ棒捻させ、ねむり落ちる梟を撞木につきすゑ、豕を吼して人寄の口上に、往來の足を止めるまでの店ざらし。飼うたる鳥獸に親元がなうて仕合ぞかし。これや此とよみし逢坂の關路も、今は大津八丁に立ちつゞきて、商家建ちならびたる中に、根元本家みすや針を商ふ家多し。此店付は間口五間十間にとり放して、所がらの大津繪襖、あけたあちらは座敷でなうて、庭前のあふ坂山が行くも歸へるも胸づかへた家建。其中に間口も狹き藥店、打身藥勝劣散と、松板に養拙流のふすほりて文字も見えず。主は惣髮の老人竹田周益とて、衆方規矩だのみの庸醫、女夫さへ渇々の朝夕。子は一人ありたれど、取

御仁體—御人柄

へり口—妄言

私も尼になりましてから、法師武者の心で、名は筒井の淨妙の淨の字に、辨慶の慶を合せて、淨慶と申しまする。卑下なされても其方樣の御仁體で、町人とは心憎し。中々無手とは見えませぬぞ。僞りて叩き伏せんとや。お立ちなくば此方からと、竹刀おつとり立ちあがれば、のう、かなしやと、主從もろとも横になつて逃げて出づれば、春の雨夜としんの闇、こけつまろびつ命からぐ、跡よりも武士たる者の女に後を見するかと、云ふ聲河風にふき送り、耳突拔ける怖しさに、兩國橋もいつ渡つたやら、やうくと旅宿に歸り、夜は明けぬ。きのふに懲りて、けふは芝居へ、中村勘三が二の替見に行きしが、上棧敷にきのふの尼、役者まじくらの酒盛、扨はやつぱり人で有つたか、天狗でも無さうな。

第二回　身過はあぶない輕業の口上

國に宰相とならずば、儒醫となりて人を救はんとあれど、其救ふといふ事阿彌陀如來の方へゆづりて、此度は愚老も大切には存じたれど、是は全く昨夜の雨風で、時氣を受けられたと見えますと、いはるゝへり口無理でなし。我力一杯是で癒らうと思うた所は、如

彌太郎の流義
柳生流―柳生宗矩の始めし劍術
印可―允許
石突―薙刀槍等の柄の端にある金

燈を遠ざけ、主の後に坐り同じ身がまへ、すはといはゞの眼ざし。旅人大きに驚き、私は全く武士ではござりませぬ、京都下立賣の町人柳屋權兵衞、雅名は里江と申すもの。此度江戸見物に御出入の御所方より帶刀を許され旅ばかりの侍、遊藝ならば何んなりともお相手、和歌、詩作、茶、香、鞠、三絃、漢畫もよほど書きますれど、兵法は扨おき相撲ひとつとつた事はござらず。お目利違ひ迷惑千萬。しかし、呑込ぬはこなたのお身持。尼の姿で武藝とは、物好がいき過まして思ひがけがござらぬと、顫ひ〳〵尋ぬれば、御不審は尤。わたしは江戸永代堀難波屋何某が娘、幼少より武藝を好みまして、さる浪人衆に稽古いたし、柳生流一道の印可は殘らず傳へてをります。額面の疵は前々月木挽町で、競と口論いたし、四五人は見せつけましたれど、相手は大勢ゆゑ此の如く疵を負ひました。あはれ侍ならば、此疵ばかりも二百石は確なもの。其喧嘩から一家共がよりまして、無理に尼にいたしまして、此庵へ隱居させましたれど、好な道ゆゑ閑居の樂しみに、これに居ます小比丘尼にも一手敎置きました。お慰みに薙刀遣うてお目にかけよといふより早く、玉襷ひらりとかけて飛上り、長押の薙刀石突とんと鞘をはづし、左右をはらうて水車、目のまふ程の早業に、でかした〳〵、御覧の如く小腕には器用にござります。

舌なめずりして—口のまはりを舐めて
さいたおさへた—獻盃の事をいふ
竹の內—竹內久盛の始めし劍術
關口—關口

て醉まぎれに、宿賃をこつちへせしめてくれんと、舌なめずりして、しからばお辭宜なしにたべませうと、盃取上て一つうけて、持合はせましたがあげませうか、誠に他生の緣とやら、ことない御馳走にあづかります。今宵は夜とともしつぽりと咄しませうと、少し含ませての挨拶に、さいたおさへたの數重りて、何んとも尼のあるまじき不身持と思しめさうが、お侍は都方とあれば、一入珍らしう好もしう存じまして、あられぬお賴の筋聞いて給はるかと、打笑む顔の憎てらしい程可愛らしく、靨は三井の堀ぬき井戸。夢ではないかと飛立つ嬉しさ、今宵の御禮には何事によらず承りたし。ことに武士と見てのお賴み、しんぞ命でも差し上げまする所存。たのまるゝ拙者は仕合ものと膝すりよせて、そろ〳〵と手をとりにかゝるを、飛びしさつて身がまへし、いや油斷は仕らぬ、命でもと仰せらるゝは、眞劍の勝負こゝろみんとの事か。それとても引は申さねど、尼がお賴は竹刀の所望。御仁體の奥床しさに、御上達の程も思ひはかられて、未熟の慙愧しう存じます。夜長の徒然に一手お立合ひ下されよ。御流義は竹の內か關口か、尼が習ひ得しは柳生流を少しの嗜、女の儀とて遠慮なく踏んこんで御立合ひ下されよ。こりや子尼、其竹刀持つてこよと、詞の下より持つて出る皮卷の竹刀二本、十文字にさし置いて

つき上つた事—増長せる事
宗哲—中村宗哲とて天祿頃の有名なる蒔繪師
お箸なされませ—召しあがれ
一圓よめれど—一向合點が行かれど

漬をこしらへさしましたと云はるゝに、それは近頃の御深切、つき上つた事ながら、一宿御無心申さうかと、いつそ心が落付いて、家來も勝手に横にならしやれと木枕、忝うござりますと、遠慮せぬが下郎のくせ。數寄屋行燈の灯心かき立てゝ、さあお茶漬と持つて出でるは、宗哲の夜食膳。心を籠めしもてなしに、これは御馳走、尼御にもと、いひつゝ箸をとりて平皿の蓋とれば、小鯛の難波煮。こりやどうぢやと見合はすうち、亭主の尼立出でて、里遠き庵の事なれば、何にをあげまするも、ふつゝかな事計、ほんの御茶漬、さあお箸なされませ。お見合はせなされてござるは、もしお精進と申すやうな事にや。旅なればくるしうもござろまいと、何げなき顔付に、一圓よめねどまゝの皮、喰はぬは損としたゝかにとりこめば、御酒一つと燗鍋に添へて雲雀の燒鳥、温めてあげうと、火鉢引きよせてあぶらるゝに、いよ〳〵興冷め、これはどうでも江戸中のいたづら後家、いひわけまでに剃りこぼち、この淋しい所に居るは、夜どほしの責念佛、鄰かまはずのお好樣。しかし男の影も見えぬは、今夜は寺役でこぬとのしらせ。それで我等を泊めたと見える。顔の膏藥もてつきりおどもりの濕の瘡。これをしめる奴も後には鼻落瓜になりをらう。さりながらあの美しさは又とあるまい。なんでも今夜は一盃すごし

いはう所—言はんにて難すべき點の義
入端—出端の出を諱んでいふ語、出たての茶
ござられまい—行かれまじ

ひ入るゝに、釜の前に十三四の小比丘尼の、目元凛しげなるが居て返事もせず。奥より旅のお侍、こちへ這入つて雨をやめてござりませと、言ひつゝ出づるを見れば、年の比廿四五の尼、其美しさあてやかさ、物腰けはひも賤しからず。いはう所のあるは、額面に何にが出來たやら、べつたりと膏薬張つてあるのは正眞の玉に疵。もし善光寺の御印文を象鼻の格で包んでおくのではあるまいかと、見惚れながら腰かくれば、小尼が汲んで出す入端、はてしほらしいと云ひつゝ、煙草四五服くゆらすうちに、雨は次第に降りしきり、いつあがりさうな氣色も見えねば、主従途方にくれて居るを、主の尼氣毒に思ひ、旅の空に雨具もなしに、さぞ御當惑、しかしきつう降りますればござられまい。見苦しけれど、庵に一宿なされて、あす天氣に成つてから、江戸へ御出なされませと、打ちとけた詞に力を得、それは有難い仕合。お詞にあまえゆるりと雨をやめませう。其うちには小止もござらう、御免なれと上へあがれば、そこは端ちか、まづこちへと奥へともなひ、緣の障子を開くれば、春雨の隅田河へ降りくる氣色、どうもいへず。うか〱と眺す内に遠寺の入相。これはならぬ。濡れてなりともと、そろ〱と身拵すれば、主の尼がどれへござる事ぞ。最早日は暮れまする、雨もやみませねば、是非とも御宿申すつもりで、茶

其角—榎本其角俳人芭蕉の高弟寶永四年歿

日和が落ちた—空模樣の惡しくなりたる意

もとより、所によりて一疊一枚が、金子一兩しても借屋札はらぬ大湊。大芝居、大叶、大小間物、大蕎麥切と、何でもかでも大の字を冠りて、今は氣の大きなる事、武藏野の如しといへり。兩國橋は下總の國へかゝりしゆゑ、かくは名付けしぞと、江戸初めての見物と見えて、京家の武士の小者一人に風呂敷包持ちて草履がけ、菅笠、柄袋の外は旅めかず。橋を渡りて河水に逆のぼりゆく道の、河の流岸の下草までも、知らぬ道の珍しく、三圍の明神にぬかづきて、かの其角が、白雨や田もみめぐりの神ならばと、雨乞せしは此社ぞと、心面白く氣も隅田川の渡場にいたり、初めて遠くも來にけるかなと、そこら見とるゝ折ふし、船頭が呼びかけて、おゝい乘るのなら早うござれとわめくにぞ、あはれ都女郎ならばとたはむるゝに、船頭もぬからず、業平にとは申さぬと漕出しぬ。梅若が塚じるしの柳にたゞずむうちに、若し旦那、どうやら曇りましたが、降らぬ中にそろそろお戻りなされませぬかと言ふにぞ、いかさま日和が落ちた、雨具の用意はなし濡れてはなろまいと、一二丁引返すに、はやほろ〳〵と降りくれば、南無三寶と、主從二人走りつまづきて、漸く禪宗臭き庵を見付け、まづ雨舍をと内へ入りて、御免なれ、手前は旅の者でござるが、俄雨に合羽を持たず難儀仕る、暫が内雨をやめさして下されとい

奈良法師―大和興福寺の僧

一來法師―三井寺の勇僧治承四年宇治川の合戰に奮闘して名あり

諸道聽耳世間猿　三之卷

第一回　器量は見るに煩惱の雨舍

臨兵闘者皆陣烈在前といふ眞言を唱ふれば、打ちかけた刀の下も潛らるゝとて、歷々の大將が旗さし物に書いて出らるゝは、戰に望みて死を忘るゝとは噓の皮。それなればこそ一番槍が戰場の高名頭。先へ行くのは酒屋の親方ではなうて、心善うはないものなり。叡山、三井寺、奈良法師、無理いうてもだゝけても、命を捨ての腕白は、加茂川の水雙六の賽、思ふやうには任せぬぞと、いつの帝やらのくやみごと。坊主に天窓はりまける侍、昔はたんとありしやら、一來法師が輕業、武藏坊が大工道具、皆天狗まがひの惡僧原。これを思へば町人百姓ほど、昔から今に至るまでも、寐覺の安きものはあらじ。いやの侍、むづかしの尼法師と思へど、京の知積院には坊主のこけら鮓が漬けてあり。江戸の淺草の觀音參は町人は百歩一なり。何事も廣いことを、武藏野の様などいひならはせしは昔にて、八百餘町に建てつまり、諸大名の御屋敷、神社、佛閣の華麗は

八島の謠―結崎元清作曲したる謠の名

りて、附髪をはづしつゝ、さるにても松庵老の首筋もとの黑さよと、八島の謠にて笑うて左右へ分かれけり。

松風―能の曲

村雨と見えし云々―松風曲中の文句をここに引用せるなり

つきりと、世間ふさがりて、身に倦きはてた俄坊主。こゝに一月、かしこに十日の假寢の夢、一歳あまり暮れゆきしが、身の內の財は朽る事なしと、持つて生まれた鼓の音。昔の弟子が便り來て、そうではすまぬと打寄りて、さる御大家へ御抱の世話も附髮に借著の御目見、さつそくの有付。始めての御能に、三番目の松風は、御扶持人の醫師石川松庵が小鼓、大鼓は與左衞門。太夫も囃子も其日の大出來。ここぞとうつ鼓に、いつのまにやら與左衞門が附髮落ちて、坊主天窓ふりまはすを、御棧敷とても氣はつかず。松庵の後見に出し生駒新八といふ狼狽へた男、落ちた附髮の門たがへ、松庵の頭へむりやりに引付けしかど、もとより心は張弓の、いつの間に髮が出來たとも、村雨と見えしも今朝見れば、松風ばかりや殘るらんと、擊ちあげて太夫ワキより樂屋へ入れば、引續いて笛小鼓、附髮の繻子鬢にさしぬき長絹の橋がかり、大鼓は法體して緋熨斗目に長上下、棧敷棧敷の御目にかゝり、思はずどつと鬨の聲に、二人とも心付いて、頭を抱へ逃げこみしが、松庵はさすがに老醫とて、人がらをつくり、是々與左衞門殿、古語にも聖人は桃林に冠を糺さず、瓜田に沓を入れずとござれば、其元の附髮が愚老に附けてござつても、手前が手はかけませぬ。自身はづしてとられよといふに、與左衞門痛入つて後に廻

事を柿の本ー事を缺く意をかけたり

來山伏の豊心丹ー尋ね來るを來山伏にかけたり豊心丹は南部西大寺にてうる薬

肉米ー搗米に同じ

釣だけんどー釣錢なれど

めつた踊ーみだりなる踊

には、著る物に事を柿の本、短册ばりの二枚屛風を被りて、蓬萊山のすくみ龜。今一人は與左衛門。是はいつその丸裸。せめて褌引きしめて、挾箱覆の青漆皮、鼠の喰穴首の入るだけ切りあけて、それをすこしの肩ふせぎ。蠻國の圖にもない二人が姿。寒を凌ぐ火鉢さへ、付木一枚もやして、鼻だけ温い稻妻の、光のうちに憂やわするゝと、こごなりよつても仇口はやまず。是は喜介ようこそ尋ねて來山伏の豊心丹。さて拙等にはいかなる寸善尺魔が付きまはるやら、えら茄子の大木でかくの仕合。ちとありの實の判官があらば、御引合頼みます。此節肉米澤山の立荷預りたい。嘉兵御存ないか。あの先生えら粋ぢやと、粋ごかしのことわり。逆さまにしてふるうたとて鼻血の外はしたらぬ爲體。さすがの鬼も呆れはて、此寒いに馬鹿な頰桁盗人に、釣だけんど錢百文合力すべい。酒でも買つて喰らつたがよいと、二人が前へころりと投出して、跡をも見ずに歸りける。兩人は跳出で、かの百銅を捧げつゝ、嘉兵衛の音頭に與左衛門がめつた踊、しばし奏でて餅酒に替へ、一時の機嫌上戸、ほめきの中に寢入しは、樂其中になきにしも非らず。獻上鯛一枚が百兩もする花のお江戸に、是ほどの落武者もあるに違はなかりし。心からこそ身は丸裸、そこらが藝者根性と面白がるも程あるべし。此與左衛門も其後はす

水遊―遊女あそびの義

さゝ蟹の家―蛛の巢

の燗に氣轉をきかして、おつとよしなの板元廻り、いはく有馬の湯の談合と、口合の言續に、親父今宵は拙判官ぢやと、月囃子の謝禮を包のまゝに露の間の二階籠。それさへ下から天井裏を棕櫚箒でせり立てられ、一寸壹把の仕過が積れば金の一兩あまり、突くやうに催促しられても、濟すあだてのないが定、遊も今宵かぎりぞと、念比に損かけて門口までもよりつかねば、喜介大きに腹を立ち、見付け次第に剝ぐ覺悟、與左衞門が所へ仕かけしに、戸は閉しよせて留主の體。內を覗けば疊まで、いつ賣拂うて仕廻うたやら、竹簀子に鼠の巢、紙屑ひとつ、下駄片足、殘るものとてはさゝ蟹の家ばかりにて、與左衞門が影も見えず。鄰の鍛冶屋で尋ぬれば、宿替てどもござらぬが、內はさつぱりと賣りたてゝ、二三日も戻られませぬ。取替のござるのなら、ちと御出が遲かつたといはるるに、憎さも憎し、居所も大方合點の、そんぢよ其處と、柳原の古手屋の裏、正面むいては這入られぬ路地の奥、幸田嘉兵衞といふ狂言師の表札も雨じみし引たて戸。こゝには人の居る體にて、きしれどあかぬ古敷居を、むりやりに身の這入るだけ、誰ぞといふは與左衞門が聲。いや深川の喜介ぢや、あひに來たと云ひつゝ見れど眞闇がり、たゞぞそつく物音ばかり、よく／＼すかして見れば、主の嘉兵衞は寒中に古袷、木兎なつた背中

二挺だて―二挺艪を立つること
土産盃―其地に産出する盃
晝さがりし―古びたる
鼓打のならず客―鼓打の無頼漢
疊上げて―殺して
四座―能狂言の四座をいふ

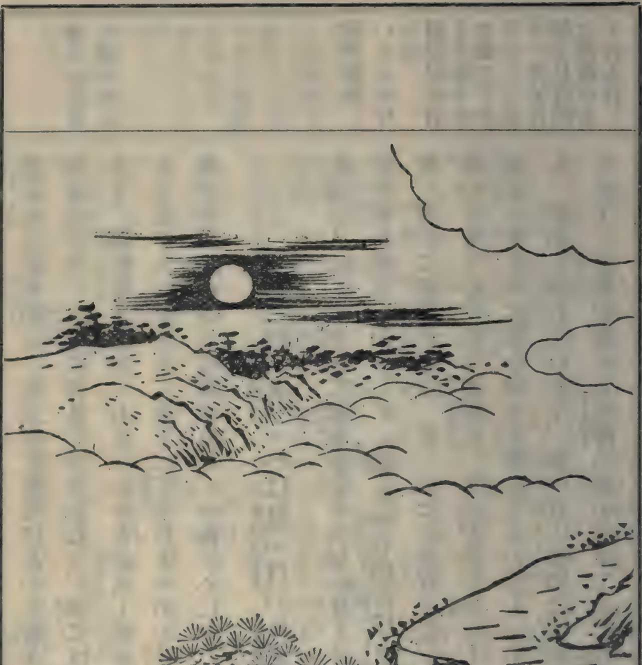
と謡ひしも、漕分かれゆく室や御手洗の浪枕、此處は名だたる二挺立、葭原にのみ濡衣を、染むればかはる品川や、とんとはまりて深川に、鬼の喜介といふ寡茶屋。蒲團二疊にはした枕の漆も兀げし土産盃、いつでも肴は一種にて、座敷といふが釜の前、七階子の戀の坂、晝ともいはぬとこ闇に、たてこめたればうつの山、夢見る事のならばこそ、寐かへるさへ油斷すれば、をちこちのたつ木部屋二階。鄰あたりの思はくにも、此茶屋町のたゞ中に、あそこで遊ぶ物好は、どうした衆ぞとおもへばさる事にて、入りこむ客の風俗は、晝さがりし黑羽に落し佩の、蝶鮫も掃除のわるい鍔のほこり、天窓は色々の龍宮界。醫者、俳諧師、鼓打のならず客、三十匁とつかうては、質種もなき神々を請ひこむ亭主が男ぶりは、競組の目にも竪縞のかます袖。十服つぎの煙管の烟、遠慮もなう客の面へ吹きかけ、町所の知れた野郎なら、賊でも連れて來なさい客にすべい。疊上げても、とらにやおかないといふ筈、名さへ鬼の喜助なれば、渡邊の綱でも仕過のならぬ茶屋。そこさへ寄せてくれるを嬉しがりて、家島與左衛門とて四座の末のすかんぴん。うつ鼓のぶつとも、ほうともならずもの。其中での水遊。毎夜喜介が方へ降つても照つてもかゝさねど、遊は十日に一度のあてがい扶持。其間は吸物の加減に、雷盆のかた相手、酒

> 事きれたり―死せり
>
> 競伊達衆―いさみ連中
>
> 眉間尺の首―支那有名の鑄工干將の子にて身丈一丈五尺顏三尺眉間一尺ありしといふ首

藥よ水よの介抱に、親太郎左衛門はあわて騷ぎ、忰やあい、時宗やあいと、呼びいけれど氣はつかず。次第に冷えて事きれたり。朝には江戶塗の紅顏も、夕には白骨の身となれりと、御文樣も思出されて、いかな親父も腰拔けて、御救もほどがある、これは又あんまりなかたづけやう。此上は吾等ひとりのお救なれど、もそつと娑婆に用事があれば、まあ十年ばかり待つて給はれと、一向一心にぞたのまれぬ。

第三回　呑こみは鬼一口の色茶屋

吳越の人は、文身とて惣身を彩り衣服の代とするは、漁を常の活業として、水に沈みて世を渡るゆゑと聞きしが、江戶の競伊達衆は入癦を腕ばかりか、身うちに龍の纏ひついた所、背中に眉間尺の首、尻こぶたに近江八景、弘法大師がござらば、般若經六百卷でも彫つてもらひかねぬ血氣壯。それが何の爲なら、上方野郎はなまぬるいとの力味から、滿足に產まれた體を我と支離にならいでも、男は男で通ればこそ、江戶中がさうでもなし。額面に鯨あてぬとて、裸百貫の相場は彌勒の代まで變るべからず。昔より今にいたるまで、百敷の都より天離る鄙の末までも、替らぬ色は戀衣。送りかへせば比叡の山風



早瘡にて取つてゆきし—早瘡にて死せし

攝取不捨—助け導きて捨てざること

地築の棒—地固めの棒

矢の根曾我—歌舞伎十八番の一

鬼鹿毛—猛ましき鹿毛の馬

お救と、念比に御禮申せば、大和の小泉へ嫁入りて居る中娘の初孫、早瘡にて取つてゆきししらせの使。內に十年の餘飼うた赤猫が、井戸へ陷つて死んだまで、皆如來樣のお救とは八萬四千の光明の中へ、攝取不捨の御盟を報恩謝德の信心他事なかりけり。ある時、鄰村の道場に本堂の棟上はいつ何日かと、大坂から舞子藝者を呼寄せければ、物見多藝の草中とて思の外の大參。柏原の太郎右衞門も講中の一筆なれば、天氣のよいを悅び、精進酒ひとつ過して、地築の棒をつきならして、棕櫚の葉箒賣つたる親仁、店の端にもしばしは休みと、皺枯た一節をやらるゝに、息子太郎七見るより爰でこそ、我等が隱藝を親父に見せて驚かさんと、私も狂言一番致しませうといへば、御堂樣へ御奉公ぢや、何なりとせいとの赦を受け、心得まかせの飛上り、矢の根曾我の荒事、面眞赤に塗こたくり、金襴の大廣袖、角鬘の大童、淨瑠璃に合はしての思入、見物は口々に、ようよう庄屋の一番息子めと、譽めるを聞いて、親はこゝにと悅ばれける。太郎七は大音に、あらふしぎや、左の腕のしびれしは、兄十郎が大磯にて、敵工藤に遇りあひ、毒酒を盛ると覺えたり。たとへば此鬼鹿毛千里も飛べ、萬里も行けと、思入の力足に、足代の繩が切れて、高さ三丈程の所から、眞逆さまに踏みはづせば、やれ落ちたは。氣がつかぬは。

大傷寒―熱病

るといふ時節もなかつたに、若い者のよう思ひ立ちめされたと、怪しからぬありがたがり樣にでにはかの用意、長旅の事なれば、路金をしまつせずともと、著替、雨具、蟲おさへの丸藥、足痘の黑燒、水の變のふり出しよと、殘る所なく取揃へて、下作の小百姓に達者ものをえらみて、若い者の事萬事を賴むと、くどいほどいひ付けて、吉日の首途を見立ててより、留主中の看經にも、淸太郞めが無事にて歸りますやうにと、賴む木陰に雨もりて、淸太郞は常陸の板敷山で、山伏の盜人に出遇ひ、路金も著替もさつぱりと剝ぎとられ、主從非人同前にて、命からがら東海道を逃のぼりて、在所へは歸りしかど、剝がれた上に叩かれた逆さま竹の痛がつよく、燒栗の芽も出でずに、極樂參をなしけるにぞ、親太郞右衞門が力落し、兩の手ももがれた悲しみ。日の立つに付けて、一家同行への諦咄、御舊跡廻から病みついて歸りしも、不慮な事のやうに思ひましたが、是が卽ち信心の到りましたのでござらう。淨土へお救に預りましたは、不定世界を早う遁れた仕合者でござる。敎へて歸る子は知識といふは淸太郞がことぞと、悅涙に深くむせび入られける。此歎に引續きて、兄太郞七に嫁合すとて、呼びとつて置きし紀州の根來の姪、風の心地とて二三日起きざりしが、大傷寒にとりつめての臨終。是もあなたの

なる

あなた—如來をさしていふ

親の日—親の命日

祖師上人—親鸞上人

あなたの前で鼻歌いふとは、信心が決定せぬゆゑの事と、折ふしに異見すれど、太郎七は上の空。親父樣はお年よられたれば、有がたい筈の事、我々が年で佛付合するはあんまり早い。廿八日の精進も、祖師樣が近付でもなし、母者人の日さへ精進すればよい事ぢや。そちもちと淨瑠璃を習うて見や。お勤の節のやうな物ではない、面白い事ぢやといふを、淸太郎かぶりをふり、そんな勿體ない事いはぬ物ぢや。今日斯して居るは、みな御宗旨の御影なれば、親の日は少々落ちても、御宗旨の日は精進を御逮夜からする物と兄弟がいさかひ。親太郎右衛門襖を隔てゝ聞いてゐられ、扨々太郎七めは憎くいやつぢや、しかし、あれが則ち無宿善とて、如來樣に御緣のないのでがなあらうと、諦めて捨て置かれぬ。弟淸太郎ある時、親父の前へ出でて、私はちと御願がござります。祖師上人は越後へ御配流なされてより、三十餘年の御經廻、北國の雪に笈を負はせ給ひての御苦勞は、みな御自身の爲ではない、濁世の凡夫を助けんとの御修行と承れば、おまへや私共が安樂に暮しまするも、皆あなたの御善根と思へば、あまり冥加ない事と存じますゆゑ、せめて御舊跡の二十四輩を廻つて來たうござりますと、思ひこんで願ふを、太郎右衛門大きに悅び、廿四輩は年來の大願で有つたれど、御緣が薄いやら、是まで出

の時

六條參—京都六條なる本願寺參

御眞向樣—佛壇の正面にかゝれる佛畫

ひけらかさるに—衒ふに

やくたいもなき—無益

く、常盆、常彼岸のならはせ有がたいとは、是許りでも思はねばならぬ宗旨ぞかし。さるによりて在家は信心のあまりに金銀を投げうつ事、他の宗旨に百倍して、三百里あちらの仙臺の奥から、霜月かけての六條參。脊負うた菰包の中から、小判の御冥加錢、取次なしに賽錢箱へ打ちこんで、涙を零しての御恩報は、假令の信心でゆくものか。御相伴については一膳三文の白箸を、我喰うた跡を國もとへの土産にして、一在所のものに戴すれば、ありがたいと思ふ心から、輕い瘧の落ちる事、全く祖師の功德の廣大なると申すべし。河内の柏原に高持の百姓太郎右衛門とて、代々の堅門徒。神棚は雜行とて、御祓樣も内へ入れず。佛壇は心齋橋で木地から三貫目の誂へ、御眞向樣、御脇掛皆々祖師の御正筆。朝夕の看經に二人の息子太郎七、淸太郎とて、廿と十七になるものまでに、肩衣かけさせ正信偈のつれぶし、悴共もありがたうござると、同行中へひけらかさるに、惣領太郎七は佛嫌の芝居好、佛壇へなほると、親父の歸命無量をこんたんでのゑちやへと鼻歌で間に合はせ、願以此功德は山アにぞ著きにけりまで、やくたいもなき仇口。弟の淸太郎は坊主まさりの有がたや、七首和讃、八首和讃のつとめ方、五帖一部の御文樣には、どこからの何枚目にどうしたおすゝめがあると宙覺。兄の淨瑠璃を氣の毒に思ひ、

人と牛とがふりわけになつて―人牛相半して

維摩―釋迦の弟子

犬の手も人の手もといふ時―多忙

なき事は、たとはばあだしが原の道の霜、一足づつに消えてゆく人の命。死ぬる時は帷子一枚と、欲しい惜しいの惡念を離れさせ、婆嚊の臍繰をふるひ出させ、此施物をわろう請ける出家は、七生が間は牛に産まるゝとござると、舌も乾かぬ所へ、梵妻が安産したとの報に驚き、衣もそこ〳〵にかけ出さるゝを、殘つて居た講中が、和尚樣、たつだ今の說法に、施物を請けて、惡業すると牛にうまるゝとおつしやつて、是はどうしたお身持と、捕らまへて詰めかくれば、氣はせきながらしら聲をつくり、はて扨こなた衆は凡夫心ぢやのう。是しきで牛に産まりやうなら、此世界は人と牛とがふりわけになつて、米市の外に牛の食物の相場が立ちますわいのと、一言にしめして出でてゆかれぬ。維摩は惡田に苗を植うるごとしと、非人乞食にものやるを叱り給ふげな。まして此樣な僧に物やる事は、雲隱へ錢落したやうなとも譬へ給ふべし。たゞ愼みがたきは婬酒の二つと、親鸞上人の見識。佛體を得し出家に、肴喰はせ女房持たせて奉公をもせよ獵漁をもせよ、一向一心に念佛すればと、くゝめるやうな勸かた。末世の衆生の心では、經文より座禪より、家業の妨にならぬのみか、犬の手も人の手といふ時分に、注連飾り松立てる世話を助かり、上戸の額面にたとへし暑い最中、屏風引廻して、牡丹餅、索麵の客衆もな

巾—醤油袋にて作れる頭巾

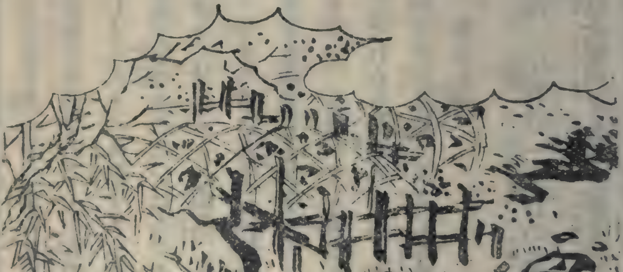
思ひばかゞゆかなんだ—思ふやうに物が運ばなかつた

龜の首すつこめて—貧しく暮すをいふ

にさして、うそよごれた顔つき。漸々追ひつき、是々親方、まあそろ〳〵行かしやれ。こなたが大黒の大黒樣へ參つていやしやる間、わしはちとあの寺がさすゆゑ、脇道を廻つて來た内にはぐれましたと、水涕すゝりあげて、馴々しく挨拶。こなたはついど見た事もない和郎ぢやが、念頃さうにいはしやる。そして見れば、小淋しい顔つき、貧乏神の樣なりでといふを、彼男、これ關取、乞食つかまへて乞食といや腹立てる。直にはどうしたわる口と、皆まで言はさず。扨はおのれが是迄付廻はるゆゑ、思ひばかゞゆかなんだのぢや。にくさも憎くしと引きかついで、大地へどうとのめらすれば、投げられながら其裾にすがりつき、おまへと一體かうなつたは、なみ大低の事かいなあと慕ひよるに、ぞつとしてそれからの病みつき、天道人を殺すのか、高砂や此うら船に病船がつきて、いがみにいがむ尉と姥、千歳の鶴首物はしげに、萬代の龜の首すつこめて、暮すのも天なるかな、命なる哉。

第二回　宗旨は一向目の見えぬ信心者

去る淨土寺の説法を聽聞せしに、因果經にお初德兵衛が道行をまぜて、それ娑婆の果敢



けんたんや—飲食店

制魚—鯯に同じ

土龍—むぐらもちの古名、土百姓の義

醬油袋の頭

どは取れたであろけれど、大坂のけんたんやで、仇酒喰うて遣ひ捨てたのでござらう。親は稼ぐ子は樂するといふたとへに、一も違うた事はない。日本一の不孝者とはおのれが事ぢやと、遠道かけて戻つた息子に、熱い茶一ぷく飲まさずに、責めせたげる泥棒親。こんな胴慾な家人、ありがたい日のめのさすも不思議ぞかし。浦之助は戻るやいな挫ぎ付けられて、さりとはさうした事ではないと、いひ譯するほどつきあがるにぞ、如何にも私が不器量から、おまへ方に不自由させます。堪忍して機嫌なほして下されと、親々の辛いほど魂の琢ける底光。思へば今度の相撲は始末ばかりして、蛸の足一本ほつかりとは喰はなんだゆゑ、脾腑づかなんだと此なかでの相撲形氣。浦々の引網を手傳ひて、紫鮢制魚の生ぐちに、肉走りて踏みかためたる足曳の、大和の御所に花相撲あれば、前にも懲りず旅立ちて、今度は勝ちも勝つたり、七日の相撲拾をとりは取つたれども、高が在所の土龍ども、殊に土地に見知られねば、山伏の布施ほどな花もくれず、力瘤さすりおろして、此勢に京の相撲ではおのれやれと、心の氣丈張詰めし竹の内峠を越えて、古市川にさしかゝれば、跡からおゝい〳〵關取殿と呼びかくるに、誰ぢやぞいと振り返れば、年頃五十ばかりの痩男、つゞれの肩結び上げて、醬油袋の頭巾、時分柄の澁團扇腰

なきかの義

大坂の腹はれども—大坂の富豪達

入米—收入

行基の嘗めて云々—行基菩薩の病者をなめて救ひし事より重患者ないふ

戀もしや〳〵りもなき身をば、いつまで是で生田河、運の築島ながしめに、鵯越の辛き世を、逆落しとはあやにくの、所の名さへこり須磨や、明石がた〳〵ふるひつゝ、やうやう内へ戻れば、爺親がにじり出でて、内には火の雨が降らうとかまはず、大坂三界駈廻つて長々の留守に、親には不自由なめをさせたが、定めてよい銀が取れたであろと、聲かけられておづ〳〵と、褌の下から海士が玉出すやうに、温もつてある給銀を出して見すれば、不興顏に、上方へ相撲々々というて大さうたてゝ登つたは是か。おきをらう腕なしめ、此摑取の世界に大坂の腹はれども這ひつくばうて、目くさり金の壹兩やそこら、一夜さのはり代もない。不甲斐ない悴を持つたゆゑ年寄つて入米がわるい。病んでをる弟めが達者なら、此樣には有るまいと、支離所か行基の嘗めて遣らせらるゝやうな病ほうけを、可愛がつてわめきつけば、二枚屛風のあちらから鼻聲にて、兄貴戻つてか、大坂は結構な所で、上手な醫者衆がたんとあるげな、わしが此病には、五寶丹とやらいふ藥を飲んだら愈るというた人がある。代物は金一兩ほどぢやと聞いたが、買うて來て下さつたかといふを、母親が釜の前で、横煙管啣へながら、何のいの、わが身のことを兄がかまふ氣はない。二親の飲代さへ咽しめしてあてがはぬもの、大方給銀も金の三兩やな

大兵—大なる身體

松川菱—菱を重ねたる紋形

外山の霞云云—相撲に打ち負けたる形容

花出す鹽—纒頭いだす時

惡錢びらなか—小錢も

だるさうには見えざりけり。其頃の關取は仙臺の眼力、九州の山揚、山轉、紀州の駈拔、伊丹に鬼面、難波に唐綱などといふ古今の大兵、とりての功者、東西に分れてはなばなし。さあ今年はよい相撲ぢやと近年の大はづみ、高木屋橋がしはる程の人群集。高砂の町人衆も大坂見物に登りあはせ、此方の在所の相生もとるげな。どうぞよい相撲に勝てがし、國許の外聞もあれ、一廉花はとらすぞと、空色縮緬の羽織に郡内の大縞袷。金子五兩を包ませて、けふは勝つかと、毎日〱々割子の松川菱になる程力んで居らるれど、浦之助は親兄弟のづつなはが足に纒ひついて、行く日も來る日もあくろめなく、晴天十日物の見事に打ち付けられて、高砂の外山の霞足たゝず、國許の客衆も花出す鹽もあらざれば、姫路のおさかべといふ前髪相撲にやつてしまはれぬ。浦之助は我ながら身を抓つての男泣。せめて給銀に手はかけじと、一兩たらずの身の油、褌にしかと括付け、西國へいぬる傍輩の相撲の著替どもをひとつにして、十二三貫目の歩荷もち、顔は窶れて神崎の川中で剃ぐ尼が崎、惡い時にはとぼ〱と、足元見えぬ武庫川や、祈れどきかぬ神心、道理で戎も腰拔の、蘆屋の里も打過ぎて、かゝる住み憂き世の中を、誰か住吉と菟原の里、小揚買うも惡錢びらなか、摩耶颪にはおろされじ。錢がなほしや求塚、

石臼嚊—無藝にして頑固なる妻

濕病—黴毒症

愛染樣—三目六臂の忿怒尊即ち愛染明王

の鐘もひだるい腹には、響の灘と力士立に喰ひしばつて、寒き夜をあかし潟に、いく夜寢覺めて暮しぬ。此浦之助二親に孝行なる事近郷に隱なく、朝は星をいたゞきて、曾根の鹽濱へ雇はれ、麥一升の働き、冬は寒取に生疵の絶ゆるまもなく、どうぞ親達を安樂に養ひたいと、四十八手の外に身を粉にはたいて身過の工夫。稼ぐを追ひぬく貧乏神ありて、此親父は小博奕打つて大酒喰ひ、なんぼ有つても掘りぬき世帶、底はかとなく負けくらせば、鬼の女房に鬼神とやら、嚊衆も同じくなる口にて、針手もきかぬ石臼嚊。三度の朝夕の外に、間鍋の菜好み、陰口が惡いとて近所の茶飮にさへはねのけられても、鎌婆がかゝり子をいぢりたて、小遣錢が足ぬの、博奕の元手が少ないのと、ねすり事のある狀。親に似ぬ鬼の樣な關取も、土俵ほどな涙を零しぬ。それさへあるに、一人の弟がぶら〳〵と煩出して、此處や彼處の身節が痛み、咽の下に口が明いて、いつをかぎりの濕病。竪な事横へもせず、顏も手足もむさし坊の居喰とはこれなんめり。浦之助が身ひとつで、愛染樣ほど手足が有つても、迚もつまらぬ末六十日と、力足を踏みしめて、氣を春さきに大坂の勸進相撲、何んでも爲てこい。とちや遲しと早々登りて、番附に載せてもらへば、何處へいても附廻る貧乏柱といふ所に、播州相生浦之助とかいたるは、ひ

參や魯なり—論語五卷にあり魯は遲鈍の義

茶火ねば—死なねば

俊成—藤原俊成

持—優劣なきこと

白い歯見せずに　笑ず嚴格に

伯人—遊女

諸道聽耳世間猿　二之卷

第一回　孝行は力ありたけの相撲取

孔子の參や魯なりと仰せられたは、曾子はちとうまひとの惡口。其曾子は孝經の作者なれば、孝行もちとまへめでなければならぬ事と、唐繪の竹ゐがく生過者が呑みこみ違ひ、茶火ねばなほらぬものぞかし。枝折る栞は誰がためぞと、捨てらるゝ親の方から、捨ていぬる礫柱、めにあんまりな慈悲心。此手の親が世間に多く、河豚の蝶のやうに、切つても突いても煩はぬ息子を、あれは病者なゆゑ氣晴にならし、何なりと稽古させいと、涎三尺流らかして、糟谷宇左衛門がかけ聲に、こちの息子に似ましたとは、よつほどな甘口。息子の穀つぶしに親父のあんだらを、俊成卿に點してもらうたらば、持とや仰せられん。今時は白い歯見せずに追遣うても、謠屋の夜食腹から、伯人の一切貰ふ葬禮の戻に、竹田の新機關見る程のことは、きやつとうまるゝと知りぬいて居る世の中なり。播州高砂の相生浦之助とて手取の相撲あり。元より活業の丸裸にて一錢の貯なく、尾上

にて、うたひ卑しき海士の胎内にやどりてと、謳はれしはいかい白痴の。

品物のつかれ、手ずれなどの義

しらけて―興さめて

歴の道具屋衆がごさるが、いづれもの目利で求めさつしやる衆が、大坂中にはあまたござらうが、今夕の體では、いつかう目の明いた衆は一人も見えませぬ。向後は七郎右衛門殿をお頼み申して、道具の素性も見習はつしやるが、貴様方の家業といふ物ぢやと、あくまで惡口せられても、一言の返答するものなく、一座しらけて其夜の會は果て、皆面目を失ひ歸りけり。是よりも此沙汰が廣くなりて、京堺にも聞えければ、去る御大家より聞及ばれ、其曙の茶器は、故ありて先祖より此方の家に所持する所、又々此度賣物に出でたりとは、其意を得ず。しかし何れか眞僞とも定めがたければとて、大豆屋へ使者を立てられ、目利所をもつて改めさせられしに、並べては若干の違にて、御傳來もたしかに極め、數札の證據もあれば、大豆屋の茶器は、丸薬入にも劣りて見ゆるにぞ、又此噂が廣くなりて、目利が違ひしとて、七郎右衛門が異名を目違先生といひはやしぬ。隱居大愚此樣子を聞及ばれ、大きに腹立し、七郎右衛門を呼付け、いらざる目利自慢より大分の金銀を費すのみか、人に笑はれて大恥の名をとりし事、もと商人の道を忘れたるよりの事なり。町人は算筆とて外の事はきつと嗜みて家業をつとめ、無用の目利いたすべからずと、席をうつて叱りつけ、隱居へ歸られぬ。七郎右衛門跡を見送り手鼓の中音

連城の璧―和氏の璧其價は連城よりも貴しといへるに依る

鹽瀨―絹布の名、袱紗の義

なれ―長き年月の使用より生ずる

せなされと、道具屋に取りつがせ、暫く眺入つて、是はちと存じよりもあれば、私が申請けませう。御不足ながら金子八十兩に負けて下されまいかといへば、其時老人手を打つて、さても〳〵、こなた樣はお若いが、道具をお好なさるゝと見えて、天晴のお目利、八十兩では賣損がまゐれど、斯列んでござる道具屋衆も、金百疋相應と仰られた物を、飛んで大金にお付けなさるゝは、此道具の素性御覽なされての事なれば、負けて進ぜませうといはるゝに、一座大に興を醒し、是はどうした名物と、明いた口ふさがねば、七郎右衛門したり顏にて、いかさま千兩道具を小金にまけて下さるゝは、甚だ身にとつて大慶にこそござれば、連城の璧も見るものがござらいでは、瓦礫も同前。これは室町殿の御重寶曙といふ茶器でござりますかと存ずる。ちと見所あつて申す事ぢやが、左樣でござりますかといへば、いかにも曙の名器でござると、臺所から取寄せるは七重の服紗十重の箱に、滿座の道具屋も素人衆も、是はと驚きもみでにて、七郎右衛門樣、御目利の名物、今一度拜見いたし申したしと、懷から嗜の鹽瀨取出すやら、手水遣に立つやら、手に取つて見れば見る程、めつたにしほらしく見え、少しのなれといひしまで、爰がどうもいはれぬ所と、寄りこぞりて譽めそやすに、老人重ねてお素人方はともあれ、歷

腹脹ども―慾深き人
永徳―狩野永徳
徳乘―後藤徳乘
瀧本―八幡瀧本坊
楊貴妃―名太眞唐玄宗の妃

ても、根抜がいたしませぬゆゑ、旦那に卅枚で掘出されたと、銀受取つて歸りぬ。とかく道具屋で知れぬ物は、此先生に持つて來て、目利して買うてもらうとは、商人の軍法、大豆屋の城を賣りおとさんとぞ謀りける。ある時、伏見町加賀屋何某が方にて、道具會ありて、諸方の腹脹ども打寄つて、倦いた道具は持つて出で、珍しき物をとかゝりける。永徳の三幅對、徳乘が緣がしら、砧の水指、瀧本の自畫賛、淺黄印金が一尺四方、高麗茶碗、楊貴妃の天冠、定家卿の鼻鑷、法然上人の尿瓶まで、それ〴〵に糶分けて、市大きにはづみけり。かゝる中に六十有餘の老人、山繭紬の服太に鼠小紋羽織も綿のおちつきし人柄。私もちと拂ひたい物がござると、二重切の花活に朱棗器一つ出されければ、何れも見て廻し、まづ花活は銀五兩にをさまり、茶器は銀二兩より糶りけるに、いや〳〵それはあまりなりと引きこめらるれば、段々糶上げて金百疋につけゝれば、なんと御隱居、もうよい直段でござりますが、お放しなされませぬかと問へば、いや〳〵お目に入らねば是非なし、手前了簡とは餘程相違いたすと取りあへねば、はてなあ、見た所がさして名物とも見えず、少々なれも見ゆれば、よい拂直段であらうにといへど、ただ默然と返事せられず。大豆屋七郎右衛門床脇より遙かに、御隱居、御道具今一度御見

相口―七首
庵に木瓜―
紋形
まげられた
―質入せら
れたる

ませぬ。あなたにお目にかけたればこそ、きつとわかりました。是は魏といふ國の人の書いたのでござりますか、私は魏筆といふは贋物の事と存じてをりました。左樣なら古い物でござります。お目利の上なれば、よいやうに買うて下さりませといふにぞ、いか樣此文字の震うた所が面白い。おれがきはめて安うも買はれまい。金子廿兩に買つてやらうといはるゝに、菊亭それでは口錢がござりませねど、旦那に見てもらひまして、高うも申されまいと置いていねば、跡へ壹丁目筋の刀屋が、旦那、あなたでなければ、知れぬ物が出ましたと、朱鞘の相口を出して、是に庵に木瓜の目貫がかけてござりますが、此紋はまへかどに海老藏が來た時見ました、曾我兄弟の紋所かと存じます。めつたに古う見えますれば、もし昔の曾我殿がつまらぬ大晦日にまげられた質屋の流ではあるまいか、御覽じて下さりませと指出すを、七郎右衞門とつて倩々見て、是を曾我兄弟が所持とまでは氣が付いても、どういふわけと云ふ事は、壹丁目の拵屋の目は及ぶまい。是こそ曾我の時宗が箱王丸の昔、箱根の別當の許にて、敵工藤左衞門に始めて對面せし時、祐經より箱王に遣はせし、赤木の柄の差添ぢや。身も格別にはないが、出所が面白い。銀廿枚なら置いていにやといはるゝに、さても〳〵學文知らぬ者は、曾我とまでは氣がつい

洞濟二派―禪宗の曹洞宗臨濟宗

乍麼生、什麼―兩者ともに如何の義

凌雲臺―魏明帝が洛陽孟津に築かれし樓

韋誕―字章仲將魏の書家

は七郎右衛門と呼ばれて、我代知りたる顔にもつぱら禪學に誇り、洞濟二派の悟錄に眼を止めるより、自然と心高慢り、米市場に拂子をふり立てゝ、乍麼生か千俵賣らう、什麼三千買うなどと、えしらぬ言葉をつかひ、僕兒少婦が茶碗一つ破りしをも、喝と叫んで、三十棒を打ちけるにぞ、半季究めの奉公人は、中戸の客板を打つて、放參々々と暇をとりにける。付合が廣がるにつけて、近頃より夢想國師の流にふみかぶり、雪の朝茶、春の夜咄と、頻に古い物好になりて、生きた萬寶全書とそやされて、目利がる事すさまじ。上町邊の書物屋菊亭といふ發明者、門口の這入らぬ程な掛物箱を持つて來て、旦那、此間はお見舞申しませぬ、此横物は唐筆でござりますが、けしからぬ見事に見えますれど名印がないゆゑ、誰ぢややら知れませぬと、出して見すれば、七郎右衛門一目見るよりせゝら笑ひ、そちも此樣な古筆を商はうと思はゞ、ちと心懸たがよい。是は魏の明帝の築かれし凌雲臺の額ぢや。此樓を築く時、あやまりて額を釘にて打付けたゆゑ、文字を書くに、韋誕といふ能書を轆轤にて釣上げて書かせられたが、地より高き事廿五丈ありしよし、韋誕恐れて白髮となつたとあるが、其額のまくりと見える。魏と唐とは、唐は餘程後ぢやのに、唐筆とは書林にいふまじき文盲としかられて、是はしたり、根から存じ

張良―字子房、漢の人
韓信―漢准陰の人
土人形―世間見ずの人
律氣者
尻のつまりし―吝嗇の意

第三回　文盲は昔づくりの家藏

天子の劍、宰相の劍はすでに沽りぬ。今一口の元帥の劍有り。是を沽ふ人、先生ならでと、張良の文作にのせられて、韓信是は迷惑となめらはれしが、西蜀への通札を貰ひて、終に漢家四百年の基を興せしは、子房の目利のはづれぬ所。なんぞ方寸の器物を見きはめたりとて、目利者とはいふべからず。年々の相場に身上は乘つて、北濱の米問屋に大豆屋七兵衛とて、家作も昔ものゝ高等親父。家内二十人暮にて、降つても照つても、年分に千兩づつは、延びてゆく鼻毛のあまり、ひとり息子七三郎は甘茶育にて、釋迦でもくはぬいき過者。一度聞いた事はちんぷんかんでも遁さねば、耳塚と異名を付けて、息子中での憎者也。親七兵衛は根から土人形にて、世間に何がはやらうとも、江戸合羽の煙草入に、茶紬の置頭巾にて、店から臺所のきまりを心がけ、芝居遊山は身がなまけると嫌ひ、茶の湯の茶は澁うて呑まれぬと、一俵十二匁の丹波茶に、吉野榧の菓子にて尻のつまりし身持。朝鮮人を三度見たよりは、咄のない男ぞかし。斯程の老武者根城もよく持固めたれば、最早七十に近きとて隱居の望、法體して名を大愚と改められ、七三郎

作女房―身上もなき賤しき女房

神たゝき―神信心

神なぶり―神いじり

の近付の衆が見られたら、皆十兵衛が心いきが移つたのと、そなたの科はいはいで、おれが浮名の立つ事ぢや。さういふ心になるといふも、全く神々の罰と思はるゝ。ちと神棚でもをがんで、お詫申しやと度々の異見に、おゆふ大きに腹を立ち、何といはしやるぞ。是が神の罰といふ物なら、死なれた古太夫殿はどうでござる。こなたぐらゐと違うて、神道のちんぷんかんを覺えぬいてゐられたけれど、一生乞食同前で死なれたではないか、常々こなたの役にもたゝぬ神たゝきが氣にいらぬ。伊勢講も百燈も内證の械が廻らいでなるものか。其信心に遣ひすてる錢は何處から出るぞ。わしが娘のかげで、是程にまで仕出した身上、こなたの物は一つもない。わしに向うて一言もいはしやる事はなろまい。兎てもいうたとて、神なぶりはやめる心あるまい。神道者相應に高天が原に似た所の高原へ出でていにやと、箒おつとり拂出せば、理の當然に力なく、すご〳〵と家出して、もとの高原へ宮うつし、岩戸籠の路地住居。木綿襷に鈴打振りて、遠かみゑみ多目、嚊めが爲に追出されまし〳〵てと、家々の軒に立ちしは、日前古太夫が恨のなすわざと、人皆噂は仕たりしが、男を追出す厄神女房は、いつの世に酬うかしらぬ。

神様ごかし
―何事も神にかこつけること

高なしの下

までと思うて居ます。こなたの娘も賣りさへすれば、口錢の納まる事なれど、そこをとめる十兵衛ぢや。酒もちと止めさしやれ、娘の身の油を呑むやうな物ぢや。錢壹貫合力しましよ。青物なりと賣らしやれ。此後にも姉が方へ無心などいうていくまいぞ。苦界する身の肩がすぼる事ぢや。嚊、鹽物でも燒いて、茶漬進ぜてたもと涙脆き事、杉本佐兵衛このかた。嚊は大森に出つくわした楠の亡魂のごとく、脊中からわめき付き、是あんだら殿、よい加減に盡さしやれ。口入商賣するものが、口のはたの飯粒を拂ひ落すのみか、方もないわろに大枚の錢を合力は何事ぞと、疊叩いて熱えかへるを、はてさういやんな。あの衆もこちらも皆天照大神のお流ぢや。まんざら他人ではないわいのと、何事も神様ごかし。お伊勢様へは年に二度づつ缺さず、住吉講、天神講かけ錢倒れと制しても、聞き耳潰しての信心に、女房もほつともてあまし、よう思うて見れば、わし一人あたふたとして、禰宜神主に奉公するやうなものと思案しかへて横道遊。春さきの樗蒲なぶりに日が暮るゝと、其まゝ袖なし羽織引つかけて、近所鄰の男交くら酒うちくらうて大口咄。奉公人の遣ひやうから、男を尻に敷く自慢。痔に灸すゑてやる氣強い顏まで、高なしの下作女房。夫十兵衛堪へかねて、女のあらう身持か、そなたの今の不行義を前

生頬くはさるゝ—頬を打たるゝ
長髄彦を云云—長き髄を踏みのばす義、傲然たる貌
生馬の目も拔く—狡猾敏捷なること
自賄—自賄藝者

て、福半から人が來うと、五度に三度は揚ぢやといへど、現在の娘さへさりとはすかさぬ人遣ひ、一人の子女郎が三味線の稽古するを、われは晝中に高枕して、長煙管べらりとくはへて、そりやそこが違うたと、生頬くはさるゝすさまじさ。中々兀頂の茶屋風呂屋の内儀でも、あの様にはないものと町中の取沙汰。昔の神ごころは何處やらゆきて、長髄彦を踏みのばして人挨拶。天津こづらの憎くい女房と、誹らぬ者もなかりけり。亭主十兵衛はいつの頃よりやら、めつたに神信心を仕出し、生馬の目も拔くと異名とつた男が、心も弱々となりて、門口に八岐の大蛇を筒切にしたやうな注連繩を引きはへて、家内には切りかけの幣だらけ。月に六齋の百燈、節季の朝でも、中臣の祓を三座づつあげねば、茶粥にもすわらず。それにつれて慈悲深く、嬶が家内を追遣へば、跡へまはつて詫言半分の猫なでごゑ。我判入れた奉公人の親が來て、私も段々不仕合で、又妹めも出しませねばなりませぬ。姉が居ります親方殿へなりとも、談合なされて下さりませと頼めば、十兵衛はにがり切つて、扨々こなたは胴慾な心入ぢやのう。姉ばかりか妹まで賣つて喰ふとは、子の可愛といふ事はござらぬか。わしも娘が自賄はたらいて居ますが、どうぞはやう引かしたいと思へど、人様の世話になり、まだ借金も少々あるゆゑ、それ

ふづくつて—たぶらかして
崇徳院様ほど—こは崇徳院の魔王になられしとの傳説による
紋日—祝日
西照庵—大坂天王寺の近傍にありし酒樓
汁のたらぬ—金錢の充分ならぬ
杉原—紙の名

野小町を養子にした。あいつは平の淸盛ぢやと、樣々の噂して、羨まぬ者もなかりし。女房おゆふも厭につるゝ蓬ではなうて、松にまつはる捻藤根性に入れかはり、銀になる娘ぢやと、可愛外に慾心魔王、崇德院樣ほど爪がのびて、おしでをしで野と改め、親の內から自賄の藝子。時々は膝もとへ引きつけて、泉五のお客は高麗橋邊の兩替屋の番頭衆。年ばいも五十近いとあれば、末賴母しい。なんぼそなたが嫌うても、つまる紋日は出し次第で、節季はいつも金參兩づつ、文箱に入れて持しておこしてなり、折節は內へまで仲間の汁で、西照庵の戾ぢやと、炙物を送つてくれての深切。あんなお方でなければ、根がとげぬもの。拔けつ隱れついきたがりやる福半の足下さんとやらは、島のうち風俗のあばずれ。此間こちの門通らしやる時、おりんがあれぢやというたゆゑ、格子から見たが、髮は今はやる竹折髷とやらに、歟茶繻子の胸高帶で、黑紬の羽織に大名衆の書判見るやうな替紋、重草履の尻の切れて有つた樣子では、たんと汁のたらぬ風俗。商賣は何にする人かしらねど、あの身持では鐵槳付けでも袖結めでも、杉原一束のあてはかなはぬ。とてもする勤ぢや程に、男ぶりを擇まずと、今時はとれる客と見たら、眼痴でも鼻缺でも、取外さぬやうに仕やらねば、味噌鹽のたしにはならぬぞや。內の者共も心得

買ふことを約して代金を拂はずにあることを

根の國に歸りければ—死にければ

苦界させよ—遊女にさせよ

涙ごかし—涙を流して同情あるやうに見すること

あての槌—恃とずるに槌をかけたり

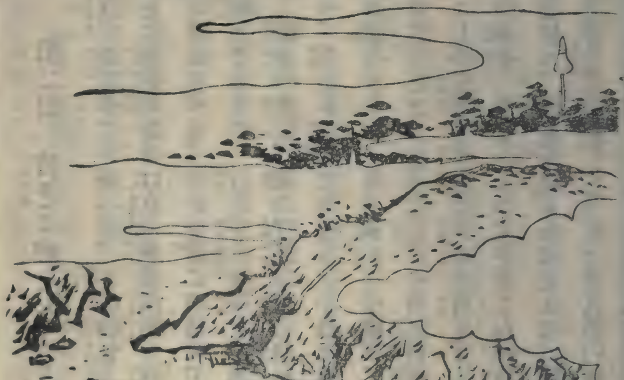
肝入—周旋業者

ぶら病。神なし月の末つかた、遠く根の國へ歸りければ、跡や枕にとり付いて、殘る親子が悲しみ、哀といふもあまりあり。野邊の送もやう〳〵と何賣つてやら仕舞ひしが、けふよあすよと月日は立つ。中陰過ぎてそれからは、脊中に腹のさびしさを、替へて一入涙なり。此鄰に蠅聲なす邪神、奉公人の口入に生馬の十兵衞とて、是も此春女房に分れ、鄰づからの寡鴉、かねて古太夫に娘のおしでを苦界させよと勸むれど、何に喰はひでも一人娘を傾城などには思もよらず。御深切は忝しと、塵灰もなくかてつけねば、掘りそこなひし金の蔓と、咽かわかして暮しけるが、時こそ來れと胸工み、打とけてのつまらぬ咄。鬼と思へど問はるれば、かゝらう島のなき身をば、涙ごかしに濡れられて、子ゆゑの闇に踏みかぶり、つひそれなりの轉寐は、これも神の緣結と、隔の壁も打ちぬいて表向の女房、娘とも親子の盃。十兵衞は思ふ壺へ引入れて、高原を宿替して、堀江の場中で二間間口、娘一人をあての槌、銀壹貫目を借出して、普請もざつと取繕ひ、おしでは俄に三味線の稽古、箱風呂の洗ひみがき、鉢かつぎ姫が鉢のぬけたごとく、金の橘、銀の梨子、皮薄で色白で、顏だちなら物腰なら、いはう所もない上作物。仲間うちの肝入共が打寄りて、十兵衞はどうした奴、後家の和泉式部をふづくつて、穴のある小

兩部―本地垂跡の說をいふ
高野大師―弘法大師
四匁―一匁は一兩の六十分の一
湯津の爪櫛―古代の齒多き櫛
買がかり―

第二回　貧乏は神とどまり在す裏貸家

神は正直の頭にやどり給へば、佛は決定往生とて、尻の穴に心を通はせ給ふ。神佛一體兩部とは高野大師の口車。所詮極樂と高天が原は、京と大坂の違にて、何方へ行つても歡樂の都なるべし。たかき屋にのぼりて見れば、瓦燒くなる大坂の上町邊、高原といへるに神とゞまりて、石の上古太夫といふ神道者あり。固より唯一の貧乏にて、天の岩戶めきし路地の奧に、雨の宮風の宮に崩れし窓に、科戶の風を防ぎかねて、月に四匁の家賃さへ、遠かみ惠美ためはらひかねたり。女房はおゆふとて、四十に三四毳けたれど、爪はづれ賤しからず、夫の神心を受繼ぎて、湯津の爪櫛におくれ毛を淸め、いつも八重垣を出でずに、しほたらと二人が中の稻田姬。今年十五の桂の眉、名はおしでとつけて、世のうきふしの忘草。手足は花車に育てゝも、身には汚れし古袷、せめて質種あるならば、雪花菜の神使、惜しいものぢやとこれ沙汰なり。親古太夫は朝に出でて暮るまで、人の軒に祓ひ給へ、淸き身過もかほどまで、佩した鐺のつまりしは、まだいつまでぞ八百日ゆく、濱の眞砂の買がかり、なせど八百つきせねば、賴む力も夏過ぎて、秋の頃よりぶら



しらざ半分直ー價の不明なるは半價にて買ふこと

すあひー周旋料

黄石公ー秦の隱者下邳の圯上にて張良に兵法を授けし人

取る段に、口次して遣はしたれば、此方へ三割の口錢を引申すと、算用して渡さるゝに肝を潰し、是は左樣になされて下されては、いつかう足のまるる事。有やうは此度御世話下されし商、總高で二割そこらの利分。それを三割お引きなされては、一割の損が參りますると、段々歎いても聞入れず。いや〳〵、しらざ半分直といふ事がある、云はゞ武士の存ぜぬ小間物、三割の口錢はわづかな事。よい利が無くて濟むものかと、一向取あはぬのみか、其後は御用々々とて逢もせねば、三十郎は一生の口惜涙、無念や表裏侍めに欺かられた。過分の御知行を頂きながら、商人のすあひを取るとは、武士の風上にも置けぬ奴。損してすご〳〵歸らんより、一太刀恨みて立退かんと、義心を鐵石に固めて付覘へば、時こそ到れ、山本勘六が登城のかへり、薄暮の木陰より躍出で、手ごろの棒にて乘物を打碎けば、主は見えずあき乘物。こは狼藉者と取りまく家來を、さん〴〵に打散らせば、殘りしは乘物と著替ばかり、智伯にあらぬ琥珀の羽織、せめては是をずんずんに引裂きしは、晉の豫讓が思入。われ此賊を討たずんばと、天に誓ひ毎日々々夜をこめて、城下はづれの土橋の上に、北斗を拜し待ちあかせど、馬の沓の流るゝばかりにて、遂に黄石公は來らず。

お初徳兵衛—近松門左衛門作曾根崎心中の主人公
せがまれて—せまり望まれて
女楠—吉野都女楠近松氏の作
樣子—事情
身上—財産
家中—大名の家來

方が集りかゝつて、此方はいつも堅苦しい吉左衛門の物眞似ばかりさつしやる、ちと富十郎がお初徳兵衛をして見せさしやれと、せがまれて天窓をかき、富十郎が女楠でもいたしたら、寫して御目にかけませう。心中事は何も得いたしませぬと斷いへば、いつもいつも同じ咄、同じ聲色ではよい商も出來ぬから、いつそ田舍へ一稼と思付いて、彼山本勘六を思出し、其時の異見の深切、あの方へ下つて、先非を悔いて賴んだら、引きそもないものと、小間物仕込みて舟便に西國へ下り、城下へ入りて尋ぬれば、勘六今は段々に出世して、五百石の御用人。案内乞うて、私は泉州堺の町人小西三十郎と申す者、勘六樣にはお馴染、ちと樣子ありて下りました。御逢なされて下さらば忝しと、云入るにぞ取次して、勘六聞き屆け、玄關へ出でて對面すれば、變り果てたる三十郎が姿、何も云出さぬ先に、一より十まで淚を流し、御意見を用ひませず、かくの仕合と誤つて改めたる口上に、勘六哀を催し、扨々お心のつきやうが遲さに、あつたら身上を失くし召されたは殘念の至。しかし悔みて返らぬこと、馴染と云ひ、身共を賴にはる〴〵との下向。隨分と家中傍輩へ取次して進ずべしと、懇なる詞にぶらさがり、毎日々々一家中をかけ廻り、大分の商をして、かさね〴〵の御世話忝しと、一禮述べて代金請

あんだら—馬鹿

かたげ賣—擔ひ商賣

すげない挨拶—なさけなき挨拶

先達て御異見申した如く、向後は町人相應の算術を勤めて、武道をお止めなさるゝが肝要でござる。お氣にはまゐるまいながら、又々寸志を申進ぜると、暇乞して出で行くを、三十郎鼻であしらひ、何と手代共見たか、世には物好な大名があるものぢや、あんな侍に高祿をくれるから、我等も追付け天晴の知行で、召出さるゝは確かな事と、夫より愈兵書に眼を留めて、晝夜怠る事なく、倦む日はいつも戎島の波濤へ出で、眞直な針で釣をたれ、此針に魚の懸る時こそ、目の明いた大名が抱には來るなれと、あんだらつくして居る中に、手代共が寄つてかゝつて唐物の買ひこみ損に、さしもに山本勘介が繩張も、士卒の爲に落城して、今さら夢が覺むれば、一騎討に打ちなされてつゞく勢もなく、一家一門へも面目なく堺を立退きて、大坂の乳母が方へ便り、やう〱殘りし軍用金十兩ばかりの細元手にて、小間物のかたげ賣、是も口が重たうてはいかず、淨瑠璃、物眞似の一つもして、面白をかしう云はねば、何時行つても用は無いと、すげない挨拶ゆゑ、俄に道頓堀へ入りこみ、役者の聲色・稽古、まだおれが仕さうなは中村吉左衛門ぢやと、立つにも居るにも、花は三吉野人は武士、末世に殘る名こそ耻かし。男殿後に逢はうと、武道の意氣込を忘れかね、是一つを藝にして得意方をかけ廻れば、女中

一腰—太刀一本

五郎政宗—鎌倉五郎正宗作の名刀

熨斗目—徳川時代の禮服

軍法は店の勘定の懸引、藥種の高下をはかりて賣買めさるゝが、孔明より楠より、智勇兼ね備へた大將と申すもの、手前などが如く、算學では富士の山を崩して海を埋めれば、何十里が間は田地になりて、作物が如何程あがると迄は割出しますれど、元手のない悲しさは、此活計を仕る。世には腹心の淋しい程、無念な事はござらぬ。向後は軍學を止めて、ちと算學をなされたが、肝要との異見得心せず。はてさて御浪人とも覺えぬ。商賣の懸引は手代共が居ますれば、拙者が仕るに及ばず、帳面も證文も此一腰で相濟む事。もし約束を變ずる者には、心覺の五郎政宗一尺八寸、胸元へさし付けて、貸した借らぬの是非を明白に白狀いたさせます。腰の拔けた素町人めらの事なれば、命にかへては陳じ申さぬと、兼々謀りをりますれば、ちつとも心を用ひるに及ばず。はて其許の御先祖勘介殿は、左樣な卑劣な武士では無かつたに、是を思へば楠は三代の忠臣、嗚呼と嘆じて其後は咄にも來ざりけり。扨勘六は算學に達して萬事發明なる男と、取つぎせし者ありて、去る西國の御大家へ五十人扶持にて、勘定方を兼ねて金役人のあり付き、出立の日、熨斗目、大小立派に供廻美々敷く、小西三十郎が方へ案内乞うて對面し、拙者儀兼々武邊もうときとて、嘲弄いたされしかど、かたのごとく出世仕りたり。貴殿にも

八陣の法―諸葛孔明の作りし陣形
才覺―工面
繩張―地取
大手―城の表門
搦手―城の裏門

大將かと存じまするは、今日の其許の身分藥種問屋で、安樂に暮さるゝといふは、是全く先祖の餘光、孔明が八陣の法を殘せしに似て、天晴の大將。先祖の勘介などは、我は發明にもござつたれど、子孫の爲に才覺のわるい男。只今私浪人の身過に、先祖の家業ぢやとて、柴苅も出來ませぬ。まだしも眼も足も滿足に產れたが仕合。左樣では御座らぬかといはるゝを、三十郎怪しからぬ顏にて、それは何した仰せられ分、家業の藥種などは、町人の所作、羨むに足らず。又先祖の小西行重は、もつとも一旦大國は領したれど、いはゞ猛將と申すもの。勘介殿は陪臣にて終られしかど、名は一天下に隱れなき軍師。既に手前が居宅を去年建直しましたが、あの地取を御覽なされて下され。あれが勘介殿の流義の繩張でござる。大小路通を大手といたし、軒高く兩店に開きて、中をとり放し、寄り來る商人物買を引つゝまんず手段、橫町は搦手、溝をふかめ、駒よせ桦とうち、溝板は夜々繰引にいたし置きました。其外座敷內藏などにも、寸志ばかり計略をはかり置きましたれど、むさと人に洩さん事を存じまして、大工日雇どもにも他言いたさせぬため、神文を取りましたと、理屈がましく罵るに、勘六こらへ難ねて、それはわるい御合點。此太平の御代に、さまで要害をなされいでも氣遣はござらぬ。今日の

小西攝津守
―行長

西三十郎とて、今に堺の大小路に角屋敷を構へし藥種問屋、主人の三十郎は未だ若年ながら、先祖の武勇を慕ひ、軍學を好みて不斷一刀を佩しはさみ、居間には城取の砂物をつくりて、兵書あまた机に充滿ち、明暮孫呉が奇計を感じ、かねては大祿も戴く望。萬事の物好猛々しく、一里出るにも鷹匠足袋に武者草鞋、肌の守袋には一寸八歩の念じ佛、刀刄段々壞の御誓忘れさせ給ふなと、すはといふ時身がはりに立つて貰ふ心當、立つにも居るにも身を放さず。店の勘定藥種の高下も知らねば近所の交際も絶えて、毎夜の咄し伽には、町内の端に店がりして居る甲州浪人山本勘六が方へ仕かけて、さま〲兵法を論じ、手前先祖の小西攝津守は賣人の家より起りて、武威を朝鮮國まで輝かせし英雄。其許の先祖山本勘介殿は、木曾の山林より出て軍功を北國の雪に積みし勇者。其末の其許、我等、かく御懇意に御出合申すも、兵の交賴母しう存じますと、威儀を正して言ひ並ぶれば、此勘六は武士の腹に生まれながら、生得劍術を嫌ひ、不鍛錬ゆゑ、浪人のよすがに手習十露盤の指南して、何ぞ壹貫目くひためたらば、商人とも出かけるつもりなれば、三十郎が軍學咄をとんと面白からねど、浪人といふ名に恥ぢて、いか樣互に先祖は武勇の家。併し攝津守殿は、手前先祖勘介よりは御大身ほど有つて、器量ははるかに勝つた

諸道聽耳世間猿　一之卷

上田秋成著

金一百疋―疋は二十五文

七星壇―北斗七星を祭り風を祈る壇

第一回　要害は間に合はぬ町人の城廓

それ治まれる代の弓は弦をはづし、槍は鞘に銹びついて、古道具屋に幾世經ぬらん。我見ても久しくなりぬるが、金百疋に負けてくれまいかと、一僕つれたお侍が、その槍でまさかのときは、殿の御役にたつ事か。今の世は城より算盤を枕にして、御馬の先で、銀借る工面。今年の二百十日は暴れよかし、御藏米を直段よく賣拂うて、天晴の感狀に預からんと、七星壇に風を祈り、先納銀の催促に、町人が詰め懸けても、樓門に琴を搔らしての請答、これを忠武侯諸譯發明の臣とはいふなり。昔は町人百姓とても武藝を勵みしと見えて、小西攝津守は堺の町人より一國一城の主になりたるとかや。其末の分れの家に小

旌孝記……六三六

○卷之六

鶉居(其一)……六四一
鶉居(其二)……六四六
こな梅……六五二
嵐山夕曉……六五六
秋芽……六六〇
枕の流……六六四
三餘……六六八
よもつ文……六六九

○附錄

露分衣……六七五
夏野の露……六八一
後序……六八六

○巻之二下
冬歌…………四七三
雜歌…………四八四
○巻之三
秋山記…………五二三
○巻之四
序…………五五三
落葉…………五五五
十雨言（其一）…………五五六
十雨言（其二）…………五六〇
花園…………五六二
年木…………五六六
御嶽さうし…………五六八
初秋…………五八一
中秋…………五八三
月の前…………五八五
劔の舞…………五九一
○巻之五
水無瀬川…………五九七
郝廉留錢…………五九七
古戰場…………六〇一
聽雪（其一）…………六〇五
聽雪（其二）…………六〇八
擬李太白春夜宴桃園序…………六一〇
故鄕…………六一三
硯の銘…………六一八
風鈴…………六一九
枕の硯…………六二一
覆舟硯…………六三〇
雨かはづ…………六三〇

○卷之五
青頭巾……三一一
貧福論……三二一

春雨物語

序……三三三
一 血かたびら……三三五
二 天津處女……三四五
三 海賊……三五〇
四 目一つの神……三五八
五 樊噲……三六三

癇癖談

自序……三八一
竹窓書簡……三八二
上……三八三
下……三九九
跋……四一五

藤簍冊子

自序……四一七
序……四一九
附言……四二一
○卷之一
藻屑（屛風歌七十首）……四二五
○卷之二上
春歌……四三三
夏歌……四五一
秋歌……四五九

日本一の大湊に買積の思入空だのめなる身の末は八丈の海賊

第三　二度の勤は……一八〇
定めなき世は蜆川の淵瀬書置のまことを反古にせぬ女髪結

○巻之四

第一　息子の……一八九
心はてりふりしれぬ狐の嫁入つまゝれた尾の玉つくりは親里

第二　一人娘の……一九六
耆は末のかれた黄金竹赫夜姫にはあらぬ今の世の小町形氣

第三　貧苦に……二〇三
身をしぼる油扇の繪水の流と人の身はしれがたき深草の歌比丘

雨月物語

序……二一一

○巻之一

白峯……二一三
菊花の約……二二五

○巻之二

淺茅が宿……二三九
夢應の鯉魚……二五二

○巻之三

佛法僧……二六一
吉備津の釜……二七一

○巻之四

蛇性の淫……二八五

世間妾形氣

序……一一七

○巻之一

第一　人ごころ……一二九

汲みてしられぬ朧夜の酒宴轉び
あふたお手枕は山科の紙蚊帳

第二　やあらめでたや……一三六

元日の拾子が福力三人の
聟がれに一人は得心の男妾

第三　織姫の……一三五

ほつとり者は取つて置の玉手箱喰明
けたあれ鼠をはらひ給へ蠶の守神

○巻之二

第一　雛の酒……一四一

所は山路の肝いり嬶が附親音な
入れし忍の勤は夫のための假著

第二　數金の……一五〇

二百兩は明いた口へ燒餅屋うま過
ぎた媒も跡は火のふる兩國の花火

第三　若後家の……一五六

寺參はてつきり仕立物屋が宿
替うはさの高い東山の六本杉

○巻之三

第一　武士の……一六五

矢たけ心もつまる所は金討つに
うたれぬ敵に尋ね逢うた部屋廻

第二　米市は……一七二

濡るゝ袂に玉襷は小比丘尼がつか
ふ薙刀逃げろが勝は町人の奥の手
第二回　身過はあぶない輕業の口上……五三
鳴いて悔しき麝香の見世物乘合に見
立てられた人相は大津八町の打身藥
第三回　雀は百まで舞子の年寄……六二
どこぞがめいろ坊主客にいひがかりの
卒都婆小町も尻はつまらぬ若衆の惣嫁

○四之巻

第一回　兄弟は氣の合はぬ他人の始……七一
傳授に拋うつ身代は輕きが上の
麻衣に染め替へし身は三吉野の奥
第二回　評判は黑吉の役者付あひ……七七
顏見世はづれた江戸下は時知らぬ富
士の峰より越すに越されぬ五十三次
第三回　公界は既に三年の喪服……八四
唐と倭の汐あひは暖饅頭屋がめ
うと中そなた百迄名月の丹藥

○五之巻

第一回　昔は抹香烟たからぬ夜咄……九三
しまつに困る古狐もうま臭い趣向
の捨罠にかゝる遊は下野の殺生石
第二回　祈禱はなでこむ天狗の羽帚……九九
あがる御鬮にてんぼの皮一杯はまろ
西代の深田は夫ゝ昔の猪股の小平六
第三回　浮氣は一花嵯峨野の片折戸……一〇八
大盜人の今同心は殊勝げのなき
古筆の贗物都の錦は故鄕の歸咲

上田秋成集目錄

諸道聽耳世間猿

序……一

〇一之卷

第一回　要害は間に合はぬ町人の城廓……一
先祖の武勇は商の懸引涙人の
算盤は指南に二一天作の五百石

第二回　貧乏は神とぶまり在す裏貸家……八
ひとり娘を犧牲にするゑそなへた
百燈より祓ひ出す女房の邪神

第三回　文盲は昔づくりの家藏……一四
我が目利して買ふ道具は心もとない
凌雲の榜隱居の異見に夜は曙の茶器

〇二之卷

第一回　孝行は力ありたけの相撲取……二五
稼ぐ肩脊も弟が骨うづき跡から扇ぐ
かち荷物は小山に近き古市の遊團扇

第二回　宗旨は一向目の見えぬ信心者……三一
看經に義太夫節はこつはいな二十
四輩に先だつ子供は白骨の御文

第三回　呑こみは鬼一口の色茶屋……四〇
擊てどもならぬ內證は冬も裸
の男舞笑ふも道理附髮の門違

〇三之卷

第一回　器量は見るに煩惱の雨舍り……四七

諸道聽耳世間猿序

彼賢人の仲間法度に、僞めきし眞は語るとも、眞くさき嘘言(うそ)は吐かぬものとや。釋迦の藏經、莊子の南華經、うそのまことの眞のうそで、おもはくは我が心より出で、人の口にかはりゆき、黏となり、鼬となる。其尾に喰ひつく世の噂を、天に口なく、婆嬶のそしりはしりにも、いは猿の戒を守れば、白痴狙(にけざる)の指ざしにあふ。さらば尻笑の戲草を、朝三暮四の筆まめに書き聚めて、題號を聽耳世間猿(きゝみゝせけんざる)と呼ぶ事は、見猿(みざる)の人の伽ともならんかし。

明和三年いぬのとし

浪華　和譯太郎

雨物語」も亦一部の短篇集、或は想像を加へて史實を敍し、或は敍事に寓するに自家の感懷を以てす。「癇癖談」は、作者愛讀の「伊勢物語」に擬したる秋成一流の批評録、白眼一世を藐視せる作者の面目を觀るべし。「藤簍冊子」は歌文集にして門人の編纂にかゝる。

本集に收むる所は、何れも原本によりて校訂し、送假名を統一し、假名遣は主として歴史的假名遣に據れり。然れども、用字語格等に關しては、妄りに改竄を加へず。

尙ほ「春雨物語」は、京都帝國大學講師富岡謙三氏の厚意により本書に收むる事を得たり。玆に記して謝意を表す。

大正元年八月

校訂者　永井一孝

緒言

上田秋成は大坂の人、通稱を東作と言ひ、餘齋、無腸、剪枝畸人、和譯太郎等の號あり。加藤美樹の門に古學を修め、博聞强識、一家の見を具へ、殊に歌文に長じ、興到れば百篇立どころに成る。狷介剛愎にして世と相容れず。商となりては產を破り、醫となりては中道にして廢し、流寓轗軻、泊然たる寒生涯の裏、諷詠述作以て自ら遣れり。文化六年、七十八歲にして歿す。

秋成の作、其種類一ならずと雖も、本集には專ら其文學上の作物のみを收めたり。「諸道聽耳世間猿」「世間妾形氣」の二書は、作者壯時の戲作にして、八文字屋本の系統を追ひたるもの也。「雨月物語」は一部の小話集、其豐麗にして幽玄なる筆致は、後の讀み本作者の典範とする所、蓋し秋成の代表作也。春

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

PL
794
.8
A1
1912

LIBRARY
MAR 13 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

上田秌成集

全

PL
794
.8
A1
1912

Ueda, Akinari
Ueda Akinari shu

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY